

# ソードアート・オンライン NEOプログレッッシ ブ

ネコ耳パーカー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「負けてたまるか」

姉の影響でSAOを始める事にした兔沢優月。

これはそんな彼が多くの出会いと別れ、そして戦いを経て強くなろうとする物語である。

# 目次

10話	閑話休題①	9話	8話	7話	6話	5話	4話	プロローグ③	プロローグ②	プロローグ①	アインクラッド
127	111	98	76	65	47	33	21	15	7	1	

22話	21話	20話	19話	18話	17話	閑話休題②	16話	15話	14話	13話	12話	11話
306	295	280	271	262	251	238	226	211	196	173	162	145

3 1 話	閑話 休題 ⑥	閑話 休題 ⑤	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話	2 4 話	閑話 休題 ④	閑話 休題 ③	2 3 話
477	459	446	439	425	415	398	385	372	356	343	331	319

4 2 話	4 1 話	4 0 話	フ エ ア リ ー ダ ン ス 編	エ ピ ロ ー グ	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話
622	612	603		595	581	572	564	552	531	516	500	490

5 2 話	マ ザ ー ズ ・ ロ ザ リ オ	閑 話 休 題 ⑦	5 1 話	5 0 話	4 9 話	4 8 話	4 7 話	4 6 話	4 5 話	4 4 話	4 3 話	G G O 編
764	750	732	720	706	694	681	671	658	651	633		

6 1 話	6 0 話	閑 話 休 題 ⑩	閑 話 休 題 ⑨	閑 話 休 題 ⑧	5 9 話	5 8 話	5 7 話	ア リ シ ゼ ー シ ヨ ン 編	5 6 話	5 5 話	5 4 話	5 3 話
899	884	876	864	855	845	828	816	806	794	786	775	

南帝国 第4話	南帝国 第3話	南帝国 第2話	南帝国 第1話	閑話休題⑫	閑話休題⑪	67話	66話	アリシゼーションリコリス編	65話	64話	63話	62話
1045	1033	1023	1013	1005	991	974	961		947	934	922	913

西帝国編第七話	西帝国編第六話	西帝国編第五話	西帝国編第四話	西帝国編第三話	西帝国編第二話	西帝国編第一話	閑話休題⑬	北帝国編 第5話	北帝国編 第4話	北帝国編 第3話	北帝国編 第2話	北帝国編 第1話
1225	1208	1194	1184	1166	1156	1146	1132	1119	1105	1090	1075	1061







# アインクラッド

## プロローグ①

「これが…SAO」

ログインして、まず出た言葉がそれだった。

俺の名前は兔沢優月。

14歳の中学2年生だ。

抽選で当たったナーヴギアと、これまた抽選で当たったソフトを使ってログインした素人だ。

ちなみにMMORPGはこれが初めてだ。

プレイヤーネームは「ツキノワ」。

姉であり、ベータテスターの兔沢深澄のプレイヤーネーム

、「[ミト]」を参考にさせてもらった。

「さてと、みす…ミトを探るか。でも姿がわからん…」

深澄に言わずにログインしたので、実はどこにいいのかどんな姿か知らないのだ。

そう考えながら周りを見ていると

「ん？なんだあいつら」

迷いなく裏路地に走り抜ける男と、それを追いかける男。

何となくその2人を追いかけることにした。

追いつくとなんと赤バンダナの男が、黒髪の男にレクチャーを受けることになったらしい。

これに便乗させてもらおう。

そう思い声をかけることにした。

「すまない。俺にも色々教えてもらえないか？実はMMORPG自体が初めてで何からやれば分からないんだ」

素直にそう伝えると

「ああ、いいぜ。1人も2人も変わらないしな。俺は「キリト」だ。よろしく」

「おお！一緒に教えてもらおうぜ！俺は「クライン」だ！よろしくな！」

と2人とも快諾してくれた。

自分も名乗ってないことを思い出し

「ありがとう。俺はツキノワだ。よろしく頼む。」

そう返し、3人でフィールドに出ることにした。

これが俺の人生で大切な友達との出会いだった。

「痛って〜!!!」

クラインの絶叫が響く。

青イノシシ「フレンジーボア」に突進され、蹲りもがく姿にツキノワは爆笑していた。

「wwwクラインwww漫画かよwww」

「ペインアプソバーがあるんだから痛くないだろ」

キリトが呆れながら返すと

「そういえばそうだけどよお…分かるだろ？お前らだって」

などと情けない声で言うクライン。

「まあ、分からんでもないけど…そんなに難しいのか？ソードスキル」

そう、今ツキノワたちはキリトに教えて貰いながらソードスキルの練習をしていた。

これが以外に難航しているのだ。

「だから言ってるだろ？ 大事なものは初動のモーションなんだよ」

「んな事言ったってよお…あいつ動きやがるしよお」

「何て言えばいいかな…グツて少し溜めて、スキルの発動を感じたらズパーンって撃つ

感じかな」

「グツと溜めてズパーン…お？」

なにか掴んだクラインは、そのまま向かってくるフレンジーボアに対して、ソードスキルを打ち込んだ。

綺麗に決まったそのスキルは一撃でフレンジーボアの体力をゼロにし消滅させた。

「うおおお！ やったぞ！」

大喜びするクラインに

「おめでどう」

「おめでどうさん。スライム程度の敵だけだな」

と適当に褒めるキリトとツキノワ。

「え？ 俺はてつきり中ボスくらいだと…」

「な訳ないだろ…。さてと、次はツキノワだな」

「OK任せとけ。グツと溜めてズパーンだな」

そう言いながら剣を構えるツキノワ。クラインと同じ片手曲刀なので構えはクラインを見て覚えた。あとは冷静に狙いを定めて

「…！ハア！」

気合一閃。

フレンジーボアを一撃で倒した。

「…ふう。こんなもんか」

あつさりソードスキルを決めたツキノワに

「へえ。1発で成功か。センスあるかもなツキノワは」

と驚くキリトと

「ちくしょう…あつさり決めやがって〜！」

と悔しがるクライン。

「何言ってるんだか。そんな事よりどんどん楽しもうぜ！」

そう言ってる次の獲物に狙いを定めるツキノワ。

「そうだな！全力で楽しまねーとな！」

そうして彼らは夕方まで遊び倒した。

「いや〜遊んだ遊んだ！」

そう言うツキノワ。

どうやらかなりハマったらしい。

「だいたい遊んだが2人はどうする？」

そう聞いてくるキリトに対し

「もちろん遊ぶぜ！…と聞いてえところだがそろそろ宅配ピザが届く頃合いだからな。

「1回落ちるわ。」

「俺も1回落ちて休むわ。少し疲れた。」

2人とも1度休むという。

その後クラインの提案でフレンド交換した俺たちはまた後で会おうと約束し、ログアウトしようとした。

したのだが…

「あれ？ログアウトボタンがない？」

と俺とクラインが同時に呟いた。

これが俺たちの運命の始まりだった。

全てはここから始まったんだ。

## プロローグ②

「あれ？ログアウトボタンがない？」

同時に呟くツキノワとクライン。

そんな2人に

「はあ？そんな訳ないだろ？ちゃんとここに…ってない？」

キリトは自分のメニュー画面を見ても、ログアウトボタンが確かに存在しない事を疑問に思う。

3人揃って何が起きたのか分からず困惑していた時、ゴーンゴーンと鐘の音が鳴り響いた。

「これは鐘の音？はじまりの街からか？」

そうツキノワが呟いた瞬間、突然青い光に包まれるクラインとキリト。

「おわ!!何だこりゃ!!」

「これは…強制テレポート!?!」

「キリト!?!クライン!?!って俺もか!?!」

あまりの眩しさに目を瞑ってしまおう3人。

次に目を開けた時に見えたのは、はじまりの街だった。

「ここは、はじまりの街じゃねえか!」

「一体何が起こってるんだ?」

「2人とも、周りを見ろ」

周りには自分たちと同じ様に、突然の事に困惑するプレイヤーがどんどん増えていた。

「まさか、今アインクラッドにいる全プレイヤーが集められてるのか!」

「だとしてもよお、俺たちは一体何のために集められたんだ?」

そう呟くツキノワとクライン。

そんな2人にキリトは

「運営から何かアナウンスでもあるのか?」

そう考えていると誰が突然大きな声を上げた。

「おい!上を見ろ!」

反射的に上を見ると赤い字でWARNINGと書かれたシステムの案内。

その瞬間、突然その文字が空を覆った。

システムの案内表示の隙間から血のようなものが溢れ出すと、それはローブを纏った



謎の人物を作り上げた。

そしてその人物は

「プレイヤーの諸君、私の世界にようこそ。私の名は茅場晶彦。今やこの世界を操作できるただ唯一の人物である」

と淡々と言い放った。

「何い!？」

「茅場晶彦だと!？」

驚くキリトとクライン。

「茅場晶彦って確か……このゲームの開発者だっけ? そんなに驚く事なのか?」

ツキノワは驚く2人に聞く。

「茅場晶彦はあまりメディアには出てこないんだ。だからこんなアナウンスで出てくるなんて思ってたなかったんだ」

教えてくれるキリト。

そんな間にも淡々と続くアナウンス。

「諸君らは今、メニュー画面からログアウトボタンが消えてる事に気がついてるだろう。そしてそれが不具合なのでは? という疑問を抱いているだろう。だがこれは不具合では無い。もう一度言おう。これは不具合では無く、ソードアート・オンラインの

本来の仕様である」

「し、仕様だと?」

「何を言ってるんだ…?」

掠れた声で呆然とつぶやくクラインとツキノワ。

「今後君たちプレイヤー諸君は、この浮遊城の頂を極めるまで自発的にログアウトすることはおろか、外部からの切断でもこのゲームから脱出することは出来ない。仮に外部からの切断が試みられた場合…諸君らの脳はナーヴギアから発せられる高出力マイクロウェーブにより破壊され、生命活動を停止する」

そう告げられる。

「はは…何言ってるんだよあいつ。ナーヴギアはただのゲーム機だぞ。そ、そんなもんで人を、こ、殺せる訳ないだろ!」

動揺するクラインに対しツキノワは

「いや…できる。ナーヴギアは原理的には電子レンジと一緒だ。だから暴走させれば…」

そうつぶやく。

「この事は外にも知られている。しかし残念ながら、この警告を無視したもののたちの行動の結果…213名のプレイヤーがアインクラッドおよび現実世界から永久退場して

「ん？」

「…マジかよ…」

声を震わせるツキノワ。

「諸君らが現実の身体に関して心配する必要はない。現在、あらゆるメディアを通じて私が話している内容は全国へと届けられている。ナーヴギアが外部から強制的に外される心配はほぼ無くなったと言っている。ナーヴギアを装着したまま回線切断の猶予時間のあるうちに嚴重な介護の行われる施設へと搬送されることだろう。だから、諸君らは安心してゲーム攻略に臨んでほしい」

「な!? こんな状態でゲームを攻略しろ!? ログアウト出来ないこの状態で呑気に遊べと言いたいのかお前は! こんなのもう、ゲームでもなんでもないだろう!」

たまらずそう叫ぶキリト。

そしてそれを無視するように

「しかし諸君らは十分に留意して欲しい。ログアウト不可の状態では今はここが諸君らの現実には他ならない。今後このゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しなくなる。君たちのHPがゼロになった瞬間、諸君らのアバターはこの世界から消滅し…更に諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される」

誰もが黙り込む。

誰も信じられなかったからだ。

この目の前に広がる現実という名の絶望を。

そんな彼らに現実を突きつけるように、さらに続ける茅場晶彦。

「私から諸君にささやかながらプレゼントを用意した。アイテムストレージを確認する  
といい」

そう言われ確認するツキノワ。

そこには1つアイテムがあった。

「手鏡？」

疑問に思いながらオブジェクト化させる。

そして覗き込んだ瞬間突然また青い光が彼らを包んだ。

「ちよ?!?またかよ?!?」

驚くツキノワ。

瞑った目を開けると、鏡に映る少し薄い紫色の髪と実は気に入ってる赤い目。

先程までと変わらない自分の姿だった。

「なんだったんだ? キリト! クライン! 大丈夫か?!? って誰だあんたら?」

キリトとクラインの方を向くときさっきまでとは見た目が全く違っていた。

「誰って俺だよ。キリトだよ」

「そうだけ。俺はクラインだぞ」

「いや、見た目変わってるから」

そう言いながら2人に手鏡を向ける。映る姿しばらく見たあと

「うお!!現実の俺だ!!」

ハモる2人。つまり2人は

「ほんとにキリトとクラインなのか!？」

「だからそう言っただろう(が)！」

またもやハモる2人。

「そーいや、ツキノワは変わんねえんだな」

クラインに言われたので

「VRシヨツピングのやつを間違つてコンバートしたんだよ。リアルと一緒にしないと

参考にならないだろ？」

そう返す。納得しているクラインを他所に

「顔はマイクロウエーブで高密度スキャンニングしてるから再現できるだろうけど体格は

どうやって…」

「あれじゃねえか?初期設定したから覚えてるが、確かキャブレレーションとか何とかで

身体中触っただろ？」

と考察するキリトとクライン。

「それよりもあいつは何でこんな事…」

とツキノワは考えてるとそれに答えるかのように

「諸君は、今なぜこのようなことをしたのか、と思っ  
ているだろう。大規模なテロでも身代金目的でもない。私の目的はすでに達成して  
る。この状況こそが私の最終目的なのだ。…  
以上で『ソードアート・オンライン』正式チュートリアルを終了する。プレイヤー  
諸君の健闘を祈る」

そうして茅場晶彦は姿を消した。

## プロローグ③

誰も声を出せなかった。

1万人近くが同じ場所に居るとは思えないくらい静かだった。

聞こえてくるはじまりの街の呑気な音楽が妙に耳に残る。

誰もが突然の茅場晶彦のデスゲーム宣言（デスゲーム）を信じる事が出来なかったのだ。

「いや……いや……！！！」

そんな空気を切り裂くような悲鳴が聞こえた時、全員が現実を認識し狂乱する。

場が騒然とする中

「ツキノワ、クライン、こつちに来い！」

突然キリトに腕を掴まれ裏路地に連れ込まれる。

「2人とも俺と一緒に来ないか？俺なら次の村までの安全な道を知ってる」

「どういう事だ？」

突然の提案にツキノワは困惑しているとキリトは細かく説明してくれた。

「この世界で生き残るには、ひたすら自分を強化しなければいけない。VRMMOが提供するリソースには限りがあるんだ。はじまりの街周辺のフィールドはすぐに狩りつ

くされる。効率よく進めるには、拠点を次の村に移動した方がいい」

「なるほど……」

確かにこれは現実的な提案だ。

ツキノワは自身が生き残るためにこの提案に乗るつもりだった。

でもクラインは違った。

「すまねえ……一緒にログインしてるダチがいるんだ……。あいつらをほっとけねえよ……」

そう、クラインは仲間がいる。

彼らを放つてこく事なんて出来ないだろう。

キリトもこれにはなんて返したらいいか分からなくなっていた。

正直なところ2人でさえ、かなりギリギリだった。

そこにさらに増えるのは、キリトだけでは守りきれない。

もしもの時の責任を考えて怖くなってしまったのだ。

「気にすんなよ。おめえに教わった事をしっかり活かすぜ！これでもギルドの頭張ってたんだ！すぐに追いつくさ」

その事に気づいたクラインは笑いながら返した。

「……わかった。ツキノワはどうする？」

そう聞かれすぐに答えようとした、1つだけ確かめたい事があった。



「1つ聞きたい。その道はベーターテスターは誰でも知ってるのか?」  
「コアなMMOプレイヤーなら知ってると思うけど、どうしたんだ?」

不思議そうに返すキリト。

それに対し

「実は姉もベーターテスターでこのゲームにいるはずなんだ。だからまず少しはじまりの街の中を探したい。そこで見つからなかったら改めて一緒に行こう。姉もコアなプレイヤーだ。きつと知ってるはず」

と返した。

その発言に驚く2人。

「わかった。30分だけ探そう、それでいいか?」

「助かる。ワガママ言つてごめん」

「気にすんなよ!家族を探したいなんて当たり前じゃねえか!」

励ましてくれるクライン。

その後フレンド交換をし、姉のプレイヤーネームと特徴を教えて別れることにした。

「…じゃあな。行こうツキノワ」

「クライン、無事でいてくれよ」

ツキノワはキリトに付いて行くと決め、クラインに謝罪する。

キリトとツキノワは、クラインに別れを告げ、町の出口へと向かおうとする。

「…キリト！ ツキノワ！」

すると、クラインが二人を呼び止め、二人は振り向く。

「キリト、お前って、案外かわいい顔してるんだな！ 結構好みだぜ！ ツキノワもリアルもイケメンじゃねえかよ、羨ましいぜ！」

クラインは親指を立てて、二人に笑い掛ける。

「お前こそ、その野武士ツラの方がずっと似合ってるよ！」

そうして俺たちは街を飛び出した。

走って走って走っていると、2体の狼モンスターが出てきた。

「ツキノワ！ 来るぞ！」

そう言ってモンスターに切りかかるキリト。

だがツキノワは剣を抜いただけで、恐怖で動けなかった。

そんなツキノワに対し襲いかかるモンスター。

「うわ!？」

寸前で剣で守るも体勢を崩し馬乗りになされてしまう。

「ツキノワ!?! 何とか堪えるんだ！」

キリトの焦った声を聞きながらツキノワは恐怖していた。

(死にたくない…死にたくない…死にたくない！)

そんな事で頭がいっぱいだった時、

「ハア！」

キリトの一閃がツキノワを救った。

「ツキノワ!?大丈夫か!」

「キリト…ああ、大丈夫だ」

脱力しきってしまい動けなかった。

「…無理してついでにすることはないぞ?」

そう優しく声をかけられるが

「断る」

即答する。

「今のでわかった。人はいつか死ぬ。でもこんな状況だ、死に方なんて大層なものを選べない…。でも生き方なら、死ぬまでどう生きるか、それなら選べる!俺はこの世界に負けたくない!だから戦う!世界と!何より弱い自分と!!」

そう強く宣言した。

その目はさつきまでとは違い、強く燃え盛る炎のような光があった。

「わかった。なら生き残ろう！一緒に！」

そう言って拳を向けてくるキリト。

「よろしく頼むぜ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

「もちろんだ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

そうしてお互い拳をぶつけ合い、走り出す。

この世界に勝つために、生き残るために。

## 4話

休みなく移動し続けた結果、次の拠点であるホルンカの村に着いたのは、空が暗くなつてからだった。

「やつと着いたなく…疲れた」

「ああ…だいぶ気張つてたもんな…」

やつと一息と言わんばかりの2人の少年、キリトとツキノワ。

道中何度か戦つた結果キリトはLv4、ツキノワはLv3になっていた。

「どうする？ 休むか？」

ツキノワがそう尋ねると

「いや、休む前に片付けたいクエストがある。だから装備とアイテムを揃えよう」

答えるキリト。

内心休まないんかい、と思ひながら了承するツキノワ。

「どんなクエストなんだ？」

「【森の秘薬】というクエストだ。クリアすると3層位まで使える片手剣【アニールブレード】が手に入るんだ。クリアに必要なアイテムが中々ドロップしないからレベリン

グにもなる。ツキノワにはあまり美味しくないクエストだろうけど付き合ってくれ」  
なるほど、それは欲しい。

確かに経験値と金以外、ツキノワにはメリットはない。

だがついて行くと決めた以上、文句はないし言う気もない。

「OK。強くなるためだ。なんでもやるさ」

「ありがとう。こつちだ、着いてきてくれ」

そう言われついて行くと1つの民家に着いた。

そのまま入っていくキリトについて行くと

「ようこそ。旅の剣士様。お水でも飲まれますか？」

と中にいたNPCに言われる。

「ありがとう」

そう言っ受けて取る2人。

すると

「ん？あれは？マーク」

頭に？マークが出た。

「クエストフラグが立ったんだ。質問してみろよ」

キリトに促されたので

「どうかしたのか？」

NPCに聞いてみた。

すると

「実は娘の体調が良くなく苦しんでいるのです。【リトルネペントの胚珠】が必要なので。もしよろしければ代わりに採ってきていただけないでしょうか？」

と説明される。

その内容の深さに思わず驚いてしまう。

「わかった。俺たちに任せろ」

そう返すと？マークが！マークに変わる。

「あ。また変わった。これでいいのか？」

「バッチリ！これがクエストを受けるまでの流れ。さあ、フィールドに行こう」

そうして俺たちのネペント狩りが始まった。

「お？レベルアップした」

「おめでどう。ツキノワ」

始めてから1時間ほど。

2人は10体ほど倒してツキノワがLv4になった。

「なあ、オススメスキルってなんかあるか?」

2つ目のスロットが開放されたため尋ねてみると

「俺なら索敵を選ぶ。ネペント相手に隠蔽スキルは効果がないんだ。ただ自分が納得いくものを選んだ方がいい。だから開けたまんまにするのも1つの手だと思うぞ」と返すキリト。

「ん、わかった。とりあえず空けとくよ」

そんな話をしてる時、パチパチパチ、という拍手の音が聞こえてきた。

「!?!」

咄嗟に剣を構えるながら音の方を睨む2人。

「ま、待って!?!驚かせてごめん!?!」

そんな2人の反応に慌てながら出てくる1人のプレイヤー。

「ご、ごめん。Lvアップのファンファーレが聞こえてたから、おめでとうって言おうと思ってる……」

「そうなのか、ごめん。ありがとう、Lvアップしたのは俺だよ」

そう謝りながら剣をしまうキリトとツキノワ。

「僕は【コペル】。ここにいてことは君たちも森の秘薬クエストを?」

「ああ、そうだ。そういうあんたもだろ?」



「もし良かったら一緒にやらないかい？人手が多い方が効率的だと思う」

コペルは協力体制を敷かないかと言いつ出した。

「…どうするツキノワ？」

キリトに聞かれ、確かに効率を上げたいとは思う。

しかし何故か、何となくだが嫌な予感がした。

したのだがその気持ちには蓋をして

「キリトの欲しいアイテムだ。キリトの判断に任せる」

そう返事をした。

「そうか、ならその提案は受けるよ。そういや名乗ってなかったな、俺はキリト。こっちはツキノワだ。よろしく頼む」

結果協力体制を受け入れたキリト。

「ありがとう！よろしく頼むよ2人とも」

そうして3人で狩りを再開しました。

「いた(な)(ね)」

再開30分、やっとお目当てのモンスターが出てきた。

「あれが狙いのモンスターか」

「ああ、あれが花付きのリトルネペントだ」

「ふーん。で、あの奥にいる丸っこいのつけたやつは？」

「え」

驚くようにさらに奥を見るキリトとコペル。

「2人ともあれは実付きだ！」

警戒するように言うコペル。

確かに実に見える。

見えるがそれがどうしたのだろうか。

キリトに尋ねようとすると

「ツキノワ。あの実付きには絶対攻撃するなよ」

先に警告された。

「なんで？レアキャラだろ？」

「確かにレアキャラだが、あの実を割ると周囲のネペントが一斉に集まってくるんだ。

普通のゲームならあえて割ってレベリングっていうのもアリって言えばアリだけどこのSAOではただの自殺行為だ。だから絶対攻撃するなよ」

「…わかった。絶対攻撃しない」

考えただけで背筋が凍った。

確かに絶対攻撃してはいけない。

そう肝に銘じておく。

「僕が実付きのタゲをとる。2人で花付きを倒して」

とコペルが囀をかってでてくれる。

「え、でもコペルだって」

「僕は後でもいいから大丈夫。その代わりちゃんと手伝ってね」

困惑するキリトに対しお茶目に返すコペル。

「…わかった、ありがたく取らせてもらう。ちゃんと最後まで手伝うさ」

「乗りがかった船だしな」

そう返すキリトとツキノワ。

「よし！行こう！」

そう言つて3人同時に飛び出した。

攻撃してくるネペントの蔦を切り刻みながら、踏み込むツキノワ。

攻撃しようとした瞬間、変な動きをするネペントに対し、咄嗟に横に飛ぶ。

避けた瞬間、腐敗液を吐き出す。

この腐敗液を浴びると、武具の耐久値がガクツと落ちるのだ。

ここまでの経験で予備動作を見切っていたツキノワは、冷静に避け、逆にその隙をついてソードスキル「リーパー」を放つ。

「シッ！」

クリーンヒットし、大きく体勢を崩すネペント。

「キリト！スイッチ！」

それを見てキリトと入れ替わる。

横を駆け抜けるキリトは間合いに入ると「ホリゾンタル」のモーションを取る。

「ハア！」

そのまま横薙ぎに一閃。

ペネントを切り倒した。

「ふう、お疲れキリト。ドロップした？」

「ああ、お疲れツキノワ。しっかりドロップしたぜ」

お互い拳をぶつけながら健闘を讃える。

「コペルの手伝いに行こう」

「そうだな」

そう言いながらコペルの方を見る。

その時

(?目が合った?)

コペルと目が合ったのだ。

その目はどこか悲しそうに、覚悟を決めたような、そんな目だった。

そのままコペルはソードスキルのモーションに入った。しかしそのモーションは「ホリゾンタル」じゃなく縦切り技の「バーチカル」だった。

「ちよ!?コペル何してる!?!」

ソードスキルを中断させようと踏み込もうとするツキノワ。

「待て!ツキノワ!逃げるぞ!」

慌てて止めるキリト。

その2人の行動より早く「バーチカル」が実を割った。

パーーーーーン!!!ものすごい音とともに吹き出す煙。

その瞬間、一気に集まり出す。

「クッソ!間に合わなかった!」

「仕方ない!やるぞ!」

そう言つて2人で大群に切りかかる。

「!?コペルがいない!?!」

いつの間にかいなくなつたコペルに驚くツキノワ。

「まさか、隠蔽スキルか！」

「隠蔽スキル!?でもこいつらには?」

そう、隠蔽スキルはネペントには効かない。

それを証明するかのように何体かのネペントがあらぬ方に向かつていく。

そして何かの碎ける音が聞こえた。

それがなんの音が理解してしまつた2人は

「…ウオオオオオオオオオオ!!!」

恐怖を振りほどくように、気合いを込めながら剣を振るう。

振って振って振り続ける。

奇しくもそれはまるで、舞を踊っているかの様な光景だつた。

「ハア…ハア…ハア…」

どれだけ戦つてきたか分からないくらい戦つていたが、気づいたらネペントは軒並み全滅していた。

それを認識した途端碎け散るツキノワのスモールシミター。

それを感じながらかなりの疲労からか、思わず膝から崩れ落ちた。

「…生きてるか、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

「…お互い様だろ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

お互いの生存を確認し合い肩で息をする2人。

どれだけ戦ってたか分からないが、かなり倒したのだろう。Lvもお互い7になっており、ドロップ品もかなりの数があった。

「あ、胚珠が2つある。交換して売るか?」

「…いや、吊いとして1個はコペルの分として置いてやろう」

キリトはそう言ったが、その事に俺は困惑した。

「…なんで? あいつは俺たちを殺そうとしたんだぞ!? なんでそんな奴の吊いなんてしてやらなくちやいけないんだ!」

そうだ、あいつがやったのはMPK「モンスター・プレイヤー・キル」と言われる、タゲをなすり付けて逃げる非マナー行為だ。

特にこのデスゲームでは非マナーでは済まず、最悪人殺しのレッテルを貼られることになる。

そんな事をした奴に、しかも、被害者である俺たちがそこまでしてやる義理はない。だがキリトは

「…それでも俺は、必死に生きようとしたあいつを心から怒る事が出来ないんだ」

そう俯きながら言う。

そんなキリトに俺はため息をつく

「……ここで待つてるから行ってこい。お前の分は俺のドロップしたやつを使えばいい」

そう言ってしやがみ込んだ。

「!?……すまない。ありがとう」

そう言ってコペルが死んだと思しき方に向かっていく。

(……キリトは優しすぎる)

その背中を見ながらツキノワは思う。

あの優しさは美徳だ。でもいざという時に足枷になるかもしれない。

キリトにそれが出来ない時、もしやらなくてはいけない時が来た時、やるのは恐らく俺だ。

だから俺だけでも覚悟は決めなくてはいけない。

(いざという時躊躇わないこと、その覚悟を持たないと)

失わないために、大切なものを護るために。

そう思いながら拳を握りこんだ。



## 5話

sideツキノワ

デスゲーム宣言から1ヶ月がたった。

その間にひたすら牛を狩ったり、虫を狩ったり、亜人を狩ったり、時には人が死んだ瞬間を見たり、かなりハードな1ヶ月だった。

なんでも1ヶ月で2000人ぐらい死んだらしい。

ここまで数人の死を見てきたがそろそろ慣れてきてしまった。

その事に自分が怖くて仕方なくなつて、あまり眠れず夜にこつそり狩りに行くことが増えた。

そして朝方には、素振りや型の稽古みたいな事をして、ずっと剣を握っていた。

そんな姿をキリトに見られ、1回睡眠毒で強制睡眠させられた事もある。

その時のキリトの顔は、申し訳なさで泣きじやくりそうだったため、少なくとも夜中のレベリングは少し自制し、控えるようになった。

そんな俺は今、

「はあく…癒される…」

農家の2階を割り勘で借りて、備え付けの風呂で朝風呂を堪能している。何故って？ 稽古の汗を流しているのだ。

実は風呂好きの俺は、この1ヶ月ほど風呂という存在を諦めていた。

だがキリトのおかげでこうして風呂に浸かってられるのだ。

もうキリト様々だ。

「お〜い、まだか〜？ そろそろ行くこうぜ」

外から急かしてくるキリトにまったりとした声で

「あと5分…」

と返すと

「そう言って30分は出なかつたら!? 早く行くぞ!」

怒られた。

その時の事を思い出し、ため息をひとつつく俺は

「分かった分かった、今出るよ」

そうして風呂から出て装備を整えてから風呂場を出る。

「ほい、準備完了。いつでも行けるぞ」

暇そうにするキリトに声をかける。

「よしーじゃあ行くぞー! 迷宮区ー!」

「4時に中央広場で攻略会議だったな」

「ああ。それまでに戻れる範囲でレベリングだ」

キリトと行動予定を確認し合い、

「今日も生きて帰るぞ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

「ああ、絶対に帰るぞ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

お互いの拳をぶつけあった。

outside

壁に引つ掛けられた松明がユラユラと揺れる不安定な影を生む。

その影はかなりの速さで駆け抜け、その後を鎧を装備した2体の人型モンスターが追いかける。

少し離れすぎたと思った途端、紫色の髪をした少年はピックを取りだし全力で投げつける。

的確に鎧の隙間を抜けたピックは、ピンポイントで中に当たりモンスターを仰け反らせる。

その隙だらけの姿を見て

「スイッチー！」

と叫ぶ。

その瞬間、その横を通り過ぎる黒い影。

その影は黒髪の少年で、先程の少年より小柄だが歳は近いだろう。

その速度を落とさずに剣を引き抜き構える。

その瞬間

「ハァー！」

まるで銃弾ように駆け抜け、モンスターの一体をソードスキル【ソニックリープ】で真つ二つにする。

だが、モンスターはもう一体いる。

体勢を整えたモンスターは、黒髪の少年に斧を振り下ろそうとする。

だが黒髪の少年はただ冷静に見てるだけだ。

何故なら

「シッー！」

紫色の髪をした少年が、剣線に入り斧を弾き飛ばしたのだ。

またもや大きく体勢を崩したモンスター。

そしてその隙を的確かつ冷静に

「…ザァー！」

ソードスキル【リーパー】で首を切り落とし消滅させた。

そして剣をしまいながら

「お疲れ、キリト」

「お疲れ、ツキノワ。そろそろコボルト戦も慣れてきたか？」

黒髪の少年キリトと、紫色の髪をした少年ツキノワはお互いを労っていた。

「ああ、だいぶな。俺が斧をかちあげた時点で本来スイツチをすればいいんだろ？」

「ああ、基本はそうだ。ただ今回みたいに自分でいける時はいつてくれて構わないな」

「了解」

同時に戦闘分析をしつつ、周囲の警戒をしていた。

「…少し少くないか？」

「やっぱりツキノワもそう思うか？俺もそんな気がしてたんだ」

モンスターのの少なさに疑問に思いつつ警戒していると、何か音が聞こえてきた。

「？これは…戦闘音？」

「え？聞こえるか？そんなの」

どうやら聞こえるのはツキノワだけだったらしく、キリトは不思議そうにする。

「こつちだ。行こう」

そうしてそつちの方に走り出すツキノワとキリト。

そして進むにつれキリトの耳にも音が聞こえて来る。

「本当だな。急ごう！」

「ああ！」

お互い走り抜けたその先には、

「ハアアア！」

まるで流星のように美しいソードスキルを使って戦う、女性プレイヤーがいた。

コボルトの攻撃を的確に避け、その隙を正確無比のソードスキル「リニアー」で貫く。その戦い方は美しく思わず

「……………」

2人揃って見惚れていた。

ただツキノワは見惚れていただけでなく、同時に疑問にも思っていた。

(この人……この動き……どこかで見た事ある様な)

そんな事を考えていた。そうして考え込んでいると

「今のはオーバークイルだよ。通常攻撃1発で倒せたはずだ」

気づいたら戦闘が終わってたらしく、キリトが話しかけていた。

「…その何が悪いの？」

疲れ切っているのだろう、気だるそうな声だった。

その声に

(やっぱり聞いた事ある気がするぞ、この声)

ツキノワはそう思っていた。

さらに思考に沈んでいると

「悪くは無いけど、疲れるだろ？ダンジョンを抜けるだけでも1時間はかかるし、さらに最寄りの街まで30分はかかる」

デメリットを説明していると

「…なら大丈夫。私、帰らないから」

など言い出した。

「はあ？」

思わず声が被る。

無理もない、街に帰らないと言い出したのだから。

「いや!?ポーションとか武器のメンテは!?」

驚くキリトに対し

「当たらなければ回復する必要は無いし、武器も同じものを5本買って来た。それよりももういかしら？そろそろリポップするだろうし」

そう言つてふらつきながらさらに進もうとする。

「ちよ、ちよつと待てよあんだ!そんな状態で行ったら死ぬぞ!」

慌てて腕を掴んで止めるツキノワ。

ここで初めて、あちらはツキノワを認識したのだろう。

驚いてこつちを見ながら黙り込んでいた。

というより、唾然としていたと言った方が正解なのだろうか。

ピタリと固まってしまった彼女に対し困惑しながら

「あのく、大丈夫？」

顔の前で手を振って確認をとるツキノワ。

すると

「…優月君？」

掠れた声で本名を呼ばれた。

思わず

「は？」

とつぶやくツキノワ。

やがてフードの下の顔を覗き込むと、今度は彼が固まってしまった。

それは想定外だった。

いるとは思ってなかった人物が、そこにはいたからだった。

「…明日奈先輩？」



今度はツキノワが、掠れた声で女性の本名を呼んだ。

そう、この赤ずきんの正体は、姉である兔沢深澄の親友である結城明日奈だった。そしてお互い正体が分かった途端

「…っ！優月…君！」

と言つて泣きじやくりながら抱き着いてくる明日奈改め「アスナ」。

その事に驚きながらも、しつかり抱きとめるツキノワ。

「私…私…うわああああああん!!!」

ダンジョン中に響き渡るのではないかというほど、大泣きするアスナ。

その背中を

「大丈夫。大丈夫ですよ。俺たちがいますから」

そう言いながら優しく背中を撫でるツキノワ。

そして

「…俺、どうすればいいの？」

本気で困惑するキリトという、カオスな空間が出来上がっていた。

sideアスナ

ミトに、親友に見捨てられた。

デスクゲームが始まってからずっと一緒にいた、親友のミトこと兔沢深澄。

ある時、リトルネペントを狩っていた時、突然

「1層じゃ滅多に出ないレアキャラがいた！レアアイテムをドロップするかもしれないからここで倒しておきたい！」

そう言い出した。

こつちも順調だったのだから

「分かった！こつちは任せて！気をつけてね！」

そう言って送り出した。

少しして戻ってきた時には、ほぼ狩り終えていた。

そして目の前の敵を倒そうとした瞬間

「待って！ダメ、アスナー！」

突然止めようとするミト。

「え？」

その瞬間ソードスキルが暴発してしまった。

目の前の敵を倒した時見えたのは、実付きのリトルネペントだった。

それを認識した時ミトの警告が頭をよぎった。

「実付きを攻撃したらダメよ。煙が吹き出して、大量のリトルネペントを呼び寄せてしま

まうの」

そう言われたのを思い出したが、止められずそのまま実を貫いてしまった。

その瞬間、ブシューー!!!と吹き出す煙。

そのまま大量のリトルネペントに襲われた。

「アスナ!!」

ミトも最初は、アスナを助けようと懸命に鎌を振るっていたが突然

「あ!?!」

崖から落ちてしまったのだ。

「ミト!?!」

その事に驚きながらも、目の前の大群に対応せざるを得なくされた。

自分のHPが赤になった時、突然ミトがパーティを解散した。

「…え?…ミト?…」

何で? どうして?

そんな疑問を浮かべながらも分かったのは1つ。

1人でどうにかしないと死ぬ、という現実だけだった。

「…ああアアアアアア!!」

そこからはがむしやらだった。

ただひたすら目の前の敵を貫いた。

貫いて、貫いて、貫いて、貫いて、貫いた結果、残り数ドットという所で何とか全滅させた。

そのまま命からがら村にたどり着き、気づいたら宿に転がり込んだ。そのままベッドに倒れ込み考える。

何でパーティーを解散したのか、何で助けに来てくれなかったのか。

「…ねえ、何でなの、ミト…?」

そして見捨てられたという事実泣きじやくりながら気づいたら寝落ちしていた。

次の日、装備やアイテムを整えて外に出た時、2000人くらい死んだという話を聞いた。

その事がショックでしやがみ込んでしまう。

そんな私に冷たい雨が降り注ぐ。

「…もう、生き方なんて選べない」

だってここから出られる訳ないんだから。

でも

「…でも死に方くらいなら選べる」

この世界には負けたくない。

最後まで私が私らしくいるために。

たとえその結果、モンスターに殺されるかもしれないとしても、ここで腐っていくのはごめんだ。

そう思い装備を整えた。

そしてそのまま迷宮区に潜り込み狩りを始めた。

3日目か4日目があった頃、突然1人のプレイヤーに話しかけられた。

何でもオーバークイルだとか何とか。

「…その何が悪いの？」

流石に疲れており、気だるそうな声で返した。

そのまま何か理屈を捏ねていたがほとんど聞き流し、先に進もうとした。

その時だった

「ちよ、ちよつと待てよあんた！そんな状態で行ったら死ぬぞ!」

誰かが私の腕を掴んで止めた。

どうやらもう1人いたようだ。

気づかなかったが、今はそれよりその腕を掴んだ男から目を離せなかった。

何故ならその男の事を知っていたからだ。

ミトと同じ紫色の髪に赤い目。

この子はこの目を密かに気に入っていると云っていた。

同年代に比べてかなり身長があり、体格も見た目よりしつかりしている。

そう、この子の名前は

「…優月君？」

そう、ミトの、深澄の弟の免沢優月だ。

彼も本名を言われ驚いたのか、固まっていると突然こちらを覗き込んできた。

(あ、目が合った)

等と考えると恐る恐ると言った感じで

「…明日奈先輩？」

と言ってきた。

ああ、ずっと張っていた気が緩んでしまう。

末っ子である自分にとって、まるで弟の様に可愛がってきた子がここにいる。

もう限界だった。

そのまま彼に泣きついてしまった。

そして恥も外聞もなく泣きじやくり、穏やかな声と優しく撫でられる背中に導かれるように、そのまま気を失ってしまった。

## 6話

sideキリト

「どういう関係なんだ？」

凄腕のフェンサーさんと出会って数分後、張り詰めていたものが切れたのだろう、気を失ってしまった彼女を背負うパートナーであるツキノワにそう尋ねる。

「どうと言われても、姉の親友。知り合って1年弱かな」

あつさりと答えるツキノワ。

そう話しながらも索敵スキルでモンスターを探りながら、時には迂回しつつ出口を指していた。

「さっきその人が言ってた優月ってのがお前の本名なのか？」

「…そうだよ。兔沢優月、14歳だ。俺だけってのはフェアじゃないしそつちも教えろよ」

「…桐々谷和人。同じく14だ」

「なんだ、やっぱりタメか。そんな気がしてた」

「むしろ名前より同い年の事に驚いたよ俺は」

サラッと年齢を言われたが、同じ年とは思ってなかった。

俺より見た目がずっと大人っぽいし雰囲気も大人って感じである。そう思っていると

「やっぱり老けて見えるのか？ 良く高校生とか大学生に間違えられる」  
少し悲しそうな顔をしながら聞いてきた。

「さ、さあ…？ 大人っぽいとは思うけど…」

思わず曖昧に答えてしまう。

そんな雑談をしていると、索敵スキルにモンスターの反応が引つかかった。  
「待て、モンスターだ…。ダメだな避けられそうにない」

「なら戦うしかないな」

そう言ってそっとフェンサーさんを降ろすツキノワ。

「行くぞ！」

一気に飛び出し先手を取る。

何やらさつきより気合いが入ってる気がした俺は、冗談半分で  
「もしかして、好きなのか？」

そう聞いてみた。

その瞬間



「?!?」

ビツクリして動きを停めてしまうツキノワ。

戦闘中に隙だらけの姿で固まってしまうと、当然モンスターが狙ってくる。

「うお!?!」

反射的に躲して蹴りを入れて距離をとるツキノワ。

その目はこつちを睨み殺さんと言わんばかりに睨み付けてくる。

「お前、後で覚悟しとけよ」

怒っていた。

とても怒っていた。

「…はい…すみません…」

あまりの怖さに縮みこむ俺。

そんなトラブルを起こしつつも、何とか迷宮区を脱出した俺たちだった。

sideアスナ

草木の匂いがする。

おかしい、あそこは少しカビ臭かった気がする。

それに妙に眩しい。

そう思い目を開けると

「おはよう、先輩。体調は大丈夫？」

心配そうに優月君が、見下ろしていた。

でも何だろう、妙に近いような、何時もとは少し見え方が違うような気がする。そして頭の柔らかいような硬いような感触は、なんだろう。

人肌ぐらいに温かい。

そう思いまさぐると

「ちよ?!先輩?!くすぐったい!?!」

身をよじる優月君。

少しずつ整理出来てきた。

人肌ぐらいの温かさにこの感触。

くすぐったる姿にこの距離感、まさか私…

「膝枕されてる?」

そう、噂に聞く男の子憧れのシチュエーションである膝枕をされているのだ。

恐る恐る尋ねると

「ええ、してますよ?だって代わりになりそうなもの無いんですもん」

あつさりと言う優月君。

その事を理解すると、一気に羞恥心が込み上げてくる。

「(ご)ご(ご)、ごめんね!?!すぐにどくね!」

慌ててどくと

「べつに気にしなくていいのに」

そう笑われる。

その姿に少しムツとすると、突然の切り出される。

「先輩。どうしてここにいるんですか? あんな事して何がしたいんですか?」

すぐく真剣に聞いてくる。

こつちも真顔で聞き返す。

「お兄ちゃんをやつを興味本位で借りたの。そうしたらこうなった。優月君こそどうし

てここに?」

「俺は、近所の電気屋でやってた抽選会で当たったのでやってみただけです。あとこつ

ちではツキノワでするのでその名前前で呼んでください」

あ、そうなんだ。

「じゃあ、その名前で呼ばせてもらうね。私は本名のままでいいよ…。」

2つ目の質問の答えだけど」

私はここで1度区切った。

改めて覚悟を決める為に

「…私は負けたくないの、この世界に。たとえばモンスターに殺されたとしても私が私らしくいる為に」

そう言い切った。

その言葉に酷く驚いた後、泣きそうな顔をする優月君改めツキノワ君。

「…それじゃあ、ダメだよアスナ先輩。死ぬ為に戦うなんて間違ってる」

ハツキリと言いきられた。

「じゃああなたは どうして戦うの!? どう頑張ったって死ぬのは決まってるの!? 1ヶ月で2000人も死んだのよ!? こんなゲーム、クリア出来るわけないじゃない!」

つい感情的になって言い返す。

「だからですよ」

その表情はとても穏やかで、その目はとても強い光を宿していた。

「人間遅かれ早かれいつか死ぬ。それは変わりません。でもどうやって死ぬかは誰にも分からないんです、だって未来は決まってるじゃないんだから。だから死に方なんて選べないんですよ! 俺たちを選ぶのは生き方だけです! どうやって生きるのか、それしか選べないんです! アスナ先輩だってそうでしょ!? 戦い抜いて死ぬっていう生き方を選んだんです! だったら自分から死に行く戦い方なんて、しないでください!」

何も言い返せなかった。

彼の言葉がとても刺さったからだ。

そうだ、私は戦うという生き方を選んでいったんだ。

その事に全く気づいてなかった。

安全圏内で少しでも休んでる時はある。

本当に死にたいのなら休まないはずだ。

無意識に私は、生きる術を探しに行っていたのだった。

「…先輩、何があったんですか？俺じや頼りないかもですけど話しなら聞けます。どうしてそういう選択を取ってしまったんですか？」

優しく聞いてくるツキノワ君。

「あのね…」

気づいたら、彼にこれまでの事を話していた。

少しでも溜め込んでいたのを、吐き出したかったのだ。

そんな言葉の濁流を、彼は何も言わずただ静かに受け止めてくれていた。

sideツキノワ

「あのクソ姉貴!!」

思わず怒鳴った。

アスナ先輩がビックリしていたので、とりあえず謝っておいた。話を纏めるところだ。

ログイン直後姉と奇跡的に合流できた先輩は、それ以降ずっと一緒に行動していたらしい。

そんな中ペネントを狩っている最中に、レアキャラが出たらしく姉はそつちを追いかけた。

無事倒したのか戻ってきた時、ちようどりニアアを放とうとしていた先輩を止めようと大声を出したらしい。

でも間に合わずリニアアが暴発した。

その先には実付きのペネントがいて割ってしまふ。

どうなるかは知つての通り、ペネントの大群が群がってきたのだ。

最初は姉も助けようと必死だったが、トラップに引っかけかりバラバラになってしまった。

それから少ししてパーティを解散させて、行方をくらませたんだそうだ。

恐らくだが何となく姉貴の考えが分かる。

だが、

「あのクソ姉貴め。絶対シバく」

理由が分かるのと理解出来るのは、別問題である。

親友を見捨てるとか言語道断だ。

そんな事を考えてるとメッセが届く。

相手は意外な人物だった。

「クライン?」

疑問に思いながら開くと

『よう、元氣してるか? こっちは何とか形にはなってきたぜ。突然連絡をよこしてきたことに驚いてるだろうが、知っておいて欲しい事があつてな。お前の姉貴の件だ。お前の姉と思いきプレイヤーと会った。今日のボス攻略会議に出るそうだ。俺たちはレベルが足りねえから無理だが、お前達ならきつと大丈夫だろ。もし出るなら探してみろ。会えるといいな! クライン』

ちようどいい、まさに渡りに船つてやつだなこれは。

クラインにお礼のメールを送ると先輩に聞いた。

「アスナ先輩、その命を戦いに使うなら強敵に挑みませんか? 今日の午後4時、ツールバーナの噴水広場で第1層ボス攻略会議があります。一緒に行きませんか?」

「…わかった。私も行く」

そう強い返事が返ってきた。

そのまま俺たちは、街まで色んな話をしながら歩いて帰った。

outside

「はい！注目！少し遅れたけど会議を始めます！俺の名は「ディアベル」！職業は気分的にナイトやつてます！」

街に帰ったあと、先に帰って物資の補給をしていたキリトとツキノワ達は合流し、お互いに自己紹介をした後、この会議に参加していた。

その主催であるディアベルは、掴みはバツチリといったところだろうか。

茶化すような野次をやりわり窘めつつ、話を進める。

「今日俺たちのパーティがボス部屋を見つけた！ここまで1ヶ月かかった…！だが！はじまりの街にいる人達に希望を届けなくちゃいけない！このゲームは攻略できるんだ！その事を伝えなくちゃいけない！それが俺たちの役目だ！そう思うだろみんな！」

賛同する声がたくさん上がる。

ツキノワはそこまで考えてなかったが、だからこそすごい人だと尊敬していた。

そんな彼の気持ちを

「ちよお、待たんかい!!」

ダミ声の関西弁が冷めさせた。

「わいはキバオウつてもんや。こんなかに、詫びいれんとあかん連中がおるやろ！」



「詫びを入れないといけない連中というのは？」

ディアベルが静かに尋ねると鼻息荒く

「ベータテスターどもに決まっとるやろ！」

それまで、乱入者にざわついていた広場の中にいた全員が黙り込んだ。

そんな中ふてぶてしく

「こん中にもおるはずや！こんクソゲーが始まった日、ビギナー見捨てて、ウマイ狩場やらボロいクエストを独占したクズどもが！そいつらの貯め込んだ金とアイテムだして土下座せえ！そうしてもらわな背中を預けれんし預かれへん！」

いや、ほんと何言ってるんだあいつ？

何様なのあいつ？

ツキノワは心底呆れながらそう思っていたが、キリトの方はそうは言ってられなかったらしい。

顔色は青く少し震えていた。

それを見たツキノワは

「異議あり！」

堂々と宣言した。

side???

キバオウの声が頭の中で木霊する。

違うと言いたかった。

でも言い返せなかった。

吊るし上げられるが怖かった。

自分の罪を言及されるのが怖かった。

結局私はただの臆病者だ。

そう思つて俯いたその時

「異議あり！」

凜とした声が聞こえた。

その声が聞こえた時、さつきまでの恐怖は消えていた。

正確には驚愕に塗り替えられた、という方が正解だろう。

だつてその声を聞いたのは1ヶ月ぶりだつた。

その声は、聞く事が出来ないかもしれないと思つていた声だったから。

だから顔を上げて声の主を確認した時、私は震える声で呟っていた。

「優月……？」

その声は本人には届いていなかった。

sideツキノワ

「異議あり！」

思つたより響いたからか、すごい注目を浴びた。

まあ、いいか。

「ツキノワ（君）!?!」

キリトとアスナ先輩が、小声で驚くという器用な事していたが無視して、階段を降りてキバオウに向き合う。

「何が異議ありなんや！言うてみい！」

食つてかかるキバオウを鼻で笑い飛ばす。

「俺はツキノワだ。聞くがキバオウ、お前の言い分だとベータテスターを弱体化させると言っているようなものだが、もしそのせいでベータテスターが死んだ時、お前はそいつの命に対して責任を取れるのか？」

「そ、それは……」

たじろぐキバオウ。

呆れた。

「人には責任を取れと言いながら、自分は取れない。随分と都合がいいんだな」

黙り込むキバオウに対し、さらに畳み掛ける。

「大体、ベータテスターが自分の命を優先して何が悪い？彼らだって人間だ。お前だつ

て自分の命は大事だろ、それと一緒にだ。ただ1ヶ月テスターとしてプレイしただけで、わざわざ1万人を導かなければいけない義務はない」

そうだ、こいつは勘違いしてる。

彼らはただの人間だ。

神様じゃないんだ。

出来ることに限界はある。

それを無視して、自分の都合だけを押し付けるなんて無茶苦茶にも程がある。

そう言い切ると、

「俺からも発言いいか」

バリトンボイスが響いた。

正体は190ぐらい黒人だ。

彼は小さい本を出した。

あれは確か、

「俺はエギルだ。キバオウさん、ツキノワ。この本を知ってるな？これは各町や村の道具屋で無料配布されていた。疑問に思わないか、情報が早すぎると」

そう、情報屋がまとめた攻略本だ。

キリトの情報との擦り合わせに使っていた。

「もろたで。それがなんや!?!」

少しビビりながら返すキバオウ。

「これを作っているのは、ベータテスター以外にありえない。いいか情報はあつたんだ! 多くのプレイヤーが死んだのは、このゲームを他のゲームと同じように扱ってしまつたからだと俺は思う。俺はそれを踏まえてどうやっていくのか、それを議論する場と思つてたんだがな」

「キバオウさん、確かに俺もテスターに思うところはあつた。だが今は全員一致して戦う時だと俺は思う。もしそれが出来ないならすまないが帰つてくれ」4  
そうディアベルが言うと、荒く鼻息をするとそのまま席に戻つた。

俺達も席に戻ると

「ツキノワ(君)?」

般若が2人いた。

みつちり説教されました。

そのまま会議が進み俺たちは、取り巻き部隊のサポート役を仰せつかった。

そして会議終了後、俺はある人を呼び出した。

side???

ピコン! メールが来た。

誰からだろう。

そう開きメールを開くと

「!?優月!」

慌てて中身を確認する。

そこには

『今夜9時、場所はここ』

だけ書かれていた。

恐らくアスナの事だろう。

何となくだけどそんな気がする。

そうして午後9時、私は舞台の上に座り込んでいた。

月も隠れ、真っ暗の中、突然声が響いた。

「ちゃんと来たんだ、チキンのくせに」

侮蔑に満ちた声。

声のした方を向くと誰かが降りていていた。

「…久しぶりね。優月」

そうして雲が切れ月明かりが優月の顔を照らす。

その顔は怒っているような泣きそうな顔していた。

「…久しぶり、深澄。随分探した。で、なんでアスナ先輩を見捨てたの?」  
やっぱりか。

でも2つほど確認したい。

「何故アスナの事を知ってるの?後どうしてここにいるの?」

「近所の電気屋でやってた抽選で当たった。アスナ先輩の事は本人から聞いた」

この場に居る経緯はわかった。

でも待って。

今なんて言った?本人から聞いた?

「アスナは…明日奈は生きてるの!?!」

「そんなの後で直接確認しなよ」

切り捨ててる優月。

いやツキノワ。

「それより俺はこつちが用事」

そうして何かを弄る。

そうした時自分のシステム画面にこう映し出された。

『決闘<sup>デュエル</sup>が申請されました』

「…本気?」

「どうせ口で言ってもやらないじゃん。だから決闘デュエルで決めよう。俺が勝ったら俺の言う事を聞いてもらう。ミトが勝ったら好きにしていよいよ」

あの目は本気だ。

何を言っても止まらない。

昔からそうだ、あの子はあまり自分から意見を言う事はない。

その代わりに1度言い出したら止まらないのだ。

だから私に出来るのは

「…分かった」

決闘デュエルスタイルを初撃決着モードにする。

そうするとカウントが始まる。

お互い武器をかまえ、静かに睨み合う。

ツキノワの武器は曲刀だ。

使い込んだしっかり強化された武器だ。

そしてブザーがなった瞬間、お互い飛び出した。

後に出版される【SAO記録全集デュエル】にはこう書かれる。

——SAO史上一番初めの決闘デュエルは何の変哲もない、ただの姉弟喧嘩だった。



## 7話

outside

キン、キン、キン、ガキン！

夜のツールバーナの噴水広場、そこから剣戟の音が聞こえていた。

対峙するのは一組の男女。

お互い紫色の髪と赤い目をしていた。

顔立ちも似ており、兄妹もしくは姉弟だと想像がつく。

そんな2人が何をやっているかと言うと

「この！バカ姉貴！」

「うっさい！アホ弟！」

姉弟喧嘩である。

姉のミトは鎌で力強く薙ぎ払い、弟のツキノワは曲刀を軽やかに切りつけていた。

姉の鎌を刃で滑らせていなしながらカウンターを入れるツキノワに対し、弟の連撃を全て防ぎ切り体勢を崩させた後、強力な一撃を叩き込む。

そんな攻防を繰り返す事10分、2人は仕切り直しを図るため、同時に距離をとった。

「ねえ、なんで決闘デュエルなんてやろうとしたの？」

正直な話、ミトとしては1ヶ月ぶりの再会なのだ。

もつと感動的なものになると思っていた。

そんな事を言える立場ではないがそう考えていた。だが、現実にはこうなってしまった。

そんなツキノワの答えは

「今のミトが1番嫌だろうやり方を選んだ」

ツキノワは、嫌がらせをやる時は徹底的にやる性格だ。

確かにこんな事、実の姉弟でやるべきことでは無い。

そう思うが

「やりたくないのはあなたもでしょ？」

それはツキノワだって一緒だ。

そう見透かすと、歯ぎしりしながら斬りかかってくる。

「……うるさい！ だいたい何で、アスナ先輩を見捨てたんだ!? 一番の親友だったろうが!!」

その速さはミトには辛うじて見える程度でしかなく、ガードが間に合わず、クリーンヒットこそしなかったがまともに受けてしまう。

「それはっ!?!」

そのまま連撃に持ち込まれ防戦一方になるミト。

必死に鎌で応戦するも先程の動きは無くなっており、少しずつツキノワの攻撃が通るようになる。

「どうせ！私が守るだとか何とか言っただろ!?!自分がベータテスターだから先輩！人なら守れるって思っただろ!?!」

そう言いながらさらに切り込む。

「ええ、そうよ！その通りよ！現に私は、私たちはあの時まで上手くやってた！でも出来なかった！出来なかったのよ!」

そんな叫びを上げながら、強引に振り払ってツキノワを吹き飛ばす。

そしてそのまま切り込む。

「深澄がレアアイテムなんて欲をかけたからだろ!?!何であんな状況でそんなの狙った!?! どうして先輩の傍から離れた!?!」

咄嗟に躲しながらミトを蹴り飛ばす。

その隙をついて正面からソードスキル「リーパー」を放つ。

「あのレアキャラは『ウインドフルーレ』っていう細剣のレアアイテムをドロップするのよ!それ喜んで欲しかった!もつと力をつけて欲しかったのよ!」

負けじとソードスキルで対抗しお互い鏢迫り合う。

STRではミトの方が上なため自然とミトが優勢になっていった。

「ばっかやろう!!それで目を離して危険な目に合わせてたら意味ねえだろ!!じゃあ、何でパーティを解散したんだよ!」

ツキノワは不利になってきた鏢迫り合いを止めるため、鎌を滑らせそのまま全力で剣を振り下ろした。

ガードは間に合ったものの、体勢が不十分で倒れ込んでしまう。

そんなミトの喉元に、ツキノワは切っ先を突きつけ上から睨みつける。

「俺が一番聞きたかったのはその理由だよ。何でパーティを解散したの?」

さっきまでの激しさはなく、今はただ静かに聞いてくる。

そんな弟の反応にミトも静かに答える。

「…私は約束したの、アスナを守るって。でも出来なかった。アスナのHPがゼロになるのを見るのが怖かったの。だから逃げた。逃げて逃げて、今でもずっと逃げ続けているの」

その声は震えており、ポタポタと涙がこぼれていた。

「…だと思つたよ。何やかんやで深澄は臆病だから誰かに突き放されるのが怖い。でも自分のせいで傷つけるのも怖い、だから友達は作らない。だから明日奈先輩っていう友

達ができた時は驚いたよ」

その時の事を懐かしむように話すツキノワ。

本当に驚いた。

家に姉の友達が来るなんて何年ぶりかと思い、思わず脅迫されてないか聞いたほどだ。もちろん折檻された。

「行動には責任が伴う。その事を忘れないで」：母さんがよく言ってたよね。ねえ深澄、もう逃げないで。先輩にあつて謝ろう？俺も一緒に謝るから」

「無理…無理だよー今さらどんな顔して会えばいいの!?!明日奈に突き放されたら私どうすればいいの!?!」

泣きじやくりながらそう言うミトに対し

「…だつて明日奈先輩。あとは頼みます」

「…え?」

ミトが顔をあげた瞬間、何かが駆け寄り強く抱きしめていた。

「ミト…ミト!」

sideアスナ

2人の喧嘩をずっと見てたし、聞いていた。

そしてミトの本心を聞いた時、我慢できず抱きしめていた。

「どうして…アスナが…生きて…？」

「うん、何とか生きてたんだよ…。ごめんねミト」

「何で…何でアスナが…謝るの？謝るのは「だって1人にしたもの」!？」

ミトの言葉を遮った。分かったたの。

本当はミトが臆病なんだって。

そしてとても優しい人だって。

「ミトが苦しんでるのに連絡できなかつた。私もミトに突き放されるのが怖くて…」

「アスナ…アスナ！」

ミトからも強く抱きしめ返される。

「ごめんね！私こそ本当にごめん！あの時レアモンスターを優先してごめん！明日奈を見捨てて逃げて本当にごめん！何も連絡をよこさなくてごめん！…本当にごめんね！」

「深澄…みすみい！」

「明日奈…あすなあ！」

お互い強く抱きしめ合うと

「うわああああああん!!!」

もうひたすら泣いた。

周りなんて気にせずは大泣きした。

お互いのごめんねが聞こえなくなった時、私たちは仲直りできた、そんな気がした。  
「もう大丈夫？ 2人とも」

泣き終わった頃、ツキノワ君が近づいてきた。

「うん、ありがとうツキノワ君」

「いえ、こつちこそ深澄を許してくれてありがとうございます」

そう言つて頭を下げるツキノワ君。

そんな彼に

「優月」

優しくミトが声をかける。

そして優しく抱きしめた。

「ありがとう。私達のために。そしてごめんね、こんな不甲斐ない姉で」

そんな優しさに当てられたからかポロポロと泣き出し、そのままミトに抱きつく。

「俺… 2人が仲良しなの… 大好きだから…」

「うん」

「もう… こんな事しないで…」

「うん、約束する」

「バカ姉貴…」

その光景を見てみると、突然妙なモヤモヤと胸が少し痛んだ。  
(あれ? 何だろうこの気持ち)

その事を不思議に思っていると

「アスナ(先輩) どうしたの(んですか)?」

同時に聞かれる。

「何でもない、大丈夫だよ」

そう返すと

「そう、明日も早いし二人とも早く帰りましょう?」

そうミトが言う。

「そうだね、早く風呂はいつて寝よ」

そうそうお風呂入って寝ないと…ちよつと待つて?

「今なんて言った?」

今度は私とミトが被る。

「え? 風呂はいつて寝よだけど」

聞き間違えではないらしく

「風呂ってどういう事!?!」



思わず聞き返す。

「俺とキリトの拠点は農家の2階なんだけど、そこに風呂付いてんの」

「…お風呂かして!!」

「お、おう了解」

そして私たちは彼の拠点に向かいお風呂を入れることにした。

outside

初の姉弟喧嘩からの仲直りをした次の日、ツキノワ達はボス部屋への道のりを歩いていた。

「確認するぞ。取り巻きの【ルイン・コボルト・センチネル】はフルプレートで、ポールアックスを持つてる」

「ああ、だから俺かキリトがパライして」

「私が喉元を貫くのよね」

3人で確認をしていると

「おい、お前らはわいらの取りこぼしを相手するんやで。そこを忘れんなや」  
キバオウが吐き捨ててくる。

それに対し

「だったらしつかり働いてくれ。その方が楽できる」

ツキノワは嫌味たっぷり返す。

キバオウは睨んでくるが、何も言わず仲間の方へ帰っていく。

「…何あれ」

昨日ミトから貰ったウインドフルーレの柄を撫でながら、不機嫌さMAXで呟くアスナ。

「調子乗るなってことじゃないかな」

苦笑いしながら返すキリト。

「気にするだけ無駄。俺たちのペースでやりましょう」

全く気にしないツキノワ。

それぞれバラバラの反応をしながらそのまま進んでいく。

「みんな、俺から言う事は1つだけだ…勝とうぜ!!」

「[[[[[[おうー]]]]]]」

全員の心が1つになっている。

ディアベルが扉を開ける。

そして全員がボス部屋になだれ込んだ瞬間、突然の部屋が明るくなりボスの全容が見える。

鍛えられた体、凶悪な牙、圧倒的な存在感。

手には斧と盾。

迷宮区にいるモンスター達の王。

その名は「イルファング・ザ・コボルトロード」。

そいつの雄叫びに恐れるプレイヤー達に対しディアベルが

「戦闘用意！」

つよく呼びかけ全員が気を引き締め直す。

「全員！突撃！」

第1層ボス攻略作戦、運命の初戦が始まった。

## 8話

sideミト

「スイツチー！」

そう叫びながら、前衛と入れ替わり鎌で一撃を叩き込む。

仰け反った隙に仲間と入れ替わる。

下がりながら後衛の方をチラリと見る。

そこには可愛い弟である優月改めツキノワと、親友であるアスナがいる。

ボスに集中すべきだと分かっているが、やはり気になっていると

「後衛が気になるのか？」

バリトンボイスが近くから聞こえる。

振り返ると、B隊リーダーのエギルがいた。

「ええ、弟と親友がいるから」

そう答えながらも、やっぱりチラリと見てしまう。

「ああ、あの時の少年か。確かによく似てるな」

顎を撫でながらそつちを見るエギル。

戦いぶりを見ている限り問題は無さそうだが。

「あの感じだと問題は無さそうだが、やっぱり気になるものか」

「ええ、どうしてもね」

そう、心配でならない。

ただそれだけだ。

「なら、さっさと終わらせて安心させないとな！」

「ええ！そうね！」

気合いを入れ直す。

そうしていると

「攻撃来るぞ！B隊！援護を！C隊！攻撃後A隊とスイッチ！D・E・F隊！センチネルを近づけさせるな！」

ディアベルから鋭い指示が飛ぶ。

「分かっとなるで！」

「了解！」

それぞれから返事が返ってくるのを聞き流しながら、鎌を強く握り直す。

そしてB隊がしつかり防ぎきった後

「スイッチ！」

その声で踏み込み

「はぁあ!!」

気合いを込めて振りかぶる。

少しでも早く終わらせるために。

2人を守るために私は鎌を振るう。

sideキリト

「攻撃来るぞ！B隊！援護を！C隊！攻撃後A隊とスイッチ！D・E・F隊！センチネルを近づけさせるな！」

ディアベルから鋭い指示が飛ぶ。その声に俺は

「了解！」

返事をしてから

「ツキノワ！アスナー！行くぞ！」

パーティメンバーに声をかける。

「了解！」

力強い返事が返って来てそのまま【ルイン・コボルト・センチネル】に挑む。

最初に挑みかかったのはツキノワだ。

ツキノワは一気に加速すると、そのまま間合いに踏み込む。

センチネルがポールアックスを構えたが、構えきるより速く間合いに入り込まれ一瞬動きが固まる。

すかさずその隙を突き、ポールアックスをすくい上げるようにパリイする。

そして

「スイツチー！」

その掛け声とともに下がると、そこに今度はアスナが踏み込む。

その速度を一切落とさずそのまま

「ハアアー！」

気合いとともに「リニアア」を打ち込む。

正確無比なその一撃は、センチネルの弱点を貫き一発で体力の7割程削る。

そして

「スイツチー！」

その掛け声とともに下がると、またツキノワが前に出ると

「シッ！」

縦にセンチネルを両断した。

その様子を見届けると

「ナイスです。アスナ先輩」

「そっちこそナイススキル！ツキノワ君」

お互いの剣を軽くぶつけて健闘を称えあっていた。

その様子を見ていたキリトは

（アスナも凄いが、やはりツキノワも凄い！）

純粹に2人の実力に驚いていた。

まだデスゲーム宣言の前、ゲーム開始直後から一緒にいてキリトが思っていたのは、彼は決して才能に溢れる人物ではないという事だ。

最初、初めてでソードスキルを成功させた時は素質があるかと思ったが、あの時は偶然だったらしく、これまで一緒にやってきて最初の方はソードスキルが発動しない時もあるたまにあった。

そんなある日、夜な夜な出ていくツキノワを尾行してみたのだが、そこで彼はひたすら剣を振るっていた。

ソードスキルの構えから通常攻撃の精度まで、ひたすら反復練習していたのだ。

ひたすら振るい、また同じ動作を繰り返し返す。

それを続けていると突然動きが変わる。

防御したり躲したり、フェイントを入れたり追撃したり、色んな動きを加えだしていた。いわゆるイメージトレーニングを始めていたのだ。



俺はそんな彼の努力を知っている。  
だから強い。

圧倒的努力に裏付けされた叩き上げの剣士、それがツキノワだ。  
一方のアスナは恐らく対極的なタイプだろう。

彼女もかなりの手練だ。

既に先程のリニアアの剣先が、見えない程の速さ。

流石に1ヶ月であそこまで努力だけというのは、無理があるだろう。

だからこそその才能、つまり彼女は天才肌なのだろう。

才能に驕らず鍛えてきた剣士、それがアスナだ。

そんな事を考えてると次のセンチネルが出てくる。

「ツキノワ！行くぞ！」

俺はツキノワを呼ぶ。

「ああ！行くぜ！」

威勢のいい返事を聞きながら、俺はポールアックスを弾き飛ばし

「スイッチ！」

兄弟分のツキノワを呼ぶ。

「フッ！」

ツキノワが連撃で畳み掛けHPを削りきる。

そんな様子を見届けてから

「GJツキノワ！」

拳を突き出す。

「ナイスアシスト！キリト」

俺達は拳をぶつけあった。

「二人とも！次来たわよ！」

「ツキノワは休んでろ！俺が出る！」

そう言つてアスナの元へ駆けつける。

そこでアスナがレイピアで弱点を突き、態勢を崩させた。

「スイッチ！」

アスナは1歩下がりで道を譲ると

「おお！」

俺は全力のソードスキルで鎧ごと切り裂いた。

outside

ディアベルの的確な指示と全体の士気の良さもあつて、ボス戦は順調に進んでいた。的確なディアベルの指示と全体の士気。

センチネルに対する対応の早さも良かった。

ほとんどツキノワ達3人で対応していたのだが、それはともかく順調だったのだ…あの時までは。

それはコボルトロードのHPバーをラスト1本まで削った時に起きた。

「武器が変わるぞ！パターンの変更に気をつける！C隊援護を！タゲは俺がとる！」

ディアベルの指示に思わず全員がボスを見る。

その様子を見ていたアスナはあることに気づいた。

「ねえ、タルワールってイスラム圏の曲がった剣よね？」

突然そんなことを聞いてくるアスナに

「そうだけど？」

不思議そうに返すキリト。

そんな話を聞いていたツキノワが、突然叫んだ。

「待て、ディアベル！武器が違う！」

その言葉に全員が武器を見る。

そしてその正体に気づいたのはキリトだった。

「ダメだ！全員後ろに飛べー!!」

その声はボスのソードスキルの音にかき消されてしまい、前衛の半分近くがスタン状

態になってしまった。

「キリト！あれはなんだ!？」

「刀スキルだ！10層のモンスターが使ってたんだ！」

その事実には驚愕するツキノワとアスナ。

「10層ですって!？」

「どんな初見殺しだよ!？」

まずボスが目をつけたのは、リーダーのディアベルだった。

当然ディアベルもスタンが入っており動けない。

「クソ！」

助けようと動き出すツキノワ達だか、センチネルが邪魔をする。

「「邪魔だ（よ）!!」「」

3人は一気に瞬殺するも、その一瞬がディアベルの明暗を分けてしまった。

打ち上げられた後、さらに3連撃を受けてしまい吹き飛ばされる。

「ディアベル！」

慌てて駆けつけるキリトだが間に合わなかった。

そんなキリトの手を握りながらディアベルは

「頼む…ボスを…倒して…く…れ…」

最後の言葉を残し死んだ。

sideツキノワ

「う、うわああああああ!!!」

ディアベルが死んだという事実がレイドを恐慌状態にさせてしまう。

更に畳み掛けるように6体沸くセンチネル。

「何で!?!3体までじゃないのかよ!?!」

誰もが不測の事態に混乱する中、キリトは静かに立ち上がると、強く剣を握りボスを睨んでいた。

そんなキリトの隣に立つと

「俺も行くぞ。キリト」

強く宣言した。

そして反対側には

「私たちはパーティメンバーでしょ。勝手はさせないわよ」

アスナ先輩がたった。

そんな俺たちを見るとキリトは

「よしー行くぞー!」

と気合を入れて飛び出した。

俺たちも並走していると、ミトがセンチネルに囲まれてるのが目に入る。

そちらに行こうとすると

「ツキノワ君！私が行くわ！」

アスナ先輩がこっちを見ていた。

「わかった！ミトを頼みます！」

「アスナ！あつちは任せました！」

それぞれエールを送る。

「ええ！任せて！そっちは頼んだわ！」

そのままミトの方へと走っていく先輩を見届けると

「手前はセンチネルと同じだ！行くぞ！兄弟！」

「ああ、勝つぞ！兄弟！」

こうして俺たち二人だけのボス戦が始まった。

sideミト

辛うじて躲しスタンを回避した私は、突如大量に湧き出したセンチネルの対応に追われていた。

「数が多いすぎる！対応しきれない！」

そう言いながら目の前のセンチネルを、屠ると次のセンチネルに狙いをつけようとする

るところを狙う気配がした。

(避けきれない!)

そう思い目を強く瞑った途端

「はああ!」

強い声と速いリニアーが私を救った。

「アスナ!」

そのままアスナはわたしと背中を合わせると

「ミト、背中には任せたわ」

そうハツキリと言いながら、赤いフード付きのマントを脱ぎ捨てた。

その姿は見慣れている私ですら、釘付けにさせるほど美しく、凛々しかった。

アスナからの信頼の言葉に、おもわず泣きそうになるが踏みとどまり

「今度こそ守ってみせる!」

そして鎌を構え直す。

不思議ともう負けないって気持ち湧いてきて、戦う勇気をくれた。

「行くよ!」

同時に地面を蹴って動き出した。

私がボールアックスを弾き飛ばし

「スイッチー！」

入れ替わると

「はああ！」

アスナが的確に弱点を突き消滅させる。

次にアスナが弱点を突き体勢を崩させる。

「スイッチー！」

その隙に入れ替わると

「やああ！」

私が鎌で鎧ごと切り裂く。

その息のあったコンビネーションで、次々にセンチネルを殲滅させていく私達。

後2体っていうその時

「キリト!？」

弟の焦りに満ちた声が聞こえてきた。

そつちを向くと、切られたのだろうか倒れて動けないキリトと、ボスの猛攻を1人で捌くツキノワの姿があった。

「ツキノワ（君）！キリト（君）！」

私たちは速攻で2体を倒すと、すぐに応援に向かった。



## Outside

「手順はセンチネルと同じだ！行くぞ！兄弟！」

「ああ、勝つぞ！兄弟！」

まず切り込んだのはキリトだった。

ボスのソードスキルを、同じくソードスキルでパリイする。

「スイッチー！」

すぐにツキノワに呼びかける。

その声に応じ、一気に懐に入り込みソードスキルを発動した瞬間、ボスが体勢を立て直し斬りかかってきた。

「!? ツキノワ!!」

キリトはその立て直しの速さに最悪を想像し声を張り上げる。

ツキノワも想定以上に立て直しが速いことに驚いたものの、ソードスキルのモーシヨンを残したまま腰を落とした。

（あ、あんな体勢でソードスキルが保てるのか!?!）

キリトが驚いたのはその体幹だった。

ソードスキルは規定のモーシヨンをとる事で発動する。正しいモーシヨンをとらないと発動しないのだ。

その判定は意外にシビアで、初日にクラインが苦戦したのはこのシビアさ故である。だが逆にソードスキルのモーションをちゃんととっていけば、体勢自体はさほど関係ないのだ。

そう例えば、極端に腰を落として姿勢を低くしても、ちゃんとモーションさえ合っていれば発動できるのだ。

「オォー！」

そのままスキルの動きに合わせながら、重心を上を持っていく。

その勢いをブーストし強力な一撃を喰らわせた。

「キリト！次行くぞー！」

ツキノワの鋭い声にハツとしたキリトは直ぐに

「わかった行くぞー！」

気合いを入れ直し応戦する。

基本的に交互にパリイと攻撃こなすことで、ギリギリの均衡を保っていたが、数分後、ついに均衡が崩れてしまう。

「ハァー！」

キリトがパリイしようとしたソードスキルが、突然軌道を変えた。

その変化にキリトはついていけず、相手の攻撃が直撃してしまったのだ。

「ガアア!？」

「キリト!？」

吹き飛ばされたキリトに駆け寄ろうとするも、今度はこっちに攻撃してくるボスの刀をギリギリ躲す。

「クツソ！」

悪態をつきながら負けじと切り返す。

だが技後硬直のあるソードスキルが使えない今、自分の剣技だけでやるしかない。だからパリイではなく

「……そ……」

しつかり見切つて躲すことにした。

剣の動きだけでなく、踏み込みの位置、踏み込んだ足の向き、相手の体勢、それらなどからどの位置から攻撃が来るかをしつかり見極め、躲し、いなす。

その隙に

「ハア！」

通常攻撃でしつかりカウンターを決める。

その無駄のない軽やかでしなやかな動きが、後にプレイヤー達から呼ばれる【舞闘家】ダンスサーの2つ名の由来となることを、彼は知らなかった。

いつまで戦っていたか分からないが、そうは長くなかっただろう。

「あっ」

何とも間の抜けた声だった。

それは極限の集中状態だったからか、気づかない間にスタミナが限界を迎えており、足がもつれたのだ。

そして避けきれなかったソードスキルが迫っていた。

(ああ、ごめん3人とも)

ツキノワは死を覚悟し目をつぶる。

その時、ガキーンーン!!!と、大きい衝撃音が聞こえた。

思わず目を開けると

「アスナ！スイツチ！」

それぞれの武器を振り切った体勢のキリトとミト、そして

「ハアアアア!!」

リニアアアでボスの腹を貫くアスナの姿があった。

「っ！3人とも！」

ツキノワはその事に驚くと

「1人で任せてすまない！一旦下がれ！」

「よく頑張ったわねツキノワ！あとは任せて！」

「ツキノワ君！早く回復して！」

それぞれがエールを送りボスに斬り掛かる。

そんな3人の後ろから

「俺らも続くぞ！これ以上ダメージディーターにタンクやらせるな!!」

回復を終えたB隊がなだれ込む。

「よくやったぞツキノワ！ここからは俺達も戦うぜ！」

そんな頼もしい声を聞きツキノワは笑う。

「3人とも突っ込んでいっちゃうから頼む！」

と言うと

「「お前（あんた）（あなた）に言われたくない!!」」

戦ってるはずの3人から怒られた。

「ハハ！面白い奴らだ！行くぞ！お前ら!!」

「応!!」

そうしてB隊が参戦した事でこちら側が少しづつ有利になっていく。

「囲むと範囲攻撃来るぞ！」

キリトが戦いながら声を張る。

「ソードスキルはしつかりガードすれば問題ないわ！タイミングは私が教える！」

ミトも経験を活かした指示を出す。

「皆さん！回復終え次第参戦してください！キバオウさん！センチネルの足止めをお願いします！」

アスナが凜とした声で戦場全体に指示を出す。

そんな光景を

「早く！早く！」

HPバーを睨みながら見てるツキノワ。

そんな時

「馬鹿野郎！早くそこから移動しろ！」

プレイヤーの1人がもたつきうっかり囲まれてしまった。

すぐにプレイヤーのほとんどが避けたが、一部のプレイヤーが置いていかれてしまい、スタンになった。

そんなプレイヤーに追い討ちをかけようと、高く飛び上がるボス。

「ミトおとおお!!!」

突然ツキノワがミトに向かって走り出す。

何がしたいか悟ったミトは

「正気なの!?!」

と叫び返す。

「やるしかない! やって!」

負けじと叫び返すツキノワ。

「…ああ! もう! やるわよ!」

そう言つて鎌を低く構える。

そしてボスを睨みつけているミトとツキノワを見て、キリトとアスナも悟った。

「正気なの!?!」

その声を無視して、ソードスキルのモーションをとりながら鎌に乗るツキノワ。

「行つけええええ!」

そんなツキノワを、全力で空中に投げ飛ばすミト。

そのまま空中でボスのソードスキルを、ツキノワはソードスキルで迎え撃った。

「おおおおお!!」

地上でやったらまず押し負けたであろう鏝迫り合いは、ミトのパワーとシステムのモーションアシストの後押しもあり、パリンと音をたててツキノワの武器が壊れてしまったものの、ボスは武器を手放し体勢を崩したまま地面に落ちてきた。

「ファンブル転倒だ! 今だ! 畳み掛けろ!」

「このチャンスを逃さないで！全力で叩いて！」

「ウオオオオオオオ!!」

キリトとミトの指示の元、全員が全力でソードスキルを叩き込む。

それでも完全には削りきれず、ボスは起き上がり武器を拾いプレイヤーを蹴散らしていく。

「ツキノワ！ミト！アスナ！トドメ一緒に頼む！」

「了解！」

4人は一気に加速する。

まずツキノワはナイフを取り出し投擲スキル「シングルシュート」を放つ。

「オラア！」

しっかりと勢いを乗せたその一撃はボスの片目を潰した。その隙にアスナが懐に入り込み

「ハアアアアア！」

全力の「リニア」を放つ。

吹き飛ばされたボスにさらにミトが鎌で追撃する。

「やあああああ！」

4人の中で1番攻撃力に長けたミトの一撃にも耐えたボスにさらにキリトが斬り掛



かる。

「おおおおおおおおおお!!!」

その2連撃ソードスキル【バーチカル・アーク】でV字に切るとそのままボスのHPをゼロにし、消滅させた。

誰もが何も言わなかった。

この後は何かあるのか?そういう不安があつたが、空中にでるCongratulation!!の文字とリザルト画面を見た瞬間

「や……や……やったあああああああああああああああ!!!」

全員が歓喜の雄叫びをあげた。

初のフロアボスとの戦いはプレイヤーたちの勝利に終わった。

## 9話

outside

「はあ…はあ…」

周りが歓喜する中キリトは肩で息をしながら座り込み、リザルト画面を見ていた。

その画面にはLAST ATTACK BONUSと書かれておりその下には「コー  
ト・オブ・ミッドナイト」と書かれていた。それを確認していると

「ナイスキル！キリト！お疲れ！」

後ろからツキノワが肩を組んで拳を突き出してきた。

「…ああ、お疲れツキノワ。ツキノワも凄い戦いぶりだったぞ」

お互いの健闘を称え合い拳をぶつける。

「ツキノワ君！キリト君！お疲れ様！」

「2人ともお疲れ。大丈夫かしら？」

「アスナ先輩、お疲れ様です！ミトもお疲れ！」

「お疲れ2人とも、俺たちは大丈夫だよ。そっちも大丈夫か？」

そこへアスナとミトもやってくる。

4人でそれぞれの心配をしつつも話していると

「いいもん見せてもらったぜ！C o n g r a t u l a t i o n！この勝利はあんたらのもんだ！」

エギルがツキノワとキリトの肩を叩きながら賞賛する。それに礼を言おうとした時

「なんでや!!!」

そんな悲痛な叫び声が響いた。

「何でディアベルはんを見殺しにしたんや!?!」

「…見殺し?」

その目はキリトを睨んでおり、キリトは困惑した。

「そうだろ!?!だってお前はボスの攻撃パターンを分かってたじゃないか!?!」

その言葉に場の空気が凍りつく。

そして静かにだが動揺が広がっていく。

「確かに…」

「なんでだ?」

それぞれがそんな疑問を口にして、キリトを見ていると

「俺知ってる!」

そんな声が響く。

「こいつは元ベータテスターだ！だからボスのパターンを知ってて隠してたし、美味い狩場やボロいクエストをいっぱい知ってるんだ!!」

耳障りな声でそんな事を言う。

ツキノワはそんな声を聞いて眉間に皺を寄せていると

「でもベータの情報にボス戦前の攻略本に乗ってだろ？ だったら知識量は同じはずだぜ？」

エギルの仲間の一人がキリトを擁護する。

そう、彼らはボス戦が始まる前に新刊が出た攻略本を読み込み、ボス戦の情報を頭に叩き込んでいた。

だからベータ時代の情報は皆知っていたのだ。

「だ、だったらその情報が嘘なんだ！あの鼠がタダで情報を渡すわけないんだ！」  
(ま、まずい…!?)

この時キリトは焦っていた。自分一人ならと思っていたが、アルゴにまで、いや他のベータテスター達にまで被害が及ぶ。

「おい！お前ら！」

「ちよつと！あなた達ねえ！」

「黙って聞いてれば！」

アスナやミトだけでなくエギルまで反論しようとしている。

このままではまずい。

何とかしなくてはと考えいた時、

「はあ……くっだらない」

隣から心底冷めきったツキノワの声が聞こえた。

その声は決して大きくはなかったが、ヒートアップしそうなこの場においては、とても響いた。

sideツキノワ

「はあ……くっだらない」

心の底から呆れ返っていた俺の声は思ったより響いており、みんな黙り込んで俺を見ていた。

「く、くだらないって何だよ！お、お前もこいつの味方か!？」

まだ騒ぐ猿……いや、ブンブンうるさい小バエに対し

「うるせえな、黙れよ虫けら」

冷たく、残酷に睨みつけた。

「っ!？」

その目に恐れ、黙り込んだその男を冷たく見ながら

「おい、俺たちにとつて情報は命だ。だったらその情報を扱う情報屋にとつて、1番大切なものはなんだと思う？」

「し、知るかよそんな事！そんな事なんの関係があるってんだ！」

呆れた、そんな事も分からないのか。

「答えは信頼だよ。どれだけ情報を集めようがそれを買うやつがいなければ成り立たない。それに1層には1ヶ月もいたんだ。もう情報なんて出尽くしてる頃合いだろう。そうなつてくると売れる物が無い。だったら無料でポスの情報を流し俺たちに次の層を開放してもらおう。その方がよっぽど自分の利益にも繋がるし効率的だ。何か反論は？」

そのまま言い切る。

男も何も言えず黙り込む。

当然だ、俺が言ったのは少し考えれば誰でも分かる正論で間違ってる事なんて何も無い。  
い。

ただリーダーを失ったディアベルの仲間たちは冷静さを欠いていた。

「それでもそいつがポスのスキルを知っていた事には変わらないじゃないか!?!そこはどうなんだよ!?!」

と言われる。

それに答えようとした時

「私も元ベータテスターよ」

ミトが突然参戦してきた。

「ミト!?!」

ミトの参戦に驚いていると

「弟が頑張ってるのに見てるだけって訳にはいかないでしょ?」

俺の頭を撫でながらウインクしてくる。

その手を振り払って1歩下がる。

その様子を優しく笑いながら見ていたミトはディアベルの仲間たちと向き合った。

「私はベータ時代第10層まで登ったわ。今回ボスが使ってた刀スキルは、そこで初めて出てきたのよ。ベータ自体のコボルトロードは刀なんて使ってた。私たちが対応できたのは、10層で散々戦ってきたからなの」

自分たちの仲間であるミトの言葉にディアベルの仲間たちも黙り込む。

そんな沈んだ空気を俺は手を叩いてかき消した。

「今回俺たちはベータテストの情報を鵜呑みにしすぎた。その結果ディアベルを死なせた。これで分かったはずだ、俺たちにテスターだのビギナーだの言ってる余裕はない。

全員で力を合わせないとまた誰かが死ぬ。これからはしっかりと協力しあって進んでいくしかないんだ」

「せやな。まだ先は長いんや、今いがみ合つとる場合やなかったわ。ワイが余計な事したせいやな。すまんかった」

そうキバオウが謝罪したところで

「ところで2層には誰が上がる？俺としてはMVPのこいつらがいいと思うんだが」

エギルが俺たちを指さして言い出した。それに対し答えたのはキリトだった。

「元々俺たちから名乗り出る予定だった。主街区までフィールドを歩かないといけないから初見のMOBの相手をしないとイケないしな」

テスターの事を隠す必要が無くなったキリトが遠慮なく言い切った。

俺達も特に反論はなかったためそのまま頷く。

「…そうか、なら頼む。だがその前に」

ディアベルの仲間である「リンド」がミトに向き合う。

「ミトどうするんだ？そのままそいつらと行くのか」

そう、ミトもディアベル達とおなじC隊なのだ。

仲間として確認したかったのだろう。

「…ええ、彼らと一緒に行くわ」



ミトはリンドの目を見ながらハッキリ言いきった。

「…分かった。好きにしろ」

そう言つて去つていくリンド達。

「ほなお前ら、頼むわ」

その後に続くキバオウ達。

そのままどんどんと部屋を後にしていき気づいたら俺たちだけだった。

「…はあ、疲れた」

そう呟いて振り向くと

「「ツ〜キ〜ノ〜ワ〜（く〜ん）!!!」」

「…はい」

鬼が3体程いました。

そのまま正座すると

「お前はバカか！バカなのか！」

「そうよ！あんな喧嘩売るような事して！かなりギリギリだったのよ！」

「もう！昔つからあんたはそうなんだから！お願いだから無茶しないで！」

「はい…善処します…」

滅茶苦茶叱られました。

解せぬ。

「そうだキリト。聞きたいことがあるんだけどちよつと見てもらっていい?」

「なになに:?? SPECIAL BONUS ITEM ? こんなの見た事も聞いた事もないぞ?」

そう表記された内容を確認するとそこには「曲刀:イビルフアング」と書かれていた。「曲刀イビルフアング:知らないな、俺は初めて見た。ミトは?」

「私も初耳だわそんな武器。とりあえずオブジェクト化してみたら?」

そう言われとりあえずやってみたら、とんでもない武器が出てきた。

他の曲刀より一回りは大きく、刃は幅広い。

デザインも過度な装飾はなく武骨というより、ただ何かを切る為の武器というイメージを与える。

何よりその剣は重く、必要STRは俺の現在のSTR値のギリギリ下くらいだ。

俺よりキリト向けの剣だなど思いつつもステータスを確認する。

「うわ、すげえステータスだこれ。ほらキリト見てみるよ」

「どれどれ:!? な、何だこの武器?! 強化可能回数が10回?! しかもこのステータスなら5層までなら全然使えるぞ!」

「はあ!?! 何その性能!?! 見せなさい!?! :うわあ、これちゃんと強化すれば7, 8層位まで行

けるんじゃない？」

キリトとミトが凄じ騒ぐ。

なるほどそんなに凄じのかこの武器。

イビルファング：邪悪な牙か、これからはこいつが俺の相棒か。

そう思いながら刃を軽く叩く。

「これからよろしくな」

そうやってひとしきり騒いでいると

「みんな！早く2層に行かないとー！」

アスナ先輩が俺たちを急かす。

「そうですね。早く行きましょう。2人とも！いつまで騒いでんの!?早く行くぞ！」

そうして2人を急かし次の層の扉を開ける。

その先に広がっていたのは無限に広がる草原だった。

その光景に

「「綺麗……」」

俺たちは全員見蕩れていた。

「…ほら、みんな行くぞ。俺とツキノワが前を見るからミトはアスナと一緒に後ろを警

戒してくれ」

いち早く立ち直ったキリトが隊列を決めると俺達もそのまま主街区を目指して歩き出した。

side アスナ

「ねえミト、ツキノワ君って昔からあんな感じなの？」

私はあの時の事を思い出しながらミトに聞く。

いつも私が見てきた彼は優しくも凛々しく、ちよつとミトに素直じゃない、けど姉想いの男の子だった。

だからあの時のあんな彼は初めて見たし少し怖かった。ミトは私の話を聞くと少し気まずそうに答えてくれた。

「まあ昔からそうよ、あの子は怒ると淡々となるのよ。元々あまり他人に興味を示さない子だし表向きは普装ってたから。よく言えば八方美人って感じかな」

(そうなんだ、じゃあ私と仲良くしてくれるのも…)

と考えていると

「ねえアスナ、初めて家に来た時のこと覚えてる？」

突然ミトがそんな事を聞いてきた。

「? うん、覚えてるよ。ツキノワ君に会ったのもその時だし」

そう、彼と会ったのはその時が初めてで、それ以来の付き合いだ。

「そう、他人に興味を示さないあの子が自分から関わってきたのはあなたが初めてなの、だから…」

そう言つてミトは一步前に出ると私と目を合わせる。

「だからあの子の事を信じてあげて。あの子は、優月は明日奈と仲良くなりたくて、あなたを慕つてるのよ？今まで明日奈に見せてきた優月は全部、優月の本当の気持ちなの」

その言葉に思わず優月君を見る。

キリト君とふざけながらも周囲を警戒いるその背中は大きく、頼もしく感じられた。

「それにしてもそんな事気にするなんて、もしかして明日奈、あなた…」

ニヤニヤしながらこつちを見るミト。

その先の言葉を想像し、顔が赤くなる。

「そ、そういうのじゃないの!?!これは… あれよ!?!もう1人の姉としての心配よ!!そう、心配なの!!」

慌てて取り繕うも未だにニヤケ顔が止まらないミトに対し

「もう!知らない!」

と先を歩く。

「あ、待つてアスナ!?!」

慌てて追いかけるミトをさらに突き放すように走る私、そのまま男子2人も追い抜か

し、

「ほら！街まで競走よ！負けた人は何か奢りね！」

そう言い残し走り出す。

「「アスナ（先輩）！？待って!!」」

慌てて追いかけてくる3人を見て

「アハハハハ!!」

心から笑う。

こんな事になつてるけどそれなりに楽しくなつてきたと思う。

私達の戦いは始まったばかりだ。

でも今だけは楽しもう。

そう晴れ渡った心で思う私なのだった。

## 閑話休題①

side ツキノワ

「ねえ…まだ？」

「ちよつと待って。もう少しよ」

「ツキノワ君。動かないで、じつとしてて！」

どうも、ツキノワです。

突然だが今俺は両サイドを美女2人：具体的には姉のミトとその親友アスナ先輩に挟まれて、髪をいじられている。

本当に何故こうなったかと、ため息をつきながら経緯を思い出す。

数時間前、俺たちは第2層主街区〔ウルバス〕に着いた俺たちは一旦男女で別れ、そのまま先にいい宿をそれぞれ確保してから転移門のアクティベートを行った。

一気に流れ込んでくる人波を避けて宿に戻ると、ミトからすぐにこっちに来るようメッセージが届いた。

キリトに断りを入れてから宿に着くと、突然部屋に連行された。

何事かと驚いていると

「ツキノワ、出掛けるわよ」

ミトが宣言しだした。

「え？俺も？」

聞き返すと

「当たり前じゃない」

呆れられた。

ではなぜ部屋に連行したのかと聞くと

「久しぶりにお揃いにしましよ！」

と言われる。

リアルで出掛ける時とかに、たまにお揃いのコーデで出掛けていた俺たちなのだが、ここでもそれがしたいらしい。

しかし、今の俺たちにそんな服はないので無理だが、どうするのだろうか？

そう思っていると

「ツキノワ君！こっち来て！」

ベットに腰掛けてたアスナ先輩が、ポンポンと隣を叩きながら呼ぶ。

「何ですか？」



呼ばれるままにそちらに向かい座ると

「動かないで！」

と両脇を固め髪を触り出す。

ここまで来てようやく何をお揃いにするのか理解した。

「まさか…俺も2人の髪型にするの？」

2人はクラウンハーフアップという、三つ編みにした髪を後ろでまとめる髪型である。

ミトはそこに上からポニーテールにしているが、俺にはそこまでの髪の長さはない。

「三つ編み出来るほどの長さはないけど？」

「だから普通のハーフアップにするのよ」

即答するミト。

「そもそも何で突然そんな事言い出したらよ」

恥ずかしくてつい、ミトを軽く睨みながら言う

「私がしたくて提案したんだけど…嫌だった？」

反対側のアスナ先輩から、上目遣い+甘えるような声のダブルパンチを受けた俺は、一瞬で心の壁は崩壊した。

「…別に嫌ではないです。恥ずかしいだけなので。…もう好きにして下さい」

これが惚れた弱みというやつか。

そこ、チヨロいとか言うなほつとけ。

「うん！ありがとう！」

キラキラの笑顔に顔が熱くなる。

「あら？ツキノワ、顔真つ赤よ」

ミトにからかわれ

「うっさい！」

つい立ち上がってしまう。

「ああ！ツキノワ君！」

アスナ先輩から怒られた。

「…すみません」

解せぬ。

隠すどころか動くことも出来ない俺は、ずっと姉にニヤニヤされながら髪をいじられることとなった。

「よし！それじゃあ行こう！街探索！」

妙に元気なアスナ先輩とそれを優しく見るミト、そして既に疲れた俺。

「それで？どこから行くんすか？」

アスナに尋ねると

「決まってるじゃない！」

元氣よくノープランと返ってきた。

まあ、そりやそうか。俺もアスナ先輩も初めて来たんだし。

そこはテストターのミトに聞こう。

「ミト？……このオススメは？」

「私も攻略一筋だったからあまり詳しくはないの」

マジかガイド無しかよ。

どうしたもんかと考えてると

「せっかくだし端から全部見ていこうよ！」

まあ、それもありか。

「そうね。知らない街の探索もこのゲームの」

「醍醐味でしょ（だろ）？」

アスナ先輩とハモリながらミトの言葉を遮る。

その事に先輩と目を合わせ、吹き出す。

「アハハハハハ！！」

「もう！2人に揃って私のセリフを取らないでよ！」

「ほら！速く行くよミト!!」

そう言いながら歩き出す俺たち。

「待ちなさい！私を置いていかない！」

慌てて追いかけてくるミト。

そんな騒がしい俺たちの休日が始まった。

「腹が減りました」

美味そうな匂いにつられて腹が鳴る俺。

戦闘して間もない俺達は飯をまだ食べてないので、腹が減っているのだ。

「そうね、まず腹ごしらえからね。こっちにいいNPCレストランがあるわ。こっちよ」

ミトが心当たりがあるのか先導する。

「へへ、何がオススメなの？」

楽しみで俺が聞くと

「この2層は牛がメインなの。だから通称【モーモー天国】。ツキノワが大好きなお肉料

理が多いのよ」

「おお！楽しみ！」

期待値の高い答えが返って来る。

「フフ、そんなに楽しみ？」

隣を歩くアスナ先輩が優しい笑顔で聞いてくる。

「はい！肉料理好きですから！」

「そう、向こうに帰ったら何か作ってあげるね」

「本当に!?楽しみにしてます！」

「あなた達！こつちよ。はぐれないでね」

アスナ先輩と話しているとミトに急かされる。

慌てて追いかける俺たち。

だからこの時、アスナ先輩が顔真っ赤だったのには、気づかなかった。

「さあ着いたわ。こつちよ」

歩いて数分、だいぶ入り組んだ所にあつたその店は外観はとてもオシャレで女性受けが良さそうな印象だった。

「わあ！可愛いお店！」

「でしょ？私も気に入ってたの」

現にミトとアスナ先輩はウキウキであり俺も楽しみだった。

「いらつしやいませ」

お店に入り人数を伝えてそのまま席に着く。

「何にしようかな」

「どれもオススメだけどアスナはこれとか好きそうじゃない？」

ワイワイと楽しそうにメニューを考える2人に対し

「俺は決めた」

速攻で決める俺。

「はや!?!」

それに驚く2人。

「ツキノワがそんな即決なんて珍しいじゃない」

普段外食する時大体家族で一番メニュー決めに時間かかるのが俺だ。

だからミトが珍しいそうに言うとは

「食べたかったのがあったから見つけてすぐそれにした」

そう話しているとアスナ先輩も決めたらしい。

「すみません!」

NPCを呼びそれぞれのメニューを伝えて金を払う。

ミトとアスナ先輩はビーフシチュー、俺はハンバーグセットとご飯大盛りが来た。

それぞれの頼んだ物が来た所で

「いただきます!」

食べだした。

肉汁たっぷりなのハンバーグはジューシーで噛めば噛むほど肉の旨味が広がる。

「うまいー！」

思わず大きい声が出るが咎める人はいない。

2人も自分の食べ物に集中しているのだ。

「うん、やっぱりここは美味しい！」

「美味しい！コクがあつて味にも深みがある！」

それぞれの反応を見せながら舌鼓をうつ俺たち。

そのまま食べ進め

「「」ちそうさまでした！」「」

見事に全員完食した。

「あく食った食った…！」

「美味しかったあ！また来ようよ！」

「ベータ時代より美味しかったかも…さてと、2人とも？デザートは？」

「食べるー！」

まさかデザートまであるとは。

「本当は違うやつがオススメなんだけど、大きいからそれは今度ね。代わりに違うやつを頼むわ」

そう言うミトはNPCを呼び止め、注文を始めた。

「ミルクゼリー3つとブラックコーヒー3つ」

まとめてミトが支払うと

「ミト!?自分の分は払うよ!」

慌てて止めるアスナ先輩。

「せっかくだもの。私が奢るわ」

「でも…」

まだ抵抗があるアスナ先輩だが俺は遠慮しない。

「じゃあ、ゴチになりませう!」

そんな話をしていると注文したやつが来た。

それは真つ白でプルプルなゼリーだった。

「「いただきます」」

商品が来たことで観念したアスナ先輩も素直に食べだした。

「!!うまい!」

牛乳本来の甘みにハチミツだろうか、それが牛乳の匂いと味にいい感じにマッチしている。

そのままコーヒーを流し込むと、コーヒーの苦さとゼリーの甘みが見事に調和されて



いて更に旨味が増した。

女性陣に関しては、最早感想をなく目をキラキラさせながら黙々と食べていた。

「「バ」ちそうさまでした」

手を合わせ大満足した俺たち。

そのままひと息ついた俺たちは次の行動を開始した。

「さて、次は何があるかなつと…」

キョロキョロしていると後ろから

「アスナ？」

とミトの呼び声が聞こえた。

振り払るとアスナ先輩がある店を見ていた。

そこはアクセサリー屋だった。

「じゃあ、次はあそこに行きましようか。行くわよアスナ」

「あ、ミト！ちよつと待ってよ！」

2人して入っていくので俺も続くことにした。

中に入るとオシャレなアクセサリーが所狭しと並んでおり男の俺には少し居づらかった。

適当にブラブラしていると2人がある所で立ち止まっていた。

「2人とも?どうしたの?」

不思議に思い尋ねると

「な、なんでもない!」

と言つて他のものを見に行つた。

2人の様子に首をひねりながらも俺もブラブラしてると、あるものが目に止まつた。

幾つか種類のあるそれを俺は2つほど速攻で買った。

ついでにキリトに買つてやると2人は外にいた。

「買い物は終わった?」

「終わった。お待たせしたみたいでごめん」

「買い物はこういうものでしょ?気にしないですよ?」

「そう言われたので気にしない事にして俺たちはそのまま街に向かつて歩き出した。

「うくん!遊んだね〜!」

「ええ、これで大体街のことは分かつたわね」

2人とも満足したのか楽しそうに話してる。

そんな2人を見てそろそろか思っている

「じゃあ、そろそろ一旦解散しましょうか」

ミトが言い出し

「そうね、また明日から頑張らましょ！」

アスナ先輩が便乗した。

「その前に少し待って」

「ここだと思い俺は2人を呼び止めた。

「なに？」

2人とも立ち止まって聞き返してくる。

「これ。今日の記念に」

そう言ってトレード画面を見せる。

それを見た2人はオブジェクト化する。

それは雫の形をしたネックレスだ。

恐らく何らかの石を雫の形に削ったのだろう。

色は薄ピンクと紫で2人の色をイメージしたものだ。

特に特殊効果はないが記念にと思い、買っておいただ。

「ツキノワ君！ありがとう！大切にするね!!」

「ありがとうツキノワ。大事にするわ」

そう言って笑う2人。

喜んでくれた様で何よりだ。

ほっとしていると目の前にトレード画面が出てきた。

「実は私達もあそこで買ってたのよ」

「良かったら見てみて」

言われるままにオブジェクト化するとそれはリングチェーンだった。指輪には赤色の石がはめ込まれており、シンプルで男らしいデザインだった。

「それはSTR値を上げる効果があるから使ってみて」

「ありがとう2人とも。大事にしますね」

そう言って有難く受け取る。

その時突然アスナ先輩が顔を真っ赤にする。

「どうしたの?」

突然だったのでビックリして聞いたたら

「なんでもない!」

と言って顔をそらされた。何で?

「ハイハイ、明日も早いし解散するよ」

ミトに急かされ解散することにした。

「じゃあ2人とも。また明日」

「ええ、また明日」

「ま、また明日！おやすみツキノワ君！」

そう言つて別れる俺たち。

帰り道あるものをオブジェクト化しながら貰ったものを見る。

「まさか、キリトにやるものの違うやつを選ぶなんてな」

そう、2人がくれたのは俺がキリトに選んだやつの色違いバージョンだったのだ。

キリトのは黒でVIT値を上げるやつだ。

「ま、いつか。とりあえず明日から頑張るか！」

そう言いながら俺は帰路に着いた。

sideミト

我が弟ながらにくい事をする。

そう思いながらずっとニヤけてる目の前の親友を見る。手には貰ったネックレスが

あり、それを大切そうに撫でているのだ。

「はあ…アスナニヤけすぎ」

呆れながら言うのと慌てたように返してくる。

「に、ニヤけてなんかないよ!？」

「ここでは感情がオーバーに演出されるから顔に出っぱなしよ」

「うそ!？」

慌てて顔を触って確認するアスナ。

そして気付いたのか顔を真っ赤にして唸りながら枕に顔を埋める。

優月、あと一押しよ。

頑張りなさい。

そして明日奈、あと一歩よ、自覚しなさい。

そう思いながら私は寝る用意に入る。

「じゃあ、私は寝るわね。おやすみアスナ」

「私も寝る。おやすみミト」

そう言いながら電気を消す。

明日からも頑張ろう。

そう思える充実した1日だった。

## 10話

side ツキノワ

「全くこんな所で何やってんだよあいつは」

昨日の観光から一夜明け、俺はある山を登っていた。

目的は昨日帰ってこなかったキリトを探すためである。フレンドリストから生存確認と場所確認を行った俺は、反応を元にこの山に向かった。

そして登りだして20分ほどしたところでやっと山頂が見えてきたのだ。

「やれやれ…やっと着いたか…って何してんだあいつ」

山頂に着いてすぐにキリトは見つかったが当の本人は馬鹿でかい岩を素手で割ろうとしていた。

訳が分からんがとりあえず呼ぶことにした。

「おい！キリト！何やってんだ連絡もせず！心配したんだぞ！」

「っ!? ツキノワ!? どうしてここに!? てかこっち見んな！」

気づかなかったのだらうすごく驚いてこっちを見たキリトの顔には髭が生えていた。

「…ブハッ!! 何それ!? キリえもんか!!」

思はず大爆笑してしまった。

「だから見るなって言ったんだよ！」

顔を真っ赤にしながら怒るキリトに迫力はなく、むしろシユールさから来る面白さに更に笑えてくる俺。

その時

「…試練を受けに来た者か？」

突然奥に建つてた道場から仙人みたいなじいさんが出てきた。

「試練？何の試練なんだ？」

とキリトに聞き返すと

「…エクストラスキル【体術】のクエストだよ」

「体術!?そんなスキルがあるのか!?!」

この剣の世界にまさか体術なんてスキルがあるとは思わなかった。

「そうだ。その内容がこの岩を割ることなんだ」

「へえ…面白そうだな、いいぜ!受ける!」

「おい!ツキノワ!」

慌ててため止めようとするキリトを無視して話を進める。

「…修行は厳しいぞ?」



「上等、やってやる」

「…そうか…それでは、修行者の証を付けよう」

「…証？」

そう言いながら筆と墨を取り出したじいさんは目にも止まらない速さで俺の顔に何かを書いた。

「それでは我が弟子よ、それは修行が終わるまで取れんぞ。修行が終わるまでこの岩山から出ることは一切禁ずる。試練はこの大岩を割ることじゃ、健闘を祈る」

そう言って建物の奥の方へと消えていった。

「キリエもんの正体はこれか」

そういいながらアスナ先輩達へ攻略に行けない事と、命に別状は無いことを伝えた。

「そういう事だ。こんな顔、人に見せられたいだろ？」

「確かに…早く終わらせよう！」

そう言って早速この岩を割り始めた。

何回か叩き硬さを確かめてから、思いつきり殴った。

「ゴン！という鈍い音がなり手応えも確かなものが返ってくる。」

「…今のどうやったんだ？」

驚きながら聞いてくるキリトに中心、核の捉え方のコツを教える。

割と直ぐに感覚を掴んだキリトはそのまま打ち続ける。俺も負けじと続けた結果、俺たちは同じ日、俺は2日目で終わらせ、キリトから見れば3日目で終わらせた。

outside

ツキノワ達が下山した次の日、フィールドボスの攻略戦が行われる事になった。

少し遅れて集合した彼らの目に飛び込んできたのは、キバオウとリンドの言い争っている状況だった。

「何あれ」

「ディアベルさんの後継者争い兼フィールドボス戦の指揮権争いよ」

呆れたように呟いたツキノワにこちらも呆れたようにアスナが答えた。

「リンド率いる『ドラゴン・ナイト・ブリゲード』とキバオウ率いる『アインクラッド解放隊』が揉めてるのよ」

そこにこれまた呆れた様子の子のミトが更に付け加える。

「へへ俺らが山籠りしてる間に随分変わったな」

キリトが何気なくそう呟く。

その途端、ミトの目の色が変わる。

「ツキノワ、どこかに行くならちゃんと連絡しなさいと言ってあるわよね？」

「いや、ガキじゃないんだしいいだろ。ちゃんと問題なしの連絡は送ってたし、フレンド

リストから生存確認と場所確認は出来るだろ？」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「ヘーヘー」

「ツキノワ！」

今度は姉弟喧嘩を始めるミトとツキノワ。

「おいおい」

「2人とも！」

慌てて止めるキリトとアスナ。

その時

「全員注目！」

リンドの声が届き全員がそつちを見た。

どうやら今回はリンドが仕切るらしい。

ふと見慣れない集団に気づくツキノワ。

騎士の様な格好をした人達だ。

「ミト、あいつらはっ！」

「あいつらは急に出てきた人達よ。レベルは低いけど装備がいいからとりあえず参加させるらしいのよ」

「ふーん、名前は？」

「えつとギルド名は『レジェンドブレイズ』。リーダーの『オルランド』に『クフリーン』、  
『ベオウルフ』「ちよつと待って！」何よ？ツボったの？」

突然止められて何かと思えば肩を震わせて笑いを堪えるツキノワ。

「いや、ごめん…クツ…センスが…面白…ハハ！」

「そこはちゃんと噛み殺しなさい」

そんな弟を呆れた目で見ると。

そんな事をしながらも話は進み、今回も取り巻きを狩ることになった。

「また取り巻き？」

復活したツキノワが聞くと

「ウインドフルーレの強化に取り巻きの素材が必要なの」

アスナが答える。今回は利益を重視した結果の担当らしい。

「分かっていると思うけどハチ型モンスターだから飛ばし毒針も使う。全員気をつけろ  
よ」

キリトが再確認し、全員が頷いた所で

「それでは！作戦開始！」

2層フィールドボス戦が始まった。

「28!」

アスナが突然カウントしだした。どうやら数えてたらしい。

「え?!数えてたのか!?!」

驚くキリトを他所に今度はミトが数をカウントした。

「私も!28!」

「30」

「「なに!?!」」

ちやつかり一番倒してるツキノワにみんなが驚く。

「!みんな!競争しましょ!」

ミトがムキになって提案する。

「はあ?ミト何言ってるんだよ!?!」

キリトが止めようとするもそれでもミトは止められず

「男子VS女子よ!負けた方が【トレンブル・ショートケーキ】を奢りよ!」

「トレンブル・ショートケーキ?」

「トレンブル・ショートケーキ!?!」

首を傾げるツキノワとアスナに対し本気で焦った声で返すキリト。

そんなにヤバいのか？とツキノワが疑問に思ったところで、

「よーいドン！」

一方的にミトが宣言をした。

鎌で一気に薙ぎ払うミトと正確無比なレイピア捌きでどんどん倒す数を増やしていくアスナを見て、男二人は焦る。

「なんてコンビだよ…」

「まさに広域爆撃と精密射撃だなあれ」

奮闘ぶりに引き攣る2人。

だがその光景が2人の男の闘争心に火をつけた。

「やるぞツキノワ」

「ああ、あつちがああするならこっちは…」

そう言つて一気に踏み込むツキノワ。

ソードスキルである程度ダメージを与えてから、すかさず体術スキル【閃打】を打ち込んで爆散させる。

ソードスキルで生じる技後硬直を体術スキルのモーションで打ち消したのだ。

一方的のキリト同じようにモンスターの攻撃を躲し、ソードスキルを打ち込んだ後閃打を打ち込んで倒す。

「こっちは連続射撃だ！」

そう宣言して一気に速度を上げて狩っていく。

「あの2人、山籠りしたと思っただらあんなものを！」

「負けられないわよアスナ！」

「ええ！行くわよミト！」

一方の女性陣も更に効率をあげる。

アスナがモンスターを一箇所に集めさせた所で

「スイッチー！」

「ハアア!!」

ミトがまとめて薙ぎ払う。

その隙を狙うモンスターを

「セアアア!!」

アスナが一撃で弱点を貫き倒す。

そうして団体戦は膠着状態にもつれ込んだ。

その時キリトがある事に気づいた。

「なんだあいつ？」

キリトが見つけたのはボスの後ろを飛ぶ取り巻きだった。

ツキノワも疑問に思っていた時、突然取り巻きがフィールドボスの尻を針で刺したのだ。

「ヴモオオオオ!!!」

突然大暴れするボス。

当然も本隊は巻き込まれ、

「「「うわああああああ!!!」」」

一気に包囲網を突破しこちら側に突撃してくる。

「げ!? こっち来る!?!」

「ミト! アスナ! 前足を攻撃してくれ!!」

「了解!」

すぐに指示を出すキリトに従う3人。

「ツキノワ! あれやるぞ!」

「あれか! OK、やるぞ!」

何かを打ち合わせながら走り出す2人。

先行したミトとアスナがボスと接敵する。

「アスナ、関節を狙って! 同時に行くわよ!」

「分かったわ! いっせーのーで!」



「セアアア!!」

同時に関節を切られたボスはその速度のまま倒れ込む。

「スイッチ!」

そう言つて避ける2人の横を影が2つ走り抜ける。

「やるぞキリト!」

「3カウント! 3, 2, 1」

「ハアアアア!!」

キリトとツキノワが一気に飛ぶ。そのまま空中で突進系ソードスキルを発動する。ソードスキルのアシストモーションを利用して空中を駆け登り、弱点を貫きボスを撃破する。

「はあ!? 空中でソードスキル!!」

その光景に驚くミトとアスナ。

そんな2人を無視しながら着地したツキノワが振り向きながら走り出す。

その理由にすぐ気づいたミトも一気に走り出し

「ハアア!!」

最後の取り巻きに同時に攻撃を仕掛ける。

その結果は

「よし！私の勝ちー！」

「くっそお！負けたー！」

武器のリーチと位置関係的にミトの攻撃が先に当たり、取り巻きを倒したのだ。結果は一体差で女子チームの勝ちになった。

「じゃあ、罰ゲームよろしくねー！」

ニコニコと笑いながら言うアスナに

「ハアア…」

深いため息で返事するキリトとツキノワだった。

sideアスナ

私達は前にも来たレストランに来ている。

隣に座るミトも楽しみなのか笑顔を浮かべていた。

「とりあえず注文しましょうか。ディナーはこっちが出すわ」

ミトがそう言い出し、ディナー分は私たちが出す事になった。

「じゃあ、頼むか…：トレンブル・ショートケーキ2つ」

と言ってキリト君が払う。

「金送るわ。えっと…：は？70000コル!!馬鹿なのかこの金額設定!!」

ツキノワ君が驚きの声をあげる。

7000!! そんな高いの!?

その事に驚いてるとため息をつきながら送金するツキノワ君。

「あ、キリト。渡す暇無かったからこれも今あげるわ。この間のおみやげ」  
そう言つて何かをあげる。

それはこの間私達があげたやつの色違いだった。

「お、サンキューー!これはチエーンリング?」

「そ、これの色違い。これは二人から貰つたやつでSTRが上がるんだけど、そっちはV  
ITが上がるんだよ」

「そうなのか!ありがとう、大事にするよ!」

「へー!お揃いになるなんて偶然ね!」

ミトはそう言うが、確かにツキノワ君のは最終的には私が選んだが、ある程度絞つたのはミトだ。

まさかと思ひミトを見ると目が合い、そのままミトはウインクしながら口元に指を当てる。

その仕草で私は悟つた。

きつとミトはツキノワ君がキリト君に選んだものを知つてたのだろう。

その上で私に選ばれるように仕組んだのだ。

流石は姉と言うべきか、ツキノワ君の事は何でもお見通しなのだろう、そう思うとまた胸が少しモヤツとする。

「アスナ先輩? どうしました?」

向かいの席に座るツキノワ君が心配そうに聞いてくるので大丈夫だと返すと

「おまたせしました」

とNPCのウエイトレスがケーキを持ってくる。

「来た…来てしまった…」

「来た! 来たわよ!」

キリト君とミトが対称的な反応をしている。

そのケーキが目の前に置かれその全容が見えた。

大きさは半径約25cm、厚さは約10cm、上にはクリームが乗っており高さはもう約40cmを超えるものだった。

結構なクリーム量、というよりほとんどがクリームだった。

「うわ〜! 大きい(デカイ)!」

私とツキノワ君は全く同じ反応をしてしまう。

でも凄く美味しそうだ。

ミトと2人で手を合わせ

「いただきます！」

切ろうとした時向かいから凄く羨ましそうな視線を感じた。

そういえばツキノワ君って甘いもの大好きだったよね。そう思っていると

「ツキノワ、はしたないからそんな目でアスナを見ないの」

「だって美味しそうだし…」

「はあ、仕方ないわね。私のあげるからお皿取りなさい」

「っ！ありがとうございます！」

嬉しそうにお皿を取るツキノワ君とそれを優しい目で見るミト。その時またモヤつとしてしまい

「ミト。私のやつあげるからいいよ？」

ついそんな事を言ってしまった。

驚く2人。

「そんな!?アスナ!悪いわよ!」

「いいからいいから!はい、ツキノワ君!」

「ありがとうございます!」

嬉しそうに受け取るツキノワ君を見ると胸が温かくなってくる。

隣ではミトが仕方なさそうにキリト君に分けており4人でケーキをシェアして堪能

した。

outside

「美味しかった……」

すっかりケーキを堪能した4人。

そんな4人は街を歩いていた。

「ベータの時より美味しかったかも……」

「ああ、しかもこんなバフも無かったしな」

そう言うキリトには四葉のクローバーマークが付いていた。

これは幸運判定ボーナスであり4人ともに付いていた。彼らはこのままアスナの武器を強化することにしたのだ。

「どこでやります？強化」

ツキノワがアスナにそう聞く。

「そうね、折角なら鍛冶屋さんに行きましょうか」

「鍛冶屋？もう出てきたのか」

そう、この2層に来て直ぐにプレイヤーの鍛冶屋が出てきたのだ。

その噂を聞いていたアスナはそこでやろうと言い出したのだ。

「じゃあ、探しますか。その鍛冶屋」

そう言つて街を歩く事数分後、無事に目的の鍛冶屋を見つけたので早速強化する事にした。

「いらつしやいませ、メンテですか？買取ですか？」

「強化でお願いします。種類は正確さと丈夫さで」

「…分かりました。強化素材は？」

「これです」

「…それでは始めます」

必要事項を終えて、強化が始まる。

カンツカンツと音が鳴り出すとアスナはミトとツキノワの手を握り出す。

「アスナ（先輩）？」

突然の事に驚くと

「…2人の幸運も分けて」

と言うので2人は笑つて

「了解」

優しく握り返した。

「じゃあ、俺も」

と言つてキリトがツキノワと肩を組む。

「なぜ俺と組むんだよ？そこはアスナ先輩だろ」

「俺がアスナに触るとハラスメ『バギーーーーーン!!』ん？」

キリトとツキノワが寸劇始めるまさにそのタイミングで何かが砕ける音がした。

全員がそつちを見ると

「「……え？」」

ウインドフルーレが粉々に砕け散っていた。



## 11話

sideアスナ

「……え？」

今、何が起こったの？ 砕けた？

私のウインドフルーレが砕けたの？

あまりの光景に何が起こったか分からず呆然としてしまう。

「すみません！すみません！手数料とかは全て返します！本当にすみません！」

「ち、ちよつと待ってくれ！武器の強化失敗はプロパティの入替、強化素材のロスト、最

悪プロパティ減少、この3つだろ!?これはどういう事なんだ!?!」

いち早く正気を取り戻したキリト君が何か喚いてる。

だけどほとんど耳に入ってこなかった。

「先輩!!大丈夫ですか!?!」

「アスナ！しっかり気を持って！」

ツキノワ君とミトが両方から私を支えてくれる。

でも凄い喪失感が身体中を包む。

どンドン身体が冷たくなって沈んでいくような感覚に襲われる。

あの子とならどこまでも行ける気がした、なのにここにはもういない。

剣士で無くなった私はどうなるのだろうか？

みんなに置いてかれるのだろうか。

そう考えて、あの1人で絶望していた時の感覚を思い出した。

「…いて…いで…」

「…キリト、話はどうなった？」

「とりあえず手数料は返してもらった」

そう話し声が聞こえて、私の前にトレード画面が表示される。

私は機械的にそれを受け取りそのまま呆然としている。

「先輩、一度宿に行こう？」

そう言って優しく手を引いてくれるツキノワ君と背中をさすってくれるミトに宿まで連れていってもらう。

部屋に入る前にツキノワ君が私の両手を強く握った。

「先輩！俺は先輩を置いて行かないから！ずっと傍にいるし、先輩にはずっと傍にいて欲しい！俺はどれだけ遠くに行っても、必ず姉貴と明日奈先輩の所に帰ってくるから！

だから…」

「ここまで言つて一息つく」と

「行つてきます！明日奈先輩！」

その言葉が私を温かく包み込んでくれる。

彼の握つてくれていている手から温かい熱が伝わってくる。彼の優しく強い目が私を見  
てくれている。

その事が凄く嬉しくて仕方なかった。

「…うん、いつてらっしやい優月君」

きつと彼はまた無茶をするのだらう。

それでもきつと大丈夫、だつて約束してくれたから。

「じゃあ深澄、行つてくる。明日奈先輩をよろしく！」

「分かつてるわ、いつてらっしやい。優月達こそ気をつけなさい」

「それこそ分かつてる！」

そのまま飛び出す優月君。

それを見届けてから私達は部屋に入った。

入った途端ミトが顔を覗き込んできたと思つたら、突然ニヤニヤしだした。

何やら嫌な予感がしたが聞かずにはいられなかった。

「…何？」

「いや〜？ 顔色が良くなったどころか、顔が真っ赤よアスナ、多分過去一で！それに凄いニヤケ顔！そんなに嬉しかった？」

そう言われ思わず手鏡で確認してしまふ。

そこには自分とは思えないくらい乙女の顔をした自分がいた。

「〜っ！深澄！見ないで！」

そう言つて布団を頭まで被つて隠れる。

そんな私の背中を優しくさする深澄。

（やっぱりは優月君が好きなのだろうか？）

そんな事を悶々と考えながら、私達は何も言わず、2人を信じて待つていた。

side ツキノワ

「キリト！いるんだろ！」

フレンドリストから場所確認をして路地裏に來た俺は、どこかにいるであろうキリトを呼んだ。

そしたら奥にある角から手が出てきて、手招きしていた。それに従いそつちに向かうとキリトともう1人、見慣れない女性プレイヤーがいた。

「キリトおまたせ。そつちが噂の情報屋の鼠か？」

「オウ、オレつちが鼠こと【アルゴ】だヨ！ヨロシクなツキノワ！」

初対面の人いきなり名前を呼ばれて驚く。  
なるほどこれが情報屋か。

「俺なんかの名前を知ってるなんて流石だな」

「何言ってるんだ？ ツー坊は有名人だゾ？ 世界でたった1つのユニーク武器を持ち、防戦とはいえボスと1人で渡り合った剣技の持ち主だしナ！ それにアーちゃんに続くニュービー期待の新星だしナ！」

何やらもの凄く恥ずかしいこと言われた気がする。オマケにへんなあだ名までつけられたがもう気にしないことにした。

「それで？ 状況は？」

「まずアルゴの調べた結果を聞くぞ。アルゴ、どうだったんだ」

お互いの自己紹介が終わりキリトが先を促した。その途端、急に真面目な顔に変わったアルゴにつられ俺も真剣に聞く体勢をとった。

「まず同様の事件がないか調べた結果、既に7件起きていたヨ」

「7件も!?!」

「マジか…」

俺もキリトもこれには驚いた。

それだけ起きていて何故表立って話題に上がっていないのだろうか？

そのままアルゴの話は続く。

「それと、強化した時に武器が壊れる現象だか、1つだけ条件がある事が分かったんだ」  
「その条件って何だよ!？」

思わずアルゴに詰め寄ってしまふ。

そんな俺をキリトが慌てて止める。

「落ち着けてツキノワ!それでアルゴ、その条件って?」

「お、オウ…その条件っていうの八:【エンド品】を強化した時なんだヨ」

聞き慣れない言葉が出てきたのでキリトに聞いてみた。

「エンド品って何?」

「エンド品っていうのは強化可能回数を使い切った武器の事を言うんだ。例えばツキノワのイビルファングの強化可能回数は10回だろ?だからMAXで +10って事になるんだ。だが失敗も1カウントされる。そういうのも含めたのが、強化可能回数なんだ」

なるほど分かりやすい、でもおかしい。

「先輩のレイピアはまだ回数を使い切ってないだろ?」

「ああ、つまりこれは…」

「エンド品とすり替えた強化詐欺事件って事だ」

俺たちにとって剣は相棒であり、半身と言っても差し支えない。

そんなものを騙し取るなんて言語道断だ。

拳を握りしめ頭に血が登るのを必死に抑えていると、

「鍛冶屋が動いたぞ」

キリトの声にハッと顔を上げ、3人で後をつけていくと、普通の居酒屋に着いた。

鍛冶屋が向かっていったのはある集団だった。

「あいつら、今日のボス攻略にいた連中だ。確か……」

「レジエンドブレイズだ！あいつら急に出てきた連中だとは聞いたけど、そういう事か

よー！」

あいつらのご大層な装備を見ていると、ある事に気づいた。

「なあ、壊れたのはエンド品なんだよな」

「ああ」

「という事は先輩のレイピアは壊れてないって事だよな」

「ああ、それが？」

「所有権はどうなるんだ？」

そう、装備は落したり盗まれたりしても、1時間以内なら所有権は残っているのだ。

「……！そうだ！所有権はまだアスナにある！まだ取り戻せる！」

「でも後10分ぐらいだぞ！どうするんだよ!？」

「コンプリートリイ・オールアイテム・オブジェクト」だ！それならギリギリ何とかなる！」

そう言いきつてから一気に街を駆け抜けるキリト。

「俺も行く！アルゴ！監視を頼む！」

そう言つて俺も近道の為に裏路地に駆け出す。

色々ごちゃごちゃした路地裏だったがパルクールをやっている俺はどんどんペースを上げて駆け抜ける。

宿の前に着く時にはちょうどキリトも着いたらしく

「速っ!?!どこから来た!?!」

大袈裟に驚くキリトを無視する。

「早く行くぞ！時間が無い！」

2人で階段を駆け上がり部屋に飛び込む。

突然俺達が部屋に飛び込んできたからか、ミト達は凄く驚いていた。

「あなた達、突然何!?!」

「ごめんミト！話は後！ツキノワ！時間は!?!」

「後5分！ギリギリだぞ！」



「分かった！アスナ！今は俺の言う事を聞いてくれ！」

そう言っただんどんメニューをいじる。

そして

「それだ！イエー……ス!!!」

ポチッとタップする。

「何してるの？キリトは」

「コンプリートリイ・オール・アイテム・オブジェクトサイズ」だって」

「コンプリートリイ？」

「コンプリートリイ！」

アスナ先輩の疑問にキリトが元気に答える。

「オールアイテム？」

「オールアイテム……っ！」

ミトの疑問に俺が答え時その意味に気づいた俺は、慌ててキリトの襟首を掴み部屋を出ようとする。

「キリト！早く部屋を出ろぞ！ミト！後でメッセージ送るからあと頼む！」

「ぐえっ！ツキノワ、何すんだよ！」

「いいから大人しく出なさい！このバカキリト！」

俺達の姉弟の連携に、強制退室させられるキリト。

「何すんだよ、ツキノワ!!」

「バカかお前は！オールアイテムって事は服とかも出るって事だろうが！」

「…あつ」

やつと意味を理解したキリトは顔を赤くする。俺はミトにメッセージを送りながらため息をつく。

「はあ…差し入れでも買いに行くぞ」

俺はキリトを連れてそのまま差し入れを買いに出かける事にした。

outside

コンコンッ

「ツキノワとキリトだけでももう大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

アスナから返事を受け部屋に入るツキノワとキリト。

アスナとミトはベッドの上に腰をかけており、2人ともご機嫌そうだった。

「2人とも、本当にありがとう！」

「一時はどうなると思っただわよ…二重の意味で」

ジト目で男子2人を睨むミト。

「俺は言葉しか知らなかったし」

「時間が無かったから焦ってたし」

「仲良く言い訳しない！」

ツキノワとキリトは言い訳するものの、ミトにまとめてバツサリ切られる。

「まあまあ、ミト…それより一体何がどうなってるの？」

ミトを宥めながらアスナがもつともな疑問を口にする。

「その説明はアルゴが来てからすると、まずはこれ食べましょう！」

ツキノワがそう言って出したのは肉まんみたいなものだった。

「何これ？ベータにこんなのあったっけ？」

「いやなかったぞ。次の街の名前にもなってる【タラン饅頭】だよ。きつと肉まんじゃないか？」

キリトがそう言いながら、食べようとした瞬間

「うにやあ!？」

「きやあ!？」

「んんっ!!」

3人の悲鳴じみた声が聞こえ何事かと見た瞬間、

「ん…んゆう…」

「何…クリーム?」

「アツツ…」

それぞれ左からアスナ、ミト、ツキノワである。

顔にベツタリ付いているのはクリームなのだが、妙に色つばい景色に思わずフリーズするキリト。

その時ガタンツ!!と何かが落ちた音がする。

音の方に振り向くと

「あ、アーちゃん達に…き、キー坊のガ…一体何が…いや待って本当に何がどうなってるの??」

アルゴが口調を変えるのを忘れるくらい動揺していた。

「待てアルゴ…ちゃんと説明するから!!するから話を聞いてー!!」

アルゴが合流したところでツキノワ達は事情説明に入った。

「なるほど、そういう事ね。随分手の込んだ事してるのねあいつら」

それを聞いたミトが吐き捨てるように呟く。

「アルゴ。あの鍛冶屋の名前は分かる?」

「ああ、あいつの名前は「ネズハ」だよ。スペルはN e z h aだ。他にもナーザという読

み方もあるんだ」

「ナーザ…ナタクの事だな。立派なレジェンドブレイズだ」

ツキノワ達の予感は当たりらしい。

問題はその手口だ。

「あのカーペットって何なんだ？」

まずツキノワが目をつけたのはカーペットだった。

何もヒントがない以上、手当たり次第に探るしかない。そう考えていたのだ。

「あのカーペットは専用のメニユーがあつて、カーペットの上にあるアイテムをそのメニユーに一気に入れられるのよ」

「うーん、それにしてもかなり敷き詰められてた様な…」

「確かにかなりあつたな。あれじゃあ、カーペットそのものも見えない気が…」

「…カーペットそのものが見えない…？」

「カーペットの機能を使って搾取する事は出来ないの？」

「多分無理だゾ。あれは全部収納しちまうからナ。その中からすぐに1つのアイテムだけをすぐに取り出すのは至難の業だゾ」

みんながあれこれと議論する中ただ一人、ミトだけは最初話して以降黙り込んでずっ

と考え込んでいた。

「…ミト? どうした?」

その様子に気づいたツキノワが声をかけ、それに全員が注目しているが、それでも思考を止めない。

やがて

「…すぐに…取り出す…ああああ!! 分かった!」

突然大声をあげるミトに全員が驚く。

「あつたわよ! 武器をすぐに変える方法!」

「お、おうその心は?」

「クイック・チェンジ」よ!!」

「…! そうか(カ)! そういう事か(カ)!」

キリトとアルゴも理解したらしいが、ビギナーであるアスナとツキノワには全く分かっていなかった。

「ちよつと待て、テスター同士で話を進めるな!」

「そうよ! クイックチェンジって何!」

「ああ、すまないナ。クイックチェンジっていうのは簡単に言うと、予め登録しておいたアイテムをすぐに装備するスキルの事だ。例えばツノ坊が曲刀を弾かれた時、すぐに別

の武器に変えたら便利だ口？それを可能にするのがクイックチェンジなんだ」

「なるほど…でもそれがどう関係するんだよ。システムの的に武器を手に入れた訳では…」

「ところがそうじゃないんだ。ネズハは客から預かったものをアイテムストレージに入っていないくても、手にすることで一時的に自分の物として扱えるんだ。もちろん所有権は客にあるんだけど、戦ってる最中に仲間の武器を使えるのと同じで、クイックチェンジを使うことも出来るんだ」

「でもその操作画面はどこにあるの？」

「それは恐らく敷き詰められた武器の下よ。そうすればこつちからは見つけにくいわ」

「一つ分かれば後はトントントン拍子で解決していく。彼らの推理はどんどん現実味を帯びてきて仮説として充分なものとなって来ていた。

「後は誰が囹をやるかだけど…頼む！キリト！」

「はあ！なんでだよ!!」

「私は分かっても、もう勘弁よ…」

「私とツキノワは武器が特殊すぎてすぐにバレるわ」

「アスナは心情的理由、ミトとツキノワは装備している武器が理由で目立ちすぎるのだ。」

つまり消去法でキリト以外にいないのだ。

反論の隙がないことを唸っていたキリトはやがて

「分かったよ……俺がやるよ……」

諦めて囚役を引き受けた。

ちなみにキリトが既にクイツクチエンジを習得している事も理由の一つである。

「強化を頼む。種類は丈夫さ、素材は持ち込みだ」

フルプレートトの男が自身の武器を鍛冶屋に突きつけた。

「かしこまりました……。それでは始めます……」

カンツカンツカンツと鉄を打つ音が10回ほどなつた時剣が、砕け散つた。

「す、すみません！すみません！」

「……いや、謝罪は結構だ」

そう言つて装備を全て一瞬で入れ替えた。

そこには1人の少年の姿があつた。

「……あなたは……」

「驚くことは無い。あんたがやった事と一緒に事をしただけだ」

その時鍛冶屋の後ろに何かが落ちてきた。

慌てて振り向くとそこには紫色の髪をした少年がいた。



「そういう事だ。さて鍛冶屋ネズハ」

「署までご同行願おうか」

そうして二人の少年、キリトとツキノワは犯人に対し言った。

## 12話

sideツキノワ

「さて、話を聞かせてもらおうか」

俺達いつもの4人+アルゴの5人はネズハへの事情聴取を始めた。

「…僕達レジェンドブレイズは他のゲームで出来上がったチームなんです。ランキングでは常に上位にくい込んでいた実力派ギルドなんです。そんな時です。SAOの話を聞いたのは」

ポツポツと語り出すネズハだがキリトはそこには触れず、もつと核心的な部分に触れてきた。

「何故、こんな事をした。何故こんな犯罪に手を染めた!？」

「ちよつとキリト!落ち着きなさい!」

ミトが慌てて制止しようとするもそれでもキリトは止まらない。

「落ち着いてなんかいられるか!もし犯罪に手を染めても何とも思わない連中が、トツプギルドになってみる!誰も手を出せなくなるぞ!そうなれば何もかもがこいつらの「キリト(君)!!」ってなんだよ!」

キリトの言葉を強引に止めたのは俺とアスナ先輩だった。

「キリト、多分それは違うと思うぞ」

「はあ? どういう意味だよ!?!」

「あいつらの装備を見て思い出したんだけど、前にミトから聞いたんだ。あいつらはレベルは低いけど装備がいいって。で、実際ボス戦の戦ってる所を見たけど連携もいいんだ。つまりあいつらは、装備と連携に対してレベルが追いついてないんだ」

「それと、ネズハさんこれ」

先輩がテーブルに見慣れないナイフを突き刺した。

「アスナ、それは…あの時の?」

「そう、ミト2人でレベリングしてた時に見つけたやつ…。ネズハさんこれ、取ってもらえない?」

先輩はよく分からない事を言い出した。

ネズハは恐る恐るナイフを取ろうとして…その手は空振ってしまった。

「「「な!?!」」」

先輩以外全員が驚かなか、先輩だけは分かっていたのか冷静だった。

「やっぱりあなた…目が…」

「…見えない訳ではないんです…。ただ…奥行きが…掴めなくて…」

それって…まさか…

「っ！FNCカ!？」

アルゴの声に頷くネズハ。

先輩はその言葉が分からなかったのか俺に意味を聞いてきた。

「…FNCって何?」

「Fullldive・Non・Connecting」の頭文字の略です。意味はフルダイブ不適合。フルダイブする際、五感のどこかに何らかの障害が発生してしまうんです。最悪の場合、フルダイブそのものが出来なくなります。彼の場合、恐らく目の異常で奥行きが掴めないって所でしようね」

2人で話しているところちょうど同じ所を話していたネズハ達が先の話の続きを話していた。

「最初は僕も戦闘職を目指したんです。そのために投擲スキルを鍛えたんですけど…」

「あれはあくまで、戦闘中のサポート的な役目のスキルだから、メインには向かないのよね。それこそ戦闘中のボスの目玉にナイフを投げつけるなんて、ツキノワ以外には出来ないわ」

「あれは俺も驚いた…」

「…あれってそんなに難しいんだ」

「さ、流石弓道部だね…」

「お前たち、話が脱線してるゾ」

話が脱線しだした俺たちをアルゴが引き止める。

「…凄いですねツキノワさんは。ミトさんの言う通り、とても実戦向けのスキルじゃないくて、2週間で諦めてしまったんです。その時には既に攻略に乗り遅れていて、かなり険悪な空気だったんです。そんな時です。あいつが声をかけてきたのは」

「…あいつ?」

思わず俺は聞き返す。

ここで第三者が出てくるとは思ってたのだ。

他の4人も驚いたのか一気に場が引き締まる。

「どんな奴だ?」

「黒い雨合羽みたいなのを着ていて、顔は見えませんでした。いや、刺青みたいなのがほんの少し見えた様な…後凄く綺麗な笑顔で笑ってました。まるで映画みたいなの…」

黒い雨合羽に顔には刺青有りかも、綺麗な笑顔か…特徴をしっかりと記憶しておき、先を促した。

「話の続きを」

「『そいつが戦闘スキル持ちの鍛冶屋になるなら、すげえクールな稼ぎ方があるぜ?』そ

う言つてこのやり方を教えてくれたんです。その後何も見返りを求めずに、ただ『GO OD LUCK』つて言い残して消えたんです」

「…それで言われるがままに手を染めたのか」

「最初はみんな否定的でした。でもあいつと話してからかどんどんみんなのり気になりだして、誰かが言つたんです。『ここはネットゲームの中だ。やつては行けない事は始めから出来ないようになってるんだ』つて。僕自身もみんなのお荷物になるくらいならつて思えてきて…」

「ふざけないで!!そんなの詭弁よ!!」

「そうよ!その理屈だと圏外で人を…っ!!」

アスナ先輩の言葉が詰まる。

その先の言葉を口にしたくないのだろう。

「…初めて教えてもらった通りに詐取をした時…すり替えられたエンド品が砕けた時のお客さんの顔を見てようやく気づきました…。こんなこと、たとえシステムの出来ても絶対にはいけない事だつて…そこで剣を返して、何もかも打ち明ければよかったです…:そんな勇氣もなくて、せめてこの一回限りで、そう思いながらみんなの所に戻つたんです。そうしたら、みんなが僕の騙し取つた剣を見て凄く…褒めて…:くれて…

僕は、僕は…!」

頭を強く打ち付けるも圏内なのでHPは減らない。

それを繰り返していると

「僕にはもうこれしか…償う方法は無い…!」

ネズハがそう言って窓に向かって走り出した。

俺たちは慌てて追いかけて、比較的AGI値の高いアスナ先輩と俺が、ギリギリで追いつき何とか足を掴んだ。

「ふっざけんな…お前はそのまま、そんなクズで終わる気か!!死んで逃げようなんて甘いんだよ!!」

「あなたも勇者になりたいんでしょ、ナーザ!!だったらこんな所で、こんな風に死ぬじゃなくて」

「戦って、戦場で死になさい(死ね) ナーザ!!」

そう言って2人がかりで全力で中にぶん投げる俺たち。

中のテーブルに当たったのか鈍い音が聞こえたが気にしない事にした。

肩で息をしながら座り込んでいると、ミトが俺達の肩を叩いて労ってくれた。

「お疲れ様2人とも。よくやったわ」

「…ミト達がやってよ。私達よりSTR値は高いんだから」

「だって間に合わなかったんだもの」

「脳筋め」

そんな風に悪態ついているとキリトはある物を取り出した。

「ネズハ、今あんたのスキルはなんだ」

「【投擲スキル】、【所持容量拡張】、【片手武器作成スキル】です…」

「そうか…なら勇者ナーザよ。もしお前に使える武器があると言ったら、【片手武器作成スキル】…鍛冶スキルを捨てる覚悟はあるか」

outside

事情聴取から3日後、ツキノワとキリトは2層フロアボス戦に向かっていた。

「あいつら、ムキになりやがって…」

「まあまあ、キリト落ち着けて」

勝手な行動でムスツとするキリトとそれを宥めるツキノワの元に1人の人物が近づいてきた。

「おう、お嬢たちはいないのか？」

「エギルさんどうも。まあちよつと事情がありました…」

1層のボス戦の時に手伝ってくれたエギルに穏やかに対応するツキノワ。その様子にキリトが驚いており、それを見たツキノワがキリトに尋ねた。

「…なんだよ」



「いや、お前が俺達以外にツンケンしてないの初めて見たから…」

「俺だつて最低限の人は選んでるわ！エギルさん達は信頼出来る人達だからな」

「目の前でそう言われるのは少し気恥しいな…お前たち2人だけなら俺達とパーティ組まないか？」

エギルの突然の提案に驚く2人。

「え？エギルさんは既にパーティメンバーマAXじゃあ…」

「実は事情があつて2人出られなくてな。ちようど空いているんだ」

「…その2人がいいって言うなら」

キリトが遠慮がちに聞いてみたがその2人は快諾してくれたので、ツキノワとキリトはエギルのパーティに入れてもらう事にした。

そんな中、ボス戦の最終確認が行われる。

今回の指揮権もリンドだ。前回のエリアボス戦の後、キバオウとリンドの間に取り決めが出来ており、その取り決めに従つての人選だ。

ボスは2体、「バラン・ザ・ジエネラルトラス」と「ナト・ザ・カーネルトラス」だ。

彼らH隊はG隊と共に「ナト・ザ・カーネルトラス」、通称ナト大佐の相手を務めることになっていた。

「今更だけど、2パーティで中ボスとかハードすぎね？」

「全くをもつて同意だな。骨が折れるなこれは…ところでG隊ってどこだ」

「ああ、それならあいつら…って向かってきたな」

キリトの疑問にエギルが指を指して答える。そこにいるのはレジエンドブレイズだった。

「私はG隊レジエンドブレイズのリーダーオールランドである。H隊のリーダーはどなたか？」

「俺だ。エギルつてもんだ。よろしくな。こいつら2人は今回だけの臨時パーティだ。黒髪がキリト、紫の髪がツキノワだ」

「…よろしく」

「よろしく頼む。卿らは既に2つ名があるのだとか。確か…【ブラッキー】と【舞闘家】とか。よろしく頼むぞブラッキー殿、舞闘家殿」

「…はあ!? 二つ名って何だよ!!」

余りにも突然のカミングアウトに驚く2人。

自分たちがそんな有名な人とは思ってなかったのだ。

「やれやれ…今更かよお前は…。全身黒づくめの格好からブラッキー。ボス戦で見せた立ち振る舞いからつけられたダンサー。これらが密かにつけられてたんだぞ」

驚きのあまり完全にフリーズしていると

「それではしゅ「待つてくれ」なんだエギルさん？」

出撃しようとしてるリンドをエギルが止める。

「前回、俺達はベータの情報を鵜呑みにしてディアベルを失った。まさか同じ事を繰り返す気はないよな？」

「…当たり前だ。攻略本と違う点が出た時点で即撤退。これで行くつもりだ」

「分かった」

「…よし！それじ「ちよう待つてんか」今度はなんだ!？」

今度はキバオウが止める。

「エギルはんの言う通り、攻略本を鵜呑みにするのは危険や。せやから…ここに1度ボスと戦った奴がいるならそいつの話を聞く手はないやろ。百聞は一見にしかずってやつや」

そう言つてキバオウはキリトを見る。

みんなの視線がキリトに集中する。

キリトはその視線にかなり緊張しながら話し出した。

「あくまで参考程度に留めてくれ。ベータ時代とは、全くの別物の可能性もあるから…。まず、ボスのパターンはMOBと大差なかった。ただし、ナミングを2連続で食ら

うのは避けてくれ。スタンが麻痺に変わる。麻痺ったやつのは最後は……

そこまで言って言葉を止める。

みんなその先が分かったのか誰も何も話さなかった。

「ナミング2連続は絶対受けたらあかん。そういう事やな……。それだけ分かれば充分や。みんなちゃんと聞いとったな！ほな 行くで！」

キバオウはキリトの話を話をまとめて突撃指示を出した。

「お、おい待て……全員突撃！」

慌ててリンドが号令を出してボス部屋に突撃する。

第2層フロアボス戦の始まりだった。

## 13話

outside

「ヴモオオオオオオオオ!!!」

「3連撃来るぞー!」

キリトの指示が戦場に木霊する。

その指示をしつかり聞き、3連撃をやり過ごすパーティメンバー達。

3連撃を終えたナト大佐は技後硬直で動けなくなる。

「今だ!」

キリトの声に1番速く飛び出したのはやはりツキノワだ。

「フツ!!」

この2層でその力を遺憾無く発揮させてきた愛刀イビルファングで、突撃系ソードスキル「ファイル・クレセント」を叩き込む。

「シツ!!」

更に技後硬直を打ち消すために体術スキル「閃打」を打ち込む。

「ハッ!!」

その後ソードスキル「リーパー」を発動する。

「オ……ラッ!!」

踏み込んだ足を軸に今度は「水月」を放つ。脇を蹴り飛ばしたところで技後硬直が終わり、ツキノワに狙いをつける大佐。

「また3連撃来るぞ!」

キリトの声にツキノワは、バックステップで距離をとる。

その瞬間までも放たれる3連撃。

3撃目が終わると同時に着地するツキノワ。

ふわりと着地したと思えばまた踏み込もうとする。

「1人で終わらせるなよ!」

「そうだぜ!俺らもいることを忘れるな!」

「流石ダンサー殿だ。我々も負けられない!レジエンドブレイズ!出撃する!」

そう言いながら飛び出す面々に、思わず苦笑いを浮かべる。

「ハアア!!」

キリトが駆けて、そのまま力を乗せてソードスキルを放つ。

「おおお!!」

それを受け体制を崩したところにエギル達の強烈なソードスキルをくらう。

「ヌン!!」

反撃に出た大佐の攻撃をレジエンドブレイズが全て防ぎ、

「隙あり!!」

硬直した所をツキノワが畳み掛ける。

そういう流れを続ける事十数分、3本あったHPバーも最後の1本の半分を切ったところで大佐がバーサクモードに突入した。

「ヴモオオオオ!!」

「バーサクしたぞ! 気をつけろ!」

「我がが引き受けよう!」

ツキノワの声にレジエンドブレイズが反応しタゲをとる。

「こっちはあと一息だな」

「ああ、即席パーティだが上等だな。問題は…」

キリトとツキノワは現状を確認し、本隊に目を向ける。そこでは「 balan・ザ・ジェネラルトールラス」、通称 balan 将軍に苦戦する本隊の姿があった。

「か、回避……回避……」

リンドの焦った指示が聞こえるが、何人かが逃げ遅れ、スタンする。

他のメンバーが慌てて安全圏に引きづって行き回復させている。

「…ちよつとまずいか…？」

「キリト、撤退を進言してきてくれ。俺だと余計な事を言いそう」

「…了解。ここは任せたぞ、兄弟」

「OK。しっかりやっておくれ兄弟」

拳を合わせながらキリトを送り出すツキノワ。

振り返って大佐を睨む。そろそろ大暴れが終わりそうな大佐に全身をリラックスさせ、腰を落とした。

「エギルさん、行ける？」

「当たり前だ。行くぞ！」

「3カウント！3…2…1…スイッチ！」

ラッシュが終わった瞬間H隊とG隊が入れ替わる。

ツキノワが先陣を切って駆け出す。

振り下ろさせる大佐のハンマーをサイドステップで軽やかに躲し、

「はあ!!」

ツキノワはその腕に通常攻撃を放つ。

左逆袈裟・正面に切り下ろし・突き・突いた剣をそのまま右に薙ぎ払いながら、踏み込む。



ただの通常攻撃でも桁違いの性能を誇るイビルファンクなら、ダメージ量はかなりある。

目に見えて減るゲージ。

「オラア!!」

そこに続いてエギル達のソードスキルが大佐に放たれる。

エギル達を振り払おうと攻撃する大佐を後ろから

「シイ!!」

ソードスキル「フアラント・フルムーン」で攻撃して中断させる。

その衝撃でターゲットをツキノワに向け、そのまま「ナミング・インパクト」を放つも、ツキノワは先読みしあっさりと躲す。

今度は回復を終えたレジエンドブレイズが突撃し、ターゲットをそちらに集めさせる。

その隙にツキノワ達が回復を行っているとキリトが帰ってきた。

「後1人スタンしたら撤退するって」

「了解こっちは変わらず順調だ」

「…なあ、お2人さん。ちよつといいか?」

キリトの話の話を聞いているとエギルが深刻そうに尋ねてくる。

「どうしたの？何か問題でも？」

「問題というか疑問だ。第1層ではロード……つまり君主だろ？何故2層になって將軍と大佐に格下げされたんだ？」

その疑問に答えるように突然ガコンツと大きな音がした。

何事かと3人が振り返ると中央の床が突然下にズレだした。

少しして今度は上昇しだす。

そこにはエギルの質問に対し、最悪の形で答えが返ってきた。

「……【アステリオス・ザ・トールスキング】……」

これまでで最も大きい、トールラス族の王がそこにいた。

sideツキノワ

「クツソが！悪趣味にも程があるだろ!!」

思はず汚い言葉で悪態つく。ここに来て大本命、3体目のボスとかシャレにならない。  
い。

「マズイぞ！本隊が挟み撃ちだ！早く助けに行かねえと！」

「違う！大佐が先だ！先に取り巻きを倒す！」

エギルさんが慌てて本隊を助けようとするもキリトがそれを止める。そうだ、逃がすためにも先に余計な障害は排除しないといけない。

「G隊、H隊！全力攻撃!!!」

「回避不要！防衛不要！要するに」

「ゴリ押せ!!!」

俺とキリトの号令によりそれぞれが最大火力のソードスキルで一氣に大佐にトドメを刺す。

「すぐに本隊に合流！このまま將軍を倒す！」

そのまま止まらずにすぐに本隊に向かう俺達だったがその時俺は王が変な行動をしているのに目がいく。

「何してる、あいつ…?」

仰け反り、胸を張る。まるで何かを溜めてるような…

「…っ！まさか…!?!」

嫌な予感がした瞬間、白い光がが本体に向かって放たれる。

それはモンスター専用の遠距離攻撃。

俺達ではどう頑張っても出来ない技。

それは

「ブレス攻撃!?!」

キリトも同じ考えなのか、あまりの衝撃に動きを止めてしまう。

そんな仲間達に俺は声を張り上げて発破をかける。

「ぼさつとするな!! エギルさん、スタンした連中を助けて! 残りは將軍を倒すぞ!」

「…っ! 了解! レジエンドブレイズ! 行くぞ!」

「了解した! 全員突撃!」

「shit! すまねえ! 俺とした事がビビっちゃまった!! おら、お前ら! タンクの意地を見せるぞ!」

それぞれが己の役目を果たすために動き出す。

その時、王がまた同じ予備動作をする。

「…っ! クツソ!! キリト! 將軍を頼む!」

「待てツキノワ! 一人で行く気か!? ツキノワ!!」

キリトの静止を振り切り、王に切り込む。

仰け反ることで足に登る道ができる事に気づいていた俺は、そこを登り一気に頭まで駆け上がる。

「くらえ…っ!!」

そこにある冠に「フアラント・フルムーン」を全力で打つ。

そこが弱点だったのが大きくHPを減らしながら膝を突く王。

それはそのまま飛び降りて正面で構える。

「キリト！タゲは俺がとる！その間に倒してくれ！」

「…絶対に死ぬなよ！ツキノワ!!」

そんな話をしていると立ち上がる王。

俺はその様子を静かに、油断なく見ていた。

「…おら、来いよ」

「ヴモオオオオ!!」

その挑発が聞こえたのか大きな雄叫びを上げながら腕を振り下ろしてくる王。

それを容易く避け、通常攻撃を食らわせる。

それを食らいながらニヤリと笑う王。

確かにHPは減っているが、総量が大佐の倍ある6本。

トータル的に見ると微々たる量なのだ。

そんなことを解析しながら確実に削っていく。

そんな時、王の腕が刺さって抜けなくなつた。

その隙にソードスキルで連発させる。

更に後ろに回り混んで攻撃しようとした瞬間

「…ええ？」

突然視界が高くなる。

背中に違和感を感じながら宙を舞ってている事を自覚する。

ボスの方を見るとしつぽがユラユラ揺れていた。

「…しつぽ…」

ふと上が暗くなったので上を見ると、ボスの平手が俺に迫っていた。

「…っ!？」

咄嗟にソードスキル【フィル・クレセント】で少しでも逃げようとするも、間に合わずそのまま床に叩きつけられた。

「ガッハッ…!!」

すぎましい衝撃に呼吸が出来なくなる。

そのままバウンドしながら吹き飛ばされ、HPもグリーンだったのが一気にレッド半ばまで減る。

しかもスタンが入ってしまい、身体が動かせない。

「ツキノワ!？」

慌ててキリトが俺を回収してくれるが王がこっちに向かってブレスの予備動作をとる。

このボスのブレスは横には狭いが縦には長いから、この距離でも充分射程圏内だ。

キリトをつき飛ばそうにも身体が動かないから何も出来ずキリト共々巻き込まれる

しかない。

そう思っていた時だった。2つの閃光が王の眉間を貫いた。

「ヴモオオオオオオオオ!!!」

「…何が…?」

思わず眩くツキノワ。

喋れるようになってきている事にも気づかなかった。

その閃光の方を睨む王に対し

「この…！見るな!!」

空中サマーソルトをお見舞する2人の女性プレイヤーがいた。

その姿を見て俺達は何者かを確認する。

「あれは体術スキル【弦月】！って事はまさか!」

「姉貴!!アスナ先輩!!」

「ツキノワ(君)！キリト(君)！おまたせ！大丈夫!?!」

outside

アスナ達はツキノワたちの前に降り安否を確認する。

「俺は大丈夫だけど、ツキノワが!?!」

「俺ももう大丈夫だ。スタンも解けたし体力もある程度回復した。俺もすぐ王の所に戻

るから早く將軍を「ダメだ!!」!?」

ツキノワは黄色まで回復したHPを確認しつつ、速くタゲを取りに行こうとするツキノワをキリトが強く止める。

「今まで死にかけてたんだぞ!?!必要な事だったとはいえ、これ以上は無茶だ!!」

「そうよ。ここからは私達に任せて!」

「貴方は回復に専念して!...私は貴方の姉なのよ?ここからは私に任せなさい」

キリトには肩を強く握られ、アスナには頭を撫でなれ、ミトには頬を撫でられるツキノワ。

体の力が抜けてしまい、つい腰を落としてしまった。

「...ごめん、出来るだけ早く戻るから任せていい?」

「「当然!」」

3人に託して安全圏で休むことにしたツキノワと、それぞれ託された3人は自分達のやるべき事を確認する。

「俺は將軍を倒すから2人は王のタゲを頼む」

「了解!」

そう言つてそれぞれ飛び出した。

sideキリト



「エギル！ブレイズ！一気にカタをつけるぞ！」

「「「応!!」」」

俺は支えてくれていたエギル達に合流すると、

一気に指示を出す。

「俺が引きつけるからブレイズはタンクを頼む！エギル達は合図したら最大火力でソードスキルを打ち込んでくれ！」

「承った！」

「何時でも行けるぜ！」

俺はそんな威勢のいい声を聞きながら、一気に目の前まで駆け抜ける。

そんな俺に気づいてハンマーを振り下ろそうとする將軍の股をスライディングで躲すと、ソードスキル「ホリゾンタル・アークを」を背中におみまいした。

大きくHPを減らしながらよろめく將軍に畳み掛ける。

「はアアア!!」

気合いを込めて放つ斬撃を気にもとめずそのまま攻撃しようとする將軍に対して

「スイッチ！」

ブレイズとスイッチして後ろに飛ぶ。

「ぬうん！」

オルランド達が必死に食い止めてくれる中、焦りそうになる気持ちを抑える。

俺達は速く、ミト達の援護に向かわないといけないのだ。

回復しているとブレイズがボスをパリイして体勢を崩させる。

「今だ！エギル！」

「おおお!!」

エギル達に指示を出し、一気に突撃させる。

当然俺もそれに混ざり將軍のHPを一気に吹き飛ばした。俺はそれを確認してからすぐにアスナ達に合流しようとした時

「アスナ!？」

ミトの悲鳴が聞こえてきた。

sideミト

「アスナ！一気に近づくとわよ！そうすれば多分ブレスだけでも防げるはず！」

「分かった！」

私達は王に一気に接近を試みる。

先程の動作的に恐らくブレス攻撃があるが、近づいてしまえばブレスは来ないだろう、という定石を信じて進む。

その予想は当たっていたらしく、ブレスではなく叩きつけ攻撃を行ってくる。

「ミト、散ってから周囲を回って！」

「……了解！」

アスナからの指示に一瞬何を言ってるか分からなかったがその意味をすぐ理解する。アスナは王の股をスライディングしながら通り過ぎ、私達は対角線上に王の周りをグルグルと回り出した。

アスナが王の前に来た時、

「ハアア!!」

叩きつけ攻撃をする王を後ろから鎌で切り裂く。

今度は私にタゲを向けた王の攻撃をしてる間に、

「やあああ!!」

後ろからアスナがレイピアで貫く。

倒す為ではなく時間稼ぎが目的だから、与えるダメージは少ない。

それでもしつかりタゲを取れているのでこのまま同じ事を繰り返す。

その時ツキノワが何かを叫んでいるのが見えた。

「……ト……っほ……きを……ろ……」

衝撃音で掻き消されてしまい、声が聞こえない。

聞き返そうとした時パンツ!!という何か乾いた音が響いた。

音の方を向くと

「っ!?アスナ!?!」

アスナが空高く打ち上げられていた。

思わずアスナを受け止めようと走る。

でもその前に、ボスがこつちに攻撃を仕掛けてくる。

連続の叩きつけ攻撃に捌ききれず、吹き飛ばされてしまった。

「この……邪魔しないで……キャッ!!」

「ミットー」

キリトが受け止めてくれて、回復させてくれる。

「わ、私よりアスナが……!?アスナ!?!」

「っ!?まずい!ブレスだ!!」

スタンにかかり動けないアスナに対しブレスを放とうとする王。

私はすぐに立ち上がり、ボスに突貫する。

キリトもそれに続いて走ってくるが私達ではとても間に合わない。

嫌、駄目……ダメ……

「やめてええええええ!!」

叫ぶも無慈悲に放たれるブレス。

その眩しさに思わず足が止まり、目を隠してしまう。静かになった時、恐る恐る目を開けると

「残ってる…アスナのゲージが…残ってる…」

何故かアスナのゲージが残っていて、体力も少し減ったぐらいだった。訳が分からないでいると

「ツキノワ!?!」

キリトの大声が聞こえる。

反射的にアスナの方を向くとアスナを抱いたまま倒れて動けないでいるツキノワの姿があった。

改めてアスナのゲージを見ると

「麻痺!?!」

「ツキノワもだ!?!」

2人ともボスの目の前で麻痺して動けないでいる。

万事休すの状況にまた走り出そうとした時突然

「お前達! 行くな! 巻き込まれるぞ!!」

私達2人をエギルがまとめて押さえ込んでいた。

sideアスナ

眩い光を見た時、私はああ、死ぬんだって思った。

あの時の絶望とは違う、諦めに似た感情。

そう思ってたのに

「…な…んで…」

「…言った…でしよう…う…傍に…いるって…」

ツキノワ君は麻痺で動かない体を、強引に動かして私を守るように包み込む。

その温かさが心地よくて、もつと感じていたくて

「やだ…死にたくない…死にたくないよ…」

泣きながら抱きしめてしまう。

ツキノワ君も優しく抱き締め返してくれる。

その時不意に影が私達を覆った。

そこには王がニヤケ顔のまま見下ろしながら拳を振りかぶっていた。

「クソが…」

そう言いながら震える手で剣を上にも構えるツキノワ君。私も強引に腕を動かしてその手を優しく握る。

「わた…しも…一緒…に…」

「はい…いつ…しよこ…」

2人で王を睨めつける。

精一杯の強がりを見せていると

「アスナア!!! ツキノワア!!!」

こつちに手を伸ばしながら走り出しそうなミトとキリト君、そして2人を抑えるエギルさん達がいた。

「離して!! 離してよ!! アスナ!!! ツキノワ!!!」

「エギル!! 離せよ2人が!!! 2人が!!!」

「ダメだ!! もう間に合わない!! お前達まで死ぬぞ!」

更にその奥にはオルランドさんがギルドメンバーに抑えられていた。

「オルランドさん! やめてくれ!」

「離せ! 離さぬか! 戦友と姫君の盾となるのは騎士の本懐であろう!!」

彼らが根っからの悪人ではない、それが分かっただけでも良かった。

それとミトにはまた辛い思いさせちゃうかな…ごめんねミト。

キリト君、ミトの事、よろしくね?

「ねえ…ミトと…キリト…君。お似合い…じゃな…い?」

「どう…でしよ…? ミト…は、とし…うえ…好きだし…」

初めて知ったなそんな話。

いつか親友の彼氏を見たかったけど、それはあの世からかな…。  
だつてほら、振り下ろしてきたし。

「ああああああああ!!!」

拘束を引き離し、仲間を押し退けて3人が駆け出す。

「間に合えええええええええええ!!!」

「真の勇者なれば、今こそ立ち上がる時だあ!!」

「その通りです! オルランドさん!」

全くの第三者の声がボス部屋に響き渡って、コーーンと何かを弾く音が聞こえた。

「ヴモオオオオ!」

突然大きく仰け反って体勢を崩す王。

その声を私達は知っている。

ミトも気付いたのか、その人の名前を叫んでいた。

「…遅い…ですよ…」

「ネズハ(さん)!」

「皆さん! 僕がボスを牽制します! その間に回復を!!」

そこには、レジェンドブレイズ最後の勇者、ナーザことネズハさんがいた。

sideツキノワ



突然のネズハの登場に唾然としてると、背中から誰かに引つ張られてから「ほら、これ飲んどけ」

隣の先輩同様、解毒ポーションをがぶ飲みさせられた。

「ゲボ！何すんだよアルゴ!!」

「助けてやったのにその言い草カ？」

いつの間にいたのかアルゴに助けられていた。

「アルゴさん!?いつの間にここに？」

「ネズハと一緒に来ただけだよ。いきなり修羅場なのは驚いたけどナ」

そんな話をしていた時

「アスナ!!優月!!」

ミトがこつちに突っ込んできて、そのまま抱きついてきた。

「ちよっ!?!ミト!!」

「良かった…よがっだ…」

そのまま泣きじやくって動かないミトを俺達は優しく抱きしめた。

「大丈夫、私達はここにいるよ…」

「ほら、まだ終わってないんだ！行ってこいよ！深澄」

そう、まだボスは倒してない。

ミトの火力は絶対必要になるのだから、早く行ってこいと発破をかける。

「うん……2人とも休んでて！行ってくる！」

泣き止んだミトは力強く宣言して飛び出していく。

HPもまだ回復してない俺達はただ座り込んでいるだけだった。少し話をしようと先輩の方を見ると

「先輩、大丈夫で……先輩？顔真つ赤ですよ!？」

「ふえ!?!だ、大丈夫だよ!?!心配しないで!?!」

何故か顔を真つ赤にして俯いているアスナ先輩がいた。どう見ても大丈夫じゃないだろう、そう思いながらも特に言及はせず、そのままにしておく。

その時、場が動き出した。

王がネズハにタゲをつけたのだ。

そのまま拳を振り下ろしており、マズいと立ち上がった瞬間

「ぬん！」

レジェンドブレイズがネズハを守ったのだ。

だけどその盾にはヒビが入っていて、いつ砕けてもおかしくない状況だった。

「アスナ先輩！」

「ええ！行くわよ！」

先輩も見てたらしく、すぐに動き出した。

でもそれより速く、キリトやエギル達数人のプレイヤーがオルランドを支えだした。

「…ツ！ハハ！ここには勇者ばかりだな！皆の者！弾き飛ばすぞ！」

「！！！！！！！！！！」

そのまま男達は一気に王をパライイして弾き飛ばす。

その瞬間俺とアスナ先輩は一気に走り出す。

「先輩！やりますよ！」

「分かった！行くよ！」

そのスピードを活かしたまま飛び

「ハアアアアアア！！」

ソードスキル【フィル・クレセント】とソードスキル【シューティング・スター】が、

ボスの頭を冠ごと貫く。

その瞬間王の体がポリゴン状に碎け散り、

「やったああああああ！！」

第2層フロアボス攻略は犠牲者を0で収め、成功に終わった。

# 14話

outside

「「「やったああああああああ!!」」」

全員の勝利の雄叫びがボス部屋に木霊する。

それぞれ、様々な喜び方をしている。

そんな中この4人は

「おい…キリト泣くなよ…」

「ほ、ほら私達無事だから? ね?」

「な、泣いでない…!」

「どう見ても泣いてるじゃない…」

キリトがツキノワに泣きついてるのを必死に宥めている最中だった。

キリトとツキノワは1層からずっと一緒だった。

デスゲームが始まったあの日、彼らはお互いの事を兄弟と言い合うぐらい近しい存在になったのだ。

そんな片割れが死にかけたのだから当然、キリトはかなり怖かったのだ。

「俺だちは…兄弟…なんだぞ…かつでに…いくなよ…」

「分かった分かった、俺が悪かったよ。だから泣くなつて。せつかくの空気が台無しだぞ」

「全く仕方ないわね…ほら、おいでキリト。ツキノワと兄弟分なら私の弟よ。お姉さんが慰めてあげる！」

「それは…いやだ…」

「何だよ!？」

「あ、アハハ…」

そんな漫才をしている4人の元に

「Congratulations!! 4人とも！ナイスコンビネーションだったぜ!!」

エギルが4人を労いに近づいてくる。

「エギルさん達もお疲れ様です。皆さんにはかなり助けて頂きましたし」

ツキノワがそう言つて労い返す。

「おう！お互い様だ。気にすんな…つてこれだけで終われたら良かったんだが…」

それまでの穏やかな空気はエギルの硬い声と表情で掻き消える。その目線の先にはネズハがいた。

「あんた、この前まで鍛冶屋だったよな」

「…は？」

「何故、突然戦闘職に変更した？しかもそんなレア武器まで引っさげてきて。鍛冶屋ってのはそんなに儲かるのか？」

「…」

「別に恨み言を言いたい訳では無いんだ。ただ俺達と似た境遇の奴らがここにも何人かいる。そして、そいつらは全員同じ懸念を抱いてる様だからな」

その言葉にツキノワが周りを見渡すと、確かに疑いの目線がいくつかネズハに向いている。

「待ってくれ！このチャクラムは俺が「キリトさん」っ！」

キリトが必死に弁明しようとした時、ネズハがそれを止めた。

「いいんです、キリトさん。皆さんの想像通りなんですから」

そう言っつて皆の前で土下座するネズハ。

「僕は皆さんの武器をエンド品とすり替えて詐欺を行いました」

「それは金に替えたのか？」

「はい、全て高級レストランやホテルに使いました」

エギルとネズハの淡々としたやり取りがボス部屋に響く。そんな中、1人のプレイヤ―が遂に我慢の限界を迎えた。

「お…、お前!! わかってんのかよ!? 大事に育てた剣失くして、俺達がどんな思いだったのか!?!」

1人が爆発してしまえば後は連鎖的にどんどん広がっていく。

「俺も…もう前線に出られないと思つて…。でも仲間が必死に助けてくれて…迷惑かけまくつてよ…!」

「それをお前! その金を高級レストランに使つた!? 高級ホテルに使つた!? 挙句に自分はレア武器使つて、ボス戦で英雄気取りか! ふざけんな!」

口々とネズハへの不満が爆発していく中、遂に1人が剣をぬこうとした。

キリトとツキノワはそれを見て慌てて止めようとしたその時

「待たれよ。貴殿らの剣を汚す必要は無い」

オルランドがその集団に割つて入つていった。

「この者は我らの…いえ、俺達の仲間です。こいつに強化詐欺をさせたのは俺達です」  
そしてオルランド達レジェンドブレイズは装備を床に置いて、ネズハ同様、その場で土下座していた。

あまりの光景の連続に誰もが理解が追いつかなかつた。ただ1つ分かつたのはネズハはレジェンドブレイズの一員である事、それだけだった。そんな混乱した空気を

「そんなんで許される訳ねえだろ!」

1つの甲高い声が切り裂く。

それは1層でも騒ぎを起こしたプレイヤーの声だった。

ツキノワはその声を聞いてまた眉間に皺を寄せる。

「金の問題はそいつらの装備を売ればどうにかなるかもしれねえがな!!? 死んだ人間は戻らないんだよ!!」

その瞬間、空気が凍りついた。

キリトも、睨んでいたツキノワも驚きに目を開く。

アスナとミトは口を手で覆っている。

「死んだ…人間…!? どういう事だよ!?!」

プレイヤーの1人が聞き返す。

「お、俺は知ってるんだよ!! こいつらの詐欺の被害者の1人が店売りの武器でフィールドに出て、MOBに殺されたんだよ!!」

「ち、ちよつと待てよ…それってそんなのって…!?!」

「そうだよ!?! こいつらのやった事は、間接的にはPKなんだよ!!」

決定的な一言をそいつは言い放った。

その一言が言い放たれてから、場が騒然としだす。

「おい! さすがにその理屈はやばいだろ! 第一層のペータテスターの時とはワケが違う



んだぞ?!」

「でも犯人が認めてるなら…」

「おい?! 何言ってるんだよ?!」

どうするべきなのか場が混乱する中、騒ぎを起こしたプレイヤーがまたも爆弾を投下する。

「死んで償えよ。人殺し」

詐欺師ではなく人殺し。

そう表現した途端、全員が目の色を変える。

そうだ。死んだ奴に詫びを入れてこい。

このクソ野郎共が。殺せ、殺せ、殺せ、殺せ!

そんな暴動が今にも、起きそうになっている。

キリトも、アスナも、ミトも、エギルもどうすればいいか分からなくなっている中、ただ1人ツキノワだけは冷静に

「証拠は?」

たった一言、騒ぎの中心にいるプレイヤー声をかけた。

sideツキノワ

はあ、どいつもこいつも。

単純にも程がある。

そう思いながらまた騒ぎだしたクソ虫野郎に声をかける。

「証拠は？」

突然話しかけられて驚いたのだろうか、俺だと認識すると忌々しそうに怒鳴ってきた。

「またてめえかよ!! てめえもこいつら「だから! 証拠は!!」っ!」

ベラベラ喋りだしそうだったので大声で強引に止める。その声にも周りも俺らの事に気付いたのか、静かになる。

「こいつらが狙ったんだから、フロントランナーなんだよな。だったら俺らの誰かが、知っててもおかしくないだろ。おら、言ってみろよ、どこの誰だよ…言えよ!!!」

そこまで言っても口を噤んだままだった。

そりやそうだろうな。

「はあ…アルゴ、まだいるか？」

「ああ、いるヨ」

俺の呼び声に反応してアルゴが出てくる。

突然のアルゴの登場に全員驚いた。

「アルゴ?! いつの間に?!」

思わずキリトが皆の気持ちを代弁するように叫ぶ。

「ネズハと一緒に来たんだヨ。：それよりツーク坊、要件ハ？」

「前に頼んどいたやつ、終わってるよね？」

「ああ、終わってるヨ。みんな！悪いけど今から名前呼ぶやつ、返事してくレ！もしくはここにいない奴がいたら、誰かのフレンドリストからどこにいるか確認してくレ」

そう言つて一枚のスクロールをオブジェクト化させ、そこに書かれた名前をどんどん読み上げる。

その場で返事がある奴も居れば、フレンドリストで何処にいるか確認された奴もいる。

「：最後、アスナ」

「私よ」

先輩が手を上げる。

それを確認しアルゴが高々に宣言する。

「：以上、強化詐欺にあったプレイヤー計8名。その全員の生存が確認されタ」

この一言を聞いて、周りはざわめき出す。

その視線はネズハではなく、一番最初に騒いだプレイヤーに向けられていた。

「さて、これでお前の嘘が露呈した訳だが、一つ聞いていいかな？お前さつきこう言った

よな。『こいつらがやった事は間接的なPKなんだよ!』って。でも結果はどうだ? 誰も死んでない。お前は今、死人が出たという嘘をつけて、こいつらを殺そうとした。: だったらお前がやろうとした事も: 『間接的なPK』だよな?」

俺はわざと笑顔を浮かべながら、言い放った。

その顔を見たそいつは顔を真つ青にさながら後ずさる。

「お前らも無視してんじゃねえよ! このクソ虫野郎に便乗して殺せって言ってただろろろが!! だったらここでも、そう言うべきなんじゃねえの!？」

今度は周りをそう煽る。

どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。

散々偉そうにほざく癖に、自分からはやろうとしない、群れなきや何も出来ない。

大人がこんなのか呆れてくる。

「で? どうすんの? お前は。自分で吐いた唾は飲み込めねえぞ? どうやって落とし前つけるんだよ!?! 自分だけ屁理屈並べて逃げられるなんて思うなよ!!!」

そういつて睨みつける。

更に後ずさるそいつを見て

「逃げんじゃねえよ!! おら、速く腹を「ちよお、待たんか!!」: なんだよキバオウ」

そんな俺達にキバオウが割って入ってくる。

「確かにこいつがやったんは許されへんことや。せやけどな、こいつはわしの仲間や。勝手にどうこうするのは認められへん。まずわしを通してからにせえ。これは筋の問題や」

ふーん、確かにこいつの部下がやらかしたことは、上司であるこいつの責任だ。

「だつたらどう落とし前つけるんだよ。こんなクソ野郎が一緒とか、背中預かれないし預けられないぞ」

いつか言っていたキバオウの言葉をそのまま返した。

「それもお前さんが口を挟むことやない。そこをどうするかはそいつらとこいつで決めることや。とりあえず【ジヨー】、お前は謹慎や。ホームでじつとせい…今出来るのはこれくらいや。これ以上は、そっちの被害の話し合いが成立してからや」

「…ちつ」

ここまで言われては流石にゴリ押せないだろう。

そう思いここは引く事にした。

「おい、クソ虫野郎。これからは考えてからものを言うんだな。後便乗した阿呆ども！お前らも少しは頭を使え。こんな事してる暇なんてねえのにくつだらねえ…3人とも、先に3層をアクティベートしに行こう」

そのまま俺は3人に声をかけ、そのまま3層までの階段を登りだした。

sideキリト

気まずい空気の中、俺達は階段を上がっていく。理由は俺の目の前を歩くツキノワの纏う空気だ。

ハツキリ言つてめちやくちやキレてる。

前にミトにキレると口調が変わるとは聞いていが、これ程とは思つてなかった。

その時突然ツキノワが振り返ってきた。

「ミト、アスナ先輩、ちよつと浅慮だったんじゃない?」

「……」

は?何を言い出すんだツキノワは?

「えつと……ツキノワ?」

「はあ……。その様子だとキリトは気づいてなかったか」

「何に気づいてないんだよ?」

「政治の基本は情報と根回し、後は演出だぞ?多分、エギルさんやキバオウ、リンド辺りには今回の件、言つてあつたんじやないか?」

「え!?そんなの!」

思わず2人の方を見ると気まずそうに頷く2人。

マジか……。全く気づかなかつた。

「ていうか、ツキノワは知ってたのか？」

「いや、2人ならやりそうだと思うただけ。後はキバオウがやけに冷静に俺の相手をしたから、まさかかって思ったんだよ」

そこまで読んでいたなんて、ツキノワも凄いなあ…。

俺にはサツパリだよ…。

「ツキノワはあそこまで読んでたの？」

「当たり前。あんな阿呆がいるんだからそこまで考えるのが道理だろ？」

ミトの質問にあっさりと返すツキノワ。

「…じゃあ、あの時の言葉も演技なの？」

「…いや、言い方とかはわざとらしく煽る為に芝居を打ちましたけど、言ったことは本心です。人の命に手を出すんだから、自分も手を出される覚悟をしておくべきです。因果応報、人を呪わば穴二つつてやつですよ」

淡々と告げるツキノワ。

そこまでの覚悟一体どこで…ふと俺達は1度殺されかけた時の事を思い出した。

「コペルの時か…お前がそこまでの覚悟を決めたのはあの時なのか!？」

「…まあ」

「キリト、なんの事？」

「…俺達は1度、MPKされかけたんだ。結局、仕掛けた本人だけが死んだんだけど…」  
その事に2人の顔色が青くなる。

「…あの時気づいたんだよ。この世界は無法地帯だ。ネズハの言ったことはある意味事実だよ。この世界は出来ないことは予め決まってる。裏を返せば決まってる事、やつても何も罰はないって事だ。そんな世界で大事なものを守るには、どんな事でもやる覚悟をする必要がある。そしてやるからには、やり返されるかもしれない。そのリスクを覚悟した上で、守るしかないんだ」

俺は自分が恥ずかしくなった。

俺はまだこの状況を、ゲームとしてしか見ていなかった事を。

ゲームであつても遊びではない、その意味をやつと理解した。

ここは現実なんだ、俺達がやってるのは極論、殺し合いだ。

それがいつかプレイヤー同士で、剣を向け合う可能性があるという事から、目を背けていた。

「…ま、本当に殺す気は無かつたんけどね!!」

「…へ?」

突然、おどけるツキノワにアスナはポカンとする。

「そもそも俺にその権利はないから!」



「…も、もう！驚かさないとよ!!」

確かに言ってしまったえばそうなのだが、きつとこれは嘘だ。

ミトもアスナも気づいてるだろうが、気づいてないふりをしているのだろう。

そして気づいてないふりに気づいてるだろうツキノワも、それを見て見ぬふりをして  
いる。

その様子を見て俺も向き合う覚悟を決めた。

その時

「キリト、踏み込みすぎではダメよ」

ミトが突然静止させる声をかけてくる。

「確かに、必要な覚悟なのかもしれない。でもだからこそ、傍に引つ張り上げる人が必要  
だわ。あなたとアスナにはそういう人になって欲しい。…踏み込むのは私でいいわ」

「ミト!?!何言ってるんだよ!?!」

ミトの宣言に慌てて止めようとする。

そのミトは優しい目しながら、ツキノワを見ていた。

「だって姉だもの。弟を一人放っておく事なんてできないわ」

…ああ、ダメだ。

俺も兄だから、気持ちがあつてしまう。

だから止められない。

もし妹が、直葉が同じ事を言ったら俺も同じ事を思うだろうな。

「…はあ…分かった！お前らの戻るべき場所は俺が守る！」

「ええ、そうしてちょうだい」

そんな兄妹談義をしていると

「ミト！キリト君！速く！」

「キリト！ミト！遅いぞ！」

「分かった分かった！ちよつと待って！！」

慌てて2人を追いかけて扉の前に並ぶ。

「さあ、みんな覚悟はいい？ここから真のSAOが始まるよ」

「真のってどういう意味だよ？」

「それは…お楽しみってやつだ」

そう言いながら扉を開ける。

そこには一面樹海と言っても差し支えない光景が広がっていた。

## 15話

side ツキノワ

「樹海？」

初めて見る第3層の景色は、一面森林だった。

「樹海って…ツキノワ君、もうちよつと何か表現なかった？」

「何と言うか、富士樹海思い出したんでつい…そんな事より霧が濃くないですか？」

「ツキノワはあそこで迷子になりかけたもんね…ここはフォレスト・オブ・ウェイパリング・ミスト「迷い霧の森」と、呼ば

れるエリアだから霧が濃いのだよ。みんな、出来るだけそれぞれの傍から離れずに、固

まって行動して」

「今サラッと凄いいこと言わなかった!？」

「ツキノワって以外と武勇伝多いよな…」

「俺のことはいいんだよ！それよりモンスター出たぞ!？」

ミトが余計な事を言ったので誤魔化すように戦闘体勢に入る。

「【トレント・サプリンク】よ！弱いけど厄介なやつだから気をつけて!」

「注意点！奥に誘い込もうとするから立ち位置には気をつけろ!」

「了解！」

キリトとミトが枝を伐採してタゲをとってる間に、俺と先輩は裏をとって奇襲をしようとする。

「もらった…!!」

「あ、注意点2…前後が入れ替わるから背後は取れないわよ？」

「え…？」

そう言われた瞬間、トレントと目が合う俺達。

「…そういう事は先に言え（言つてよ）!!」

あつさりトレントを伐採した俺達は先を進んだ。

「ところでキリト、さっき言つてた『真のSAOの始まり』ってどういう事だよ？」

「ああ、その事か…。実はこの層から人型MOBが出てくるんだよ」

ん？人型MOB？

今までも出てたよな？

「人型なら今までも出てたじゃない」

アスナ先輩も同じ事を思つたらしく、不思議そうに尋ねる。

それに答えたのはミトだった。

「コボルト達は亜人種と呼ばれる分類よ。二足歩行だけど人には見えないでしょ？これ

から出てくる人型は、ソードスキルの使い方も上手いのよ」

「つまり強くなるって事か？」

「そういう事。今まで以上に気を引き締めないと殺られるわよ」

ミトの物騒な物言いを聞いているとキン！キン！という戦闘音が聞こえてきた。

「戦闘音だ…。こつちだ!!」

「見つけたか！よし、行くぞ！」

「キリト、これって…そういう事？」

「ああ、そういう事だ!!」

「どういう事よ!？」

キリトとミトが何やら勝手に納得しているので、当然アスナ先輩は理解していない。

まあ、俺もなのだが。

とりあえず置いておき、音の方に向かうと2人のNPCが戦っていた。

「NPC同士が戦ってる？」

「選択肢は…変わってないわね」

「ああ、そうみたいだな」

「何よこれ？どうなってるの？」

俺とアスナ先輩は、何が起きてるか訳が分からなかったので、2人に説明を求めた。

「これが9層まで続くSAO初の大型キャンペーンクエスト、通称「エルフクエスト」だ。あの2人をよく見てみる。耳がとんがってるだろ？」

…本当だ。

あれはエルフだ。

耳とんがってるし。

「ここではあの2人のどっちに味方するかで、話の展開が変わってくるのよ。黒と紫の方が【黒エルフ】で、白と緑の方は【森エルフ】よ」

「2人はどっちにしたんだ?…いや、キリトはいいや、想像つく」

「お前も同じだろ絶対!」

「私は黒よ」

「なら黒にしましょう」

よし、決まった所で飛び出そうとした瞬間

「ち、ちよつと待て（待ちなさい）!」

突然、俺の襟首掴んでキリトとミトが止める。

「ゴヒュツ?!?!」

「大丈夫!」

今までで一番、死を覚悟したかも。

マジ危なかった…

「ゴホツゴホツ…何すんだよ!？」

「す、すまん…慌ててつい…」

「考え無しに飛び出そうとするからでしょう…あのエルフは7層のエリートクラス並の強さだから、私達じゃ、勝てないわよ」

…勝てない？

「勝てないってどうするのよ!？」

「大丈夫よ。こっちのHPが半分を切ったら、奥の手で助けてくれるわ」

奥の手ねえ…そういう割には

「あまり使いたくないって顔してるぞ」

「まあ…自爆攻撃だからな…」

「そんな…!？」

アスナ先輩が悲鳴じみた声を上げる。

確かにあまり気分のいい話ではない。

でもゲームとはそういうものだ。

「…先輩。多分これからこの手の話はどんどん増えます。だから割り切った方がいいと思います」

その言葉にアスナ先輩は少し黙っていると

「…わかった。要するに…私達があいつより強ければいいのね」

「…え!」

逆に関き直った!?このタイミングで!?

ていうかもう飛び出した!?

「「ちよ!?!待って!?!」」

sideアスナ

「割り切った方がいいと思います」

確かにそうかもしれない。

でも、やっぱりそんなの嫌だ。

あの時システムに抗って、剣を構えた君みたいに私も抗う。

だから

『人族がこの森で何をしている!?!』

『邪魔立て無用!今すぐ立ち去れ!』

「日本語を喋った!?!」

「アスナ、そこなのね」

2人の前に飛び出したら日本語で怒鳴られてビックリした。



「ここで敵対するエルフに剣を向けたら、クエスト開始だ」

「そう…恨みはないけれど…ごめんなさい」

そう声をかけながら森フォレスト・エルフエルフに切っ先を向ける。

『…愚かな…黒ダークエルフ如きに加勢するなど…』

『人族にも道理が分かる者がいるという事だ』

『…よかろう。ならば全部まとめて、我が剣の錆にしてくれる…!!』

突然オーラが変わる森フォレスト・エルフエルフ。

さっきまでとは違うプレツシャーに飲まれかけた瞬間、

「…!?アスナ!?」

目の前に森フォレスト・エルフエルフの剣が迫っていた。

ミトの声に反射的に避けようとした瞬間、ミトが割って入ってくれて、鎌で受けて止

めてくれていた。

「ツ！重い…!!アア!!スイッチ!」

強引にはじき飛ばした瞬間、私はミトの後ろから出てリニアアを放つ。

しかし

「ヌーン!」

「ぐっ!?!」

盾で私を吹き飛ばす森エルフ。フオレスト・エルフ

想定外の攻撃に体勢を崩され、技後硬直で動けない私を追撃してくる森エルフ。フオレスト・エルフ

その背後から

「…シツ!!」

ツキノワ君とキリト君が襲いかかる。

しかし驚異的な反応速度で防がれてしまう。

「スイツチ!」

「やああ!!」

今度は2人の後ろからミトが鎌を振るう。

鎌の形状から変則的な軌道を描くミトの攻撃を、まともに受けた森エルフはたたたらをフオレスト・エルフ

踏んで、体勢を崩す。

その隙を

『はあ!!』

黒エルフのお姉さんが、3連撃を叩き込んで更にダメージを与える。ダーク・エルフ

それぞれが距離をとって体勢を整えるが、みんな肩で息をしているほど、疲れていた。

「強いな…あいつ…」

「だから言ったじゃない…」

「キリト君、何かヒント…」

「…じゃあ…盾は遮蔽物って事…」

「…ああ、なるほど」

「あれで分かるのね…2人とも…」

作戦会議が終わった所で、全員の準備が整った。

さあ、ラウンド2の開始よ。

私とキリト君が駆け出す。

こちらに気づいた森エルフはキリト君のフェイクにつられ、盾を構える。

その瞬間私は盾の影に隠れて、背後を取る。

そのまま思いつきレイピアで貫くけど

「…ッ！硬あ!？」

フォレスト・エルフ  
森エルフはこちらを睨みつけ剣を振り下ろしてくる。

それをキリト君がソードスキルで相殺してくれる。

「ハア!! スイッチー！」

「やああ!!」

次にミトが斬りかかるけど、盾で全て防がれて、反撃を受ける。

「…くう…!？」

辛うじて防いではいるが、遂に弾かれて隙が出来てしまう。その時、ミトは笑っていた。

『終わりだ！人族の女鎌使い!!』

「ええ…あなたがね!!」

『「ハアア!!」』

『グツガアアア!!?』

トドメを刺そうとする森フォレスト・エルフエルフの後ろから、ツキノワ君と黒ダーク・エルフエルフのお姉さんが十文字に切り裂く。

『キツサマラアアア!!』

「…ぬるい」

森フォレスト・エルフエルフの苦し紛れの一撃を、ツキノワ君が鮮やかにいなして

『フツ!!』

黒ダーク・エルフエルフのお姉さんが貫く。

そこをツキノワ君が思いつき振りかぶって

「オラア！」

全力で殴り飛ばす。

あと一息。

ツキノワ君が私達に檄を飛ばす。

「みんな！このまま押し切るぞ！！」

「了解！！」

『ふっ…やるな人族のつがい達よ！！』

「…つがいじゃない！！」

この人、突然何言い出すのよ!?

outside

「はあ…はあ…」

「へ…どんなもんだよ…」

「すげえ…本当に倒しちゃった…」

「…でも…ここからは…」

「ああ、何が起こるか俺達にも分からないぞ」

「…何よ…少しは喜びなさいよ」

「そうだぞ、ゲーマーコンピ。血が騒ぐだろ」

「いや、こんなニデータラメなベータ破りは初めてだからな…」

「…まあ、血が騒ぐのは否定しないわ」

4人がそんな会話をしていると、死にかけていた森フォレスト・エルフエルフが訳分からない事を話し出

した。

『実に…無念だ…』

『!?それは!?』

懐から何か取り出した。

それを見た黒エルフは走ってそれを盗ろうとするも、その前に突如現れた大鷹がそれを奪っていく。

『貴様なんぞに…功を…譲ることになるとはな…!』

『やれやれ。どうして騎士というのはこう、気位だけは高いのでしょうか…。ですが、この通り秘鍵は私が預かりましたので、ご安心あれ』

こちらもいつから居たのか、突如現れた森エルフの元に届けてしまった。

「あいつは…!!」

『オレスト・エルフン・ファルコナー  
「鷹使いの森エルフ」!』

新手的強敵が現れた。

しかも多数の部下を率いており、頭数を一気に覆させられる。

どうするかとツキノワが悩んでいた時

『そうか…貴様か【鷹使い】』

黒エルフから放たれる尋常じやない殺気に思考が止まりかける。

キリトが呆然と眩く。

「殺気…？NPCが…？」

そんな殺気に当てられても当の鷹使いは飄々と

『はて？何処かでお会いしましたかね？敵方とは言え、これ程の美人を忘れるはずないんですが…。そういえば、これを奪った時に殺した薬師があなたに似ていたような…』

そう眩いた瞬間、一気に斬り掛かる黒エルフ。  
ダーク・エルフ

『おっと…すみません。あの時もそうでしたが…まずは一番弱いの中から決めていきます』

そう言つて鷹と共にアスナに襲いかかる鷹使い。

鷹がアスナを捕まえようとした瞬間、

「シツ!!」

鷹の足を切り裂くミトと、鷹使いに斬りかかるツキノワ。

堪らず距離をとる鷹と、そのまま鏑迫り合いをする鷹使い。

「アスナ！大丈夫!?!」

「ありがとう!!ミト！ツキノワ君!」

「…お前、覚悟を出来てるんだよな…」

『おやおや、怖い人族ですね…一体なんの事でしょうか?』

「なら、その身に教えてやるよ!!」

刀身を滑らせ、ツキノワは下から切り上げ、鷹使いは上から振り下ろそうとした瞬間  
ワオオオオオン!!

犬の遠吠えと共に1人の黒エルフが飛び出す。

『喜べ義弟よ…悲願は今日果たされるぞ』

『我が妻の仇【鷹使い】！ここで斬る!!』

ツキノワ達の間に入って、フォレスト・エルフ森エルフに襲いかかる。

「今度は何なんだよ!?!」

突然の乱入者に驚きを隠せないツキノワとアスナ。

「そうか！鷹使いの森エルフが来ているなら、こっちは！」  
フォレストエルブン・ファルコナー

「【黒エルフの狼使い】ね！」  
ダークエルブン・ウルフハンドラー

黒エルフ側の増援は狼使いだった。

そのまま動物同士と使い手同士で戦い中、ツキノワ達と女黒エルフはなし崩し的に、  
フォレスト・エルフ

他の森エルフ達と戦う事になった。

「もう！何がどうなってるの!?!」

「わかんないですよ！」

「諦めろ2人とも！もうとつくに巻き込まれちゃったんだ！」



「何に!？」

「決まってるでしょう!?!…彼らの物語によ!!」

## 16話

sideミト

「スイツチ！」

「ハアア！」

ツキノワの声に私は鎌を思いっきり振り下ろした。

思えばこうしてツキノワと2人で共闘って初めてかも。向こうではアスナとキリトが戦ってる。

あの2人も中々のコンビネーションだけど、私達は実の姉弟。

相性なら負けない。

「ツキノワ！どんどん行くわよ！」

「OK！あつちに負けられないよな！」

どうやらツキノワもあつちの事を意識してるらしく、珍しくノリノリだ。

そんな事はさておき、私は斬りかかってくる敵の剣を防ぐ。

そのまま鎌の内側まで落とさせ、鎌を支えにハイキックを打ち込む。

ふらついた所をすかさず切り上げ

「スイツチ！」

ツキノワと交代する。

「おおお!!」

ツキノワがソードスキル「ベア・ノック」を放ち吹き飛ばす。

その隙に右から他の森エルフフォレスト・エルフが襲いかかるのを、鎌を振り回し牽制する。

その振り回しの隙間からツキノワが飛び出し、蹴り飛ばす。

たたらを踏む森エルフフォレスト・エルフを「リーパー」で斬ると

「スイツチ！」

こつちに声をかけ、入れ替わる。

「ハアア!!」

私もソードスキルでエルフを鎧ごと切り裂き、1人倒す。

するとさつき吹き飛ばされたエルフが戻ってきてツキノワと斬りあっていた。

『仲間をよくも!』

…やはりNPCにしてはかなり人間味がある、ありすぎると思う。

そう思っている間に、ツキノワが「フアラント・フルムーン」で斬り伏せる。

「ミト、終わったぞ…ミト?」

「え、ええ…お疲れ様。強くなったわねツキノワ!」

「…何考えてたの?」

「どうやら筒抜けらしい。」

「隠すことでもないしね。ただNPCがすごい人間味があるなって思っただけ」

「確かに…まるで本物の…いや、そうか彼らにとつてここが現実なんだ」

…そうか。私達にとつてはゲームの世界でも、彼らにとつてはこの世界こそが現実世界なんだ。

そう考えれば違和感が無くなってくる。

そう考えてると

『貴様の相手はこつちだ!鷹使い!人族の女!邪魔だから下がつてろ!』

狼使いの声が聞こえ、そつちを向くと鷹使いにしつこく狙われるアスナがいた。

「ミト!」

「ええ!行くわよツキノワ!」

私達はアスナに向かって走り出す。

その時大鷹がアスナに狙いを定め、急降下してくる。

「私が行くわ!」

私は鷹に向かってソードスキルを放つ。

当たりはしないものの、牽制にはなる。

距離をとろうしたところに狼が襲いかかり、私達を守ろうとする。

「あなたもアスナを守ってくれるの？」

ワフツと返事するのでアスナと共に頭を撫でてあげてると

「邪魔だ！狼使い！」

『貴様がどけ！人族！』

ツキノワと狼使いが言い争っているという訳分らない自体になっていた。

『戦っている最中だと言うのに…余裕ですな…！』

その際にアスナを殺そうと動く鷹使いだが、その前に2人が剣を振るい、足を止めさせる。

「…まずこいつからだ。お前は後回し」

『…そうだな。敵討ちが先だ』

どうやら仲直りというか、休戦するらしい。

そのまま斬りかかる2人。

お互いの事をまるで考えてないその動きは、何故か調和がとれており、隙がなかった。

このままだとマズいと思ったのか撤退を宣言しだした鷹使い。

『はあ…やめやめ！犬臭くって興が削がれるったらない…。また今度にしませんか？』

『我々が貴様を逃がすとも？』

『そっちはその気でも…ほら、秘鍵は手に入れましたし…ね?』

そう言つて秘鍵をチラつかせる鷹使い。

「ねえ、あれつてなんなの?」

アスナが小声で聞いてくる。

「秘鍵は文字通り、このクエストのキーアイテムよ。あれをとられると、どうなると分からないわ…」

「…つまりあれは黒エルフの物つて事?」

んー、どうなるのだろう。

少なくとも私達にとってはそうなのだろう、一応肯定しておく。

『ここで質問です。これを…こうしたらどうするでしょう?』

そう言つて鷹に秘鍵を持たせ、飛ばす。

『このままですと我々の野営地までひとつ飛びですよ?さあ、私怨か任務か…どちらを優先しますか?』

嫌らしい奴…そう思い齒を噛み締めていると

「させるもんですか!!」

アスナが突然飛び出し、木を登つて空高く飛んだ。

「アスナ（先輩）!?!」

そのままソードスキルで鷹を攻撃し、秘鍵を奪い返すけど  
「わ、わわ!？」

怒った鷹がアスナを掴まえて急降下しました。

「まさか!?!地面に叩きつける気か!?!」

「アスナ（先輩）!？」

私とツキノワは同時に走り出した。

けれども他の森エルフが道を邪魔してくる。

「どけえええ!!」

私がまとめて力技で薙ぎ払う。

そこに出来た道をつキノワが全速力で駆け出し、包囲網を突破する。

更に私達を抜いて狼が駆け抜け、鷹にタックルする。

そしてそのままアスナをスライディングキャッチするツキノワ。

「大丈夫ですか!?!先輩!？」

「う、うん…ありが!?!ツキノワ君!？」

その隙を鷹使いが狙い澄ましたかのようにツキノワに斬りかかる。

剣をしまった状態のツキノワには抵抗できず、切られてしまう。

そう思った瞬間、

「…え？」

狼使いが2人を庇って切られていた。

sideツキノワ

『愚かですねえ…人族の出しやばり娘の為に身を呈して庇うなんてねえ…!』

『ぐおおおお!!』

俺達を庇って切られた狼使いはそのまま鷹使いに斬りかかる。

そしてその後ろから狼が襲いかかるが、更に後ろから鷹が爪を向けていた。

「やめてええええええ!!」

アスナ先輩の悲鳴も虚しく

『往生際の悪い…さっさとそこをどきなさい』

1人と1匹はそのまま地面に伏してしまった。

俺はそれを見てる事しか出来ず、悔しくて堪らなかった。

『さて、それを渡してくださいませんか？人族の女剣士よ』

そう言つて手を差し出すその男に俺は斬りかかった。

『…危ないですね。当たったらどうするんですか？』

腹が立つ言い方をするそいつに、俺は何も答えずただ剣を構えた。

全身を脱力させ、右手は剣を握る最低限の力だけ。



切つ先を下げてただ静かに敵を睨む。

『おや…怖いですね、そんな目をされては!?』

お喋りを始める前に逆手に持ち替え、右逆袈裟に斬りあげる。

それは防がれたので、そのまま左袈裟で切り返すも、それも躲される。

だからその勢いのまま、剣を捻りながら水平に構え直し、突きを放つ。

剣で防ごうとしたのでインパクトした瞬間、一気に力んで吹き飛ばす。

ゴロゴロと転がっていく鷹使いを追いかけて、起き上がった所を首めがけて、横に薙ぎ払う。

鏑迫り合っていると後ろからアスナ先輩が、がら空きの腹に「リニア」を打ち込んでいた。

更に吹き飛ばしたが、その勢いを利用し木の上に飛び乗った。

「アスナ！ツキノワ！」

ミト達を追いついてきて、俺達に並ぶ。

『うちの一個分隊が全滅とは…敵ながら見事。』

それに比べて…うちの連中はどうしてヘナチヨコの役立たず連中なんでしょね!?!』

突然そう喚き散らしたと思えば、ため息ついて、頭を切り替えたらしい。

『ま、仕方ありません。厄介者を一つ片付けただけで良しとしましょう』

『待て！このまま終わらせてなるものか!!』

『もちろん、秘鍵は頂戴致しますよ？ですが仇討ちごっこに付き合う気はありません。…なにせ、私は貴女方に興味はありませんので』

そう言つて鷹に飛び乗つて去つていく鷹使い。

女黒エルフの慟哭だけがこの場に響き渡つた。

sideキリト

俺達は狼使いの最期を看取つていた。

『義姉さん…』

『安心しろ…秘鍵は取り返したぞ。そして奴は必ず私がこの手で仕留める。だから…』

『今度は…』

そうして狼使いは何故かアスナを見ながら

『今度は…間に合いましたよ…義姉さん…』

そう言つた。

何故アスナを見ながらかは分からなかったが、狼使いはアスナ越しに誰かを見ている気がした。

『…そうだな…胸を張つて逢いに逝け…』

そう言つて狼使いは息を引き取つた。

（これがNPCなのか？確かに前もって設定しておけば、リアルな感情表現が可能とはいえ、余りにもリアルすぎる…これは一体なんなんだ？）

そう思いながらミトを見ると、ミトも困惑していた。

彼女も重度のゲーマーだ。

だからこそ、このNPCのリアルさに戸惑っているのだろう。

『叶うならそなた達も覚えていて欲しい…私の無二の戦友であり、我々リユースラ随一の狼使い、そして…亡き妹の最愛の男だった』

そんな主人を弔うように狼が遠吠えをした。

その声は森中に響き渡った。

『秘鍵を…その包みを渡してくれないだろうか』

「は、はい！」

アスナが黒ダークエルフに秘鍵を渡す。

『ありがとう。おかげで秘鍵は守られた。司令から褒賞があるだろう。すまないが野営地まで着いてきて貰えないだろうか』

（クエストは問題なく進むらしいが…）

俺はアスナとツキノワを見る。

2人ともかなりキてるだろう。

このまま進んでいいのだろうか…

「キリト、まさか降りるとか言わないよな」

突然ツキノワが話しかけてきた。

その目は強く、引かないだろうというのが、目に見えて分かるくらいだった。

「私も降りないわよ」

アスナも続いて強く宣言する。

「アスナ…ツキノワも…大丈夫？」

「ありがとうミト。でも大丈夫だよ」

「当然。全然行けるぞ」

ミトも2人が心配だったのか不安そうに聞くも、2人ともしつかり返事を返す。

「それじゃ、お言葉に甘えます」

『結構。野営地はこの森を南に抜けた先だ。着いてこられよ。』

その後ろ姿は肩を落としてるように見える。

こうして俺たちは黒エルフダーク・エルフの野営地に向かった。

outside

野営地に着いた5人はそのまま司令官に会い、褒賞を受け取った。

『…考えてみればまだ名前を聞いてなかったな』

「ああ、俺はキリト。」

「ツキノワだ。よろしく」

「ミトよ。よろしく」

「アスナです。よろしくお願いします」

それぞれ名乗ったところで、黒エルフは改めて彼らの名前を呼び、ダーク・エルフ発音を合わせた。

発音調整シックエンスと呼ばれるものだ。

『人族の名前は複雑だな……よろしい。』

そう言いながら両踵を合わせ、心臓のある部分を拳で叩いた。彼らの敬礼である。

『私の名は「キズメル」。リユースラ王国近衛騎士団が1つ、「エンジュ騎士団」の末席に名を連ねるものだ。以後、よろしく頼む』

あまりの高貴さに4人は反射的に

「「「よろしくお願いします!」」」

敬語で頭を下げていた。

『ふむ。まずは天幕に案内しよう。4人だと手狭だろうが余裕がなくてな』

「「あ、ありがとう…?!」」

「「4人一緒?!」」

## 閑話休題②

sideツキノワ

驚きのまま案内された天幕は俺達4人でも充分な広さではあった。

「まさか…今日ここで…」

「4人一緒に…?」

呆然と呟くキリトとミト。

「危険よ!!野宿より危険だわ!!」

「失礼な」

あまりの言われように、ついキリトと共に突っ込んでしまう。

『すまないが客用の天幕は用意できなくてな、ここは私のなんだ』

「なら良かったー!」

「先輩、いいんですかそれ?」

『ああ。夜警の際は十分な時間戻らないから安心しろ』

「「「いや、ほんとそういうの結構なので」」」

口を揃えて否定する俺たち。

「とりあえず、両端はアスナとキリトね。その隣に私とツキノワでいいわね」  
「OK。それが1番安牌でしょ」

「それとも、お姉さんと一緒に寝たいかしら？」

「…ハン」

思わず鼻で笑う。

「あんた鼻で笑ったわね!？」

適当にやり過ぎしている

『ミトとツキノワは姉弟なのか？』

とキズメルが尋ねてくる。

「ええ、そうよ。私が姉なの。毎回弟の無茶ぶりには、冷や汗をかくわ」

『ふむ…私も妹の行動に何度冷や汗をかかされたか…』

突然、姉談義を始める2人。

「キリト、何故そこで頷く？」

「俺も兄だから、一応な。2人の気持ちも分かる」

「へえ、意外ね。どちらかと言うと弟みたいだけど」

「失礼な！失礼な！大事な事だから2回言ったぞ」

姉談義を見ながら話す俺達。

『さて、陣中ゆえ大したもてなしは出来ないが、この天幕は自由にしてくれ。食堂に行けば何時でも食事は摂れるし、簡素だが風呂もある』

「！お風呂もあるの!?!」

へえ、マジか。

それは驚いた。

『当然だ。野営地とはいえ、浴場用の天幕は常に用意している。』

「…1つだけだが」

「1つつてどういう…」

「…要するに混浴よ。…後天幕だから鍵も無ければ扉も無いのよ…」

ミトが恥ずかしそうに呟く。

なるほど、それは女性陣には恥ずかしいだろうな。

「俺達が見張りするよ?」

「そっちの方が危険よ!?!」

「キリトは前科あるでしょ!?!」

…は?

「おい、キリト…どういう事だ?」

「つ、ツキノワ…ちよつと待て…落ち着こう!落ち着いて話をしよう!」



「ああ、俺は落ち着いてるぞ？落ち着いてるからほら、話してご覧？俺が席を外した間に一体何があつたんだ？」

「剣をしまえ！剣をしまつてくれ！アスナ！ミト！助けてくれ！」

「…」

「キリト…オハナシシヨウカ」

「頼むから落ち着いてくれー！！！！」

sideアスナ

「わあ…！本当にあつた！」

「…2人とも、しっかり見張つてなさい」

「へいへーい」

「…了解デス…」

そう言つて風呂に入つていくミトと私。

外にキリト君やツキノワ君がいることを恥ずかしく思いながら、メニューを操作して服や髪型を変えていく。

ふとミトの体を見ると、スラツとしていて無駄な所が一切なく、まるでモデルみたいに綺麗な体つきをしている。

「…何、どうしたの？アスナ」

「ミトって綺麗な体してるよね」

「ちよ、ちよつと何言ってるの……アスナだって出るところは出て引つ込んでるところは引つ込んでるじゃない。理想的な体型してるわよ」

「は、恥ずかしいよ……ミトだって無駄なお肉は一切無くて、スラツとしてて、まるでモデルさんみたい！」

「ふふ……ありがとうアスナ。でもここまでにしましょ？」  
と言いながら指を刺すミト。

そこは天幕の入口でここが布で囲まれただけの空間である事を忘れていた。

「ッ！2人とも!!聞いてた!!」

「え!?あつ!?何を!」

キリト君の返事はきたがツキノワ君からは返事はない。

「ちよつと!?!ツキノワ君!」

更に問いただそうとした時

「ツキノワ?もしかして寝てる?」

キリト君の声が聞こえてきた。

「え?寝てるの?」

「あちやくあの子どこでも寝れるから……それに色々あつて疲れたのかも。キリト、その

まま寝かせてあげて。これ使っていいから」

そう言つてメニュー画面から毛布を取りだし、入口に投げるミト。

「うお!? ありがとうミト」

「気にしないで。こつちこそごめんなさい。弟が迷惑かけるわ」

「それこそ気にすんなよ。こつちは大丈夫だからゆつくり入つてくれ…キズメル?」

『邪魔するぞ』

そう言つてキズメルさんが入ってくる。

「キズメルさんも今からですか?」

『さんは不要だ。失敬するぞ』

そうして装備を解いたキズメルを見て

(男が作ったファンタジーだ)

その規格外のプロポジションにそう思う私。

きつとミトも同じ事を思ったのだろう。

2人でボーツと見ていると

『2人とも、感心せんぞ。掛け湯をしろ』

「「あ、はい」」

まさかエルフに入浴マナーを言われるとは。

そう思いながら掛け湯をして、湯船に浸かる。

「はあああああ……」

気が緩んだ私達の声と顔を見られる。

『妹を思い出していた。あの子も湯浴みが好きだったからな』

「妹さんって……狼使いのお嫁さんっていう」

『うむ。見かけによらず気の強い嫁と腕に似ず少年のような旦那でな。そぐわぬようだなかなか似合いの夫婦だった……キリトとツキノワとは長い付き合いなのか?』

「キリトとは数週間、ツキノワはまあ、姉だから」

「同じくキリト君とは数週間、ツキノワ君は1年弱です」

『ほう、アスナもツキノワとは長いのだな。あの連携は納得だ。キリトとも中々の息のあいようだったぞ2人も。まあ、アスナの場合はキリトや周りが合わせてる節があるがな』

そう言われ、今日の事を思い出す。

確かにそうだ、みんな私に合わせて戦ってくれていた。

『そなたが存分に無茶が出来るのは、常に傍で見守る者がいるからこそだ。その献身を軽んじる事の無いようにな』

そうだ、私のせいである人は……

「ごめんなさい…」

「アスナ…?」

「私が調子乗って出しゃばったばかりに…」

『違う! そうでは無い! …人族も苦しい戦いを強いられていると聞く。背中を任せられる相手は、大切にな。後は早めに素直になっておく事だ。…すまない。余計なお世話だったな』

「いえ、善処します…」

いなくなつてからでは遅い。

きつとそういう事を言いたいんだらうなつて思った。

確かに、たまにツキノワ君が何処か遠くに行つちやうのではと思う時がある。

帰つてくると約束したとはいえ、それに甘えすぎたかな。

そう考えていると

『ミトよ。そなたも無茶が多い闘い方だったぞ。ツキノワという上を行くものの陰に隠れていたが、そなたも危ういぞ。何があつたかは分からんが、己が命をかけてできることなぞたかがしているぞ。生きてこそぞだという事を忘れるな』

「…はい」

そのまま私達はゆっくり浸かった後、お風呂場に入ってきた狼を洗つてあげてお風呂

を出た。

そこにはびしよ濡れのキリト君と、ぐっすりと眠ったツキノワ君がいた。

「ツキノワ、起きなさい。ツキノワ！」

ミトが肩を揺らして起こす。

「んん…」

少しづつ目を開けるツキノワ君。

「ほら、ツキノワ君。速くお風呂入ったら？キリト君、悪いんだけど付き添ってあげて？」

「このまま入ったら濡れそうだな…ほら、行くぞ。ツキノワ」

そう言ってキリト君に先導されながらお風呂場に入っていく。

寝ぼけてたツキノワ君、可愛かったなくそう思っていると

「アスナ、ツキノワの事考えてたでしょ」

「み、ミト!?何言ってるの!?!」

『なるほど、アスナはツキノワが好きなのか?』

「ちが!?!私は!?!」

『ああ…そういう事か…』

「ええ…そういう事よ…」

2人に生暖かい目を向けられる。何、なんなの!?

「2人揃って何なのよ!!!」

outside

夕飯を食べ、キズメルの天幕に戻った俺達は最初に決めた順に寝たが、ツキノワは寝れないでいた。

さつきまで寝てたのと、色々あつて考えていたからだ。

そのまま剣を腰に差し外へ向かう。

フラフラと森を歩いていると、そこには無数の剣が突き立てられていた。

「…まるで、墓標だな…」

『まさにその通りだ』

いつの間にか後ろにキズメルが立っており、手には皮袋と剣が握られていた。

その剣の柄には2つの指輪がチェーンで繋がれており、そのデザインはまるで、婚約指輪みたいだった。

「…狼使いの剣か?」

『ああ、そうだ。あやつらの剣と指輪だ』

そう言つて木の真下に剣を突き刺し、皮袋を煽った。

『飲むか?』

「ありがとう…辛!? 苦!? お酒かこれ!」

キズメルから貰った袋の中身はワインらしきもので、ツキノワには刺激が強すぎた。

『月涙草のワインでな、妹の好物だったんだ…本当はあやつらの祝いの席で振舞おうとしたやつなんだが、あの時以降は、仇をとったら義弟と飲もうと思つてたんだが…今やそれも叶わない』

そう言つてそのワインを剣にかける。

『ミトとお前の話をした。昔からよく無茶をするらしいな。少し姉の気持ちも考えてやつてくれ。下に無茶されると、上は不安でしょうがないんだ』

「…善処する。」

2人は静かに月を見上げる。

『そろそろ戻るといい。体を冷やすぞ。…ちゃんと送り届けてやるのだぞ』

「わかつてるよ…ほら、行きますよ? アスナ先輩」

「…氣づいてたんだ」

「キズメルもね。それでどうしたの?」

「…ミトとキリト君に言われたわ。割り切つておけと。…でも私にはできないよ。たとえ作られた存在だとしても、あの時言葉を交わし、その存在を感じて、私の為に大切な何かを失つたんだよ!?! だから私は私自身の手でケリを付けたい。これは…私の物語な



んだから！」

アスナは強くそう言い放つ。

ツキノワは全部聞いて

「いいんじゃないですか？先輩がしたいのなら」

あつさりとそれをいいと言った。

「…え？」

「俺達にとつてはここはゲームの世界です。でもこの世界の住民からすれば、ここが現実なんです。だから…無理にこっちの常識に合わせる必要なんてないんですから」

穏やかに告げるツキノワ。

どつちも正しい。

その終わりをどうするのか、ただそれだけだった。

「…そうだよね！私が物語を作るんなら、私の思い通りにやればいいんだよね！」

アスナは元氣を取り戻したように言う。

そんな様子にツキノワは微笑みながら、上着を被せる。

「さあ、速く天幕に戻りましょう？ミト達が心配しちいますし」

「そ、そうだね…ありがとう…」

（わー！わー！ツキノワ君の上着を被された！暖かいし！いい匂いする！）

思わず赤面させるアスナ。

ツキノワは寒いからかと思いきや、それをスルーしていた為、気づいてなかった。  
そうして、幻想的な夜の森を、2人は歩いて天幕に向かった。

## 17話

outside

「もう一度いつてもらえるかしら」

ニッコニコの笑顔、ただし目は笑ってないミトと、苛立ち剥き出しで、睨みつけるアスナ。

纏うドス黒いオーラ以外全く真逆な反応を見せる2人にタジタジのリンドとキバオウ。

そしてその様子を

「…どうすんだよ、あれ」

「…どうしような、あれ」

困った様に呟くキリトとツキノワがいた。

話は少し前に遡る。

お礼がてら、クエストがてらで野宮地周りのデカイ蜘蛛を狩り尽くした彼らは、アスナとミトの新しい武器である「シバルリック・レイピア」と「シバルリック・サイス」を片手に、全体会議へ参加する為、3層主街区「ズムフト」にやってきた。

そこでキバオウ達から

「パーティを解散して欲しい」

と言われ、2人がブチ切れて冒頭の台詞になる。

「この3層で俺達はようやくギルドを立ち上げた。俺が率いるDKB、キバオウさん率いるALS。今後はこの2大ギルドは互いに切磋琢磨しながら攻略を進めていくと思われる。そこで大事になるのが両ギルドの戦力の均衡だ。そこでだ：4人にはパーティを解散してもらいたい。」

リンドの説明を聞く限り、知った事じゃないと思うツキノワ。

その遠回しの説明に辟易している中、リンドの釈明は続く。

「ミトとツキノワに関しては、実の姉弟という点を考慮してコンビでも構わない。ただ4人の戦力は突出している。全員をまとめて引き入れる事は出来ないんだ：分かってくれ」

リンド達の言い分は決して的外れでは無い。

彼らの実力はかなり高い。

それこそボス戦の勝敗を左右させる程には大きいファクターのだ。

だが、それらは彼らの事情を考慮しない結果の話だ。

そもそも2人のギルドに入る気などない彼らにして見れば、ありがた迷惑もいい所だ。

「それは何か？つまりどつちかに入らないと締め出されるって事かよ？」

「…いや、そういう訳じゃない」

「だつたら無所属でいいじゃないか！」

「…ほなおどれは当面の間、ギルドに名を連ねるつもりは無い…そういう事でええんやな？」

「…お、おう…？」

「「はあああああ…」」

何とも気の抜けた返事をするキリト。

それに対して露骨なため息を着く他の3人。

「これだから人族は…」

「アスナ先輩、気持ちは分かるけど貴方も人族ですから…」

アスナの発言に同意しながらも宥めるツキノワ。

「貴方も鈍い、鈍すぎるわキリト。この人達は藪蛇したくないみたいだから、私が翻訳してあげる。ねえキリト…貴方、ギルド作る気ない？」

「は、はい？…ギルド？…俺が？」

ミトの翻訳にさらにツキノワが続ける。

「そう、DKBでも、ALSでもない。第3のギルド」

「いや、ないない！俺なんか立ち上げたギルドに入るやつなんて…」

そう言いながら周りを見ると、意外に乗り気な意見がほとんどなので少し焦るキリトは

「…いや、無いな。俺はソロが性にあってる」

ひよって逃げに入った。

(逃げたな)

(逃げたね)

(逃げたわね)

3人揃って同じ感想を抱いてジト目でキリトを見ていると

「つ、ツキノワはどうなんだよ!?第3のギルドならツキノワだつて作れるぞ!」

「はあ?俺が?ムリムリ!集まっても仲いいヤツしか来ないって!」

キリトはそんな目に耐えきれなかったのか、ツキノワに話を振ったが、ツキノワもあつさりと断った。

「では、アスナさん、ミト。2人はどうだろうか?」

「嫌よ」

即答。

あまりの早さにみんな唾然としていた。

sideツキノワ

森に戻って数日後、俺達とはある野营地まで来ていた。

目的はこの森フォレスト・エルフエルフの野营地にある、作戦司令書を他のプレイヤーより前に回収するためである。

「……だな」

「よし！やる…!？」

行こうとした俺は突然人の気配がした方へ振り返った。

「キリト！」

「ああ、誰だ!？」

キリト気づいていたらしく、気配の方へ声を張り上げる。

「いや、すつごいな、この隠蔽率で看破されたのは初めてですよ」

「この声、何処がで…まあいい。」

「こんな所で何してる？」

「何ってそりゃ、野营地の警備…つてうわあ！キリトさんじゃないですか!？」

突然キリトを見て興奮しながら詰め寄る不審者。

キリトはかなり困っており、俺もその熱狂ぶりにドン引きしていた。

「それにそちらはツキノワさんツスよね!」

おっと、俺にも飛び火してきやがった。

これは早々に鎮火しよう。

「なあ、お前は森フオレスト・エルフエルフ側っぽいけど俺達行っつていい?」

「別にかまいませんよ?」

「は?」

こいつ何言っつてんだ?

そんな事したらクエスト失敗だろうに。

「まあ、ただお通ししたんじや面白くないんで…決闘で決めませんか?」

…なるほど。剣で解決しろってことか。

面白い、やってやる。そう思い受けようとした瞬間

「いいね…ベータ時代とは違って【完全決着モード】が出来ないのは、ちよつとヌルいけど」

キリトさんや、何故そんなにノリノリで悪者ムーブしてるんだ。

実はそういうの好きだろお前。

「そういう訳だから…ツキノワ、後は頼む」



「はいよ…無理すんなよ」

俺はキリト達の元を離れ、指定の位置まで移動した。

そこには何時もの2人とキズメル、そしてアルゴだった。

「4人ともおまたせ。こっちは手筈通りにキリトが誘導した」

『よろしい、では参ろう。これより敵本陣への呐喊を開始する!!』

「「違…ッ!?潜入!」」

「チツ…DKBの連中か…」

「多いわね…」

陣の中にはDKBが警戒しており、中々動けないでいた。

「キズメル…もし人族との戦闘になったら、お願い。命だけは奪わないで」

ミトがキズメルに懇願する。

確かにそれは避けたいところだ。

この先に行くにはあんな連中とは言え、必要不可欠なのだ。

『異なることを言う。彼の者らへ手を貸すのなら、我らに弓を引いたも同然。ミト、如何に

そなたらと同族であっても、それでは道理が通らぬ』

悔しいがそれは正論だ。

極論、味方以外は全て敵。

それらに情けをかける必要は無い。

キズメルの言い分は最もすぎて、俺達は言い返せない。

「そうよね…。それはそちらも一緒なものね…。私達もそのルールに従うべきなのかもしれない…。それでも」

「それでもお願い。上層を目指す私達には彼らの力が必要な。ここで失う訳には行かない。だから」

「お願いします」

そう言ってミトとアスナ先輩は頭を下げた。

その2人を見て、キズメルはため息を着くと、何処か懐かしむように笑いながら言った。

『…昔、狼の群れに襲われた時、妹に子狼の助命をせがまれた事があってな…昔からその目には弱い。分かった、人族との戦闘は極力避けよう』

「…!!ありがとう!」

こうして俺達4人の潜入任務始まった。

俺達は、俺・アスナ先輩・アルゴ組とキズメル・ミト組の2手に別れて、別々の旗付きの天幕を目指した。

どうやら俺達が当たりを引いたらしく、酒に酔って潰れてる司令官の机の上に置かれ

ていた。

こつそりと盗ろうとした瞬間

「侵入者だー!!!」

外からの声に飛び起きた司令官は指示書を持ったまま外に出てしまった。

『これを取られる訳には…：そうであった！鷹使い殿！鷹使い殿はおられるか!?!』

鷹使い、だと？

俺とアスナ先輩は目の色を変え外を見た。

その時

『こつちも取り込み中なんですけどね…』

その嫌味つたらしい声のした方を向くと

『おおおおお!!!』

キズメル達が天幕の中から戦いながら飛び出してきた。

俺達はすぐに飛び出そうとするが

「ああ!?!邪魔も大概にせんとシバくぞワレ!?!」

キバオウ達A L Sと、リンド達D K Bが一触即発状態だった。

「クツソが…：こんな時に!」

「これだから人族は…!」

俺達は先にそちらを片付けようとする」と

「貴方達はあつちを優先して！」

ミトが走りよってきた。

「私がベータ時代の話をしながら時間を稼ぐわ！その間にあの作戦指示書を奪って！そうすればこの場所に意味はなくなる！アルゴ！貴方は私を手伝って！」

「ああもウー！しようがない！やっつてやル！」

「ミト！お前は?!」

ミトは俺と違つてあまり精神的にタフでは無い。

恐らく戦うのと一緒くらい、人に悪意を向けられるが怖いはずだ。

「…大丈夫よ。私は姉だもの。たまには姉が後ろを支えてあげるわ」

そう言つて俺の頭を優しく撫でる。

その温かさに肩の力が抜けてきて、頭がクリアになつてくる。

「…姉貴、頼んだ」

「ミト！行つてくる」

「行つてらっしゃい2人とも。無理はダメよ」

その言葉を受けながら俺達は走り出す。

「先輩！2手に分かれて！俺が先に切るますから、反対からぶつ飛ばしてください！」

「了解！全力でやるわ！」

こうして俺達は隙を伺うため、姿を隠しながら戦場へと向かった。

## 18話

sideミト

2人の背中を見送った私は、弟の成長への嬉しさと誇らしさ、そして一抹の寂しさを感じながら、アルゴと共に仲裁に向かった。

「姉も大変だな、ミーちゃん」

走りながらアルゴが話しかけてくる。

確かにあの子の姉は大変だ。

昔から目を離すと、すぐに何処かへ消えている落ち着きのない子だ。

毎回両親共々、探し回っていた記憶しかない。

その為、私は絶対にあの子の手を放さなかった。

そのツキノワ…優月の手を初めて離れた気がする。

「…大丈夫よ。あの子は強くなった。心も体も。だから、私はあの子の戻る場を守る為に戦う。それが姉の務め。さあ、ここからが私達の戦いよ！アルゴ、やるわよ！」

「…参ったナ。これじゃ姉なんて自称出来やしないナ。OKミーちゃん！姉の意地見せるゾー！」

その言葉を受けながら私は、鎌を思いつきりぶん投げた。

リンドとキバオウの間に向けて投げたそれは狙い通り、真ん中に刺さった。

私はその上に飛び乗り

「そこまで……ここは私が預かるわ!!!」

強く宣言した。

「なるほど……つまり俺達が聞いた情報は……」

「全くのデマ!!100%デマ!そんな事実は一切ない!」

「このエルフクエストの報酬は確かに金と経験値、後素材よ。確かに品質はいいだろうけどボス攻略に直接関係するものはないわ」

私達はベータ時代の話を全部話して、何とか諍いを治めていた。

「言い切りよったで……こいつら……」

「し、信用できるか!2層のボスの情報だつて隠してたじゃないか!」

またこいつね、学習してないのかしら?

いえ、してないのね。

「あれもベータとの変更点よ。あんなヤバい奴隠して何のメリットもないわよ。考えて物言ったら?」

私は呆れながら言い返した。

悪いけど、貴方に付き合う気は無いわ。

「今回もその変更は？」

「その可能性は否定しきれない。だったら代表を立てて調べさせればいい話だ」

「その誰かってのも「悪いが、これ以上の御託は無しだ」!？」

「この口が顧客を欺くと思う者は前にでろ!!」

アルゴが堂々と大見得を切つて言い放つ。

誰もその言葉に反応する者はおらず、場は丸く治まる。

「結構、そういう訳でエルフクエはミーちゃん達に任せてほしい。もし何らかの情報が  
出た場合、アルゴの名に懸けて、全体に共有すると約束すル」

アルゴとキバオウ達の話聞きながら、私は振り向く。

そこには多勢に無勢な戦況にも関わらず、一切怯まない3人の勇姿があった。

「ミーちゃん、こっちはオレツちに任せて行つてこい!」

「…!ありがとう!アルゴ!行つてくる!」

そう言つて私は走りながらツキノワの元へ走り、構えた。射程に入った瞬間、ツキノワはわざと空けておいてくれた剣線に沿つて、全力でふるい、鎧ごと両断する。

「おまたせ!ここからは私も行くわよ!」

outside



激しい剣戟の中、鷹使いの一撃がキズメルの胸部鎧を捉える。その瞬間、鎧が砕け散る。

その様子を片や全身を脱力させながら、片やじつと睨みながら構える2人の剣士。

『おや、失礼…：それにしても何とも嘆かわしい！音に聞こえし我らが仇敵！リユースラ王国のエンジュ騎士団が！貴方のような美しくか弱い女性を前線に送るとは…：どうです？こちらに寝返りませんか？厚遇しますよ』

『フン、案ずるな。最近見込みのある見習いを仕入れてな。我が騎士団は益々隆盛になるだろう』

『それはそれは。是非1度ご挨拶申し上げたいですねえ』

『ほう？今すぐにも紹介したいのだが。はて…：こういう時なんと云ったかな…：ああ、思い出した』

ジリツ…：ザツ…：2人は今だと、静かに剣をぬく。

『すいっち』

『は？何を言っ』

ズザンツ!!!それ以上鷹使いの言葉は続かなかつた。

右脇から全速度・全臂力で、イビルファンクに斬り込まれたからだ。

「…ツ!!!」

剣士ツキノワはそのままバットでも振り抜くかの様にソードスキル「フィール・クレセント」を放った。

鷹使いが吹き飛ばされるその直後、今度は真反対の左脇から衝撃が走った。

ズドンツツ!!!とこちらも全速力・全精力で、シバルリツクレイピアで貫かれたからだ。

「…ツツ!!!」

剣士アスナは体を更に拗らせ、まさに銃弾の原理で鷹使いを吹き飛ばす。

「…ねえキズメル? 見込みがあるって本当?」

アスナはキラキラさせた目でキズメルに尋ねる。

「…ウム、大いにな…」

(人の事言えないけど、NPCが引いてるの初めて見た…)

ツキノワはそんなキズメルを見て、自分達の規格外つぷりを再確認していた。

『やれやれ、前にも思いましたが、人族には過ぎた業物ですねえ。それにそちらの女人族のものも、すぎた業物のようですね』

そう呟きながら、立ち上がる鷹使い。

その周りに集まる6人の森エルフ。  
フォレスト・エルフ

「ひーふーみー…6人か…」

『多勢に無勢か…?』

「雑兵でしょ」

「余裕でしょ」

キズメルの警戒する声に、軽く一蹴するツキノワとアスナ。キズメルは驚いた様に2人を見る。

『…そなたらがいてくれて本当に良かった。お陰で仇敵を前にしても、平静でいられる。さて、見習い騎士達よ。かような戦況の際、とるべき戦術は？』

2人を確かめるように見るキズメル。

その視線に2人は笑うながら、まずアスナが答えた。

「もちろん！まずは…一時撤退！」

そう言つて3人は身を翻して逃げる。

ついでに煽るツキノワ。

そのまま天幕に滑り込んで、勢いで反対に出る。

次はツキノワが答える。

「からの、敵の分散！最後は…」

逃げる際、天幕を支える柱を斬つて天幕を崩させる。

3人を追いかける為、中に入っていた3人の森エルフを中に閉じ込め、崩れた天幕を超えながら、アスナとツキノワは高らかに宣言する。

「各個撃破!!!でしょ?」

『正解!』

そのまま外にいた3人を斬り払い、蹴り飛ばす。

慌てて出てきた3人は、ツキノワがまとめて相手する。

1人には逆袈裟で斬り、隣にいた敵にはそのまま振り下ろす。

罅迫り合っている内に、後ろから襲われそうになるが、正面の敵の胸ぐらを掴み、足を払ってこかさせようとする勢いのまま持ち上げ、後ろに投げる。

慌てて受け止めたエルフを2人まとめて「リーパー」で吹き飛ばす。

最初に斬ったエルフが襲いかかるがそれも読んでいたのか、体を捻りながら躲し、その遠心力を利用しながら首を斬り落とす。

「…残り2人」

眩きながら2人に斬りかかる。

正面から右袈裟に斬りかかり、それを盾で防がれる。

その隙に左からもう1人が突きに来るも、それをスウエーで躲しそのまま腕を掴み、投げる。

一旦距離を取ろうとバックステップするも追撃するエルフ。

それに舌打ちを打ちながら下がっていつと、視界の端に何かが映る。

それを確認するとわざと膝をつきながら攻撃を受け止める。

それを隙とみたもう1人のエルフが一気に距離を詰めて、突きを放つ。当たるその瞬間、そのエルフに大鎌が襲いかかる。

鎧ごと切り裂くと、もう1人にも斬りかかり、吹き飛ばす。

「おまたせ……ここからは私も行くわよ！」

プレイヤーを説得しに行ったミトだった。

「……遅いぞ。このまま全部斬るところだった」

そう軽口を叩きながら、立ち上がりミトの隣で構えるツキノワ。

「サクツと終わらせるよ」

「OK」

そのまま一気にエルフを倒し、アスナ達に加勢して雑魚を倒す4人。

『みんな。ここからだぞ』

そうキズメルが呟いた直後、大鷹と鷹使いが同時に襲いかかる。

鷹使いはキズメルが、大鷹はミトが相手する。

そして残る2人はまだ残っている森フォレスト・エルフエルフの相手をする。

『鷹使い殿に加勢しろ！』

そんなエルフ達の前に立ちはだかり、地面に剣を突き立てる2人。

「悪いわね。ここから先は……」

「通行止めだ。大人しく引き返しな」

『ミト！アスナ！ツキノワ！』

「振り返らないで！」

「俺達は俺達のやる事を引き受ける！だがら！」

「貴女は貴女のやるべき事を為しなさい！」

そう言つて各々、戦うべき相手に挑みかかる。

『おやおや、随分と威勢がいいですねえ。いいんですか？人族如きに背中を預けて。正直背中が気になつて仇討ちどころじゃないでしょうに？今ならまだ降参は受け付けますよ？』

鷹使いがねちっこい言葉でキズメルに話しかける。

しかしキズメルは獰猛に笑いながら弾き飛ばす。

『悔るな！我が背中を護る者達こそ、人族きつての剣士たち！後顧の憂いはどうの昔に絶つたのだ！』

そのまま堂々と名乗りあげる。

『今はただ、我が名を刻め鷹使い!!!リユースラ王国先遣筆頭騎士、近衛騎士キズメルが、その首を貰い受ける!!!』

## 19話

outside

『…鷹使いよ。言い残す事はあるか』

『チツクシヨヨヨヨヨウ！』

キズメルと鷹使いの戦いはキズメルの勝利に終わった。

それをプレイヤー達はただ見守るだけだった。

「なあ、キバオウさん。そっちのエルフクエってあんな感じなのか？」

「アホ言うなや。こんなアイツらだけや」

「やつぱりなあ…どんなチート使ったんだあんたら」

リンドとキバオウは回復しつつ、成り行きを見守っていたが、気になったのか今頃やつてきたキリトにそう聞かずにはいられなかつた。

「してねえよ。つかどういいう状況だよこれ。俺だつて最初のハロウドナイト倒せちゃつてから戸惑いっぱなしだわ」

「あれを倒したんか!? エリートMOBやぞ！ 非常識な…!?!」

キリトの発言にキバオウや周りは驚きに包まれていると

『ふざけるな！今更…命乞いだと!』

キズメルの大声に何事かと振り向く。

そこには短剣を差し出し、頭を垂れる鷹使いがいた。

『貴様それで、貴様らが奉ずる白の大聖樹に！死んで行つた同胞に！祖先に！どんな顔で会うというのだ!?!慙愧の念は感じないというのか!?!このような者に…妹は…義弟は…!!』

それでもその姿勢を変えない鷹使いに深く溜息をついて、剣を引いて後ろを向いた。

『分かった、もういい。リユースラの騎士は下り首は取らない。ゆけ』

その瞬間、その背中に襲いかかる鷹使い。

誰もが啞然とした瞬間、

『そうだ、お前なぞ…<sup>イヌ</sup>狼の餌だ』

大狼が鷹使いの喉元に噛み付いて、食いちぎった。

そして、主人の弔いをするかのように遠吠えをした。

sideツキノワ

そんなこんなで3層迷宮区は2大ギルドに任せ、俺たちはエルフクエを進めつつ、ボス攻略を行っていった。

3層以降も基本の攻略は任せて、俺達はエルフクエを最後まで進めた。



途中、リンド暗殺疑惑事件だの、ギルドフラッグ事件だの、色んな事件が起きた。

10層攻略以降は4人で、どんどんと攻略に精を出した。

途中で俺がアインクラッドで初めて刀スキルを見つけ、習得した。

1番衝撃だったのがALSの壊滅だ。

25層、通称クォーターポイントのフロアボスを単独撃破しようとしたALSが、返り討ちにあい壊滅した。

その後ヒースクリフというプレイヤーが率いる「血盟騎士団」が台頭、クォーターポイント攻略に大きく貢献する。また、そのギルドにアスナ先輩とミトが勧誘され、2人は副団長としてギルドに入る事となった。

俺とキリトはそれぞれの理由でその話を断り、ソコを続けている。

そんな俺は今、ある場所にいた。

ここ、27層の迷宮区はトラップばかりで、しかも毎日マップが変わるといって鬼畜仕様であり、アスナ先輩達もマップピングを諦める程だったのだ。

俺はそこにあるモンスターハウスと言われるジャンルのトラップをわざと開けて、レベリングを行うという、かなり無茶苦茶な事をしていた。

今日もそれを行い帰ろうとした時、前から団体客が来た。

最前線では見た事もない連中で、物見遊山にしてはここは危険すぎる。

警告しようと思いだ時

「おお！隠し部屋だ！」

と言つてそのまま部屋に入つてしまふ。

「馬鹿野郎!!」

ここのトラップにはたまに「結晶無効エリア」がある。

もしそれを引いたらかなりマズイ。

そう思い、彼らの元へ走る。

「やめろ！それを開けるな——！」

聞き覚えのある奴の声が聞こえたと思つた瞬間、ビー！ビー！ビー！とやかましいブ

ザー音が鳴り響く。

ドアが閉まりそうになるが、滑り込んでギリギリ侵入する。それと同時にPOPしだすモンスター。

「一番近いお前！箱を壊せ！そうすればこれ以上は増えない！破壊次第、全員角に集まれ！そっちの方が守りやすい！」

ハツとした連中は俺の指示通りにして角に固まる。

その時俺の隣にキリトが並ぶ。

「キリト!?もしかして最初からいた!?!」

「いたよ！今はそれよりここを終わらせよう！みんな！転移結晶は！！」  
「だ、ダメだ！？使えない！？」

キリトが誰かに結晶を使おうとするも使えない。  
恐らく結晶無効エリアなのだろう。

舌打ちする俺達はそのままモンスター達に斬りかかった。

何とか全て倒した俺達は、彼らをホームに帰したあと、俺はキリトに事情を聞く事にした。

「それで？お前は何をしてたんだ？」

俺はキリトからここまでの経緯を聞いた。

たまたま10層に降りた時に助けた事。

成り行きで彼らのギルドに入る事になった事。

その時レベルを嘘ついてしまった事。

リーダーがギルドホームを買いに行く間に、家具をかう為の金を稼ぐ為に、あんな所にきてしまった事。

そして、あわや大惨事になる前に俺が助けられた事。

一通り話を聞いた俺は

「バカかお前は！！」

全力でキリトを叱り飛ばした。ここで誰もが優しくするのだろうか。でもそんな事しない。

もしそれをしてしまえば、キリトの自責の念は一体どこに向ければ良くなるのか、わからなくなると思ったからだ。

そうなってしまうば、きっとキリトは廃人になってしまう。だから俺は怒る。

キリトの心を守る為に。

「そもそも、いくらマナー違反としても素直に理由を言えばまだ、情状酌量の余地があっただろうが！もしちゃんと言っていれば、あんな事起こらなかったかもしれないだろうが！お前の下手な言い訳が、結果的に4人の命を危険に晒したんだぞ!？」

「…」

キリトは黙って俺からのお叱りを受ける。

大分長いことキリトを見てきたが、少しミトに似ている。

要はコミュ障だ。

人との関わり方に関して臆病なのだ。

最初は保身の為の嘘だったのだろうが、途中で嫌われなかったのだろう。

「…俺」

やっと話し出したか。

涙堪えられてないし。

「…おう」

「…おれ…さいじよば…こわぐで……じぶんを…まもるため…でも…とちゆうがら…さけられだぐながつだんだ…」

「…おう」

鼻まで垂らしちゃってこいつ。

本当に世話のやける兄弟だぜ。

「でも…きよう…ダツカーが…だからば…あけるの…どめられなくて…すごぐ…こわくて…」

「…そうだな。怖かったよな。でも、ひとつ聞いていいか。あいつらはお前の秘密を知って離れてくような、そんな奴らなのか？」

「ぢがう!!そんなこと…ない!!」

そうだろうな。

じやなきや俺がこいつを連れ出した時、あんな心配した顔しないよな。

「じゃあ、全部話そうぜ。お前の隠し事も、今の気持ちも。もしダメなら俺も謝ってやるよ。俺ら兄弟だろ？」

折れそうなら肩を貸してやる。

間違ってるならぶん殴ってでも止める。それが兄弟つてもんだろ？

「…ツキノワ…」

「ほら、さっさとその顔何とかしろ。すげー顔してるぞ？」

そんな話をしてると、リーダーが帰ってくる。

俺達はキリトの事情を全部話した。

「…そうか。正直、キリトがすごく強い気がしてたけど、やっぱりそうなんだ。何か手加減してた気がしてたし」

「き、気づいてたのか…？」

「これでもリーダーだからね。これぐらい出来ない」と

なるほど。流石リーダー。

素質は十分って事か。

「それで今後の事だけ…キリトがいいなら俺達【月夜の黒猫団】にいて欲しい」  
「…え？」

なんだ、やっぱり杞憂じゃないか。

これなら俺はいらないな。

そう思い、こっそり部屋を出た。

その後のやり取りは知らないが、みんなに言う事があるとするなら、キリトは月夜の

黒猫団に所属したという事。

そして、近い将来、彼らが最前線に来て攻略組に仲間入りする事。

これくらいだ。

さて、ところで何故俺がこんな事言い出したと思う？

それはな

『つ、捕まるわけにや、行かねえのさ!!』

「待ちやがれ！こそドロ!!」

SAO開始から1年以上たった今、2番目のクォーターポイント、50層に着いているたのにも関わらず、俺は泥棒NPCを追いかけて、この10層に降りて来ていたからだ。

## 20話

sideツキノワ

「待ちやがれ！」

赤いロングコートに黒い袴を履き、腰には「送刀・夫狐（おくりかたなてんこ）」を指した1人の男。

俺だけ。

俺は目の前を走る盗人を追いかけていた。

その速さ、身軽さはアルゴみたいだと思いつながら、こっちも負けじと追いかける。

「何でこんな事を……！」

話は数時間前に遡る。

50層主街区「アルゲート」でとある依頼を受けた。

内容は盗まれた家宝を取り返して欲しいという内容だ。

これを軽いノリで受けたのが、そもその間違えだったのだ。

盗人自体は直ぐに見つけたのだが、こいつが滅茶苦茶速い。



しかも身軽なのだ。

屋根から屋根へ飛び移ったりとか路地に逃げたかと思えば、今度はすぐ後ろにいるわ。

【追跡】スキルがなければ諦めてた。

しかも転移門まで利用する始末。

幸い、行先は聞こえたのですぐに追いかけてきたのだか…

「!?あいつフィールドに!?!」

何とフィールドに逃げ込みやだったのだ。

しかもご丁寧にもモンスターまでけしかけてきた。

「はあ…やるか」

俺は溜息をつきながら、一掃した。

その後も追いかけた先は、見た事の無い洞窟だった。

「( )は…( )の依頼専用か?」

俺は慎重に進むことにした。

仮にも最前線の依頼だ。

それ専用の場所なら高難易度のモンスターがいてもおかしくない。

しばらく進むと、祠をみつけ、その手前には盗人がいた。

見つけた。

「おい！大人しくそいつを返せ！」

『嫌だ！これはオイラのもんだ！』

「違えだろ！?!いいからさっさと…?!」

突然、祠が開いた。

俺も盗人も何事かと見ていた瞬間、突然祠から何か出てきて、盗人の口から体内に入っていく。

『な、何かボツ!?ゴボゴボゴボ!?』

「…は?」

何事だ?いきなりどんなホラーに、ジャンルがシフトした?

さ○子か?○だ子なのか?

呆然としているといつの間にか、盗人は落ち武者に変わった。祠の中にあつた刀を取りだし、構えた瞬間、HPバーが2本出てきた。

そのレベルがわかつた途端、俺はゾツとした。

「こいつ!?!50層のフィールドボス並か!!」

流石に1人で最前線のフィールドボスクラスは無理だ!

そう思い直ぐに撤退を選んだが洞窟から出れなかった。

「クソ！倒さないと出れない仕組みか！」

もう退路はない。後ろに退けない以上、やる事は一つ。

「…やってやる」

前に押し通る。

それだけだ。

こうして俺は、落ち武者と対峙した。

outside

雄叫びを上げながら、落ち武者は刀を振り下ろす。

ツキノワは刀身で滑らせながら一回転させ、その勢いを乗せて振り下ろす。

それは躲され返す刀で下から切り上げられる。

ツキノワもそれを躲し所で、落ち武者は全力で振り下ろす。

直撃こそしなかったものの、剣圧で後ろの壁まで吹き飛ばさせるツキノワ。

「ガッ!?馬鹿力か…よお!」

咄嗟に身を翻すツキノワ。

そこに落ち武者が突きを放ちながら突撃する。

壁に刀が刺さるも、そのまま壁をえぐりながらツキノワに迫る。

「わとととととっ!! 止まれ!!」

少し距離をとったツキノワはソードスキル「絶空」で、落ち武者の胴を横に切る。やっと動きが止まると思ったが、

「な!? ガツ!」

動きは止まったものの怯むことはなく、技後硬直で動けないツキノワの首を掴み持ち上げる。

そのまま切っ先をツキノワの心臓部分に向ける。

「ギ……グ……、こんのおおおおお!!」

ツキノワは咄嗟に剣を振り上げ、掴んでる腕を切り落とす。流星に効いたのから奇声を上げながら後退する。

ツキノワは呼吸が上手くいかず、蹲っている。

「ゴホッ……ゴホッ……ゴホッ!」

蹲っているツキノワを落ち武者は蹴り飛ばす。

ツキノワは転がりながら、メニュー画面を弄り、何かをする。

そのまま背中を向きながら、嘔吐く。

その隙を落ち武者は飛びかかり、トドメを刺そうとする。

その瞬間

「はあああ!!」

振り向きざまに放つツキノワの斬撃。

その一撃は落ち武者の体を深く切り裂き、壁まで吹き飛ばした。複数のポジションをあおりながら、ツキノワは立ち上がる。

そして、切っ先を落ち武者に向けると

「さあ、第2ラウンドだ」

強く宣告し、斬り掛かる。

sideツキノワ

「なんだこれ?」

俺がそのスキルを見つけたのは数ヶ月前だ。

趣味でとつてる【料理】スキル熟練度を調べようと、メニュー画面を見ていた時初めて気づいた。

「【剣豪】スキル…ダメだ。覚えがない」

俺は不思議に思いながら詳細を確認する。

「これはまあ、何とハイリスクハイリターンな…とんだじやじや馬だなこいつは」

その余りにもピーキーなスキルに逆に感心していた。

これを一言で表すなら

「完全プレイヤー依存型スキル…かな？」

システムの補助はあっても補正はない。

まさに使い手を選ぶスキルだ。

俺はこれを公表するか迷ったが、考えた末、黙ることを選んだ。

理由は

「これって【ユニークスキル】だよな…多分」

【ユニークスキル】とは、このアインクラッドにただ1つしかないスキルを指す。

ヒースクリフが持つ【神聖剣】がそれだ。

発生条件一切が不明のこのスキルはいつしかそう呼ばれるようになった。

これもその1つなのだろう。

「ま、余計なりスキルは負う必要は無いしな」

そうして俺は今までこっそりとレベリングと同時にスキルの強化に詰めてきたが、今回等々、お披露目となった。

「おおおおおおおおお!!」

俺は一気に近づきて射程圏内に収めると剣を振った。

その斬撃は落ち武者まで飛んでいき、直撃する。

それを走りながらどンドン放つ。

そう、このスキル最大の特徴は攻撃が飛ぶこと。

斬撃、刺突、打撃、この3種類に分かれていて、それぞれに射程、勢い、特性に差がある。

例えばこの斬撃は射程10m、勢いはソードスキル並、特性は連発可能だろうか。

1番オーソドックスな攻撃方法である。

そうやって畳み掛けていた時、突然奇声をあげる落ち武者。俺は咄嗟に耳を塞ぎ動きを止めてしまう。

そこで改めて様子を確認すると

「は!? デカくなった!」

さっきよりかなりデカくなった。

そのまま襲いかかってくる落ち武者。

俺はその攻撃をいなしながら、至近距離で斬撃を放つ。

体勢を崩した所に俺は刺突を放つ。

手で防がれるが、この刺突の特性は貫通。

いくら防ごうが貫くが、落ち武者は俺の刀を掴んで離さないようにする。

「ハ…放せ!」

俺は体術スキル【弦月】で顎を蹴りあげ、力が緩む隙に剣を抜き、着地してから剣を

峰に持ち帰る。

そのまま

「ぶっ飛ばせ!!」

打撃を放つ。この打撃は射程は短いがその分威力は最強。

その威力で吹き飛ばす。

数メートル吹き飛ばして、俺は更に斬撃で畳み掛けるが、その斬撃が弾き飛ばされる。

目の前に落ち、砂煙が上がる。

その瞬間

「……えっ？」

宙に浮いていた。

その時、ディアベルがよぎった。

正確にはディアベルが死んだ時だ。

俺は下を向くとあの時と同じ構えをしていた。

「間に合え……!」

俺は何発も斬撃を放つも止めるには至らず、俺は空中で対応せざるを得なくなつた。

一撃目は躲し、二撃目は【弦月】で側面を蹴り回転しながらいなす。

三撃目は力技だ。



打撃を放ち相殺させる。

その反動で俺は地面に叩きつけられる。

「体力は…ゲツ…残り2割…」

俺はポーシオンを飲みながら、立ち上がる。

落ち武者も技後硬直が解けたのかこつちを向く。

瓦礫が落ちた時、俺達は3度目の衝突をした。

sideアスナ

「ツキノワ…ツキノワ…」

「大丈夫、大丈夫だよミト。ツキノワ君は強いもん」

ツキノワ君…どこにいるの？

連絡がとれなくなって、もうすぐ一日が経つ。

ミトを励ましながら、アルゴさんに聞きに行ってくれたキリトくんを待つと、丁度帰ってくる。

「戻ったよ」

「キリト！ツキノワは!?無事なの!?!」

「ミト！落ち着いて！」

ミトがキリト君に詰め寄るのを慌てて止める。

「ツキノワの名前はまだ線は引かれてなかった」

その言葉にへたり込むミトを慌てて支える。

「アルゴが言うには何らかのクエストをやっている、10層で行方が分からなくなっただって」

え？10層？

「それってどういう…?」

「恐らくインスタンスマップに入ったんだと思う。それなら追跡出来ないのも納得出来る」

そういう事か。

つまりツキノワ君はまだ生きていて、クエストから抜け出せなくなっているという事。

そして、今私達に出来るのは

「ツキノワ君を信じて待つしかないってことね」

「そういう事だ。だからミト！シャキツとしろ！俺も兄だから気持ちちは分かる。でも俺達兄妹はそれを弟妹に見せる訳には行かないだろ!!」

キリト君はミトの肩を掴みながら言う。

そのキリト君を見て、少しずつ目に光が戻る。

「…ごめんなさい2人とも。もう大丈夫よ」

「ミト…大丈夫？」

「正直、大丈夫じゃないけど姉だから」

そう言いながら立ち上がるミト。

そのまま私達は団長率いる本体に合流する。

「…アスナ君、ミト君大丈夫かな？」

「大丈夫です。行けます」

「ふっ…いい目だ。それでは諸君、行こうか」

団長の一言で、私達は行軍を開始した。

sideツキノワ

「っ、疲れた…」

俺は何とか洞窟から出て、俺は家宝と祠にあつた刀を持って、依頼主の元まで戻ってきた。

ポーシヨンは尽きた。

刀も壊れた。

溜息をつきながら俺はフラフラと歩いて戻ってきたのだ。

「取り返したぞ」

『劍士様！ありがとうございます!!?その刀は!』

「知ってるのか？」

『この家宝はかつて、その刀の持ち主の戦装束なのです!』

「そうだったのか…」

あの祠に逃げたのは偶然ではなかったらしい。

『もしよろしければそちらもお預かりしてとよろしいでしょうか?』

「ええ。どうぞ」

刀を渡していなくなる。

少しして家宝と刀を手に戻ってきた。

『お待たせしました。こちらをどうぞ』

「これは…凄いな」

黒と赤の柄に赤い鞘。刃は少しそっており、綺麗な刃紋。その輝きはまるで斬るものでも求めているような美しさがあつた。

『そちらの刀【和泉守兼定：真打】とこの家宝は貴方様に差し上げます』

「いいのか!?!」

『きつとこれもなにかの運命。どうぞこれらと共に戦ってください』

そういう事ならばと有難く頂くことにした。

戦装束は鎧かと思つたが、綺麗な着物で今の服より性能が段違いだったので着替えることにした。

真紅の着物は袖や襟が黒、白、金のトリコロールで縫われている。

袴は同じ黒だが、性能は段違いだった。

靴は編み上げるタイプの黒いブーツ。

そして最後に羽織があつた。

白をベースに裾や袖が黒くなっている。

俺はそれらの装備に着替えてから出た。

アイテムを買い直していると

「つ、ツーフ!? いつの間二!? その格好ハ!」

アルゴと出会つた。

「おうアルゴ、クエスト報酬だ。どうよ、似合ってる?」

「う、うん…: 似合ってるよ…:」

アルゴよ、語調が変わってるぞ。

「そ、それよりリ!! 攻略組がもう出発したゾ!」

「マジか!? 行ってくる!」

そうやって俺は腰に差した、【和泉守兼定：真打】を支えながら、走り出す。「間に合ってくれよ……！」

俺は全速力で少しでも速く追いつけるように、ボス部屋まで駆け出した。

## 21話

sideアスナ

「それでは突入前に最後の確認をします」

私は突入前の部隊の前に立ち、最後の確認をしていた。

「ボスの名前は [Asura the Jack of All Trades]。三面六臂の阿修羅像です。それぞれ片手剣・槍・両手棍を持ち、体力ゲージは6本。最初は素手で叩きつけるだけですが、2本減らすと三体に分かれて、それぞれの武器でソードスキルも使ってきます」

私の言葉に続いて今度はミトが話を続ける。

「私達は攻撃隊A, B, C隊、タンク隊D, E, F隊、遊撃隊のG, H, I隊の9つの隊に別れています。これらを3つの班に分けて、行動する事を基本とします。片手剣持ちにはA, D, G隊の通称〔α班〕、槍持ちにはB, E, H隊の通称〔β班〕、両手棍持ちにはC, F, I隊の通称〔γ班〕の3班に別れて対応します。それぞれ各班私、アスナ、キリトの指示の元、各個撃破して下さい。団長は全体の取りまとめを行ってもらいます。」

「承知した」

「何か質問は？」

みんなからの質問はなく、沈黙だけが続いた。

「みんな質問はないようだね。それでは行こうか諸君」

そう言つて団員がボス部屋の扉を押し開ける。

そのまま剣を向いて、剣を部屋に向けた。

「突撃！」

その言葉を受け私達は部屋に突入した。

部屋は真つ暗で何も見えなかつた。

全員が入つた瞬間突然部屋の松明が火が灯り、部屋が明るくなる。

その部屋の真ん中には巨大な阿修羅像があつた。

あまりの大きさに息を飲んでしまう。

「各隊！戦闘配置！」

団長の声に全員がハツとしたように動き出す。

全員の配置を確認した団長が

「行動開始！」



その宣言をした事で、50層フロアボス戦が開始された。

「【γ班】！【α班】とスイッチ準備！【β班】は回復させる用意！」

団長の指示は従わざるを得ないのという感覚を抱く、これがカリスマの一部かと思う。

それに団長の指示も明確でわかりやすい。

「いい調子だな。ここまでは予定通りだな」

キリト君が話しかけてくる。

確かに流れは順調だし、このままの勢いで行きたい。

そう考え、全体を見ていると、体力ゲージが2本目を削りきったところだ。

ここからだ。

「各班、手筈通りに」

そう団長から声掛けがかかる。

全員が配置を着いた瞬間、

「*thc.*」

そこには3体の各武器を持った阿修羅像ではなく、先程よりは少し小柄な2体の三面六臂の阿修羅像が、3つの武器を持って襲いかかってきた。

想定外の事態に固まってしまったプレイヤー達の中で、それぞれ1番近くにいたプレ

イヤーにソードスキルを放つ。

片方は遊撃隊、片方はタンク隊の人でタンク隊の人はギリギリ残りましたが、遊撃隊の方は…一撃で死んでしまった。

「…撃…?」

誰が呟いた瞬間、雄叫びをあげる阿修羅達。

その声を聞いて、攻略組は一気に恐慌状態に陥ってしまいました。

outside

「うわぁー!?逃げろ!」

「一撃だど!?冗談じゃないぞ!」

「落ち着いて!冷静に対処して!」

アスナのそんな声は周りの悲鳴にかき消されていた。

恐慌状態になった攻略組は一気に戦線崩壊。

各々が逃げるだけであとはボスの格好の的になるだけだった。

最初より小柄だが、その分素早く、攻撃力はそのままでったのだ。

「来るな!助け…ガア…!」

「ヒイ!?また死んだ!」

「逃げろお!!」

1人、1人と死んでいく光景を見て、キリトが叫ぶ。

「クソ!アスナ!俺達だけでもやるしかないぞ!」

「キリト!僕達【月夜の黒猫団】も行くぞ!」

「俺達【風林火山】も戦うぜキリの字!」

「ケイタ!クライン!頼む!」

攻略組に途中参加する形でキリトとツキノワに追いついたクラインは、【風林火山】というギルドを率いて立派な攻略組の戦力の一翼となっていた。

「こっちは俺達が戦うぜ!」

「私達も加勢しよう【血盟騎士団】戦闘態勢!」

エギル達通称【アニキ軍団】とヒースクリフ率いる【血盟騎士団】がもう一体と戦う。

しかし、相手はクォーターポイントのフロアボス。

幾ら凄腕のプレイヤー達でも、僅か2ギルド分の戦力では抑えきれず、押し負ける。

「グアツ!!」

「キリト!...クッ!」

「キリト!ケイタ!大丈夫かお前ら!?!」

「団長！ガアツ!?」

「ぬ!?いかん!」

「あんたら!?大丈夫か!」

彼らが隙ついて狙ったのは…他のプレイヤーに落ち着く様声をかけていたアスナとミトだった。

「アスナ！ミト!」

キリトの声に反応して2人はすぐに散開する。

「アスナ！一撃も貰ってはダメよ!」

「ミトだつて気をつけて!」

彼女らは必死に武器を振るい、戦う。

途中キリト達が合流し、戦いもやはり戦力が足りず、攻めあぐねる。

「クソ!あと一手!足りないか!」

「やむを得ない、撤退の準備を!」

「」「了解!」「」

ヒースクリフが撤退を宣言し、少しずつ下がろうとした時、突然不可解な挙動をとるボス達。

警戒していたのだが予想だにしない行動に出た。

「アアアアアアアア!!」

突然の叫び声に全員が耳を塞ぎ、動きを止める。

しかも、最悪な事にスタンがかかる。

僅か3秒だがボス達には十分すぎる時間だった。

ボス達が狙ったのは、1番近くにいたアスナだった。

「アスナ!」

みんながアスナの事を呼ぶ中、アスナはふと

(前もこんな感じ…あつたなあ…)

2層の時もこんな感じだったかな?

少し違うか。

まあ、何でもいいけど…死ぬかなこれ?嫌だな…

会いたいな…ツキノワ君…怖いよ…だから…

「助けて…! ツキノワ君…!」

届かない懇願をしていると思っていた。

だから目の前の光景を信じられなかった。

それは周りのプレイヤー達も同様だった。

それは紫色の髪をなびかせ、白い羽織を肩にかけ、真紅の着物、黒い袴を履いた侍だつ

た。

その侍の一撃で2体の阿修羅像は、纏めて吹き飛ばされる。静かに着地し、アスナを見る赤い瞳。

その姿を見たアスナは、嬉しさから泣いていた。

「お待たせしました。アスナ先輩」

「ツキノワ君…ッ!!」

side ツキノワ

「大丈夫ですか？」

俺は膝をついて先輩を起こす。

ポジションを取り出して、渡してから敵に目を向けた。

「あいつ、情報と違います？」

「ええ、偵察戦の時とは違うの」

そんな短時間でパターンが変わるか？

何かフラグがあつたのか…？

「ツキノワ!!」

「キリト！ミト！無事か!？」

「それはこっちのセリフだ！馬鹿野郎！」

「そうよ！どれだけ心配したと思うの!？」

ミトとキリトがそれぞれ説教を始めようとした時、エギルさんがそれに待ったをかける。

「お前達！説教は後だ！来るぞ！」

先程吹き飛ばした阿修羅像達が起き上がってきたか。

さてと、どうするか。

「これ、回廊結晶です。転移門広場に繋いであります。10分間、その間俺が殿を務めます。アスナ先輩たちは攻略組をまとめて、体勢を立て直してください」

「ツキノワ君!?!何言ってるの!?!」

「そうだぜツキの字！お前1人なんて無茶だ！」

アスナ先輩とクラインが止めてくる。

だが、

「この中で1番余裕があるのは俺だ。だから「ならば私も出よう」!?!ヒースクリフ!?!」  
突然ヒースクリフが名乗りをあげる。

「私が1番頑丈なのでね」

「…団長、ご武運を」

「俺も残るぜ」

次に名乗りをあげたのはキリトだ。

「キリト！無茶だ！」

「悪いケイタ。ツキノワ、文句は受け付けけないぞ」

「ハア…勝手にしろ」

…ダメだな。こうなったらこいつは聞かないし。

「…ッ！なら、【月夜の黒猫団】のリーダーとして命令する。…絶対に死ぬなよ！サチを泣かしたら許さないからな！」

「了解！リーダー！それは死ねないな！」

「なら当然、私も残るわ。纏めるのならアスナの方が向いてるし」

最後にミトが名乗りを上げた。

正直、ミトは来る予感があった。

「ミトまで!？」

「アスナ。みんなをよろしく！クライン、エギル！アスナをお願い」

「…OK！しっかり俺達が支えてやる」

「ミトの嬢ちゃん。無理すんじゃねえぞ！」

「…！ありがとうクライン」

おや？ミトの反応が少し、女っぽいぞ…まさか!？



「ミト!?まさか!」

俺とアスナ先輩が声を揃えてミトに聞く。

ミトは顔を赤くしながらそっぽ向く。

ははくんなるほどお。

「じゃあ、先輩。行つてきますー…ミトをいじる為に」

「…いつてらつしやい!みんな!絶対に死なないでね!…ミトをいじる為に」

「あなた達!何言つてるの!」

ミトの言葉は聞き流して、俺たち以外は回廊結晶を手に部隊へ合流する。

「さて、準備はいいかな?」

「ここは言い出しつぺが号令かけろよ」

「そうね。気合い入るやつよろしく」

全員軽いなく!しょうがない。

「総員抜刀!!行くぞ…戦闘開始!!!」

俺達4人による絶望のボス戦が始まった。

## 2 2 話

outside

4人は2体の阿修羅像に突撃する。

まず先手をとったのはツキノワだった。

走りながら斬撃を何発か放ち、牽制する。

それを受けながらも両手棍を構え、振り下ろしてくる。

「散開！」

ヒースクリフの声にそれぞれ散開する。

だがヒースクリフだけはそれを真正面から受け止める。

鉄と鉄がぶつかる轟音を響かせながら押し勝ったのは

「ぬうん!!」

ヒースクリフだった。

そのまま弾き飛ばし、体勢を崩させる。すかさずミトが鎌で追撃する。

「いやああああ!!」

胴を大きく切り裂き、さらに吹き飛ばす。

一方、ツキノワとキリトはもう一体と対峙していた。

槍でソードスキルを使い、2人を貫こうとするもそれを難なく躲すと

「はあああああ!!」

キリトがソードスキルでパリイする。

「スイッチー！」

キリトがツキノワと入れ替わる瞬間、阿修羅像も片手剣持ちにシフトする。

そしてすぐにソードスキルを放ってくる。

「っ!? シー！」

至近距離で斬撃を飛ばしながら武器を弾く。

武器を持つ腕を、かちあげられた阿修羅像のから空きの腹に、

「オラア!!」

打撃を飛ばし、吹き飛ばす。

さらにその体に、

「おおおおお!!」

キリトが追撃する。

さらに攻めようとツキノワが前に出た時、ミトが警告する。

「ツキノワ！ 避けなさい！」

その声に慌てて身を翻すと、ミト達が相手をしていた阿修羅像がツキノワを襲い、もう一体を守っていた。

「マジか…」

「協力プレイしてくるのかよ!？」

「それだけじゃない。面を変えることで技後硬直をキャンセルしてるぞ」

「団長、どうしますか?」

「…何とかして2体を引き離すべきだ。組み合わせはさっきの組み合わせでよからう」

作戦会議を終え、改めてツキノワ・キリトのコンビと、ミト・ヒースクリフのコンビに分かれて攻撃を仕掛ける。

まず2体の間に、ツキノワが斬撃を飛ばす。

「はあああああ!!」

避けた隙を突いて、キリトがさらに押し広げる為に攻め立てる。

その後ろに攻撃してくる阿修羅像は、ヒースクリフが防ぐ。

「はあああああ!!」

ミトが攻撃してタゲをとる。狙われるミトをヒースクリフが前に出て守る。

こうしてお互いが少しずつ距離を空けさせる事10mほど来た時だった。

「っ?!?また行くこうしてるのか!？」

キリト達が相手していた、阿修羅像がミト達の方へ合流しようとして動き出す。

「させねえよ！」

ツキノワが斬撃を、乱れ打ちして足止めを図る。

何発か当てていた時、槍を持っていた顔が割れた。

「顔が割れた!?!」

しかも動きを止め、膝をつく。

「!!チャンスだ!!」

「畳み掛けるぞ!!」

ツキノワとキリトが一気に攻める。

ひたすら攻撃を続ける。

こうしてやつと体力を半分削った所で阿修羅像は立ち上がる。しかし、槍を持ってい

た顔は割れたままだ。

「ミト! ヒースクリフ! 顔は割れる! 割ればダウン取れるぞ!」

「了解!」

「承知した」

こうしてミト達は堅実に戦い、ヒースクリフが弾いた時、ヒースクリフはミトに肩を

貸す。

「ミト君！」

「お借りします！ 団長！」

そのままヒースクリフの肩を使い、高く飛ぶ。

そのまま、全体重をかけて顔面にソードスキルを放つ。

「はあああああ!!」

こうして両手棍の顔を割ってダウンをとる。

「団長！」

「ミト君！ 畳み掛けよう」

こうしてミト達は袋叩きする。

それを助けようとする阿修羅像をキリトとツキノワは必死に防ぐ。

「クソ!? こいつ止まらない！」

「勘弁してくれよ……ッ!? しまった!」

「ツキノワ!? ミト! ヒースクリフ! 逃げろ！」

キリトの声を聞きミトは距離をとり、ヒースクリフは盾で防いだ後、距離をとる。

「ツキノワ!? 大丈夫!」

「大丈夫! 問題ない！」

「すまない……止められなかった」

「気に病むことは無いキリト君。そもそも、この人数で戦おうというのが無茶なのだ」  
ゆつくりと立ち上がり、体勢を整える2体の阿修羅像。

それを見て、4人も武器を構え直す。

「キリト。あいつ…顔は治らないな」

「ああ。それに槍は使ってなかったな…まさか!？」

「壊れた面の武器は使えないって事!？」

「可能性はある。あくまで希望的観測ではあるが」

1つの特性を見つけた事で希望が見えてきた。

そう思った時、今度は阿修羅像から攻めてくる。

「みんな!!今まで通り!出来るだけ顔を狙って!」

「了解!」

戦いが始まって約10分。

今の戦況は

「はあ…はあ…はあ…」

「クソ…ゲホツゲホツ…」

キリトとミトはスタミナの限界を迎え、動けなくなっていた。

「ウオオオオオオオ!!」

「ぬうん!!」

ツキノワとヒースクリフがそれぞれⅠVSⅠで、戦っていた。

キリト達とツキノワ達の差は、ユニークスキルという規格外を持っているか否か、そこだった。

そのジョーカーを持つ2人はそれぞれ攻撃と防御で、絶対的な実力差を生んでしまいい、ツキノワ達にキリト達が追いつけなくなったのだ。

「ツキノワ……団長……」

「クソ……動け……動けよ……」

キリト達は必死に動こうとするも、体は震えるばかりで動かせなかった。

「2人とも！無理すんな！そんな状態だと死ぬぞ！」

「そこでじつとしていたまえ」

ツキノワ達は目を離さないまま、こつちのことを心配する。

阿修羅像がそれぞれ、両手棍を振り下ろし、槍を突いてくる。

流石のヒースクリフも2体まとめては防げず、回避を選択する。

ツキノワは逆に前に出て、降ろされる武器を足場に高く飛ぶ。

顔の高さまで飛ぶと、両手棍を持った阿修羅像の顔を飛ぶ斬撃で切り裂き、槍を持った阿修羅像には刺突を飛ばし、顔を貫く。



「よし！両方壊れた！」

「体力もそれぞれ残り1ゲージだな」

着地し、1度体勢を整えるため、距離をとる。

その間に2体の阿修羅像が輝きだし、ひとつになった。

sideツキノワ

「また…1つに戻った…？」

「片手剣だけを持っているな」

「2人とも大丈夫か？」

「キリト！ミト！まだ休んでないと！」

「私達も動けるわ。問題ないわよ」

「フツ…では期待しているよ2人とも」

それぞれ武器を構えると、目が光りだし、ソードスキルの構えをとる阿修羅像。

「私が受け止めよう。各自攻撃の準備を」

ヒースクリフが前に出て攻撃を受け止める。

轟音がなった瞬間、ヒースクリフの姿が無くなった。

「…」

俺達が恐る恐る振り向くと、ヒースクリフが吹き飛ばされており、地面に伏していた。

【神聖剣】のおかげでダメージは少なかったが、普通のタンクでは死にはせずとも、ダメージは少なくないだろう。

軽装の自分たちが当たってしまえば…

「くっ!!避けるお!絶対に当たるなあ!!」

1番最初に正気に戻った俺が、悲鳴じみた声で呼びかける。

その言葉に2人はハツとし、慌てて行動を起こす。俺は切り込んで斬撃を放ちながら進む。

「はああああああ!!」

阿修羅像の攻撃を刀で滑らしながら回転し、遠心力を乗せて斬撃を放つ。

胴体を逆袈裟に斬り、体勢を崩した所で返す刀で袈裟斬りを放つ。

「スイッチー!」

今度はミトが飛び出して、力づくで鎌を薙ぎ払う。

「はああああああ!!」

胴を切られるのを、たたらを踏んで耐えた阿修羅像は、そのままミトにソードスキルを放つ。

「はああああああ!!」

技後硬直で動けないミトを庇うようにキリトと俺がそれぞれ、ソードスキルと飛ぶ打

撃を発動し、受け止める。

「ぐうううう!!」

「2人とも!はあああ!!」

しかしその重さに押し負けそうになる。

技後硬直の解けたミトが参戦した事で一瞬浮いた隙に、それぞれ、散開して避ける。

キリトと俺は体力を確認すると

「は?」

キリトは残り5割、俺が4割だった。

「いなして防いだだけで…」

「マジで一撃も受けられないな…」

「3人とも。すまない」

「団長!無事ですか!」

ヒースクリフが復活し、戦線に参加する。

「さて、ヒースクリフの防御力も当てにならないとなるとどうするか」

「すまない、タンク失格かな」

「いや、【神聖剣】が吹き飛ばされるなんて、想像してなかったしな」

「でも、私達にできるのは避けるだけよ…。せめて何か弱点でも見つけないと…」

俺が作戦会議をしていると、走って俺達を追いかける阿修羅像。

「走れるの（かよ）!?!」

「それほど速くはないがね」

慌てて俺達は戦闘用意をし、それぞれ避ける。

阿修羅像が狙いをつけたのは俺だった。

「こんの!!しつこい!」

俺は刺突を飛ばし、目を潰そうとする。

しかしそれは防がれ、そのままソードスキルが発動する。

舌打ちしながら横に飛んで躲す。

阿修羅像は、地面に突き刺さる剣を、そのまま横に引いてくる。

「嘘だろ!?!」

慌てて転がって避けて、振り返ると同時に、斬撃を飛ばし攻撃する。

「こつち向け!」

「がら空きよ!」

「フツ!!」

3人がソードスキルを発動するも、意に返さず俺を狙い続ける。

そうする事数がたった頃、阿修羅像がまたもやソードスキルを発動する。

「全員、散開！」

それぞれの方向に散開した後、次に狙われたのはミトだった。ミトもそれに気づき、そうとした瞬間、なにかに足を取られた。

「え？」

「ミト!!？」

「ミト君!？」

ミトが足を取られたのは、この戦いで生じた地形の変化、窪みだ。

「ミトオ!!!」

俺は全力走ってそのままタックルした。

「ツキノワ!？」

俺はその攻撃に対し、斬撃を何回も放ち、最後に打撃を発動した。

それでも止められず、クリーンヒットは免れたが、掠めてしまい吹き飛ばされてしまった。

「ツキノワア!!!」

キリトとミトが走ってくるのが見えた。

ああ…俺ってよく飛ばされるなあ…。

ていうかヤバいな。ただでさえ、体力回復しきつてないのに…。

これ叩きつけられたら死ぬな。

受け身取ろうにも体が動かねえし、間に合わない…。

キリト、ミト…アスナ先輩。

ごめん、後はよろしく。

俺が全てを諦めかけたその時何が俺の下に入ってクツション代わりになってくれる。

それにより体力が数ドット残った。

「ヒール！ツキノワ！」

直後、体力が結晶により全回復する。

「良かった…。間に合った…。間に合ったよ…。神様…。」

「アスナ…先輩?」

そう、俺を受け止めてくれたのは、アスナ先輩だった。

先輩は泣きながら俺を抱きしめてくれる。

「後は私達に任せて、休んでて?」

そう言っつて、レイピアを抜いて阿修羅像に切っ先を向ける。

後ろにはクラインやエギルさん達を始めとする攻略組の全戦力が並ぶ。

そして堂々と言い放つ。

「攻略組!!! 出撃!!!」

## 23話

sideアスナ

「注目してくださいーここに回廊結晶があります！これは転移門広場に繋がっています！今から10分以内に体勢を整え、再度出撃します！」

私の言葉に誰も答えなかった。

どうして？どうして誰も、何も言わないの？

「皆さん……？」

「無理だ……」

誰が呟いた。

それはまるで、全員の気持ちを代弁するように続けられる。

「あんな、無茶苦茶なやつどうやって勝つんだよ!?勝てる訳ねえだろ!？」

「そんな!?それでも勝たないと戻れないんですよ!？」

「それでも無理だ！一撃で攻略組を殺すような連中、勝てる訳ねえだろ!？」

そうだ、そうだと続く声。

これが今の攻略組なのかな……。

「あいつらだってもう持たない！あんたやあいつらは、規格外の強さだから戦えるんだ！」

違う。

そうじゃない。

私達は必死になってるだけなのに…。

戻るために戦っているだけなのに…。

ツキノワ君…：ミト…：キリト君…：私…：どうしたら…？

「もういいか？お前ら」

「ああ、これ以上は聞くに耐えん」

心が砕けそうになるその時、クラインさん達「風林火山」の皆さんと、エギルさん達「ツーハンデッド・ビルダーズ」の皆さんが、私を庇うように立っていました。

「ど、どういう意味だよ!？」

「今よお、あそこで戦ってるやつはまだ10代半ばのガキ達だ。アスナもそうだ。俺達大人は本来、こいつらを守ってやらねえと行けねえんだぞ!!」

「それを寄ってたかって…恥ずかしくないのか？お前らは。俺達はここに立っていることが恥ずかしい」

クラインさんとエギルさんがそれぞれ、みんなに語りかけてくれる。



私には無い重みを、感じられた。

「確かにこのSAOで年齢なんてほぼあつてないようなもんだ。けどよお、そういう問題じゃねえだろ!？」

「あいつらは強い。俺達よりずっとな。しかし、俺達は大人で、あいつらは子供だ。もし自分の子が産まれた時、お前達は同じ理由で子供達を盾に使うのか？お前達は父親としていられるのか？」

「お前達はこの先、男として、大人として、胸を張って生きていけるのか!？」

2人の怒声が響き渡る。

その言葉を受けて、みんな沈黙したまま、俯いてしまう。

そんな時だった。

「…いい訳ねえだろ…」

「え？」

「いい訳ねえだろ！そんなダサイまね、するくらいなら、死んだ方がましだ！」

そんな声に少しずつそうだ、そうだ、と声上がる。

「だったらこんなところでグダグダ言ってる場合か!!」

「やるって決めたなら支度しやがれ!!」

一つ一つの熱が伝播していき、やがて攻略組全体が立ち上がった。

「…皆さん…」

思わず泣きそうになる。

必死に涙を堪えているとクラインさん達から声がかかる。

「アスナ！早く回廊結晶を！」

「は、はい！コリドーオープン！」

私は慌てて回廊結晶を使いました。

そしてそこに流れるように攻略組の皆さんが入り込み、アイテムをひたすら買い漁っていました。

「アスナ！うちの店の在庫のポジション、全部出すぞ！」

「俺達もだ！マサムネ！頼む！」

「【青龍連合】も倉庫を開けるぞ！」

「今からサチに連絡入れる！」

各ギルドがアイテムを持ち寄って物資をかき集めてくれました。

「分かりました！ダイゼンさん！副団長権限でうちも開放します！」

「了解です！クラディール！手伝ってください！」

「しようがない…」

こうして各ギルド必死にアイテムを調達していると

「アスナ！」

「サチ！リスも！」

そこには【月夜の黒猫団】のサチと、友人のリスこと【リスベツト】がやって来ました。

「どうしてここに!?!」

「ケイタから連絡を受けて、ホームからアイテムを持ってきたの！」

「それにボス戦なら武器の耐久値もマズイでしょ！だから簡易キット持って来たのよ！戦えないけど、武器のメンテなら出来るわ！」

「2人とも…ありがとう…！」

2人の気持ちに思わず泣いてしまいました。

だって…嬉しくって…

「あ、アスナ!?!泣かないで!?!」

「ほらもう泣かないの！これからでしょ？」

こうして約10分後、体勢は整いました。

「よし！全員準備できたぜ！」

「皆さん…ありがとうございます！行きましよう！」

「」「おうー！」「」

私達は再び回廊結晶を使い、ボス部屋に乗り込みました。

そこで見たのは、再び一体に合体した阿修羅像だった。

「おいおい…また合体したのか？」

「しかし、ゲージはラスト一本。むしろやりやすくていいじゃないか」

私はみんなの方を見て、声をかけようとした時、

「皆さん！行きま「ミトオ!!」！」

突然、ツキノワ君の声が聞こえてきました。

慌てて振り返ると、ツキノワ君が吹き飛ばされていました。

「ツキノワ君!？」

一気に加速して体を滑り込ませてギリギリキャッチした私はすぐに回復結晶を使って回復させました。

「よかった…。間に合った…。間に合ったよ…。神様…。」

「アスナ…先輩?」

私はしっかりと抱きしめ、ツキノワ君が生きている事を実感していました。

そして優しく壁に寄りかかせて

「後は私達に任せて、休んでて?」

そう言って、私はレイピアを抜いて阿修羅像に切っ先を向ける。

後ろにはクラインさんやエギルさん達を始めとする攻略組の全戦力が並んでくれる。大丈夫、1人じゃない。

みんながいる！

そう胸に刻み、私は阿修羅像に対し宣戦布告した。

「攻略組!!! 出撃!!!」

outside!

「!!!!!!」おぉー——————!!!「!!!!!!」

一気になだれ込んでくる攻略組。

その勢いにキリトとミトは啞然としていた。

「何だ、この士気の高さ……?」

「みんな、何が……?」

思わずつぶやく2人にそれぞれの仲間たちか声をかける。

「キリトー! 無事だな! 【月夜の黒猫団】参戦する!」

「ケイター! ササマル! ダツカー! テツオ!」

「外にサチも来てるぜ!」

「サチが!?!」

キリトはサチが来ていることに動揺する。

戦いが苦手な彼女は、今は生産職としてギルドを支えているはずなのだ。

「あいつも【月夜の黒猫団】って事だ！」

「キリトは下がって休んでくれ！」

「そうだぜ！キリの字！ミトの嬢ちゃんもだ！」

「クライン！【風林火山】の皆も！」

「おっと…俺達を忘れてないだろうな？」

そこにクライン達とエギル達が合流する。

「団長！ミト副団長！ここからは我々【血盟騎士団】も出ます！」

さらに【血盟騎士団】がやってくる。

「では頼むとしよう」

「…すまない！直ぐに戻る！」

「みんな聞いて！さっきより攻撃力が高くなってるわ！ソードスキルは基本回避！通常攻撃も必ずタンク3人以上で防いで！」

「了解！」

キリト達が外に出ると、先に休んでいたツキノワが武器のメンテを行っていた。

「キリト！」

「サチ！」

「ミト！無事？」

「リズ。ありがとう」

それぞれが再会を喜びあっていると、ツキノワが2人の声をかける。

「2人とも無事か？」

「それはこつちのセリフ！」

そして、3人の武器をメンテしてる間、ひたすら説教されるツキノワだった。

「さあ！3人とも！終わったわよ！」

「キリト、ツキノワ。これ」

「これは？」

サチが2人に渡したのは防具だった。

「2人の戦闘スタイルに合わせて、軽くて丈夫な素材を使って作ったの。良かったら

使って！」

キリトのはチェストプレートで、ツキノワのは鎖帷子だった。

「ありがとう！サチ！使わせてもらおうよ！」

「サンキューサチ！早速装備するよ」

お礼を言つて早速、装備してステータスを確認する。

防御力が最初より上がっている事を確認し、

「行ってくるー!」

3人は戦場に飛び出していった。

攻略組はしっかりと連携を取り合って、少しずつだが阿修羅像を追い詰めていて、あと一息まで来ていた。

「エギルさん!スイッチ!」

集団の中を一気に駆け抜けるツキノワは、ちょうど攻撃を行ったエギルとスイッチする。

「ぶちかましてやれ!」

「おおおおおおお!!!」

一気に懐に入り込み、斬撃を何発も放つ。

剣を振るうその姿はまるで舞のように、それでいて一切の隙がなく、まさに「劍豪」の如く美しさがあつた。

その隙に力を貯めていたミトが大声を張り上げる。

「全員どきなさい!!」

その声にみんなが反応すると、ミトが持つ鎌が、強く光輝いていた。

「スイッチ!」

「はあああああああ!!!」



鎌最上位ソードスキル【魔女狩り】を発動する。

HPを吸い上げるほど、攻撃力が上がるその技をミトは最大まで貯めて、放つ。

その絶大な攻撃力を受け、たたらを踏む 阿修羅像にさらにアスナが追撃の為に、全速力で駆け抜ける。

「スイッチー！」

「やあああああああああ!!!」

攻略組トップクラスの速度を上乗せさせた、細剣最上位ソードスキル【フラッシング・ペネトレイター】が、阿修羅像の腹を深く抉る。

悲鳴をあげる阿修羅像に、キリトが走り出す。

「スイッチー！」

「キリト！俺達に乗れ！」

【月夜の黒猫団】を足場代わりに高く飛び、

「あああああああああ!!!」

片手剣最上位ソードスキル【ノヴァ・アセンション】で顔を10連撃に切り裂く。

最後の10撃目を食らわせた時、悲鳴をあげながら爆散する阿修羅像。

Congratulations!!の文字トリザルト画面が出てきた事で、

「「「「勝ったー」」」」」」」

無事50層のフロアボスを倒し、アインクラッドの半分を踏破したのだと確信したのだった。

## 閑話休題③

outside

「それでは！50層突破を記念して！かんぱうい！」

「かんぱうい!!!」

50層のレストラン。

ここにはボス攻略戦を終えた攻略組が、打ち上げを行っていた。

死者への弔いを行ったあと打ち上げをしようと【青龍連合】のリンドが提案したのだ。全員乗り気で、普段こういう事には出てこない、ヒースクリフすら出てきていた。

あちらこちらでギルドの垣根を越えてワイワイしている中、ある一角では攻略戦の立役者である、ツキノワ・キリト・アスナ・ミトの4人が集まっており

「さあ、ツキノワ（君）。話してもらおうぞ（わよ）」

ツキノワを尋問していた。

「3人とも？ちよつと落ち着こう？な？」

「落ち着いてるよ（わよ）（ぞ）？」

「絶対違うだろ!？」

何とか切り抜けようとするツキノワを前からミトが、斜め前からキリトが、隣からアスナが逃がさないように囲っている。

更にはキリトの後ろから

「そうだよツキノワ。私達にもちやんと説明して」

サチ達【月夜の黒猫団】とリズが。

「そうだぜ！ツキの字！隠すことねえだろ！」

ミトの後ろからクライン達【風林火山】が。

「ま、諦めて話す事だな」

ツキノワの後ろからエギル達【ツーハンデッド・ビルダーズ】が囲っていた。

逃げられないと悟ったツキノワは溜息をついて説明する事にした。

「わかったよ……」

まずクエストの事を説明した。

「最前線のフィールドボスクラスだと!？」

「1人でやったのか!？」

「何でそんな無茶したの!？」

クラインとエギルが驚き、ミトが怒る。

「いや、俺だって逃げようとしたけど、逃げれなかったんだよ!」

脱出不可能の状態だった事を説明する。

「装備はクエスト報酬だったんだろ？」

次にキリトが聞いてきたのは装備の事だった。

「そう、この『真紅の戦装束』と『和泉守兼定：真打』はクエスト報酬だったよ」

「私メンテした時、ビックリしたわよ！それ魔剣クラスの装備じゃない！」

その言葉に全員が驚く。

ドロップ品で落ちるならともかく、それがクエスト報酬だとは思ってもよらなかった。

「そのクエは俺達も受けるのか!？」

一番に食いついたのは同じ刀使いのクラインだった。

「いや、アルゴに試してもらったけど無理だった」

「そんなく…」

「て事はあんただけのユニーク武器って事!？」

「そうなるな」

リズの言葉に肯定すると皆がおおくと言う。

「それはそうとどうよ？似合ってる俺？」

そう言つてツキノワはその場に立って一回転する。

「あんたって本当に何でも着こなすわよね…」

「サンキューミト。アスナ先輩！どうですか？」

「う、うん…に、似合ってるよ！」

ミトはいつもの事なのかあっさり返すが、アスナは顔を真っ赤にさせながら答える。

その顔を見てツキノワは心配そうに覗き込む。

「先輩？顔赤いですけど、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫!?!大丈夫だから！」

更に顔を赤くさせ、手をバタバタと振るアスナ。

「…ミト？あれってワザと？」

「…いや、あの子は天然よ」

「それは逆に恐ろしいね…キリトみたい」

「何故に俺？」

「…キリトのにぶちん」

「サチ？」

前の席で何やらごちゃごちゃとやっているのを、不思議そうに見るツキノワ。

「てめえら!!当て付けか!?!」

「何が!?!」

クラインの男泣きに困惑するツキノワとキリト。  
そんな混沌とした場をエギルがまとめる。

「お前ら…目的から脱線してるぞ…。ツキノワは最後に聞くが、あれはなんだったんだ？」

その一言で全員がツキノワを見る。

その視線に居心地悪そうに目を逸らしてから答える。

「…エクストラスキルだよ。【剣豪】」

「…その入手条件は？」

「不明。気づいたらあった」

「つまり…ユニークスキル!？」

アスナが驚きながら、核心をつく。

「…まあ、そうなります」

またどよめき上がる。

「何か効果はあるのか？」

キリトが尋ねる。本来マナー違反だが、ここに咎めるものは居ない。

「…クリティカル発生率500%アップ、クリティカル威力500%アップ。後はステータス大幅アップ。後は…飛ぶ斬撃かな。パターンは3種類、それぞれ特徴があつ

て、無制限」

「ご、500%アップ!?どんな規格外スキルなの!？」

「それに飛ぶ斬撃って…それ遠距離攻撃だよね!？」

ツキノワの説明にリズとサチが驚く。

他のメンバーも同様で、目を見開いていた。

「…でも、デメリットもあるだろ?」

「そうね、決定的なのが1つありそうね」

しかし、キリトとミトだけは違つて険しい顔をしていた。

「デメリット…?ツキノワ君あるの?」

「あるよ。1つだけ」

「それは?」

代表してアスナが尋ねる。

「…ソードスキルが使えない。正確には【劍豪】スキルに適應したソードスキルがな

い、つて感じかな」

その言葉に違う意味で黙り込んだ。

このSAOにおいて、ソードスキルは必殺技でもある。

そのソードスキルが使えないという事はつまり



「つまりこのスキルは、完全プレイヤー依存型スキルって事」

そう、使い手の力量がそのままスキルの強さになるという事だ。

そんなピーキーなスキルを実践レベル、ましてやボスに通用させるレベルにまで高められた剣技、まさに剣豪だ。

まるでツキノワの為のスキルではないか、そう錯覚させる程の衝撃が走った。

「よし！聞きたい事は聞けたからな！後はパーツとやろうぜ！！」

「そうだな!!よし！食うぞー！」

クラインがそう騒いで、キリトがそれに便乗する。

なんとも言えない空気がそれで流され、彼らもまた、パーティに参加していくのだった。

side ツキノワ

「はあく食った食った…」

俺は腹ごなしに外に出ていた。

理由はそれだけ。

のんびり店の周りをブラブラしていると

「ツキノワ君！」

「アスナ先輩？」

アスナ先輩が走ってきた。

何かあったのか？

「どうしました？」

「ううん、ただ外に行くのが見えたから、追いかけてきたの」

なんだ、そういう事か。

ちよつと…いや、かなり緊張するけど少し勇気を出そう。

「じゃあ、ちよつと歩きませんか？」

「うん、そうしょつか」

こうして俺達はフラフラと歩き出した。

特に会話もなく、当てもなくブラブラしているだけだったが、突然アスナ先輩が立ち止まった。

「アスナ先輩？」

「…ツキノワ君!!」

突然アスナ先輩が抱きついてきた。

その目には涙がチラリと見えた。

「アスナ先輩!?!どうしたの!?!」

「すごく心配した…!心配したんだよ!?!もし何かあったらって怖かったんだよ!?!でも、

無事で良かった…！あの時、間に合って良かった…！」  
かなり心配かけたらしい。

俺は申し訳なるのと同時に、泣くほど心配してくれていて、嬉しくもなっていた。

「…心配かけさせて本当にごめんさい。でも、前にも約束したでしょ？『どれだけ遠くに行っても、絶対に帰ってくる』って」

「うん…！うん！そうだよね！約束したもんね！守ってくれたもんね！」

そう言つて嬉しそうに笑う先輩を見て、とうとう我慢できなくなつた。

「先輩、俺がなんであんな約束したと思ひます？」

「…どうしてなの？」

「…好きだから。俺はアスナ先輩が、結城明日奈さんが大好きだから。だから俺と付き合つてください！」

俺は勢い任せに、頭を下げて人生初の告白をした。

顔は真っ赤だし、緊張がヤバイ。ボス戦より心臓が爆発しそう。

「ツキノワ君…顔を上げて」

そう言われ顔を上げると、目に前に先輩の顔があつて、唇に柔らかいものが当たる。  
今のつて…。

「せ、先輩…？」

「私もツキノワ君が…兎沢優月君が大好きです！だから！これからよろしくお願いしま  
す！」

マジか…？マジなのか!?

「…本当に…？」

「フフ。本当に！」

理解がやっと追いついてきて、感情が爆発した。

「やったー！ー！ー！ー！！」

「きゃ!?!もうツキノワ君！」

思わず抱きついたけど抱き締め返してくれる先輩。

俺達はそのまま少し抱きしめあつてから、どちらからという訳でもなく、キスをした。

「…これからよろしくお願いします、アスナ先輩」

「うん、よろしくねツキノワ君」

そう言つて俺達は店に戻った。

その瞬間

「！！！！！！！！！！！！」

「…は…？」

何故か店にいた全員に祝服された。

その時1人だけニヤニヤした奴がいた。

その正体は

「ミト!!!見てたでしょ!!!」

「最高に良かったわよ!2人とも!」

ミトだった。

どうやらつけてたらしく、俺らが戻る前に戻ってわざわざ言いふらしたらしい。

「2人とも奥手すぎるんだもの。じれったい事この上ないわ!でもおめでどう!親友として、姉として嬉しいわ」

「ツキノワ!アスナ!おめでどう!」

ミトのにやけ顔とキリトの純粹な祝福のギャップに少し目眩がする。

その時、先輩という目が合う。

恐らく同じことを思ってたのだろう。

俺達は敏捷性をフルに活かしてミトを捕まえる。

「へ!?!2人とも!?!」

「そういや、ミトを弄る約束してたっけね先輩?」

「そうね。してたわね。ウツカリしてたわ」

「へ?2人とも?」

「ところでミト。意中の殿方とはどうなのかな？」

「確かクで始まってんで終わる人だよな！」

ワザと大きな声で言う。その瞬間、場が一気に変わる。

「ツキノワ！アスナ！詳しく!!」

女性陣は身を乗り出し、男性陣はざわめき出す。

「ち、違う！彼の事はそういう風には!？」

「またまた〜！あんな女の顔しといて〜！」

「変にシンクロするな〜！」

こうして俺達は無事ターゲットの擦り付けに成功して、ミトを弄った。

それはミトがパンクするまで続いた。

こうして俺達のパーティーは更に盛り上がっていったのだった。

次の日、新聞に俺の【剣豪】スキルの事と、俺と先輩の交際報道が一面を飾ったのは言うまでもない。

「アルゴ（さん）!!」

## 閑話休題④

sideツキノワ

朝7時、俺はタイマーの音で目を覚ました。

ボンヤリした頭で今日の予定を考え、思い出し途端、一気に目が覚めた。

「今何時だ!?!:7:03。約束は:9:00にアルゲートの転移門広場だな」

よし、予定に間違えはないし時間も余裕がある。

俺はまず朝飯を用意しながら、同時並行であるものも用意する。

こういう時、手間がかからないからここは楽だ。まあ、味気なさすぎるのも如何なものかと思うが。

「よし、こっちはOKつとー」

サクッと朝飯を食べて俺は何時もととは違う服に着替える。

黒のブルゾンにモスグリーンのオーバーデザインのトレーナー。

スキニージーンズに茶色のハイカットシューズ。

全体的に飾りつけがないのでいつものネックレスをつけ、髪を結う。

ハーフアップに整えた所で、ストレージ内を確認する。

「よし、準備完了！時間は…8：17か。少し早いけど行くか」

こうして俺は自分の拠点にしてる安宿屋を出た。

何するのかって？

それは…先日付き合うことになったアスナ先輩との初デートである。

「8：32…まあ、流石にいないか」

わざと早めに出た俺は思ったより速く着いたので、ストレージを弄りながら待つことにした。

10分後、

「ツキノワ君！」

アスナ先輩の声のする方へ顔を向けると、走りよってくる彼女の姿を見つけた。

黒のジャケツットに薄ピンクのブラウス、白のフワツとした感じのロングスカートと茶色のブーツ。俺が前にあげたネックレスもしてくれている。

滅茶苦茶可愛い。

「おまたせ！ごめんね、待たせちゃった？」

「大丈夫ですよ？さつき来たところですよ」

実際に10分ぐらいだから、全く気にしてない。

「あれ？ツキノワ君。髪型変えたんだ」



あ、流石先輩。早速気づきてくれた。

「せっかくなんで、先輩とペアルックにしようかと……似合います?」

「ウンウン! 似合うよツキノワ君! じゃあ、今日はよろしくお願いします!」

アスナ先輩からのお願いに俺はまたドキドキする。

それを上手く隠しながら

「うっす! よろしくお願いされました! 精一杯エスコートさせて頂きます!」

俺は先輩に手を差し伸べた。

意図に気づいた先輩は顔を赤くしながら、手を差し出して、俺と手を繋ぐ。

もちろん、恋人繋ぎだよ。

「それと今日の先輩、いつも以上に可愛い! よく似合ってます!」

俺はちゃんと女性の服は褒めるし、褒め方にも気をつける。

効果覲面だったのか、褒めた瞬間、顔を真っ赤にする先輩。

こういう所も可愛いんだよね、この人。

「あ、ありがとう……! つ、ツキノワ君も……何時もとは違う印象だけど……似合ってます……か、

カッコイイよ……!」

ほら動揺しまくってる。

単純に女子高育ちだから男慣れしてないんだろう。

ミトの方がまだ慣れてるかな？

ゲーセン通いで男ともある程度親交あるし。

「とりあえず朝飯食べて、それから51層の街開き行きませんか？」

俺は直近の予定を発表する。

今回俺が計画を立てた為、先輩は知らないのだ。

「わかった！そうしよつか！」

こうして俺達のデートが始まった。

「流石に凄い人でしたね〜！」

「うん、でもすごく整ってる綺麗な街だね！」

俺とアスナ先輩は朝飯を食べたあとこの51層の主街区に来ていた。

そこで色んな店を見たり、食べ歩きしたりと結構楽しんだ。

多分お互いに攻略の時はこの店使おうとか考えてたんだけど、そこは言わないのが花。

せっかくのデートでそんな事を話したくない。

「そろそろお腹減ったね〜」

「じゃあ、そろそろお昼にしましょうか。こっちは」

そう言つて俺が連れてきたのは転移門広場だ。

「転移するの？」

「そうですよ。転移！〔フローリア〕」

そうして俺達は47層主街区〔フローリア〕通称〔フラワーガーデン〕にやってきた。ここはフロアが一面花畑で、人気のデートスポットなのだ。

「うわあ！何回みてもここは綺麗だね！」

「そうですね。先輩こっちこっち！」

そう言つて俺は先輩を圈内ギリギリにある秘密の場所にまで連れていく。

そこには一本の綺麗な桜の木があり、他の花とも相まってすごく美しい場所なのだ。

「…凄い…綺麗」

「実は攻略中に、たまたまこの穴場を見つけたんです」

そう説明しながら俺はストレージを弄り、中からレジャーシートと、朝作ったものを出す。

「それつて…まさか、お弁当？」

「そういう事です。今日のお昼はツキノワ特製手作りお弁当です！ジャジャーン！」

そう俺が朝作つたのは、お弁当だったのだ。

中身は至つてシンプルな唐揚げとか、玉子焼きとか、おにぎりの代わりのサンドイッ

チだったりとまあ、普通の、どシンプルなお弁当だ。

「ツキノワ君【料理】スキル取ってたの!？」

「知りませんでした?この間コンプしましたよ?」

「コンプ!？」

俺はドヤ顔を決めながら、報告する。

その報告に先輩はすごく驚いていた。

「そういうえば、ミトがツキノワ君は料理上手って言ってたっけ…」

「ウチは共働きですしね。お手伝いさんとかもないし、基本俺が作ってミトが片付けとか洗濯とかですね。そういう先輩だつてするんですよね?料理。ミトから聞いた事ありますよ?」

先輩も料理するって話聞いて、いつか一緒に作りたいとか思っていたりする。それはまたいつか話してみようかな。

「確かにするけどたまにだからね…」

「ま、その話は置いて、早く食べましょ!」

そのまま俺は木ノ下のレジヤースシートを敷き、弁当を広げる。

「うわあ〜!美味しそう!」

「よし!それじゃあ」

「いただきますー！」

そうして俺達はサンドイッチから手をつけた。

「！美味しい！しかもこれってマヨネーズ!？」

「お口にあつて何よりです。その正体は…これ！」

そう言つて俺はあるデータを公開する。

「SAOの味覚エンジンを全部解析して、それぞれの味を解析してあるんすよ！」

それは俺が色んな素材の組み合わせを解析して、リストアップしてあるデータだ。

「これ結構骨が折れたんだよね…。」

「嘘!?私もやってるんだけど…。中々上手くいなくて…」

「俺もめっちゃ大変でしたよ。失敗しまくつてしまくつてやつとつて感じですよし…はい

コレ。舐めてみてください」

俺は先輩の手に少し液を垂らす。

その正体は…

「嘘…これ…醤油！」

「正解です♪」

「これ以降も俺達はグダグダと話したり、花見をしながら弁当を食べていた。

「フウ…」馳走様でした」

「はい、お粗末さまでした」

どうやら満足して頂けたらしく、ニコニコしている。

「美味しかったです！今度は私が作るね！」

「楽しみしています！…それにしてもミトには驚きましたね」

「だよね！だよね！まさかクラインさんに惚れてるなんてね！」

このまま話はミトの恋バナに移る。

というのもこの間の打ち上げの時、女性陣＋俺の4人に追求されまくった結果、クラインに惚れている事が発覚したのだ。

まあ、年上好きなのは俺にはわかっていた事だしなんて事ないのだが…

「クラインなく。良い奴なんだけど、クラインなく」

「心配なの？クラインさんは普段はアレだけどしっかりしてる頼りがいのある大人だよ？」

「だからこそだよ。ミトをそういう風に見えるのかなって、クライン側が」

そう、クラインが意外にしっかりしてる大人なのは知っている。

だからこそ、ミトをそういう風には見ないのでは無いか？、という疑念を抱いてるのだ。

「それにあいつ料理下手だし。クラインは典型的な女性像を想像しちやっってるし」

「ああ〜…そつちの問題もあるんだ…。そういえば何でミトとクラインさんは呼び捨てなの？」

「ミトは親が名前で読んでたからですから。姉系の言葉で読んでたのは昔だけですし、今もたまにしか出てこないですよ？クラインは…多分最初に会ったからそのまんまっで感じですよ」

「ふーん。まあ、ミト次第、クラインさん次第かな〜…ふああ〜…」

ん？随分大きなあくびだな。

「眠いんなら寝ちやってもいいですよ？ここ圏内ですし」

「でも、せつかくのデートが…」

「気にしない気にしない。ほら、ゆっくりしよ？」

そう言いながら先輩の頭を撫でてると、徐々に瞼が落ちてきてそのまま寝落ちする。

俺は膝枕しながら優しく撫で続けた。

「…おやすみ、先輩」

「ん…。ん？」

あれ、いつの間に寝てたんだ？俺。

何か柔らかいものが、頭の下に…

「あ、起きた？おはようツキノワ君」

上から声がして上を見ると、優しい顔でこつちを見てるアスナ先輩の顔があった。

正確には半分ぐらいいはその豊満な…って!?

「俺寝てた!？」

ビックリして体を一気に起こす。

「う、うん。私が起きた時船漕いでたから、寝ていいんだよって行ったらそのまま寝落ちしたよ？覚えてない？」

「…何も」

本気で覚えてない。

そんなに寝ぼけてた俺？ていうか、日が傾いてきてる。

「俺、どんなけ寝てました？」

「ん〜2時間くらいかな。私もそれくらいだったし大丈夫だよ！」

そう言われても、エスコートしなくちゃいけないのに寝落ちとかダメだろ…。

よし！プランBに変更！

「先輩、先に夜ご飯食べませんか？」

「夜ご飯？今から？」

「実はこの夜はライトアップされてるんですよ！すごく綺麗なんで良かったら見ません



か?」

これはリサーチしてる時に分かったのだ。

アルゴに詳しい時間を確認とったのでほぼ間違えないと思う。

「ライトアップ!?!いいね!見たい!」

「じゃあ、そうしましょう!オススメのレストランがあるんですよ。こっちです!」

sideアスナ

今日は1日中ツキノワ君に、エスコートして貰っちゃったな。

朝ごはんのお店から、「フロリア」の穴場、お昼のお弁当、ライトアップの情報、おすすめのレストランの場所。

全部調べてくれたんだよねきつと。

特にあの穴場なんて、攻略では絶対に行かない場所だもん。

それをわざわざ、嘘ついてまで隠した。

きつと見栄なんだろうけど、いっぱい調べてくれた。

だから私も一つだけ調べた場所がある。

問題はそこにどう誘導するかだけど……ここは勇気を出さないと!

女は度胸だもんね!

sideツキノワ

レストランのご飯も美味しかった。

ライトアップされた夜景もロマンチックで最高だった。

そろそろデートも終わりの時間。

名残惜しいがまた明日からは、お互い攻略だ。

「じゃあ、アスナ先輩。そろそろ帰りましょうか」

「…」

「先輩？」

何で何も言わないのだろうか？

何かあったのだろうか？

そう思っているの先輩が、突然抱きついてきた。

「せ、先輩!？」

「…今夜は…もつと一緒になりたい。離れたくない…」

「先輩…」

アスナ先輩は、耳まで真っ赤にしながら俺に抱きついてきた。

その意味が分からないほど、俺も鈍いつもりは無い。

「…着いてきて」

少し予想外だったのはアスナ先輩が手を引いて、俺をエスコートしてくれたこと。

行き先が俺も一応、調べておいたホテルだったこと。

俺達は無言のまま、チエツクインをして、部屋に入った。

そして入ってすぐ、俺達はキスをした。

「…ツキノワ君。優しくしてね？」

「アスナ先輩…頑張ります」

こうして倫理コードを解除した俺達の夜は、さらに続いた。その夜は今までで最も熱く、激しく、愛おしい夜になった。

## 24話

outside

【迷いの森】。

アインクラッド35層にある森林のフィールドだ。

細かくエリア分けされたここはマップがないと、まともに進むことすら叶わない、かなり複雑なエリアなのだ。

そんなエリアに

「くっ……！」

1人の少女が迷い込んでいた。

まだ幼いこの少女は、中層では人気者で「フェザーリドラ」というモンスターを、【飼<sup>テ</sup>い慣<sup>ム</sup>らし】した【ビーストテイマー】なのだ。

しかし、少し前までパーティを組んでいたメンバーと衝突。

そのまま1人でこの森に入ってきてしまったのだ。

「……何処なの……？」

戦闘しながらだったため、タダでさえ迷子になるこの森で更にどこにいるか、分から

なくなってしまったのだ。

【フェザーリドラ】の【ピナ】を不安そうに撫でながら進むと、突然ピナが威嚇し出す。

『キュルル!』

「!?3体?」

タイムモンスターには索敵能力がある。

現れたのは【ドラंकエイプ】というゴリラ型のモンスターだった。

この辺りでは一番強いモンスターであり、幾ら安全マージンを取っていても、疲労困憊でアイテムも消費している彼女には3体は、危険だった。

しかし、逃げることも叶わず戦闘を余儀なくされた。

「やああああ!」

少女は短剣を抜き、ソードスキルで攻撃する。

一撃で半分以上減らすも、後ろにさがられ、代わりに別の個体が出てくる。

追撃は叶わずそちらの対応を余儀なくされた。

「はああああ!」

またもや半分以上削ると、後ろに下がろうとする。

その前に一気にカタをつけようと追撃に動いた瞬間

『キュルル!!!』

ピナの声に咄嗟に身を翻す。

そこには2体の無傷の「ドランクエイプ」がいた。

「え!?!増えた!?!」

周りを確認するも数は3体と変わっていない。

訳が分からずにいると、奥の1体が持っていた瓢箪の中身を飲んでるのが見えた。

その時、そのモンスターのHPは回復したのだ。

「!?!嘘!?!回復するの!?!」

これまではパーティーで、回復する隙を与えないくらい素早く倒したので、その事を知らなかったのだ。

それ以降も猛攻は続く。

疲労と焦りで空振ってしまった彼女の隙を「ドランクエイプ」は見逃さなかった。

「ぎゃああー!」

攻撃され吹き飛ばされる少女。

その一撃は3割も彼女のHPを削った。

それを見た時、背筋が凍った。

これを後3回も喰らったら…そう考え、死を明確に意識してしまったのだ。

アイテムは尽きた。

体は恐怖で動かない。

振り上げられる棍棒に目を瞑る。

何時までも衝撃は来ない。

恐る恐る目を開けると

「!?ピナ!?!」

主人を守った使い魔が地面に伏していた。

「ピナ! しつかりしてピナア!!」

『キュルル…』

少女の叫びも虚しくピナはポリゴン状に散ってしまふ。

「…ピナ。置いてかないで…ピナ…」

泣く事も出来ない少女を前にしても、モンスターに感情は無い。

無慈悲に棍棒を振り下ろすその瞬間、「ドラクエイプ」達は細切れにされていた。

「…え?」

ポリゴン状に散っていく奥にいるのは、1人の男だった。

「…大丈夫か?」

その男は赤いコートをはためかせ、紫色の髪をしていた。

少女を見る赤い瞳は心配の色を浮かべていた。

sideツキノワ

間に合わなかったか…。

俺は索敵スキルで引つかかった方に走ったが、相変わらずの複雑さに手間取ってしまった。着いた時には既に何か起きた後だった。

「私は…でも、ピナが…」

彼女は羽状の何かを握りしめながら俯く。

「君は…ピーストタイマーなのか…。それ名前あるか」

少女はタップして詳細を確認する。

「…【ピナの心】…」

アイテム名を見て、また泣き出す少女。

「泣くな泣くな!?!落ち着けて!心アイテムならまだ間に合う!3日以内なら蘇生可能なんだ!」

俺はたまたまこの間デートの際、調べてたらついでに出てきた情報を教える。

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ、47層にある【思い出の丘】にある【プネウマの花】を使えば、復活出来るんだ」

少女の顔は明るくなるも、一瞬で暗くなる。



「47層…」

35層で苦戦する彼女では、47層は厳しいのだろう。

ふむ…丁度いいか？

俺はストレージから幾つかの装備を引つ張り出した。

「これとこれと…あとこれと…あ、これも。これだけあれば大丈夫だろ。ほら、やるよ」

「へ？ま、待って！待って下さい！こんなの受け取れません！」

そうは言われても、こっちも事情がある。

「君が来ないという意味が無いんだ。それに何時までもタンスの…違うか、ストレージの肥やしにしておくのも勿体ない」

最もらしい理由を答えながらトレード画面に出す。

「あの…お金は…」

「要らない…その代わりに君には…命を懸けてもらおう」

「…え？」

俺はここに来た理由を話す。

彼女は酷く驚いていたが、俺は気にしない。

「もちろん君の命は、俺が命を懸けて守る。ただそのリスクは背負ってもらおう。自分の命か、ティムモンスターの命か。好きな方を選べ」

俺は冷酷に2択を突きつける。

心は痛むが、それでも俺は心を鬼にする。

彼女ならきつと…

「…ピナは、命を懸けて、私の命を救ってくれました。今度は私がピナを助けます！命を懸けても！」

やっぱり。

彼女ならそう選ぶはずだと思った。

そんな気がしていた。

「分かった。なら俺は君の命を守る。たとえ俺の命を懸けてでも。俺はツキノワだ。

君は？」

「…【シリカ】です。よろしくお願ひします。【剣豪】のツキノワさん」

「…その二つ名は止めてくれ。恥ずい」

主街区【ミーシエ】に戻った俺達は宿屋に向かっていた。

「何処かオススメはないか？」

「私もあまり…私の泊まつてる風見鶏亭には下にレストランがあつて、チーズケーキが美味しいですよ？」

「何?!チーズケーキ!?!」

マジか!? 知らなかった!?

もつとりサーチしとけよ俺!

…しまった。ついテンションが…。

「…好きなんですか? チーズケーキ」

「…というより、甘い物が好きなんだ…ほっとけ」

ヤバイ、さつきより恥ずい。

顔どころか耳まで真つ赤なのが自分でも分かる。そんな俺の耳に、笑いを嘯み殺す声が聞こえる。

「…おい笑うな」

「だって…さつきまでと…アハハハ!!」

「わくらくうくなく!!」

「アハハハ!!」

全く不屈きな奴だな!

…まあ、笑ってくれるならいいか。

シケた面されるよりよっほどマシだ。

「シリカちゃん!」

ん? 誰か来た。

「シリカちゃん！遅かったけど大丈夫!？」

「心配したよ…誰あんた？」

「おや？俺を睨んで何事？」

「あの…私この人とパーティ組むので…」

俺の腕を掴みながら、苦笑い浮かべるシリカ。

「あんたなく！横入りすんなよ！みんな順番待ちしてるんだぞ！」

いや知らんわ。

そんな事情。

「ふ〜ん…明日には47層行くけど、着いてくる？」

「よ、47層!？」

行く階層を教えるとビビり上がる2人。

そりやそうだ。

「お、お前は大丈夫なのかよ!？」

1人が声を震わせながら聞く。

俺は鼻で笑って一言で切り捨ててる。

「余裕。…行くぞシリカ。早くチーズケーキ食べたい」

「あ、はい！それでは失礼します！」

シリカは律儀に頭を下げて、俺に着いてくる。

「はあ…シリカ。これが終わったら俺の彼女と姉を紹介するから、男のあしらい方を教われ。律儀に全部を相手したら、絶対に面倒事になるぞ」

「彼女と姉って…【閃光】のアスナさんと【狩人】のミトさんですか？」

「そう…やつぱりあのニユース、ここでも広まってるか…」

「むしろアインクラッド中に広まってると思いますよ」

「アルゴメエ…」

あのネズミどうしてやろうか…そう思ってるよ

「あーあ？シリカじゃなあい！」

妙に甘ったるい、耳にベタつと残る声が聞こえる。そこには赤い髪のおばさんがいた。

「…ロザリアさん…」

…なるほど…こいつが…シリカには話してあるから、こいつの事も知っている。

「あー？あのトカゲは…まさか」

「確かにピナは死にました…ですが！生き返らせます！」

「へえ、【思い出の丘】に行くのね。でも貴女程度で大丈夫なの？」

ロザリアはシリカをねっとりとした視線で見る。

「余裕だよ。あの程度なら簡単だ」

俺はシリカの前に立ち塞がる。

「へえ…いい装備してるけど、あんたも誑かされたの?…あら、よく見るといい男じゃない。そんなちんちくりんより、私と来ない?」

…うわ…気持ち悪い。

俺ここの無理。

「悪いけどお前みたいな気持ち悪い、厚化粧ババアこつちから願い下げだよ。お前なんかよりシリカの方がよっぽどいい女だ。まあ、俺は彼女いるけど」

「厚…!?ババア!」

「いい女!」

ん?2人揃って何を赤く…いや、ババアの方は挑発したし、当たり前か。

「とにかく、邪魔」

そう言っただけはシリカの手を取り、先を急ぐ。

後ろで何かヒスってるが気にしない気にしない。

「どうして…あんな酷い事言うのかな…」

宿屋に着いて、飯を食べてる時にシリカが呟く。

「シリカはMMOはこれが初めて?」

「はい…ツキノワさんは？」

「俺もだ。…兄弟分と姉貴曰く。こういうゲームでは性格が変わる奴が多いんだと。か  
くいう姉も元は性別偽ってやってたしな」

見た事はないけど、きつとあの格ゲーみたいなおっさんなんだろうな。

そんな気がする。

「逆ネカマって言えばいいのかわ？」

「そ、そうなんです…」

「ま、小難しく考えるな。要は自分がどう生きていくか、それだけだ。さて、そろそろ  
ケーキ食べよう！すみません！」

俺達はケーキを食べて解散した。

ケーキの味？美味かった…！

side シリカ

不思議な人。

最初はすごく冷たい人だと思った。

でもケーキの話をした時、目が輝いてた。

その後すぐ顔を赤くしながら恥ずかしがってた。

口ザリアさんには、冷静だったけど怒ってた。

「ご飯食べる時は優しかった。

きつと本来のあの人は感情豊かな人なんだろう。そんな彼と付き合い合ったらきつと凄く楽しいのかな。

彼女さんのアスナさんは会った事ないけど、きつと楽しそう。

お姉さんのミトさんにも会った事は無いけど、心配になりそう。

きつとあの人は信頼出来る…。

今まであまり大人の男性は信用出来なかった。

求婚までしてくる人もいた。

だから上辺だけの付き合いをしてきたけど…あの人ならきつと…。

そう今日の事を振り返っているとノック音がする。

「は、はい!？」

「ツキノワだけど、明日の説明し忘れた。入っていい?」

「あ、はい!少し待っ…!？」

私は普通に部屋に入れようとして、自分の姿を思い出した。

下着以外、全部装備を解いてた事を。

「す、少し待っててください!？」



「お、おう……？」

あ、危なかった……!!

慌てて身なりを整えてからツキノワさんに入ってもらった。  
危うく大惨事なるところだった……。

「シリカ? どうした?」

「な、なんでもありません!? それより、そのアイテムは?」

何やらツキノワさんが、ツボのようなものを取り出した。

お香でもたくのかな?

「ミラージュスフィア」ってアイテムだよ」

そう言つて何やら操作すると、アインクラッドのホログラムが飛び出してきた。

「わあ……綺麗!」

思わず感嘆の声を呟いてしまう。

でもでも、綺麗だったんだもん!

その様子に穏やかに笑いながら、47層をピックアップして、説明してくれる。

「ここが主街区。でこつちが【思い出の丘】。この道を真っ直ぐ……」

突然、説明をやめてドアの方を見る。

「ツキノワさん……?」

私の声は無視して、いきなり扉を乱暴に開ける。

「誰だ!?! チツ! 逃げられたか。て言うか、聞かれてたな」

聞かれてた? この部屋の話を?

「で、でもノックしないと声は…」

「【聞き耳】スキルがあれば別だ。まあ、そんなスキル上げてるやつは中々いないけどな

…」

「…これもあの人達の仲間なんでしょうか?」

「そういう事」

私は怖くなった。

ここまでする人達が本当にいるなんて…。

体が震えだす。

その時、ツキノワさんが優しく肩に手を置いてくれた。

「俺が言ったりスクはこういう事だ。君はそのリスクを背負うと、自分で決めたんだ。

そこに俺は同情はしない。その代わり、俺は君を守ると約束した。だから俺を信じてく

れ」

…ああ、そういう事か。

この人は私を子供として見てる訳じゃない。

1人のプレイヤーとして対等に見て話してくれているんだ。だから冷たい訳ではなく、私を甘やかさないんだ。

「…はい。確かに怖いですけど、私は止まりません！ピナを救うって決めたんです！」

「…その意気だ。さて今日は休もう。明日の事は現地で説明するよ。それじゃあ、おやすみ」

「はい！おやすみなさい！ツキノワさん！」

そうして彼は部屋を出た。

私はそれを見送ってベッドに寝っ転がった。

あんな人初めて会った。

大抵私を子供扱いするか、マスコットみたいに扱う人が殆どだ。

中には求婚する人もいたが、それは忘れる。

だけどあんな風に対等に見てくれる人は初めてだった。

だから信頼出来る。

「…おやすみ、ツキノワさん」

そうして私は明日に向けて寝る事にした。

夢で彼と背中合わせで戦ってる夢を見て、いつかそうなるといいなって思ったのは別の話。

## 25話

sideツキノワ

「転移〔フロアリア〕」

次の日、俺とシリカは47層に来た。

シリカは行った事ないそうだが、これは驚くだろうな。

「うわあ……夢の国みたい!!」

「この層はフロア一面が花畑なんだよ……って聞いてないなありや」

目を輝かせて、花畑に突っ込んでいく。

まあ、いつか。

すると周りを見渡して顔を赤くする。

「ここはこういう場所だからな。デートスポットとして有名なのさ。ほら行くぞ、こつちだ」

「あ、待って下さい! ツキノワさん!」

俺はシリカを連れて、圏内の端まで来ていた。

「さて、行く前にこれを渡しておく」

俺は転移結晶をオブジェクト化して、シリカに渡す。

「もし何か不測の事態が発生して、俺が逃げろつて言ったら何処でもいい。…欲を言う  
とグランザムにある【血盟騎士団】の本部がいいけど。とにかく、これを使って逃げる  
んだ。分かったな」

「…分かりました」

「よし。行くぞ」

俺達は【思い出の丘】を目指して出発した。

黙って歩いているとシリカが何か言おうとする。

「ツキノワさん…あの…!？」

突然シリカが足を取られ、吊るさせる。

そこには大型だが、かなり弱いモンスターがいた。

でもいきなりの事で動揺してのだろう。

スカートを抑えながら必死に俺に助けを求める。

「ツキノワさ〜ん!助けて!」

「落ち着けシリカ!そいつ滅茶苦茶弱い!」

ダメだなあれ。

聞こえてない。

「速く見ないで助け下さい！」

「それは…無理だな…」

そんな無茶苦茶な…。

一通り慌てて冷静になったか、もしくはヤケになったか、あっさりとモンスターを倒す。

「…見ましたか？」

スカートの中はたまたま見えなかったが、ここはいじった方が面白そうだ。

「おう！ ナイススキル!!」

「…ツ！ ツキノワさん！」

ほら、やっぱり面白い。

「そーいや、さっき何を聞こうとしたんだ？」

さっきの事で少し怒ってるシリカに聞く。

「…ツキノワさんはどうして、ここまでしてくれるんですか？」

その顔は真剣で、さっきまでとは全く別だった。

「？理由は昨日話したろ？」

「確かにそうです。装備は安全性の為。お金は命を懸けるから。その辺りは納得はいくんです。でも、そもそもどうしてあの話を受けたのが、分からないんです」

ああ、そういう事。

んーそうだな…。

「大切な人達がいる。もしそうなたらつて思うとな…。ま、そんなありきたりの理由  
さ」

そんな話をしながら、モンスターをあしらいつつ、先に進む。

トドメはシリカに刺させ、レベリングもついでに行う。

やはり高層だからだろうか、面白いくらいレベリングが進む。

やがて目的の【思い出の丘】にたどり着く。

「ここが…【思い出の丘】…」

「そう。目的の物は一番奥だ。ただし、この辺りのモンスターは、今までとは比較にならない。俺が戦うからトドメだけ任せた」

「…了解です」

そうして、俺達は戦いながら、最奥を目指す。

「あつた。あそこだ」

「あそこに…！」

「おいシリカ！」

慌ててシリカを追いかける。

「俺の傍から離れるな！まったく…！」

シリカに少し説教する。

「ごめんなさい……」

「はあ……ほら、出てきたぞ」

俺は咲いた花を指さして見せる。

シリカはその花を見て嬉しそうに採った。

「【プネウマの花】……!」

よし、採ったな。

「じゃあ、戻るぞ。ここは危険なモンスターが多い。ちゃんと落ち着ける所で復活させてやろう」

「はい!」

outside

ツキノワとシリカは花を摘み、街の前にあるレンガで出来た橋まで来ていた。

そこで突然、ツキノワがシリカを止めた。

「シリカ、さつき渡したやつ持つてるな?」

「は、はい……」

「ならない。そのアンブッシュしてる奴、出てこいよ」

「……あら、私のハイディングを見破るなんて、中々の索敵スキルね剣士さん」



木の影から現れたのは、ロザリアだった。

「ロザリアさん……」

シリカは驚いた様に呟く。

「首尾よく『プネウマの花』を手に入れたようね……じゃあ、それを渡してくるかしら」

その顔は邪悪な笑みを浮かべていた。

「そうは行かねえな。なあ、オレンジギルド『タイタンズバンド』のリーダーさん♪」

そんなロザリアに、もっと黒い笑みを浮かべながら、返すツキノワ。

その笑みに少し後ずさるロザリアだか、まだ強がる。

「へえ……それを知ってるのね」

「グリーンが獲物を見繕い、オレンジが奇襲をする。単純だが効率的な手だ。昨晚の盗み聞き野郎もお前の仲間だな」

「で？それを知っていて、わざわざそこまで知っていて、その子に付き合うなんて、あんたバカ？まさか本当に誑かされたのかしら？」

ロザリアはツキノワをバカにしたように笑うが、それをツキノワは鼻で笑って一蹴する。

「ふん……シリカは知ってたよ。お前ら事教えたし」

「……何ですって？」

「そして、俺もお前に用があったんだよ。お前、10日前、「シルバーフラグス」ってギルドを潰したな。リーダー以外が全員死んだ。そのリーダーがな、最前線でお前らを投獄してくれて頼み込んだのさ。：お前にあいつの気持ち分かるか」

その声は底冷えするような冷たい声だった。

あまりの迫力にロザリアは勿論、聞いてるだけのシリカすら、恐怖で震えていた。

「し、知らないわよそんな事!? 実際には死んだ証拠なんてないんだし、そんな事にマジになっちゃってバカなの? それよりも：あんな達は自分の事を気にしな!!」

ロザリアが何らかのサインを出すと、周りから7人のオレンジプレイヤーが出てくる。

「つ、ツキノワさん：数が多すぎます!」

「ん? 大丈夫だぞこの程度? それよかクリスタル、ちゃんと用意しとけよ」

ツキノワは片手でクイックチェンジの操作をしながらシリカの頭を撫でる。

そして何時もの服装に替えて、歩き出す。

「ツキノワさん!!」

「ツキノワ? : : : !? 真紅の着物に、黒袴。白の羽織に：赤鞆の刀! ロザリアさんこいつ!? ソロで前線に挑んでる、2人目のユニークスキル持ちだ! 【剣豪】のツキノワ!! 攻略組だ!!!」

ツキノワの正体が分かったところで、彼らに動揺が走る。

文字通り格が違う強さを持つ相手に恐れていると、ロザリアが発破をかける。

「こ、攻略組がこんな所にいる訳ないじゃない！ほら、とつとと始末して身ぐるみ剥いじまいな!!」

その声に応じて7人は一気にツキノワに襲いかかる。

何発ものソードスキルを受けるツキノワ。

それでも彼は何もせずただ立っているだけだった。

「つ、ツキノワさん!!!」

シリカが助けに入ろうと思わず短剣を握る。

その時

(…あれ?)

シリカがある事に気づく。

それはツキノワのHPだった。

何発も受けている筈なのに、一向に減らず、減っても直ぐに回復していたのだ。

「何で…? どういう…?」

「何してんだいあんた達!? さっさと殺しな!!」

ロザリアもその異変に気付いたのか、仲間にも再度声をかけるが、彼らも何が起こつて

るのか全く分かってなかった。

「ふあくあ、どうした？ボーナスタイムは終わりでいいか？…10秒あたり400つて所だな」

そんな中、ツキノワだけが退屈そうにしていた。

「お前達が俺に与えるダメージ総量だよ。俺のレベルは79、総HPは15200、自動ヒーリングが10秒で1000だ。要するにお前らじゃ一生俺を殺せないって事」

その衝撃的なカミングアウトに誰もが言葉を無くす。

あまりの絶望的な差に思わず、1人が呟く。

「そんなのアリかよ…」

「アリだよ。それがレベル制MMOの理不尽さなんだよ」

そう言いながら懐からある結晶出す。

「こいつは回廊結晶だ。黒鉄宮が設定してある。全員ここに入ってもらおう。…ああ、別に入らなくてもいいぞ。その代わり…ここで死ぬとどうなるか、実際に体験してもらおう事になるが…？もし、いつか会った時教えてくれ。それがこの世かあの世かは知らねえかな」

そう言いながらツキノワは1番の殺気を叩きつける。その殺気にロザリア以外は武器を捨てて、投降する。

「も、もし私に攻撃すればあんたも!？」

それ以上言葉は続かなかった。

ロザリアの足元をツキノワの斬撃が、切り裂いたからだ。

「だから?言つとくが俺はソロだ。1日2日オレンジなつた程度、なんの問題もないぞ?」

ついにロザリアも折れて、全員監獄に入っていた。  
た。

「…さて!速く行こうか。シリカ」

「は、はい!」

sideシリカ

私達は宿に戻り、ピナを復活させました。

「ピナ…ピナア!!!」

泣きながらピナを抱きしめて、改めてツキノワさんにお礼を言った。

「あの!本当にありがとうございました!」

「気にすんなよ。こつちも巻き込んだし、お互い様って事で。後、その装備あげるよ。いいらしいし」

「そういう事なら!有難く貰います!」

そういう話をしているとノックする音がする。

「はい！誰でしょうか？」

「昨日言ったろ？俺の彼女と姉を紹介」「ツキノワ君（優月）!!開けなさい!!」…やっぱナシにしよつか？」

「開けますね」

「シリカア!!」

すぐ怒ってます。

一体何したんでしょうこの人？

私がドアを開けるとズカズカと部屋に入り込んで

「貴方ねえ!!なんなのよあのメール!!」

メール？何の話？

「お、落ち着いて2人とも？後姉貴、本名は止めて」

「口答えしない!!最初はいいわよ!問題は後!『ついでにオレンジギルド潰してくるね〜』って何よ!!何がどうなったらそうなるの!?何であんた何時もそうなのよ!!」

「ツキノワ君!!何でそんな危険な事ばかりするの!?もつと周りの事も考えて!!心配かけさせないで!!」

「…はい。はい。すみません」

「本当に弟なんだ…」

私の前では頼りになるお兄ちゃんって感じだったけど、2人の前では姉に怒られる弟だ。

「…はあ、2人ともかなり心配してたしな…」

「きやああ!!」

ビツクリした!!凄くビツクリした!!

「わあ!?!驚かせてごめん!俺はキリト。ツキノワの兄弟分みたいな関係の奴だよ」

キリト…じゃあ、この人が「黒の剣士」。

「全く…それで?会って欲しい子ってこの子の事?」

どうやら説教は終わったらしく、紫色の髪をしたお姉さんがこつちを見る。

「そう。この子はシリカ。シリカ、こつちが姉のミト。こつちが彼女のアスナ先輩。2

人にはシリカに男のあしらい方を教えてあげて欲しいんだ」

ツキノワさんが私の現状を説明してくれる。

「…分かったわ、出来るだけ教えてあげる。改めて私はミトよ。この愚弟が世話になつたわね」

「アスナです。よろしくね。私からもツキノワ君がご迷惑おかけしちやつたみたいで

…」

あまりに優雅なお辞儀に思わず見とれてしまいました。

「い、いえいえ！むしろ私の方こそお世話になりましたし！」

そうして私の対人マナー講座が始まりました。

その後、私達はフレンド交換をして、今では他の女性プレイヤーさん達と、たまにお茶をする仲になっています！

本当にツキノワさんに会えて良かったです。

ツキノワさん！私のお兄ちゃん！

ありがとうございます！！



## 26話

outside

攻略組は5層パニで、フィールドボス攻略会議を行っていた。

「フィールドボスを村に誘導します」

血盟騎士団、副団長のアスナが作戦を発表する。

その瞬間、場がざわめき出す。

それに待ったをかけるのは、彼氏であるツキノワだった。

「ち、ちよつと待って下さい！それじゃ村の人達が……！」

「それが狙いです。ボスがNPCを殺してる間に攻撃、殲滅します」

「NPCはオブジェクトじゃない！彼らだって……！」

「生きていると？……彼らだってオブジェクトです。殺されたってまたリポップするのだから」

確かにその通りだ。

言い分としての道理は通ってる。

「その意見には反対です」

しかしツキノワはそれを良しとは出来なかった。

今まで多くのNPCを見てきた。

この世界は、彼らにとっての現実なのだ。

それをよく知ってしまった故に、その作戦には乗れなかった。

「今回の作戦は私、血盟騎士団の副団長アスナが指揮をとる事になっています。それに従えないのなら……」

その瞬間、ツキノワは初めてアスナに怒りを覚えた。

「ならもういい！このボス戦は降りる！それでいいんだろ！」

そう怒りながら出ていこうとするツキノワ。

またもや周りにはざわめく。

攻略組、ひいてはSAO内でもかなり仲良しカップルだった2人が、喧嘩を始めたのだから無理もない。

「……え？」

「ちよ?! ツキノワ?! 待ちなさい!」

呆けるアスナと慌てるミト。

2人を一番理解しているミトだが、こうなるとは想像もしてなかったのだ。

普段、大体はツキノワが折れる形でアスナの意向に沿っていくのだが、今回は初めて

ツキノワが曲げなかったのだ。

「うるさい！ミトは黙ってる！…アスナ先輩。お疲れ様でした。攻略頑張つて」

そう言つて出ていくツキノワ。

その背中を何も言えずにただ見つめるアスナ。

こうしてなんとも言えない空気のまま、フィールドボス攻略会議は終了した。

sideミト

「アスナ大丈夫？」

「…グスツ…みすみい…」

あ、大丈夫じゃないわねこれは。

思いつきり泣いちやつてるし、本名で呼ばれちやつてるし。

「ほらアスナ、泣き止んで？ツキノワだつて怒つちやつただけだから？ね？あつちだつてすつごい落ち込んでるはずだから」

「…でも、あんなに…怒つた優月君…初めてだし…」

「それは、いつもアスナの事を尊重してたからあの子も。私達が喧嘩すると大体あんな感じよ？それにそろそろ頭も冷えて、自己嫌悪しだす頃合いね」

私達が喧嘩すると大体、優月はどっか行く。

そして話し合いも無く、ある日突然謝ってくるのだ。

こっちも謝ってお互い和解する。

兎沢姉弟の喧嘩は大体こんな感じ。

まあ、いつかのデュエルみたいな例も、無くはないけど。

「あの子が珍しく意固地になったのも悪いけど、アスナの言い方も少し悪かったと思うわよ？少しあの子に甘えすぎだったんじゃない？」

「…何だかんだで、優月君は着いてきてくれるって思ってた…」

「…なんにせよ、ちゃんと謝るんだよ？多分あの子から謝ってくると思うけど、それでもちゃんと謝らないと解決しないからね？」

こうして私は親友のフォローをした。

仲直りのキツカケになることを祈って。

しかし、それから約1ヶ月たった今59層。

ここに来ててもなお、仲直り出来ていないこの2人はどうすべきだろうか？

side ツキノワ

…足音が聞こえる。

芝生を踏みしめる音だ。

「何してるの？」

次に聞こえてきたのは、俺が一番好きな人の厳しい声だった。

「…アスナ先輩」

「攻略組のみんなが必死に迷宮区の攻略をしてるのに、何で君は呑気にお昼寝してるのよ？」

どうやら昼寝してるのが気にいらぬらしい。

とはいえ、何もしなかつた訳では無い。

「…夜の内に未踏破エリアを開けてきた。マップが出てたでしょ？あれは全部夜にやつたやつです」

「!?あれだけの量を一晚で!？」

周りを気にせずにやるには深夜が一番なのだ。

その影響もあつて寝てないので、すごく眠かったのだ。

「だから寝てました。これならいいですか？」

「う、うん…」

流石にちゃんとやっていたので、先輩も強くは言い返せず、どもつてしまう。

「…この間はすみませんでした。…先輩の気持ちも考えずに…」

俺はこの1ヶ月間、ずっと言えずにいた事を言つた。

あの後、直ぐに謝りたかったのだが、タイミンクと、意地が邪魔して中々切り出せなかったのだ。

「…私の方こそごめんなさい。ツキノワ君は着いてきてくれるって甘えてた。ツキノワ君を傷つけた。ごめんなさい」

先輩は俺の上に膝をついて、俺の頬を撫でながら謝ってくる。

「じゃあ、お互い様って事でもう終わり。それより先輩寝てますか？顔色悪いですよ？」

「それは…」

やはり寝てないらしい。

ミトと2枚看板で副団長を務めているけど、その内容はまさに激務なんだろう。

ミトはゲーム事の要領はいい。

一応、レベリングとかは上手いことやってるらしい。

しかし、アスナ先輩はその辺はまだ慣れてない。  
それでもなお、俺達と同等のレベルを維持しているのだから、それこそ寝る暇を惜しんでるのだろう。

「先輩！一緒に寝ましょう！」

俺は強引に休ませる事にした。

今一番必要なのは息抜きだ。

「ダメよ！そんな暇は!？」

「ダメ！はいゴローン!!」

「きゃあ！ツキノワ君!？」

「暖かい…おやすみ…」

俺は強引にアスナ先輩を抱きしめそのまま寝つ転がる。

先輩を離さないようにしながら俺は、そのまま寝落ちした。

「ん…」

俺が目を覚めたのはそれから1時間後くらいだ。

ふと目を開くと、目の前にアスナ先輩の寝顔があった。

「…ホント綺麗な人だな。なのに…すごい限」

これはちよつとやさつとじゃ起きないな。

俺はゆつくりと体勢を変え、膝枕をした。

「いい夢を見えますように…」

そう祈りながら、俺は先輩を護衛を務めることにしたのだった。

sideアスナ

「クチュッ!」

寒い…なんでだろう。

それに何故か眩しい。

でも頭の方は暖かい。

「あ、起きました？」

その時、1番愛おしい彼の声が聞こえる。

まだ夢でも見てるのだろうか。

だつたらまだ甘えてもいいかな？

「…ゆづ…き…君…大…好き…」

「ん!?そ、そういうのはちゃんと目を覚ましてから言ってください!! // //後、外で本名

呼ばないで!」

「…ん?」

ん?何かリアルな対応された気がする。

ていうか、すごく近くから聞こえるような…?

私は気になって目を開けると

「…おはようございます // //」

顔を真っ赤にしながら、こちらを覗き込むツキノワ君がいた。

「…おはようっ?」



なにか掛けられている。

これは、彼の羽織？

しかもこの体勢は…またもや膝枕？

という事はさっきのは夢じゃない？

徐々に意識が覚醒してきた私は、先程やらかした事を少しずつ思い出していき

「~~~~!?!?／／／」

顔が燃えるのではと思うほど熱くなる。

私は立ち上がって思わず睨んでしまう。

何とか気持ち落ち着かせてから、彼にある提案をする。

「…(飯一回)」

「へっ？」

「(飯一回！何でも幾らでも奢る！これでチャラ！」

我ながら、何て可愛げのない提案なんだろうか。

sideツキノワ

アスナ先輩に誘われ、57層のレストランに来た。

周りのヒソヒソ声が気になる。

まあ、有名税として諦めるしかないか。

「…ガードしてくれてありがとう」

少し気まずそうにお礼を言うアスナ先輩。

「気にしないでください。彼氏として当たり前です」

「でも…あんな態度とつちやって…」

ん？もしかして誘ってきた時のこと気にしてんの？

何を着にしているかと思いきや。

「むしろ先輩の可愛い寝顔とテレ顔が見れて役得です！」

「大きな声でそんなこと言わないの!!」

いや、先輩の方が声でかい。

周りの視線に気づいたのか、顔を赤くしながら席につき直す。

「…街の中は安全な圏内だから心配ないけど、寝てる時は別だから…」

「デュエルを利用した睡眠PKですね」

本来、腕試しや賭け的な使い道をされるデュエルだが、その間はHPは減る。

それを利用し、寝てる相手に勝手に操作して承諾させて、一方的に鬪り殺す。

そういう事件が実際に起こっているのだ。

「うん…だから…」

「先輩。言つたでしよう？彼氏として当然です。むしろ他の誰にもさせたくありません。……まあ、ミトは例外的に認めます」

「……フフ！」

「な、なんで笑うんですか!?!」

「2人はやつぱり仲良いなつて……妬げちゃうな」

そう言われてはこつちも照れてしまう。

まあ、やつと笑顔になつたならそれでいつか。

そう思つた瞬間

「きゃあ………!!!!」

外から女性の悲鳴が聞こえてきた。

「!?先輩!」

「行くわよ!」

俺達はすぐに店を飛び出し声の方へ走っていく。

角を曲がつたところで向かいから知つた顔が飛び出してきた。

「キリト!黒猫団のみんなも!?!」

「ツキノワ!アスナ!2人も聞こえたのか!」

「ええ!急ぐわよ!!」

俺達8人は一気に走り出して、声の方へ向かう。

「……あそこだ!!」

そこには胸に槍が突き刺さったフルプレートの男が、ロープでつられていた。

まだHPがあるのか、槍を抜こうとしている。

「アスナ先輩!中をお願い!キリト達は下で受け止めて!俺が縄を切る!」

「了解!」

俺はすぐに指示を出して走り出す。

遠すぎて斬撃が届かず、刺突は狙いづらいのだ。

先に走ったキリト達のセットが完了した所で俺は壁を走り登って、斬撃を飛ばして紐を切る。

しかしその瞬間、何かを呟いて碎け散るプレイヤー。

「…間に合わなかった…」

目の前が真っ暗になる。

助けられたかもしれないのに、間に合わなかった…。

「みんな!WINNER表示を探してくれ!!」

キリトが場にいる全員に呼びかける。

「中には誰もいないわ!」

中からアスナ先輩の声が響く。

俺も切り替えて必死に探すも見つからず

「クソ!!30秒たった!」

こうして表示時間も過ぎてしまった。

「…圈内殺人…だと?」

恐らくSAO史上最も謎の殺人事件が発生した。

## 27話

sideツキノワ

「…どういう事だ？これは」

キリトの眩きはここにいる全員の気持ちだった。

安全なはずの圏内で殺人事件が起きた。

この事実がもたらす衝撃は、計り知れなかった。

「…普通に考えれば、デュエルの相手が被害者の胸に槍を突き刺して、ロープで縛って、窓から突き落とした…。これしかない」

ケイタがポツつと眩く。

その眩きにキリトが返す。

「でもデュエルのWINNER表示がどこにも出なかった」

「でもーけ、圏内でダメージを与えるには…」

「そう、デュエルしか有り得ない」

キリトの言葉にサチとアスナ先輩が反論する。

「…なんにせよ、このまま放置はできない。先輩、悪いですけど攻略は…」

「分かってるわ。それどころじゃ無くなっちゃったし。しばらくパーティー組みましよう？言っておくけど、お昼寝はさせないからね？」

「…よろしくお願いします。後で寝たのは先輩でっ痛ってえ!？」

思いつき握りつぶされた…、メチャ痛い…。

まあ、ペインアプソーバーがあるんだけどな。

「さてと、とりあえず私達はこの部屋をもう一回漁るから、キリト君達は目撃者を探してきて」

アスナ先輩が場を仕切り出す。

流石は血盟騎士団の副団長、様になる。

「？俺達も手伝うぞ？」

キリトがそう名乗りあげるが

「キリト！速く行くよ！」

「お前達も！行くぞ！」

何故かサチとケイタがみんなを手早く部屋から押し出す。

訳が分からないまま、部屋は俺達以外いなくなるつた時だった。

「ツキノワ君。もう無理しなくていいんだよ」

そう言いながら、アスナ先輩に抱きしめられる。

…気づかれてたか。

「…俺、目の前にいたのに…助けられなかった…」

そう、あと一步、あと一手速かったら助けられたかもしれないかった。

俺の剣豪スキルなら、十分間に合ったかもしれないのに。

「そんな事ない。あの状況、あれが最善、あれが最速だったよ。それでも間に合わなかった。ただそれだけ」

「でも…でも…!」

「もしかしての話は意味ないよ?今すべきなのは背負い込む事じゃないよ?次の被害を出さないようにする事。それが大事」

先輩の言葉が少しずつ俺の体を軽くしてくれる。

先輩の気持ち少しずつ心を明るくしてくれる。

「例え、この世の誰が君を赦さなくても、誰よりも君が君自身を赦せなくても、私が貴方を赦します。だから、今は泣いていいんだよ」

「…ツ!!先輩…!!」

俺は遂に我慢しきれず、先輩の胸を借りて泣く。

もう、同じ事は繰り返さない、そう決意しながら今は泣き続けた。

泣き止んでから、俺達は黒猫団と合流して、情報共有をした。



黒猫団が調べて分かったのは

①発見者は「ヨルコ」というプレイヤー。

悲鳴も彼女のもの。

②死んだプレイヤーは「カインズ」。

スペルはKainz。

③2人は元同じギルド。

今晚、会う約束をしていた。

④広場ではぐれて、探していた所に出くわした。

⑤その際、後ろに見た事ない人影があった。

なお、恨まれるような事に覚えはないらしい。

「分かったのは、あの時の状況だけか」

「そうだな、次はこの槍だ。さつきサチが鑑定してくれた」

そうか、サチは生産職だから「鑑定」スキル持つてるんだったな。

「うん、これはプレイヤーメイドで名前は「ギルティソーン」。直訳すると罪の茨かな。

作成者は「グリムロック」。少なくとも一線級の鍛冶屋じゃないよ。ちなみにロープも

市販品」

なんと、殆どサチが調べてくれたのだ。

この事に俺とアスナ先輩は、呆れ半分にため息をつく。

「さっきの話もサチが聞いてくれたんだよな？」

「男子は何してたのよ?…まあいいわ、みんなはグリムロックって人の線を漁って。私達はシステムのな線を漁るわ」

「システムのな線?…どういう事だ?」

「…とりあえず、今日は解散。俺達は明日、プレイヤーの中で、最もSAOに詳しくそうな人に話を聞いてくる」

### outside

「ツキノワ君、今回の件、君はどう考える?」

次の日、ツキノワとアスナは、50層の待ち合わせの店に着くまでの間、見解を纏めていた。

「…大きくわけて3つです。1つ目は正当なデュエル。2つ目は既存のシステムを使ったシステムの抜け道。3つ目は未知のスキル・アイテムの存在。でも3つ目は正直ないと思います」

「その心は?」

「フェアじゃないからです。このゲームは基本的にフェアネスを貫き通してます。ここ

に来てこれを覆すなんて無茶苦茶です。」

「なるほど…」

「…ところで本当にこっちなんですか？待ち合わせの店って」

「ええ。…どんだん奥に入ってってるけど…。」

「ちなみに指定したのは誰？」

「…ミトよ」

「…そんな気がしてたけど…：本当にあいつは…」

ミトが指定した店と言うだけで、2人の顔は優れない。

というのも、ここでもリアルでも彼女の選ぶ店は割とピンキリなのだ。

「変の所でチャレンジ精神豊富っていうか、なんて言うか…」

「…ちなみにお店の事話したら、キリトも推してた」

「ダメなやつじゃない!?彼もチャレンジ精神は大概でしょ!？」

思わず大声でツッコミを入れるアスナ。

2人揃ってため息をついてると

「ツキノワ!アスナ!大丈夫!？」

前からミトが走りよってくる。

「ミト。いきなりごめんね」

「…うん、気にしないで。流石に無視できないから圈内殺人なんて。それより…無事仲直りできたのね。良かった」

ミトは胸を撫で下ろす。

2人の事が、ずつと気が気じゃなかったのだ。

「う…それは…ごめん。心配かけた」

「もう大丈夫よミト。心配かけてごめんね」

「うん！さて、本題に入らないと。団長！お待たせしました！」

「うむ、どうやら2人の仲は無事元通りになったようだね」

そう言つて奥からやつてくるのは

「久しぶり、ヒースクリフ」

「ああ、久しいねツキノワ君」

血盟騎士団団長、ヒースクリフだった。

「…ふむ、圏内で殺人事件か。確かに不可解だ」

ここは50層の料理屋。

そこに、ツキノワ達とミトとヒースクリフはいた。

「そもそも圏内ではHPゲージを1ポイントも減らすことは、元々出来ないはずなんだ」  
「団長、どう感じますか？」

「…その前に、ツキノワ君、アスナ君。君達はどう考えているのかな？」

ヒースクリフは自分の意見からではなく、ツキノワ達の見解から聞く。

その姿はまるで学者のようだ。

「…先輩にも話したけど、大きく分けて3つ。1つ目は正当なデュエル。2つ目は既存のシステムを使ったシステムの抜け道。3つ目は未知のスキル・アイテムの存在。でも3つ目は正直ないと思います」

「その通りだ。3つ目の可能性については除外して良い」

ツキノワが3つの可能性を言った直後、彼は即座に3つ目の可能性を否定した。

その事にミトが質問する。

「団長、どうしてですか？」

「よく考えるといい。君たち自身がこのゲームを作るとしたら、そのようなスキル、武器を作るかね？」

「…無いですね」

「理由は？」

ヒースクリフの言葉にミトは渋々といった感じに、理由を話す。

「理由は1つ。認めるのは癪ですが、このゲームはあの日から基本、公正さ…フェアネスを貫いてきています。それを急に覆すのは考えられません。例外的に「ユニークスキ

ル」を除いては」

ミトは話しながらヒースクリフとツキノワを見た。

ツキノワは気まずそうに視線を逸らしたが、ヒースクリフの表情からは何も伺うことは出来なかった。

その言葉にアスナが続く。

「流石に今の段階で3つ目の可能性について討論するのは無理があるかと……なので今回は1つ目の正当なデュエルによるPKについてから検討しましょう」

「よかろう……しかし、この店は料理が出てくるのが遅過ぎないか？」

やはりヒースクリフも気になったようだ。料理を頼んでかなり時間が経っている。

「私はこのマスターがアインクラッドで1番やる気のないNPCだと確信してます。まあ、そこも含めて楽しませよう。はい、氷水」

「ありがとう」

「はい、アスナも」

「あ、ありがとう」

「ミト、水の飲みすぎで、腹いっぱいなるぞ？これで3杯目だし……」

露骨にため息をつくツキノワに、ミトはムスツとするように言った。

「これしかないし、しょうがないでしょ」

ツキノワは仕方ないと言った感じで口を潤して、自らが見たことを説明し始めた。

「圏内でプレイヤヤーが死んだんなら、それこそデュエルの結果が常識だ。でも…これは断言する。カインズが死んだ時、WINNER表示はどこにも出てなかった。そんなデュエルあるか？」

「そもそも、WINNER表示って、どこに出るものなの…?」

アスナの疑問にヒースクリフはすぐに答えた。

「決闘者同士の間位置、あるいは決着時2人の距離が、一定距離以上離れている場合は、双方の付近に2枚のウィンドウが表示される」

「なんでそれ知ってたんだよ。まさか何回もデュエルして調べたのか…?」

啞然としながらツキノワがヒースクリフに突っ込む。

「そもそも広場でウィンドウを見た人はいなかったし、アスナも教会の中でWINNER表示を見なかったのね?」

「ええ」

「じゃあ、デュエルの結果…とは言いづらいよな。ってことは…」

「…ねえ、ミト。店の選択を間違ってる?注文してから10分は経ってるよ?」

「…まあ、首がキリンになるまで気長に待ちましょう」

「それはそれで困るんだけど!」

真面目な話の合間に行われるコントに、少し笑うヒースクリフ。

「気を取り直して…残るは2つ目…システム上の抜け道、だな。まあ、そうだろうとは思ってたけど…」

「…私、引つかかるのよね」

「何が？」

「【貫通継続ダメージ】よ。あれ、公開処刑の演出としてっただけではないと思うの」

「でも、貫通継続ダメージが圏内で続かないのは、さっきも試したから分かったことですよね？」

サラツと言われた言葉にミトが思わずストップをかける。

「ちよつと待って。ツキノワ、試したって何？」

「こつち来る前にモブの剣を刺したまま、街に出入りしてみたんだよ」

「…何してるのアンタは!!」

実はここに来る前、少し検証してから来たのだが、その事でミトに説教されることになった。

「でも、あれを転移結晶や回廊結晶で試したらどうなるのかしら…?」

「無論、ダメージは止まるとも」

アスナの疑問に再び鋭く答えを返すヒースクリフ。



「徒歩や回廊などのテレポートであろうと、あるいは誰かに投げ入れられたとしても：つまり街の中に入った時点でコードは例外無く適用される」

「…じゃあ、上はどうなるんだ？例えばプレイヤーが落下ダメージで即死する高さからテレポートしたら？」

「純粋なツキノワの疑問に今回は少し考えるような仕草を見せたが、ものの数秒で答えた。」

「…厳密には【圏内】は街区の境界線から垂直に伸びる次層の底まで続く円柱状の空間を指す。故に即死に値する高さからのテレポートであっても、落下ダメージは発生しないことになる。」

「「へえ〜」」

「すべての疑問に答えてみせたヒースクリフに感嘆の声を漏らす3人。」

「なら、こういうのはどうだ？」

「「ん？」」

「またもやツキノワが何やら思いつく。」

「物凄い威力のクリティカルヒット食らった時って、HPバーってどうなる？」

「ごっそり減るわね」

「違うよ。俺が言ってるのは減り方。このSAOは他のゲームと違って、ダメージを受

けた瞬間とHPゲージが減るのにはちよつとしたタイムラグがあるわけだ」

2人の推理に耳を傾け、ヒースクリフも目を閉じ静かに聞いている。

「例えば、圏外でカインズのHPをあの槍の一撃で全部吹き飛ばとして。カインズはおそらくタンクだ。HPの総量を考えれば、HPが全て無くなるまで：約5秒。その間に……」

「手法としては不可能ではない。だが、無論君達を知っているだろう。貫通属性を持つ武器の性質を」

ツキノワの思いつきをヒースクリフが、真つ向から否定する。

「リーチと装甲貫通力に特化している武器ですね」

貫通属性を使うアスナが、ヒースクリフの言葉に答える。

「その通りだ、アスナ君。打撃武器や斬撃武器には単純な威力で劣る。重量級の大型ランスならともかく、ショートスピアなら尚更ではないかね？」

痛いところを突かれたな、とツキノワは渋い顔をする。

「そのショートスピアが高級品ではないのだとして、ポリウムゾーンの壁戦士を一撃で即死させようと思えば：そうだな、現時点レベル140はないと不可能だろうね」

「140!?!私達でさえレベル100になってまだまもないのに……!?!」

140という誰も到達しえないであろうレベルにアスナが震えながら呟く。

因みに攻略組のトッププレイヤー達は殆ど90、ツキノワ達に至っては少し前に100に到達したところだ。

「十中八九そんなプレイヤーはいないだろうね。…私もここまでレベルが高くなるとは思っていなかったのだよ」

ヒースクリフも同意見のようだ。

最後何かを呟いたが、彼らの耳には入らなかった。

「ならレベルじゃなくて、スキルって線はどうだ? ……2人目の《ユニークスキル》の使い手が現れたってのは?」

「そんなプレイヤーがいたなら、私が即座にKOBに勧誘しているだろうね…ツキノワ君、君も」

「入らないからな」

全ての推理を真つ向から全否定されたツキノワ。

そんなツキノワを勧誘するヒースクリフだが、それを真つ向から否定するツキノワ。『…お待ち』

すると店の奥からおぼんに丼を4つ乗せて運んできたこの店の店主が現れた。

いつも通りの接客態度を見せ、安心した様子のミト。

「あつ、キタキタ」

「15分もかかるってどういうことだよ…?」

「知らないわよ」

ツキノワの疑問にミトは遠い目をしながら答えた。

「…これは…」

「…ラーメンなの…?」

「正確にはラーメン、のような何かね」

4人は一斉にラーメンのような何か…：通称「アルゲードそば」を啜る。

勿論味はミトの台詞を肯定するかの如く、なんとも微妙な味だ。

常に表情が崩れないポーカーフェイスのヒースクリフも流石に顔をしかめた。

「さて、ヒースクリフ。何か閃いた？」

「…ふむ」

五、六分後。

そのラーメン擬きを完食したヒースクリフは顰めた顔の状態で、答えた。

「一つだけ言えることは…：これはラーメンでは無い」

「全面的に同意見だけど、違うそうじゃない」

大真面目に答えるヒースクリフに思わずツツコミを入れるツキノワ。

意外にもヒースクリフは、天然なのかもしれないと3人は思った。

「ではこのラーメンもどきの味の分だけ、答えることにしよう」

そして、彼は割り箸を丼に置き、答えた。

「今揃っている材料のみで何が起きたか、それを断定することは不可能だ。だが、これだけは言える。この事件に関して唯一確実と言えるのは、君らがその眼で見た事、その耳で聴いた事のみである」

「「ん？」」

難し過ぎて何を言っているか分からない。

意味不明な説明だった。

「つまり、ここで直接見聞きするものは、デジタルデータであり、そこに幻覚や幻聴が入ることは無いという事だ。だがしかし、その他のデジタルデータでない情報には、常に幻や嘘が入る可能性がある。この事件を追いかけるのならば、己の目や耳、つまり己の脳が直接受け取ったデータだけを信じることだ」

彼はそう言い残し、ご馳走様とだけ言って店を後にした。

「なぜこんな店があるのだ…」

そう言い残して。

「…どゆーとっ？」

「多分、自分たちがその場で見て、聞いた事だけを信じなさいって事じゃないかしら」

「他から入手した情報は虚偽が入り込んでいる可能性がある、ということね」

「分かりやすく言ってくれよ……」

テーブルに突っ伏しながらツキノワは帰ってしまったヒースクリフに愚痴を零した。

「あとこの店は二度と来ない」

「何だよ!?!」

「逆に来ると思うの!?!これなら私達は自分で作るわよ!」

ミトのオススメは絶対に来ない。

改めてツキノワとアスナは誓ったのだった。

「……ん?キリトからだ……へ?」

キリトからのメッセージを受け取ったツキノワは、その内容を見て、絶句した。

「……どうしたの?」

アスナが尋ねると、震える声でこう返した。

「……ヨルコさんが……死んだ……?」

## 28話

outside

「キリト！何がどうなった!?!」

ヒースクリフと別れたツキノワとミトとアスナは、キリト達の元へと集まった。

そこには顔を真っ青にしたサチの背中をさするキリトと、震えているプルプレートの中の宥める黒猫団の姿があった。

「ツキノワ…2人も…」

「…キリト。サチは私達が引き受けるわ。ツキノワに事情を説明して」

「サチ。大丈夫？私達がいるから」

「ミト…アスナ！」

そのままサチを優しく抱きしめながら宥めるアスナとミト。

「…キリト、説明して」

「ああ…」

そのまま距離を取り、キリトから事情を聞くツキノワ。

槍の作成者であるグリムロックの事をヨルコに聞いた所、何でもグリムロックと彼女

は「黄金林檎」というギルドに所属していたらしい。

ある時、偶然レアアイテムをゲットし、その処遇に揉めたらしく多数決を取った。

その結果、売却する事になり、リーダーの「グリセリダ」が競売屋に行った。

しかし行つたつきり帰つてこず、後になって死んだ事がわかつたらしい。

そのままギルドは空中分解したのだ。

「…で？あいつは？確か「シュミット」だよな。青龍連合のデイフエンダー隊リーダーの」

「ああ、彼もギルドのメンバーだったらしい」

売却に反対していたのが、ヨルコ、シュミット、そしてカインズだったのだ。

そのヨルコが、シュミットに会いたいと申し出たらしく、話し合いの場を設けた結果

「殺されたと…どうやって？」

「窓の外からダガーを投げたんだ。あの辺から」

キリトが窓の外を指さしたのは、少し離れた場所の屋根だった。

「少し遠くないか？」

「ああ、中々の上手さだぞ。そっちは？どうだった」

「ああ。俺達はヒースクリフと会つて…」

今度はツキノワがヒースクリフと話した事を説明した。



結局のところ、何も進展はないどころか、余計に事件が増えただけだった。

「進展なし……どころじゃないか」

「キリト……少しいいか？」

突然ツキノワが声を小さくして話しかけてきた。

「……どうした？」

「ヒースクリフは自分が見聞きした事だけが真実だと言った。その事なんだが、実はカインズが死ぬ直前、何か言ってたんだ。最初は今際の際の言葉だと思ったが……」

「なにか裏があると？」

ツキノワは頷く。

キリトはその言葉に思案した。

もしヒースクリフの言葉に則るなら、そういう事は大事になると。

「生命の碑に行ってみよう」

「そうだな。皆！今日は解散してくれ！アスナ先輩とミトはサチをお願い！黒猫団はシユミットを頼む！俺とキリトは一度生命の碑を見てくる！」

そう言つて2人は飛び出した。

sideキリト

俺達は生命の碑まで来ていた。

「カインズはkだよな？」

「ああ」

ツキノワと確認しながら、k a i n zを探した。

「…あつた」

俺はその文字を見つけ、死因と時間があつてる事を確認した。

「キリト、これを見ろ」

ツキノワは全く違うところで別の文字を探していた。

「ツキノワ？そこはcだろ？」

「ああ、念の為な」

そう言いながら指を刺したのは

「c a i n z?」

cから始まるカインズだった。

「そう、kから始まるって聞いてずっと違和感だったんだ。カインズならcからな気がしてな」

なるほど、ツキノワは意外に頭回るよな。

「今失礼な事考えたら」

「まつさか〜…」

勘もいいよな…

「まあいい。次はヨルコだな。表記は？」

「ローマ字だ」

そう言いながら、2人で探すと直ぐに見つけた。

「これは…」

「何で…？」

そのヨルコの文字には線は引かれてなかった。

「どういうことだよ…？ヨルコさんはあの時!？」

「死んでないって事なんだろうな…。理由は分からんが」

俺は訳が分からず、混乱していた。

ツキノワの冷静な言葉が、拍車をかけていた。

「ツキノワ？予想してたのか？」

「そんな訳あるか。ただ…本当に死んでるか自分の目で確認しに来ただけのつもりだ。

…俺もビツクリしてる」

ツキノワも驚いてるのか、ときどき言葉が詰まっていた。

「…この事はアスナ先輩達に共有しておこう」

「分かった。なら戻ろう」

ツキノワがメッセージを送りながら、俺達は来た道を引き返した。

side ツキノワ

「メールの件、どういう事!？」

合流して開口一番、先輩に問い詰められる。

「い、今から話すから!？」

「アスナ、落ち着いて」

ミトが制止させてくれたおかげでやっと落ち着ける。

「俺から説明するよ」

そう言ってグロッキーになった俺の代わりに、キリトが説明してくれる。

「ヨルコさんは生きている…」

「て事は、えつと…カインズさん? って人も生きてるかもって訳ね」

「そういう事。次はどうやってって事だけど…」

その時、キリトの腹が鳴った。

「腹減った…」

「結構盛大に鳴ったな。でも確かにいい時間だしな。俺も腹減った」

男2人は腹を抑えながら、空腹を訴えている。  
だつて食べ盛りだもん。

「あんた達2人揃つて…もう、しょうがないわね」

「じゃあ、ご飯にしよつか！はいツキノワ君！」

ミトは呆れながらストレージを漁り、先輩はウキウキでストレージからサンドイッチを出し、俺に渡してくれた。

「おお！あざっす！アスナ先輩！」

俺はめっちゃ嬉しくて、思わず大きな声が出る。

「ツキノワ君！もう…！」

そんな俺を恥ずかしそうにしながら、それ以上に嬉しそうに見てくる先輩。

「つ、ツキノワ…」

「やらねえからな！」

キリトめ、何を期待してるのか。

俺がアスナ先輩の手作りを譲るわけ…

「ね、ねえ…」

「ミトもか!?!お前は料理スキル取つとけつて言つたら!?!」

「だつて…」

このダメ姉貴…。

本当にクライントオトすきあんのか？

「フフ、はいミト」

そう言いながら、アスナ先輩がミトにサンドイッチを渡す。

どうやらミトの分はあつたらしい。

「アスナ〜！ありがとう！」

「アスナ!?俺のは!?」

「キリト君の分はないに決まってるでしょ!?あとミト！抱きつかないで！食べれない  
！」

「そんな…ん？」

見るからに落ち込むキリトが、突然なにかに気づく。

「…サチから？」

どうやら、サチからなにか来たらしい。

開いてるのを見ると、何やら出てきた。

包みを開けると、中身はおにぎりだった。

「お、おお!!」

「良かったじゃんキリト。ちゃんと礼言えよ？」

「ああ！嬉しい！直ぐに伝える！」

そう言いながら意気揚々とメツセ打つキリトを、温かい目で見る俺達3人。

「アスナ知ってたの？」

「まあね」

そんな話をしてるミトと先輩を尻目に、俺はかぶりつく。

「ん！美味しい！アスナ先輩美味しいよ！」

「ありがとう！落ち着いて食べてね！」

俺達はそれぞれの食べ物に舌鼓を打っている時、俺はふと耐久値の気になる食材を思い出し、オブジェクト化して耐久値を見ようとした。

その時、限界だったのか、そのアイテムは砕け散ってしまった。

「あ……」

「ツキノワ君？どうしたの？」

「……」

アスナ先輩の心配する声が聞こえるが、俺は思考に没頭する。

（今のエフェクト……そっくりだ……。ていうか、今までもそうだったよな。アイテムと人の砕け方はよく似ている。その事に忌避感を覚えてたはず。慣れすぎて忘れた……。いや、それよりもこれは……まさか!?)

「ツキノワ君?大丈夫?」

「ちよつとどうしちやつたのよ?そんなにシヨックだったの?」

「おーいツキノワ!ラグってるのか?」

その時、一気に色んな事が分かった。

全て繋がって、全てが理解出来た。

「あ、ああー!ー!ー!ー!」

「「うるさつ!?!」」

思わずデカい声が出てしまった。

どうやらすぐ側にまで来ていた3人は耳を、一斉に抑えながら距離をとった。

「分かった!そういう事だったんだ!!」

「うるさい!分かったって何が!」

ミトに怒られるが、今はそれどころでは無い。

「この事件のトリックだよ!俺達はまだ何も見えてなかったんだ!!」



## 29話

sideミト

「基本的にプレイヤーの圏内ではHPは減らない。でも、オブジェクトの耐久値は話が別だ。さっきのアイテムみたいにね」

ツキノワはそう言って謎解きを始めた。

「あの時、あの槍はカインズのアーマーを貫通していた。あの時削っていたのはHPではなく、カインズのアーマーの耐久値だったんだ」

「じゃあ、あの時飛び散ったのは…」

アスナの言葉にツキノワは頷きながら答える。

「はい、カインズのアーマーです。そしてアーマーが碎けるまさにその瞬間、結晶でテレポートしたんです」

「そうか！」

突然キリトが、納得いったと言わんばかりに、手を叩く。

「ヨルコさんの時も同じだ！あの時彼女は誰にも背中を見せなかった。ケープの耐久値を確認して、碎ける直前で、いかにも今刺されたみたいな演技をしたんだ！」

「じゃあ、キリト達が見た黒いロープの男は…」

「十中八九、グリムロックじゃない。カインズじゃないかな。2人はこの方法なら死を偽装出来ると踏んだんだろう。圈内殺人という最高の演出を加えながら。そしてその目的は…」

「指輪事件の犯人を見つけ出すこと、ね」

私の言葉に、ツキノワは頷く。

タネが割れば、なんて事ないわかりやすいトリックだ。

でもそれを実際にやるのは、かなりシビアな事だと思う。

「彼らは自分の殺人事件を偽装し、幻の復讐者を作りあげた」

「おそらく、シユミットの事は、ある程度疑ってたんだろうな…」

「ああ、狙いがピンポイントだったしそうだろうな。キリト、ヨルコさんとフレンドにはなっていないのか？」

「なってるぞ。調べてみる」

メニューを立ち上げ、少し調べているとすぐにわかった。

「いた、19層の主街区の外れの方だな」

「そうか…まあ、ここまでだな。後は彼らに任せよう」

「これでこの事件は終わり。」

分かってしまえば、呆気ないものだった。

30分前までは、そう思っていた。

「間に合って…!!」

sideツキノワ

「2人はレアアイテムがドロップしたらどうする?」

近くのレストランで一休みしていると、突然先輩がそんな事を聞いてきた。

「ん、そうだな…。俺はそういうのが嫌で、ソロやつてるのがあるしな」

「俺も同じくです。もしギルドに入っていたら…俺は直ぐに言っつて、俺のだってアピールします。言っつたもん勝ちです」

俺達はそれぞれの理由を言う。

「あんたらしいわねツキノワ…。うちはドロップした人のもの、そういう風に決めてるのよ」

ミトが血盟騎士団のルールを教えてくれる。

「このゲームでは何が出たかとかは、自主申告しないと分からないでしょ?だからその手のトラブルを避けるには、そうするしかないのよ。…でもだからこそ、この世界の結婚に重みがあると思うの」

アスナ先輩のしみじみとした顔に俺は不思議に思う。

「どういう事ですか？」

「だってストレージ共有化ってある意味、身も蓋もないじゃない。それまで隠せた事が、隠せなくなる。ストレージ共有化って、凄くプラグマチックだけど、同時に凄くロマンチックなシステムだと思うの」

アスナ先輩のそのウツトリとした顔と声に、俺は真剣に結婚について考えた。

「プラグマチック？」

「実際的ってことよ。それより…2人はいつ結婚するの？」

ミトが爆弾を落としてきた。

「な、何言ってるんだよ（るのよ）!!？」

2人揃って顔真っ赤にしてるのがわかる。

「俺達に結婚なんて!？」

「何言ってるのよ!男らしくしやんとしなさい!」

「ミトこそ何言ってるのよ!?!ツキノワ君はこの前だって凄く男らしくったわよ!」

…このおバカ。

これはヤバイやつだ。

「この前?この前つてもしかして初デートの時?貴方達、あの時何をしたのよ?」

「…あ、あの…えつと…そのお〜…」

「…貴方達まさか!？」

思わず2人揃ってミトから視線を逸らす。

その逸した先には、キリトが難しい顔で考え事をしていた。

「キリト? どうした?」

何やらミトが騒いでいるが、それは無視してキリトに話しかける。

「…もし片方が死んだ時、死んだ相手のアイテムはどうなるんだ?」

急になに物騒なことを言ってるんだ?

えつと、ストレージは共有化してる訳だし…

「…もう1人に全部行く?」

そう答えた瞬間、場が一気に静かになった。

「それって…指輪は盗まれてなかったって事?」

「いや、この場合…盗まれたって言った方が正解です。まさか、グリセルダを殺したのは

…グリムロック!？」

「もしそれをレッドギルドに依頼していたら…シユミットが危ないわ!!」

「そんな事引き受ける奴らは【笑う棺桶】ラフィン・コフィンしかない!」

【笑う棺桶】とは、犯罪者ギルドの代表格だ。

リーダーのP.O.Hを始め、奴らに殺されたプレイヤーの数は多い。

「キリト！19層には馬がいたよな！」

「いたけど…まさか！乗れるのか!？」

「なりふり構つてる暇ない！」

「無茶苦茶！」

「速く行くぞ!!」

「アスナ！貴女は1度ギルドに戻つて数を揃えて！いざとなつたら突っ込んできて！」

「わかつた！パーティ申請して！何か異常があつたら突撃するわ！」

アスナ先輩の提案を受け入れた俺達は、直ぐに店を飛び出して、19層に向かつた。

そのまま馬を借りて、森を駆け抜ける。

「ツキノワ！このまま突っ込むわ！」

「わかつた！接敵まで3，2，1！今！」

俺達は一気に突っ込み、3人のプレイヤーを蹴散らした。

そこには黒いローブを着た3人組と、ヨルコ、カインズ、シュミットがいた。

「あんた達…どうして…？」

「間に行つたな…何とか」

「久しぶりだなP.O.H。相変わらず暑苦しそうな雨合羽だな」

「てめえの黒づくめには言われたくねえぜ、【黒の剣士】。それに【剣豪】に【狩人】とは……随分大盤振る舞いじゃねえか」

キリトとPOHが軽口を叩きながら、睨み合う。

「【剣豪】……才前ハ……俺ガ……殺ス……!」

「俺を……指名か? 【赤目】の【ザザ】。いいぜ、こいよ」

俺とザザはお互いの得物を抜きながら、構える。

「俺はお前だな……どうしようかな!? どうされたいんだ【狩人】!!」

「一々煩いわよ【ジョニーブラック】。その煩い口、閉じさせてやるわ」

ミトとジョニーブラックが、挑発しながら、隙を伺っている。

誰かが身じろいだ時、俺達は一気に踏み込んだ。

Outside

「シッ!」

「フッ!」

1番最初に接敵したのは、ツキノワとザザだった。

「ハア!」

ツキノワは、1度たりもとザザの攻撃を、喰らう訳にはいかない。

その剣先には、きつと毒がある。

故に、動き続け、狙わせないように、しなくてはならない。

「シッ！」

一方のザザは、1度たりとも受け止められない。

その破壊力の前では、武器ごと両断されかねない。

故にザザは、止まらずに動き続けて、躲し続けなくては行けない。

2人の戦いは、次第に攻防の切り替えが、速くなつていく。

ザザが突きを放つも、それは横に弾かれる。

その反動を利用し、ツキノワは横一文字に斬ろうとするも、回転しながら躲される。

ザザは回転した勢いを利用し、顔面を狙うもそれは剣の腹で、逸らされる。

お返しと言わんばかりに、ツキノワも突きを放つも、躲され、腹を蹴られ体勢を崩す。

ザザがその隙を突こうとした瞬間、ツキノワの斬撃が彼を吹き飛ばす。

お互いに距離を取り、体勢を整える。

彼らには一つだけ、ある共通点があった。

それは、互いに技を磨き続けてきたという事だ。

その2匹の剣鬼は、奇しくも同じ感情を抱いていた。

(タノシイ……!!!)



お互いに笑みを浮かべながら、再び衝突する。

その笑みはまさに、修羅の笑みだった。

sideミト

私は鎌をしつかりと構え、油断なく周囲を警戒していた。

ふと、風を斬る音が聞こえ、そちらに鎌を振ると、金属同士がぶつかる音が聞こえた。

「勘がいいな！狩人！」

「そういうあんたは分かりやすいわね」

ジョニーブラックは毒使い。

こいつの毒で死ぬ事はないだろうけど、何されるかわかったもんじやない。

だから、攻撃を受ける訳にはいかない。

「というか、一体何本目よこれ？持ちすぎじゃないかしら」

嘘だ、本当は知っている、15本目だ。

私を知りたいのはそこじゃない。

「さあな!!何本だろうな〜!!」

…見つけた。

3, 2, 1…今!

「そこね！」

私は弾いたナイフの一本を拾い上げ、投げつける。

「なにい!？」

慌てて茂みから、ジョニーブラックがでてくる。

その隙、この好機、逃さない!

一気に接近戦に持ち込む。

「てめえ!?!さつきまでの無駄話は!？」

「あんたの位置を炙り出すためよ。バカみたいに声がデカいから、思ったより簡単だったわ」

さらに挑発する。

この手の輩には、こういうのはよく効く。

「このクソアマアアアアア!!」

ほら、すぐにキレル。

本当にバカで助かるわ。

「隙あり…フツッ!ハア!!」

私は一気に攻めてきたジョニーブラックの腕を、切り落としてから、忍ばしていた一つのナイフで、麻痺状態にさせる。

そのまま紐で縛りあげて、拘束する。

「ジョニーブラック、拘束完了」

sideキリト

「ハッ！」

「シャア！」

俺の片手剣と、P o Hの包丁型のダガーがぶつかると。

P o Hが使う武器「メイト、チョッパー友切包丁」は、俺の50層フロアボスL Aボーナスの「エリュシデータ」と同じ、魔剣クラスの武器だ。

そんな武器を十全に扱うこいつの技量は、本物だ。

「考え事か？」

「!?しま!?ガア！」

一瞬の隙を突かれ、蹴り飛ばされる。

「まさか、剣だけで戦うのでも思ってたのかよ!？」

その隙に襲いかかってくるP o H。

しかし、すぐに身を翻した。

その直後、後ろから斬撃が飛んでくる。

「…何ボサってしてる。まだやれるだろ、兄弟」

気づくと、すぐ後ろにツキノワがいた。

その言葉と背中に感じる熱が、俺に力を与えてくれる。

俺はゆっくりと立ち上がり、剣を構え直す。

その剣の輝きは増し、黒により深みが出た気がした。

「…やつとヤル気になったか？黒の剣士」

「ああ…行くぞ」

俺は一気に近づき、正面から斬り掛かる。

それを防がれた瞬間、俺は剣を手放した。

「…あ？」

「おおおお!!」

惚けてるP○Hの顎に、全力のアッパーカットを打ち込む。

「はアアア!!」

すぐさま逆の手で剣を掴み、斬る。

イメージはツキノワの動きだ。

腹を斬り、下から斬りあげ、一気に切り落とす。

その連撃を受けて、吹き飛ぶP○H。

「ハア…ハア…」

少しやっただけでこの集中力だ。

これをボス戦でやってのけるツキノワは、やっぱりイカれてる。改めて、兄弟のぶっ飛び加減を理解した。

outside

「ハ、ハハハハハ!! やっぱり最高だぜ!! 黒の剣士!! もつと殺ろうぜ!! ……つて言いてえが、時間だな。あばよ」

突撃、POHが何かを懐から取り出して、投げつけた。

1番速くキリトがその正体に気づく。

「煙玉だ! みんな気をつけろ!!」

その瞬間、瞬く間に煙が吹き出して、一体を包む。

「次ハ…確実ニ…殺ス…!!」

「逃がすか!」

すぐに追撃しようとしたその時

「きや!!」

「ミト!?!」

ミトの悲鳴が聞こえ、すぐにそっちに向かう。

そこには麻痺状態になって蹲ってるミトがいた。

「ミト!?! 大丈夫か!?!」

「ええ…麻痺ってるだけだから…それよりも…」  
煙から晴れたそこには、3人の姿はなかった。  
「ジョニーブラックに…逃げられた…!!」

## 30話

sideツキノワ

「とりあえず、アスナ先輩に連絡しよう」

そう言って俺は、先輩にメッセージを送った。

ついでに、道中である事をお願いしておいた。

「さてと…まず、また会えて嬉しいよ、ヨルコさん」

「そっちは初めましてだな、カインズ」

俺とキリトが2人にそう言うと、ヨルコは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません、全てが終わったら皆さんには改めて謝罪に向かうつもりでした。信じてもらえないでしょうけど……」

キリトは苦笑いを浮かべる。

俺は、シユミットに声を掛ける。

「麻痺はもう大丈夫そうか？」

「ああ、なんとかな……キリト、それにツキノワ。助けてくれたことは礼を言う。だが、どうして奴らがここに来ると分かったんだ？」

分かって言うか…

「分かったって言うより、あり得ると推測したのよ。ヨルコさん、カインズさん。2人はグリムロックに武器を作ってもらった時、今回の計画の事を全部話したんじゃない?」

ミトが尋ねると、二人は頷いた。

「最初、グリムロックさんは気が進まない様でした」

「でも、僕らが必死に頼み込んだら、ようやくあの武器を作ってくれたんです。届いたのは、僕じゃない方のカインズさんが亡くなった日の、3日前です」

ミトが言いにくそうに、彼らに告げる。

「残念だけど、貴方達の計画に反対したのはグリセルダさんの為じゃないわ。圈内PKなんて派手な事件を演出し、大勢の注目を集めたら、いずれ誰かが気づいてしまうと思っただのよ。結婚によるストレージ共通化が、離婚ではなく死別で解消された時…その中のアイテムがどうなるか」

「…え?」

「…どういう事ですか?」

「詳しい説明は、役者が揃ってからにしよう」

俺は2人を待たせる。

その時、ちょうどいいタイミングでアスナ先輩が、ここに着いた。



「おまたせ。皆無事で何よりだわ。それと…見つけたわよ彼」

「アスナ先輩、お疲れ様です。そして…やっぱ来てたか、グリムロック」

そう、アスナ先輩にお願いしていたのは、おそらく来ているであろう、グリムロックの確保だった。

outside

「やあ、久しぶりだね、皆」

アスナに剣を突きつけられながらも、薄ら笑いを浮かべるグリムロック。

「キリトさん…何がどうなって…」

困惑するヨルコ達にキリトは、自分達の仮説を説明する。

その仮説に、一切否定をしないグリムロック。

「何で…何でなのグリムロック!?グリセルダさんを…奥さんを殺してまで指輪を奪ってお金にする必要があったの!!」

「…ふん」

この時、初めてグリムロックの顔色が変わる。

「金…金の為だつて?…そんなものの為じゃない。私はね、どうしても彼女を殺さなくてはならなかった。彼女がまだ私の妻でいる間に!」

「…どういう事?」

皆が困惑する中、ミトが代表して聞く。

「彼女は現実世界でも、私の妻だった」

「何!？」

思わずツキノワは声を出してしまうが、この場にいる皆が驚いていた。

それは同じギルドだったヨルコ達も同様だった。

「彼女は理想的な妻だった。可愛らしく、従順でね、ただの1度も夫婦喧嘩すらした事無かった。だが、このデスゲームに囚われて、彼女は変わってしまった。強要されたデスゲームに怯えていたのは私だけだった。現実世界にいた時より、遥かに活き活きしていて、充実していた様子だった。…私は認めざると得なかった。私の愛したゆうこは消えてしまったのだと!」

その歪つな懺悔は続いた。

「なら…ならいつそ合法的殺人が可能なこの世界で、ゆうこを永遠の思い出の中に封じてしまいたいと願った私を、一体誰が誰が責められるのだろうか!？」

その顔は狂気に染っていた。

「お前は…そんな理由で愛した人を殺したのか…」

「君達にもいずれ分かるよ探偵諸君。愛情を手に入れ…それを失おうとする時にね」

キリトが呆然と喋った眩き、尚狂った笑顔で言うグリムロック。

「「いいや（いいえ）、間違ってるのはあんただ（貴方よ）グリムロック（さん）」  
ツキノワとアスナとミトは同時に否定した。

「貴方が抱いていたのは、愛情じゃない。ただの所有欲だわ！」

「何故自分の手で殺らなかつた？あんたが本当に愛を抱いていたなら、せめて自分の手で終わらせるべきだった。俺ならそう考えるところ」

「貴方の愛した奥さんが消えたんじゃない。貴方の愛、そのものが消えたのよ」

3人がグリムロックの愛を否定する。

その言葉を受け、グリムロックは膝から崩れ落ちた。

「皆さん。この男の処遇は私達に任せていいですか？」

「わかつた」

代表してキリトが答える。

「…さあ皆、帰りましょう」

ミトが声をかけ、主街区に向かう。

道中ボソツとアスナが、ツキノワに話しかける。

「ツキノワ君」

「うん？」

「もし私の隠れた一面を知った時、君はどう思う？」

「んー…まあ、人様に迷惑かけなければ、いいと思いますよ。俺に迷惑かける分には、気にしなくていいんで」

あっけらかんと告げるツキノワ。

その顔は、本当に気にしてないような顔だった。

「どうして?」

「だって、それを含めてアスナ先輩ですよね? だったら俺は好きになりますよ、絶対に」  
「もし…それが人様に迷惑かけるものなら?」

「その時は…ちゃんと話します。話してそれでもダメなら、その矛先を俺だけに向けて貰います。だって、他の人に目移りされるのは嫌ですし、そういうのでも、俺だけであつて欲しいんで」

そのツキノワの少し怖い思考に、思わず少し笑うアスナ。

「もしかして…少しヤンデレ?」

「俺病んでるの!?!」

「フフ…アハハ!!」

その大袈裟な反応について堪えきれず、大笑いするアスナ。

そのアスナを笑い声に、何事かと振り返るキリトとミト。

「ちよ!?!笑わなくてもいいじゃないっすか!」

「アスナ？どうしたの？ツキノワが何かした？」

「うん、ツキノワ君がね」「アスナ先輩！」ダメだつて〜！」

そう騒ぎながら、彼らは暗い森を抜けていく。

その後ろ姿を優しい笑みで女性が見守ってるように見えたのは…きつと気のせいだろう。

## 閑話休題⑤

sideツキノワ

圈内事件から約2ヶ月が経った。

『ありがとうございました！』

NPCからある物を俺は受け取り、店を出る。

受け取ったそれを見て、

「…覚悟を決めろ、男だろ」

俺はホームへと帰っていく。

明日はアスナ先輩との久しぶりのデートだ。

今回は、アスナ先輩がエスコートすると言って聞かなかつた。

一応色々調べたし、その為の用意もした。

後は…俺の度胸次第だ。

今回のデートスポットは、61層の「セルムブルグ」だ。

この街は全体的にとても綺麗で、住んでみたい街として有名だ。

まあ、その分かなりお高いのだが…。

そんな事を考えながら、明日の用意をして俺は就寝する。

「クツソ……寝過ごした!!」

緊張のあまり、少ししか寝れず、気づいたら家を出るギリギリの時間だった。

「アスナ先輩! お待たせしました!」

俺は待ち合わせ場所に5分前にギリギリ着いた。

あつぶね……

「ツキノワ君! 大丈夫!? すごい汗だよ!」

「全力疾走……して……きました……から……ハア……ハア……」

「もう……まだ時間間に合ってるのに……!」

そう言いながら、俺の汗を拭ってくれるアスナ先輩。

顔近い……! 恥ずいって……! // //

「フフ。ツキノワ君顔真っ赤! 珍しいね!」

「だ、誰のせいだ?! // //」

「さあ? 誰かしら?」

白々しくからかってくるアスナ先輩に、更に恥ずかしくなったため、急かした。

「は、早く行きましょう! ほら先輩!」

そう言って俺は手を差し出す。

一応、手汗はかいてないのは確認済みだ。

「そうだね！今日は私が案内するよ！それじゃあ、レッツゴー!!」

そう言つて俺の手を引つ張るアスナ先輩。

もしかして…かなりテンション上がってる？

「本当に綺麗な街ですね」

「そうだね〜！ここに住みたくなるのも分かるよ」

朝から遊び倒して、既に夕方。

昼には手作り弁当を食べて、凄く美味かった。

俺達はドリンク片手にブラブラしていた。

「アスナ先輩、行きたい所あるんですけど、いいですか？」

「うん？いいよ。どこ？」

「こっちです。少しフィールド歩きますよ」

俺はある場所に、先輩を連れていくことにした。

それが俺の調べたこと。

少し街から離れた丘の上。

そこは…



「綺麗…」

夕焼けと海を一望できる絶景スポットだ。

その幻想的な光景に先輩はウツトリしながら見てる。

「…先輩」

俺の呼び掛けに振り向く先輩。

「圈内事件の時、先輩言いましたよね。SAOの結婚って、ロマンチックでプラグマチックだって」

「…うん」

「俺は…先輩の事が好きです。愛してます。先輩にとっての1番になりたい。ずっと…リアルにいた時から、そう思っていました」

「…うん」

「そして…ここでも、リアルでも、ずっと一緒に居たい。そう思ってます。だから…結城明日奈さん!!俺と結婚して下さい!!」

そう言つてストレージから、ある物を取り出して渡した。

それは前日に受け取った、婚約指輪だ。

ハート型のピンクゴールドが埋め込まれてる指輪は、かなり前からずっと考え続けて、選んだものだ。

緊張で手が震える。

心臓が張り裂けそう。

まず間違えなく、過去一緊張してる。

「…優月君」

いきなり本名で呼ばれ顔を上げると、そこには涙を流しながら、左手を差し出すアスナ先輩。

「私でよければ、不束者ですがよろしくお願いします」

「…アスナ先輩じゃなきや嫌ですよ」

そう答えて俺は、指輪を左薬指につけてあげる。

「…綺麗。一生大事にするね」

夕焼けに照らされながら、それを掲げて見る姿は、凄く綺麗で神々しさすら感じた。

我慢できず俺は

「明日奈先輩」

先輩にキスした。

先輩はビックリしてたけど、そのまま俺を受け入れてくれた。

何秒、何分しただろう、俺達はそつと離れた。

「…先輩。一緒に暮らしませんか？」

「…喜んで」

そうして俺達は街まで降りて、内見をしてから、住む部屋を決めた。

こんな時間でも、内見できるのはゲーム様々だな。

とりあせず、リフォームは明日以降にし、俺達は熱い夜を過ごしたのだった。

sideアスナ

私は自分の左手を眺める。

そこには、数日前にツキノワ君がくれた、指輪がしてある。

それをじっと見ていると、

「アスナ…ニヤニヤしすぎ。もうすぐ定例会よ」

「に、ニヤニヤしてない!!」

ミトから突っ込まれる。

ミトには後日報告したが、やっとかと呆れられただけだった。

「あの子もやっと覚悟決めたみたいだし…ま、未永く爆発しなさい」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

そんな雑談をしていると、団長が入ってきて、場が引き締まる。

「それでは、定例会を始めよう。まずは…アスナ君、君から報告があるようだね」

「はい。…この度、私アスナは、かねてからお付き合いしているツキノワ君と、結婚しました。それと同時に同棲も始めてます。事後報告ではありますが、よろしくお願ひします」

淡々とただ事実のみを報告する。

一部を除き、皆祝福してくれた。

「うむ、この難しい状況の中、このようなめでたい話は純粹に嬉しく思うよ。アスナ君、結婚おめでとう。後で御祝儀があるから、部屋に来てくれ」

団長から…御祝儀!?

「あ、ありがとうございます!」

「うむ…さて、次の話だが、今日より、幹部には護衛をつけることになった。その人選を発表する」

そう、前回の定例会で幹部には護衛を付けることになった。必要ないと言ったのだが、多数決で押し切られてしまった。

「ミト君には【セン】君、君に頼もう」

「はい!よろしくお願ひしますミト副団長!」

「ええ、よろしく、セン」

センちゃんは数少ない同年代の女性プレイヤーで、きつとミトへの配慮だろう。

「さて：最後だかアスナ君。君にはある人物に依頼した。入って来てくれたまえ」  
「依頼？」

一体誰だろう？

奥のドアから出てきた人物に私は、ビツクリした後、嬉しくて笑みがこぼれてしまう。  
その人は真紅の着物に黒い袴、白い羽織を纏った紫の髪に赤い目をした少年だった。

「それでは、アスナ君の護衛頼むよ。ツキノワ君」

「分かってる。他の奴には任せない」

そう、私の護衛はツキノワ君だったのだ。

outside

「ちよつと待つて下さい！団長！」

黒い髪をした細い男が、ヒースクリフに声をかける。

「何かな【クラデイル】君」

「私はこの人事は反対です！そもそもそいつはうちのギルドの者ではないでしょう！そんな奴にアスナ様を任せるなんて、出来ません！」

クラデイルはヒースクリフの決定に不服なのか、怒ったように反対意見を述べる。

「先程も述べた通りだが、アスナ君は彼と結婚している。そんな彼女に他の者をつけるなど、流石にどうかと思うがね」

「……!?!?そもそも、アスナ様!?!?このような何処の馬の骨ともしれない輩と付き合い、ましてや結婚など、何を考えておられるのですか!?!?」

「……は?」

今度はアスナに矛先を向けるクラディールだが、その瞬間、アスナとミトがブチ切れた。

「何処の馬の骨つて、私の実の弟よ。それを何よあんた。ここで初めて知り合った程度の男に、この子のことをとやかく言われる筋合いはないわ。口には気をつけなさい」

「彼と私は付き合ったのは、ここちに来てからです、知り合ったのはリアルからです。何処の馬の骨は、私はよく知っています。貴方の事よりも、何倍も私は彼の事を知ってるわ」

「うっ……グツ……!?!?貴様ア!?!?貴様のような雑魚にアスナ様の護衛は務まらん!!さっさと辞退しろオ!!」

2人にキレられ、遂には、ツキノワ自身に噛み付く。

その様子にまた怒ろうとするミト達を、ツキノワは軽く止める。

「まあまあ、2人とも。俺は別に気にしてないから」

「ツキノワ君!?!?何言ってるの!?!?」

「だってキャンキャン吠えるしかない雑魚なんて、気にかけても仕方ないでしょ?」

その発言はクラデイルに、ニトロを放り込むだけだった。

さつきまで怒っていたアスナとミトですら、啞然とせざるを得ない事になっている。誰もが凍りつく中

「貴様…本気でいつてるのか…?」

1周回つて冷静になったクラデイルが、呟く。

その言葉にツキノワ首を傾げながら言い放った。

「は?逆にお前程度で、俺に勝てると思ってるの?」

その一言が、クラデイルの怒りを頂点にさせた。

「き、貴様アアアア!!!上等だあ!!今すぐ下の訓練場に来い!!格の違いを教えてやる!!!」

「…ふくん。いいよ、格の違いを教えてあげる」

こうしてツキノワVSクラデイルの決闘が決まった。

side ツキノワ

俺はいつも通り、リラックスした状態で始まるのを待っている。

「ツキノワ君…ごめんね。こんな事になって」

アスナ先輩が泣きそうな顔をしながら、俺に謝ってくる。

「別に気にしないで下さい。正直こうなる気はしてたんで」

「それはともかく、あんたから挑発してどうするのよ?」

今度はミトから呆れたように頭を軽く小突かれる。

「ミトだつて怒つてたじゃんかよ……あ、準備出来たみたい。じゃあ、行ってくるわ」  
「行つてらっしゃい」

背中に声援を受けて、俺はフィールドの中央でクラディールと対峙する。  
ルールは勝った方の主張を通す、というもの。

クラディールから決闘申請が来て、俺は初撃決着を選ぶ。  
俺達の間にかウントダウンが始まる。

「ご覧下さいアスナ様！私以外に護衛が務まる者は居ないことを証明致しますぞ！」  
ああ、自分がやりたかつたんだ……呆れた、分を弁えろよ、お前。

俺はそんな事を思いながら、構えもせずに、無駄に豪華な両手剣を見ていた。  
狙いなら……あそこか？

それとあの構えは……あれだな。

そしてカウントがゼロになったと同時に、突進系ソードスキルで攻撃してくるクラディール。

俺はその攻撃を最小限の動きで躲して

「シッ!!」

両手剣を居合切りで両断した。



【武器破壊（アーム・ディストラクション）と呼ばれる、高等テクニックだが、俺は力づくでそれを実現させただけ。

「馬鹿な…私の剣が…!?!」

ポリゴン状に砕け散る両手剣を呆然と見つめるクラディール。

「…で？何を教えてくれるんだっけ？もう一回言ってくれねえ？」

しつかり煽る事も忘れない俺。

ダガー持ち替えて、襲いかかってくるクラディールを投げ飛ばしてから

「フツ!!」

一気に刺突を連発する。

【閃光】の2つ名を持つアスナ先輩ほどでは無いが、俺もそれなりに剣速には自信がある。

あつという間に体に風穴を空けさせ、吹き飛ばす。

更に追撃しようとした時

「ヒイ!!降参だ!!降参する!!」

クラディールが降参を宣言する。

「…他に文句ある奴は？」

誰も何も言わない。

俺はそれを確認してから、中央ではつきりと宣言する。  
「改めて、副団長アスナの護衛を依頼されたツキノワだ。よろしく」

## 閑話休題⑥

side 優月

それはまだ、リアルにいた頃。

明日奈先輩と知り合う前の話だ。

俺はいつも通り、部活を終えて、家に帰ってきた。

家は高級タワーマンションの最上階。

セキュリティもしっかりしてて、オートロックだ。

だからだろう、エントランス前にスマホ片手にオロオロした、綺麗で可愛い人が困り果てていたのは。

この時、自分の心臓が高鳴った気がした。

俺は何故か緊張しながら、彼女に声をかけた。

「…あの、どいてもらっていいですか？」

「あ、す、すみません！」

…緊張しすぎて、感じ悪かったかな。

少し後悔しながら、鍵でオートロックを開けた。

「あ、あの！少しいいですか？」

声をかけられたのはその時だった。

「…何ですか？」

「あ、あの…兎沢深澄って女の子知ってますか？ここに住んでる私ぐらいの女の子なんです…」

「…深澄？深澄の知り合いなの？」

聞き馴染みのある名前に、思わず聞き返した。

いや…マジか？あのアイツに？友達？

「は、はい！今日お呼ばれたんですが、部屋番号聞き忘れてしまいました…スマホも出ないですし…」

「ハア…。あのバカ。聞いてないぞ、そんな話」

あのバカはきつと寝てる。

ゲームで徹夜してたから、ほぼ間違えなく寝てる。

「着いてきてください。案内します」

俺は彼女を招き入れた。

「へ？そ、そんな!?!いいんですか!?!」

「いいんです。…実の姉なんです」

「…姉？」

何も言っていないのか!? アイツは!?

ハア…あのダメ姉貴。

どうしてくれるよう。

「初めまして、俺は兎沢優月。深澄の弟です」

「…お、弟!? 深澄に弟いたんですか!？」

「やっぱり言っただけでなかつたんですね。俺にはタメ口で大丈夫です。年下ですし。えっと…?」

「ゆ、結城明日奈です! よろしくね優月君!」

「結城…明日奈…先輩。よろしくお願いします、結城先輩」

綺麗な名前だな。

この人のぴったりの名前だと思った。

「フフ、名前がいいよ? 私も勝手に呼んじやってるし、気にしないで。こつちこそ、いきなり名前で良かったかな?」

「大丈夫です。苗字だとどっちか分からなくなるので」

そんな差し障りない会話をしながら、俺達は部屋まで着いた。

「どうぞ、いらっしやいませ。親は仕事なんで好きにして下さい」

「お、お邪魔します」

玄関で一礼し、靴を脱いで整える。

そんな当たり前前の姿でも、すごく綺麗に見える。

その所作から品の良さも伺える。

きつといいところのお嬢様なのだろうな。

そう思いながら、スリッパを用意し、リビングまで連れてくる。

ソファーに腰掛けさせて、お茶を出す。

「すみません、ちよつと深澄起こしてくるので。…後、かなり煩くなります」

「う、うん…?」

そのまま俺は彼女を置いて、深澄の部屋にノック無しで乗り込んだ。

案の定、ダラしない姿で爆睡こいてる深澄に俺は、大きく息を吸って

「起きろ!!! バカ姉貴!!!」

全力で怒鳴りつけた。

その声でリビングから驚く声が聞こえるが、それは無視。

目の前のビツクリして、ひっくり返っている人物に、非難の目を向ける。

「…おはよう優月。後、勝手に部屋に入らないで」

「やかましい!!! 友達待たせといて、何言ってる!!!」

「…あ、あああああ!!明日奈来るんだった!!今何時!?!」

「1時前!!とつくに来てたし、もうリビングにいる!!ちやつちやつと用意せい!」

「嘘!?!本当に!?!明日奈ごめくん!!」

リビングから大丈夫だよ、と声が聞こえる。

俺は1度部屋を出て、自分の部屋に行き、着替えを用意して、洗面所に放り込む。

「はあ…うちの姉が本当にすみません」

「いやいや!?大丈夫だよ!?気にしないで!」

「あの人、休みの前の日の夜とか、休みの日つてずっとゲームしてるから…よく徹夜するんですよ」

学校の方はよく分からないが、多分家とは違う感じなのだろう。

「あの…すみません。実は部活で汗でベタベタで…申し訳ないんですけど、シャワー浴びてきていいですか?」

ずっとそれが気になって仕方ない。

臭いとかも気になるし、あまり近くには行かないようにしてるけど。

「うん!大丈夫だよ。わざわざごめんね」

良かった、許可が出た。

「すみません、それでは」

「行つてらつしやい！」

そのまま俺は、風呂場に直行してシャワーを浴びた。

汗が流れていくのを感じながら、体や頭を入念に洗う。

お客さんが来てる以上、身なりはしっかりしないと。

風呂から出ると、リビングで明日奈先輩と、深澄が仲良く談笑していた。

何故か、深澄は俺のスウェットを着ていたが。

「…深澄。なぜに俺のスウェット着てる？」

「楽なんだもん。それにお古なんだからいいでしょ？」

本当に家だとズボラなんだから、この人は。

俺はため息をつきながら、キッチンに立ち、材料を確認する。

「2人とも？お腹は？」

「減ってる！明日奈は？」

「確かに減つたかな。優月君、料理出来るの？」

「家は共働きですから。深澄以外は作れます」

「余計な事は言うな！」

深澄から怒られるが、それはスルー。

「明日奈先輩、嫌いな物は？」



「大丈夫だよ〜！」

「それじゃあ、少し待っていてください。チャチャツと作ります」  
これなら…：これができるな。

side 明日奈

初めて見た時は、綺麗な人だっと思った。

男の人にそんなに評価は変かもしれないけど、きつと佇まいが大人っぽくて、凛としてたんだと思う。

身長は170〜180あるかないか位かな。

体格もしっかりしてる。

世間一般的に見ても、個人的に見ても、かなりイケメンだ。

というか、深澄に似てる？

思い切つてここに来た理由を話してみると、なんと弟だと言った。

深澄に弟がいたんだ、というか、兄じゃないんだ、と驚きながら、私はリビングで待っていた。

さつき煩くしますって一体…

「起きろ!!! バカ姉貴!!!」

「ヒャア!!!?」

うん、煩くなった。

凄くビツクリした。

そのまま深澄を叱りつける声と、ドタバタと用意する音が響く。

深澄の謝罪の声が聞こえたので

「大丈夫だよ」

そう返しておく。

暫くして、優月君が帰ってくる。

「あの…すみません。実は部活で汗でベタベタで…申し訳ないんですけど、シャワー浴びてきていいですか?」

そっか、妙に物理的な距離感があつた理由は、それか。

気も効くらしい彼は、中々高評価だった。

すぐに行つてらっしゃいと告げ、彼が消える。

入れ違うように深澄が、リビングに入ってくる。

「おはよう」。明日奈ゴメンね!

「おはよう。もう! ずっとゲームしてたの?」

「あはは…」

気まずそうに頷く深澄を見て、私はため息をつく。

「連絡はつかないし、部屋番号分からないし、かなり困ったんだよ？」

「ウツ……ごめんなさい……」

落ち込む深澄を見て、そこまですておく。

「まあ、いいわ。さて！始めましょうか！」

「ここに来た目的、学校の課題を終わらせようとする」と

「あれ？そっういえば優月は？」

深澄が優月君の行方を尋ねてくる。

「優月君ならシャワー浴びるって言ってたよ」

「そっか。まあ、部活上がりだったしね」

「そう言えば大きい荷物持ってたような……」

「何部なの？」

「弓道よ」

「中学に弓道部があるんだ！」

「既に選抜にも選ばれてるんだって」

「へえー！凄いなだね！」

そんな話をしていると、いつの間にか優月君がシャワーから出てきていた。

「…深澄。なぜに俺のスウェット着てる？」

「楽なんだもん。それにお古なんだからいいでしょ？」

それ優月君のお古なんだ…。

通りで大きいと思つたのよ…。

優月君はため息をつきながら、キッチンに立ち、材料を確認してる。

「2人とも？お腹は？」

「減つてる！明日奈は？」

「確かに減つたかな。優月君、料理出来るの？」

男の子が料理つてなんか意外！

「家は共働きですから。深澄以外は作れます」

「余計な事は言うな！」

深澄は出来ないんだ…。

何となく想像つくけど。

「明日奈？」

「ナ、ナンデモナイヨ？」

この子、勘がいい…！

「明日奈先輩、嫌いな物は？」

「大丈夫だよ〜！」

「それじゃあ、少し待っててください。チャチャツと作ります」

そう言つて料理を始める優月君。

その様子をぼんやりと見つめていた。

手際もいいし、問題なさそう。

でも、誰かが料理してる姿は初めて見た。

「明日奈？どうしたの？」

「ううん、何でもない。ただ、誰かが料理してる姿初めて見たから」

その言葉に深澄は少し顔を暗くする。

私の家の事を知ってるからか、その空気を払拭しようと、深澄はわざと大きな声を出す。

「優月の料理は美味しいから！きつと満足できるわ！」

「…フフ!!じゃあ、楽しみだね！」

「コラー！ハードルあげるな〜！」

聞こえてたのか、キツチンから悲鳴が上がる。

「アハハ!!!頑張つて!!!」

私達は笑いながら、優月君を応援するのだった。

side 優月

「お待ちどうさま、カルボナーラです」

俺はプレッシャーを受けながら、余り物で作ったカルボナーラを出す。

一応他人に出すものだから、見た目にも気をつけてみた。

「わあ！美味しそう!!」

「本当に好きね、これ。パスタ作る時いつもこれよね」

「ほっとけ。嫌なら食うな、自分で作れ」

「有難く頂きます！」

この姉貴は本当に…アレだなあ。

「2人とも。冷める前にどうぞ」

「頂きます！」

2人は同時に手をつける。

俺も遅れて食べ出す。

うん、美味い。

今日も問題なく出来てるな。

「うん、安定の美味さね」

「美味しい！美味しいよ！優月君！」

「あ、ありがとうございます…！」

初めて他人に褒められたので、嬉しかった。

「私も料理やろうかな…！」

「その時は家でやってもいいですよ？一緒にやります？」

俺は無意識に次の約束を勝手に取り付けていた。

気づいたのは深澄の驚いた目を見た時だ。

だが、そこには気づきてないのか

「いいの!?!その時はよろしくね！」

キラキラした目でこつちを見る明日奈先輩がいた。

「え、ええ…よろしくお願ひします…！」

「やったー!!」

何故か大喜びしてる先輩を尻目に、俺達はヒソヒソ話をする。

「あんな…何してるのよ?」

「なんか…無意識につい」

「2人共?どうしたの?」

「いや、なんでも」

先輩が俺達の様子に気づきたのか尋ねてくるが、そこは2人ではぐらかす。

「ふーん…それにしても、よく食べるね優月君は」

そこには言及せずに、俺の皿を見て驚く先輩。

「まあ、1人前では足りませんので。2人前は欲しいです」

「た、食べ盛り…」

「こいつこんなけ食べても、太らないのよ。羨ましいわ…」

「深澄も十分細いだろうが」

そんな話をしながら、俺達は完食して、洗い物に入る。

「そういえば、明日奈先輩は、今日何で家に来たんですか？」

疑問だったことを聞くと

「あー！そうよ深澄！早く課題終わらせるよ！」

「ええ…今？」

何やらゲームの配線を弄っている深澄に向かって言う。

なるほど、課題が出てくるのか。

それなのにゲームの配線を準備してるし…。

「ゲームは後！先に課題！ほら。早く用意して！」

怒られてるし…何してんだが。



「先輩、深澄の事頼みます。やる気さえ出れば、問題ないので。強引にスイッチ入れてあげて下さい」

「了解！任されました」

そう言つて深澄の元へ歩いていく先輩を見送る。

その仲睦まじい光景に、俺は感慨深いものを感じた。

それはまだ小学生の頃、姉はよくゲーム機片手に外に出ていつていた。

いつも会う友達がいるとか。

なのにその日はすぐに帰つて来て、部屋に閉じこもつたまま、出てこなかった。

後々話を聞くと、ゲームの腕の差で誰もついていけず、つまらないと言われたのだとか。

そしてそのまま、友達は離れていったらしい。

俺はせめて、俺だけでもつて思いながら、深澄のゲーム相手を努めてきた。

今では何回かに1回なら勝てるようになった。

でも、それでも偶に寂しそうな顔を深澄はしていた。

でも今は、すごく楽しそうな顔をして、先輩と話している。

「……き。……月！」

それがすごく嬉しくて、でも少し悔しくて……

「優月!!」

「へあ!?!何!?!」

「何じゃない!手は止まってるし、何度呼んでもぼくとしてるしどうしたのよ?」

「気づいたら、すぐ真隣に深澄がいて、洗い物の手は止まっていた。」

「…いや、何でも」

「なくないでしょ。そんな顔して丸わかりよ」

「…そんなに顔に書いてある?」

「姉なんだから、当然でしょ」

「姉の勘らしい。」

「なんか腹立つな、そのドヤ顔。」

「優月。私は大丈夫よ。大丈夫。優月がいるから、怖くない。明日奈がいてくれるから、寂しくない」

「そう言いながら、俺の頭を撫でる深澄。」

「その顔はさつきまでのドヤ顔ではなく、優しく、慈愛に満ちた姉の顔だった。」

「…いいから速く行けよ。先輩待ってるんだろ。ほら、お茶ならここ。後でお菓子も用意しておくから」

「ありがとう!明日奈、おまたせ」

そう言いながら、先輩の元へ歩いていく深澄。

俺は手早く残りの洗い物を済ませ、お菓子作りを始めた。

残り焼くだけのところまで来たので、1回手を止め、時間を確認する。

「深澄、少し寝る。キッチンそのままにしといて」

「分かったわ。おやすみ」

「おやすみなさ〜い」

「はい。失礼します」

俺はそのまま、部屋に戻り昼寝をする事にした。

割と眠かったのか、直ぐに落ちていた。

sideツキノワ

「…うん？」

気づくとそこは俺の自室ではなく、見慣れない天井だった。

その天井は、これから2人で暮らす新居の天井だ。

「…懐かしい夢だったな」

どうやら夢を見ていたらしい。

あの後、お菓子振舞ってからゲームして、先輩の帰る時間になったんだよな。

それ以降も会って遊んだり、勉強見てもらったりどんどん仲良くなっていって俺は…

「惚れたんだよなあ……」

そつと隣を見ると、そこにはまだ寝てるアスナ先輩がいた。

俺はそつと抱きしめて、額にキスを落とした。

「…好き。大好き。愛してる」

そう言いながら俺は、額に何回かキスした後、二度寝してしまった。

だから気づかなかった。

(起きてる!!／／／全力で起きてるから!!!／／／)

アスナ先輩が起きてて、俺の胸元で真っ赤になっていた事に。

## 31話

sideツキノワ

かなり重い空気が会議室を包む。

何時もなら、緊張感はあるものの、情報交換など、しゃべり声が絶えないのに、今日は別だ。

無理もない、今日の会議は

「これより、『ラフィン・コフィン』討伐会議を始める！」

シユミツトが、宣言する。

そう、俺達はこの会議後、殺人ギルド「ラフィン・コフィン」と、正面衝突するのだ。事の発端は約2週間、突然アルゴに呼び出された俺は、指定の店に来ていた。

「で？そつちからなんて珍しいじゃん」

「まあナ。まず結婚おめでとウ。おねーさんは嬉しいゾ！」

…妙に緊張してる？

珍しいな、アルゴが緊張するなんて。

「そりゃあ、どうも。また派手に記事にしゃがって…。で？わざわざ、御祝儀って訳じゃ

ないだろう?」

「…【ラフィン・コフィン】のアジトのタレコミがあつた」

「…何? 本当か!」

思わず、聞き返してしまった。

今まで、構成員とは何回か戦つてきて、牢屋にぶち込んではいるが、アジトは分からずじまいだったのだ。

「ああ。だから、ツ一坊には裏取りを手伝つて欲しい」

「分かった。すぐに用意しよう」

俺の返事を聞いて、突然顔色を暗くするアルゴ。

「すまないナ、ツ一坊。本当はアーチャンの為にも、こんな危険な事させたくはないんだガ…」

「バカ野郎。アルゴがそんな危険な事を、1人でやる方が心配だ。早く終わらせるぞ」

「…そうだな」

こうして1週間かけて、入念に調べた結果、情報は本物だという結論が出た。

そして、俺とアルゴで各ギルドに報告し、有志で討伐隊を募集して1週間、遂に今日突撃するのだ。

奴らのアジトは低層の特殊なダンジョンだ。

そこは索敵スキルが効かず、かなり苦戦した苦い思い出のある場所だった。

「…深澄。ごめん、俺…」

「分かってるわ、気にしないで。むしろ…私を優先したら、そのケツ蹴り飛ばすわよ、優月」

俺は隣を歩くミトに思わず、本名で呼びながら、謝るも、先に止められる。

やはり姉には…敵わないな。

そう苦笑いしてから、俺達はすぐに背中合わせで武器を構える。

outside

「ミト！来るぞ!!」

「分かってるわ！総員、戦闘用意！奇襲よ!!」

ツキノワとミトがそう叫んだ途端、上から飛び降りてくるラフコフのメンバー。

ツキノワは直ぐに斬撃を飛ばし、3人の足を纏めて斬り飛ばす。

「ギヤアアアア！」

「足がアアアアア!?!」

喚いているうちに紐で縛り上げる。

「ま、まさか…作戦が…漏れてたのか…!?!」

愕然としてるシュミットに、ツキノワが叱りつける。

「ボサつとすんな!! 元々罠の可能性も言っていあつただろ!! それよりシャキツとしろ!! 直ぐに立て直せ!!」

「皆落ち着いて!! 目の前の敵を確実に対応して!!」

ミトの鋭い指示が、討伐隊に響く。

その声を受けて、無事建て直した討伐組は確実に捕獲していく。

その時、2人に悪寒が走った。

2人は直ぐに飛び退く。

そこに投げナイフが2本の刺さる。

「ヒヤツハアアアアアアア!!! 久しぶりだなア!! 狩人オオオオ!!!」

「喧しい!! 今度こそ黙らせてやるわよ!! ジョニーブラック!!!」

そのまま、ミトがジョニーブラックと戦闘に入る。

その時、いやらしい笑みを浮かべるジョニーブラック。

「…!? ミト! 後ろだ!!」

直ぐに追いかけてようとするも、下っ端どもが邪魔する。

「…チツ! 邪魔だ!」

ツキノワは纏めて、腹を薙ぎ払い吹き飛ばす。

その内1人が死んだが、今は気にしてる暇はない。



ツキノワは投げナイフを打ち落とそうと、刺突を放つ。

幾つかは落とせたが、全ては無理で、何本かがミトに刺さってしまった。

突然、膝から崩れ落ちるミト。

その隙を3人の下っ端が襲いかかる。

「間に合え……！」

一気に加速し、ツキノワは前に躍り出る。

「フツ!!」

纏めて首を切り裂く。

その結果、3人の下っ端の首がハネ飛ばされる。

ポリゴン状になって消える下っ端。

更に俺を追いかけてきた4人を、2人は刺突で纏めて貫き、1人は縦に両断した。残

り1人は斬りかかってきたのを、いなして、首を跳ね飛ばす。

「優月……」

「……俺は……大丈夫だから、ほら」

ツキノワは直ぐにミトに解毒ポーションを飲ませて、治療する。

8人を斬ったその刀は、すごく重く感じる。

「ヒ、ヒヤハ！ヒヤハハハハハハハハ!! 殺したな！8人も殺したな剣豪!!」

「うるせえぞ。だから何だ？てめえらだつて散々殺ってきただろうが」

ジョニーブラックの耳障りな笑い声に、感情を殺したような声で返すツキノワ。  
「てめえも、俺らと同類になつたつてことだよオ!!」

何が可笑しいのか、とてつもなく楽しそうに笑うジョニーブラック。

そんな様子を見ても、ミトとツキノワは冷静だった。

「…ミト、任せていいか？」

「ええ、行きなさい」

ツキノワはジョニーブラックを無視して、悲鳴がした方へと、一気に駆け出す。

「待ちやがれ!!」

「あら、行かせないわよ」

追いかけてよとするジョニーブラックを、鎌で牽制して止めるミト。

「今度は逃がさない。ここであんたを捕まえるわ」

「上等だあ！てめえから殺してやるよオ!!クソアマア!!」

sideミト

あの時と同様、私はジョニーと戦っていた。

その戦い方はこの間と一緒で、あいつは常に動いて、私の射程圏外から、チクチク攻

撃してくる。

違うのは

「あら？殺すんじゃないの？ジョニーブラック」

「ああ!?うるせえ!!」

挑発しても、一切乗らないところだ。

前はすぐに乗ったので、割と簡単だったのだが、今は喚きはするが、挑発には乗らない。

少し…厄介ね…。

私は鎌を振って、投げナイフを弾く。

投げ終えた直後に距離を詰めるも、直ぐに次のナイフが飛んでくるので、中々詰めるれない。

「おいおい、俺を黙らせるんじゃないやねえのかよ、狩人ちゃんよオ！」

逆に挑発される始末。

一体幾つナイフ持ってるんのよ。

そろそろ無くなってもいい頃合いでしょうに。

…あれ使ってみるか。

「はあああああ!!」

私は一気に距離を詰め、ソードスキルを地面に叩きつけて、土煙を起こす。その隙に、ある仕掛けをする。

その煙が晴れるまでに、奇襲を仕掛ける。

縦横無尽に鎌を振るうけど、上手く躲されて当たらない。

距離を取った瞬間に、私はナイフを投げる。

「おわあ!?!危ねえなおい!?!…あん?」

ナイフに何か付いているのに気付いた瞬間、それが爆発する。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

それは27層で採れる、爆発する石だ。

私は紐でそれを縛り、投げつけたのだ。

それがあいつが弾いた衝撃で、爆発したのだ。

その隙に、私は一気に駆け寄り、鎌で両手両足を切り落とし、落ちてきたところを、紐で縛り上げた。

「…シヨニーブラック、捕縛完了」

私は今度こそ逃がさないように、しっかりと縛り付け、仲間に残けたのだった。

sideツキノワ

俺は悲鳴がした方へ走っていく。

そこにはボロ雑巾みたいな格好したやつが、キリトと鏢迫り合っていた。俺は一気に近づき

「シッ！」

首を跳ね飛ばした。

「大丈夫かキリト？」

「ツキノワ……ああ、すまない。俺……」

キリトは俺に斬らせた事を気に病んでるのだろう。

「今更だ。それよりまだやれるな」

「……ああ！こっちは任せろ！」

俺とキリトは二手に分かれて、どんどんラフコフメンバーを無力化していく。

斬りかかってくる奴の動きに合わせて、腕を切り飛ばして、思いつきり回し蹴りで蹴り飛ばす。

峰で打撃を飛ばし、纏めて吹き飛ばす。

投げナイフを躲し、突きを飛ばして纏めて貫く。

そんな中、ふと悪寒がして首を捻ると、そこにエストックが通り過ぎた。

「……今度こそ……最後マデ……殺シ合オウ……剣豪!!」

「……速攻で終わらせてやる、ザザ」

俺とザザはまたもや、殺し合いを始めた。

「フッ！」

「シャー！」

俺達は、直ぐに劍戟を始める。

右袈裟は躲され、2連撃の刺突は逸らした。

こつちの刺突はいなされ、後ろから狙われるが、横薙に払って弾き飛ばす。

追いかけるように、斬撃を放つがそれはソードスキルで相殺される。

技後硬直を狙い斬りかかるも、計算されていたように、ちょうど技後硬直が解けて、防がれる。

だが、力技でそれを押し切ろうとするも、その衝撃を利用し、後ろに飛んで距離を取られる。

「…やっぱ強えなお前は。ラフコフなんて勿体ないぜ」

「ソウイウ…お前こそ…流石だ。ソノ劍技…尊敬二値スル」

俺達はそれぞれの劍技を褒めつつも、隙は見逃さないように、睨み合う。

そして、俺達はまたぶつかり合う。

俺が縦一文字に切り裂き、ザザが俺の肩を貫く。

今度は毒は塗ってないらしく、一瞬ひやっていた。

今度は横一文字に斬ろうとするも、ザザが俺の力が乗る前にソードスキルで、相殺してくる。

「チッ！」

俺は直ぐに体術【水月】で、ボディに撃ち込む。

「グッ！」

ふらつくザザを俺は脱力させながら、構える。

それを見てザザも刺突の構えを取る。

「ふん!!」

同時に攻撃して、お互いノーガードで攻撃を受ける。

しかも、インパクトした瞬間、一気に力んでお互いを吹き飛ばす。

「ガハツガハツ!!」

「フー…フー…」

お互いにノーガードだった為、かなりHPが減っており、レッドゾーンに突入しかけていた。

「…お互い考える事は一緒かよ…」

「極メタ…者ノ…行キ着ク先方…同じジ…トイウ事ダロウ…」

極みたとか…恥ずいこと言うなよ…。

「まあいい、最後まで付き合ってもらおうぜ」

「望ムトコロ……」

俺達はこの戦いの行く末なんて、頭には無かった。

ただコイツとケリをつける、それだけだった。

そんな事を永遠に続くと思った……その時

「ジョニーブラックが捕まったぞー!!」

その声を聞いた瞬間、ザザの動きが止まる。

……今だ、俺はエストックを握る腕を切り落とした。

「……ガア!？」

「隙ありだぜ」

直ぐに、サブウェポンを取り出して対応するが、その程度で止められほど、俺は弱くない。

そのまま、両腕、両足と跳ね飛ばして転がす。

そのまま縛り上げ

「ザザ。捕縛完了」

ラフコフの幹部2名を確保した俺達だった。

その後、ラフコフは戦線が崩れた。



そのまま烏合の衆と成り下がったこいつらを、捉えるのは容易だった。

しかし、リーダーのPOHはそもそもこの戦場にはおらず、その結果もお世辞にもい  
いとは言えなかった。

この戦いで、討伐組からは10人近く死人が出た。

ラフコフのメンバーで投降せず、死んだヤツらは20人以上。

そのうち9人を斬ったのは：俺の刀だった。

## 3 2 話

outside

「ふう…疲れた…」

ここは74層迷路宮区入口。

そこから出てきたのは、和装の少年ツキノワだ。

攻略を切り上げ、街へ帰る最中なのだ。

森をのんびり歩いていると、モンスターへの反応を検知する。

「数は3…それにしても、妙に小さいな…」

反応のする方へ向かうと、そこには兎がいた。

「あれは…『ラグー・ラビット』…!!しかも3羽!?!」

S級食材『ラグー・ラビット』。

SAOで最も美味しいとされる食材の1つだ。

その出現率は超激レアで、それが3羽となると、最早夢なのかと、錯覚するほどだ。

「よし…そつと…そつと…」

音を消し、気配を消した彼は、ゆっくりと近づき…そのまま…

side ツキノワ

「さて、どうしようかな〜♪」

ウキウキ気分が止まらない。

それもそのはず、何と【ラグー・ラビット】を3羽、全部確保したのだから。

「今日の晩飯は俺だし…やっぱシチューかな。ragoutだけに」

確か…フランス語だったかな？

まあ、それはともかく俺は今50層のエギルさんの店に向かっていた。

その時、店から誰か出てきた。

「あれ？キリト？サチも。どしたん？こんな所に」

「お！ツキノワか。久しぶりだな」

「久しぶり、ツキノワ。私達はエギルさんの所に納品に来たの」

「納品…？ああ、そういや、ここで売ってるんだっけか」

サチの作るものは主に防具、回復アイテムだ。

それ故にサチの商品は、ここエギルさんのお店か、48層【リンダース】にある、リズのお店【リズベツト武具店】で、販売しているのだ。

当初は仲間内だけにしていたらしいが、ギルドの為にサチ自身が、売り込んで置か

せてもらっているのだとか。

「あの2人はそういうの妥協しないタイプだろうに……。よくやってるよ、サチは」  
「ああ、サチのおかげで本当に助かってる。ありがとうな、サチ」

「そ、そんな……！／＼／＼」

サチは慌てるように手を振るが、顔は隠しきれてない。

「そんなサチにはこんなプレゼントだ！」

そう言つて俺は、「ラグー・ラビット」を1つあげる。

「こ、これ……!? 【ラグー・ラビット】!?」

「な、なにいい!!!おま、これどこで!?!」

「たまたま捕まえたんだよ。3羽いるから1羽やるよ」

「さ、3羽!!!」

2人の動揺も仕方ないだろう。

何せこんなレア素材2度と手に入らんだろうし。

「ほ、本当にいいの……?」

「おう、サチは料理スキルコンプしてるよな?なら大丈夫だろ」

キリト……ヨダレをしまえ、ヨダレを。

「じゃあ……有難く貰うね!ありがとうツキノワ!」

「どういたしまして。美味しく食べるよ」

そのまま別れた俺は、そのままお店に入っただけだった。

「こんにちは」

「おう、ツキノワか。いらつしやい」

「さつきそこで、サチ達と会いましたよ。どうですか？」

「ああ、完成度はドンドン上がってる。売れ行きもまあまあだぞ」

「へへそうなんですね。なら良かったです」

「そういや、アイツらが来る前にアスナ達が来たぞ？」

「え？アスナ先輩達か？」

今日アスナ先輩は、ミトと2人で、女子会とか言ってたけど…。

「女子会でここに来たんですか？」

「…それは俺も疑問だったな…」

女子会…よく分からん。

俺はフレンド機能で先輩の位置を調べると、まだこの層にいるらしい。

「まだいるみたいなんで、声掛けていきますね。それと…これ買取お願いします」

「分かった。どれどれ…」

こうして俺は当初の目的を達成してから、2人を探し始めた。

転移門広場で、直ぐに見つけた。

「先輩！ミト！」

「あれ？ツキノワ君？」

「どうしたのよツキノワ」

それぞれの反応を受けながら、俺は挨拶した。

「いや、素材売りきたらこの層にいたから、声掛けに来た」

「そうなのね」

「ところで…ミトにこれあげる」

俺はミトに「ラグー・ラビット」をあげた。

「?…「ラグー・ラビット」?!?!どうしたのよこれ!?!」

「「ラグー・ラビット」!?!」

先輩もトレード画面を覗こんでくる。

「3羽捕まえたからあげるよ。俺達用には確保してあるし」

アスナ先輩が、慌ててストレージを確認する。

結婚している俺達はストレージは共有されてるので、直ぐに確認出来るのだ。

「本当に入ってる…!ツキノワ君!!」

キラキラした目でこっちを見る。

「今日はシチューですよ。ragoutだけに。だから早めに帰ってきてくださいね」  
「やったあ!!! 楽しみにしてるね!!!」

ニッコニコの笑顔で笑いかけてくるアスナ先輩。

可愛すぎて、心臓が辛い。

「私はどうしようかな…?」

ミトは肉を見ながら、メニューを考えている。

「じゃあミト! クラインさんに食べて貰ったら!」

「あ、アスナ! 何言ってるのよ!?! / /」

アスナ先輩の爆弾発言に、ミトがかなり顔を赤くする。

「そーいや、どこまで進んだんだ? 最近聞いてないな」

「ツキノワまで!?! どこまでも何も: / /」

「こいつ…: さてはチキってるな?」

「…先輩」

「…ツキノワ君」

「あ、貴方達? どうしたの? 顔が怖いわよ」

「お話、しよっか」

こうして急遽女子会は終了、これからは如何にクラインを墮とすか、の会議が始まっ

た。

Outside

「じゃあ、直ぐに用事しますね」

「お願いしまーす!」

ここはツキノワとアスナが同棲する部屋。

61層「セルムブルグ」にあるマンシヨンの一室である。

部屋そのものも然ることながら、家具もいいものが揃っている。

基本的なレイアウトはアスナのセンスであり、テーブルや照明はツキノワのセンスである。

そんな2人のセンスの結晶でもあるこの部屋を、アスナは見渡しながら、ニコニコしていた。

「…何してんですか?」

そんな様子をつキノワは呆れた様子で聞く。

「早いね!もう終わったの?」

「はい、後は待つだけなので…SAOの料理は簡略化されすぎてつまらない。そんな事より、何してんですか?」



「ううん、ただ、これが私とツキノワ君の部屋なんだなって…嬉しくって！」

そんな事を嬉しそうに話すアスナに、ツキノワは顔を赤くしながら、そつぽを向く。

「い、何時までもそんな事言ってるんですか…！／＼／＼ほら！もうできますから、早く用意手伝って！／＼／＼」

「ふふつ、はーい!!」

そんなツキノワをアスナは優しく笑いかける。

そこにはとても平和な、愛おしい日常があった。

「美味かった…過去一かも…」

「はあ…今まで頑張って生き残ってて良かった…」

シチューを完食した2人は、至福の一時を過ごしていた。

「ミトはちゃんとやったのかなあ…」

「分からないわ…でも…不思議ね…」

突然、アスナがそんなことを言い出した。

「不思議って何が？」

「何か、この世界に生まれてずっと暮らしてきたみたいな…そんな気がする」

「…確かに。俺も最近、あつちの事を思い出さない日がある気がします」

そう言われて、初めてそんな事にも気づきたツキノワ。

それが、少し…寂しく感じたのか暗い顔をした。

「それに…最近はクリアだの脱出だの、血眼になるやつが減った気がする」

「ええ…今最前線で戦ってるプレイヤーなんて、500人いないんじゃないかな…」

2人はいつの間にか、飲んでたお茶のカップを置いてしまっていた。

「でも、私は帰りたい」

その言葉にハッと顔あげるツキノワ。

「だって向こうでやり残した事いっぱいあるもの」

その瞳は強くて、美しい輝きを持っていた。

「…そうですね。俺もやり残した事沢山あります。それに…先輩と行きたい所もいっぱいあります！何より…このアバターじゃなくて、本物の先輩の暖かさを感じたいです」

そう言っつてツキノワは優しく、アスナの手を取り、自分の頬へ持つていく。

その目はどこか…甘えるような色をしていた。

「優月君…」

「明日奈先輩…」

そして2人の影は重なった。

「…明日は、一緒に迷宮区行きましょうか」

夜も更けてきた頃、アスナが同じベッドに入っているツキノワに、そう提案した。

「了解。先輩の為なら例え火の中水の中つてやつです。…一緒に最後まで頑張りましたよ。そして…向こうでも、ずっと一緒にいましょうね」

「…うん。ずっと一緒だよ」

こうして、2人はキスをして、就寝したのだった。

### 33話

sideアスナ

「フッ！」

私の目の前にはボーンゴレムが一体。

ゴレムが、「ホリゾンタル・スクエア」で攻撃してくる。

1 撃目は迎え撃ち、2 撃目はバックステップで躲し、3 撃目は仰け反って躲し、4 撃目は飛んで躲す。

「ハア！」

私は着地後、直ぐにソードスキルのモーションに入る。

フェイントを挟んでから、まずは3連撃を胴に当てる。

「シッ！」

体勢が崩れたところで、足を狙って2連撃。

「フッ！」

さらに上へ飛んで、がら空きの胸元に2連撃。

「ヤア！」

トドメの一撃で、盾の上から吹き飛ばす。

8連撃ソードスキル【スター・スプラッシュ】。

この技で、大きく削った私は直ぐにツキノワ君と、スイッチしようとした瞬間、斬撃が飛んできて、私の真横を駆け抜ける。

そのすぐ後ろを、白い羽織をはためかせながら、走り抜けるツキノワ君。

「オラア！」

斬撃を受け、更にダメージを負ったゴーレムにトドメの一撃に峰打ちを飛ばす。

骨が砕け散り、そのまま、ポリゴン状に砕け散るのを確認して、私達は武器をしまった。

「お疲れ様です、先輩」

「お疲れ様、ツキノワ君」

私達はハイタッチをしながら、お互いの健闘を称えた。

「やっぱり手練が1人いるだけで、だいぶ違いますね」

「…ツキノワ君、うちのギルドに入らない？」

私はツキノワ君に聞く。

団長みたいに、力をもって理由ではなく、純粹に心配だから。

最近モンスターのアルゴリズムに、イレギュラー性が増してきている気がする。

ソロの場合、想定外の事態に対応出来ない時もある。

「…先輩には悪いけど、入る気は無いですね。今の立場があるのは、ソロやってるからですし」

そう、今彼が私の護衛でいられるのは、彼がソロだから。

もし何処かのギルド、ないし血盟騎士団になってしまえば、一緒にはいられなくなるだろう。

「そつか…でも、あまり一人で行かないでね？私、ツキノワ君にもし何かあつたら…」  
「しっ。何が来る」

突然、ツキノワ君が私の口に手を当てる。

その時、索敵スキルに反応が出る。

プレイヤーが…6人？

「結構な速さで来るな…？」

「警戒しましょう」

私達がお互い武器を手に取った時、

「「「「ぎやあアアアアアアアアアアアア!!」」」」

すごい悲鳴と共に、何やら見覚えのある6人の男女が、一気に駆け抜けて行った。

あまりの速度に、2人揃ってポカーンとしている。

「…ハッ!?今のつて…キリトか!」

「それにサチ達…月夜の黒猫団よね!」

私達は顔を見合わせながら、皆を追いかける為、来た道をダッシュで戻って行った。

sideツキノワ

「…アハハ!!」

6人の笑い声が聞こえたのは、安全地帯の中からだった。

俺達は直ぐに入って皆の安否の確認を取った。

「キリト!皆!大丈夫か!」

「何があつたの!」

でも、6人とも俺達の顔を見て、ポカーンとしてるだけだつた。

「…ツキノワ?アスナ?何でここに?」

「何でつて…お前達が俺達を、追い抜かして行ったんだろうが!」

「そうよ!すごい悲鳴を上げながらだつたから、ビックリしたじゃない!」

「あ、アハハ。実は…」

ケイタが説明を始めた。

俺達より先に進んでいたケイタ達はボス部屋を発見。

顔だけ拝んでいこうと扉を開けた。

そこにいたボスの名は「The Gleam Eyes」。

ヤギの顔に大きな牙、巨体に蛇のしっぽ。

まさに悪魔みたいな見た目をしたボスだったらしい。

「それを見て、ビビって逃げてきたと…」

「あ、あれは本当に怖いんだぞ！見てみるよ！」

「分かった分かった…」

ダツカーが喚くがとりあえず無視。

それより気になるのは

「なんでサチがいるんだ？生産職だろ？」

そう、彼女は戦闘は苦手なはず。

なのに幾らキリト達がいるからって最前線は危ない。

「ん？知らなかったのか？サチは最近一緒に戦ってるんだぞ？」

「え？そうなのか？」

知らなかった。

まあ、あまり前線ではこいつらとは会わないからな。

「う、うん…やっぱり皆が戦ってるのについて思っ…それに…き、キリトもいてくれるし



∴  
／／  
／

最後のは小さく言ったな。

まあ、俺達には聞こえてるが。

「サチ？なんか言った？」

「な、何でもない!!／／／」

何でよりによってお前が聞いてないんだキリト!

俺達全員聞いてたんだぞ!?

キリトとサチ以外の全員が、頭を抱えながらため息をつく。

「み、皆…どうしたんだよ…?」

「「「「何でもない!!」」」」

「そ、それより!?ご飯にしようか!」

サチが話題変えようと、ご飯の用意をさせた。

「待つてました!!あ、ツキノワ。昨日はありがとうな!」

「そうだった!昨日ありがとう!美味しく頂いたよ!」

「それは何より」

昨日の「ラグー・ラビット」の事だろう。

そう思いながらも、こっちもご飯を待つ。

今日はアスナ先輩の当番なので、楽しみだ。

「はい、おまたせ」

「ありがとうございます！頂きます！」

今日のお昼はバケツトサンドだ。

「ん〜！美味しい！美味しいです！」

「ふふ、ありがとう」

そう言いながら俺達はゆっくりと食べている。

キリト達は皆でワイワイと食べている。

あの勢いの中では、サチは大変そうだな。

そんな時、団体が入ってくる。

すぐに警戒するも、その集団を見て警戒を解く。

「おお！キリトじゃねえか！」

「ツキノワ！アスナ！貴方達もいたのね！」

クライン率いる風林火山と、ミトだった。

「よう、クライン。まだ生きてたんだな」

クライン達がキリトに絡みに行ってる隙に

「おつすミト。元氣そうじゃん」

「ミト！どうだったの!？」

俺と先輩はミトに問い詰める。

「昨日…ちゃんとクラインを誘ってご飯したわ」

「それで!？」

「それで…今日この約束して…」

「して…?？」

「…終わりよ」

「…終わりかい!？」

思わず、2人揃ってツツコミを入れてしまう。

「何チキってんだよ!?!そこはアタックしろよ!攻めの一手だろ!!」

「自慢の攻撃力はどこ行つたのよ!?!私には守る事ばかり意識しすぎて言つてた癖に、

自分はガツツリ守つてばかりじゃない!」

俺達はミトに詰め寄りながら、グイグイ行く。

「で、でも…」

「でもじゃねえよ…」

「ミト…:勇氣出して!」

俺達も思わず、ため息が出てしまう。

この姉貴…どうしよう…

そんな事、幾つかの鎧の音が聞こえてくる。

あのエンブレム…それに深緑を基調とした、あの連中は

「【軍】だと…?」

「【アインクラッド解放軍】、通称【ALF】。

25層で壊滅したALSが、【ギルドMTD】に吸収されたものだ。

当時はともかく、今は黒い話しか聞かず、かなり荒れ果てたギルドだ。

確か下層の治安維持と組織力の強化に方針転換したはずが…なんで今更…?

「ギルドの定例会でもあったわ。軍が方針転換したって」

「ええ、でも本当に来てるなんて…」

2人がそんな話をしていた。

なるほど、血盟騎士団は知ってたのか。

「私はアインクラッド解放軍、【ゴーパーツ】中佐だ」

階級まであるんだ…

「キリト、月夜の黒猫団所属」

「ケイタ、月夜の黒猫団リーダーです」

代表してキリトとケイタが、話を聞くらしい。



「誰がためえら何かに頼んだよ、ああ?」

俺は相手にもしたくないが、イキがられても腹が立つだけだから、仕方ないから相手する。

「君は…【劍豪】か」

「ツキノワ、ソロだ。テメエらみたいなチンピラ崩れのゴロツキに、そんな事頼んだ覚えはねえよ」

「何…!?!? 貴様?!?!」

「失せな。ここは本物の戦場だ。テメエら雑魚が出てきていい場所じゃねえ」

俺は刀の柄に手をかけながら言う。

これ以上は言葉じゃない、と言外に忠告しながら、殺気をぶつける。

その殺気にゴーバツツも、後ろのへばつてる連中も震えている。

「…分かりました。マップデータは提供します」

ケイタが突然、そんな事を言い出した。

「元々、街に戻ったら公開する気だったしな。これで金儲けはしない、うちのルールの1つだよ。な? リーダー」

「ああ、そういう事です。クラインさん。だからツキノワもそこまでにしてくれ」

「…チツ」

「全く…人が良すぎるぜお前ら」

持つてるこいつらがいいって言うなら、俺達には何も出来ない。

大人しく下がる事にした。

「…うむ。協力感謝する」

そう言いながら、仲間の元へ向かうゴーパーツ。

「ボスにちよつかい出す気なら辞めた方がいいぞ」

「それは私が判断する」

キリトの警告も無視して、無理やり仲間を立たせて、先へ進んでいってしまった。

「大丈夫かよアイツら…?」

「流石に今からは挑まないとと思うけど…」

クラインとミトが心配する中、

「一応、様子だけでも見に行くか…?」

キリトがそんな事を言い出した。

はあ…本当にお人好しがすぎるぞ、アイツは。

皆も乗り気だし、仕方ない。

「…すまない、ツキノワ。俺のわがままに巻き込んで…」

キリトは俺が乗り気じゃない事に、気付いていたらしい。

「…別に。もし皆に何かあったら嫌だから付いてっただけ。アイツらの事なんてどうでもいい」

すごくツンデレっぽい発言だが、皆俺の本心を知ってるからか、何も言わず、笑ってるだけだった。

「ツキノワ、アスナ…ちよつといいか」

移動中、突然クラインが俺達に話しかけて来た。

「何ですか?」

「その…ミトの嬢ちゃんの事なんだが…えつとお…」

あゝ、なるほど…。

流石にキリトじゃあるまいし、気付くか。

「うん、クラインの思ってる通りだよ。よく気付いたな」

「あ、当たり前だろ…キリの字じゃあるめえし…」

…ここでもキリトはバカにされている。

「…で?クラインはどう思ってるの?俺はそこが大事だと思うよ」

「クラインさん。ミトは…あの子はクールなんじゃなくて、ただ不器用なだけなんです。ただの寂しがり屋なんです」

「アイツは…根はすごく優しく、誰かの為に泣ける奴なんです。自分が誰も傷つけな



いように…：そうやって自分を犠牲にして、誰かを守る奴なんです」  
あの日、あの時の涙を知っている。

自分のせいだって思い込んで、誰も近づけないようにしてる。  
でも本当は寂しがり屋で、友達思いで…：そんな優しい人なんだ。

だから

「だから…：クラインさん。お願いします。ミトの事、ちゃんと見てあげてください」

「どんな結論でもいい。真剣に向き合ってくれ。姉貴の事を、1人の子供ではなく、1人の女性として、そして1人の大人ではなく、1人の男性として…：考えてあげてください」

俺達は真剣にクラインに頭を下げた。

クラインがどういう結論を出すかは知らない。

でも願わくば、対等に見てから、決めて欲しい。

「…分かった。俺も腹くくる時って事だな」

そう言つて俺達の頭を軽く撫でてから先に進むクライン。

その背中は何時よりも、凛々しく、頼りがいがある気がした。

「それにしても…：全然見えねえな…」

「ああ、追いついててもいいのに…」

姿形どころか、影すら見当たらない。

皆諦めかけたその時、ふと何か聞こえてきた。

それは…悲鳴だ。

「…クッソ!!」

「「「ツキノワ（君）!?」」」

「急げ!あのバカども、早まりやがった!!」

俺の言葉で、理解したのか。

皆一斉に走り出した。

パラメータ的に、俺と先輩、次にキリトとミトが飛び出した時

「くっそ!こんな時に!」

後ろでモンスターがリポップしてしまった。

「おめえらは先に行け!ケイタ!切り抜けるぞ!」

「了解です!サチは下がってて!」

「皆!無理はするなよ!!」

キリトが心配そうにしながらも、走り出す。

「あそこだ!」

そして、俺達がボス部屋に着いた時、そこには

「「「ギヤあアアアアアアアアアア!?!」」」



## 34話

sideキリト

軍の連中が、The Gleam Eyesと、戦っている。

いや、あれは…蹂躪されていると言った方が、正しいか。

だからやめろと言ったのに…!

ツキノワが、ある事に気付いた。

「…おい、人数足りなくないか?」

俺達は慌てて数を数えると…

「…2人いない」

ここで2人いなくなった…つまり…

「…馬鹿野郎」

思わずそう呟いてしまった。

そのまま、為す術なくやられていく奴らに

「何してる!?! 転移結晶を速く使え!」

思わずそう叫ぶが

「ダメだ！結晶が使えない！」

な、まさか…!?

思い出される27層の時の事。

あの時もあそこは…

「【結晶無効エリア】!?!」

「そんな…ボス部屋にそんなギミック…!?!」

ミトとアスナが、驚愕のあまり、口を押えている。

後ろから足音が聞こえる。

「おい…どうなってる!?!」

ケイタ達が追いついてきたらしい。

「…ここでは結晶は使えない。俺達が踏み込めば奴らは逃がせるだろうが…」

その後、俺達がどうなるかは…分からない。

「…帰ろう」

その時、淡々とツキノワが言う。

それはつまり

「このまま見捨てろってことか!?!」

思わず、掴みかかる。

だが、それ以上に強い力で腕を掴まれる。

「じゃあどうするってんだよ!? あいつらを逃がすのか!? お前の忠告も聞かず、勝手に乗り込んだバカ共をか!? あんな奴らの為にお前達を…アスナ先輩を、危険な目に晒せてのか!? 冗談じゃねえぞ!! そもそも俺達は、たかが2パーティ半だぞ!? 一体何が出来るんだよ!」

ツキノワの目は…本気だ。

今俺達と軍の奴らの命を測って…俺達を選んだ。

ツキノワの言い分も一理ある。

これは単純に…彼らの自業自得だ。

それをわざわざ、助ける義理はない。

でも…でも…

「例えそうだったとしても…見捨てていい理由にはならない!! だったらあの時、なんで皆を助けた!? なんで黒猫団の皆を助けたんだよ!」

その言葉に、唇を噛み締めるツキノワ。

こいつは決して、冷血漢では無い。

ただ、現実主義…リアリストなだけだ。

そうやって俺とツキノワが言い争っている時、

「我々解放軍に撤退の文字はない！戦え！戦うんだ！」

「ゴーバッツ……！」

まだ戦おうとするゴーバッツに、思わず悪態つく。

「全軍、突撃ー!!」

「よせーやめろー！」

思わず俺とツキノワが同時に叫ぶ。

その時、The Gleam Eyesがプレス攻撃とソードスキルで、軍を蹴散らしてから、誰かを打ち上げた。

飛んできたのは、ゴーバッツだった。

兜が砕け

「有り得ない……」

そう言い残して、死んだ。

「有り得ないのは……お前の馬鹿さ加減だ」

そう呟いたツキノワの目は……とても冷たく、泣きそうだった。

sideツキノワ

まだ、軍の連中は生き残ってる奴もいる。

でも俺には助ける気は無い。

どんな汚名を被ろうが…それこそ、アスナ先輩に嫌われようが、俺はアスナ先輩の生き残る道を選ぶ。

そう思っていた…だから…

「ダメ…ダメよ…もう…ダメー…!!!」

「アスナ（先輩）!!!」

アスナ先輩が飛び出した時、俺とミトはつい駆け出してしまった。

「おい！2人とも…クソ!!クライン！ケイタ！みんなで軍のヤツらを下げさせてくれ！サチはそこで回復させてくれ！」

「分かった!!」

「どうとでもなりやがれ！」

キリトがみんなに指示を出す。

アスナ先輩が、空中で、「カトラドル・ペイン」を発動、背後から攻撃して、タゲを取る。

しかし、体勢が悪く剣での反撃は防いだが、パンチには間に合わず、吹き飛ばされてしまう。

「はああああ!!」



俺とミトは、同時に剣を弾き飛ばし、追撃を止める。

「先輩！大丈夫!？」

「アスナ！下がって！」

ミトの声に反応して、一旦下がる先輩。

ボスの後ろでは、クライン達による救助が、行われていたが、それに気付いたボスが、プレス攻撃をしようとする。

「ぜりやああ！」

それをキリトが背後から攻撃する事で止める。

「ツキノワ！ミト！耐えるぞー！」

「了解！」

そして、なし崩し的にボス攻略が始まった。

「おおお!!」

ボスの振り下ろしを、俺は打撃で吹き飛ばす。

「やあああ!!」

ボスのすくい上げを、ミトがソードスキルでいなして、かち上げる。

「はあああ!!」

ボスの水平切りをキリトがソードスキルで浮かせて、躲す。

「タンク！前に出て！」

ボスのプレス攻撃は、先輩の指示で、風林火山と月夜の黒猫団のタンク勢が防ぐ。地道にやってきたが、案の定泥沼化してきた。

数は少ない、情報も少ない。

作戦も行き当たりばったり。

しかも…少しづつだが、俺達前衛も消耗してきている。

このままだと…でも、俺のアレはまだ実戦投入はした事ない…！  
隣にいるキリトを見る。

キリトも、アレを使うか躊躇っているな。

「ツキノワ！キリト！」

ミトの声に2人して咄嗟に剣を掲げて、ガードする。

「キリト…！」

「ああ…躊躇ってる暇はない…！」

俺達はすぐに下がって、メニューをいじる。

「みんな…ごめん！10秒だけ持ち堪えて！」

「了解！」

「ツキノワ君…やるのね？キリト君も何かあるみたいだけど」

俺達はそのまま頷く。

「分かった。行ってくるね！」

そのまま走り出す先輩を見ながら、俺は腰に2本目の刀を差した。

「お先！」

そのまま俺は駆け出して、クラインに声をかける。

「スイッチー！」

クラインがスイッチして、俺は前に出る。そのまま、2本の刀で、斬撃を飛ばした。

「はあああああああ!!!」

雄叫びをあげるボス。

二刀流の実戦投入…しかもボス戦。

右の【和泉守兼定・真打】で受け流し、左の新しい刀【菊一文字正宗】で、目を貫く。

「オラア!!」

よろけるボスに両方で、打撃で腹に打ち付ける。

「くら…え!!」

更に振り下ろしてくるので、左で弾き、右で斬撃を飛ばす。

「スイッチー！」

キリトがやっとなる。

俺は突きをクロスして防いできた刀で、一気に弾き飛ばして、キリトと入れ替わる。  
「はああああ!!」

そうして戦うキリトは：二刀流で戦っていた。

「【スター・バースト・ストリーム】：!!」

そうして放たれる16連撃ソードスキル。

その軌跡はまさに、星の煌めきの如く。

「なんなんだ…あのスキルは…!」

クラインが呆然と眩く。

俺の擬似的な二刀流ではなく…真の【二刀流】。

一切の防御を捨てた、攻撃につぐ攻撃。

反撃を受けながらも、目にも止まらない速さで、剣戟が駆け抜ける。

しかし15撃目が、掴まれる。

そのまま振り下ろされる剣を

「おおおお!!」

俺は2本の刀で斬撃を飛ばして、弾き飛ばす。

そしてがら空きになった胴に

「はああああああああああああ!!!」

キリトの渾身の1突きが…ボスの体を貫く。

そしてポリゴン状に砕け散るボス。

空中に浮かぶ、Congratulationの文字が、74層フロアボス攻略が完了した事を告げる。

「終わったのか…?」

そう呟いてキリトは、気を失ってしまった。

「キリト!」

1番後ろにいたサチが、1番速く駆け寄る。

俺達は…喜びの声すら上げられなかった。

「…何人死んだ?」

「…ゴーパーツと2人。計3人よ。私達が参戦してからは…1人も死んでないわ」

「ならない…。さてと…先に言うぞ、俺のはただのパクリ。剣豪スキルの穴を突いただけだ」

「剣豪スキルの穴?」

クラインが不思議そうに聞いてくる。

「ああ…剣豪スキルには、ソードスキルとかのモーションがないから、モーションエラー」

とか起きない。右でも左でも反応するから自由度も高い」

「なるほど…モーシヨンの縛りがない事を利用した、擬似二刀流って事ね」

さすがミト、話が早い。

「ん…？」

どうやらキリトが、目を覚ました。

「ここは…!?俺…どれだけ気を失ってた?」

「数秒から数十秒だな」

「…キリトのバカ!無茶しないで!」

そう泣きながら、キリトに抱きつくサチ。

そんなサチをキリトは、優しく撫でながら言う。

「あんまり強く抱きしめられと、本当にHPが0になっちゃうよ。…何人死んだ?」

「3人。俺達が参戦からは0だって」

俺はキリトにそう伝える。

「…攻略で死人が出たのは、67層以来か…」

「こんなのが攻略って言えるかよ!ゴーパーツの野郎…死んだら意味ねえだろうが…」

!

クラインの悔しそうな声が、ボス部屋に響く。

「…それはそうと、何だよおめえさっきのは!？」  
クラインが強引に話を逸らす。

「…言わなきやダメか？」

往生際が悪いぞキリト。

「あつたり前だ!!見た事ねえぞあんなの!？」

「…エクストラスキルだよ。【二刀流】」

どよめき上がる。

「しゅ、出現条件は!？」

「分かってたら、もう公開してる」

「つまり…ユニークスキルって事か!？」

そう、二刀流は俺達のと同じユニークスキルだ。

だから、この事は月夜の黒猫団と、スキルレベル向上に付き合っていた俺しか知らない。

「そういう事だったんだ…だから夜中に…」

「言っただでしょ…会ってるのはキリトだって…」

実は1度だけ、アスナ先輩に浮気を疑われた事がある。

その時は、キリトの用事に付き合っている。

キリト個人の事だから、教える事は出来ない。

その代わりに、フレンドの追跡機能で探せば分かる。

と告げて、確認してもらったのだ。

その後、キリトと口裏を合わせて、何とか乗り切ったのだ。

「…ごめん、先輩。話せなくって…」

「そういう事ならしょうがないよ…それよりごめんね？。あの時ビンタまでしちゃって…」

「それは…もうやめて欲しいかな…かなり…イタカッタ…」

それに、ネットゲーマーというか、人の妬み恨みは怖い事が、この世界でよく分かった。

だから黙っていた訳だが…。

「ま、アクティベートは俺達に任せろ」

「キリト、サチ。2人は先に戻ってて。俺達も行ってくるから」

そう言つて、風林火山と月夜の黒猫団は、上に登っていく。

「…今回の件、私達血盟騎士団は、貴方達の軍に嚴重抗議します。上層部にはそう伝えなさい。…アスナ、私は団長に報告してくるから先に帰っていいわよ。ツキノワ、アスナの事、よろしくね」



そう言つてミトも歸つていく。

「ツキノワ君、歸ろつか」

俺達もゆつくりと歸り道を歩く。

しばらく歩いて、俺は先輩の手を掴んだ。

「…先輩。もう…あんな事しないで…！先輩に何かあつたら…俺…！」

俺は今になって、体が震えてきた。

もしあの時、俺とミトが間に合わなかつたら…！

思わず、少し涙が出る。

「ツキノワ君…ごめんね。心配かけさせちゃつて…。私、しばらくギルド休む」

「は？休むつて…大丈夫なんですか!？」

また突然だな…。

「…色々、考えたい事が出来たの。それに…ツキノワ君を泣かせちゃつたし」

それは…言わないで…！／／／

でも…少し…疲れたな。

「…俺も…一緒にいたい…」

そうして、これを機に俺達は前線を退くつもりだった。

つもりだったつてというのは…

「ツキノワ君！大変な事になっちゃった……」

涙目のアスナ先輩からの話で、急展開を迎えたからだだった。

## 35話

side ツキノワ

「久しぶりだね、ツキノワ君」

「ああ、久しぶり。ヒースクリフ」

「ここは55層【グランザム】にある、血盟騎士団本部。

その会議室。

「君とこうして話すのは、アスナ君の護衛を依頼した時以来かな？」

「いや、67層の攻略会議後に、少し」

「すつとぼけやがって…本当は覚えられるだろうに。」

「そうか…あれは辛い戦いだっただ…。我々も危うく死者を出すところだった。最強ギルドなどと呼ばれていても、戦力は常にギリギリだよ。…なのに君は、我がギルドの貴重な主力メンバーを、引き抜こうとしてる訳だ」

「別にヘッドハンティングしてる訳じゃない。少しの間、休暇をくれと言ってるだけだよ。そんなにブラックか？ここは」

ハッキリ言えば、血盟騎士団の戦力なんて知らない。

それより…このところ、色んな事があつた。

正直…俺も先輩も疲れてるんだ。

だから、休ませて欲しい。

「…よかろう。ならば…剣で奪い取りたまえ。君が勝てば、君達の要望通りにしよう。ただし…君が負ければ、君には血盟騎士団に入隊してもらおう。もちろん、好待遇にしてあげよう…どうかかな？」

剣で奪い取れ…ね…。

上等だ、やってやる。

「…いい加減、ウンザリなんだよな…。【剣豪】と【神聖剣】…どっちか強いのかつて噂。

…その賭け乗ってやる」

こうして俺は、ヒースクリフとの決闘を挑む事になった。

outside

「やってくれたわね、ツキノワ」

開口一番、ミトがツキノワに対して、そう言った。

「本当だよ！もうバカバカバカ！何であんな事言うのよ!?!」

「ごめんごめん。でも…俺も無鉄砲に受けた訳じゃないですよ」

アスナからのお叱りに、流石にツキノワも焦ったように、弁明する。

「…どういう事？」

ミトが不思議そうにツキノワに聞く。

「…ごめん。言えない」

ツキノワの顔は、苦虫を噛み潰したような、何ともいえない顔だった。

その顔を見たミトは、それ以上の追求はせず、話を変えることにした。

「…ツキノワの【剣豪】も大概だけど、団長の【神聖剣】も大概よ？」

「ええ。攻防自在…特に防御力は桁違いよ。団長が黄色ゲージになったのを見た事ある隊員はいないわ」

アスナとミトの説明を聞き、深く熟考するツキノワ。

「…ま、考えても仕方ないか。やるだけやってみるしかないって！」

「あのねえ…」

「どうする気なの!?! 負けたら休むどころか、ツキノワ君まで…!」

呆れるミトと、焦るアスナ。

「それはそれでアリかも。合法的に先輩と一緒にいれる訳だし」

「つ、ツキノワ君…! / / /」

「あんた達! そんな惚気させないわよ!」

2人の反応に、ミトが呆れたようにツツコミを入れる。

「よし！行つてくる！」

そう言つて会場に歩き出すツキノワの背中を、ミトとアスナは不安そうに見る事しか出来なかった。

sideツキノワ

会場は、75層にあるコロシウム。

もの凄い人だかりと歓声に、思わず眉間に皺が寄る。

「…どういうつもりだよ」

俺は半分呆れたように、ヒースクリフを睨む。

「済まなかったな、ツキノワ君。まさか、こんな事になつてるとは、知らなかった」

よく言うよ、絶対知つてたろ。

「…まあいいや、ギヤラは貰うし」

「いや…試合後は我がギルドの一員だ。任務扱いにさせて貰おう」

そう言つてデュエル申請を出してくる。

俺はモードを選択し、構える。

既に、手には2本の刀。

カウントダウンが始まる中、俺は集中を深めていき、ヒースクリフ以外の情報をシャットアウトする。

そしてカウントがゼロになると同時に

「シッ！」

一気に詰め寄り、突きを放つ。

しかし、涼しい顔で受け止められた。

「チッ……フッ！」

そのまま、一気に連撃を叩き込む。

右袈裟、左逆袈裟2連撃、左で斬り付け、右で突く。

「ハッ！」

ヒースクリフがシールドバツシュで突き飛ばそうとするので、その勢いを利用し距離取る。

そのまま、攻勢に出るヒースクリフに構えると、突然、左腕が動き、俺は咄嗟にガードする。

その手には……盾。

(盾でも攻撃出来るのかよ……！)

俺は転がりつつ、膝で勢いを吸収して、一気に駆け出す。

その勢いを乗せて、右の刀で突きを放つも、盾で受け流される。

「まだー！」

俺は左に体を捻りながら、斬撃を飛ばす。

これも読んでいたのか、ソードスキルで相殺される。

「…素晴らしい剣技だ」

「そつちこそ…硬すぎるだろ」

そんな俺達に観客は更に盛り上がるが、ほとんど聞いてない。

「…フツ！」

俺とヒースクリフの踏み込みは同時だった。

俺の右の刀と、ヒースクリフの剣がぶつかる。

左の刀を、盾で防がれる。

ヒースクリフの剣を、左の刀で受け流す。

ヒースクリフの盾は、右の刀で受け止める。

そんな激しい攻防を繰り返す俺達。

それでも…抜けない。

俺は至近距離の斬撃や、刺突を織り交ぜているのに、通用しない。

(まだ…まだ速く…強く…上手く…)



頬を剣が掠めるが、無視して貫く。

十字型の盾の隙間を縫うように、刺突が駆け抜け、ヒースクリフの頬を切る。

その事に、動揺したヒースクリフ。

「ハッ!?!」

俺はボス戦では使わなかった技を解放する。

「偽：スター・バースト・ストリーム」…」

俺はキリトが使った「スター・バースト・ストリーム」を再現して、ぶつける。

俺は一撃事に斬撃を込めて、至近距離で放つていく。

1発1発では抜けなかったが、高速の16連撃には、耐えきれなかったか、やっと盾をこじ開けられた。

「これで…!?!」

俺は有り得ないものを見た。

先程弾いた盾を持ったヒースクリフの腕が、有り得ない速度で戻ってきたのだ。

(は?・何だよそれ…!?!)

マズいと悟った俺は、直ぐに体勢を戻そうとしたが間に合わず、目の前で隙だらけの姿を晒してしまった。

「がはあア!?!」

俺はガードが間に合わず、クリティカルヒットしてしまう。そのままHPが減っていき、半分切ったところで、勝敗は決まってしまった。

こうして負けた俺は、血盟騎士団に入る事になった。

### outside

「制服はこのままでいいよね？」

「はい、こつちの方が性能いいし。ヒー…団長から許可も貰ってます」

アスナとミトとツキノワは、控え室で今後の話し合いをしている。

ツキノワの顔は、悔しさと何か怪しんでいる曖昧な顔をしていた。

「よし！ツキノワの仕事は副団長補佐官。要は私とアスナの手伝いよ」

「基本的に私達のどつちかと常に一緒だよ」

「それは心強い。よろしくお願いします。アスナ副団長、ミト副団長」

ツキノワは茶目っ気に2人にそう言うと、2人とも微妙な顔をする。

「やめて…気持ち悪いわ」

「少し…寂しいな…」

「よしミト！表出ろ！」

「まあまあ…」

ツキノワがミトに食ってかかるので、アスナが仲裁する。

「……ごめんね。巻き込んだじゃって……」

「別にいいですよ？そろそろソロも限界かなって思っていましたし」

ツキノワは全く気にしてないのか、アッサリと言う。

「何で今までソロだったの？」

「え!?えつと……」

アスナの素朴な疑問に、急に焦り出すツキノワ。

代わりにミトが答えた。

「基本的に集団行動が苦手なのよ。何でもハッキリもの言うでしょ？それでトラブルが

絶えないのよ」

「みくすくみくす……」

ツキノワが顔を赤くしながら詰め寄るも、ミトは素知らぬ顔で口笛を吹く。

吹けてはいないが。

「相変わらず下手な口笛だな！リアルボッチ！」

「何ですって！精神的ボッチ！」

「2人とも!!」

姉弟喧嘩が勃発する前に、アスナが仲裁する。

「もう！喧嘩する前にみんなに挨拶！行くよ！」

「はー…」

sideツキノワ

「訓練？」

「そうだ、私を含む3人パーティーで、ここ55層のフィールドダンジョンを突破して、迷宮区前まで行ってもらう」

翌日、俺達を待っていたのは「ゴドフリー」というプレイヤーだ。

血盟騎士団では、フォワードの指揮を執っているプレイヤーだ。

「ちよつとゴドフリー！そんなことしなくても、ツキノワの実力は、私達が保証するわ！」

「そうよ！彼の強さは、攻略組なら誰でも知ってるわ！」

「アスナ副団長、ミト副団長。規律をないがしろにされては困りますな。それに、入団する以上、一度はフォワードの指揮を預かるこの私に実力を見せて貰わねば」

「そんな必要ないぐらいツキノワは強いわよ！」

ミトがキレながら怒鳴るが、ゴドフリーはそれを気にせず、街の西門に30分後に集合と言つて笑いながら出て行った。

「はあ……ごめんね、ツキノワ。ゴドフリーは、一度言い出したら聞かないから」  
「悪い人では無いんだけど……」

「まあ、いいよ。さっさと終わらせる」

ツキノワは、肩を回しながらストレッチをする。

「先輩、待つてて下さい。ミト、先輩をよろしく」

「……うん、分かった。待つてるよ」

「当然よ。そつちこそ気をつけなさい」

30分後、西門にカイが向かうとそこには、意外なプレイヤーがいた

「お前は……クラディール」

そこに居たのは数ヶ月前、決闘して、ボコボコにしたクラディールがいた。

「君達は何やら揉めらしいからな！ここで仲直りしておこう！」

(いや、本当に脳筋だなこのバカは)

俺はゴドフリーを呆れた目で見ることが、それには全く気付いていない。

その時、クラディールが、頭を下げてきた。

「……あの時はご迷惑をおかけしました。二度と無礼な真似はしませんので……」

「あ、ああ……。俺こそ煽りすぎた……。ごめんなさい」

ペーリと頭を下げ、ボソボソと謝罪するクラディールに、驚きつつ、改めて俺も謝罪

する。

あの態度から一変、ここままでさせるなんて、一体何があったのやら。

「よし、これで一件落着だなあ!!」

ゴドフリーが笑いながら、俺とクラディールの背中を叩いた。

(どこがだよ)

同じ事を思ったのは、きっと気のせいだ。

「ふむ！噂以上の腕前だ！素晴らしい！」

「うるせえ。お前も働けよ」

何もしてないくせに…偉そうに。

それに、進みが遅すぎる。

1人ならとづくに着いてる時間でも、やっとな半分だ。

「よし…ここで休憩にする！」

やっとな休憩か…。

コイツらのペースに合わせすぎて、逆に疲れた。

俺はストレージから、自分で用意した昼飯と果実水を取り出したのと同時に、ゴドフリーから何か包みを渡させる。

「…これは？」

「我々が用意した昼飯だ。こちらを食べたまえ」

「はあ？何言ってるんだこいつ？」

「知らない。俺は自分で用意した」

「折角クラデールが用意したのだぞ。食べないのか？」

ウゼエ。

ただでさえ、イライラしてるのに勘弁してくれ。

「知るかよ、誰が用意したかなんて。店売りよりも、自分で作ったやつの方が美味しい。それとも何か？飯まで規律で決まってるのか？ああ？」

俺が殺気を出しながら凄むと、ゴドフリーが、たじろいだ。

俺はそれを鼻で笑ってから、渡してきた分を押し付けて、自分のを食べ出す。

その味は…酷く味気なく、美味しくなかった。

「はあ…」

ため息をついた途端ふと、クラデールと目が合った。

その目は…憎らしいと言わんばかりの目だった。

「グッ…!?これは…!?」

突然、ゴドフリーが倒れ伏し、動けなくなる。

「ゴドフリー!?大丈夫か!？」

パーティメンバーのHPバーを確認すると、そこには

(麻痺!?食べ物に仕込まれてたのか!?)

これを用意した奴は…

「何のつもりだ…クラディール」

「ヒ…ヒヤハハ…ヒヤハハハハハハハハ!!」

突然、イカれた笑い声を上げながら、ゴドフリーに向けて走り出す。

結晶はここに来る前に、ゴドフリーに全部没収されている。

チツ…ここからじゃ攻撃も間に合わない!

「速く結晶を使え!」

「させるかよオオオ!!」

しかし、それより速くクラディールが、ポーチごとゴドフリーを貫く。

「ガア!?く、クラディール…これは…何の…くん…れん…!？」

「ゴドフリーさんよお!バカだバカだとは思ってたが、ここまで脳筋だったのはなあ!!」

そのまま何度も突き刺して…ゴドフリーを殺した。

俺は余りにも突然の事で、固まっていた。

「いいか?!俺達はなあ!荒野でえ!オレンジプレイヤー共に襲われえ!抗戦するもお



！俺以外はみんな戦死しましたあ!! っていうシナリオだったのによお…何でてめえはピンピンしてんだよお!?! ツキノワアアアアア!!」

煩いな、喚くなよ。

「…見え透いてんだよ、バカめ。テメエにはラフコフの方がお似合いだぜ」  
俺は鼻で笑いながら、ゆっくりと構える。

「ハッ！いい勘してんじゃねえか！」

そう言いながら、腕を見せつけてくる。

その腕には…

「【笑う棺桶（ラフィン・コフィン）】のエンブレム…!?!お前が内通者か!?!」

あの作戦が漏れた理由がわかったと思っただが

「ああ…違えなく。俺が入ったのはあの後だ。精神的につてやつだけだな」

（違うのか…?）

どうやら、嘘はついてないらしい。

コイツと内通者は無関係…って事か？

「それで？一体なんの目的だよ？」

「目的い？それはなあ…あの女どもだよ」

「…ああ？」

どこの誰の事かは、すぐに分かった。

「…今すぐ訂正して失せろ」

「ああ？何言ってるんだよ？安心しろよ…。お前の大切な副団長様達は、俺がしつかり可愛がってやるからおお…」

…上等だ、コイツは…殺す。

「…人の大切なものに、手を出すんだ。死ぬ覚悟は…出来てんだよな」

「はっ！殺れるもんな殺ってみろよ!!剣豪オオ!!」

そう叫びながら、振りかぶってくるクラディールの腕を、切り落とす。

そのまま胴を薙ぎ、胸を貫き、足を切り落とした。

「ギヤアアアアアアアアアア!!」

「喚くな、痛みはないんだ」

俺はダルマになったそいつの髪を持って、岩場に引き摺りあげる。

そのまま仰向けにして首を固定し、剣を振り上げる。

「ま、待ってくれ…!?頼む…!?命だけは…!?」

「命乞いはあの世でやってろ」

問答無用、言外にそう言うと、俺は剣を振り下ろした。

「ダメだ!!」

その剣は…キリトの剣に阻まれてきた。

「ツキノワ！落ち着きなさい！」

「ダメ!!戻ってきて!!ツキノワ君!!!」

気付けば、後ろからミトに腕を捕まれ、アスナ先輩に抱きつかれていた。

「…どうしてここに？」

俺は淡々と、疑問をぶつける。

「…フレンドリストのゴドフリーの名前が、黒くなったのよ。そこであんたの場所を探して…ここにだってわかったのよ」

「俺はここでしか採れない素材を取りに来たんだ」

「…前も似たような理由だったよな、キリトは」

俺はキリトに溜息をつきながら、ゆっくりと睨みつけた。

「どけ。そして離せ。コイツはここで殺さねえと、ダメだ」

「ダメ。離さない」

「ダメだ。どかない」

先輩とキリトが、俺の言葉を聞かない。

何も言わないが、ミトも同様だろう。

「…どけよ。…離せよ…。じゃねえと！コイツは！先輩と！姉貴を殺す！そんな事させ

ねえ!! だからここで!!」

「殺したらコイツと一緒にやない!!!」

先輩の鋭い悲鳴が言葉を遮る。

「…ツキノワ君が、私達の為なのは知ってるよ。でもダメ。そんな事しちやダメよ…」

「…俺は…あの時、お前に余計な人を斬らせた。俺が躊躇ったから、お前がアイツを斬った。今度はそんな事させない。お前に…人は斬らせない」

「…弟がバカしようとしてるなら、それを止めるのが姉つてもものよ。だから…戻ってきてなさい」

先輩の祈りが、キリトの覚悟が、姉貴の優しさが…。

俺をゆつくりと、人の道に連れ戻してくれた。

「…みんな…」

「大丈夫…大丈夫だよ…」

優しくアスナ先輩が俺を抱きしめてくれる。

その腕の中で…俺は…泣き続けた。

outside

その後クラデールは、キリト達の手によって監獄行きになる予定だったが、それよ

り速く、欠損ダメージによるHP減少により、死んだ。

結果的にツキノワが殺した訳だが、彼自身がこっそりと持っていた録音結晶により、彼の無罪が証明され、ツキノワは退団する事になった。

更には、アスナとミトの一時退団も認められた。

本当なら、ミトは正式に退団するつもりだったが、ヒースクリフからのお願いにより、貸1という事で、一時退団に留まった。

「…先輩。少しいいですか？」

「うん？どうしたの？」

同棲している部屋で、ツキノワはある提案をアスナにしていた。

「実は…前から目をつけてる家があつて…良かったら、内見してみませんか？」

「内見はいいけど…何処なの？」

「10層主街区の端っこ」

「10層!？」

アスナは想定より下層の話で驚いた。

「…ダメですか？」

（ウツ…その目は反則…!!／／／）

普段お願い事や、ワガママを言わないツキノワ。

自身がソファアールに座り、ツキノワがその足元にいるので、必然的に上目遣いになっているのだ。

そんな彼からのお願いととなると、アスナとしては喜んで、ゴーサインを出してしまうのだ。

「いいよ！行こっか！」

「！うん！行きましよう！」

意気揚々と自室に向かうツキノワの背中を眺めながら、優しく笑うアスナだった。

「ここです！」

「うわあ！綺麗な日本家屋ね！」

そこは少し小さいが、2人には少々広すぎる、平屋の日本家屋だった。

庭には、大きな桜の木があり、それが満開となつて咲き誇っているのだ。

「この桜はシステム上、何時までも、咲いてるらしいですよ」

「へえ…立派ねえ…」

思わず唾然とするほど大きいこの桜は、システムの保護を受けている。

お値段もこの規模にしては、かなり安い。

普段あまり使わない自分達なら、問題無く払えるし、家具も今のやつを持ってくればいい。

「先輩……」

「……引越しちやおつか！」

「……はい!!!」

こうして、ツキノワとアスナは、引越しをする事になったのだった。

## 36話

sideツキノワ

引越してから暫く、色んな人が来た。

キリト達月夜の黒猫団を始め、エギルさん達、クライン達風林火山、リズやしりかなど。

そんな中、やっとキリトとサチが付き合う事になったらしい。

「長すぎでしたね…」

「本当に鈍いんだから…」

その話を聞いた俺達は、祝福と共に、キリトへのため息を送った。

ちなみに2人は今、22層の湖畔にあるログハウスで、暮らしているらしく、攻略もお休み中だとか。

「後はミトだけだね…」

「ですね…本当に今がチャンスだぞ…！」

俺達は密かにミトを、応援していた。

ゆつたりとした日常を過ごす事、約12日、それは突然だった。



「…ん？キリト？」

キリトからのメッセージが来た。

「キリト君？どうしたの？」

「今すぐ来てくれって…？なんだろう？」

「行ってみよっか」

「ですね」

俺達はすぐに用意をして、22層のログハウスへ急いだ。

「キリトー！来たぞー！」

「しっ！…入ってくれ」

ノックをして呼ぶと、何故か静かにしろされる。

言われるがままに奥に行くと、そこには

「…女の子？」

「…SAOって子作り出来たっけ？」

「ち、違う！／／／／」

サチに膝枕された、黒髪の女の子がそこにいた。

「静かにしろよ。冗談だ…それで？」

「実は…」

何でも湖畔を散歩中に会ったらしく、記憶喪失なんだとか。

名前だけは名乗れたらしく、「ユイ」というらしい。

自分達のことをパパとママと呼び、懐いてる。

そして1番不可解なのが、カーソルが無い事と、彼女のメニュー画面に【MHCP—01】と出てきたらしい。

「【MHCP—01】か…」

「ああ、それがよく分からいんだ…」

全く心当たりが無い。

何かの商品番号みたいだが…？

「…ねえ、はじまりの街に行ってみない？あそこって確か、児童養護施設みたいな場所あるよね」

「アスナ先輩ナイスです！そこに行きましょう」

1つ問題があるとするとするなら、軍の存在だが、まあいいか。

邪魔するなら蹴散らせばいい。

「…んん？」

「あ、起きちゃった？おはよう、ユイ」

サチの声が聞こえてきた。

「どうやらユイが起きたらしい。」

「おはよう、ユイ」

「おはようございませす…：パパ…：ママ…」

「…本当にパパとママなのね…」

「です…：ビツクリです」

俺達はその様子をヒソヒソと話していると、こっちに気付いたのか、不思議そうに俺達を見ている。

「ああ、ユイ。紹介するよ。俺達の友達のツキノワと、アスナだ」

「ツキノワだ。よろしくな、ユイ」

「初めまして、アスナです。よろしくね、ユイちゃん」

俺達は腰かがめて、出来るだけ目線を合わせてあげる。

こう見ると…：2人によく似てるな。

「つゆきによわ…：あしゆな…？」

ああ、言いにくそうだな…：特に俺の名前。

なんか猫みたいだし…。

「フフ、好きなように呼んでくれていいよ？」

その様子を可愛らしく感じたのか、アスナ先輩が嬉しそうに頭を撫でる。

「…お兄ちゃん？お姉ちゃん？」

あ、今キユンって来た。

これは…俺達にかなり効くぞ…！

「…！うん！お姉ちゃんだよ〜！」

「アスナ先輩、落ち着いて。離してあげて」

先輩もキユンって来たのか、それとも末っ子だから姉呼びされて嬉しかったのか、思いつきり抱きしめて、よしよししてるし。

俺の声にハツとしたのか、ゆっくり離すが、その勢いにすっかりビックリしたのか、先輩から離れて、俺の後ろに隠れてしまった。

「…ユイ。お姉ちゃんは怖い人じゃないからね？お兄ちゃんの1番大切な人なんだ」

「…？お兄ちゃんの…ママ？」

そう言われると、マザコンに聞こえるな。

「えつと…ユイのパパとママの関係って言って分かるかな…？」

そう言って2人を見ると、ベツトに腰掛け、ユイを優しく見ている。

何となく察したのだろう、黙って頷く。

「いい子だ。俺の事はお兄ちゃんでいいからな？よろしくね、ユイ。ほら先輩、いつまでしよげてんの？」

「うう…ユイちゃんに嫌われた…」

「はあ…この人は何してるのやら…？」

「…ユイ。お姉ちゃんの事、許してあげて？」

「そういうと静かに近づいて、アスナ先輩に抱きつくユイ。」

「…ごめんなさい。お姉ちゃん」

「…！ユイちゃん！」

先輩は嬉しさのあまり抱きしめるが、今回は暴走してなかった。

「とりあえず、明日1層に行こう」

「そうだね。2人共ごめんね？巻き込んで」

「ま、乗リかかった船つてことで。先輩！そろそろ帰りますよ！」

「そうして俺達は明日、1層に行く事にしたのだった。」

次の日、1層に来た俺達だったが、あまりにも閑散としていた。

「…妙だな」

「ああ、ここにはまだ大勢のプレイヤーが、いるはず」

俺とキリトが、あまりの静けさに首を捻っていると

「子供達を返してください!!!」

突然、悲鳴じみた声が響いた。

「「「！」」」

俺達は慌ててそっちに駆けつけると、軍の連中が、子供に寄ってたかつて何かしていた。

「あんたら相当上納金、滞納してたでしょ。こいつらの持ってた金だけじゃ足りないね」

「だから、こいつらの武器も取り上げさせてもらった」

……どこまで腐ってやがんだ、コイツら。

「…先輩」

「ええ、キリト君とサチはユイちゃんを」

俺と先輩は、一気に駆け出して、集団をまとめて飛び越える。

「もう大丈夫よ。武器を戻して」

後ろの子供達は先輩に任せよう。

俺は目の前のバカ共を、シバく。

「おいおいおい、何なんだお前ら!?!」

「我々軍の任務を妨害する気か!?!」

チツ…雑魚共が、よく吠える。

「…はあ」

俺はため息を一つつくと

「シッ！」

全速の抜刀術で切り払う。

「ギャア!？」

圏内戦闘特有のノックバックが、そいつを吹っ飛ばす。

「…安心しろ、圏内戦闘は死なない。ノックバックが発生するぐらいだ。だから…地獄の恐怖を教えてやるよ」

そのまま俺は、全員を細々に切り刻んだ。

もちろん比喩だが、あいつらは本気で死ぬほど怖かっただろうな。

まあ、知った事じゃないけど。

そのまま俺達は施設まで来たのだが、手掛かりはなく。

それどころか、何故か軍の「ユリエール」から持ち込まれた、面倒事を片付けていた。

「なんでこんな事に…」

「いいから！ほら来たぞ！」

ここは黒鉄宮の奥にあった、ダンジョンだ。

そこに嵌められた「シンカー」というプレイヤーを助けに来たのだ。

そのダンジョンで待ち受けていたのが、「スカベンジ・トートの肉」というカエルの大軍だ。まあ、相当弱い。

一撃で倒せるぐらいなのだが…

「とにかくキモイ！あとうるさい！」

俺は叫びながら、キリトと共に何とか殲滅したのだった。

「何だよこの『スカベンジ・トートの肉』って…カエルの足じゃんか。気持ち悪い。やるよ」

「いいの!?ありがとつ！」

「おう、カエルの肉押し付けて喜ばれるとは、思わなかったぞ」

そう言つて俺は全部キリトにあげた。

あ、キリトとサチがアホな事してる。

「笑った！お姉ちゃん、初めて笑った！」

よく見ると、ユリエールがその光景を見て笑っていた。

それを見てもっと嬉しそうに笑っているユイ。

俺達はそんな2人を見ながら、先に進んだ。

程なくして、シンカーがいると思しき場所に着いたのだが

「シンカー！」



「ユリエール！来ちゃダメだー!!!」

来ちゃダメって何が…!?

何だ、何が来る!?

「クソ!!」

俺とキリトが駆け出し、俺がユリエールを引つ張り寄せ、キリトが鎌の一撃をいなす。

「ツ!?サチ！ユリエールさんとユイちゃんを！」

「う、うん！さあこつち！」

すぐにアスナ先輩も駆けつける。

そこにいるのは、大型の鎌を持った黒衣の死神。

識別スキルで、ステータスが見えない。

おそらくは90層クラスの化け物。

そいつの名は【The Fatal Scythe】。

outside

ツキノワとキリトはすぐに決断した。

叶わない…逃げる。

「アスナ先輩！先に転移結晶で、皆を連れて逃げて！」

「そんな!?ツキノワ君達は!？」

「俺達は時間を稼ぐ!!速く!!」

アスナは一瞬迷った後、逃げるのではなく、ツキノワ達の元へ向かった。

大振りの一撃を放つモンスターに、3人がかりで、防いだが

「ガアアアアアア!!」

「キアアアアア!!」

攻略組みつての実力者3人が、まとめて吹き飛ばされる。

そのHPは、半分近く減らされていた。

「嘘…!?!」

「クッソ…!」

「マジ…かよ…!?!」

「いよいよ絶体絶命かと思ったその時、

「ユイ!ダメ!」

「お2人共!?!行つては!?!」

ユイが突然、彼らの前に立つ。

「ユイ…ちゃん…!?!」

「馬鹿野郎!?!早く戻つ」

「大丈夫だよ、パパ。ママ。お兄ちゃん。お姉ちゃん」

そう言って振り下ろされた鎌が当たった瞬間、表示される【IMMORTAL OB  
JECT】の文字。

「破壊不能…オブリジェクトだど？」

そのままユイは、巨大な炎の剣を生み出して、【The Fatal Scythe】  
を、鎌ごと両断してみせた。

「『…』」

あまりの光景に、誰も何も言えなくなる。

「パパ、ママ…全部思い出したよ」

そんなユイは、今までにないくらいしっかりとっていて。

その顔は、とても悲しそうな笑顔をしていた。

## 37話

outside

地下迷宮の安全地帯は真つ白な部屋で、真ん中に黒い石棺のようなものが置いてあるだけだった。

「ソードアート・オンラインというこの世界は、ひとつの巨大なシステムによって制御されています」

くろい石棺の前で、ユイは今までの子供っぽい喋りが嘘のように、流暢に話し出した。「システム名は「カーディナル」。それがこの世界のバランスを、自らの判断に基づいて制御しているのです。カーディナルはもともと、人間のメンテナンスを必要としない存在として設計されました、二つのコアプログラムです。互いにエラー修正を行い、更に無数の下位プログラム群によって世界の全てを調整する。モンスターやNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカーディナル指揮下のプログラム群に操作されています。…しかし、どうしても一つだけ、人間の手に委ねなければならないものがありました。プレイヤーの精神性に由来するトラブル、それだけは同じ人間でないと解決できない…。そのために、数十人規模のスタッフが用意される、はずでした」

ユイがそこまで語り、キリトが口を開く。

「ユイ……つまり君は、GM……ゲームマスターなのか？アーガスの、スタッフ……？」  
キリトの質問に、ユイは静かに首を横に振って答える。

「カーディナルの開発者達は、プレイヤーのケアすらもシステムに委ねようと、あるプログラムを試作したのです。ナーヴギアの特性を利用してプレイヤーの感情を詳細にモニタリングし、問題を抱えたプレイヤーのもとを訪れて話を聞く……」

ユイはそこで一拍置き、自身の正体を明かした。

「[Mental Health Care Program]…略して[MHCP]試作1号、コードネーム[Yui]。それが私です」

サチが震える声で、尋ねる。

「プログラム……？AIって事なの……？」

ユイは悲しそうな笑顔のまま頷いた。

「プレイヤーに違和感を与えないように、私には感情を模倣する機能が与えられています。…偽物なんです、全部……この涙も……。ごめんなさい、サチさん……」

「でも……でも、記憶がなかったのは……？AIにそんなこと起きるの……？」

次に口を開いたのは、アスナだった。

「二年前。正式サービスが始まった日……何が起きたのかは私にも詳しくは解らないので

すが、カーディナルが、予定にない命令をわたしに下したのです。それが、プレイヤーに対する一切の干渉禁止。具体的な接触が許されない状況で、私はプレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけを続けました。状態は：最悪と言っていいものでした…。ほとんど全てのプレイヤーは恐怖、絶望、怒りといった負の感情に常時支配され、時には狂気に陥る人すらいました。私はそんな人達の心をずっと見続けてきました。本来であればすぐにでもそのプレイヤーのもとに赴き、話を聞き、問題を解決しなくてはならない：しかしプレイヤーにこちらから接触することはできない…。義務だけがあり権利のない矛盾した状況のなか、わたしは徐々にエラーを蓄積させ、崩壊していききました…」

ユイは声を震わせ語り、キリトとサチはおろか、ツキノワとアスナも何も言えずに聞き続ける。

「でも、ある日、いつものようにモニターしていると、他のプレイヤーとは大きく異なる、メンタルパラメーターを持つ数人のプレイヤーに気付きました。喜び：安らぎ：でもそれだけじゃない…。この感情はなんだろう、そう思って私はその人達のモニターを続けました。会話や行動に触れるたび、私の中に不思議な欲求が生まれました。そんなルーチンはなかったはずなのですが：その人達の傍に行きたい：私と話をしてほしい…。少しでも近くに居たくて、私は毎日、2人の暮らすプレイヤーホームから一番近い

システムコンソールで実体化し、彷徨いました。その頃にはもう私はかなり壊れてしまっていたのだと思います」

その2人がキリトとサチだったという事だ。

「森の中で、2人の姿を見た時……すごく、嬉しかった。……おかしいですよ、そんなこと、思えるはずなのに……。わたし……ただの、プログラムの……」

とうとう涙を溢れ、ユイは口を噤んだ。

その姿に、キリトとサチだけでなく、ツキノワとアスナも思うところがあった。

そんな中、キリトが優しくユイを抱きしめる。

「ユイはもうシステムに操られるだけのプログラムのじゃない。だから、自分の望みを言葉にできるはずだよ。ユイの望みはなんだい？」

「……私は……私は……ずっと一緒に居たいです。パパと……ママと……お兄ちゃんと……お姉ちゃんと……ずっとここに居たいです……!」

「ずっと、一緒だよ、ユイ」

サチは泣きながらユイを抱きしめる。

「ああ。ユイは俺達の子供だ。一緒に帰ろう。そして、あの家でいつまでも暮らそう……」  
そんなキリトの言葉に、小さく首を振るユイ。

「……もう……遅いんです……」

「遅い? どういう事だ?」

ツキノワが尋ねると、ユイは後ろにある黒い石棺を見る。

「これはただのオブジェクトじゃなくて…GMアカウンントに緊急アクセスする為の、システムコンソールなんです。さつきモンスター倒すのに、これからデータをダウンロードしてしまったので、自然とカーディナルに、私というバグが認識されました。カーディナルシステムによって…私は削除されてしまうのかと」

それを証明するかのように、徐々にユイの身体が透け出す。

「嘘…だろ…!?!」

「そんな…!?!」

「いや! そんなの嫌だよ!!」

「何とか…何とかならないのか…!?!」

「パパ…ママ…お兄ちゃん…お姉ちゃん…お別れです」

それぞれが衝撃を受ける中、どんどんと消えていくユイ。

そんなユイが、別れの言葉を口にす。

その言葉を聞いたサチが、ユイを抱きしめ直す。

「ダメ! ダメだよ! これからなんだよ!?! これから皆で仲良く暮らすんだよ…!」

それでも止まることはなく。



ユイは、最後まで笑顔をかべたまま、消えてしまった。

「いやああああああ!!」

「ユイちゃん……!」

泣き叫ぶサチと、崩れ落ちるアスナ。

ツキノワはアスナを支えながら、悔しさに唇を噛み締めていた。

しかしただ一人、キリトだけは諦めていなかった。

「……ふざけるなよ……!」

「……キリト?」

「なんでもお前の思い通りになると思うなよ!カーディナル!」

キリトが突然、コンソールを操作し出す。

必死に何事か操作して、それを終わらせた直後、弾き飛ばされる。

「グハッ!」

「キリト!?!」

慌ててツキノワが支える。

「大丈夫かよ!?!」

「ああ……。それに、間に合ったよ」

キリトが取り出したのは、涙の形をした宝石だ。

「GMアカウントが使えるうちに、ユイのデータを、俺のナーヴギアに移したんだ。これは…ユイの心だ」

「ユイ…!」

それを見たサチは、涙を流しながら、それを強くにぎりしめるのだった。

sideツキノワ

俺達は、ダンジョンを出て、それぞれのホームに帰った。

アスナ先輩と2人で何を言う訳でもなく、ただじつとしていた。

その時、ふとメッセージが飛んできた。

「…ミトからだ」

「…団長からね」

その内容は…

「て、偵察隊が…全滅…!?!」

「死者10名ですって…!?!」

俺達の休暇は終わりを告げた。

次の日、それぞれ装備を整えて、転移門に向かう。

「転移!」  
「グランザム!」

俺達の頭の中は、3つ目のクォーターポイントでいっぱいだった。

## 38話

side ツキノワ

「偵察隊全滅つて、どういうことですか」

俺はグランザムについて早々、ヒースクリフに尋ねる。

「…来るボス戦に備え、我々は5ギルド合同で20名の偵察隊を組んだ。しかし最初の10名が入り、ボスが出現した途端、扉が閉まってしまったのだ。そして5分後、再び開いた時には、何も無かったのだよ」

「【生命の碑】を確認したけど、10名全員の死亡が確認されたわ…」

結晶無効化エリアか…！

「これを理由に攻略を止めることは出来ない。故に我々は、出来る限りの大隊を組んで当たる他ない」

「ツキノワ、アスナ…ごめんなさい…！貴方達の力を貸して…！」

「協力はします。…でも、俺はパーティより、アスナ先輩とミトが大事です。2人に何かあるなら、俺は2人を優先します」

これだけは譲れない。

何があつても、2人は……!

「…フツ。なにか守るものを持つ者は強い。君の実力に期待する」  
そう笑うヒースクリフは、何故か不敵な笑みを浮かべていた。  
俺達は一礼して、会議室出た。

「…」

「あと3時間、何しようか?」

アスナ先輩の言葉に返事をする余裕も、今の俺には無い。  
頭を埋め尽くすのは、悪い予感と最悪の光景。

もし…もし…もし…!」

「…大丈夫だよ」

不意に頬を手で挟まれ、強引に顔を上げさせられる。

目の前には強く、そして優しいアスナ先輩の笑顔。

「…先輩…」

「勝てる…勝てるよ。私達は勝てる。だから…顔を上げて?」

「…先輩、俺達のリアルの体って、どうなってるのかな?」

俺はある時、ふと思ひ出したのだ。

ゲームが始まって数週間がたった頃、突然回線切断されたのだ。

それは全プレイヤーがそうだったらしく、俺がなってから暫くして、キリトがそうなった。

ちなみにこの時、俺とキリトは狩りに出ていて、戦ってる最中に突然落ちたのだ。

キリトの騒ぎっぷりはすごく、また俺の苦労もすごかった。

それはいいとして…

「多分俺達は、病院に搬送されてるんだと思います。そして今は、病院のベットの上だと  
思います」

「…まさか…」

先輩も何が言いたいか気づいたらしい。

「点滴のチューブだらけの俺達だろうけど、そう長くは持たないはず」

つまり、クリアしようがしまいが、タイムリミットは存在するって事だ。

俺は思わず先輩に泣きつく。

「嫌だよ…先輩…！俺、先輩とずっと一緒にいたい！向こうでも、本当にデートしたい！  
結婚したい！最期の時まで、一緒にいたいよ…！」

みつともないし、女々しいにも程がある。

でも…これは俺の本心。

「そうだね。私もそう。逃げたいって気持ちがある。2人であの桜の綺麗な家で、ずっ

と一緒に暮らしたい。でもね……うん、だからこそ、戦わないといけないの。戦わないと、何も未来は掴めないの。だからお願い……立って?」

……そうだ、ここで泣いても何も変わらない。

怖くても、前に進むしかないんだ……!

「……ありがとう、先輩。俺は、戦います。先輩、一緒に来てくれますか?」

「うん、私がツキノワ君を守るよ!」

「……だったら俺は、先輩を守ります」

俺達は決意を新たに、集合場所である転移門広場に向かったのだった。

outside

ツキノワ達がついて早々、ある人物達が話しかけてきた。

「ツキノワ、アスナ」

「キリト。黒猫団のみんなも」

キリトが所属する、月夜の黒猫団の面々だ。

その中には、あまり前線に出てこないサチの姿もあり、アスナが不思議そうにする。

「サチも参加なの?」

「ううん。私は見送り。……私じゃ、皆の足を引っ張るだけだし。2人もこれ、使って」

サチが差し出したのは、サチが作ったポーションの数々だった。

店売りより性能がいいので、重宝する。

「ありがとう、有難く使うよ」

「ええ、サチだつて形は違えど、私達と一緒に戦つてくれるのよ。だから、私達に任せ  
て」

2人の言葉に嬉しそうに笑うサチ。

そんな彼らに、再び声がかかる。

「おーおー！若者達は仲良いな！」

「おう、お前ら。今回は俺も参加だ。よろしく頼む」

「クラインさんに、風林火山の皆さんも」

「エギルさんに、ツーハンデット・ビルダーズの皆さんも」

新たな頼もしい援軍に、つい笑みを浮かべるツキノワ。

そんなツキノワを見て

「ツキノワ、話がある」

「?はい?」

クラインはツキノワを少し外れに連れてき、真面目に話を切り出した。

「…俺、ミトに告白された」

「…はあ!?!やつと!?!」



ツキノワが目を見開く。

苦節約1年、ミトがやっと勇気を出したのだ。

「それで…返事を待ってもらってる状況だ」

「は？何それ。切り刻みますよ」

あまりの発言に、ドスの効いた声で脅すツキノワ。

「怖いわ…：そこで何だが、俺はミトの告白を受けようと思う。まずはそのことを身内のお前に、報告しようかと思ってな」

やっと訪れたミトの春の訪れに、ツキノワは嬉しそうに笑う。

そうこうしてるうちに、ヒースクリフが回廊結晶を取りだし、ボス部屋前まで飛ぶ。

皆が来たのを確認して

「諸君、それでは行こう。解放の日の為に！」

「「「「「おとおおおお!!」」」」」

side ツキノワ

皆が雄叫びをあげる中、俺はただそれを聞いているだけだった。

必ず生き残る、そう言い聞かせながら。

「…ツキノワ君。大丈夫だよ」

先輩が優しく、俺の手を握ってくれる。

その温かさが、俺の焦りを溶かしてくれる気がした。

「ツキノワ」

近づいてくるのはミトだ。

少しだけ笑ったミトは

「いつも通りにやるわよ。ツキノワ」

「…ああ、やろう。ミト」

これまでの会議の時みたいな感じで、俺の背中を叩く。

これだから…姉には叶わないんだ。

「そろそろ開くわね。2人共、今回も生き残るわよ」

そう言い残して立ち去るミトを見送り、深呼吸を1つ。

もう大丈夫、やれる。

決意を胸に、俺達は一斉にボス部屋に乗り込む。

中は真っ暗で、何もいない。

全神経を集中させ、周囲を見渡す。

右も左もどこにも…いや、気配はする。

「…ッ！上!!」

俺と先輩が同時に声を上げ、上を見上げる。

その時、真つ赤に光る目と視線が合う。

そのままそいつは落ちてきて、部屋に明かりが灯される。

全身骸骨のムカデのようなモンスターを認識した途端、ボス部屋の扉が閉まる。

「全隊！距離を取れ!!」

ヒースクリフの冷静な指示に、全員が一斉に動き出す。

しかし逃げ遅れたタンク隊の奴らが2人、もたついている。

「おい！急げー！」

キリトの悲鳴じみた声が響くも間に合わず、ボスの攻撃を受けてしまい、2人が吹っ

飛ばされる。

「クソー！」

「間に合えー！」

俺とキリトが慌てて2人を受け止めようと身構えて、目の前に来た瞬間、2人はポリ

ゴン状に碎け散った。

「……は？」

「嘘……だろ？」

誰も何も言えなかった。

いくら無防備だったとはいえ、攻略組のタンク隊が一撃で死んだ。

「これほどのボスカよ……！」

かつてない強いボスの登場に、俺は震える手を強引に押さえつけるしか出来なかった。

そんな75層…3つ目のクォーターポイントのボスの名は、**「The Skull Reaper」**。

## 39話

sideツキノワ

一撃でタンク隊が殺された。

この事実が、俺達の戦闘心をへし折るには、十分すぎた。

「「「「「「「ううわああああああ!!」「「「「「「「」

一気に恐慌状態に陥った攻略組は、出口に殺到するも、当然のように扉はビクともしない。

そんな中、ボスはさらなる追撃をしかけてくるが

「むん!」

ヒースクリフの堅い防御が、それをせきとめる。

しかしその合間を縫うように、冗談のような速さで、また1人プレイヤーが殺される。

「クソ……!」

「これじゃまともに、近付くことすら出来ねえぞ!」

「やらせない!ハア!!」

俺は直ぐに駆け出して、ボスの鎌を打撃で受け止める。

最大火力を誇る一撃だが、それでも止めきれない。

「く…そお…!!」

やばい…!? もう一本が来る…!

「ぬん!」

片方はヒースクリフが抑えてくれて

「ヤアアア!!」

俺が抑えてる方は、アスナ先輩が弾いてくれる。

「ツキノワ君! 私達2人ならいける!!」

「…よし! 俺達とヒースクリフが鎌を抑える! 皆はその隙に攻撃を!!」

「ミト君、全体指揮を頼むよ」

「「「「「「了解!!」」」」」」」

こうして始まったボス戦は、今までで一番苦しい戦いだった。

どこかで聴こえる悲鳴と、ポリゴンの碎ける音。

やつが何かやる度に、それらが響き渡る。

「ハアアアアアアアアアアア!!」

ミトの鎌か、引き裂く。

「ゼアアアアアアアアアアア!!!」

キリトの二刀流が、切り刻む。

「オオオオオオオオオオオ!!!」

クラインの刀が、切り裂く。

「オラアアアアアアアア!!!」

エギルさんの斧が、叩き壊す。

「ぬん!」

ヒースクリフの盾が、防ぎ切る。

「ヤアアアアアアアア!!!」

俺と先輩の剣が、弾き飛ばす。

それを何分、何時間かけただろうか。

やつと残り数ドット。

「全軍!!突撃!!!」

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

こうして、やつとの思いで、俺達攻略組はボスを撃破したのだった。

outside

「はあ...はあ...はあ...」

何とかボスを撃破してツキノワ達だが、その顔に喜びはなく、あるのは疲労感と絶望感だ。

「…何人死んだ？」

クラインのその問いに、キリトが数を数える。

「…14人」

「マジ…かよ…!?!」

「そんな…!?!」

あまりの衝撃に、エギルが項垂れ、ミトが口を抑えて涙を飲む。

「…私が…もつと上手くやってれば…!?!」

「ミト。ミトのせいじゃない」

「そうよ、ミト。ミトはちゃんと成し遂げたわ。きっとこれは、誰がやっても…ある程度の犠牲が出た。そういう戦いよ」

キリトとアスナがミトを励ます中、ツキノワはある人物を見続けていた。

ヒースクリフだ。

彼だけは、堂々と立ち、攻略組を見下ろしていた。

(ヒースクリフの伝説。彼が緑ゲージより下に落ちたことが無い。…あれは一体…?)  
確かにそうなのだ。



ツキノワは1度も彼が、緑ゲージ以外になるのを見たことが無い。

そしてその目はまるで、何かを観察する科学者のような目をしていた。

(…まさか…)

彼はそつと、閉まっていなかった刀を握り、深呼吸を1つする。

「ツキノワ君？」

そして、一気に加速する。

「シッ！」

「ツ!? なっ!？」

刺突を放ち、ヒースクリフの視界を奪う。

その隙に背後に回り込み、

「ハアアアア!!!」

気合一閃。

腹を横一文字に切り捨てた…はずだった。

「ツキノワ!?! 何して…ええ?」

「ツキノワ君!?! どうし…て?」

ミトとアスナが慌てて駆け寄った先に見たのは、ヒースクリフを守る、紫の障壁。

それが示すのは…「IMMORTAL OBJECT」。



「…チツ。最強のプレイヤーが一転、最悪のラスボスカ。随分と悪趣味だな」

「そうかい？悪く無いシナリオだと思うが…。参考までに、なぜ気付いたか教えてくれないかな」

「…デュエルの時、最後だけあまりにも速すぎたよ、あんた」

俺はあのデュエルの最後を、思い出す。

確かにあの時、俺はガードを抜いたと確信した。

しかし現実とは違った。

何故かあの瞬間だけ、異様に戻りが速かったのだ。

その瞬間、俺の疑念はほぼ確信に変わった。

「フツ、やはりか。あれは失策だった。あまりの勢いについて、システムのオーバーアシストを使ってしまったよ。しかし…この展開は予想していなかったな」

「何？」

ヒースクリフはキリトを見る。

「私の前に立つのは、キリト君。彼だと思っていたのだよ。【二刀流】スキルは、プレイヤーの中でも最速の反応速度を持つものに、与えられる。そして、【二刀流】スキルの使い手こそ、魔王を倒す勇者のつもりでいたのだ。しかし…」

そこでヒースクリフが俺を見る。

「【剣豪】スキル。私が開発段階で取りやめたスキルを、何を思ったかカーディナルシステムが、サルベージして、取り込んでしまった。そしてそれが、君の手に渡った。これは私にとっても予想外だった。何せそのスキルは、他のスキルと違い、完全プレイヤースキル依存型。それを十全に扱える者などいない…そう思っていた」

その目はまるで、俺を観察するようで気持ち悪い。

「しかし君は、それを100%…いや、120%使いこなしている。ボス戦に通じる程鍛え上げ、私の前に立つほど強くなるとは、思いもしなかった。まあ、その想定外もMORPGの醍醐味と言えるかな」

その時、金属が擦れる音がする。

「俺達の…俺達の忠誠を…よくも…よくもおお!!!」

ヒースクリフの後ろから、血盟騎士団の奴が、斬りかかったのだ。

しかしそれより早く

「ガア!?!」

突然倒れ伏すプレイヤー達。

それは先輩達も例外ではなく

「ウツ…!?!」

「これは…麻痺?!」

「先輩!? ミト!? ……どうするつもりだ? このまま隠蔽か?」

「まさか! そんな理不尽なまね、する気は無いさ。私はこのまま第100層【紅玉宮】にて、君達の到着を待つよ。しかし…ツキノワ君。君にはチャンスを与えよう」

チャンス…だと?

「今この場で、私と1vs1で戦う機会を与えよう。無論、不死属性は解除する。そして、私に勝てば…ゲームはクリアされ、全プレイヤーがログアウト出来る。…どうかな?」

そう言つてヒースクリフは本当に、不死属性を解除した。

やるか…やらないか。

俺は周りを見る。

皆ここままで、時に絶望に折れながら、希望に燃えながら戦つてきた。

そして、それを終わらせるチャンスが、目の前にある。

でも、そのリスクは計り知れない。

「ダメ…ダメよ、ツキノワ」

「今はダメ…。今は引いて…ツキノワ君」

最後に俺は、2人を見る。

大好きな姉と、大好きな恋人。

2人のリアルな体も…リミットが迫っている。  
だったら…!

「…行つてくる」

そう言つてそつと、2人を下ろす。

「待つて…戻りなさい!!ツキノワ!!!」

「ダメ…ダメだよ…!!ツキノワ君!!!」

「行くな…ツキノワ!!」

「よせ!やめろ!!」

「動け…動けよ…!!ツキノワ!!ツキノワ!!!」

俺はエギルさんを見る。

「エギルさん。色々サポートありがとう。知つてましたよ?売上のほとんどを、中層ゾーンのプレイヤーの、育成に使つてた事を」

次にクラインを見る。

「クライン。あの時、俺達はクラインを置いてつた。ごめん。でも、いつも俺の事心配してくれて、ありがとう。…姉貴のこと、よろしくね」

次にキリトを見る。

「キリト。お前と会えて良かった。全てが始まった日、お前がいてくれたから、何とか正

気を保てた。お前がいたから、強くなれた。：ありがとう、兄弟。サチと幸せにな」  
次にミトを見る。

「姉貴。ガキの頃はさ、俺泣き虫だったよな。そんでいつも姉貴が助けてくれて：憧れだった。でも、もう憧れてるだけの、俺じゃない。今度は俺が姉貴を助ける。だから：行つてくる」

最後にアスナ先輩を見る。

でもかける言葉が見つからず、ただ笑いかけるしか出来なかつた。

「：もし、俺が負けたら少しの間でいい、先輩とミトを自殺できないようしてくれ」  
「：よかろう」

「待ちなさい：待ちなさいよお!!!」

「そんなの：そんなの無いよお!!!」

2人の悲鳴を無視して、俺はゆっくりと構える。

俺の持つ全てを、2振りの刀に籠める。

俺は今：：ここで：この男を：殺す!!!

「はアアアアアア!!!」

俺の右袈裟切りは、盾で防がれる。

流れるように左逆袈裟切りを放つも、それも剣で防がれる。

「ぬんー！」

反撃のシールドバツシユは、蹴って衝撃を殺しながら、距離をとる。

「くらえー！」

俺はその状態で刺突や斬撃を放ち、弾幕を張る。

しかしヒースクリフはお構い無しに、盾を構えて突撃してくる。

「シッー！」

ヒースクリフの鋭い一撃を、左の刀で滑らして体勢を崩させる。

がら空きの背中を切り裂こうとするも、重装備とは思えない身軽さで躲される。

「やっぱり…強えな…！」

「こちらのセリフだよ、ツキノワ君」

そのまま再び俺達はぶつかる。

俺の攻撃は全て、ヒースクリフに防がれる。

まだだ…まだ速く！

もつと…もつと鋭く！

お互いに決め手にかけてる中、遂に均衡が崩れた。

俺が全力で、至近距離からの打撃を放った時だ。

「…！…あ」



俺の【菊一文字正宗】が、砕けてしまったのだ。  
度重なる連戦に耐えきれなかったのだ。

「ハアー！」

「クツ!？」

その隙をつかれた俺は、ヒースクリフの猛攻を防ぎきれず、膝をついてしまう。

「さらばだ、ツキノワ君」

ここが勝機だと、捉えたのだろう。

ヒースクリフの剣に、エフェクトライトが光る。

「一か八か……い」

俺もまた、残った【和泉守兼定：真打】を握りこみ、至近距離で斬撃でのカウンターを狙う。

「オオオオオオオオオオオオ!!!」

俺の斬撃と、ヒースクリフのソードスキルが、全くの同時に発動した。

outside

元々限界だったのか、ツキノワの一撃はヒースクリフの盾をあつさりと砕き、剣同士が衝突する。

激しい鏝迫り合いの末、お互いの剣も砕け散る。



## エピソード

## Outside

「…俺の勝ちだ、ヒースクリフ」

「うむ…そして、私の負けだよ、ツキノワ君」

ツキノワの手には黒に光るレイピア、「ブラックパール」。

刀が碎ける直後、クイックチェンジで呼び出した1振りだ。

「おめでとう、諸君。これで…ソードアート・オンラインは、クリアだ」

そう言い残して、ヒースクリフは碎け散った。

ツキノワの耳に、鐘の音が聞こえる。

11月7日、14:55分、ゲームはクリアされました。

そんなシステム音が響き、そして彼らの視界は真っ白になった。

side ツキノワ

「……はっ？」

気づけば俺は、夕焼けに染る空にいた。

透明ななにかがあるのか、足場はしっかりしている。

辺りを見渡していると

「ツキノワ君……!」

「ツ?!アスナ……先輩……」

後ろから先輩の声が聞こえて、抱きつかれる。

「怖かった……!すごく怖かったんだよ……!」

「……ごめん、先輩。でも俺、ちゃんと勝ったよ?」

俺達は抱きしめ合い、そしてキスをした。

そのまま寄り添い合いながら、俺達は周りを見渡すと、先輩が何かに気づく。

「ツキノワ君、あれ……」

指さされた先には、崩れ落ちる浮遊城アインクラッド。

2年間、生きてきた世界が崩壊していくのは、少し……寂しかった。

「中々絶景だな」

「ツ?!」

声のする方へ振り向くと、そこには白衣を着た黒髪の男。

「この男が……」

「……茅場……晶彦」

「今アーガス本社、地下5階にあるSAOのメインフレーム等の、データを全消去してい

る最中だ。後10分程で完了する」

「…あそこにいた人達は？」

「先程6147名のうち、6145名のログアウトが確認された。残りの2名は当然、君達だ」

「…死んだ約4000人は？」

「…人の命は、軽々しく扱っていいものではないよ、ツキノワ君」  
遠回しに、死んだ人間は戻らないと告げられた。

つまり、やはりあそこの死は、本当に死だったってことか…。

「…何で？何であんなことを？」

何故か俺は、彼に対して怒りは覚えなかった。

先程の殺し合いの時もそうだ。

使命感や覚悟はあっても、怒りは無かった。

「何故か、か。…何故かは、私も忘れてしまったよ。フルダイブ環境の研究を始めた時：いや、その遙か前から、私はあの城に取り憑かれていたよ」

「…」

「いつか、現実の枠や法則を超えた城を作りたい。そして、地上を飛び出して、この城に行きたい。それだけが、長い間、私の欲求だったよ」

「……」

「私はね、ツキノワ君。まだ信じているのだよ。どこかここじゃない場所で、あの城が本当に存在するのだと」

「……だといいな」

長い彼の独白を聞いた俺が、口に出せたのは、その一言だけだった。

「……さて、私はそろそろ行くよ。君達もしきにログアウトが始める。それでは」

そう言つて茅場は、本当に消えていなくなつた。

ふと見ると、自分達もログアウトが始まつたのか、光出した。

俺はもう一度先輩にキスして

「じゃあ先輩！また外で！」

「……うん！また外で！」

こうして俺達はログアウトしたのだった。

……はずだったんだ。

side???

「……夢……なのか……？」

暗闇の中、小さく呟く少年。

体を起こすと、ガチャリと金属音になる。

その時シユンという音と共に、誰かが入ってくる。

逆光で顔は見えないが、背格好は男だろう。

そして少年は、それが誰か知っている。

「…よう、インテリ。眉間にシワがすごいぜ？」

「相変わらず…生意気な小僧だな！」

「グッ！」

男は少年の顔を、思いっきり殴り付ける。

そのまま倒れる少年の腹を、ひたすら蹴り続ける男。

それはまるで…というか、ただのストレス発散だ。

一通りやってスッキリしたのか、嫌味つたらしい笑顔を浮かべながら、男は部屋を後にする。

「…どれだけだったのかなあ…」

SAOでヒースクリフを倒してから、少年の感覚では、少なくとも1ヶ月以上はたっただろう。

それだけたつても尚、少年…ツキノワはVR世界に閉じ込められていた。

そして、彼の恋人アスナを含めた約300人が同様に、取り残されたままだったのだ。

side 深澄

電車で揺られながら、私は音楽を聴いている。

「…」

しかしただ聞いているだけで、実際にはほとんど頭に入ってきていない。

2ヶ月前、ツキノワ：優月がヒースクリフを倒して、デスゲームをクリアに導いた。私が目を覚ますと、隣には優月と明日奈の姿があつた。

私達は同じ病院、同じ病室に運ばれたのだ。

それからしばらくして、どこかで聞きつけたのか、キリト：桐々谷和人がやって来た。彼から聞いて分かったのが、2ヶ月たった今でも、あの子達を含む、約300人が戻ってきていないのだとか。

そんな事を考えながら着いたのが、私の元入院先で、今も尚、2人が眠る埼玉県の所沢市総合病院だ。

「…あら、先に来てたのね、キリ：和人、千笑」

「ああ、久しぶりだな深澄」

「久しぶり、深澄」

先にいたのは、和人とその恋人のサチ：指原千笑だ。

2人共、明日奈と優月の為に、足繁く通ってくれているのだ。

「2人共、ありがとう。この子達も喜ぶわ」



そう言って、私は2人が持ってきた花を生ける。

しばらくと話していると、父から腰を痛めたという連絡が来た。

「ごめんなさい、父が腰を痛めたらしくて…。先に戻らないと」

「ああ、こっちは任せとけ」

「いつてらっしやい」

2人を任せて、私は急いで帰路に着いた。

結果父の腰は大事では無く、ホツとした。

しかし夜になり、和人から来た連絡を見て、思わず机に拳を叩きつけた。

「…須郷…あの蛇男め…!!」

私が帰った後、明日奈のお父さんと、その部下である須郷伸之が来たらしい。

内容は、須郷が明日菜と婚約するという内容だった。

S A Oを運営していたアーガスは、結城彰三氏がCEOを務める、総合電子機器メー

カーのレクトという会社を買収した。

奴はその会社の、フルダイブ部門の責任者なのだ。

そして優月達の命は、あいつが握っていると言っても、過言ではないのだ。

昔から、あいつの事は気に食わなかった。

本当に蛇のように、何を考えてるのかまるで分からない。

私だけではなく、優月もまた、すごく気に入らないらしい。

「その見返りに明日奈との婚約ですって……ふざけるな……!!」

あんな男に、何で明日奈を……!

怒りに燃えていると、まだ続きがある事に気づいた。

添付ファイルだ。

…エギルからなの？

そのファイルを開くと、そこに写っていたのは

「…明日奈……?」

画質は悪いが、確かに鳥籠に囲われた、明日奈が写っていた。

## フエアリーダンス編

## 40話

side 深澄

翌日、私は再び電車で揺られ、ある場所を目指していた。

着いたのは、東京の御徒町にひっそりと構える、隠れ家的バー。

と言っても、バータイムは夜からで、今はカフェの時間だ。

【Dicey Cafe】という店名のお店は、エギル：アンドリユー||ギルパート||ミルズが、夫婦で営むお店だ。

ちなみに、本人たつての希望でこっちでも、エギルと呼んでいる。

なんでも開店直後に、SAO事件に巻き込まれてしまったのだが、奥さんが一人で、切り盛りしていたらしい。

本当に立派で、良い奥さんだ。

そう思いながら、ドアを開ける。

場末のバーと言った感じの店内は、落ち着きがあつて、優月が好みそうな雰囲気だ。

「いらっしやい。2人はまだだぜ」

「大方、キリトが寝坊してるのでしょ？想像つくわ」

私はコーヒーとホットケーキを頼む。

こここのホットケーキはフワフワで、美味しい。

きつと優月も…明日奈も…。

「…大丈夫か？ミト…いや、深澄？」

「…大丈夫よ…」

そう言うと、エギルはカウンター越しに私の頭に手を置いた。

「本来ならクライインの仕事なんだが…。まあ、俺も大人だ。子供が遠慮すんな」

ああ、ダメだ。

こんな優しくされたら、涙が溢れてしまう。

「…ヒツグ…ゆずきい…グス…あすなあ…！」

相変わらずの弱虫だ、私は。

ダメだ…涙が止まらない…！

どうにか必死に涙を止めようとしていると、後ろから誰かに抱きしめられる。

「深澄…。大丈夫…私達もいるよ…」

「弟と親友が戻ってこないんだもん…。不安だよ…。でも、大丈夫。あいつらは、こんな程度の事に、負ける奴らじゃない。だから…信じよう」

「千笑…和人…」

2人もいつの間にか、来ていたらしい。

そうだ、私は1人じゃない。

皆がいる。

だから…戦える。

今度こそ…明日奈を、優月を助けるんだ…!

気づけば私の涙は、止まっていた。

「ごめん…恥ずかしいとこ見せた…」

私は鼻をかみながら、皆に謝る。

皆は優しく笑いながら、首を横に振る。

「さてと…エギル、あの写真は？」

和人が、早速本題に入った。

私達も姿勢を直す。

エギルはカウンターの下から、何かを取りだし、和人に向けて滑らせる。

…かつこいい、様になってる。

「それ…ゲームのパッケージ？」

千笑の声に私も確認する。

【Alfheim Online】と書かれている。

アルフヘイム?…いや、アルヴヘイムかしら。

「アルフヘイム?」

「アルヴヘイムと読むらしいぞ。通称ALO」

「妖精の国という意味よ」

「ほう、よく分かったな」

「あら? 私は聖エテルナ女学院の学年1位よ」

「これでも一応才女だ。」

少し胸を張っていると、キリトとエギルが無視して、話を進める。

「妖精って言うのと、まったく系か?」

「いや、かなりハードだな。ドスキル制、プレイヤースキル重視、PK推奨」

「無視しないでよ…。それにしても、かなりハードなのね」

要するにレベルは存在せず、各種スキルは反復使用で上昇。

戦闘はプレイヤーの運動能力頼りで、魔法あり・ソードスキル無し of SAO って感じ

かな。

「あの…PK推奨っていうのは…」

「キャラメイクの段階で、種族が選べるんだが、他種族同士なら、キル有りなんだとよ」

「何か…怖いね…」

千笑が体を震わせる。

確かに、千笑には向かなさそうなゲームだ。

「ただ、このゲームの一番の魅力はそこじゃない。…飛べる事だ」

「「飛べる？」」

「妖精だから、当然羽がある。フライトエンジンとやらを搭載する事で、慣れると自由に飛び回れるらしいぞ。…まあ、難易度は激ムズだが」

…飛んでみたい…！

不覚にも、楽しそうだと思ってしまうた。

「それで？あの写真は？」

「このゲームには、世界樹というものがある。今のプレイヤー達は、その頂上を目指しているのだが、これは目指した連中の1人が撮影したものを、限界まで引き伸ばしたものだ」

「じゃあ、この写真は…」

「ああ、それはALLOの中だ」

だつたら…決まりだ。

「エギル…このゲーム貰えないか？」

「行くのか？」

「あいつには、返しきれない恩がある。ここらで一つ位は返したい」

和人は行く気らしい。

「私も。私達も彼に助けて貰った。その恩をまだ返してない。行こう、和人」

「ああ、行こう千笑」

千笑も行くと言言。

もちろん私と行く。

でも行く前に…

「私も行くわ。その前に、親を説得しないといけないけど」

あの事件以降、親がVRコンテンツに神経質なのだ。

だからまずは、その親への説得からだ。

「2人共、悪いんだけど先に行つて。私も直ぐに追いつくわ」

「…分かった。絶対に来いよ」

「このゲームはアムスフィアという、ナーヴギアの後継機のソフトだ。一応ナーヴギアにも対応してるらしいが。…気をつけろよ、お前達」

なら私はハードから買わないと。

後、大丈夫よエギル。



「死んでもいいゲームなんて、ぬる過ぎる」

コアゲーマーの私達は、同じ事を言ったのだった。

その日の夜、家に帰った私は、早速親に切り出した。

「…本気で言ってるのか、深澄」

「本気だよ、父さん」

私の父、兎沢真澄は直ぐに反対した。

父は総務省の官僚、当然SAO事件の被害者が、まだ戻ってきていない事を知っている。

その中に、優月と明日奈が入っていることを知ってからは、仕事から帰ってくるのが遅くなった。

「深澄。貴女自分が何言ってるのか、分かっているの？」

「分かっているよ、母さん」

次に口を開いたのは、私の母、兎沢美月だ。

相変わらず、歳を感じさせない綺麗さだ。

母は、父の秘書を務めている。

2人共決して、理不尽に厳しいのでは無い。

私達を思うが故の厳しさであるのは、私も優月も知っている。

もちろん、2人共甘い時もあるのだ。

「…私は、あの2年間で、何度も優月に助けられた。1度、明日奈を見捨てた。だから次は、私が助ける。もう、見捨てたくない！」

あの時、ペネントの群れを前に、明日奈を見捨てた。

その後、その間違いを優月が正してくれた。

何度も何度も、私はあの子に助けられた。

だから今度は…！

「…私達とて、須郷のことは、怪しんでいる。しかし確たる証拠が無いのが現状だ」  
深いため息の後、父さんが口を開く。

「…アムスフィアの安全性は、証明されている。行つてきなさい、深澄」

「…あなたがそう言うなら。いい、深澄。言ったからには、絶対に助けなさい。それまで諦めてはダメよ」

「…！…！ありがとう…！」

私は2人の許可を得て、ALOへダイブする事が、出来るようになったのだった。

次の日、私はキリト達と待ち合わせ場所を決めて、買ったばかりのアムスフィアを被る。

優月…明日奈…今行くからね…！

「リンクスタート！」

## 41話

side ツキノワ

「このーこのーこの!!」

鈍い音が響き渡る。

相変わらずこのインテリ…須郷は、俺でストレス発散をしてるらしい。

ただいい加減、このやられたふりも飽きてきた。

さてと…どうしようか…?

「ん?…へえ…面白いことになったねえ…」

急に手を止めたかと思えば、ニヤニヤ笑いながら、突然部屋を出ていった。

「…何事だ?」

不思議に思いながら、のんびり休んでいること数分。

再びドアが開かれる。

「…まあたストレス発散か? インテリ。飽きねえやつだなあ…」

「ツキノワ!」

あれ? 女の声?

というか、よく見るとシルエツトが違うな。

「待つてて！すぐ外すから！ユイ！」

「動かないで下さい！お兄ちゃん！」

「…え？」

まさか…まさか…!?

「サチ…!?それに、ユイ…なのか…!？」

呆然としているうちに、俺を拘束していた鎖が、壊される。

「よく頑張ったね…！大丈夫だよ…！アスナも、キリト達が助けてくれるから…！」

「キリト達まで…!？」

達つて…誰だ？

まさか、ミトまで来てるのか…!?

「…ユイ、皆の所まで、案内してくれ」

「ま、待つててください！その体では…！」

「関係ねえ！この時をずっと待つてたんだ！いつかあのいけすかねえインテリ野郎から、先輩を助けるチャンスを!!今しかない!!今しかないんだ!!!だからユイ!!!頼む、力を貸してくれ!!!」

「…3分、時間をください！」

ユイが突然姿を消す。

それから約3分後、何やら光る玉を持って、再び現れる。

「お待たせしました！これを使ってください！」

それが輝き出した途端、俺の服装が変わる。

さつきまで初期装備みたいな服を来ていたが、服装が変わる。

真紅の着物に黒の袴、白の羽織に2本の刀。

「これは…SAOの!?!」

「この世界は、SAOのメインサーバーを基幹とするサーバーです。ですから、そのサーバーを辿り、お兄ちゃんの名前を經由して、当時のデータを持つてきました！ですが、【剣豪】スキル特有の、遠距離攻撃は出来ません！それと、タイムリミットがあります。時間は10分。それまでにお姉ちゃんを助けて下さい！」

「…任せろ！」

俺はユイの先導に従い、皆の元に急ぐ。

辿り着いた先では、キリトと思しき人物とミトと思しき人物が、剣と鎌で腹を貫かれ、もがいていて。

…アスナ先輩が、須郷に辱めを受けていた。

…頭の中が、酷く冷めてくる。

ああ…あいつは…殺そう。

「…シツ!!!」

全力で踏み込み、一気に肉薄する。

俺はそのまま、思いつきり刀を振り切る。

「ハア!!!」

「グワアアアア!!!」

派手ぶつ飛ぶあいつには見向きもせず、俺は先輩を吊るす鎖を切り、羽織を被せる。

「…ここからは、俺に任せて」

「ツキノワ君…!!!」

俺は先輩を背に隠し、刀を握りしめる。

その時だった。

「あの世界の剣は、もつと重かった。もつと痛かった…!ぐ…グアアアアア!!!」

キリトらしき人物が大声を上げて、立ち上がったのは。

「キリト…で合ってるよな?」

「いい所全部かつさらいやがって…!」

俺達は拳をぶつけ合いながら、得物を構える。

「この…糞ガキ共ガアアア!!!」

怒りに燃える須郷を、冷めた目で睨みつける俺。

そして…

「システムログイン。…ID【ヒースクリフ】」

「え？」

ヒースクリフ…だと…!?

そのアカウントは!?

「な、何だ!?!そのアカウントは!?!」

「システムコマンド。管理者権限に移行。ID【オベイロン】をレベル1に」

目の前にいる須郷のステータスが、全部リセットされる。

ざまあないな。

「ぼ、僕より高位のIDだ?!?バカな!?!僕はこの世界の創造主だぞ!?!神なんだぞ!!」

「違う。お前は盗んだんだ。世界を…その住人を。何より…俺の兄弟分と、その恋人

を…!?!」

「散々好き勝手やってくれたわね…!」

腹に刺さっていた鎌を引き抜き、ミトがやつと立ち上がった。

「ミト…大丈夫か？」

「私より、自分の心配をしなさい。さて…偽りの玉座から引きずり降ろされた気分は、如



何かしら？泥棒の王様？」

ミトがわざとらしく、須郷を煽る。

「貴様らア…!! システムコマンド！オブジェクトID【エクスカリバー】をジェネレーター！」

何も起こらない。

当然と言えば当然だが、今の管理者はキリトだからな。

「キリト、さっさと終わらせよう」

「ああ。システムコマンド！オブジェクトID【エクスカリバー】をジェネレーター…！  
コマンド一つで、伝説の武器を召喚か…」

キリトの言葉に従い、黄金の剣が出現する。

キリトはそれを見て、苦笑いすると、須郷に投げつけた。

「カタをつけるぞ。泥棒の王！システムコマンド、ペインアブソーバーをレベル0に！」

「な、何い!!!」

「これはまた酷いことを…いや、当然か。」

「逃げるなよ、あの男は逃げなかつたぜ？…茅場晶彦はな」

「か、茅場…茅場アアア!!!」

ギヤアギヤアと、クソうるせえなあ。

「ゴチャゴチャうるせえよ。いいから来いよ」

「この…糞ガキ共ガアアアア!!」

やぶれかぶれに剣を振るうも、まるでなっていない。

その辺の子供の方が、マシだろうな。

キリトはすれ違いざまに、頬を軽く切りつける。

「いたあ!?…ヒイ…!」

「痛い…お前がアスナとツキノワに与えた痛みは…この程度じゃないだろ!!!」

怒りのままにキリトが、須郷の両腕を切り落とした。

「ギアアアアアアアアアアアアア!!!腕がアアアアアアアアアアアア!!!」

そのままフラフラと逃げようとする須郷を

「おいおい、待てよ…」

「逃がすわけ…ないでしょう…!」

「ハアアアアアアアア!!!」

俺とミトで、両足を切り落とす。

「ギアアアアアアアアアアアアア!!!」

だるま状態にした須郷の髪を掴み、目線の高さまで持ち上げる。

「待つて…命…は…」

「だ〜メ♪」

ニツコリ笑って、空高く蹴りあげる。

そして落ちてくる須郷の頭を、3人でまとめて貫いた。

こうして須郷は、ポリゴン状に消えた。

それと同時に、俺の方も時間が来たのだろう、装備が消えてしまった。

outside

「ツキノワ!!…酷い…!!!」

「大丈夫。見た目より酷くはないから。あんなど素人のパンチだの蹴りだのなんて、簡単にいなせるから」

「妙に余裕があるなって思ったら、そういう事かよ…」

そんな話をしながら、ツキノワはミトから上着を借りて、アスナに被せる。

「…お待たせして、すみません。先輩」

「ツキノワ君…ツキノワ君!!!」

2人は強く抱きしめ合いながら、涙を流した。

そんな光景を優しく見守るキリト達だが、不意にミトの体が光出した。

「これは…!?!」

「皆さんの強制ログアウトが始まりました!まもなくログアウトされます!」

「キリト、私達は先に行くね」

「分かった。また明日な」

ユイが施した強制ログアウトが、始まったのだ。

サチとミトは先にログアウトされるらしい。

「キリト、ちよつと」

「ん? どうしたミト」

ミトとキリトが何やら、内緒話をしている。

ツキノワが茶化してやろう、口を開きかけたが、止まった。

2人の顔が、あまりにも真剣だったからだ。

「それじゃあ、私も先に戻るわ。ツキノワ、アスナ。また後で」

「う、うん…後で?」

ツキノワ達は、ミトの意味深な言葉に、首を傾げるも、その答えを聞く前に、ミトはログアウトしてしまう。

そして次に光出したのは、ツキノワとアスナだった。

「あ、キリト、ドベじゃん」

「うるせえ!」

「あはは…」

アスナは2人のやり取りに苦笑いをしながら、ツキノワを見る。

「それじゃあ、ツキノワ君。またリアルで」

「うん、またリアルで。アスナ先輩」

こうして2人も無事、ログアウト出来たのだった。

side 優月

「…ちゃんと…戻れたのか…」

声カラツカラ…まあ、2年以上、声帯使ってないしな…。

そんな事を考えながら、俺はナースコールを押そうとする。

しかしそれより早く、豪快にドアが開かれる。

「優月!!明日奈(ちゃん)!!」

「2人共!!大丈夫か!」

「うえ!!深澄!!父さん!!キリ…和人まで!」

一体何事?

## 4 2 話

side 優月

とりあえず、もろもろの事情が片付き、数週間経つ。

深澄からの話をまとめると、どうやらあの時、俺が実際に目を覚ますのに、意外に時間がかかっていたらしい。

個人差があるらしく、現に俺が意識を取り戻したのは、一番最後に戻ってきたキリトよりも遅かった位だ。

ちなみに明日奈先輩は、もっと遅い。

その間に、須郷が俺達を殺そうと、病院に乗り込んでしていたのだ。

しかしそれは、先読みしていた深澄により、父さんと和人を含めた3人により阻止。

和人が頬を軽く切るも、後には残らないらしい。

ちなみに和人は、サチ：指原千笑に怒られていた。

「そしてそれを機に、須郷周辺及び、レクトを一斉捜査。その結果、300人の脳波を使い、人体実験を行っていたという事が判明。須郷達は別件逮捕。レクトもボロボロよ」  
「…まあ、被害者がその時の記憶が無いのが、幸いな。無事社会復帰出来そうだって、

父さんも言ってたし」

「私の父さんも、かなりしよばげてたけど、最近は少し持ち直してきたよ。後は趣味でも見つければ、大丈夫だと思う」

明日奈先輩のお父さんは、レクトのCEOだ。

当然この事件の責任をとる形で、辞任している。

「さてと……とりあえず腹減った……」

「そうね、ご飯にしようか♪」

「明日奈のご飯！」

「いや、俺のだから。深澄のじゃないし」

「私のもは私のも！弟のもも私のも！」

「ふざけんな！ジャイアンニズムかよ!!」

「2人共！喧嘩しない!!」

「はい……」

俺達は今、SAOからの帰還者が通う学校に通っている。

俺達は世間ではSAO帰還者サブバイパーと呼ばれている。

少し肩身が狭いが、普通にしてれば分からないので、特に問題は無い。

まあ、俺は気にしないけど。

そんな事を考えていると、

「2人共、今日のオフ会は来るでしょ?」

「ん?行くけど...?」

今日はエギルさんのお店で、オフ会をするのだ。

ちなみにお店の写真を見せてもらったけど、すごくいい感じだ。

そんな訳で、時は進み放課後。

俺達は深澄先導で、エギルさんの店に向かった。

【Dicey Cafe】という店らしい。

「へえ...いいかも」

「落ち着いてる感じだね」

「さ、入るわよ。...皆着いてるし」

「え?」

本日貸切、と書かれた看板が吊るされているドアを開けると、何故か勢揃いしていた。

1番最初に目に付いたのは

「クライン...こつちでも、そのバンダナ付けてるのか?」

「うるせえ!俺のステータスだ!」

「私達、遅刻したかな...?」



「してないわよ。貴女達だけわざと違う時間言ったから」

深澄が嘘情報を流したらしい。

「何でだよ」

「主役は後から来るものでしょ？」

そう言つて出てきたのは、茶髪の女子生徒。

「…リズベツトか？」

「正解！ほらこつち！」

「ちよつと!?おい！」

俺は引きずられて、何故か木箱の上に立たされる。

「えく。それでは、ご唱和下さい！」

「「「「「ツキノワ!! S A O クリア、おめでとう!!!」」」」」

クラッカーが鳴らされ、簡単な垂れ幕が降りてくる。

呆然としている俺に、リズベツトが強引にジュースを持たせて

「それでは、かんぱ〜い！」

「「「「「かんぱ〜い！」」」」」

「ええつと…リズベツト? いや…」

「篠崎里香よ。兎沢優月ね。深澄から聞いたわ」

「私は綾野珪子です！優月さん！お久しぶりです！」

「…シリカか。久しぶり。改めてよろしくな珪子、里香」

俺は改めて本名を聞いた2人に、挨拶する。

すると何故か、固まる2人。

「ん？どうした？」

「その笑顔…反則…！」

何を言ってるやら？

俺はそんな2人をスルーして、クラインに話しかける。

「おつす、社会人お疲れ様」

「お！来たなツキノワ！いや、優月！」

「俺だけ皆の名前知らねえのかよ…」

「おう、悪いな。深澄から聞いてたからよ。壺井遼太郎だ。よろしくな」

「うん、よろしく…お願います？」

「今更敬語なんてやめろよ…気持ち悪いぜ…」

「悪かったな。それで…返事は貰った？」

「…それは…ちようど今から言うさ。悪い！少しいいか！」

「深澄。こつち」

ビツクリした顔をしている深澄を、こっちに呼ぶ。  
何やら悟ったのだろう、顔は赤い。

俺は深澄をクラインの隣に押しつけ、明日奈先輩の隣に並ぶ。

「あ〜と…俺達な…付き合う事になった!!!」

「よ、よろしくお願ひします…／＼／」

「「「「「「「「…な、何だつてええええええ!!?!」「「「「「「」」

恥ずかしそうに縮こまる深澄と、照れくさそうに堂々とするクライン。

どうやら、ちゃんと返事はしたらしい。

俺と先輩はホッと一息。

女性陣が一気に深澄に駆け寄り、男性陣…と言つても、エギルとキリトとシンカーさ  
んだけだけど。

が、クラインに詰め寄る。

「あ、あんた達はいいの!?!」

「「え? 何が?」」

「クラインよ! あいつよ! いいの!?!」

「クラインなら大丈夫。伊達に2年間つるんでないし」

「そうだよ。クラインさんはいい人だよ?」

あの人なら、大丈夫だと思ってる。

俺は…だけど。

「親がどう思うかだよねえ…」

「あはは…おじさん達はうちほど厳しくないけど、年齢差がねえ…」

「ま、そこは深澄の説得が、上手くいুকかどうかですね」

俺達はそのままもちクチャにさせる2人を、眺めているだけだった。

side 和人

「マスター、バーボン。ロックで」

「彼と同じものを」

冗談でそう言うと、優月が被せてくる。

そうすると、2つのカップが滑ってくる。

「おお…様になってるう！」

「フツ…茶化すなよ」

恐る恐る口にすると、ただの烏龍茶だった。

「なんだ、烏龍茶か」

「当たり前だろうが。エギル、俺には本物」

さらにその隣にクライインが座る。

「というか

「いいのかよ、この後戻るんだろ？」

「え？まだ仕事なの？」

「けっ！残業なんて、飲まずにやってられるかよ」

大人つて…大変なんだなあ…。

「久しぶり、キリト君、ツキノワ君」

「シンカーさん！」

「お久しぶりです。ユリエールさんと入籍なさったんですね、おめでとうございます」

「マジで!?!おめでとうございます！」

知らなかったのだろう、嬉しいそうにコップを突き出す優月。

「とはいえ、今のMMO事情じゃあ色々…」

「エギル、種の方はどうなってる？」

俺は須郷を倒し、皆がログアウトした後、電脳体となった茅場晶彦に出会った。

管理者IDも、彼がくれたもの。

ユイが与えた優月の装備も、彼が後押ししたらしい。

その時、彼から受け取ったのが「ザ・シード」。

これは所謂、フルダイブ型バーチャルMMOゲームを動かす、プログラムパッケージ

だった。

俺はこれをエギルに頼み、世界中で誰でも使えるように、して貰ったのだ。

その結果、消えるだろうと思われたバーチャルMMOは蘇ったのだ。

「今日の二次会、変更は無いよな？」

「ああ、午後11時、ユグドラシルシティだ」

そして今夜11時、ALOの空に、浮遊城アインクラッドが復活した。

「やるぞ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

「ああ、今度こそ完全制覇だ。行くぞ、兄弟<sup>ブラザー</sup>」

こうして俺達は、再びあの世界に戦いを挑むのだった。

sideツキノワ

あれから時がたち、SAO事件から1年が過ぎようとしている。

新たな仲間である桐々谷直葉：リーファを迎えた俺達は、もう一度、あの城に戦いを挑んでいる。

だが俺は、今はそこにはいない。

いや、やめた訳ではなく、違うジャンルを遊んでいるだけなのだが。

俺は朽ち果てた世界の端に、フードを被り、眼下の景色を睨んでいた。

「…見つけたわよ、ツキノワ」

「OK。狩りを始めよう」

俺は一気に滑り降り、急接近。

その間に、パートナーがトラップを起動させる。

激しい爆発に動揺する連中を、一気に蜂の巣にする。

俺に気づき、狙いを定めた瞬間、そいつの頭が吹っ飛ぶ。

「クソ！狙撃手だ！気をつけ…」

「俺もいるけどな」

淡々と、確実に俺達は殲滅していく。

そして…総勢10名を撃破した俺達は、分け前を分配して、撤収する。

「流石は、冥界の女神様。いい腕前で」

「そつちこそ大暴れね、深紅の死神様」

俺は今、鉄と硝煙香る世界【Gungale Online】、通称GGOにいる。

そこで出会った凄腕スナイパー、シノンと共にギルド…こつちではスコードロンだが。

そいつらの狩りをしているのだった。

「それにしても…本当に男？」

「何回目だよ、このやり取り…」

そんな俺のアバターは、金髪美女の様な男のアバターである。  
本当…勘弁してくれよな…。



## GGO編

## 43話

sideツキノワ

俺とシノンの出会いは、まあ簡単だ。

ログインしたての俺が、当然右も左も分からないので、その辺のプレイヤーを捕まえようと、声をかけたのが、シノンだった。

「あ、すみません。少しお伺いしたい事が…」

「何かしら?…あら?珍しいわね、女の子なんて」

…は?女の子?

俺どんな見た目してんの?

「…え、ええつと…俺、男なんです…」

「…嘘!?!その見た目で!?!」

「逆にどんな見た目!?!」

俺は周りを見渡して、ふとビルの窓に写る自分を見る。

クリっとした大きな蒼い目。

細い体つきに白い肌。

身長はリアルよりかなり低く、髪は金髪ロング。

「な…なんじゃあこりやアアアアアアアアアア!!?!!」

俺の悲鳴は、このGGOのメイン街「SBCグロツケン」中に、響き渡ったとか何とか。

outside

「落ち着いた?」

「…すみません。ご迷惑お掛けしました」

「別にいいけど…その堅苦しい敬語やめて。むず痒いわ」

シノンは、突然声をかけてきた金髪美女（見た目だけで、中身とアバター性別は、男）を、裏路地へと連れていく。

そこで、お互い自己紹介すらしていない事を、思い出した。

「私はシノンよ。貴方は?」

「俺はツキノワ。よろしく、シノン」

「さてと…何から聞きたいの?」

「…全部!」

「一周まわって清々しいわね」

あまりの言い分に、思わずツツコミを入れてしまったが、シノン  
は悩む。

(心苦しいけど、私に初心者にレクチャーする暇なんて無いし…。それに、ソロの方が…  
いや…)

ここでシノンは、少し考え方を変える。

「貴方、他のVR系は？」

「SAOとALO」

「な!? 貴方…:SAOサブバイパー帰還者!？」

世の中SAOサブバイパー帰還者は、その事を隠したがるものだが、この少年はそれでも無いらしい。  
い。

「…あ、オフレコで」

訂正、どうやら何も考えてなかっただけらしい。

シノンはガクツとズツコケかける。

「と、とにかく! 完璧な素人では無いのね?」

その言葉に頷くツキノワ。

シノンはそこで熟考する。

(この手のゲームは初心者かもしれないけど…:戦い慣れ自体はしてるはず。だったら  
…)

「分かったわ、私がレクチャーしてあげる」

「本当!? ありがとう!」

「眩しい笑顔ね……!」

シノンが考えたのは、自身のスタイルに合わせた、パートナー育成計画だった。

実は、少しソロプレイが行き詰まっていたのだ。

シノンは典型的なスナイパータイプ。

だから、接近戦には弱いのだ。

そこで、彼にその接近戦を補ってもらえるように、教育していこうという、魂胆だった。

(ただ……彼の眩しい笑顔を見ると、自分の浅ましさを感ずるわ……)

彼の性格を知らない彼女には、少々心苦しかったようだ。

「それじゃあ、まずは武器を買いましょう? デパートはあっちよ」

そう言って2人は移動を開始する。

その道中で、大雑把にこの世界の事を教える。

「このGGOは、世紀末の世界観を舞台にしているわ。モンスターが出たり、プレイヤー同士で撃ち合ったり」

「どんなモンスター?」

「気持ち悪いファンタジー系モンスターから、ロボット系モンスターまで、様々よ。後このゲームが他と違う特徴があるのだけど、知ってる？」

「ん？知らない」

「[リアル・マネー・トレード]。要するにこつちで稼いだお金を、現金に変換出来るのよ。とは言っても、私を含めた大体の人は数千円。こつちでかかる費用を抜くと、このゲームにかかる月額料金程度しか、稼げないわ。でもごく稀に、数十万稼ぐ人もいるのよ。そんな風だからその極一部……つまり、プロ連中は比較にならない位強いわ。あと厄介なのは、本職連中よ」

「……警察や自衛官って事か？」

「そう、更には在日米軍とか、ガチの猟師とか。さ、着いたわ。まずは、素養を見ないとね」

「素養？」

「あつちよ」

そう言われてツキノワが連れてこられたのは、射撃訓練場だ。

(なるほど、買う前に色々撃って、何が合うかを見るってことか)

「とりあえずハンドガンから、やってましよう？」

ツキノワは練習用の銃を持ち、構える。

「なんだか…思ってたより軽いな…」

「強化プラスチックだからね。練習用の使いやすい銃だから、反動も少ないはずだけど両手で持った方がいいわ。後、左目も開けてね」

ツキノワはもう一度構え直し、トリガーに指をかける。

その途端突然、サークル状のなにかが出てきた。

「これは？」

「攻撃的システムアシスト、『バレット・サークル』よ。貴方の鼓動に合わせて、大きさが変化しているわ。弾はその範囲内にランダムに当たるわ。つまり、穴が小さいほど、正確に狙いやすいのよ」

「なるほどな…」

ツキノワは一度銃を下げ、大きく深呼吸。

（イメージは、弓を引く時みたいにな…）

バン！

「…驚いたわ。1発でど真ん中なんて」

（彼…もしかしたら同系統かな？）

シノンは褒めながらも、彼の素質に少し困ってしまふ。

しかしそんな声には、耳も貸さずにひたすら構えるツキノワ。

そのまま2発3発と、淡々と引き金を引く。  
カチン…

「あ、弾切れか」

シノンが黙って、目標を近づける。

その目標には、7つの穴が空いていた。

全て中央付近だ。

「…貴方、銃使った事あるの?」

「ある訳ないだろ?…弓道やってるんだよ」

シノンは何故か納得してしまいかけるが…

(いやいや、それで納得出来る訳…)

「他の銃も試してみましよう」

そうして全部確かめた結果

「貴方…なんでも出来るのね…」

「相性いいんかな?」

全部の武器種で、実戦レベルで対応可能だという事が、判明したのだった。

sideツキノワ

「さてと…なんでも出来るのはいいけど、私も貴方も、1つ大事な事を忘れてたわ」

「ん？大事なこと？」

「…貴方、お金ないでしょ」

「あ」

忘れてた…どうしよう…。

「…少し…出そうか？」

「お気持ちだけで結構です！我が家で殺される…！」

兎沢家ルールの中で、『何があっても、家族以外に金を借りるな』という厳格なルールがある。

基本あまり束縛しない我が家で、数少ないルールの1つだ。

その分、かなり厳しいし、俺自身も後味が悪すぎる。

「なにか、手っ取り早く稼ぐ方法は？カジノとか」

「オススメはしないけど…ほら」

指さす先には、【Un touchable】と書かれた看板と、西部劇風の変なセット。

「何あれ？」

「ちようにやるみたいね、見てなさい」

「Hey! chicken! come on!」

入口にある機械に手を触れ、独特な交換と共に、カウントダウンが始まる。



0 になった途端、一気に駆けだすプレイヤー。

しかし直ぐに変な体勢になって、銃弾を避ける。

「…パントマイム？」

「違うわよ。銃を向けられるとね、防御的システムアシスト〔バレット・ライン〕が見えるのよ。通称、弾道予測線」

なるほど、それを避けてるのか。

だが、残り数メートルで体制を崩してしまい、撃たれてしまった。

「…と、言う感じよ。あそこから、あのNPCガンマンをタッチすれば、クリアよ。クリアしたプレイヤーが、今まで貯められてきた金額を総取り」

「総取り!? 50万弱を!」

俺は上に表示されてる数字を、指さしながら驚く。

マジかよ…!?

「無理よ、諦めなさい」

「は?…なんで?」

「あのガンマン、8メートル切ったら、エグいぐらい早くなるのよ」

ふーん…面白いじゃん。

俺はスタスタと入口に近づく。

「ちよつと!?やる気!」

「まあ見てなつて」

俺はタツチして、カウントダウンを待つ。

0 になった途端、一気に加速。

…なるほど、これが弾道予測線。

俺は前に飛び避けながら、距離を詰める。

狙いを定めにいくする為に、フェイントを混ぜつつ、距離を詰める。

そのまま一気に近づき、残り10メートル。

ここから早くなるんだっけ?

「ツ!」

確かに急激に上がったけど…問題ない。

スライディングで躲して、残り2メートル。

「弾切れだろ…ツ!」

銃を持つ手が動いた。

ゲツ!?!レーザー!?!

俺は慌てて上に飛び、躲してからタツチ。

「Noooooooooooooooo!!!」

うわあ…金貨が流れ出てくる。

こうして俺は、50万クレジットを手に入れた。

「いや、大漁大漁!」

「あ、貴方…どうやって…!?ていうか最後!?2メートル位のあのレーザー!あんな予測線と発射なんて、ほぼ同じタイミミングじゃない!!!」

シノンにもものすごい勢いで詰め寄られるが、そんなに変な事かね?

キリトならもつと余裕だろうな。

「だってこれ、弾道予測線を予測するっていうゲームだろ?」

というか、先輩の剣の方が速いし。

「よ、予測線を予測ううう!!!」

という訳で、無事金を手に入れた俺は、武器を買う事に。

あれこれ悩んだ結果、サブマシンガンのAR-57と、サブウエポンにFive-S evenを買った。

何でも弾が共通なんだとか。

弾を買っていると、あるものが目に入った。

「剣があるのか?」

「ん?ああ、『フォトンソード』ね。一応あるけど…買うの?」

「金あるし、接近戦用にね」

俺は赤のボディの「フォトンソード」を買って、軽く素振りする。

視線を感じて振り返ると、シノンが呆然と見ていた。

「ん？どうした？」

「いえ…すごく、綺麗で…」

「サンキュ」

最後に初期の服装から、着替える。

黒パンツに、黒インナー。

赤の丈の短いフード付きのジャケットを羽織り、黒のミリタリーブーツ。

最後に髪をポニーテールして、バレツタで高いところで止める。

「…うん、こんなもんか」

「似合うわね…ていうか、髪弄るのも手馴れてるのね」

「まあ…実際慣れてるしな」

こうして全ての用意を整えた俺は、早速フィールドに出る準備を整える。

「さてと…ところで、私に貸ーよね？」

そう来るか…。

「…常識の範囲内で」

「大丈夫よ貴方にもメリットはあるから」

「メリット？」

「一体どういう事だ？」

「私のパートナーになりなさい」

「え？ パートナー？」

「どういう事だ？」

俺が困惑していると、ポツポツと話し出す。

「私、基本ソロなんだけど、最近行き詰まって来てたのよ。そこで、1人パートナーでもつけようかと思ってたところに、貴方が来たのよ。初心者の貴方なら、私の都合に合わせる育てたれると思って、ここまでしたのよ」

なるほど、道理でやけに親身だと思ったよ。

確かに俺にもメリットはある。

その申し出は、むしろ好都合だ。

「俺としても、一緒にいてくれるのはありがたい。よろしく頼む」

「ええ、よろしく！」

side 優月

これが俺とシノンの出会い。

そんな関係が、かれこれ3ヶ月位だ。

「何ボサってしてるのよ、優月」

「ん？いや、お前と初めて会った時のこと、考えてたんだよ、詩乃」

今俺達は、月に2回位リアルで会う程、仲が良くなった。

まあ、GGOに入れば、ほぼずっと一緒にいるしな。

「随分と昔のように感じるけど、ほんの3ヶ月前よね」

「そうそう。変な感じ」

そう言いながら、俺はこの店をリストに加える。

「……なら、先輩もきつと喜ぶ。」

「……あんた、私を彼女とのデートの為のダシに使ってない？」

「もちろん！」

「はっ倒すわよ！」

ケラケラと笑いながら、俺はシノン：朝田詩乃の言葉をスルーする。

しかし、見た目に反して、随分と激しい物言いだ。

はつきり言って、美形ではあるが、見た目は陰キヤだ。

勿体ない。

「今、失礼な事考えたでしょ」

「気の所為だろ。さてと、そろそろ帰るか」

俺はさっさと話を切り上げて、先に会計を済ませる。

「はいこれ、私の分よ」

「確かに」

もちろん奢らないし、奢らせられない。

きつちり割り勘だ。

お互いに駅に向かおうとした時だった。

「あれ〜？朝田〜？」

ん？詩乃の知り合いか？

振り返ると、如何にもなギャルがいた。

うわあ…俺こいつみたいなの、苦手。

「遠藤…さん…」

「何そのイケメン〜！彼氏〜！キャー！すごいじゃん！…で？そのイケメン彼氏は、あんたのこと知ってるの？」

「…ツ!?やめて…!」

ん?こいつの事って…?

詩乃をチラリと見ると、顔色は真っ青で、身体中が震えてる。

「あれえ？知らないんだ〜！じゃあ、教えてあげる！ねえねえ、彼氏君。この女はさ……」  
 「やめ……やめて……！」

「はい、そこまで」

俺は何とかさんの前に立ち、唇に手を当てる。

「悪いね、こいつとは付き合ってる訳じゃないけど、嫌がつてるし、やめたって？」

「いい、いやいや！こいつはさ……「おい」ッ!？」

はあ……、つけ上がりやがって。

「俺さ、2度も3度も同じ事言うの、嫌いなんだわ。……そのくせえ口閉じろよ、ゴミ女。失せるカスが。こいつに関わんな。次ふざけた真似してみる、テメエのクソみてえな顔面、もっとクソみたいに整形するぞ」

俺は殺気をぶつけながら、黙らせる。

その殺気に、何も言えず固まるバカ女。

俺はそいつを無視して、詩乃の手を取り、歩き出したのだった。

side 詩乃

「……ねえ」

「うん？……あ、悪い」

優月が私の手を離す。



別に名残惜しいとは思わないけど、不快感は無かった。

初めて会った時は、こんなイケメンなのかと、本当にビックリした。

どんな奴かと警戒したが、GGOのツキノワとほぼ一緒。

こっちの方が、男らしく大人っぽい位だ。

そんな彼の怒りを、初めて見た。

…すごく、口悪くなるのね。

「…すごく、口悪くなるのね」

思わず思った事がそのまま口に出た。

そんな優月は苦笑いしながら、頭を掻く。

「どうにも昔から喧嘩つばやいというか、なんというか…」

そういう問題なのかな…？

まあそれはいいけど…

「…聞かねえよ、別に」

「え？」

私が聞くよりも前に、先に優月が口を開いた。

「誰にだって言いたくない事の1つ2つはあるだろ。俺だって、お前に全てを言ってる

訳じゃない」

…本当に、性格までイケメンね、こいつ。  
まあいいわ、正直、言いたくない話だ。

「そういう訳で、いつも通りここでいいか？」

「うん、ありがとう。それじゃあ、また」

「おう、また」

駅へと向かっていく、優月の背中を見る。

見た目以上に、大きく見えたのはきつと気のせいでは無いのだろう。

## 44話

side 優月

「…」

ある日の昼過ぎ、俺は皇居前で明日奈先輩を待っていた。

理由は簡単、デートだ。

本来なら朝から出かける予定だったのだが、俺の方に予定が入ってしまった、午後からになったのだ。

待ちながら、数時間前のある人物との会話を思い出していた。

「おーい！キリト君！ツキノワ君！こっち！」

「…あのバカ、シバいていい？」

「やめてくれ…」

俺達を似合いもしない笑顔で呼ぶのは、総務省の菊岡誠二郎。

長つたるい正式名称は忘れたが、通称「仮想課」の一員だ。

「いや、2人ともごめんね！」

「だったら銀座なんぞに呼び出すな」

「2人とも！ここは僕が持つから！」

「じゃあ、遠慮なく。…すみません、一番高いコーヒーとパフェとケーキを下さい」

「お、同じやつで…」

お店の雰囲気になれてないのだろう、和人は恐る恐るといった感じで、注文していた。それで、俺達になんの用なのさ。この後デートなんだけど？」

「SAO関連の話なら随分と喋ったはずだ」

俺と和人がそれぞれ抗議をすると、メニューを閉じてタブレットを押し付けてくる。

「これも見てくれ」

見せられたのは、1人の男の顔。

「先月、11月14日。彼、茂村保氏26歳が、自室から遺体で発見された。死後5日半の状況で発見された。部屋はちらかっていたが、荒らされた形跡はなし。ベッドに横たわっており、そして頭には」

「…アムスファイア」

まさかまた…？

それより俺が気になったのは、その日付だ。

11月14日の五日前…つまり、11月9日。

それは

「まさか…ゼクシードか…!？」

「おや、知ってるのかい？」

「優月、知ってるのか？」

「ゼクシードつてのは、GGO…ガンゲイル・オンラインのトッププレイヤーだ。俺も名前と顔しか知らないが。その日、ゼクシードはMMOS'tream、通称Mストに出演してたらしいからな。そして…出演中、突如回線接続されて、二度と現れなかった」

「…続けるよ。不審死とされ、司法解剖が行われた。その結果、死因は急性心不全とされた。原因は不明だがね。ただ、彼はまる2日、飲まず食わずだったらしい」

だがそれは、よくある話。

わざわざお役人様が出張る内容じゃ…待てよ。

確かもう1人、トップランカーがいないよな。

確か名前は…

「…薄塩たらこ。あいつもログインしてないらしいぞ。まさかあいつも…!？」

「その通り。彼もまた、心不全で亡くなっている」

マジかよ…!？」

「優月…何を知ってるんだ？」

「…最近、GGOで変な噂が流れてるんだ。なんでもゼクシードが死んだ時、変なことを言って、画面に向かって発砲したバカがいたらしい。そして、それとほぼ同時にゼクシードが消えたとか。薄塩たらこも似たようなものだ。そして最後に、そいつは自分の名前言っているんだ」

「名前は？」

「デスガン  
【死銃】」

和人は鋭い視線を、菊岡さんに向ける。

「この2人の死因は、確かなんだろうな」

「とどうと？」

「…脳の損傷は無かったのかって聞いているんだ」

そう言うのと、菊岡さんはニヤリと笑って俺達を見た。

「…僕もそれが気になってね。担当医師に聞いたが、異常は見られなかったそうだ。それにアムスフィアでは不可能だって、開発者達が断言していたよ」

チツ…相変わらずねちっこい人だな…。

「随分と根回しがいんだな、菊岡さん。はつきり言ったらどうなんだ」

和人も不機嫌そうに、聞き返す。

「…でははつきり聞こう。君達は可能だと思うかい？ゲーム内の銃撃で、プレイヤーの

心臓を止めることが出来ると」

俺達は、深く考え込んだ。

考えて、考えて、考えて…そして。

「不可能だ」

そう結論づけた。

脳ならともかく、心臓は流石に…。

「いや、2人共、そう結論づけてくれて、ありがとう。ここからが本題だ。…2人には、

この死銃デスガンに接触して欲しいんだ」

それはつまり…

「要するにあれか。撃たれてこいと」

「いや…まあ？」

「断る」

俺達は無視して席を立つ。

しかしその動きを、菊岡さんに止められる。

「待ってくれ！この男には、何やら厳密は拘りがあるみたいなんだ！」

「…名の通ったプレイヤーを狙ってることか？」

少し考えれば分かる事だ。

というか、GGOにいれば2人とも、1度は耳にする名前だ。

「そう！つまり、君達くらい強くないと無理だつてことさー！」

「無茶だ！あのゲームはプロがうようよいるんだぞー！」

「あのアホども、マジで強いからなあ…」

シノンと2人でバッティングした時は、命からがら逃げ出したものだ。

「そのプロっていうのは？」

「GGOつてのは、リアル・マネー・トレード。要するにゲーム内通貨を現実の通貨としてペイバック出来るのさ。コンスタンスに稼ぐ奴らをプロって呼ぶのさ」

「あいつらは俺達以上に、このゲームに時間と情熱を注いでいる。俺らが出張っても殺られるのがオチだ」

「…それでも、君達じゃないといけないんだ。頼むよ、2人とも。君達しか頼れないんだ」

こうして俺達は、GGOの内部調査を行う事になったのだった。

「…き君！優月君！」

「っ!?!…明日奈…先輩…」

「どうしたの？何かあった？」



いつの間にか先輩が目の前にいた。

先輩は巻き込めない。

これは…俺がカタをつける。

「何でもありません。先輩、今日の服もよく似合ってます。ていうか…S A Oカラー？」

「うん！ありがとう！実はそうなの。…フフ、優月君も似合ってるよ。同じくS A Oカ

ラーだね！」

「ですね。行きましょう！」

そう言っただけは、先輩の手を取り歩き出す。

いつか先輩もG G Oに招待して、シノンも巻き込んでって考えてたけど、しばらくお

預けだな。

(…優月君?)

どこかいつもと雰囲気が違う優月に、明日奈は違和感を覚えていた。

## 4 5 話

side ツキノワ

「…遅い！」

【SBCグロッケン】にある、【総督府】と呼ばれる建物。

ここで今日の17時まで、GGOのトーナメント【Bob (Bullet of BULLETs)】のエントリーが行われる。

なのだが…

「シノンとキリトは、何してやがる！」

出場予定のシノンとキリトが、まだ来ないのだ。

もう時間ギリギリだぞ…！

そう焦っている、向こうの方から、見慣れた水色の髪の少女と、黒髪の少女。

「シノン！遅い…！？その子は？」

「ごめんなさい！この子の面倒見てたら、遅くなっちゃって…！とにかく先にエントリー済ませるわ！貴女も急いで！」

「は、はい！」

2人は慌ててエントリーを済ませる。

「ふう…ギリギリだったわね。ああ、紹介するね。コイツはツキノワ。私のパートナーで、こんな見た目でも男よ。ツキノワ。この子は…名前聞いてないわね。なんて言うの？」

「ええつと…キリ…ト…です…」

…え？今なんて言った？

…キリトだと？

「…ちよつと来て」

「はい…」

俺はシノンを見無視して、キリトの腕を引き、連行する。

「…お前、キリトだろ」

「…ツキノワだよな？」

「なにしてんの!?!もしかして何も言っていないの!?!」

「いや…だって…ナンパだと思われるのも…!それだったら、このまま利用しちゃおうかと…」

「バカか!後で絶対にバレるんだぞ!?!本当にバカかお前は!?!」

俺はキリトを説教して、シノンの前に出させる。

その様子を不思議そうに見るシノン。

「ええつと…実は…ごめんなさい!」

キリトは自分のアバターカードを可視化して、シノンの前に突き出す。

「え?ええつと…k i r i t o…男!?嘘!?その見た目…だもんね…」

「おい、俺を見て納得すんな。まあなんだ、こいつ俺の知り合いなんだよ。悪気あつた訳じゃないんだ。すまん」

俺も一緒に謝る。

特に何か不利益をこうむつた訳では無かつたのか、何事もなく了承された。

o u t s i d e

エントリーを済ませたツキノワ達は、そのまま待機ルームに着いた。

「ツキノワは何ブロックなんだ?」

「Eだけど。2人はFなんだよな」

「ええ。当たるとしたら決勝ね」

そう聞くと、ツキノワはどこか、安心したように息を吐く。

「ツキノワ?」

「いや、B o Bは決勝まで行けば本戦への出場は決定だから。2人は順当に勝ち進めば、

両方とも本戦出場出来るって事」

ツキノワがそう説明すると、キリトは納得したように頷く。

「ま、生き残ればって話しよ。そしてもし生き残っても、私が教えてあげる。…敗北を告げる、弾丸の味を」

シノンの挑発的な一言を受けたキリトは、逆に不敵な笑みを浮かべて

「…へえ。それは楽しみだね」

逆に挑発を仕返した。

睨み合い2人を尻目に、ツキノワは対戦相手を考える。

(大抵の奴らはなんとかなるが…問題は「闇風」だな)

闇風とはGGOToppプレイヤーの1人で、前回BOBの準優勝者だ。

とにかくAGTを極振りしたこの男は、とにかく速い。

1度動きだしたこの男を捉えるのは、至難の業だ。

(幸い決勝で当たるから、負けても問題ないが…それ抜きにしても、やるからには勝ちたいしな…)

そんな事を考えていると、突然ツキノワの体が光り出す。

「お、始まったか。行ってくるわ」

ツキノワはそのままワープして、待機ポイントでカウントダウンを見ている。

「対戦相手は…【赤兎馬丸】？初めて聞いたな」

とにかくツキノワは装備を整えて、フィールドに飛ぶのを待つ。

飛ばされたのは、市街地だ。

「やれやれ…殺りますか」

ツキノワはフィールドを走り出す。

曲がり角に警戒しつつ、出来るだけフィールド全体…特に裏道や抜け道を知ろうと、キョロキョロしながら走る。

だから恐らく、運が良かったのだろう。

曲がり角を曲がった瞬間

「~~~~ツ!!」

「ヒヤツハ~~~~!!」

機関銃の弾幕を避けられたのは。

ドガガガガガガガガガガガガガガガツ!!!

「オラオラオラオラ~~~~!!」

「チツ…トリガーハツピーかよ」

(あういうのが、リアルだとしてもない陰キヤだったりするんだよな…)

ツキノワはそんな現実逃避もそこそこに、路地裏に目をつける。

「…とりま行つてみますか」

ツキノワはすぐその路地裏に入り込み、そつと覗き込むと

「…いや、マジか」

全くのノーマーク。

チラリともしない。

「…脳筋バカめ」

ツキノワはフルオートから単発に切り替えて、そつとスコープで覗き込んで

「…チエツクシツクスだけ、脳筋くん」

パンッ！

シツクスどころかワンチエツクもしてない、おバカさんの脳天を撃ち抜いたのだつた。

「…ふう。やれやれだ」

無事初戦を勝ち抜いたツキノワは、ぶらりとエントランスを散歩していると、顔色真つ青のキリトを見つける。

「キリト!?!どうした!?!何があつた!?!」

慌てて駆けつけると

「つ、ツキノワ…あい、あいつら…ら、ラフコフが…!?!」

「…は？」

イマ、ナンテイツタ？

…ラフコフ…だと？

「ラフコフって…あいつらか!？」【ラフィン・コフィン  
笑う棺桶】か!？」

ツキノワがそれを問い詰めようとした時、キリトの試合がマッチングされ、いなくなってしまう。

そこにシノンが近づいてくる。

「お疲れ様。…どうしたのよ、その顔」

「いや…ちよつとな…」

そう言いながらツキノワは、スクリーンを見上げる。

そこには、鬼気迫るような迫力と共に、フォトンソードで弾丸を払いながら駆け抜け、そのまま横風に薙ぎ払うキリトがいた。

そんな時、ツキノワも光り出す。

「お、俺の2回戦だな。行つてくる」

ツキノワの次の相手は「ザビエル」。

このプレイヤーには、覚えがあった。

アサルトライフルを主武装とし、ハンドガンとナイフを副武装とする、典型的なバト



ルスタイルだ。

(キリトに出来るなら、俺だって…)

ツキノワは何気なくフォトンソードを撫でながら、スタートする。

今度は森林ステージだった。

お互い中距離武器、なんならザビエルの方が火力が高い為、有利だ。

お互いある程度は近づかなくてはいけなく、それ故に鉢合わせの遭遇戦になるのは、致し方なかった。

唯一ツキノワにとっての誤算は

「なんだよあれ…硬すぎんだろー!」

ザビエルの防御力が高すぎるのだ。

何やらヘンテコな壁を、用意してきたのだ。

機動力を殺し、待ち構えるスタイル。

(俺がサブマシンガン使いだと、見越しての戦い方か!?)

崖を背にして構えるその姿は、まるで要塞。

当然背後を取られるような、マヌケはしないだろう。

ツキノワは自分の武装を確認する。

その中に使えそうなのは手榴弾くらいであり、さて、どうすれば?と悩んでいると、

さっきの光景を思い出す。

「弾道予測線を予測する……」

そうしてツキノワは、フォトンソードを手に取り、一気に駆けだす。

弾道予測線が、ツキノワの体を赤く染める。

それに合わせて、あとはタイミングを見極め、剣を振る。

「な……に……い……!?!」

自分の撃った銃弾が、尽く切り伏せられ、慌てるザビエル。

弾切れを起こした瞬間、ツキノワはグレネードを投げつける。

その目標は、上の崖。

ドガァン!

爆発音と共に、崖が崩れて瓦礫が落ちてくる。

「うわあ!?!」

慌てて逃げ出すザビエルにむかって

「くらええええええええええ!!」

そのままフォトンソードで、貫くツキノワ。

「ぐわあああああああ!?!」

「おおおおおおお!!」

そのまま気合一閃、横風に切り払うツキノワ。  
こうして2回戦も無事に突破したのだった。

side 優月

結局俺は、決勝で闇風相手に負けた。

流石にGGO最速クラスの速さと経験には、反応は出来てもジリ貧になり、押し込まれてしまった。

後で聞いた話だが、キリトはシノン相手に勝つたらしい。

「結局、ラフコフは出てこなかったな」

和人が見たラフコフメンバーは、一体誰なのだろうか。

そう思いながらバイクを走らせ、俺は家に帰った。

「ただいま……?」

女物の靴が幾つかある。

その内2足には、見覚えあり。

その内1足はいつも見ている深澄の靴で、もう1足は、明日奈先輩だ。

では残りは……?

そう思いながら、リビングのドアを開けると

「あら、おかえり優月」

「お邪魔してるわよ、優月！」

「お久しぶりです！優月さん！」

「こんにちは！優月さん！」

「お邪魔してるね、優月」

中には深澄を始め、里香、珪子、直葉、千笑がいた。

要は女子会か？

「おつす、久しぶりみんな。今日は女子会々？」

「うん、そうだよ」

後ろから声をかけてきたのは、明日奈先輩だ。

「おかえり、優月君」

「ただいま、明日奈先輩」

殺伐とした場所にいたからか、先輩を見た瞬間、どうにも体から力が抜けかけた。

それを強引に踏ん張って笑いかけると

「ほうく『おかえり』だって、深澄！」

「そうね。すっかり新婚さんかしら？」

「つ!?!／／ふ、2人共!／／／」

里香と深澄が先輩を明日奈からかい、それを皆が笑う。

それを見ながら、俺は千笑に耳打ちする。

「千笑、和人が少し精神的に弱ってるかもだから、気にしてあげて」

「っ……分かった。ありがとう」

その直後、千笑のスマホが鳴る。

「…私、そろそろ帰るね。呼ばれちゃった」

「呼ばれた？誰に？」

「…和人／＼／」

顔を赤くする千笑に、少しでも羨ましそうな顔をする瑠子と直葉。

そして一瞬だけ羨ましそうな顔をしたが、すぐに持ち直して茶化したす里香。

その様子を3人は、少しでも引きつった顔で見っていた。

「私も帰ろうかな。そろそろ門限近いし」

「じゃあ、送っていきます。深澄、行ってくる」

それを皮切りに、それぞれ帰り支度を整えだし、帰路に着く。

「…ねえ、優月君。何かあった？」

「…」

その言葉に、すぐに返事が出来なかつたことを、俺は後悔した。

本音を言えば助けて欲しい。

でも、既に賽は投げられた。

進むことも退くことも出来るが、後追いは出来ない。

俺と和人、2人しか戦えない。

だから俺は…

「…大丈夫、何にもないですよ」

そう強がることしか出来なかった。

「そっか…」

「…明日、和人と一緒に、GGOの試合に出るんですが、もし良かったら応援してください。ALOでも見れるはずなので」

「っ！うん！精一杯応援するね！」

2人は手を繋いで、楽しそうに夕焼けに染る道を歩くのだった。

## 46話

outside

「……」

優月と和人は、静かにGGOにログインする準備を整えていた。

「……なあ、優月」

「どうした？」

「……お前は、SAOで殺した人の事、覚えてるか？」

和人の質問に、優月の手が止まる。

少し目を瞑り、やがてポツリと呟いた。

「……顔だけなら、覚えてる。ほとんど知らない奴だったしな。名前と顔が一致してるのは、クラデイルと、ヒースクリフだけだ」

「そうか……すまない、不躰な質問で」

和人はそれきり、口を開くことは無く、優月もまた、何かを語ることはしなかった。

「……忘れたいと、思った事無いのか？」

「……お前さ、俺の事嫌いなの？」

「な、なんでそうなるんだよ!」

優月の呆れたような一言に、和人は慌てて立ち上がって否定する。

「当たり前だろ。さつきから絶妙に俺のトラウマ抉ってきやがって…」

「トラウマって…!」

『『忘れたい』かって? 忘れたいに決まってるだろ。俺がどれだけ取り繕っても…: どれだけご大層な理由があっても…: 俺は9人…いや、11人も人を殺した、殺人鬼なんだぞ!』

優月は耐えきれなさそうに、頭を抱えて、体を震わせる。

その様子に、和人は慌てて優月の体を摩ってやる。

「優月!? 大丈夫か…!」

「それでも…: それでも! 俺は生きたい…! 明日奈先輩や、姉貴…: 和人や皆と…: 生きたいんだ…!」

「優月…」

不安に揺れ、脂汗を浮かべながらも、優月は強く虚空を睨みつける。

「…もし、あのデスガンが、ラフコフの生き残りなら、俺がケジメをつける。あの事件で一番人を斬ったのは、俺だから。だから…: 「今度こそ」!」

優月の言葉を、和人は強引に割って止める。



「今度こそ、お前だけには背負わせない。俺も一緒に背負う。俺達は…兄弟、なんだから」

和人のその目は、とても強く、そして優しく優月を見ていた。

その目で見られた優月は、不思議と体から力が抜けていった。

「…行くぞ、兄弟。今日でケリをつける」

「…ああ、やるぞ兄弟」

「リンク・スタート！」

sideツキノワ

GGOにログインした俺達は、直ぐにエントリー会場に向かい、本戦の準備をしていた。

そこに、シノンが通りがかった。

「よう、シノン」

「…おう」

「…ええ」

キリトはフレンドリーに挨拶したが、俺とシノンは酷く淡々としている。

というのも、俺もシノンも、既に戦闘態勢であり、お互いをパートナーでは無く、ライバルと認識しているからだ。

このBOBは、個人戦だ。

だから、例え普段チームを組んでるパートナー同士でも、敵だと認識してるのだ。  
なんだけど

「つ、ツキノワ…？し、シノン…？2人共…喧嘩したのか？」

このバカキリトは、そういう考えでは無いらしい。

はあ…仕方ねえな。

「…シノン、このあんぽんたんに付きあつてくれ」

「…はあ。仕方無いわね。貴方ねえ、私達は敵同士になるのよ？貴方と仲良しこよしする必要無いじゃない。今だけはツキノワとだつて、パートナーでは無く、ライバルよ」という訳で、結局始まるまで、一緒にいる事に。

エントランスに着くと、そこは色んなプレイヤーが、賭けをしたりインタビューを受  
けたりと、お祭り騒ぎになっていた。

「ん？お、おい！あれ、キリトちゃんだろ！」

「しかも一緒にいるのは、ツキノワちゃんじゃん！」

「だけじゃねえ！シノンもいるぞ！」

こりや…注目の的だなあ…。

まあ、俺もキリトも目立つような行為しちやつたしな…。

「…ツキノワ」

「うん？」

「ちよつと遊ばない？」

「どういうつもりなのか？」

「キリトが俺に耳打ちしてきた内容に」

「はあ!？」

「思わず声を張り上げる俺。」

「そのせいで、余計注目を集めてしまう。」

「はあ…」

「やるぞー！君たち…」

「応援してね♡」

「2人揃ってウインク決めながら、可愛いポーズ。」

「しかも、わざわざ頬を寄せあって、手を繋ぎあって媚びる。」

「「「「うおおおおお!!」「「「「」」」」」

「こいつら…単純すぎるだろ。」

「ヤバイ…吐き気がしてきた。」

「あんた達…何してるのよ?」

全くをもってその通りですね、ハイ。

さて、俺達でのルール説明。

「さて、どうせまともに見てないだろうから、説明するぞ」

B o B は簡単に言うと、直径10kmの円形フィールド。

山あり谷あり、森あり砂漠あり、市街地、川ありの複合ステージ。

試合時間は午後から始まるから、長引けば夜になる。

配置位置はランダムで、最低限1000mは離れている。

「それ、ちゃんと遭遇出来るのか？」

「銃で撃ち合うから、それくらいは必要なのよ。それに、参加者には「サテライトスキャ

ン端末」っていうのが、自動配布されるわ」

「サテライトスキャン端末？」

「15分に1回、空を飛ぶスパイ衛星が、全員の居場所を教えてくれる…という設定」

つまり、1ヶ所に潜伏出来るのは、15分が上限ということになる。

「そんなのがあるなら、スナイパーには不利なんじゃないか？」

「その程度のハンデでどうこうなるなら、B o B 有力選手にはなれないさ」

キリトの少し意地悪な顔に、俺は呆れながら返す。

この女を舐めてると、マジで痛い目を見る。

隣で戦ってきて、それを実感している。

「…シノン。最後に聞きたい事がある」

「はあ？まだあるの？」

「シノン、俺からも頼む」

「ここからが、俺達の本題。」

俺もB O Bは初参加だから、ルールはともかく、選手までは分からない。

だから、シノンに聞かなくてならないのだ。

「…何よ」

キリトは参加者名簿を可視化して、シノンに見せる。

「参加者の中で、初参加の奴、知らないか？」

「頼む、大事な事だ」

「…はあ。名前だけなら」

そう言つてシノンは仕方なさそうに、名簿を見る。

「初参加は…私の頼れるパートナーと、どっかのムカつく光剣使い除くと、3人ね」

3人…以外に少ないな。

「誰だ？」

「ペイルライダー…銃士X……ステイベン<sup>ス</sup>ッテ<sup>ティ</sup>ー<sup>ブ</sup>ン<sup>ン</sup>ッて読めばいいのかしら？」

S t e r b e n…これは…。

「違うな。これはドイツ語の英語表記だ」

「ドイツ語?どういう事?」

「…医療用語なんだ、これ。医療用語には、ドイツ語がよく使われる。読み方は S t e r b e n。意味は…死」

「死…」

これで分かった。

デスガンの正体は、S t e r b e nだ。

ただ問題は

「こいつが何者なのかが、分からない…キリト、何か特徴は無いのか?」

「…ボロマントに、骸骨のような仮面…」

骸骨のような仮面…?

記憶が疼く。

「カタコトの言葉使いに、後は、目の部分が赤かった」

カタコト…目が赤い…?

「…ま、まさか!!」

そうか…そういう事か!

だからあいつは、俺の前には現れなかった！

俺に会えば、直ぐに正体が割れるからだ！

「ちよ、ちよつと！どうしたのよ!？」

「ツキノワ！誰かわかったのか!？」

「…ザザだ。そいつの正体は、赤目のザザだ!!」

「あ…あああああ!!」

赤目のザザ。

俺と戦った、ラフィン・コフィン笑う棺桶の最高幹部の1人。

そして…対人戦において、俺が最も苦戦したプレイヤーの1人だ。

「…何者なの…そいつ…?」

「俺が本気で殺しあつた男だ。…あのSAOで、本気で殺しあつた」

「ツキノワ!?!それは…」

「シノンには教えてある。気にするな」

「…『それでも君は、引き金を引けるか』」

何の話だ？

俺はキリトを見ると、気まずそうな顔をして、目を逸らした。

「キリトは昨日、そう言ってたわね。ツキノワは、引ける?」

「…多分、引ける。俺は、躊躇わない…いや、躊躇ったらいけないんだ」  
俺はもう躊躇わない。

俺は、戦う事から逃げない。

そして…今度こそ断ち切ってやる、この負の連鎖を。

「覚悟しろ、ザザ」

俺の殺意に満ちたその声は、賑やかな空間に低く小さく響いたのだった。

「…そろそろ、待機ドームに行きましょう」

そうしてついに、カウンドダウンが始まり…俺達の転移が始まった。

「Bullet of Bullets! スタート!!!」

さあ、始めよう。

鉄と火薬の匂いが充満する殺し合いを。



## 47話

outside

銃弾の雨が降りしきる。

そんな雨を、ツキノワは軽やかに駆け抜け、占拠されている崖の真下に入り込む。

「…ふう…」

スコープを覗き込み、狙いを定める。

ツキノワの存在を確認しようと、覗き込んだプレイヤーが見たのは

「バーカ」

こちらにしつかりと照準を合わせた、ツキノワ。

そして頭を貫く衝撃が、彼の敗北を告げるのだった。

「…次」

ツキノワは森の中に逃げ込み、走り続けていると、黒い影を見つけた。

「キリト！」

「っ!? ツキノワ! 無事だったか!」

「当たり前だろ! さてと、とりあえず無事に合流出来たはいいが、どうするよ?」

「デスガン撃破の為、初めから手を組んでいる2人は、まずは合流する事を目的としていた。」

次の目標は…

「サテライトスキャンを、避けたいな」

「ああ、あいつはきつと、俺達の事を知ってるからな」

「デスガンに居場所を知られたくない2人は、どうにかしてスキャンを避けられないか、策を練る。」

「…なあ、ツキノワ」

「ん？」

「あれってどう思う？」

「キリトの指さす先には、大きい運河が。」

「…いいねえ、やってみるか」

一方のシノン。

「残りは21人…リッチーは迎撃スタイルだから、動かないはず。狙うならこつちの…

「ダインとペイルライダーね」

（あいつら、無事かしら？）

調べようとして、時間が来る。

(…知るものか、あんな奴ら)

そう思い直し、ダイスが構えそうな陸橋を狙える崖から、シノンも狙撃の用意を構える。

「どんな時もチェックシックスよ、ダイン君」

そう言つて引き金を引こうとした瞬間

ガチャリ。

「どんな時もチェックシックスだぜ、シノン君」

「っ!? ツキノワ…!? いつの間に…!」

すぐ背後でツキノワが、AR-57を構えていた。

「お前なら、ここで陣取るとヤマを張っただけだ」

ツキノワは、シノンの狙撃の傾向を分析して、このポイントを割り出したという事だ。

シノンは諦めて、両手を上げると

「いや、まだお前を撃たない」

「え?」

「その代わりに、俺達の邪魔をするな。もししたら、頭を吹っ飛ばす」

それだけ言うと、ツキノワは直ぐにシノンの隣に並び、双眼鏡で様子を伺いだした。

気づけば、隣にはキリトがいる。

「…どういふつもりよ」

「…デスガンを倒す」

それだけ言うと、ツキノワとキリトは橋での戦いを注視しだしたのだった。

side ツキノワ

森の方から、フルフェイスのヘルメットを被った、かなり軽装な男が出てきた。

あれが…ペイルライダー…。

「始まるぞ」

キリトの言葉を皮切りに、ダインが引き金を引いたが、それは軽やかは身のこなしで  
 躲される。

「軽業スキルか！かなりのレベルだな！」  
アクロバット

「ええ、しかも装備を軽くする事で、3次元機動をブーストしてるわけね。…あいつ、かなり強い」

「…決着だな」

俺の言葉と同時に、ダインは頭を撃ち抜かれて死んだ。

「…撃つわよ」

「了解」

シノンが撃ち抜くのを確認しようと、見ていると、ペイルライダーが何かに気づいた

直後、突然倒れた。

「今のはなんだ!？」

「銃声を聞き逃した!？」

「いや、聞こえなかったぞ! それにあいつ…なにかに気づいた…?」

俺はペイルライダーの見た方を確認すると

「おい…! 左奥! あれ!」

俺が見つけたのは、ボロマントに赤い目。

あれは…間違えない…!

「デスガン…ザザ…!!」

「あいつの武器…まさか、サイレントアサシン!？」

サイレントアサシン…あれが!？」

サイレントアサシンとは、サプレッサー標準搭載の、高性能スナイパーライフル。

存在だけは噂されてたが…実在してたのか…!

「ペイルライダーはどうして、さっきから動かないんだ!？」

「スタンバレットよ! 動かないんじゃないよ!」

その時、デスガンがスナイパーライフルから、ハンドガンに持ち替えて、狙いを定めた。

「…シノン、撃て」

「撃てって…どつちよ?」

「ボロマントだ!早く撃つてくれ!」

「頼む!あいつが撃つより早く!」

俺とキリトの声も虚しく。

バァン!

デスガンの銃が、ペイルライダーを撃ち抜いた。

しかし急所を狙っていないハンドガンでは、1発では無理だったのか、スタンが切れたペイルライダーが起き上がり、シヨットガンを構えた…のだが。

突然心臓の辺りを抑えながら苦しみだして…やがて、接続が切れた。

「オレト…コノ銃ノ真ノ名前ハ…デスガン。オレハ…イツカ…才前達ノ前二モ…現レル。忘レルナ…マダ…終ワツテ…イナイ…イツツ…シヨータイム」

中継カメラに好き勝手演出して、消えてっていった。

「…間違えない、本当にデスガンだ」

「…あの噂の?冗談でしょ?」

「いや、ゼクシードと、薄塩たらこが死んだ。そして恐らく…ペイルライダーも死んだな」

キリトと俺の言葉に、シノンも何も言えずに黙り込む。

いや、シノンの顔色が悪くなっていく。

「シノン?…シノン!」

「っ!」

「大丈夫か?」

「…ええ、気分が悪くなっただけよ」

「ならないんだが…」

俺とキリトは、デスガンを追いかける用意を整えて、移動を始める。

「ここで別れよう。俺達はデスガンを追う。お前はあいつに出来るだけ近づくな。いい

な?行くぞ、キリト!」

「ああ!」

「ちよつと!待ちなさいよ!」

Outside

シノンの声を背に、ツキノワ達はデスガンを通ったと思しき道を走る。

「だから待ちなさいって!…私も戦う。あいつは相当強い。あいつと戦って、生き残る保証は無いわ。そうになったら、私との決着はどうなるのよ」

「ダメだ!あいつは危険すぎる!」

「どこに行ったかも分からないのに、安全もへったくれも無いわ。危険度は一緒よ」  
（こりや、聞かねえな…）

そう思っていると、人の気配を感じた。

（数は…2人）

ツキノワとキリトは目配せして、同時にフォトンソードを構える。

「なっ!?!」

驚くシノンンを背にして、ツキノワ達は飛んできた銃弾を全て斬り捨てた。

「うそお!」

「ありえねえ!?!」

どうやらツキノワ達を倒す為に、一時共闘するつもりらしい。

「俺達が抑えるから、バックアップよろしく」

「…分かった」

「やるぞ、舞闘家」  
ダンサー

キリトの軽口に、ツキノワも笑う。

「懐かしい2つ名だな…ブラツキー!」

再び放たれる弾幕に、ツキノワ達は再びフォトンソードで対抗した。

「フッ!」



「ハア！」

お互いの剣がぶつからないように、そして体に当たらないように振る。

その光景を見たシノン

(すくく…綺麗…)

舞闘家と呼ばれていたツキノワと、それと同等の剣技を持つキリト。

その美しい剣技を以て、全ての弾丸を切り伏せた2人の声に反応して

「今だシノン！」

2人のプレイヤーを、ヘカートの餌食にしたのだった。

一方、この試合は他のVRMMOでも、観戦可能になっていた。

ここはそんなALOにある、とある酒場にて。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

試合を観戦していたアスナ、ミト、サチ、クライン、リスベット、シリカ、リーファは黙り込んでいた。

そんな中、一番最初に口を開いたのは、クラインだった。

「…SAOにはな、何があつても絶対にHPをゼロにしない、そんな不文律があつたんだ。何せ、あそこでは本当に死に直結するからな。だがあいつら…笑う棺桶（ラフィン・コブリン）だけは、なんの躊躇いも無く、殺していったんだ。さっきの『イツツシヨータイム』っていうのは、

ラフコフのリーダー、P o h の決めゼリフだったんだ。野郎はおそらく、幹部の1人だ」  
次に言葉を繋げたのは、ミトだった。

「…被害者の数は計り知れない。それで私達攻略組は、討伐隊を編成して、ラフコフを捕縛しようとしたの。でも作戦は漏れていて…結局ラフコフの死者は20名以上、私達も10名近くの死者を出した、とんでもない事件があったのよ。そして20名以上の内、9人を殺したのは…ツキノワなのよ」

「…っ?! そんな…!」

あまりの衝撃的な内容に、その事件を知る者以外、言葉を失った。

「…私、あの人に話を聞いてくる!」

「あの人って…菊岡のこと?」

アスナの言葉に、ミトが確かめる様に聞き直して、アスナはそれに頷く事で肯定した。

「…分かった。私も1回落ちるわ。G G O 関連の事件が何かないか、調べてみる」

こうしてアスナとミトが、それぞれの調査に乗り出した。

side ツキノワ

俺達はシノンの助言を元に、市街地エリアまで来た。

とりあえず何処かに潜伏して、サテライトスクランを待つ事に。

その結果

「Sterbenステルベンがないな…」

俺達は市街地エリアを隈無く探したが、どこにもおらず、ギリギリまで広範囲で探したが、それでも見つけれられなかった。

「どこにもいない!?!」

「川に潜つて、身を潜めてるのか?」

いや、川は俺達がずっと確認していたから、見落としていない。

となると…他の方法で、身を潜めてる…!?

「キリト! シノン!」

俺は気配を感じて、咄嗟に避けさせた。

その瞬間、俺達がいた場所に、銃弾の雨が降り注ぐ。

「あの3人を殺せ!」

「とにかく厄介だ! 強い奴から倒すぞ!」

チツ…目立ちすぎたか…!

どうやら俺達は、完全にチームとして扱われてるらしく、しかも厄介者扱いされているらしい。

「くそ! シノン! 狙撃ポイントを探せ! 出来るだけ近くだ! その間は俺達が引きつける!」

「…了解！死ぬんじゃないわよ！」

シノンが走り去っていくのを確認して、俺達も反撃に出る。

「キリト、突っ込め！俺がフォロースする！」

「頼むぞー！」

キリトがフォトンソードで、弾きながら突撃するのを、俺はAR―57でフォロースする。

そんな繰り返しを5分程しながら、俺は焦りを感じていた。

遅い…幾ら何でも遅すぎる…！

殺られたか…いや、シノンがそんなハマするとは思えない…まさか…!?

「キリト！撤退するぞー！ついてこい！」

俺は周囲の廃車を爆発させて、爆煙に紛れて、その場を離れる。

そのままキリトと合流して、シノンを探す。

「ツキノワ！シノン遅すぎないか!？」

「トラブったんだ！今からしらみ潰しに、あいつが行きそうなポイントを探す！」

それから数ヶ所回って、ついに追いついた時。

ボロマントが、シノンに向けて銃を撃とうとしていた。

「デメエエエエエエエエエエ!!！」

俺はすぐにAR―57をフルオートで、ぶっぱなした。数発が奴の背中に当たり、かなりのダメージを与えた。その隙にグレネードを、わざと起動させずに投げ込む。

「っ!？」

そのグレネードに気を取られて、デスガンが逃げた隙に、シノンとヘカートを回収。後ろから銃弾が何発か飛んできて、俺の体をかすめるが、それを無視して直ぐに逃げ出した。

その時ついでに、投げたグレネードを爆破させて、足止めに利用する。

「ツキノワ―こっちだー!」

バギーバイクに股がったキリトが、俺達を拾い、俺達は何とか脱出したのだった。

## 48話

side シノン

「くそ！シノン！狙撃ポイントを探せ！出来るだけ近くだ！その間は俺達が引きつける！」

「…了解！死ぬんじゃないわよー！」

私はツキノワからのお願いに、可能な限り早く、ポイントを探して見つけた。割と警戒が厳しく、少し遠くなってしまったが、許して欲しい。

そう思い、ヘカートを構えた瞬間、肩に衝撃が走った。

「っ!?うた…れた…!?!」

声が上手く出せない。

そう思いステータス画面を確認すると、麻痺がかかっていた。

肩には針のような、小さい銃弾。

「スタンバレット…!?!」

まさか…!?!

そう思った時、少し先の廃ビルの光景が少し歪んで、人の形が現れた。

その正体は…デスガンだった。

メタマテリアル光歪曲迷彩…ですって…!?

「ツキノワ…キリト…オ前達ガ…本物カ…偽物カ…コレデ…ハツキリスル」

そう言つて引き抜かれたハンドガンを見て、私は凍りついた。

その銃は私の…朝田詩乃の弱さの象徴。

そして、恐怖の象徴。

「ヘイシン…54式…」

どうして…どうしてここに…!?

凍りついた体で、抵抗出来る訳が無く、為す術なく殺される…そう思った時

「デメエエエエエエ!!」

怒鳴り声と共に、発砲音が鳴り響いた。

聞き慣れた声と、聞き慣れた銃声。

「ツキ…ノワ…!」

それはツキノワの声と、彼の相棒、AR-57だった。

ツキノワはグレネードを投げつけ、デスガンを追い払ったが、グレネードは爆発しない。  
い。

まさか…起動させずに投げたの!?

驚いてる内に、ツキノワに、ヘカート共々回収された。

ツキノワは振り向きざまに、グレネードを撃ち抜いて、爆発させた。

「ツキノワ！こつちだ！」

キリトがバイクをまわし、私達はそれに乗って、何とか離脱に成功したのだった。

outside

(何とかなつたか…)

ツキノワはグツタリとしながら、キリトがシノンにロボットホースの破壊を依頼するのを聞いていた。

しかしいくら待っても破壊音が聞こえず、シノンの方を見ると

「引けない…引き金が…引けない…！」

恐怖のあまり、手が震えて指が動かなくなっていた。

ツキノワはすぐに、自分の銃で狙い撃ちしようと思った時、ゾツとした。

デスガンがこつちに向かって、走ってきていたから。

「クソ！キリト！奴が来た！すぐに出せ！」

「つ！わかった！捕まれ！」

キリトが直ぐにバイクを走らせて、距離をとる。

だが、それ束の間。



(しつこいな……!)

デスガンは、ロボットホースに股がって、追いかけてきたのだ。

「マジか、あの野郎!あの時の意趣返しのもりか!」

ロボットホースは、扱いがかなり難しい分、踏破力が桁違いだ。

こういう障害物の多い悪路には、最適なのだ。

「キリト!速度を上げろ!追いつかれるぞ!」

「無理だ!その悪路じゃ、これが限界だ!」

(クソ……!どうする!?)

「ア……アア……嫌……来ないで……!」

ツキノワが対応策を考えているその時、弾道予測線が、シノンに向けられる。

(間に合え……!)

ツキノワは咄嗟にフォトンソードを抜いて、銃弾を弾いた。

だがそれが、シノンの心を決壊させるきっかけになってしまった。

「いやあああああああ!!!」

シノンが俺に縋って、泣きじやくる。

「シノン!落ち着け!」

「嫌だ……助けて……」

ツキノワは恐怖で固まっているシノンンを、強引に引き剥がして、肩を掴んで揺らす。

「シノンン！お前の銃で奴を狙撃しろ！」

「無理…無理だよ！」

「無理でもやるんだ！やらないと、俺達が殺られる！当てなくていい！牽制だけでいいんだ！」

ここまで言われても、シノンは身体を震わせるだけで、動けない。

ツキノワは舌打ちをする。

「だったら俺にヘカートを貸せ！俺が撃つ！」

「っ!？」

（ヘカート…私の分身。私だけが扱える…）

シノンはやっとヘカートを構えて、スコープを覗く。

しかしバレットサークルは酷く不安定で、照準自体も揺れで安定しない。

しかし、やはり恐怖で指が動かなかった。

「ダメ…！引き金が引けない…！私はもう…戦えない…！」

「違う！戦えない奴はいない！戦うか、戦わないか、その二択を選ぶだけだ！それに…」  
ツキノワはシノンの手を、そっと包み込む。

驚いて振り返るシノンの目には

「俺も一緒に引く。俺達はハートナーだろ?」

不敵な笑みを浮かべ、その目には強い光が宿っていた。

(ツキノワ…貴方はどうして、そんなに強いのか?)

シノンは不思議と、体の震えが無くなっているのに気がついた。

それと同時に呼吸が落ち着いてくる。

「…深呼吸だ。ゆっくり息を吸って…ゆっくり息を吐け。何も考えるな、ただ撃ち抜く事だけを考えろ。結果なんてのは、撃てば分かる。だから、ただ引き金を引く事だけを考えろ」

ツキノワの声が、不思議とシノンを冷静にさせた。

これで指は動くようになった。

だが、別の問題が残っていた。

「ダメ…!揺れが激しすぎる…!これじゃ!」

「大丈夫」

シノンの不安を払拭するような、強い声で、ツキノワが返す。

「俺達を信じろ。キリト!」

「5秒後に、揺れが止まる!備えろ…:2, 1, 今!」

キリトの宣言通りに、バギーバイクの揺れが止まった。

障害物を利用して、高く飛んだからだ。

「っー！」

シノンとツキノワは同時に、ヘカートの引き金を引く。

その弾丸は、あらぬ場所へと飛んでいく。

(…外した…)

「ピンゴ♪」

外したと思うシノンと、逆に当たったというツキノワ。

シノンが疑問をぶつけるより早く、ヘカートの弾丸は廃車にぶつかり、大爆発を引き起こした。

(…ここまで、読んでたの…!?)

シノンはこの光景に驚愕していた。

(この2人は、強いとか弱いとかじゃない。自分の出来る事を全力でやってるんだ。そしてそれこそが…本当の強さ！)

「…キリト、とつととトンズラしようぜ」

「ああ、掴まってるよ」

こうして3人は、市街地を抜け、砂漠地帯へとバギーバイクを進めたのだった。

sideツキノワ

俺達はサテライトスクランを避ける為、砂漠地帯にある洞窟に身を潜めた。

どういう理屈で *S t e r b e n* が、サテライトスクランを避けてるかは知らないが、ここなら入口は一つの上、砂だらけなので足音も足跡も残る。

「あいつ、どうやって現れたんだ？」

「…光学迷彩マントよ。メタマテリアル光歪曲迷彩っていうアビリティよ。それより、あの爆発であいつも死んだんじゃ…？」

いや、それはどうだろうな。

そう思っていると、代わりにキリトが答えた。

「爆発する直前、ロボットホースから飛び降りるのが見えた。無傷では無いだろうが、生きてはいると思う」

それにしてもあの野郎。

「圈内事件の嫌味か。ちくしよめが」

「そういえばお前、あの時乗馬スキル持ってたのか？」

「いや、リアル経験。一回だけけど」

「…文武両道を地でいくのか…」

俺達の日常会話が疑問だったのか、シノンが丸くなりながら、尋ねてくる。

「…怖くないの？あの男が」

「怖いよ」

俺とキリトは揃って即答した。

当然だ、怖くないはずが無い。

でも、それ以上に

「それ以上に、大切な人達が死ぬのが怖い。キリトが、シノンが死ぬのが怖い。だから戦う。最悪を避ける為に、俺は剣を取り、銃を握る」

「俺も似たようなものかな。大切なものがあるから、戦える」

結局、俺達は似た者同士…それだけだ。

さてと、用意も整ったし、回復も出来た。

「キリト。行くぞ」

「ああ。シノン。君とはここでお別れだ。本当はログアウトして欲しいが、大会中は出来ないしな」

「…逃げない。私も…戦う」

などと言ってきたシノンに、俺はため息をつく。

「はあ…。あのな、そんな状態で戦って何が出来る？本当に死ぬかもしれないんだぞ？」

「それでも構わない」

「…あ？」

こいつ、今なんつった？

「私…あいつがすごく怖かった。情けなく悲鳴を上げて…みっともなく泣き叫んで…でも、それじゃダメなの。私はもう、怯えて生きるのには疲れたの…。そんな弱いままの私で生きるなら…死んだ方がいい」

「…1人で戦つて、1人で死ぬ…そういう事か？」

俺の声が無意識に固くなっていく。

そしてそれは、キリトの雰囲気も同じだった。

別に俺は、他人の命には関心は無い。

74層の時みたいに、もし大切な人達が危険になるなら、俺はそれらを切り捨てる覚悟はある。

だがシノン、既に俺にとって大切な仲間だ。

見捨てる事なんて、出来はしない。

「お前が死んで、誰も悲しまないと？だとしたら勘違いだ」

「だつたら何？あんたには関係無いでしょ」

「あるに決まつてんだろ！お前と何ヶ月コンビ組んできたと思つてるんだ!!」

「うるさい！誰も悲しんでくれなんて、頼んで無い!!」

俺とシノンの言い合いは、完全な平行線であり、お互いに譲らなかつた。

「あんたは何なのよ!? 私の中に勝手に入り込んできて…! あんたに私の、何がわかるのよ!!!」

「分かる訳ねえだろ! テメエから歩み寄ろうともしねえで、何が出来るってんだ!!」  
「だったら!!」

俺この時、初めてシノンが泣いてる事に、気がついた。

そして初めて、シノンの涙を見た。

「だったら…: 貴方は握ってくれるの!!? この人殺しの手を!! この手を握って、私を守ってくれるの!!!」

人殺しの手。

この平和な日本でそんな事が起こるなんて、そうそう無いだろう。

きつと相当深いトラウマなのだろう。

だが、それでも、俺はシノンが望むなら

「握るさ、何度だって」

俺は何度もぶつけられるシノンの小さい手を、強く握り締める。

「お前が失意のどん底に落ちるっていうなら、俺は何度だってこの手を握って引つ張り上げる。お前が恐怖で動けないっていうなら、何度だってその背中を蹴り飛ばしてやる」



「…どう…して…そのまで…？」

何をいまさら。

そんなのは決まってる。

「お前はお前の弱さを補う為に、俺を育てたんだろ！だったら頼れよ！！俺達はパートナーだろうが！！」

持ちっ持たれっ。

頼り頼られて。

それが俺とシノンの関係性。

俺達はパートナーなんだから。

「…ツキノワ…ア…アア…アアアアアアアアアア！！」

俺は泣きじやくるシノンに上着を被せ、顔を見えないようにしてやる。

シノンの心が少しでも軽くなるように…そう祈りながら、シノンの頭を撫でるのだった。

## 49話

sideミト

アスナがログアウトして、私もログアウトしようとした時、戦況が動き出した。

「見て！ポロマントが動き出した！」

ポロマントが馬に乗って、バギーに乗っている3人の女の子を追いかけている。

「つておい！黒髪と金髪の名前を見ろ！」

クラインの声に、プレイヤーネームを確認すると、kiritto、thukinowaと書かれていた。

まさか…!?

「黒髪がキリトで、金髪がツキノワって事!？」

「あいつらネカマやつてるのか!？」

「お兄ちゃん!？」

「キリトさん!?! ツキノワさん!？」

私達はそれぞれ驚愕していると、不意にある事に気がついた。

「おい、ミト。ツキノワの奴、何やつてるんだ?？」

、クラインも気づいたらしい。

ツキノワは先ほどから、指を叩いたり、横に一回動かしたり…まさか!?

「また懐かしい暗号を…」

「暗号だあ?」

それはまだ、私達が小さい頃。

アニメの影響で、暗号とかにハマっていた私たちは、その時親に見つからないような、伝達方法を編み出した。

それがあの暗号だ。

手や足で50音を示すのだが、今の場合だと、指を叩く回数で行数を示して、引く本数で列を示す。

今なら、3回叩いているからさ行。

横線1本だから、1番上。

つまり、さをひたすら繰り返しているのだ。

「あんだ達って…」

「似た者姉弟だったんだなあ…」

「う、うるさいわよ!／／／とにかく、あれはさを表してるのよ!」

さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ…

「笹? 葉っぱかな?」

「リーファさん、それは違うかと…」

リーファとシリカの言葉で、不意にある事を思い出した。

そしてそれは、確信に変わった。

「ささ…あああああ! いた! そんな名前のプレイヤー!」

「ああ、間違えねえ!」

どうやらクラインも、思い出したらしい。

そう、こいつの名前は

「ザザ…【赤目】のザザ!」

私すぐにログアウトして、この事をお父さんに伝えたのだった。

sideツキノワ

「私ね…人を…殺したの…」

シノンの小さな声の、独白が始まる。

「5年前、東北の小さな町で起きた、郵便局の強盗事件でね」

報道では、犯人は銃の暴発として処理されたらしいが、本当は強盗の中を奪ったシノンが、撃ち殺したらしい。

「5年前…」

「11歳の時の話。それ以来、銃を見ると吐いたりしちゃうんだ。あの時の犯人の顔が浮かんできて…そして…」

P T S D っ て や つ か …。

だが妙だな。

「でも…でも、この世界では大丈夫だった。だから思ったの、この世界で一番強くなれたら、現実の私も強くなれるって。でも、あの時、私はシノンじゃなくて、現実の私に戻ってた」

シノンは語る。

死ぬのは怖い。

だがそれと一緒に、怯えたまま生きるのが辛い、と。

その時の記憶と戦わずに逃げるのが怖い、と。

俺はそれを聞いて、純粹に思った。

シノンこそ、強い、と。

「俺も…俺も、人を殺した」

「…え？」

俺の言葉に、シノンが反応する。

「前に、俺はS A O 帰還者なのは話したよな。その中でな、11人殺した。しかもその内

9人は、プレイヤーネームすら知らない。∴知ろうとも、思わない。俺はさ、シノン。大切な人を守る、あのデスゲームを終わらせる、そんな大義言いつく名分の元、自分の殺しを正当化させようとする、クソ野郎なんだよ」

「ツキノワ！それは…！」

俺の言葉を、キリトが慌てて否定する。

ありがとう、キリト。

でもな

「違わねえよ、キリト。俺は自分を正当化させてばかりで、殺してきた奴らの本当の名前すら、知ろうとはしなかった」

「…ツキノワ…」

「…あのボロマントはさ、ラフィン・コフィン笑う棺桶っていう、プレイヤーキラーギルドの、最高幹部の1人だった。そして、俺はあいつとはライバル関係みたいなものだったんだ。ある時、ラフィン・コフィン笑う棺桶を壊滅させようと、攻略組内で、討伐隊が編成されて、俺とキリトはそれに参加した。だが…」

俺の言葉の続きを、キリトが拾う。

「情報が漏れていたんだ。俺達は逆に奇襲を受け、大混戦になったんだ。そしてその最中、ツキノワの姉が、殺されそうになって…それで…」

「俺はその時、人を殺した」

「そして、俺を助けようとして、また一人殺したんだ……」

キリトの悲しそうで悔しそうな顔を見て、俺は苦笑いをする。

俺はその事を、忘れた訳では無かった。

だが、見て見ぬふりをして、蓋をして、逃げていた。

知ろうともせず、理解しようともせず、ただ自分を正当化させたいが為に、俺はその事から、目を瞑り続けてきたんだ。

「ツキノワ、一つだけ教えて。貴方はその記憶を……どうやって乗り越えたの？ どうやって、過去に勝ったの？ なんで今、そんなに強くいられるの？」

俺は乗り越えても、過去に勝っても、強くなってるない。

「言っただろ、正当化させてきたクソ野郎だって。乗り越えてもなければ、過去に勝った訳でもなければ、強く訳でもない。ただ、逃げてきたただけだ」

俺は一生、逃げられない。

この業を、俺は一生背負っていかなくてはいけない。

それこそ、俺に課せられた罰なのだろう。

「そんな……私は……どうしたら……？」

「どうもこうもねえよ。ただ己の行いを受け止め、悩み、苦しみ続ける。それが俺やお前

に課せられた罰なんだよ、きつと」

「受け止め…悩み…苦しみ続ける…」

outside

「あの中身は…人間なんだよね？」

「そりゃあな、お化けだったら敵わんわ」

シノンの問いかけに、ツキノワは肩を竦めながら答える。

「じゃあ…SAOを忘れられなくて、GGOに来たって事？」

次にシノンの質問に答えたのは、キリトだった。

「いや、それだけじゃない気がする。ゼクシードの時も、薄塩たらこの時も、そしてペイルライダーの時も。アイツは大衆の目が集まるように、殺している」

つまりデスガンは、注目されたい、という事だ。

己の力を見せつけたい…それは自身への自信の無さの裏返しにもとれる。

「あの大袈裟な十字架といい、恐らく不特定多数にアピールしてるんだ」

2人のプレイヤー死因は、心不全だ。

それにアムスフィアで、殺人は不可能だ。

となるとどうなるのか…そう考えたツキノワは、ある事に気がついた。

「…いや待てよ。妙だ」



「ツキノワ? どうした?」

「俺を迎撃した時少し撃たれたが、その時発砲音がしなかったんだ。多分、アイツはハンドガンから、スナイパーに持ち替えたんだと思う。そのままハンドガンなら、俺を殺せたのに」

「…撃たなかったんじゃないかって、撃てなかった?」

シノンの何気ない一言が、ツキノワにあるヒラメキを与えた。

「まさか…」

「何か気づいたのか?」

「…やっぱりここから、現実世界で人は殺せない。こっちだけでは、まだ条件が揃わないんだ」

「どういう事?」

ツキノワは出来るだけ、自分の考えを噛み砕いて、伝わりやすいように伝える。

「例えば、こっちで撃つのと一緒に、現実世界でも用意がいるのとしたら?」

「用意って?」

「ターゲットの居場所を、知らなくちゃいけない」

「そんなの…そもそもどうやって、プレイヤーの住所を知るのよ?」

「アイツは光学迷彩マントがある。B o B にエントリーする時、任意で住所を打ち込む

欄があるだろう？その様子を、マントを使って隠し見てたら？」

「…だとしても、デスガン本人はゲームにログインしてるんだから、そんなの…」

「本人は、な」

ツキノワの不穏な一言に、キリトは喉を干上がらせる。

「まさか…!？」

「共犯者がいたら？それならば、打ち合わせさえすれば可能だ」

1人目のデスガンが、ゲーム内でプレイヤーを撃ち、同時に2人目のデスガンが、現実世界のプレイヤーを殺す。

そういうことなのだろう。

「でも…分かったとしても、どうやって忍び込むのよ！」

これに答えたのは、キリトだ。

「…あの2人に関して言えば、古いアパートで一人暮らしだ。鍵もおそらく、セキュリティの古い初期型かもしれない。それに、ダイブ中は完全に無意識だ。多少手間取っても、問題は無い」

「じゃ、じゃあ死因は!?警察や医者にも分からないなんて…!？」

次に答えたのはツキノワだ。

「死体は発見が遅れて、かなり腐敗が進んでいたらしい。それにプレイヤーネームに医

療用語を使うくらいだ。何らかの形で医療関係なんだろう。例えば…自分、もしくは身内が病院勤務だとか？」

ここまで話して、ツキノワとキリトは最悪のシナリオを考えていた。やがて、ツキノワはシノンの肩に手を置いた。

「シノン、いくつか質問する。お前はたしか、一人暮らしだったな？」

「え、ええ。うちも初期型の電子錠。チエーンは…して…ない…かも」  
キリトが出来るだけ冷静に、現実を告げる。

「…いいか、落ち着いて聞いてくれ。アイツは俺達を追いかけている時も、シノンを撃つた。それはつまり、準備は出来ている、という事だ」

シノンは理解したくないのか、震える声で聞き返す。

「準備って…なんの…？」

そしてツキノワもまた、ハッキリと告げた。

「今、この瞬間にも、共犯者がお前の部屋にいて、撃たれるのを待っている…という可能性がある、という事だ」

「っ!?…え…？」

シノンの様子が、変化しだす。

呼吸は乱れ、体が震えだす。

「ハア…ハア…ハア…!？」

「シノン！落ち着け！ダメだ！気をしっかり持て！」

「今強制ログアウトしたら、何しでかすか想像がつかない！それだけはダメだ！だから落ち着け！」

キリトとツキノワが、慌ててシノンを落ち着かせようと、必死に声をかける。

「…デスガンに撃たれるまで、あいつらは何も出来ない。それが、あいつら自身が定めたルールだ。裏を返せば、それまで何も出来ないって事だ。だから落ち着け…な？」

「でも…！でも…！怖いよ…！」

「…そうだよな、怖いよな…」

ツキノワとキリトは、優しく宥めすかしたのだった。

「俺達が出るのは、一つだけ」

「ああ…倒すぞ、デスガン」

これだけが、唯一の安全を確保出来る手段だった。

side ツキノワ

「デスガンとやり合う上で、厄介なのがひとつ」

「なんだ？」

「闇風が生き残ってる、という事だ。さつきサテライトスキャンで確認した。デスガン

はプレイヤースキルそのものも高い。それと同時に、闇風を相手取るのは、最悪だ」  
俺は闇風と戦ったことあるが故に、あいつの強さを知っている。

「だからシノンとキリトは、そつちを頼む。デスガンは…俺がやる」

これは俺の因縁だ。

俺がこの負の連鎖を断ち切る。

これだけは、何があつても譲れない。

「…わかつたわ。ツキノワに任せる。でもどうやって、デスガンをおびき出すのよ？」

「もうじきサテライトスキャンだ。俺がわざと身を晒すから、それで釣る」

「あんた、自分が囷になるの!？」

「こうでもしないと、あれは釣れねえよ」

俺は肩を竦めると、あるものに気づいた。

「あれ、なんだっけ？」

「え?…ああ。ライブ映像カメラよ。…ははあん。そうね、貴方には可愛い彼女がいる

のよね、優月?」

「あはは、あんまからかうとぶつ殺すぞ、詩乃?」

俺達にはこやかに笑いながら、殺気をぶつけ合う。

それに当てられたキリトが、慌てて2人を止める。

「お、おい！2人共!?落ち着けて…!？」

「いや、冗談だけど」

「紛らわしいんだよ!!」

そんなこんなで、用意を整える3人。

「…ねえ、2人の予想通りなら、デスガンの共犯者は、私の家に張り付いてるってことよね?」

「そうだけだ…」

突然どうしたんだ?

「なら、闇風に囚になってもらったら?」

うーん、悪くないんだが。

「あまり使いたくない手だな」

「どういう事?」

「ペイルライダーを撃つてから、お前を撃つまで約30分。つまり、ペイルライダーからシノンの家まで30分圏内って事になる」

「…それ、都合が良すぎないか?」

俺の言葉に、キリトが疑問をぶつける。

そう、その通りだ。

「でも、そうだとしか…」

「デスガンの共犯者が1人だとは、限らない。もしもう1人いたら？あいつには、よくコンビを組んでいたうるさいバカがいる」

「…まさか、ジヨニーブラック!?!」

キリトはその可能性に気づいて、声を張り上げた。

俺は頷いて肯定する。

「ちよつと待つて…こんな殺人行為に…3人以上が関わっているってこと…?」

シノンが声を震わせて尋ねるが、俺は頷く事しか出来ない。

「…PKには、PKなりの矜持や覚悟があるわ。動けない人を毒薬で殺す…そんな奴らには…負けられない!」

「ああ、ここで全てにケリをつける。キリト、シノン。頼むぞ!」

「ああ、闇風は任せろ兄弟!」

「あなたの背中、私が見てるわ、相棒」

俺達は拳をぶつけ合い、当初の予定通りの作戦に乗り出した。

デスガン…いや、ザザ。

「終わらせよう。俺達の戦いを」

## 50話

sideツキノワ

俺は今、砂漠のど真ん中にいる。

俺は全神経を集中させて、周囲の気配を感じ取る。

…南東から足音、闇風だな。

あいつはシノンとキリトが何とかしてくれる。

放置して良し。

あの時、どうやって奇襲を読んだんだっけ？

…そうだ、あの時は殺気を感じたんだ。

まるで、水面に石を投げ込んで波紋が出来たような不安。

そう例えば…今みたいな感覚…！

「ツ!？」

俺は咄嗟に体を逸らして躲す。

髪を掠めたが、まあ別にいい。

「見つけた…ハア！」



第2射、第3射と次々に、弾きながら俺は、真っ直ぐにデスガンの元へと走っていく。  
あと少し……!

その時、デスガンに向かって弾道予測線が向けられる。  
シノンのアシストだ。

そうしてヘカートの銃弾が、サイレントアサシンを破壊した。

「ナイス！ハア!!」

俺は一気に加速して、全速の突きを放った。

「……え？」

しかし、パーツの一部を拾ったデスガンは、あの時よりも速い動きで突きを躲して、逆に左肩にカウンターを放ってきた。

「クソ！」

俺はすぐに刺さっているそれを弾いて、距離をとる。

その手に握られているのは、金属製のエストックだった。

「相変わらずのエストックか、デスガン……いや、ザザ。というか……GGOに金属剣があるなんてな」

「才前トシタコトガ……勉強不足だな……【剣豪】。【銃剣作成スキル】で作レル。長サヤ重サハ……コノアタリガ限度タガナ」

お互い距離をとって、睨み合いながら、軽口を叩き合う。

「なるほど…俺が使うには、ちよいとばかり、貧弱そうだな」

「相変ワラズ…頑丈ナ武器ガ…オ好みカ？ナラバ…ソソナオモチャハ…サソ物足りナイ  
ダロウ」

「それでもねえよ。こういうのもロマンだろ。それに、剣は剣だ。お前をぶった斬れれば、それで十分！」

俺は一息に距離を詰め、斬りかかった。

俺の一撃は躲され、お返しの突きが来る。

俺はすぐに払って、攻撃を返そうとして、咄嗟に首を捻る。

「ツ！…こいつ…！」

戻しが速い！

ていうかこいつ、こんなに速かったか!?

気づけば防戦一方になっていく俺。

「オ前ハ…現実ノ腐ツタ空気ヲ…吸イ過ギタ。オ前の刀ハモウ…錆ビツイタ！ソソナ鈍  
デハ…俺ハ斬レナイ！」

好き放題言いやがって…！

でもそうか、こいつが速いんじゃないやなくて、俺がなまってるのか。

その証拠に、ザザの突きの濁流を捌ききれず、少しづつ身体中にダメージエフェクトが刻まれる。

「この……くらいやがれ！」

俺は咄嗟にAR―57を取り出して、弾丸をばらまいた。

「クッ!?!」

突然の事で、デスガンも対応出来なかったか、俺の銃弾をモロに受けて、後ろに飛んでいく。

だが、倒すには至らなかつたらしく、まだ生きている。

「隙ありー！」

俺はその隙を斬ろうと、斬りかかったが

「ヌルイ」

デスガンは転がりながら、砂を掴んで俺にかけてきた。

「ッ!?クソ！」

俺は銃で顔を隠して、砂から避けるがその隙に、俺の銃が蹴り上げられてしまう。

「にやろうー！」

俺は蹴った体勢のデスガンに斬りかかるも防がれて、しかも腹を蹴られながら、投げ飛ばされる。

「グハッ！」

「ダカラ言ツタダロウ。オ前ハナマツタンダト！」

クソ…！何としても、まずはこのラッシュをブレイクしないと…！？」

side 明日奈

私は今、千笑と一緒に、千代田区にある病院にいる。

この病院は、和人がリハビリをしていた病院で、今は2人が、GGOにダイブしている病院だ。

「ッ!? 優月君！」

「和人！」

私達は直ぐに2人に駆け寄り、2人がすごく辛そうなのに気づいた。

「結城さんと、指原さんね。話は菊岡さんから聞いてるわ」

そう、私にここを教えたのは菊岡さんだ。

…強引に聞き出した、と言った方が正解だけど、有事だから、なりふり構う気は無い。

「あの！2人は!!」

「それが突然心拍が上がって…でも、命の心配は無いから安心して」

突然心拍が?

どういう事?

『ママ！お姉ちゃん！モニターに、試合映像を流します！』

千笑の端末からユイちゃんの声が聞こえ、つられるようにモニターを見ると、優月君がデスガンと、和人君が闇風というプレイヤーと、戦っていた。

「和人！」

「2人は戦っているのね…」

私はここからでは何も出来ず、ただ祈るしか出来やなかった。

神様…お願い…どうか、彼に力を…！

sideツキノワ

激しいラツシユが続く。

その度に、俺の体にダメージエフェクトが発生して、俺のライフを削っていく。

弾く…弾く…弾く…！

何度も何度も繰り返して…俺は引くのでは無く、前に出た。

「ナニ!?!」

デスガンの突きを滑らせながら、あえて前に出て、距離を詰める。

詰めながら鳩尾辺りに肘をねじ込み、体勢を崩させる。

「グッ！」

「まだ…だあ！」

襟首を掴みヘッドバッドを叩き込み、よろめいた所を、飛び膝蹴りで吹き飛ばした。

「オラア！」

「グッ……！コノ程度デ……！」

そう、この程度では大したダメージは無い。

だがこれで、ラッシュを切る事には成功した。

そしてその時、デスガンに弾道予測線が向けられた。

これは……!?

「ッ!？」

「逃がすかアアアアア!!」

この予測線による攻撃は、シノンの経験と閃き。

闘志のあらん限りを詰め込んだ、幻影の一弾。

このラストアタック……ファンタム・バレットの銃弾を無駄にはしない!!

俺は土壇場で、あと一歩間に合わないかと踏んで、掴もうと伸ばした手を引っ込めて、F

ive—sevenを引き抜いた。

「ッ!？」

「あああああ!!」

全弾打ち込んだ俺は、透明化して逃げようとするデスガンを、防ぐ事に成功した。

「グウ…！コノオ！」

デスガンの「スターズプラツシユ」が、俺の体を貫く。

「ぐっ…ガアアアアアアアアアアア!!!」

それを無視して俺は、フォトンソードをデスガンの体にめり込ませた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そして俺は、デスガンの体を真つ二つに切り裂いたのだった。

outside

「マダ…マダ…終ワラ…」

切り裂かれたデスガンは、そう弱々しく言い残して、倒れた。

「いや、もう終わりだ、デスガン。…いや、ザザ。お前の正体は既に、外に伝えた。ミトなら気づくはずだ。お前の共犯者もすぐに洗い出される。ラフコフの殺しは、俺達の戦いは、もう終わりだ」

ツキノワはそう言い残して、死亡判定で動かないデスガンのアバターに背を向けて、AR―57を回収して立ち去る。

「やったな、ツキノワ」

「お疲れ様、ツキノワ」

「キリト、シノン。ありがとう」

3人は合流して、拳をぶつけあった。

「あいつらは、自分の力を誇示する事を第一としている。だからあいつの仲間も、手は出せない筈だ」

「ただ何が起こるか分からないから、警察に連絡した方がいい」

「警察って…なんて説明するのよ？」

シノンにそう言われて、キリトとツキノワは顔を見合わせて、肩を竦める。

「たしかに…ここでシノンの住所聞く訳にもなあ…」

「ツキノワの親父さん、公務員だろ？何とかならないのか？」

「多分、ザザの身柄を抑える方に手を回してるから、何とかなると思うけど」

「…いいわよ。ツキノワは私の事知ってるし。住所と教えるわ」

そう言って2人は、シノンのプライベート情報を教えてもらう。

住所を聞いて、2人は目を見開いた。

「驚いたな、俺達の今いる場所から近いじゃん」

そう、2人は今、千代田区の病院にいる。

シノンの家は、そこから近かったのだ。

「俺達がそっちに行くよ」

「…ありがとう、でも近くに信用出来る友達がいるから、大丈夫よ」



シノンの言葉を聞いて、少しだけ嫌な予感を抱いたツキノワだが、それは棚上げする事に。

キリトの方も本名を教えて、そろそろ決着をつける事に。

「どうするよ？ 乱戦でケリつけるか？」

ツキノワの言葉に、シノンは2人を見比べてため息をつく。

「あのねえ…2人共ボロボロじゃない。そんな奴らに勝つても、嬉しくないわ。…決着は次の機会にする」

「じゃあ、どうやって？」

「それはね…」

そう言ってシノンは、ツキノワの手首を掴む。

不思議そうに首を傾げるツキノワとキリトを無視して、説明を始めるシノン。

「第1回優勝は、2人同時優勝なの。理由は、勝つはずだった選手が油断して、負けるはずの選手のお土産グレネードに引っかけたのよ」

「はっ…テメエ!?!」

お土産グレネード。

この言葉の意味に気づいたツキノワは、全速力で逃げようとするが、当然シノンはその手を離さない。



恐らくはシュピーゲルとかいう、プレイヤーだろう。

リアルで同じ学校だと言っていた。

だがあの男の目は、嫌な記憶を過ぎらせる。

そう…クラデールと同じ目をしてきた、そんな気がするのだ。

「…すぐに向かうか」

この胸騒ぎを、勘違いだと分からせるために。

## 51話

side 詩乃

ログアウトした私は、自分の部屋にある、隠れられそうな場所を全て調べて、誰もいないことを確かめた。

「バカみたい…」

などと言いながら、身体中から力が抜けていくのを感じていると

ピンポーン

「ヒッ!？」

突然部屋のチャイムが鳴る。

それに怯えていると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「朝田さん、いる? 僕だよ!」

「…新川君!」

私は外の相手が新川君である事を知ると、すぐにドアを開け、彼を中に招き入れた。

「優勝、本当におめでとう。朝田さん、シノン。本当にGGO最強のガンナーになったね」

私は新川君からのべた褒めに、苦笑いしながら困っていると

「でも僕には分かつてたよ。朝田さんは、誰にもない本物の強さを持っているから。……朝田さん！」

「……何？」

少しづつ、彼の雰囲気が変わってきた気がした。

その事に、言い様のない不安が募る。

「朝田さん、前に言つてたよね。『待つてて』って。言つたよね？」

それは……B o B 本戦が始まる前の事？

「待つていれば、いつか僕のものになってくれるって」

「……え？」

待つて、そんな事……一言も言つてない。

「だから……だから僕……ずつと一緒にいてあげる。あんな奴らに頼らなくても僕が……生君を守つて……あげる……から……！」

新川君の顔が、明らかに異常で、怖くて、私は喉が干上がつてしまい、体も動かかなかつた。

そしてその間に、新川君に抱きつかれてしまう。

身体中に走る、どうしようもない生理的嫌悪。

「朝田さん…好きだよ…愛してる…！僕だけの…シンノン！」

「や…やめて！」

私は強引に突き飛ばしたが、女の私では男の彼の体勢を崩すのが精一杯だった。

「…ダメだよ、朝田さん。僕を裏切っちゃあ、ダメだ」

「…新川…君…？」

フラフラと近づくと彼に、私は壁際まで追い詰められてしまう。

そんな彼が取り出したのは無針注射器だった。

彼はそのまま、恐怖で動けない私の脇腹に、それを押し当てた。

「動いちゃダメだよ、朝田さん。この中身が注射されると、筋肉が動かなくなるんだ。す

ぐに肺と心臓が止まっちゃうんだよ」

まさか…これが…デスガンの殺し方…!？」

「君が…2人目のデスガン…!？」

「…へえ、すごいね。デスガンの秘密を見破ったんだ。そうだよ、僕がデスガンの片腕だ

よ」

「ツ!？」

嘘…信じられない…。

でも彼の実家は、病院を経営している。

薬品を入手するのも、容易なはず。

「とは言っても、前回までは、僕がSterbenを動かしてただけだね。でも、今日だけは僕が現実役をやらせて貰ったんだ。だって…朝田さんを他の男に触らせる訳にはいかないもんね。…いくら、実の兄弟でも」

「き、兄弟…!?!」

たしかに彼には、病気がちの兄がいる。

まさか…

「昔、SAOで殺人ギルドに入ってたっていうのは…新川君のお兄さん…?」

「そうだよ。そして今回、兄も乗り気だったんだ。かつてのライバルと、また殺しあえるって」

かつてのライバル…ツキノワの事!?

「まあ安心して…朝田さんを一人にはしないから…」

そう言って、私の服の下に手を入れる新川君を、何とか説得しようと試みる。

「まだ…まだ、間に合うよ…!やり直せるよ…!予備校言ってるんでしょ…!?!お医者様になるんでしょ!?!」

私がそう言うと、新川君の様子が変わる。

まるで、何かに怒り狂ってるように。

「そんなのどうでもいい！親も！学校の奴らも！どうしようも無い愚か者ばかりだ！！僕はGGOで最強になれば、満足だったんだ！なのに…！なのに、あのゼクシードのクズが！アジ型最強なんて嘘を！GGOは僕の全てだったのに！現実を全て犠牲にしたのに！！畜生！！」

それが…その程度の原因が…!?

「だから…ゼクシードを…殺したの!?!」

「そうだよ！デスガンでGGOの…いや、全VRMMO最強の伝説を作る生贄に、あいつほど相応しい奴はいないだろう！これでもう…こんな下らない現実に用はない…さあ、朝田さん。一緒になろう」

新川君の言葉の全てが、気持ち悪い。

完全に彼を受け付けられない。

何とか抵抗しようとしてるが、やはり力では叶わない。

「ずっと好きだったよ、朝田さん！学校であの事件の話聞いてからずっと」

「…え？」

思わず呆然とする。

あの事件の話…まさか…

「本物のハンドガンで、悪人を射殺した女の子なんて、日本中探しても、朝田さんしかい



ないよ！言ったでしょう？朝田さんには、本物の強さがあるって」

本物の強さ……そんな訳ない。

彼は語る、だからこそ54式を選んだのだと。

私が彼の憧れだと……。

彼の顔が、あの時の犯人と被る。

……もう、何も見たくない、感じたくない。

きつとこんなもの、現実じゃない。

ごめんね、2人共……。

……そんな事ないよ。

え？

……シノン？

……私達は自分の事しか見てこなかった。自分の為にしか、戦わなかった。もう遅いかもしれないけど、一度だけ、誰かの為に戦おうよ。

そうだ、2人はここに来ると言っていた。

今来たら、2人が危険な目にあう。

だったら……私は……。

私は、シノンの手を取った。



「ゆ、優月…!？」

私の相棒、ツキノワこと兎沢優月だった。

side 優月

目を覚まして直ぐに、俺は部屋を飛び出して、バイクを走らせて、ここまで来た。

詩乃の言っていた部屋番号まで来ると、中から鍵を開けようとする音と、詩乃の悲鳴が聞こえた。

俺はすぐに飛び込み、中にいた男を蹴り飛ばして、強引に詩乃を連れ出した。

「…下がってろ」

思ったよりタフな奴らしい。

俺の蹴りを受けて、ふらつきながらも立ち上がってきた。

「誰だよお前…誰だよおおお!!!」

うるせえクズだな。

男はポケットから何かを取り出して、襲いかかってきた。

…無針注射器、か。

「ゆ、優月?!それに当たっちゃダメ!!」

「だろう…な!」

俺はスウエーで躲して、渾身の右ボディを打ち込んだ。

「ゴホオ!？」

「おら…終わりじゃねえぞ!」

髪を掴み頭を持ち上げさせて、今度はその顔に拳をめり込ませた。

「ゴバア!」

俺は蹲るそのバカの手を蹴り、注射器をあらぬ方へと飛ばした。

俺はそいつの襟首を掴みあげ、顔の高さまで持ち上げる。

「まあ、どこの誰でもいいけど…じゃあな♪」

俺はそいつの頭に、思いつきり肘をぶつけて、そのまま全体重をかけて、床に叩きつけた。

「ガ…」

流石にここまですれば、気を失ったのか、白目剥いて、泡を吹いていた。

「…うん、やりすぎた、かな」

「やりすぎでしょう…どう見ても…」

詩乃の小さな声を聞いて、俺は詩乃の安否を確認する事にした。

「おう、怪我ねえか?」

「…大丈夫よ…」

その視線は、気絶している男と、そいつが持っていたと思しき、ケーキの箱がある。

こいつが詩乃の信用出来る友達、シユピーゲルなのだろう。その目は悲しみがあつた。

「…怖かつただろう、もう大丈夫。よく頑張つたな」

outside

数日後、詩乃は学校で、自分へのケジメをつけた。

トラウマの克服、それに漬け込んでくる自分へのいじめつ子との決別。

それらの小さい…でも確かな一歩を踏み込んだ詩乃を待っていたのは、校門の人だけだ。

その視線の先にいる紫色の髪の男に、詩乃は見覚えしもなく。

「うん!？」

思わず、変な声が出る詩乃。

「朝田さん! どういう知り合い!？」

「まさか彼氏!？」

詩乃は恥ずかしさから、顔を赤くしてその言葉を無視する。

しかし女子達からしたら、その反応すら美味しい。

黄色い歓声を上げながら、詩乃とその男：優月に注目が集まる。

「ちよつと! / / 待ち合わせって言ったけど、何もこんな目立つ場所じゃなくても!

／＼／

「見つけられないかもしれないねえだろ？」

「そんな目立つ髪色、あんたしかいないわよ！」

詩乃の抗議をテキトーにスルーした優月は、手の持っていたヘルメットを詩乃に投げ渡す。

「ほら、早く乗れ。行くぞ。じゃあ、朝田詩乃さんは借りてくね？」

再び上がる、黄色い歓声。

詩乃は最早何も言わず、無言で背中を引っぱ叩いたのだった。

2人ともう1人、和人は総務省の菊岡から、話を聞く事になっているのだ。

事件のその後はこうだ。

あれからすぐ、新川恭二と兄の昌一は逮捕された。

昌一の供述により、共犯者の存在が明かされた。

名は金本敦：ラフコフの元メンバーで、ジョニーブラックだ。

彼は今、逃走中。

デスガン誕生のきっかけは、昌一がリアルマネートレードによって、光学迷彩マントを手に入れた事がきっかけだった。

昌一はマントと双眼鏡で、プレイヤーの個人情報を手に入れるのに夢中になっていた

一方、弟の恭二はキャラ育成に行き詰っていた。

そんな中、ゼクシードの口車に乗せられたシュピーゲルは、ゼクシードに対して怒りを募らせ、それを聞いた昌一は、ゼクシードの個人情報教えて、どうやって粛清するか、連日話しあった。

それでも、最初は本気では無かったらしい。

だが徐々に現実味を帯びてきた2人は、ついに父親の経営するしさ病院から、注射器と劇薬を盗む算段をつけた。

彼らは念入りに下調べをして、ターゲットをセキュリティの低い部屋で、一人暮らしをしている人物に絞った。

昌一はマスターコードで、最初の被害者宅に侵入、事前に示し合わせた時間に、彼を殺した。

2人目の被害者、薄塩たらこもほぼ、同様の手口。

しかしデスガンは、プレイヤーの恐怖の対象どころか、遊び半分にかかわれる事に。業を煮やした昌一達は、BoB本戦にて、一気に3人を殺すという、計画を立てた。

ターゲットはペイルライダー・Garret：そしてシノン。

「…だが、3人を殺すには、現実的な問題が一つ」

「そう、デスガンの動きに合わせる必要がある。そこに金本なる人物が加わった、という

事だよ」

これらは全て、兄の昌一の供述を元にして、弟の恭二は黙秘を続けている。「ちなみに、兄の昌一は病弱で、父は早々に見限り、恭二を跡継ぎにするつもりだったらしい。だが意外な事に、兄弟仲は悪くなかったそうだよ。そして昌一はMMOにのめり込み、SAOの虜囚となった」

その言葉に、和人がムスツとし、優月が侮蔑するような目で、菊岡を見る。

「…お前さ、官僚ならもう少し考えて話したら？お前の言う虜囚がここに2人、いる訳だけど？」

「…配慮に欠けた発言、謝罪しよう。申し訳ない」

菊岡は優月の言葉に謝罪したが、優月からしたらどうにも上っ面しか響かず、何も言わず睨みつけるだけだった。

「…続けよう。昌一は恭二にだけ、自分がSAOでは何者だったのか、語ったそうだよ。彼の目には、兄が英雄に見えたのだろうね」

そして昌一は語る。

この計画は、ゲームだったと供述している。

装備を整え、獲物の情報を調べ、実行する。

SAO時代と、何も変わらない、と。



「…VRMMOのダークサイド、なんだろうな。現実が薄くなっていく」  
「…君は、君の現実はどうなんだい？和人君」

菊岡は和人にそんな質問をぶつけた。

「…あの世界に置いてきたものは、確かに存在する。だから今の俺の質量は減少している…とは思う」

「戻りたい…と思うかね？」

その問いかけに、和人は肩を竦めながらこう答えた。

「聞くなよ、悪趣味だぜ」

「うむ…君はどうかな、優月君」

次に聞かれたのは、優月だった。

「俺は逆だな。あの世界に置いてきたもの無い。むしろこっちに持ってきた。だから前より質量は増えている…気がする」

「君も、戻りたいと思うかね？」

「戻るとか戻らないとか、そういう問題じゃない。仮想も現実も、俺には大差無い。どこだろうと、なんだろうと、俺の耳で聞いて、目で見て、鼻で嗅いで、口で味わって、肌で感じて。俺の五感全てで感じたものが、俺の現実だ。その経験が、こっちかあつちかの差、それだけだ」

同じ世界、同じ経験をしていて、全く正反対の意見を持つ2人に、菊岡は目を見開いてから、面白うに笑った。

「…さて、僕から話せることは以上だ。なにか質問はあるかな？」

それから幾つかの話をして、3人は菊岡と別れた。

それから3人が向かったのは、エギルの店Dicey Cafeだ。

中に入ると

「おそーい！アップルパイ2切れも食べちゃったじゃない！太ったらあんた達のせいだからね！」

「知るか。自制心を鍛えるこつた」

呆れたように優月が、ため息をついて言い返した。

「こら、優月！女の子にそんな言い方しない！」

「里香に優しくするのは、和人の仕事。俺は明日奈先輩と深澄ぐらいで十分だろ」

「あら。そういう割には、珪子とか直葉には優しいみたいだけど？」

「年下には優しくして当たり前だろ」

「はいはい、2人共。そこまですて。優月君！紹介して！」

「うん、和人早く。私も楽しみだったんだよ」

唐突に始まるマシンガントークに、詩乃が啞然としてると、和人が紹介を始める。

「まずこちらが、第3回BOB優勝者、シノンこと、朝田詩乃さん」

「や、やめてよ／＼／」

「で、こつちがぼつたくり鍛冶屋のリズベッドこと、篠崎里香」

「ちよ!?!何ですつて!?!」

「で、こつちがサチこと、指原千笑。こつからは優月にバトンタッチ」

「もう。ちゃんと紹介してよ、和人。指原千笑です。よろしくお願いします」

怒る里香と、少しムスツとしながらも、丁寧に挨拶する千笑。

そして突然のバトンタッチに、優月は驚きながらため息をつく。

「全部やれよ…こつちの紫が姉の兔沢深澄。でこつちが俺の彼女の結城明日奈先輩」

「あんたも紫でしょ」

「は、恥ずかしいよ…／＼／」

呆れたような深澄と、彼女と紹介され恥ずかしそうにする明日奈。

「…あー…なんだろう、あんたが自慢しまくる理由が、よく分かったわ、優月」

「だろ?」

「何の話をしてたの!?!」

そんな姦しきはあれど、すぐに仲良さげに話し出す女性陣を見て、優月と和人が踏み

込んだ。

## side 優月

「詩乃、先に謝る。すまない」

「…いい、いきなりどうしたのよ、優月」

俺が突然頭を下げ出したことに、詩乃が困惑するのが口調で分かる。

「俺達は、詩乃の事を話して、お前の故郷に向かった」

「なっ!?…どう…して…?」

俺は動揺する詩乃の目を見て、しつかりと答える。

「それは、お前がまだ、見るべきものを見てないし、聞くべき言葉を聞いてないし、知るべき事実を知らないからだ」

「…どういう…意味…?」

「俺は前に言ったよな。自分を正当化してきたって。詩乃、お前もそれをして良かったんだ。俺達は、決して許されない事をした。だからこそ、全てを知る必要がある。お前が手を汚したその裏で、救われた命があった事を、知る権利があるんだ」

「救われた…命…」

ここからは、俺の出番じゃない。

深澄と里香に誘導されて連れてこられたのは、1組の親子だ。

3人はそれぞれ頭を下げ、自己紹介をした。

その女性は…

「私はこの子が産まれる前は、郵便局で働いていました」

「…あ…」

そう、彼女はあの事件の時、郵便局にいた職員なのだ。

そしてその時、彼女のお腹の中には、娘がいたんだとか。

そしてその娘は今、母親の隣で笑っている。

詩乃には、この事実を知って欲しかった。

そうしないと、自分の心が碎けてしまうから。

「…優月君」

「明日奈先輩？」

「…私は何があっても、そばにいるからね」

「…ありがとう」

俺は優しく抱きしめくれる先輩によりかかって、詩乃の様子を見る。  
その目に浮かぶ涙は、とても綺麗な涙だった。

## 閑話休題⑦

side 優月

ドカカッ！ドカカッ！ドカカッ！

馬に乗り、俺は揺られながらも弓を引き、しっかりと狙いを定めて、矢を射った。しかしその矢は、大きく上に逸れてしまい、的の引つ掛けてある木に刺さった。

「ブレすぎです！もつと衝撃を足腰で吸収しなさい！」

「だー！大体流鏑馬なんて、そうそう出来るか!!」

ここは東京の端の方にある、とある人の牧場。

俺はそこで、流鏑馬をしている。

なぜこうなったかと言うと、話は12月初日まで遡る。

「失礼します」

俺は帰還者学校の職員室に、ノックをしてから入る。

職員室というのは、やはり緊張するものだ。

そう思っている

「兔沢君！こちらですよ！」

奥の方から声をかけられ、俺はその声の人物に呼び出されたのだ。

「俺、呼び出されるような事、してないっすよ、海ちゃん先生」

「兎沢君？」

「…何の御用でしょうか、園崎先生」

俺を呼び出したこの人は、園崎海先生。

古典の教師で、俺が所属する弓道部の顧問だ。

「実は貴方にお願ひしたい事がありました」

こんな風に、俺達生徒に対しても敬語を崩さない。

そして真面目な為、生徒の相談を親身に聞いてくれるし、少しウツカリをやらかしたりと、けっこう馴染みややすい先生なのだ。

だから俺のような一部の生徒から、海ちゃん先生と呼ばれたりしている。

まあ、それはともかく。

「お願ひ…ですか？」

「はい。これをみてください」

そう言われて渡されたポスターを見る。

そこには新年奉納演舞と書かれており、場所は京都のとある神社だった。

内容としては、流鏝馬と普通に的を射る。

「…まさか、これに出ると?」

「実はこの神社が、園崎家と繋がりのある家です。本来行はずだった方が、怪我をしてしまったんです。その方からの直々の推薦で、貴方に声がかかったという事です」

「どこの誰か知らないが、そんなに注目されるほどかね?」

「俺に的を射ろと」

「いえ、両方ですね」

「…はい?」

「今、なんて言った?」

「両方?」

「それってつまり…」

「元々1人でやるつもりでしたらしく、流鏑馬もやっていたみたいです」

「…無理」

「無理無理無理無理!」

「絶対に無理!」

「流鏑馬なんて、いきなりど素人が出来る訳無い!」

「普通に射るだけなら、やらないでもないけど、流石に流鏑馬は無理!」

「大丈夫です!ちゃんと1ヶ月、私も練習に付き合います!私も経験ありますから!」



「だったら先生がやってくださいよ！学生には荷が重すぎます！」

「兎沢君は乗馬経験もあると聞いています！それに馬も既に、八王子の端にある、知り合いが持っている牧場に連れてきてもらいましたから！」

「ふれあい体験程度を頼りにしないでください！というか、俺に拒否権は!？」

そんなやり取りをしたのが、その日の昼休み。

結局俺は押し切られてしまい、放課後、八王子の牧場に連れてこられた。

「…で？コイツが？」

「はい。黒斗というらしいですよ」

真つ黒で、力強そうな馬。

これ…制御するの大変そうだな…。

「大丈夫よ。見た目に反して大人しいから」

不意に後ろから、第三者の声が聞こえてきた。

振り返ると、真つ赤な髪をしたモデル体型の超美人さんが。

「久しぶりね、兎沢君。元気にしてたかしら？」

「あれ？西織先生？」

「この人は西織真織先生。」

医者であり、俺と明日奈先輩と深澄が入院していた病院で当時、研修医だった人だ。

今は実家の病院で働いてるとか。

「…2人は知り合い?」

「ええ、そうですね。それはともかく、ここは真織の実家が持っている牧場で、ここで練習させてもらえることになりました」

どんな金持ちだよ…西織の家…いや、結城家も大概か…。

それにしても…人の縁つてのは、よく分からないものだ。

海ちゃん先生が大和撫子とするなら、西織先生はバラ一輪つて感じだ。

2人共、方向性の違う美人さんである。

「何ぼうつとしてるのよ?」

「大丈夫ですか?」

心配そうに顔をのぞきこんでくる2人に、俺は問題ないと告げ、兎にも角にも馬に慣れないと話にならないので、早速乗馬してみる事に。

「よし…うわつと…やつぱり力強いな」

「無理して引いたらダメですよ。そつと行きたい方に誘導するように、手綱を操つてください…そう、筋がいいですね」

筋がいいって…歩かせてるだけなんだが、ここまでなら、素人でも問題ないだろうに。

「それじゃあ、走らせてみましょうか。腕の力では無く、太ももで行きたい方に誘導するんですよ。実際には的を射る事になりますから、手は塞がっていますからね」

難しい事を言ってくれるな…。

だがその通りなので、出来なくては話にならないのだ。

「ちくしょう！ やってやらあー！」

俺の足腰が崩壊するのは、数時間後の話だった。

side 明日奈

最近、優月君と帰っていない。

いつもは私のクラスに迎えに来て

「先輩！ 帰りましょう！」

って言って現れるのに、ここ1、2週間来てくれない。

よくよく聞いてみると、すぐにクラスを飛び出しているのだとか。

どういう事が深澄に尋ねてみると

「え!? あの子、何も言っていないの!?!」

言っていないって…何を?

「はあ…。さては恥ずかしがって言っていないのね…」

恥ずかしがるって何を?

「いれよ」

深澄がタブレットで見せてくれたのは、京都にある結城家本邸の近所の神社で行われる、新年奉納演舞の案内だ。

そこには流鏑馬と遠当てを行うと書かれており、その下には優月君の名前が。

「優月君!?!まさか出るの!?!」

「そうよ。優月はこの練習に八王子の奥の方まで、練習しに行ってるのよ」

そうなんだ…。

…見に行つちやおうかな。

という訳で

「私、これを見に行きたい」

夕飯時、家族にお願いをしてみた。

みんなそれを見て、お父さんとお兄ちゃんは、納得したような顔で頷き、お母さんは少しだけ悩んでから

「…まあ、いいんじゃないかしら」

意外にあつさり、許可を出してくれた。

「え?!?!いいの!?!」

「実際に挨拶回りしないといけないのは、2日からだもの。1日は構わないわ。それに

しても…」

何故かお母さんが、ジロジロと見てくる。

な、何…？

「貴女、少し変わったわね。随分と彼にご執心のようね…」

「お、お母さん!?!／／な、何言ってるの!?!／／／」

うう…お母さんにかからかわれるなんて、初めてだよ…!／／／  
「そういうお母さんも、私も大一番の時は…」

「あ、あなた!／／／」

我が家にしては珍しい、騒がしい夕飯時だった。

それから月日が経ち、京都のとある神社。

「優月君!」

私は最高にカツコイイ彼の姿を、見たのだった。

side 優月

1ヶ月、地獄の訓練を受けて、本番を迎えた。

俺は流鏝馬用の衣装に着替えて、黒斗と最後の調整をしていた。

頭には菱烏帽子なええぼしを付け、綾蘭笠あやいがさを被っている。

服は直垂ひたたれを着用。

その上から、左腕には射籠手<sup>いごて</sup>、腰から足全体は鹿革の覆いである行膝<sup>むかばき</sup>をつける。最後に武矢を入れるための箬<sup>えびら</sup>を吊して、手に弓を持つ。

本来なら太刀だのなんだの、もう少しゴテゴテしてるのだが、今回は省略。

「さて、兎沢君。最終確認をしますよ」

コースの全長は、約220m。

的は射手である俺から、進行方向左手に、射手と的の距離を5m以上開けた状態で配置され、トータル3つ。

まあ、基本はこれであり、今回もそのパターンだ。

「さて、なにか質問はありますか？」

「まあ、なるようになる事を、祈ります。…よろしく頼むぞ、黒斗」

小さく嘶く黒斗を、俺は優しく撫でて、アナウンスを待つ。

そしてついにかけられる、出馬のアナウンス。

「…よし！行つてきます」

「行つてらっしゃい、兎沢君」

海ちゃん先生の激励を受けた俺は、ゆっくりと馬を前に進ませて、定位置につく。

少し深呼吸をしてから

「…ハッ！」

ドカカッ！ドカカッ！ドカカッ！  
馬を走らせた。

どんどんと近づく的を確認して、俺は手綱を離して、矢を番えて、弓を引く。  
振動とタイミングを合わせて…矢を放つ。

バアン！

「次…！」

盛大な音と共に、的に命中した事を確認して、すぐさま次の的へ。

しっかりとタイミングを合わせて…

バアン！

「ラスト…！」

しっかりと足腰で衝撃を吸収して、やがて…矢を放った。

バアン！

「よし…！」

見ていた観客の人達から、盛大な拍手が起こる。

こうして俺は、なんとか流鏑馬演舞を終えたのだった。

少し休憩を挟んで、次に行うのは奉納演舞。

俺はさつき衣装から、いつもの弓道着へと着替える。

「…」

突然だが、弓道では、射法八節というものがある。

正射必中…正しく射られた矢は、必ず当たるといふ教え。

その正しく射られるといふのを支えるのが、この射法八節というものだ。

まず矢束といふのを計る。

これが定まらないと、射法八節は出来ないのだ。

この矢束は基本的に、各個人の腕の長さ+5，6cmである。

「…」

まずは足踏み。

しっかりと中心に持ってきて、立つ位置や足の幅などを計る。

「…」

次に胴造り。

臑を伸ばし、肩・腰と足幅を平行に合わせる。

他にも注意すべき点は多く、シンプルに見えて、かなりシビアな所作を求められる。

「…」

次に弓構え、打起し、引分け、会と弓を引き、狙いを定めて

「…ッー」



離れて矢を放つ。

そして最後に残心。

矢の行き着く先を見届ける……これも立派な礼節だ。

正射必中とは、これらが出来ていれば、必ず中るといふものであり、俺の今放った矢も、しつかりと正鵠を射抜いたのだった。

俺はこの動作を3回繰り返して、無事全部の矢で正鵠を射抜いたのだった。

「兎沢君……大変素晴らしい射でしたよ……」

控え室に戻った俺に、海ちゃん先生がべた褒めしてくれた。

むず痒がったが、素直に賛辞を受け取る事に。

「はい。ありがとうございます、海ちゃん……園崎先生」

その笑顔……滅茶苦茶怖いから、やめて欲しい……。

「さて、私は家の都合がありますが、兎沢君は自由行動です。これで美味しいものでも、食べてきて下さい」

そう言った海ちゃん先生は、俺に2万程渡してくれた。

「あざっす……」

何食べようかな……?

俺は神社の中にあるシャワーを借りて、制服に着替えてからお社を出たその時

「優月君!」

聞きなれた声が聞こえて、振り返ると明日奈先輩が飛びついてきた。

「あ、明日奈先輩!」

突然の事によるめきながらも、ちゃんと受け止めた俺は、そのまま抱きしめる。

「あけましておめでとう!すごく!すごく!すごくカッコよかったよ!」

「あ、あけましておめでとうございませう…見てたんですか…恥ずかしい…」

俺と先輩はそのまま、話し込んでいると

「お熱いね」

「貴女達、いつまでそうしているの」

「お父さん!お母さん!」

先輩のお父さんである結城彰三さんと、お母さんである結城京子さんが現れた。

俺は明日奈先輩と離れて、2人に新年の挨拶をすると

「優月君。君はこれからどうするんだい?」

突然、これからの日程を聞かれた。

「いえ、特にすることは。ご飯を食べて、予約したビジネスホテルに行こうかと…」

「そうか。なら、うちに来るかい?」

「え?」

うちつて…結城家本邸？

いやいや流石に…。

「実はね、明日奈への見合いの話が来てて、君がいたら断りやすいのだが…」

「たとえば火の中水の中。どこへなりとも行きましょう」

そんなこと言われたら、速攻で手のひらを返さないとな。

そうして俺の正月は、結城家での先輩の護衛及び、俺という存在のアピールに費やされる事になったのだった。

## マザーズ・ロザリオ

### 5 2 話

side 優月

俺達姉弟は、毎日明日奈先輩と、一緒に登校している。

これは中学生時代からそうであり、付き合うようになってからも続いていた。

「先輩？何見てるんですか？」

「え？これ！」

ずっとスマホを見ている明日奈先輩を、不思議に思った俺は何を見てるか尋ねると、先輩が見せてくれたのは、年明けの流鏑馬の動画だった。

「ちよ!?!なんでそれを!?!」

「園崎先生がデータをくれたの！深澄も持つてるよ！」

「…深澄？」

「テヘツ♪」

「消してくれええええ!!」

俺は深澄の肩を揺すって、直ぐに消すように要求する。

「恥ずかしすぎるわ……！」

「いや、姉として？しつかり見たいじゃない？お父さんもお母さんも、しつかり見てたわよ」

「2人もかよ!!明日奈先輩！恥ずかしいから消してください！」

「えっ!!?ダメ！」

「勘弁してくれ……！」

思わずそう呟いて、赤くなっているだろう顔を隠す。

それにしても……今日はなんだか……

「ねえ……なんか視線多くない?」

「たしかに……いつもより多いね」

10人いたら10人が美人と評価する2人と、人並み以上には容姿が整っている自覚がある俺が並べば、いやでも注目を浴びるのは必然であり、慣れている。

だが、今日のそれは多すぎる。

そして今日の一番違和感の大きい点は

「あんたじゃないの、優月」

「だな……」

何故か、注目を浴びてるのが俺である、ということだ。

どういうことだ…?」

「あの！兎沢優月さん…ですよね!」

「え?は、はあ…そうですね?」

話しかけてきたのは、数人の女子高生。

知らない制服の生徒で、当然顔も名前も知らない。

「あの…動画見ました!カッコ良かったです!」

「動画…?動画ってなんですか?」

「え?これです!」

そう言っただけで見てくれたのは

「ゲツ!」

「これは…」

「大事ね…」

この間の奉納演武の動画だった。

恐らく誰かが、SNSに上げたのだろう。

「つ!優月、あんたこれ!」

直ぐに調べてくれた深澄が見せてくれたのは、やはり某SNSにアップされていた、動画だった。

「すごい再生数……」

「こんなに見られてるのか……?」

「これは……面倒くさそう……」

「あの……もし良かったら……一緒に写真撮ってもらえないでしょうか!?あと、連絡先を交換してくれませんか!」

「は!?写真!?連絡先の交換!?!」

俺はアイドルかなにかか!?

あまりにも突然過ぎて固まっていると

「ごめんなさい。彼はそういうのは嫌いなもの」

突然明日奈先輩が、俺の腕に抱きつきながら、やんわりと、でもハッキリと断った。

「え?……どちら様ですか?」

どこかムスツとしながら、反論してくる女の子に、今度は隣から深澄が答えた。

「優月の彼女よ。文句ある?あ、私は優月の実の姉だから」

「つ……私は、彼に聞いてるんです!」

そう言うと、全員が俺を見ってくる。

俺がやっと絞り出した答えは

「ええつと……悪いけど、彼女いるし、そういうのは断らせてもらおうよ」

そう言うのと、泣きそうな顔をして走り去っていく女の子と、それを追いかけていくお友達。

小さく、息を吐くと、両側から頬を抓られた。

「…いはい、いはいはら…」

「なんですぐに断らなかつたのよ」

「そうよ。どういうつもりなの？」

「ひつふりしへ、ことははへなふあつふあんは」

「は？なんて？」

だつたらまず、この手を離せよ…！

俺は半ば強引に、2人の手を離させると

「抓りすぎー！いったいわ！ビックリして、声が出なかつたんだ！」

はあ…俺の学生生活、どうなるんだよ…。

outside

優月達は学校について、それぞれのクラスに向かう。

と言つても、明日奈と深澄は同じ教室なので、一緒なのだが。

「疲れた…」

あれ以降も、結構な頻度で声をかけられたのだが、全て明日奈と深澄が拒絶。



その度に明日奈が不機嫌になるから、優月はご機嫌取りに疲れたのだ。

「お、よう！人気者！」

「…和人、疲れてるんだやめてくれ…」

「千笑と二人で見してみたが、すごい反響だったな！」

「だからやめろっつーの！」

「イテテテテテテ!!」

始業前に、和人から茶化される優月は、和人をアイアンクローする。

このクラスでは、割とよくある光景であり、クラスメイトは大抵、微笑ましそうに見える。

…なお、一部腐らせた婦人がいるのは内緒である。

「いってえ…やりすぎだろ、優月…」

「俺を茶化すなんて、一万年早い」

優月は痛がる和人を、鼻息荒くあしらう。  
だが

「そういえば、優月は知ってるか？」【絶剣】

「…【絶剣】？」

聞きなれない単語が、優月を振り向かせた。

「そう。お前は京都だったから知らないと思うけど、少し前に現れたプレイヤーでさ、かなり強いんだ」

「へえ…お前より?」

「俺より」

(マジか…)

イタズラ半分で、和人を比較した優月だったが、その和人から、自身より強いと即答されてしまい、言葉をなくした。

「そいつ、プレイヤーキラーなのか?」

「いや、決闘専門。賭けの内容がすごくて、挑戦者が絶えないんだよ」

「へえ…何が賭けられてんだ?」

「そいつが作ったオリジナル・ソードスキルOS Sだ。内容は1-1連撃」

「じ、1-1連撃のOS Sだと!?」

オリジナル・ソードスキルOS Sとは、新生ALOになつてから実装されたシステムで、システムアシスト無

しで、ソードスキルに匹敵する動きをしないと登録できないという、超高難易度のシステムだ。

「たしか今の最高連撃数つて…」

「ユージーン将軍の8連撃オリジナル・ソードスキルOS S、【ヴォルカニック・ブレイザー】だな」

(それは…たしかに絶えないわ…)

優月はそもそも、ソードスキルを使うのが苦手だ。

それもSAO時代に、ソードスキル無しで戦ってきたため、新生ALOになってやっと使い出したくらいだ。

当然、オリジナル・ソードスキル O S Sなんて持っていない。

「武器種は？」

「片手直剣汎用型だな。【絶剣】自身も、細い片手直剣だったし」

「ふうん…」

優月はクラインやリーファ同様、刀を使っていたため、武器種が合わないことが分かり、少しガツカリする。

(とはいえ、戦ってみたい気はする)

「気になるか？」

「まあ…」

「24層にあるデカイ木が生えた、観光スポットの小島があるだろ？あそこに毎日午後3時になると、現れるんだよ」

(今度、誘うか)

そこでちょうど、チャイムが鳴る。

「面白そうな情報、サンキュ」

「あ、最後に。挑むなら気をつけろよ。あの子は…まるでフルダイブの申し子だ」  
(あの子?)

不思議な言い回しをする和人に、疑問をぶつける暇もなく、その日の授業が始まったのだった。

side ツキノワ

数日後、俺はアスナ先輩やミトを含めた皆で、噂の【絶剣】を見に来た。  
どうやら先輩も、ミトから話を聞いていたらしい。

来たのはいいが

「…」

先輩の様子がおかしい。

思い詰めてるっていうか…なんて言うか…。

「先輩?大丈夫ですか?」

「そうよアスナ。この間からおかしいわ」

「え!?う、ううん!?!なんでもないよ!」

俺とミトが尋ねても、すぐにはぐらかしてしまう。

こういう時は大抵、結城家で何かあった時だ。  
そうになると、俺達では口を挟めない。

だからいつも通り

「先輩」

「アスナ」

ミトが先輩を抱きしめ、俺が先輩の手を握る。

「俺達がいいます。それを忘れないで」

「私達、親友と恋人でしょ？」

結城家は、俺達兎沢家と違い、かなり厳しい家庭だ。

人様の家庭環境には口を挟めないから、いつも俺達は逃げ場所になっている。

「…ありがとう、2人共」

そう言う先輩の顔は、少しかげが抜けたような顔をしていた。

「さて、見に行きましょう！」

俺は2人を先導して、噂の24層の小島に着く。

「遅かったじゃない」

先に着いていたリズ達に、適当に声をかけると、ちょうど決闘が終わったのか、2人のプレイヤーが降りてきた。

「…え？」

そういえば、キリトから種族を聞いていなかったが、インプらしい。  
…まあそれはいいのだが。

「ブイツー！」

楽しそうにVサインをする、そのインプは俺が勝手に想像していた【絶剣】像を見事にぶっ壊した。

なぜなら…

「…女の子じゃん!!」

そもそも、性別から違ったのだから。

## 53話

outside

「ちよつとミト！聞いてないわよ！」

「キリト、お前言えよな……」

「私も聞いてないな……キリト……？」

「え？言つてなかつたっけ？」

「サチさん!?ものすごい怖いから、抑えてくれないかな!？」

アスナがミトに、ツキノワとサチがキリトに問いつめた。

「ねえ、キリト？キリトが負けたのって……」

「お前、マジかよ……」

怒りと嫉妬の炎を燃やすサチと、呆れたように眩くツキノワを見て、キリトは大慌てで否定する。

「ち、違うよ!?女の子だから手加減したとかじゃないって！もちろんマジでした！本当だって……少なくとも、途中からは」

「どうだか！」

拗ねたようにそっぽ向くサチを見て、ニヤニヤと面白そうに笑うツキノワ。

「えくと！次に対戦する人、いませんか〜!?」

【絶剣】が周りのプレイヤーに、声掛けをしている。

「ほら、アスナ！ツキノワ！どっちか行ってきなさい！」

「じゃあ、アスナ先輩。どうぞ」

普段なら我先にと言わんばかりに、突撃するツキノワが、何故かアスナに譲った。

「え!? いや〜…心の準備が…」

「剣振れば、モヤモヤ晴れるかもですよ?」

「っ!?…じゃあ…行ってくるね」

そう言つて、アスナは一步前に踏み出した。

「あ、お姉さん。やる?」

「じゃあ、やろうかな」

sideアスナ

ルールの話し合いの結果、アイテム・魔法共にあり、ジャンプはありの羽はなし、そういう風に決まった。

決闘画面で、【絶剣】の名前を知る。

【ユウキ】…これが、あの子の名前。



カウントが進む中、私は剣を抜き、大きく深呼吸をする。カウントが0になると同時に、すぐに踏み込んで細剣を振るう。

「フッ！」

キンツ！キンツ！キンツ！

私の突きは全て見切られ、逆に踏み込まれて体勢を崩してしまふ。

「キャッ?!」

咄嗟にバク転して攻撃を回避したけど、胸の下を掠めてしまふ。

「ふう……ふう……ふう……」

楽しそうに笑うユウキを見て、私も半ば無理やり笑う。

強い……強いけど……たった一合で諦めたら、剣士の名が廢る！

そう思った時、お母さんとの会話を思い出した。

「っ!?!」

無意識に私は、ツキノワ君を見てしまふ。

その目はどこまでも真っ直ぐに、私を見ている。

アスナではなく、結城明日奈でもなく……ただ私という、一人の間人を。

「……ふう」

心は定まった。

この世界でしか、剣士として生きられないのなら…少なくとも今は、私は剣士として…【閃光】のアスナとして、戦う。

そう思いなおして、剣を構え直す。

「っ!？」

私と目が合ったユウキは、さっきまでの笑顔を引っ返めて、真剣に私と睨み合う。

「っ!ハア!」

私とユウキが同時に踏み込み、剣がぶつかる。

キイイイイイイイイイイ!!!

甲高い音と衝撃を放って、私は強引にユウキの剣を弾いた。

「っ!クッ!」

そのまま撃ち合いながら、お互いにソードスキルを発動する。

「デヤアアアア!!」

ガキイイイン!!

一回転して放たれたソードスキルを、私はしっかりと受け止めて、その勢いを利用して私も一回転しながら、「リニア」を放った。

「セアアアア!!」

ガキイイイン!!

爆煙に紛れて切りかかるけど、それは読まれてしまい防がれる。

「フツッ！」

「ハアア！」

私が一撃当てるが、その間に二撃当てられてしまう。

そのまま鏢迫り合った隙に

ドゴツッ！

「カフツッ！」

私は体術スキル【閃打】で体勢を崩させた。

抜ける……！

「ハアアアア!!」

渾身の4連撃ソードスキル【カドラプル・ペイン】を発動した。

「…フツッ！」

キキキキン！

嘘……!?!

【カドラプル・ペイン】が見切られた!?!

技後硬直と驚きで動けない私を

「ハアアアアア!!」

神速の9連撃が、私の体を貫く。

「ウツ……！」

このまま……

「やられるものかああああああ!!!」

十撃目を受けながらも、私はカウンターで一撃お見舞いする。

でも……

「っ!?!」

まだあるの……!?!

これが……【絶剣】の11連撃 O S S……  
オリジナル・ソードスキル

これほどの剣技に敗れるなら……悔いは無い!

そう思っていたんだけど……

「……んー! 凄くいいね! お姉さんにきーめた!」

何故か寸止めされていて、気付けばニコニコの笑顔を向けられていた。

「え?……ええつと……決闘の決着は……?」

「こんなけやれば、ボクはもう満足だよ! お姉さんは最後までやりたい?」

そう言われては、首を横に振るしかない。

なぜなら……私は負けたのだから。

「ずっとビビッと来る人、探してたんだ！」

そう言つてユウキは、私に手を伸ばしてる。

訳が分からないまま、私はその手を掴むと

「え？」

ユウキが飛んでいた。

「「「「「アスナ（先輩）（さん）!?!?!?!?!」」」」」

みんなが遠ざかっていき、私自身、突然のことに呆然としていて、途中でホバリングして

「お願いします！力を貸してください！」

「…はい？」

とりあえず…誰か説明して…。

side ツキノワ

…何が起きた？

あまりの光景に、啞然としていて、突然背中に強い衝撃が。

「ツキノワ！なにぼさつとしてるの!!」

「っ！せ、先輩！」

俺は直ぐに飛び出したのだが、見失ってしまい、俺はまずフレンドリストから、先輩

の居場所を探すことに。

「…この層の主街区…!?先輩!」

先輩からのメッセージが届いた。

内容は…は?

「ギルド【スリーピング・ナイト】に入る?27層のボスを1ギルドで撃破する?」

いや…何がどうなって…?

すぐに返事をしようとしたが、何故かログアウトに。

「ん?どうして…まさか…」

時間を見ると、18:30を過ぎていた。

結城家では18:30から夕食らしく、それに間に合うようにログアウトしている。

今が35分だから察するに…コンセントぶち抜かれたか。

「まあ…無事そうなら…」

俺はみんなの元に戻って、事情を説明してから、ログアウトして、安否の確認をすることにした。

side 優月

戻ってきて、連絡をしたのだが、返事が来ない。

不安になった俺は、着替えて結城家まで行くことに。

「雪降ってくるから、気をつけなさい」

「はーい！行ってくる！」

俺はすぐに駆け出して、結城家までダッシュした。

その途中、近くの公園で雪の中、静かに泣く先輩を見つけた。

「…風邪引きますよ」

そう言つて俺は優しく抱きしめる。

「優月君…？どうして…」

「連絡したのに返事が無いから…どうしたんですか？」

「…優月君には、関係ないよ…」

そう言われて、少しのショックと自分の不甲斐なさを感じる。

「…先輩」

俺は俯く先輩に、下から覗き込むようにキスをする。

「っ!?!／／ゆ、優月君!?!／／」

「ハハ、顔真っ赤」

「だ、誰の…んう!?!／／」

俺はまた、先輩にキスをして、口を止めさせる。

「…先輩、たしかに俺は、人様のお家事情に口を挟める程、偉い訳じゃない。攻略組の元

トッププレイヤーだろうが、所詮はただの高校生です。俺になんの力も無い」

「力は…無い…」

「でもね、例え力は無くても、自分の意見をしっかりと相手に伝える事は出来るよ？自分がどれだけ本気なのか…とかね？」

「っ!?!自分の…本気…」

そう、例えば…

「俺がどれだけ、先輩が好きなのか、とか？…こうして…」

またキスをする。

「先輩の涙を止める為なら、何でもするよ？」

「もうわかったから…! / / / 恥ずかしすぎるから、もうやめて…! / / /」

「ふふふ…! せくんばい!」

「キャッ! 今度は抱きつくの!」

雪の中、すごく寒いのに…すごく暖かい。

先輩といえるからかな…心が暖かくなる。

「…先輩…」

「…優月君…」

「好き…大好き…」



「私も…大好き…」

降りしきる雪の中、俺達は何回もキスを続けるのだった。

## 5 4 話

sideアスナ

私は翌日、ギルド〔スリーピング・ナイツ〕のメンバーと一緒に、ボス攻略の会議をしていた。

ユウキからのお願いとは、27層のボスを自分たちのだけで撃破したい、という内容だった。

正直、無理な話だ。

本来は7人ギルド×7組の49人レイドで挑むもの。

それを1ギルドだけでなんて…そう思っていた。

「私達が集まれるのは、今年の春までなんです。だからその前に、何が思い出を作ろうと…それが、ボス攻略なんです。私たちの名前を、はじまりの街にある剣士の碑にどうしても、名前を刻みたいんです」

メイジの「シウネー」にそう言われて、私はあることに気付いた。

私は安全マージンとか勝算とかに、縛られていたことに。

ユウキたちは、知ってるんだね…ゲームの醍醐味は、そこだけじゃないんだって。



「詳しくー！」

「えーと…／＼／＼」

こうしてボスの下見は、だいぶ遅れてスタートしたのだった。

outside

1 回目の攻略は失敗。

まあ、当然ではあるのだが。

前衛にアタッカーのユウキと、大剣使いの「ジュン」と、タンクの「テツチ」。

中距離にノリと、槍使いの「タルケン」。

そして後衛にシウネーとアスナが控えていた。

それぞれが感想を言う中、アスナだけは険しい顔のまま

「みんな集まってーのんびりしてる暇はないわよー！」

あまりにも真剣な顔と声に、自然とメンバーにも緊張感が走る。

「始まる前、3人のプレイヤーにあつたでしょ？」

彼女達がボス部屋に入る前、その近くで隠れていた3人のプレイヤーに会った。

「彼らはボス討伐専門ギルドよ。その斥候隊。同盟ギルド以外のギルドが、挑むのを見てるのよ」

「全く気付きませんでした…」

「多分目的は、情報収集。みんなは25、26層のボスにも挑戦したと言ってたけど、多分それも見られてたはずよ」

「で、でも！私たちが入った後、扉は直ぐに閉まりましたよ？どうやって見たんですか？」

「これは私のミスだけど、終盤になってジュンの足元を、小さいトカゲがチョロチョロしてるのに気づいたの。あれはピーピングだわ」

他のプレイヤーに使い魔をつけて、その視界を盗む闇魔法の1つだ。

「ということはもしかして…ボクたちの後すぐに、ボスが攻略されたのは、偶然じゃないってこと!？」

そしてそれは、1度や2度ではないかもしれない、という点に気付いてしまったユウキ。

「…大丈夫、まだ間に合うわ。まだ数を集めるのに、1時間はかかるわ」

その為、5分でミーティングを終え、30分でボス部屋まで進むことに。

なのだが…

「もうこんな!!？」

「大丈夫、20人くらいだから、1回なら出来るはず」

そう言ってアスナは交渉するのだが

「悪いね。ウチのギルドが先なんだ。あと1時間位で用意が終わるから待っていてくれ  
なんとも無茶な要求を、吹っ掛けられてしまった。」

「1時間!? そんなに待てないわよ!」

「文句ならギルド本部に言ってくれ。ユグシテイにあるからさ」

「それこそ1時間かかるじゃない!」

アスナたちの話し合いが平行線になり、ピリピリしだした時

「ねえ」

後ろからユウキが出てきて、アスナと交代した。

「これ以上僕たちがお願いしても、君たちはどいてくれないってことだね?」

「まあ…まあな…」

「そっか、じゃあ仕方ないね」

そう言ったユウキの次の行動は…剣を抜くことだった。

「戦おっか♪」

「なっ!?!」

目の前の男ただけではなく、その後ろの仲間達や、アスナをも驚かせた。

「アスナ、ぶつからないと伝わらないこともあるよ。例えば…」

振り返ったユウキの目を見たアスナは、息を飲んだ。

「自分がどれだけ真剣なのか……とかね！」

(ああ……そういうことだったんだね、優月君)

ユウキの目と、優月の目が被る。

つまり優月が言いたかったのは、ぶつかってみろ、そういうことなのだ。

その事に今更ながら、アスナは気が付かされたのだ。

「さあ、剣に抜いて」

(私は……今までお母さんとぶつかってきた？ちゃんと、私のことをお母さんに伝えてきた？)

ちがう、自分がしてきたのは、ただのわがままだった。

自分の気持ち伝えたことは、一度もない。

(だから……私も……！)

そう決意して、アスナは杖から細剣に持ちかえる。

その時、ついに後続隊に追いつかれてしまった。

(クツ！私がクヨクヨ迷ってなかったら！)

「ごめんね、アスナ！ボクワガママに巻き込んだじゃって……でもね、後悔はしてないよ！だってさっきのアスナ、今までで一番いい顔で笑ったもん！」

「ユウキ……！私こそ、役に立たなくてごめん！この層は無理かもしれないけど、次の層は

必ずみんな倒そう！」

side  
????

「あん?…ケツ、往生際の悪い奴らだ…」

後続隊のリーダーが悪態ついた時、突然最後尾を走るプレイヤーが、抜け駆けして、後続隊を追い抜き、立ち塞がる。

その姿は…シルフ特有の金髪だ。

「あつぶねえ…なんだよ、スプリガン以外にも出来るじゃん、ウォール・ラン【壁走り】」

そう言つて、抜いた刀【風断】を地面に突き立てた。

緑の羽織と白い袴を靡かせて、堂々と言い放つ。

「悪いな」

「っ!？」

その声に、アスナが振り向く。

「( )は…」

「君は…!」

アスナにとつて、何よりも嬉しい人の声。

その声の主の名は…

「通行止めだ」



「ツキノワ君！」

## 5 5 話

side ツキノワ

最近、ボス攻略専門ギルドの情報、やけに細かいとは思っていた。

べつに「スリーピング・ナイツ」をエサにするのに、何ら思うところは無い。  
ここはS A O じゃない。

命懸けじゃないのだから、ルールとマナーさえ守れば、問題ないと俺は思う。  
ただし：アスナ先輩が絡むなら、話は別だ。

「ツキノワ君!？」

「おいおい、【ダンサー舞踏家】さんよお。まさか1人でこの人数をやる気か？」

「まあ、頑張れば出来るんじゃない？」

「ハハハ！そりやすげえ！ぜひ見せてくれ！…メイジ隊、焼いてやれ」  
メイジ隊が詠唱を始めるのを、俺は黙って見つめる。

…見せてやるか、俺のOオリジナル・ソードスキル S S を。

そう言つて俺は、刀を後ろに構える。

刀に紫のエフェクトが光る。

飛んでくるのは、高速系の魔法だ。  
まずは1つ目。

「フッ！」

振り下ろして、切り伏せる。

続きは3連撃か。

「シッ！フッ！ハア！」

右逆袈裟斬り、左袈裟斬り、下からの切り上げと同時に、空中に飛び一回転。  
最後の3連撃か。

「ハアアアア！」

もう1回下から切り上げ、右左と2回横に切る。

「…7連撃 オリジナル・ソードスキル O S S 【罪歌】」

sideアスナ

「魔法を切った…？」

「偶然じゃなく…？」

誰もが啞然とする中、私は違うことに驚いていた。

オリジナル・ソードスキル  
O S S…ツキノワ君が？」

SAO時代、剣豪スキルの影響でソードスキルが使えなかった彼は、今のソードスキ

ルでの戦闘に慣れるまで、かなり苦勞していた。

そんな彼が、オリジナル・ソードスキル O S Sを作っていたとは、思わなかった。

「俺達が時間を稼ぐから、その間に行って！」

俺達…？

「ハアアアアアアア！」

「どりやアアアアア！」

後ろの方から、声が聞こえてきて、プレイヤーが飛んでいく。

この声は…!?

「遅いぞ！何してたんだ!?!」

「わりい！道に迷った！」

「アスナアアアア!!」

「ミト…!」

「行つてえええええええ!!」

迷宮区中に響き渡りそうな大声が、私の背中を押す。

ありがとう、ミト。

ありがとう、クラインさん。

…愛してるよ、ツキノワ君。

「…よし！みんな！突破するよ！」

「「「「おう！」」」」」

みんなで目の前の部隊と戦うが、ダメージを与えても、片っ端からヒールされていく。  
「え〜！ずる〜い！」

ユウキの拗ねたような文句が聞こえてくる。

あそこまで行くには…力づくで押し切る！

「シウネー！…一人でヒール出来る!?!」

「た、多分間に合うかと！」

「なら私は…敵のヒーラーを排除してくる」

私はそのまま距離をとり、全速力で走る。

「ユウキ！避けて!!」

そのまま私は、細剣最上位ソードスキル【フラッシング・ペネトレーター】を発動した。

「あわわ…ヒャー！」

ユウキの可愛らしい悲鳴を抜き去り、エンジン音のような爆音を響かせながら、私は敵を根こそぎ吹き飛ばす。

そのまま私は、敵のヒーラー部隊の目の前に止まる。

「ば、【バーサクヒーラー】…!？」

ゴリゴリに剣で前線を戦うから、付けられた2つ名だけど、私はその名前は気に入らない。

カチンときたまま私は、ゆっくり細剣を構え

「イヤアアアアアアアア！」

ヒーラー部隊を全滅させたのだった。

みんなをボス部屋に入れながら、私はツキノワ君を見る。

その時、突然私の方に振り返って、ニヤリと笑った。

「先輩!!フアイトっすよ!!」

彼らしい応援の声を最後に、扉はしまってしまった。

さて…彼の期待にも応えないとね。

「みんな!今のうちに用…意…を？」

みんな、そんなに暗い顔してどうしたの？

「アスナ…僕たち…彼らに…」

ああ、ツキノワ君達に迷惑をかけたと思ってるのかな？

だったら…。

私はそう思いなおして、ユウキに肩を叩いた。

「だったらこの借りは、ボスを倒すことで返そう！」

その時、ボスがリポップしだす。

とても大きい、双頭の巨人だ。

「…よーしー！」

突然ユウキが、自分の頬を叩く。

「もう一回！勝負だよ！」

ボス戦の結果は

「「「「「ブイ！」「「「「」

「チクシヨオオオオオオオオ!!!」

撃破に成功したのだった。

sideツキノワ

【スリーピング・ナイト】が、27層のボスを撃破してから数日。

このところ、先輩の顔色が悪い。

なんでも、【スリーピング・ナイト】と連絡がとれないのだとか。

「…ふざけやがって」

俺は今、アイツらが拠点にしているという、酒場であいつらの誰かが、出てくるのを

待っている。

まあ、来るとは限らな…きた。

「おい」

「ッ!?!」

現れた一組の男女を、襟首掴んで引きずり倒す。

「キャー!」

「ガッ!?!おま…誰だよ!?!」

「アスナ先輩の彼氏って言えばいいか?」

「あ…」

暗くて見えなかったのか、俺の顔を見て、やっと誰かを判別出来たらしい。

まあ、そこはいい。

「【剣士の碑】に名前を刻めて、もう満足したかは、先輩はおさらばか。随分と都合のいい連中らしいな、お前らは」

俺は皮肉をたっぷりと込めて、嫌味つたらしく笑いながら、侮辱する。

「なっ!?!私たちはそんな…!?!」

「じゃあなんで、先輩を避けるの?あ?」

「それは…」



女が俺に対して反論するが、肝心要の事を聞くと、黙り込む。

「おい！シウネーに強く当たるなよ！」

「うるせえぞ、クソガキ。なんならてめえが答えてくれてもいいぞ？」

サラマンダーの大剣使いを、俺は睨みつけながら黙らせる。

「…俺たちのことを、何も知らないくせに…！」

は…：下らねえ。

「んなもん、知る気もねえよ。てめえらみたいな、自己中連中の事なんて、知りたくもねえ。だがな…：てめえらのせいで、先輩が泣いてんだよ」

「っ!？」

「てめえらみてえなクズ共のせいで、先輩が泣いてんだよ！それを、どう落とし前つけるんだって聞いてんだよ、こっちはよオ!! ああ!!」

俺の言葉に、2人が黙り込む。

やがて…

「…分かりました。全てお話します」

「シウネー!？」

「ジュン。私たちは、自分たちの身勝手にアスナさんを巻き込んだのに、その恩を仇で返したの。その間違いを、正す時が来た。それだけよ」

「何偉そうにほざいてるんだよ。てめえらが被害者ヅラすんな、ボケ」

俺はそう言つて、2人の襟首から手を離す。

「…で?てめえらのこと、洗いざらい話してもらおうぞ」

「そうですね。…まずは私たち【スリーピング・ナイト】のことを。私たちは実は…治療の難しい難病持ちのメンバーで構成されたギルドなんです」

「…は?」

あまりの事実に、俺の怒りは1度、全部吹っ飛んでしまった。

なんでも【スリーピング・ナイト】は、ヴァーチャルホスピスという場所で知り合つたのだとか。

そして元々構成員は9人、そのうち3人が亡くなつたらしい。

その中には、初代リーダー…ユウキの実の姉もいた。

「そして俺たちは決めたんだ。次の1人の時には、解散しようつて」

「その1人が、もうすぐなんです」

「…まさか…【絶剣】が!?!」

俺の言葉に、2人が頷いた。

「細かい病状とかは、流星にプライバシーだから何も言えないけど、それでもユウキは、もう限界なんだよ」

「そしてもう一人……長くて3ヶ月と言われるメンバーがいます。私たちが……ユウキが、アスナさんから離れたのは……お分かりですよね？」

「……」

俺には、何も言えなかった。

抱えてるものが、あまりにも重すぎた。

それでも……それでも何か言わないと……そう思った俺は

「……自分勝手だ」

気付けば、そう口を開いていた。

「なんだよそれ。余命3ヶ月!?これ以上、先輩を傷つけたくない!?ふざけんな!お前らの自分勝手に巻き込んだんだろ!それなのに、肝心なことは、全部蚊帳の外かよ!!」

「っ!それは……」

「現に先輩は傷ついてんだよ!お前らのワガママに付き合わせたんなら、その分の筋は通せよ!置いていかれる側のことも、考えやがれ!!この大バカ野郎が!!」

結局俺は、自分の言いたいことを、言いたい放題言つて、その場で別れた。

その後、色々調べ直して、ついにその答えに辿り着いた。

「【メデイキュボイド】……か」

俺はすぐに先輩に、メッセージを送った。

翌日、俺は屋上で先輩を待った。

ガチャリとドアが開いて、先輩が俺のそばに来る。

「…先輩」

「…優月君…」

俺は泣きじやくる先輩を、優しく抱きしめて、その背中をさする。

「…【絶剣】に会いたい？」

「…うん。会いたい」

「…この間【スリーピング・ナイト】の奴らから、話を聞いた。行けばきつと、ショックを受けると思う。それでも行きたいですか？」

「行かないと行けない気がするの！」

意思は硬そうだな…仕方ない。

俺は一枚の紙を渡した。

「ここに行けば、多分会えると思います。多分ですけど」

「どうして優月君は、分かるの？」

「そこが日本で唯一、『メデイキュボイド』の臨床試験を行ってるんです」

「メデイキュボイド…？」

その紙に書いた施設の名前は、横浜港北総合病院。

そして、メデイキュボイドとは、現在ある分野において、期待が高まっている新しい医療機械だ。

ナーヴギアをコンセプトにしたそれを注目しているのは…終末期医療だ。ターミナル・ケア

## 56話

side ツキノワ

病院で【絶劍】：ユウキと何を話したのか、家で母親と何を話したのか、俺は知らない。

ただ分かるのは、蟠りが無事解消した事と、結城家のゴタゴタも片付いたこと、それだけだ。

だから俺は満足だ。

満足だから…

「こら！ ツキノワ、逃げない！」

「はーなーせー！」

「えく…それでは！ 顔合わせ会を祝しまして！ 乾杯！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

顔を合わせにくすぎるわ！

始まってしまった会を、俺はキリトたちのホームである、22層のログハウスのテラスでぼんやりとしていた。

「あはは、相変わらずアスナさんのことになると、見境なくなるんだな！」  
「ケイタうるさい」

「ふふ、アスナ愛されてるね」

「サチ！はずいからやめてくれ！」

「いや〜！男だぜ、ツキノワ！」

「キリトは死ね！」

「俺だけ酷いな!？」

俺は3人のからかいをあしらいながら、ため息をつく。

はあ…仕方ない。

俺は話した2人の場所に行き、とりあえず謝ることに。

「この間はすみませんでした」

「いえ、私たちの方こそ」

「こつちも目を覚まされた気分だぜ！」

なんというか、やけにアツサリとしているな…。

そう思っていると、不意に肩を組まれる。

「いや〜！君が噂の甘々のキス少年か！」

「…は？何それ」

「ちよ!?ノリ!?／＼／＼」

何故かアスナ先輩が、大慌てでこっちに来る。

「いや、ボス戦の時さ、作戦会議中にぼうつとしてたから、どうしたのかなって思ったらものすごい惚気けちやつてさ!」

「あれは私達も、すごく興奮しました!」

「2人ともやめて〜!／＼／＼」

そんなわちやわちやしていると

「このまま28層も突破しようぜ!」

「おお!いいな!それ!」

…え?

という訳で、現在28層迷宮区にて

「「「「「うおおおおお!」」」」」

「「「「「負けるかああああ!」」」」」

何故かボス攻略に挑む羽目に。

なぜこうなった。

そして

「「「「「「「「「「「よっしやあ!」」」」」」」」」」」



勢いで本当に、クリアしちゃったよ。それからあつという間の日々だった。

視聴覚双方向通信プロログとやらで、ユウキと一緒に授業を受けたり、明日奈先輩ら女子たちと一緒に京都に旅行に行ったり、ALO内でユウキと決闘したり、本当に濃密で楽しい、3ヶ月だった。

「……え？」

そして、その時間は、唐突に終わりを告げた。

…ユウキが亡くなったのだ。

正確には、明日奈先輩から、もう限界だと連絡を受けた俺たちは、すぐにダイブして、向こうでその死に目に立ち会ったのだ。

俺たちだけじゃない。

1000人は超えるだろう程のプレイヤー達が、ユウキというALO最強のプレイヤーを、見送ったのだ。

その最期の顔は、満面の笑みだった。

outside

ユウキが亡くなってから、時が経ち。

「両手を上げなさい」

「勘弁してくれよ……」

(何故こうなった……?)

ツキノワは、灰色の女騎士に刀を突きつけられながら、こうなったのか、その経緯を振り返っていた。

「……」は？」

気付けば、ツキノワは知らない場所にいた。

右手には赤い空と赤い不毛の大地。

左手には薄暗い谷とその奥に広がる草原。

「……日本……ではないな」

(そうなると海外……もしくは何らかのVR空間か?)

そう予想してツキノワは、知ってる限りのゲームコマンドを試したが、全て反応無し。

「チツ。……そういえば……」

(これはなんだ?)

自分の足元が気になったツキノワは、つま先で軽く叩きながら足元を確かめる。

感触としては鉄……しかも相当年季が入ってる。

だがそれ以上に気になったのは、その目的だ。

「壁……? 国を隔ててるのか?」

「そうよ。正解」

「っ!？」

(いつの間に…!?)

突然聞こえた女の声に、ツキノワは咄嗟に距離をとろうと、大きく振り向きながら飛んだ。

だが…

「動くな」

すぐに首筋に、黒い刀を押し当てられる。

女は、ミトくらしいの身長で少し年上に見えた。

その灰色の髪と黒いリボン、赤い目からツキノワは

(うさぎ…?)

場違いなことを思いながら

「両手を上げなさい」

「勘弁してくれ…」

(何故こうなった…?)

すっかり文字通りの、お手上げ状態になるのだった。

sideツキノワ

「貴方、どこの誰？」

「俺はツ……」

ツキノワと答えようとして、少し思いとどまる。

何故か今、ツキノワと答えるべきでは無い、そう判断したのだ。

「……優月。場所は……とても遠いところから来た……と思う」

「ユツキね。思うつてなによ」

「……覚えてないんだ。思い出せないって言った方が、正解かも」

「……貴方、もしかして『ベクタの迷子』？」

は……なんだって？

ベクタの迷子？

突然の訳分からん用語に、ポカンとしていると

「……知らないのね。本当にそうなのかしら……」

そう言いながら、説明が始まった。

【ベクタの迷子】とは、暗黒神ベクタのイタズラで、どこかの土地から攫われ、全ての記憶を奪われてから、全く違い土地に飛ばされてしまった人を指すらしい。

「ん……そうになると、どうするべきかしら……」

「……というところ……」

「ここに居ること自体は【禁忌目録】には違反してないけど、かといって【東の大門】によじ登つちやつた人を放つとく訳にも…」

「き、【禁忌目録】？【東の大門】？何それ？」

俺がそう尋ねると、ポカんとした顔をして見てくる。

「…ここまで忘れてるのね、【ベクタの迷子】」

「は？」

「仕方ないわね…いい？」

こうして灰色の女騎士の説明が始まる。

【禁忌目録】とは、この世界の法律。

【東の大門】とは、今まさに居る場所であり、【人界】と【暗黒界】<sup>ダークテリトリ</sup>を隔てる最後の砦、らしい。

【人界】とは、左手に見えた世界で、【暗黒界】<sup>ダークテリトリ</sup>とは、右手に見えた世界らしい。

「暗黒界へ一歩でも踏み込めば、禁忌目録違反なんだけど、この東の大門は一応人界のものだから、ここはまだ人界なのよね。…ちよつとあんた、飛び降りなさいよ。あつち側へ」

「俺をなんだと思ってるんだよ…。普通に死ぬし、自分から捕まろうとする奴、いる訳ねえだろ」

というか、いつの間にか剣を収められてるし、口調も変わってきた。まあ別にいいんだけど。

「…まあとりあえず、あんたを連行するわ」

「えー、マジで？」

「マジで。拘束はしないから、しつかり私に掴まりなさい」

「掴まる…？」

「このまま逃げたら余計ヤバそうなので、仕方ないが大人しくしよう。

そう言われてついに行くと、そこにはデカイトカゲが。

…いや、現実逃避はやめよう。

「…竜？」

「そう。飛竜」

流石はゲームの世界。

なんでもありだ。

ふと俺は、名前を知らないことに気付く。

「ねえ、名前は？」

「この子？霧舞よ」

「そっちじゃねえよ！いや、そっちを知るのもいいけど！あんたの名前だよ！」

「ああ、名乗ってなかったわね。私はイーデイス。【イーデイス||シンセシス||テン】よ」

## アリシゼーション編

### 57話

side 優月

イーデイスがくれた毛布にくるまりながら、飛竜の背に揺られること、数時間。

「着いたわよ。ここが人界の中心。【セントラル・カセドラル】よ」

「いやでっけえな!」

思わず唾然としながら、目の前のバカでかい塔を見上げる。

まだある程度の距離があるけど、それでもそこそのデカさだ。

「何階あるんだよ…」

「100よ。まだ大きくなってって」

「はあ!?!100!?!」

ちよつと…権威を示しすぎじゃ…。

そう考えていると、下の方に何やら空いてる場所があり、霧舞をそこに誘導する。

中には他の飛竜が数匹いた。

「( )は発着所よ」



「なるほどな…」

霧舞もそうだが、他の飛竜たちも可愛がられてるのか、痩せ細ったりはしていない。その様子を見ていると

「おう、来たか、イーデイス」

「あ！騎士長！帰ってたの!?!」

男の声が聞こえて、その方を向く。

そこに居たのは40そこそこの男。

鍛え上げられた肉体と、鼻に走る古傷。

そして何より…重厚な剣士の気迫。

あまりの気迫に、一瞬飲まれかけるが、辛うじてそれを踏みとどまる。

「そいつが、報告にあつた少年か」

「うん。これから狛下に指示を仰ごうと思うけど、狛下は？」

「その事だがな…先程、俺の報告のついでに聞いてみたんだが、俺の裁量に任せると  
よ」

つまり、俺の処遇はこの男によって、決められるのか。

そう思っていると、男と視線が合う。

「俺は【整合騎士団】団長、【ベルクーリ】シンセシスⅡワン」だ。よろしくな、少年」

「優月です。よろしく…?」

「…」

「ツ!？」

今のなんだ!？」

咄嗟に避けたが、今、透明な何が俺のそばを通り過ぎたぞ!？」

「ほう…イーデイス、今の見えたか」

「う、うん。騎士長の【心意】の小刃をユツキがギリギリ避けたわね」

【心意】？

なんだよそれ？

意味わからねえ…。

「ふむ…よし、少年。剣は使えるか？」

「た、多分…」

「なら、俺と一戦やるか」

「…はあ!？」

なんでそうなった!？」

outside

それから紆余曲折あり、優月の対戦相手がイーデイスに変更になった。

「いくらなんでも、いきなり騎士長は重いでしょ！私がやるから！」

そう言われたベルクローリは渋々、イーデイスにバトンタッチ。

そのまま練習場まで連れていき、それぞれに木刀を用意する。

「おう、好きなの選べ」

「…じゃあ、これ」

そう言つて優月が選んだのは、木刀。

「ほう…」

「あら、私と同じなのね」

そういうイーデイスの手には、同じ木刀が握られている。

「よし。ルールを説明する」

- ・ 一本先取。
- ・ 負けを認める、気絶、審判の判断により勝ち負けを決める。
- ・ 今回の審判はベルクローリが務める。
- ・ 骨折以上の怪我を追わせない。

「以上だ。双方、構え！」

木刀を水平に構えるイーデイスと、ダラりと力を抜いている優月。

「…始め！」

「やあああああああー！」

「フツ！」

イーデイスが開始と同時に、一気に踏み込み突きを放つ。

優月はその突きを掬い上げるようにいなして、流れるように胴を横薙ぎに払う。

「うわあ!?!」

(何!?!今の手応え!?!まるで羽みたい!?!)

踏み込みを強引に止めることで、ギリギリ避けたイーデイスは、一度距離をとる。

だが

「え?」

いつの間にかすぐ目の前にいる優月に、惚けてしまうイーデイス。

「フツ！」

「クツ!?!」

カアアアン!

木がぶつかる音を聞きながら、その重さに驚くイーデイス。

あまりに軽やかな振り方だった為、想定以上の衝撃に、イーデイスの腕が痺れる。

「シツ！」

「ツ!?!」

よろけたイーデイスめがけて、軽やかながら鋭い突きが迫る。

「システム・コール！ ジェネレート・エアリアル・エレメント！ デイスチャージ！」  
「なっ!?!」

イーデイスから突然発せられた爆風に、優月は吹き飛ばされる。

転がりながら、体中に走る痛みにも、優月は驚く。

（ペイン・アブソーバーが効いてない!? 痛みがリアルにフィードバックするのかわい!?!）  
「っ……!?! おい!?! 今のなに!? ズルくね!?!」

「【神聖術】 よールールに決められてないもの! ズルじゃないわ!」

「おい!?! おっさん!?! 異議を申し立てる!」

優月の抗議を聞いたベルクローリは、少し考えてから

「たしかに決めちゃいねえが、フェアじゃねえわな。おい、イーデイス。次は反則にするぞ」

「え〜!?!」

神聖術の使用禁止を決定した。

それに喜ぶ優月と、反対するイーデイス。

「いいわよ!?! 剣技で勝ってやるわ!」

そのまま切りかかるイーデイスと、それに反撃する優月。

イーデイスの剣は、重く鋭い。

(重い! まともには受けたら、剣どころか腕までもつてかれる! この体のどこに、こんな力があるんだよ!)

一方の優月の剣は、とにかく上手い。

(剣の使い方が上手い! あまりにも自然に振つてるから、いつ切つてくるかわからない! まるで体の一部みたいに使ってる!)

攻守が次々と切り替わるのを、ベルクーリは見ながら驚愕する。

(あのイーデイスと互角にやりあうとはな…)

イーデイスの持ち味は、神聖術と剣術の組み合わせだ。

神聖術を封じた故に強みは減ってはいるが、それでも剣術だけでも、整合騎士団において上位に食い込む。

そのイーデイスと互角に戦う優月を見て、ベルクーリは剣士の性が疼き出す。

「小父様、これは一体…?」

そんなベルクーリのそばに現れたのは、金色の女騎士だ。

見た目の年頃は、優月とそう変わらない。

「おう、アリスの嬢ちゃんか。イーデイスが連れてきた男の腕を見てたんだが…嬢ちゃんも見てけ」

金色の女騎士の名前は「アリスⅡシンセシスⅡサーテイ」。  
整合騎士団の中で、若くして第3席に君臨する実力者だ。

「はあ…」

「俺達には無い、おもしれえ戦い方するぞ」

side 優月

俺が思うに、戦いとは理詰めだ。

本能が大事だと言う奴もいるが、それも間違えではない。

だが、それ以上に俺は、理性が大事だと思っている。

「フッ!」

「クッ!」

イーデイスが動きたいであろう動きを、先に埋めることで足止めする。

「シッ!」

「うわわ!」

イーデイスが認識しづらいだろうタイミングで、そこを突いて剣を振る。

「ハア!」

「ッ!」

イーデイスの攻撃するタイミングで、先に仕掛けて不発させる。

これだけ打ち合えば、イーデイスの思考パターンとタイミングは読めてくる。

あとはそこから、選択肢を狭めていくだけだ。

「こ…のおお!!」

「グワツ!」

ほら、やっぱり力ずくで弾こうとしてくる。

「隙あり!」

俺は両手で握られた、振り下ろされる剣を見ながら、1歩前に出て柄の真ん中…ちよ  
うどイーデイスの両手のど真ん中に手を添える。

「え?」

そのまま腰を入れて、重心ごとイーデイスを持ち上げる。

いくら力が上でも、体重は俺の方が上だ。

というか、この技には力はいらない。

太刀取り…合気道と呼ばれる武道の技の1つ。

「なっ!?…ギヤア!?!」

女が上げちやいけない声を上げながら、背中から落ちるイーデイスは、その衝撃で木  
刀を手放す。

当然俺はその木刀を握っているわけで、



「シッ！」

「そこまで！」

俺がイーデイスの木刀を、イーデイスの真横に刺したのと、ベルクーリのおっさんが止めたのはほぼ同時だった。

「勝者！ユツキ！」

俺はベルクーリの判定を聞きながら、イーデイスの手を掴み起こす。

「…今の何よ」

「太刀取り。徒手空拳だ」

「ズルいわよ！」

「ルールに決められてないし」

ムスツとするイーデイスを無視ししながら、俺はベルクーリに木刀を返した時、見慣れない女騎士がいた。

「ええつと…どちら様？」

「そちらから名乗るのが筋でしょう」

たしかにそうか。

「優月だ。そっちは？」

「アリスⅡシンセシスⅡサーテイです。先程の戦い、お見事でした」

「ああ、あのイーデイスを下すとはな。大したもんだ。よし！お前さんの処遇が決まった！」

そういえばそうだった。

突然始まった決闘で、すっかり忘れてた。

「お前さんは、カセドラルの警護を頼む！よろしくな、坊主！」

「…まあ、一宿一飯の恩くらいは、返しますよ」

という訳で、俺はここで暮らすことになったとき。

それから数週間後、俺は何をしてるかというと

「ユツキー！お腹減ったー！」

「早く食べたいです！」

「あーもう！分かったから、離れろ！フィゼル！リネル！」

「…ユツキ殿。濟まないがコヒル茶を貰えないか」

「私にも貰えないか？」

「デュソルバートさん！ファナテイオさん！そこにあるから！好きに入れて！」

「おーい！ユツキー！私もお腹減ったよー！」

「おはようございます、ユツキ。今日はなんですか？」

「おう、坊主。すっかり板についたな。…料理人が」

「だ〜！もう！なんで！・てめえらの！飯の世話を！しねえと！！いけねえんだよ！！」

すっかりシエフに、なってしまったのだった。

本当になんでき!?

## 58話

side 明日奈

ある日、私たちはエギルさんのお店でゆっくりしてから、帰路に着いた。

その時

「あれ？」

優月君があることに気が付いた。

その視線の先を追うと、一人の7、8歳の男の子が。

今は夜の6時前。

そんな男の子が、こんな時間になんで一人でいるのか？

私たちは声をかけようとした時

「あー！」

男の子がコケてしまった。

その時、何かを落としたのか車道に転がっていく。

そして男の子は、それを追いかけてしまう。

「バカ!!行くな!!!」

「ダメ!!戻って!!」

私たちが叫んだ理由は、すぐそこまでトラックが迫っていたからだ。

トラックの運転手も、飛び出すとは思ってなかったのか、慌ててブレーキをかける。でもとてもじゃないが、間に合わない。

私が走り出すより速く、優月君が駆け出した。

あつという間に追いついて、子供を引っ張る。

でも…それだと…!!

「優月君!!!」

全てがスローモーションに見える。

何もかもがゆっくり動く中、優月君の目が私を見る。

口元が動く。

声は聞こえないけど、何を言っているかは、分かってしまった。

ーごめん。

激しい衝撃音と共に、優月君が消える。

伸ばした手が、駆け出した足が止まり、恐る恐る振り返ると

「こや…」

視界が真っ赤に染る。

「いや……！」

見たくない見たくない見たくない!!

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

血だらけの、優月君が横たわっていた。

近隣の家から人が出てくる。

私はそこにしやがみ込んだまま、何も出来ず。

ただ叫ぶしか出来なかった。

それから直ぐに、救急車と警察が来て、私は連れられるがまま、優月君と一緒に救急車に乗せられる。

心電図のモニターが、まだ生きている事を教えてくれる。

「優月君……優月君……優月君……」

ただ手を握って、祈るしかできない。

病院につき、そのまま手術室に運ばれる彼を見送ると

「明日奈!!!」

「優月は!?!」

「無事なのか!?!」

深澄と、ご両親の声が聞こえる。

「私……私……私……」

「大丈夫よ！明日奈は悪くない！だから、落ち着いて！ね！」

「深澄……！深澄！！私……アアアアアアアアアア！！」

私は深澄の中で、ただ泣き続けることとした出来ない。

いくら泣いても、彼の命の保証は出来ない。

なのに、涙が止まらなかった。

それならすぐに

「『明日奈！』」

私の家族が来る。

まず私に駆け寄ったのは

「明日奈！」

「お母……さん……」

「ああ！明日奈……！」

お母さんだった。

深澄とお母さんが、私を励ましてくれていると

「あの……」

一組の親子がやってくる。

その子供に、私は見覚えがあった。

「君は……」

「明日奈、知ってるの？」

「優月君は……あの子を守るために……轢かれたの……」

その言葉を聞いて、優月君のお父さんとお母さんが、顔色を変える。

「すみませんが、話なら後にしてください」

「今は、私たちの息子が第一なので」

なにか言おうとする男の子のご両親を、一言で切り捨てる。

そのまま誰も何も言わない無言の時間がすぎて、手術室の電気が消える。

「っ!? 先生! 息子は!? 優月は!?」

兎沢家が、いの一歩に駆け出して、お医者さんに詰め寄る。

「……何とか成功です。生きてるのが奇跡です」

生き……てる……?」

優月君は……生きてるの……?」

「良かった……良かったよ……!!」

「ええ……ええ……!!」

私と深澄が抱き合いながら、涙を流していると



「ですが…」

先生が、重苦しく二の句を告げる。

「頭部を強く打つていきます。なんらかの意識障害、記憶の欠損…最悪、急な体調の変化による死亡も、考えられます。何が起きてもおかしくない…その心構えだけは、しておいて下さい」

まだ、油断出来ない。

そう思うと、自然と体が震える。

私と深澄は、ICUに運ばれた優月君のそばに、いることにした。

あとから聞いた話だと、あの男の子はご両親と喧嘩して、家から飛び出してしまったらしい。

その時持っていたものは、ずっと大切にしてきたペンダントだとか。

男の子の方は、かする傷ですんだと聞いて、少しだけホツとしたのは内緒だ。

「…ちゃん！いちちゃん！」

「この声は…!?!」

「直葉ちゃん!?!」

私と深澄は慌てて、声の方に向かうと

「直葉ちゃん!?!」

「千笑も!？」

何故か、直葉ちゃんと千笑がいた。

2人はどうして…?？」

「2人とも…お兄ちゃんが…!!」

「和人が…ジョニー・ブラックに…!!」

「な、なんですって!？」

「嘘…!?!和人君まで…!?!」

私たちは、思わず悲鳴じみた声を上げてしまう。

優月君だけじゃなくて…和人君まで…!?!」

「2人はどうして…?？」

「…優月君が、子供を庇って、トラックに…」

「幸い、今は一命を取り留めたけど…」

「…そんな…!?!」

あまりの事態がたて続けに起きてしまい、私たちは混乱していた。

だからなのか、そうでは無いか。

今、一つだけハッキリしていることがある。

「2人はどこに消えたの…!?!」

優月君と和人君：2人の行方が分からなくなってしまったことだ。

side 優月

この世界に来て、1年が経った。

この1年で特に何をした訳では無いが、俺はこの世界を統べる機関【公理教会】最高司祭【アドミニストレータ】より、何故だがこの世界の守護者にして、裁定者である整合騎士の立場を貰ってしまった。

名前はユツキⅡシンセシスⅡゼロ。

番外ということらしく、あくまでトップはベルクーリのおっさんだ。

まあ、それはともかく

「坊主、【神器】探してこい」

「テキトーすぎませんか？おっさん」

いきなり執務室に呼ばれたかと思えば、何故こんなにも適当な指示を？

「いやよ、整合騎士なのに【神器】もねえんじや、締まらねえだろ」

【神器】とは簡単に言えば、ものすんごい強い武器のこと。

イーデイスの黒い刀【闇斬剣】や、おっさんの【時穿剣】、アリスの【金木犀の剣】が該当する、

「で？それって自分で見繕うものなの？」

「一応、最高司祭殿に見繕って貰うのもアリだが、お前さん嫌いだろ」  
「うん、嫌い」

誰が好きになるか、あんな腹ん中地獄の釜女。

地雷もいいところだわ。

「だから、自力でみつけてこい」

「りよーかい。身分は隠すんだよな」

「おうよ。一応、一般人との接触は禁止だからな。今回は特例つてことで、最高司祭殿の許可が出てる」

なるほどな…仕方ねえ。

「そんじゃあ、行ってくる」

「おう、気長にな」

気長に旅しないといけねえのかよ…。

そう思いながら、俺は執務室を出て、自室に向かってっていると、ちょうどアリスと遭遇した。

「お、アリスじゃん。やほー」

「ユツキ、もう少しちゃんと挨拶しなさい。…それで？随分と早足でしたね」

「ああ、おっさんから神器見つけてこいって、追い出されることになった。気長に行け、

とよ」

「…気長になりますね、神器探しは」

どこか遠い目をするアリス。

やはりそういうものらしい。

「では、先輩として助言をひとつ」

「タメだろうが」

「黙りなさい！全く…。いいですか？こういうのは、自分の感性を信じるのです」

「感性…ね…」

まあ、言わんとすることは、分からんでは無い。

こういうのは、フィーリングだろう。

「OK。サンキュな」

「相変わらず貴方は時々、よく分からない神聖語を使いますね…」

「これも感性だよ、感性」

「…私の感覚では、お礼を言われていると、告げています」

「そ、せいからい。という訳で、用意して行くわ」

「相変わらず自由ですね!?!…お気をつけて」

なんやかんやで、良い奴だこいつは。

そんなアリスの声を背に、俺は自室に向かい旅支度を整えて、武器庫から引つ張り出して貰った剣を一振、地面に刺して手を離す。

倒れた方角は…西だ。

「よし、西から行きますか」

そうして俺は、神器探しの旅に出たのが、約10ヶ月前。

未だに見つからないでいる。

「だあああああ…これが最後だ！行くぞ！東帝国!!」

イスタバリエス東帝国。

西、北、南を探し回ったが何も無く、ついに最後になったこの帝国。

【東の大門】有するこの方角は、奥に向かえば向かうほど、空気が重くなっていく。

暗黒界に近づくからだろうか？

そう思いながら旅を続けること2ヶ月。

ある村に立ち寄った俺は、1つの御伽噺を聞く。

それは、ある女剣士が闇の軍勢を1人で倒したという話。

その最期は、死んだ女剣士を祀るために、その死体の上に、桜の木を植えたらしい。

「…桜の木の下には、死体がひとつつてな…」

リアルだな…リアルなのか。

俺は御伽噺を元に、その噂の桜の木の場所を突き止め、山奥を目指す。

「…いるな。魔獣か」

この旅は、魔獣を狩る旅でもあった。

その中でも、このライオンみたいな魔獣は、最大で最強だった。

「クッー」

重いし速い！

そして重さに負けて、剣が折れてしまった。

「しまった!?グワア!」

そのまま振り下ろされた前足の勢いに、俺は吹き飛ばされる。

その背中に当たるのは、大きな桜の木。

「…この木の下に…眠る死体は…俺…か…」

くっそ…頭を強く打ちすぎたか…

血が止まらねえし…クラクラする。

ここまでか…そう思った時過ぎたのは、現実世界で俺の帰りを待っているであろう、みんなの顔だ。

「…そうだよな…」

震える体に入力して、木を支えに立ち上がる。

「……ここで……折れたら……」

震える心に喝を入れて、それを支えに剣を握る。

「俺じゃねえよなあ!!」

その時、不意に後ろの桜の木が、脈動した気がした。

「……え?」

突然風が吹き荒れ、花びらが舞い散り、やがて……桜の木が一振の刀に変わった。

……なんでだ?

だが、感じる。

「……これだ」

この刀が……俺の神器だ。

俺は迷わずその刀を手取る。

その時、誰かの記憶が駆け巡る。

「ツ!?!……」

一瞬だった。

そしてその一瞬で、俺は理解した。

「……話が違うじゃん。御伽噺」

桜の木を植えたんじゃない……この女剣士とその愛刀が、ひとりで桜の木に変わった



んじゃないか。

恐らくそれは、この刀の原型が桜の木だったのだろう。

そう思いながら俺は、飛びかかってくる魔獣を無意識に、一刀両断していた。

そのすぎましい切れ味に、俺は顔を引き攣らせた。

「…段違いだな。まずは…システム・コール。ジェネレート・ルミナスエレメント。

デイスチャージ」

俺はこの1年で、イーデイス達から学んだ、神聖術で傷を癒す。

「帰りますかね…」

俺はフラフラと帰り道を歩くのだった。

outside

帰り道の道中、優月は自身が手にした刀のことを、細かく調べていた。

（特性は【千変万化】【無限再生】【継承】の3つ）

【千変万化】は、刀自体をあらゆる形に変形出来る。

（これは面白い戦い方が出来そうだ）

【無限再生】は、その名の通り、耐久値や体力…この世界では【天命】と呼ばれるものを、

無限に回復する。

（それは使用者の俺にも及ぶが、当然人体へのフィードバックには限界がある。だから

こそ、女剣士は死んだ訳だし)

【継承】は、元々の使い手たる女剣士の戦闘経験を、自身へとダウンロードするものだ。  
(これは使ってみないと分からねえな。：まあ負担は大きそうだけど：)

「お兄さん、央都【セントリア】に着いたよ」

「ありがとう、おつちゃん。：はいこれ、足りる?」

「まいど。お兄さんにステイシア神の加護を」

「ありがとう!」

優月は馬車を飛び降り、裏路地を駆使してカセドラルに辿り着く。

「やっと着いた…疲れた」

優月は中庭を歩く。

その中庭には、この世界では超基調なバラが、沢山植えられている。

(うっ…バラの匂いがきつい…)

バラはいい香りなのだが、数が多すぎて香りがキツイのだ。

アリスも同様で、特に夜が香りが強く、2人とも夜は近付かない。

「動くな」

噴水広場に差し掛かった時、男の声が優月の足を止めさせた。

「貴様、何者だ?ここがどこだと思ってる?」

男は銀色の鎧を着た、青年だ。

銀髪をオールバックにした男を見て、優月は驚いたような顔をする。

「…俺がいない間に、新しい整合騎士が増えたのか」

「貴様！私の質問に答えろ！」

「知りてえなら、まずそつちが名乗れよ」

「ふん！貴様なぞ指図する！…」〔エルドリエⅡシンセシスⅡサーティワン〕だ」

（いや名乗るんかい）

優月はツツコミを入れながら、ズッコケる。

まさか名乗るとは思っておらず、なぜか肩の力が抜ける。

「…優月だ。ユツキⅡシンセシスⅡゼロ」

優月がそう名乗った時、エルドリエはハツとした顔をして、ジロジロと優月を見た。

「貴殿が…アリス様の言っていた…」

「アリス…様？」

（え？様？なんで様付け？）

優月がポカンとしていると

「先程は失礼致しました、ユツキ殿。私はつい先日整合騎士として、天界より召喚されました。お噂はかねがね」

(天界より召喚された…ね)

整合騎士は、天界より召喚さて、人界を守る者…全員そうやって教えこまれている。事実は全くの嘘なのだが。

「ユヅキ殿、アリス様もかつていたその剣の腕、是非、若輩者の私にご教授頂ければ」  
 そういうエルドリエの目は、決して教えを乞うものではなく、眼前のライバルを倒したい、そう物語っていた。

「いや、疲れてるから」

「逃げるのですか!？」

「もうそれでもいいよ。無駄な剣は抜かない。騎士や剣士として、当然の話だ」

(まあ、知らんけど)

適当にでつち上げながら、スルーしようとした瞬間、膨れ上がった殺気に、優月はすぐに身構えた。

「流石です。ですが、殺気に向ける相手を無視する…そうはいきませんまい」

「…仕方のねえ後輩だ」

そう言つて優月は、荷物を置き、居合の構えをとる。

「…一撃だけだ。それで片をつける」

その気迫に、エルドリエは無意識に唾を飲み込むのだった。

## 59話

outside

刃に手をかける優月の気迫に、エルドリエは吞まれてしまい、唾を飲み込むしか出来ずにいた。

(なんだ…この気迫は…!?これほどの心意…感じたことない…!?)

「…なあ、後輩くん。早く用意してくんねえかな?やる気ねえなら帰るぞ」

この時初めて、エルドリエは自分がただ棒立ちになつていたことに、気が付いた。

慌てて自身の神器【霜鱗鞭】を構える。

エルドリエは優秀な騎士だ。

故に気が付いてしまった。

(今、本気で斬りかかれていたら、数回は死んでいた…!)

自身が、ただの気まぐれで生きていることに。

一方の優月は、エルドリエの構えを見ながら、どう勝つかを考えていた。

(速攻キメるか?いや、鞭は動きが読みにくい。それにあれは恐らく神器。何かヘンテコ能力を持っている可能性が高い。まずは…先手を取らせるか)

そう考えた優月は、わざと隙を見せる。

「っ！ハア！」

振るわれる鞭の先端は、目では追えない。

だから優月は、エルドリエの腕の動きを追って、その軌道を予測する。軌道の予測自体は当たった。

だが、予想外の変化が、鞭に起きた。

「っ!?!何!?!」

慌てて避ける優月。

その理由は、エルドリエの「霜鱗鞭」が、二つに分かれたからだ。

分裂…それがエルドリエの神器「霜鱗鞭」の能力である。

「ハアアアアア!!」

空気を切り裂く音と共に、鞭がいくつにも分裂して、エルドリエ周辺を埋めつくしてしまう。

「…なるほど、これは不利だ」

優月はエルドリエへの、間合いを詰める道を失ってしまった。

どこを通ろうにも、鞭の餌食になる。

「さてさてさて…どうするかなっ…!」

優月は刀身を伸ばして、超高速でエルドリエに向かって攻撃を仕掛ける。その勢いは鞭の攻撃を全て弾く程だ。

「何!?!」

驚きつつも、エルドリエとて整合騎士。

その刀身の動きをしつかり見切りつつ、鞭のを丸めて、その一撃を防ぐ。

だがそれに気を取られた隙に、優月が視界から消えた。

エルドリエは啞然としながら鞭を構えると、上から何かが落ちてきて、腕を止められてしまう。

「っ!?!これは…:鞆?!」

「ハアアアアアア!!」

落下の速度を乗せて、振り下ろされる刀。

エルドリエは咄嗟に、腰に差した剣で防ごうとして、なぜか剣がすれ違った。

「なに!?!」

「詰みだ」

気付いた時には、小さい刃がエルドリエの首元に突きつけられていた。

「…刃が…:小さい…?」

「目に頼りすぎだぜ、後輩くん」

優月は攻撃をわざと見切らせ、それに気を取られた隙の上に飛んでから、鞘で動きを止めた。

この時エルドリエは、鞘から刃わたりを無意識に予測していたのだ。

それもこれも、エルドリエが優秀であるが故に、利用された隙。

振り下ろされた刀が、想定より小さくなっていたのは、優月の神器の特性【千変万化】だ。

「…さてと、いい加減出てきたら？ その観客。金とるよ」

「…なあんだ、気付いてたんだ」

「だから言ったじゃないですか、イーデイス殿。ユツキは気配に敏感だと」

「ま、これくれえ気付いけねえと、まだまだだがな」

優月の言葉に現れたのは、ベルクーリ、イーデイス、アリスだった。

「あんな露骨な視線送つといて、白々しい…なあ、エルドリエ？」

「と、当然ですとも！」

「ふふ、エルドリエは、将来有望ですね」

（（いや、あれは気付いてなかったな…））

アリス以外のメンバーが、心を一つにしていると、ベルクーリが咳払いをして、優月の神器を指さす。



「そいつが、坊主の神器か？随分と小さいな」

「いや、こいつは大きさを変えられるから」

そう言つて、優月は神器を元の大きさに戻した。

「へえ、便利ね」

「名前はなんですか？」

【桜刀：舞姫】

前の使い手が女性だったことを考え、すこし華やかな名前にした優月。

「へえ、かわいい名前ね。：うん、刀も美人さんね」

白い鞘に桜色の柄、刃も純白でまるで美術品と見間違う美しさがある。

優月はそれをしばらく見つめて、ゆっくりと鞘にしまう。

(まるで、【菊一文字正宗】みたいだな)

「さてと、今日はもう休め。報告は明日でいい」

「じゃあお言葉に甘えて。風呂に入って寝るわ：おやすみ」

優月は欠伸を噛み殺しながら、中に入っていく。

それを4人は見送りながら、アリスはポツリと呟いた。

「それにしても：恐ろしい心意の強さでしたね」

「そうね。私も飛び上がっちゃったもの」

(あるいは、坊主の心意は俺より上かもしれねえな)

ベルクローリは、優月の心意の強さに疑問を抱きつつも、好戦的な笑みを隠せないでいたのだった。

side 優月

翌日、俺は報告書と共に、この2年でわかったことをまとめていた。

俺は自分の手の甲にS字を書いて、真ん中をタップする。

「[ステイシアの窓]…ね…」

ステイシアの窓とは、それ自身のステータスやパラメータを視覚化するものだ。

それに現れるのは天命値、[オブジェクトコントロール権限]、[システムコントロール権限]だ。

「オブジェクトコントロール権限」とは、物体を操るのに必要な権限レベルだ。

ゲームに例えるなら、武器の装備に必要なステータス数値とかだ。

「今の俺は48。神器は46…か」

このレベルが低いと、持ち上げるのすら一苦労。

逆に少しでも軽ければ、難なく扱えるようになる。

「次は[システムコントロール権限]…」

これは神聖術に必要なレベルだ。

高いほど、高位な神聖術を扱える。

俺のレベルは38。

それなりに高い方だろう。

…多分、きつと、恐らく。

「…まあ、数値はあまり意味ないか」

俺が驚いたのは、この世界において、数値はあまり意味をなさないということだ。

この世界で大切なのは…イメージ力だ。

イメージ力が強いほど、その人自身の強さも跳ね上がるということ。

それはつまり…イメージ力次第では、世界すら変えられるということ。

そして戦いに大切なのは、勝てるという自分自身のイメージ出来るかどうか、ということだ。

レベル差があっても、勝つイメージがあれば強くなる。

逆にそのイメージがなければ、レベルで勝っていても負けてしまう。

「次は…ソードスキル…か」

そしてこの世界では、ソードスキルが使えるのだ。

剣の流派があり、それぞれに【秘奥義】という形で、ソードスキルが存在していた。

例えばハイ・ノルキア流の技、【天山列波】は両手剣ソードスキル【アバランシュ】に

あたる。

「イメージ次第では、OSSも使用可能。オブジェクトのレベルが高い程、高位のソードスキルを使用出来る…か」

武器の性能が高い程、高位のソードスキルが使用可能。

そしてもうひとつ、この世界のソードスキルは単発系しかない、ということが分かった。

要は当たれば勝ち、外せば死、ということだ。

だから連続技は、全く存在しない。

俺はそれを知った時、いざと言う時のために連続技を封印した。

「そして何より…この世界は綺麗すぎる」

一番俺が違和感を感じたのは、この世界の人間は禁忌目録を守りすぎている、ということだ。

禁忌目録には人を殺すな、とかの当たり前な内容から、貴族などの強者が弱者を搾取することを、良しとする法まで様々だ。

現代日本だって、禁止していても毎日殺人事件は起きる。

ましてや強者が弱者を虐げる事を、法律の下許可するなんて、言語道断だ。

「なのにこの世界では、デモやクーデターが起きていない」

それはつまり…公理教会が、絶対的支配を敷いていることに、他ならない。  
ハツキリ言おう。

「反吐が出る」

1年間、世界中を旅して、この世界の歪さを理解出来た。

俺は…公理教会に反旗を翻す。

そう決めた俺は、その時を待ち続けた。

そして1ヶ月が経った頃。

「アリス?こんな朝早くからどうしたんだ?」

朝練をしていると、完全武装したアリスが発着場へと向かっていた。

「おはようございませす、ユヅキ。実は昨夜、『北セントリア修剣学院』で、殺人の禁忌を違反した者が2人現れたらしく、その捕縛に向かうのです」

殺人…この世界で…?

「それは…なんとも珍しい。名前は?」

「たしか…『キリト』と『ユージオ』ですな」

…何?

俺はあまりにも予想外の名前に、思わず思考が停止する。

キリト…だと?

まさか…あのキリトなのか？

「…ユツキ？どうしましたか？」

「あ…ああ…いや、何でもない。気にするな。気をつけるよ」

「ええ、ありがとうございます」

そう言つてアリスは、飛竜の【雨縁】に乗り、修剣学院へと飛んでいった。

「…時は来た」

間違えはいつか、正さなくてはならない。

敵は…セントラル・カセドラルにあり、だ。

## 閑話休題⑧

sideキリト

目が覚めた時、そこはどこかの森の中だった。

「俺は……たしか……」

エギルの店にいて……千笑や優月、明日奈たちと一緒に店を出て……途中で二手に分かれた。

そこから先が……。

「そうか！ここは……アンダーワールド！」

【STL】……Soul Trance Leaderが作り出す、仮想空間と理解した俺は

「……ん？」

これは……何の音だ？

思い出せないまま、俺は音のする方に向かうと、バカでかい木に向かって、斧を懸命に振る俺と同じ年くらいの男が1人。

「……なんだ？」

俺はあの木を…あの光景を…あの後ろ姿を…知っている？

「あれ？君は…？」

その男は金髪に翡翠色の目をした、優しそうな青年だった。

やっぱり…俺は…知っている？

「ええつと…ここがどこか分からなくて…」

自分の中の漠然とした違和感を誤魔化すように、俺はしどろもどろになりながら説明する。

「…もしかして…【ベクタの迷子】？」

「え？」

「ああ、いやなんでもないよ。ええつと…僕は【ユージオ】。君の名前は？」

「俺は…キリトだ。よろしくな」

俺は思う。

この出会いは…アインクラッドでツキノワに出会ったのと同じくらい、運命の出会いだったと。

その後俺は、ルーリッド村の教会に身を寄せることに。

しばらくの間、ユージオの仕事である、バカでかい木…【ギガスシダー】というらしいのだが、これを切り倒す仕事を手伝っている。



「…300年もかけてこれだけとは…」

「硬いうえに次の日には半分は、天命が回復してるからねえ…」

少しの間、ゆつくりとした時間を過ごしたのだが

「【セルカ】がいない!?!」

【セルカ】とは、村長の娘で教会に住み込みで、神聖術を学んでいるシスターだ。

「どこに…!?!」

「…まさか!?! 【北の洞窟】!」

北の洞窟とは、ルーリツド村からさらに北にある、【果ての山脈】にある洞窟らしい。なんでも6年前、幼なじみだった【アリス】という女の子と共にそこに行ったはいいが、道に迷ったあげく暗黒界に、誤って踏み込んでしまったらしい。

それは禁忌目録という、この世界の法に違反していた。

そしてアリスは…この世界を統べる機関、公理教会に連行されたのだとか。

セルカはそのアリスの、実の妹にあたる。

「だとしたらまずい!北の洞窟には、ゴブリン達がいるかもしれない!」

俺たちは慌てて洞窟に入り、そこで見たのは

「ゴブリンだ…」

「あそこ…セルカだ…!」

ゴブリンに囚われたセルカだ。

俺たちは、何とかしてセルカを助けようと、もがいた。

「俺の名はキリト…剣士キリトだ!!!」

俺たちは何とかセルカの奪還に成功した。

その際、ユージオが死にかけてるが、何とか無事に一命を取り留めた。

そしてその時、俺は聞いたんだ。

「キリト、ユージオ。待ってるわ。セントラル・カセドラルの頂上で…。」

君は…アリス…なのか？

翌日、俺のオブジェクトコントロール権限は、ユージオが持っていた、化け物級の剣

…神器と呼ぶらしいが、【青薔薇の剣】を使うの必要な数値を上回った。

そしてそれは、ユージオもそうだった。

「キリト…僕に、剣を教えてください!」

「ユージオ…」

「この6年間…ずっと…ずっと後悔してきた…。僕は…強くなりたい!もう同じ間違

えを、繰り返したくない!失くしたものを…取り戻したい…アリスを…助けたい!!!」

ユージオ…。

「分かった。俺の知る限りを教えるよ。…修行は厳しいぞ?」

そうして俺たちは、ギガスシダーを的に、青薔薇の剣を使った修行を行った。

そして…ついに…

「やったな…ユージオ」

「ああ…夢みたいだよ。こんな日が来るなんて…。運命なんて、信じてなかったけど…キリト。僕は君を待っていたんだ。この6年間、この森ですつと。今は…そんな気がする」

「…ああ、俺もきつと、お前に会うために、この森で目覚めたんだ、ユージオ」

見事、己の仕事…【天職】を全うしたユージオは、次の天職を己で決める権利を得た。

「僕は…剣士になります！」

こうして俺とユージオは、剣士になるべく、央都セントリアへ旅に出たのだった。

outside

それからのキリトとユージオの旅は、波乱万丈だった。

旅の途中、「メデイナールティナノス」という剣士と出会い、道中で別れた。

その後【ザツカリア】という都市につき、農場で住み込みで働きながら、剣の腕を磨いた2人は、剣術大会で優勝。

衛生隊に入り、厳しい【北セントリア修剣学院】への、入学権利を得た。

学院に入り、初等錬士上位12位の【傍付き初等錬士】という立場になり、キリトは

「ソルティリーナセルルト」という上級修劍士の、ユージオは「ゴルゴロッソバルト」という上級修劍士の元、劍技を学ぶことに。

「ルーリッド村を出てもう2年か：夢みたいだよ」

「おいおい、いつまで言ってるんだよ」

とはいえ、いい出会いもあれば、悪い出会いもある。

同じ代の「ライノスアンティノス」、「ウンバールジーベック」とは、常にいがみ合っていた。

そしてそれが1年後、最悪の形で終わりを迎えることに。

sideキリト

修劍学院に入ってから、1年がたち、俺たちにも後輩：傍付き初等錬士がついた。

「キリト上級修劍士殿！ご報告します！本日の清掃、完了しました！」

「ユージオ上級修劍士殿！ご報告します！本日の清掃、完了しました！」

俺のついた子の名前は「ロニエアルベル」。

ユージオについた子は「ティーゼシユトリーネン」。

2人とも、下級貴族である六等貴族の娘だ。

俺たちは手探りながら、何とか良好な関係を築いてきた。

だから、こういう相談が来たのだろう。

「ウンベールの傍付きの子が？」

「はい……」

「どうにかならないのでしょうか……」

ウンベールが、自身の傍付きの女子生徒を辱めるような、指示を出しているらしい。

「たとえ禁忌目録や学院則に違反してなくても、やっていい事と悪い事がある。誰が止めないといけない。この場合……」

「ああ、僕らだね」

俺たちはウンベール達に抗議を入れたが、おそらく改善はされないだろう。

そう思い、あれこれ手回しをしている時だった。

「……遅いな、2人とも」

「そうだね。どうしたんだろう？」

……なんだが胸騒ぎがする。

俺は初等錬士寮に向かったが、2人は既に出たあとだった。

「あの……キリト上級修剣士」

「うん？ どうした？」

「実は……」

同室と思しき女子生徒の話聞いた俺は、土砂降りの雨の中、ライオスたちの部屋ま

で、最短ルートを走った。

「間に合え……！」

そして俺は、右目が潰れているユージオに剣を向けるライオスを……斬り殺した。

outside

翌日、キリトとユージオは、禁忌目録違反により、セントラル・カセドラルへと、連行されることに。

その場にいたのは、黄金の整合騎士。

「セントリア市域統括。公理教会、整合騎士……」

振り返った金髪碧眼の女剣士を見たユージオは、言葉を失った。

なぜならその女騎士こそ……

「アリス……シンセシス……サーティです」

「アリス……!?!」

かつて、自分が救えなかった少女、アリス……ツールベルクその人なのだから。

その後、2人はセントラル・カセドラルへ拘束、投獄されるも脱走。

中庭にて、エルドリエ……シンセシス……サーティワンと戦闘になり、これを撃破。

ただし、紅蓮の整合騎士、【デュソルバート……シンセシス……セブン】の強襲にあい、追い詰められるも、忽然と姿を消す。

「…上手く逃げてみるみたいだな。というか、どこいったんだ？」

優月はいるように命じられた95層【暁星の望楼】にて、戦況を確認していたが、途中で2人を見失ってしまった。

(一瞬扉のようなものが…いや待て。そういえば、最高司祭が言ってたな。大図書室に入れなくなってたって)

そうなると、キリト達は図書室の中か。

あの中には、かつて最高司祭に反旗を翻した女がいるらしい。

きつとキリトの力になるだろう。

さて、俺がすべきなのは…

「特にないな、今は。【雲上庭園】いこ」

優月は持ち場を離れて、80層の【雲上庭園】にて、1晩過ごすのだった。

…ちなみに翌日、アリスに怒られたのはご愛嬌。

## 閑話休題⑨

sideキリト

飛竜に乗った整合騎士から逃げている時、謎の声に導かれるがままに逃げ込んだ先は、変な子供がいる大図書館室だった。

「わしの名は「カーディナル」。かつて世界の調停者であり、今はこのただ一人の司書じゃ」

ユージオはカーディナルに導かれるままに、風呂に入りに行った。

「…あなたはアンダーワールドの人間じゃないな。システム管理者に近い存在だ！」

「それはお主もじゃろう。無登録民のキリトよ。ああ、もう一人おるの。無登録の者が。その者は整合騎士として、特例番号を背負っておるが」

もう一人…？

胸騒ぎがするが、今は現状確認が先だ。

「この世界を作った連中の名はラース。そしてあなたはカーディナルシステム。ヴァーチャル世界を維持するための、自立プログラムだ」

「ほう、それを知っているのか。さてはわしの同朋にあつたか？」



俺はそこははぐらかして、先を促す。

現実との連絡手段が出来るか尋ねたが、出来るのはアドミニストレータだけらしい。「さて、ステイシア神を始めとする4体の神じゃが…実はそれに等しいものたちは存在しとつたんじゃ。それらの神は、緊急措置用スーパーアカウントとして設定されている。もつとも、使われたことは無いがな」

このアンダーワールドを作った人物たち…ラーズの職員のことだ。

その4人は8人の子供に、読み書きや作物・家畜の育て方、善悪の基準などを教えた。だがその4人のうち1人だけ、所有欲や独占欲などの利己的な欲望を教えてしまった。

「それらの子孫が、今の上級貴族や有力な権力者たちじゃ。そしてそれらのトップに立つのが、公理教会最高司祭であり、システムの管理者でもある、アドミニストレータじゃ」

そしてアドミニストレータは、なんとカーディナルの双子の姉でもあるらしい。

「…どういふことだ…!？」

大昔の話、人界初の政略結婚がなされ、1人の子供が産まれた。

名を【クイネラ】…後のアドミニストレータだ。

神聖術の天才として、村から多大なる信頼と尊敬を得たクイネラは、己を支配欲をど

んどんと満たしていった。

「これが後の禁忌目録や、カセドラルの礎となるのじゃ」

そして果てなき欲望の末、ついにクイネラは開けては行けない蓋を開けてしまった。

「システムコール！インスペクト・エンタエア・コマンドリスト！」

「これは…!?!」

そう言つて、カーディナルが開いて見せてくれたのは

「そう、この窓には、全システムコマンドの一覧じゃ」

これを開いてしまったクイネラは、見た目を戻したり、天命の自然減少を停止させたりなどを行つたらしい。

だが彼女は、同等の権力を持つもの…カーディナルシステムすら、その存在を許せなかった。

「だから奴は、カーディナルシステムの権限をも、奪おうとしたのじゃが…」

当然と言うべきか、失敗に終わった。

それどころか、カーディナルシステムの基本命令を、自分のフラクトライトに焼き付けてしまったのだ。

「秩序の維持…それが如何なるものか、同じシステムを知るお主には、よく分かるだろう」

「ああ…」

俺が思い浮かべたのは、消されるユイ。

思わず拳を握りこんでいた。

「こうして、絶対的支配者、アドミニストレータが生まれた」

だがこれもそう長くは続かなかった。

自身のフラクトライトの容量が、限界にきたことを気が付いたのだ。

「だが、あの女はまたもや、悪魔的解決法を思いついてしまったのじゃ」

それこそ、魂と記憶の統合を意味する「シンセサイズ」の秘儀により、ついに他人のフラクトライトを強奪することに成功した。

「じゃがこれこそが、奴の失敗じゃった。なぜなら…一瞬の間だけ、奴と同等の権力を得るものが現れるのだから」

「…そうか、サブプロセス！」

「その通りじゃ」

カーディナルシステムは、人間に手を借りずに長期間稼働できる。

自分で自律して動けるのだ。

メインが世界のバランスを保つと同時に、サブがのメインをチェックする。

「まさかあんたは…」

「そうじゃ。そのサブプロセスがわしなのじゃ」

だが力の差が大きすぎて、カーディナルでは、アドミニストレータを倒すことが出来なかつた。

だからカーディナルは、この大図書館へと逃げ込んだのだつた。

「以来200年…わしは奴への反撃の一手を考え続けた。じゃが奴は、わしの奇襲に備えて、強力な手駒を揃えたのじゃ」

「それが…整合騎士」

俺の言葉に、カーディナルは頷く。

最初の騎士にして、整合騎士長の名は…ベルクーリィンセンセシスワーン。

「わしは何としても協力者を求めた。そうして見つけたのが…お主らじゃ。キリト、ユージオ」

多くの使い魔を放つたらしい。

その時、髪が急に動いて、何かが飛び出した。

…小さい蜘蛛？

「シャーロットじゃ。ルーリッド村を出てからずっと、お主らと一緒におつた。もつとも…見る以外のこともしておつたらしいが」

「つ?!?あの声って?!?君なのか?!?」

「シャーロットは、ワシが最初に放った最古の使い魔じゃ」

カーディナルは長い時の中で、なぜ外界はアドミニストレータの支配を野放しにして  
いるのか、それが気になったらしい。

そうしてある答えにたどり着いた。

「ラーズの者たちは、この世界の幸せを望んでおらぬ……ということじゃ」

そしてついに、最終的な負荷実験を始めよういる。

それこそ、暗黒界の進軍だ。

だが、圧倒的差がありすぎて、このままでは人界は崩壊する。

「つまりあんたは……自身の目的さえ達成出来れば、この世界がどうなってもいいとい  
うのか」

「……そうかもしれぬ。じゃがわしは、このままそれを良しする訳には、いかぬ。じゃから  
わしは、ある方法を思いついた」

それは……人界も暗黒界も、全てを無に帰す、という方法だ。

フラクトライトを全て、ひとつ残らず消し去るということらしい。

「キリトよ。もしアドミニストレータを倒して、わしが全権限を取り戻せたら、限定的で  
はあるが、フラクトライトは消さずに保存しておこう。後であちらで、取り出せば良い」

フラクトライトは「ライトキューブクラスター」という、小さい箱に入れて、保存す

ることが出来る。

10個程度ならば、それが可能だという。

だが俺には…命の取捨選択なんて…出来ない…。

「…あんたはなぜ、逃げ出さなかったんだ？なぜあんたは、200年もの間ここに籠ってんだ？あんたにも、貴族の血が…己の欲望を求める血が、流れいるんだろう？」

そう言うとかーディナルは、少しだけ寂しそうな顔をして、おもむろに立ち上がった。「キリト、お主も立て」

「あ、ああ…」

言われるがままに立ち上がり、そばに寄るとなぜか抱きつかれる。

「か、カーディナル!？」

「そうか…これが…これが、人間である…ということか…。暖かい…」

気付けば、カーディナルはさっきまでのしおらしさを捨てて、いつも通りに戻ってしまふ。

「それで、結論は出たか？」

俺は…この話に…乗るしかないか。

「分かった。あんたの作戦に乗るよ。でも…」

「ん？」

「俺は考えることを辞めない。悲劇をどうにかは回避して、この世界が平和に存続出来る方法を」

「そうだ、考えることこそが大事なんだ。」

諦めず、足掻き続ける…そのために顔を上げ、拳を握り、頭を回し、戦い続ける。

それこそ…人が生きる、ということなんだから。

「…お主にも、いつか諦めるといふ苦さを知る時が来る。それを受け入れる覚悟をするのじゃ」

俺はカーディナルの顔を見て、ふとあることを思い出した。

「そういえば、俺と同じやつがもう1人いるって言ってたけど…」

「そうじゃな。その者はお主と同じ時に東の大門に現れたのじゃ。そしてそのすぐ後に、1人の整合騎士がカセドラルに連行したのじゃ。じゃがその者は禁忌目録に違反した訳ではなく、前例のないことをして、判断に困ったからと、わしは見ておる」

東の大門とは、東帝国の果て…暗黒界との境にある、バカでかい門のことだ。

「一体何をしたんだ？」

「東の大門の上に立ったらしい」

「はっ？」

何それ？

どういふ状況？

「おそらくそこに降り立ったのじゃろう。そしてアドミニストレータは判断を、ベルクーリに一任させ、そのベルクーリはそやつを抱え込むことにした。そして一年後、奴はアドミニストレータによって、一人の整合騎士と認められた」

「整合騎士……」

「名は……ユツキ。ユツキⅡシンセシスⅡゼロ」

「……は？」

ナンダツテ……？

優月……？

優月が……整合騎士……？

俺の脳裏に過ぎる、紫色の髪を靡かせた、兄弟分。

堂々として、凜としている、家族想いのカツコイやつ。

そして……弱さを抱えながらも、その弱さと向き合う覚悟を持つ強いやつ。

「ありえない……ありえない!!どうして!どうして優月がここにいる!?!あいつはなんで……!!」

「わしにも分かるわけなからう。そちらの世界の都合じゃろう。じゃが……おかしな話なのじゃ」



おかしい？

何がだ？

「そもそも話をしとらんかったの。整合騎士とは、【敬神モジュール】<sup>バイエティ</sup>という、三角柱の物体を入れることで、【シンセサイズ】の秘儀の成立とされる」

三角柱…エルドリエの額から出てきたやつか！

この敬神モジュール<sup>バイエティ</sup>は、過去を封じると同時に、最高司祭への絶対的服従を植え付けるのだとか。

そしてそれを除去するには、2つのものがあるらしい。

1つは、過去を想起させるような何か。

もう1つは、本来そこに存在した、最も大切な記憶の欠片。

そしてその欠片は、最高司祭の居室にあるらしい。

「この敬神モジュール<sup>バイエティ</sup>は、記憶の接続を阻害するように埋め込まれるのじゃが…ユヅキには、それが行われた形跡がないのじゃ。その証拠に、奴はアドミニストレータに対して直接、不快感や不信感を言い放っておった」

「つまり…ちゃんとした、整合騎士じゃないってことか？」

「そういうことじゃ。おそらく…弄れなかったか、気まぐれか」

そう言われて、俺はホツとした。

優月がまともなら、あいつが何故、何もしてこなかったか、それは想像がつく。

「あやつは正常なら、なぜ何も行動を…」

「機会を伺ってたんだよ」

「なんじゃと？」

「あいつはあれでいて、計算高いやつだ。勝算がつくまで、動かないだろう。…優月と合流出来れば、100人力だ」

俺は必要な情報をまとめて、ユージオと合流する。

それから整合騎士に関する説明をして、目的を再確認した。

「つまり僕達は、最高司祭の部屋に行き、アリスの記憶の欠片を見つける必要がある…そういうことだね」

「そしてそのために、最高司祭を倒す必要がある…ということだ」

「…これを使うがいい」

そう言ってカードディナルから、2本の短剣を受け取った。

「これはわしとのパスを繋ぐもので…簡単に言うならば、わしの神聖術を100%当てる事が出来るものじゃ」

カードディナルは俺たちの剣を取り返すことを、手伝ってくれるらしい。

そして切り札…【武装完全支配術】を授けてくれた。

「2人とも目を閉じ、己の剣を思い浮かべよ」

俺の脳裏に浮かぶ、巨大なギガスシダー。

そうして俺たちに渡せられたのは、長つたるい神聖術の術式が書き込まれた、1枚の羊皮紙。

「うえ……」

「これを……丸暗記……？」

「ユージオ……キリトよ。世界の命運は、お主らに託した。ワシがやれることは、全てやった。己の道を信じよ」

「……行くぞ、ユージオ」

「ああ、キリト」

俺たちはカーディナルが作った扉を、くぐり抜ける。

目指すは……武器庫だ。

## 閑話休題⑩

outside

「人の魂はどこにあるのか？」

(そういう哲学的な話が、彼の口から出るなんて)

明日奈がそう思ったのは、エギルのお店で話した時だ。

行方が分からなくなった優月たちを探し出した明日奈は、千笑と深澄を連れて、ある人の手引きの元、ある場所へ乗り込んだ。

「2人はどこ!?! 菊岡さん!?!」

「な、なんで明日奈君がここに!?!」

「明日奈だけじゃないわ」

「私達もいます」

「…これで、私が協力に乗った理由が分かったでしょう」

明日奈が協力を仰いだ人物の名は、「神代凜子」。

かつて、茅場晶彦の恋人だった人物だ。

「…なんとも、古典的な手を…」

明日奈は堂々と変装して、深澄と千笑は2人が持っていたキャリアケースに入っていたのだ。

「私が招聘に応じた理由は、分かったかしら？」

「…大学の学籍データベースから、多重チェックを施したはずだが？」

「そつちは既に細工済みよ。そういうのが得意な子がいるので」

得意な子というのは、ユイの事だ。

足跡を追い、あらゆるツテをたどった先にここ…洋上石油プラントに偽装した、陸上自衛隊の機密施設「オーシャン・タートル」にたどり着いたのだ。

「和人は無事なの!？」

「優月はどこにやったのよ!？」

「2人を治療できると言ったのは、嘘だったんですか!？」

3人からの厳しい追求に、菊岡は一言。

「…いや、事実だとも。ここでしか、彼らの治療はできない」

そう堂々と、断言したのだった。

side 深澄

ラース。

それが和人が通っていた、バイト先の会社の名前だ。

その内容は新型フルダイブ技術の、ブレインマシーンインターフェイス、そのもののテストらしい。

ちよつと私にも分からないから、説明ができないが、要するに新しいVR方法のテストというこららしい。

「和人君には、テスト中のあらゆる記憶を外部に持ち出せないように、機密保持をかけてある」

「機密保持つて…そんなことして、大丈夫なんですか!？」

「もちろん。脳へ多大な負荷をかけるものではなく、「フラクトライト」の経路を遮断しているだけだよ」

「…何よ、そのフラクトライトつて」

私がそう呟くと、難しい顔をしながら、菊岡が口を開く。

「心は、どこにあると思うかな？」

「…頭…脳？」

「脳とは、脳細胞の塊だね。では脳細胞のどこにあると思うかな？」

「そ、そんなの…分かりませんよ!」

菊岡が言うには、脳細胞同士を支える、マイクロチューブというものがあるらしく、

その中を通る物質こそ光…フラクトライトと呼ぶらしい。

「それこそ心だと、私達は認識している」

「…つまり、そのフラクトライトを読み取る機械がSTL::Soul Trance  
Leaterってことね」

「そうだ。そしてこの理屈は逆転できる」

「逆転って…どういうことですか？」

「…フラクトライトを読み取るのではなく、フラクトライトに情報を送り込む、そういう事ね」

千笑の言葉に私が答えると、菊岡は静かに頷いた。

「そしてこのSTL最大の目玉は、フラクトライトアクセラレーション::FLA。フラクトライトの速度を速めることで、実際のダイブ時間より、長い時間を、フラクトライトに書き込める」

ではなぜこんなことをするのか。

それも、彼自身が答えた。

「STLを使い、2人のフラクトライトに直接影響を与えることで、新たなニューラルネットワークを、発生させるのを促せるのさ。だから2人をここに連れてきた。ここにはフルスペックのSTLがあるからね」

そこで一度話を切ると、仰々しく再び語り出した。

「さて、諸君は概要は理解してもらえた…そう考えていいね？」

その言葉に、4人は頷いた。

「だが目的までは知らないだろう。私たちの目的は…ボトムアップ型汎用人工知能の開発だ」

人工知能のアプローチには、2つの方法がある。

1つはトップダウン型。

知識と経験を積ませ、学習によって知性に近づけようとする方法。

もう1つがボトムアップ型。

1000億個の細胞が連結された人間の脳を、人工的再現して、そこに知性を植え付けようとする方法。

「だが我々は、ある見落としに気が付いた。これを見てほしい。気分が悪くなるだろうが、我慢してくれ」

私たちが見させられたのは、コピーされた魂が崩壊するところだ。

「…と、このように、ただ魂を複製しても、自身がコピーであるという事実には、耐えられない。そこで私たちは新生児の魂を複製して、一から育てることにした」

そしてそのため用意された世界こそ、アンダーワールドだ。

だが彼らにも、想定外があったらしい。



「公理教会と呼ばれる政治機関が、禁忌目録を作ったのだ。フラクトライト達は法を守る。…守りすぎるほどに」

「この時私は、ある予感が走った。

「…まさか、あんたたち!?!」

「深澄? どうしたの?」

「あんたたちの目的は…人を殺せるAIを作ること!」

「「っ!?!」」

その言葉に菊岡は答えず、ただ黙るだけだった。

そして…

「和人に、その話はしてませんよね、絶対に」

珍しことに、千笑が強い口調で口を開いた。

「その心は?」

「もしそれを知ってたら、和人は絶対にそれを手伝いません。それにあなた達には、致命的なことに目を瞑っています」

「それは?」

「人工知能の権利です」

そう、彼らには人間と同等の思考能力がある。

そんな彼らを、戦争の道具として使うなんて、認められない。

「彼らに生身の肉体は無いよ。言いたいことが分からない訳でも無い」

「彼らは生きてるんです！」

「でもね、10万のA1の命より、自衛官1人の命の方が重い」

私たちと菊岡には、あまりにも明確な差があった。

「…和人を巻き込んだのは？」

私はズレそうな話し合いを、強引に戻した。

「…この計画には、VR経験者の力が必要だったんだ。しかも年単位のね」

そういえば、時の流れが速いって言ってたわね。

そういうこと…ね。

「優月君を巻き込んだのは？」

「彼の場合は、想定外だったんだよ。ただ、彼の脳を救うにはこれしかない。だから連れてきたのさ」

そして、和人を巻き込んだ実験の結果は、成功だったらしい。

なんでも、禁忌目録を破ってでも動いた女の子がいたらしい。

名前は…アリス。

「そしてこれは本当に偶然なのだが、この計画の基盤となっているものの名前も【A.

L. I. C. E】なのさ」

A r t i f i c i a l L a b i l e I n t e l l i g e n c e C y b e r n  
a t e d E x i s t e n c e

人工高適応型自立存在…という意味らしい。

これらの頭文字を合わせて「A. L. I. C. E.」。

そこそが目的だと言いつつた菊岡は、最後にこう締めくくった。

「ようこそ、我らが『プロジェクト・アリシゼーション』へ」

## 60話

side 優月

「貴方はなぜここにいますか？」

アリスの言葉に、俺は呑気に言い返す。

「いい天気だし、こいつにソルスの光を浴びせてやりねえじゃん？」

そう言っただけは、俺の背中にある桜の木を軽く叩く。

俺は本来、95層の「暁星の望楼」が持ち場なのだが、暇すぎてここ、80層の「雲上庭園」に来たのだ。

「だってよお、50層にはフアナティオさんだろ？ここにはアリス、そこでタイミング的に90層の大浴場には、おっさんが来るだろ。ほら、俺って上にいる意味無くない？」

「…まあ…」

とはいえ、キリトのことだ。

多分ここまでなら上がってくるだろう。

「それと…着替えたのですね、貴方」

「うん？まあな。どうよ？」

白のスラックスに焦げ茶の編み上げブーツ。

紫色のインナーに、桜色の上着を前を閉めずに着ている。

どれも宝物庫からパク：貰ってきたものだ。

「よく似合ってますよ。ですが、鎧は着ないのですか？」

「俺の戦い方だと、鎧はかえって邪魔なんだよ」

そう言うときアリスは、どこか怪しむような目で、俺を見る。

「本当に貴方：何も覚えてないのですか？」

「：まあな。体が覚えてるってやつだ」

そう言いながらのんびりしていると、不意に、雲上庭園の扉が開く。

：来たな、キリト。

「アリス：：ん？キリト？」

「よう。来たぜ、ツキノワ」

「おう。来たな、キリト。あと俺、こっちは本名で通してるから、そのつもりで」

お互いのパートナーが、驚いたような顔をする。

「き、キリト!?あの整合騎士を知っているのかい!？」

「ユツキ！貴方はあの咎人を知っているのですか!？」

「「まあな」」

そう答えながらも、俺たちは互いの目から、視線をそらさない。

「…キリト、お前の行いは正しいんだろう。だかな、俺にも通すべき筋つてやつがある」  
「だろうな。口で言つて止まるとは思わない」

キリトの行いは正しい。

俺もキリトに手を貸したい…いや、貸すべきだ。

だが、このまますぐ手のひら返しじゃ、世話になつた札を仇で返すことになる。

それは…筋が通らない。

「行くぞ、ゆ…ユージオ？」

おや、金髪の優しそうな男が、俺たちの間に立つ。

「我が名は剣士ユージオ！整合騎士ユヅキ殿！いざ尋常な立ち会いを所望します！」

ほう…そう来るか…。

「…いいぜ。受けてやる」

「ま、待て！ユージオ！優月は強い！」

「分かつてるよキリト。流星の僕も、見れば分かる。…でもね、君と彼は友達なんだろう」

そう言われたキリトの顔が強ばる。

「…僕も正直、アリスに剣を向けたくない。だから…キリトはアリスを頼む。僕は…彼

を抑える」

話し合いは終わったのか、金髪の男：ユージオは俺の前に、そしてキリトはアリスの前に。

「…おいキリト、一つだけ忠告だ。アリスは剣も頭も固いぞ」

「どういう意味ですか!? ユツキ！」

「これから立ち会うとは思えない空気に、ユージオの眉間に皺がよる。

「随分と余裕ですね…」

「それでも無いさ。ま、気楽にいこうぜ。それとタメ口でいいぞ、同い年だし」

「そう言いながら俺は、後ろの桜の木を剣の姿に戻す。

「そういうことなら…：剣士ユージオ、参る！」

「整合騎士、優月ⅡシンセシスⅡゼロ、受けて立つ！」

Outside

（まずは一気に距離を詰める！）

ユージオは、アインクラッド流ソードスキル【ソニックリープ】で、一気に突撃する。

そんな様子を優月は

（速い！速いが…）

「ぬるいぜ」

1歩踏み込み、ユージオの右手と胸ぐらを掴む。

そのまま思いつきり投げ飛ばした。

「おりやああああ!!」

（しまった! 剣を抜かない! 投げ技!?)

「クウウウウ!!」

ユージオは咄嗟に空中で、体勢を直して上手く受け身をとる。

「システムコール・ジエネレート・エアリアルエレメント。ストリームシェイプ・デイ  
スチャージ」

優月は風素を使い、一気に距離を詰めて抜刀術を放つ。

「なっ!?!」

（まずい…間合いだ!）

「シッ!」

「クッ!?!」

咄嗟に剣でガードした一撃だったが、さらに返す一撃が迫る。

それもギリギリで防いだユージオに、優月は感嘆の声を漏らす。

「へえ…やるね。今ので倒せないのか。お前強いな、ユージオ」

「それはどうも…!」



(重い!それほど体格差は無いのに、この重さは何だ!?ピクリとも動かない!)

(しっかりと体重を乗せて、重心を捉えてるのに、動かない!どんな強靱な足腰だ!)

お互い罅迫り合いから、膠着状態に入る2人。

対してキリトとアリスは

「オオオオオオオ!」

「セエエエエイ!」

轟音を響かせながら、剣を打ち合う2人だが、明らかにキリトが押されていた。

(固い!何だよ、この固さ!異常だろ!)

「創世の時代より咲いてきた、一本の金木犀の木がありました。それがこの剣、【金木犀の剣】の原型です。特性は【永劫不朽】。何者も、この剣を破壊するに能わず、というこ  
とです」

(クソ…!神が設置した最初の破壊不能オブジェクトってことか!)

「だからって…恐れる訳にはいかないんだ!」

再び2人は剣を打ち合う。

しかしやはり、キリトの劣勢は変わらず。

「キリト!」

(こっとなったら…)

(流石に、アリス相手じゃキリトも厳しいか…?)

「システムコール・ジェネレート・サーマルエレメント・バーストエレメント!」

「はあ!?マジか!」

2人の目の前で起こる熱素の爆発。

たまらず優月は、大きく飛び退いて後退する。

(バカか!風素ならともかく、熱素を爆発させるとか、バカじゃねえの!?)

「ヤアアアアアア!!」

「っ!?そうか!」

優月の視線の先には、ユージオの持つ「青薔薇の剣」。

(ユージオの剣は氷の剣なのか!?この程度の熱なら、無効化できるっていうことか!)

「これで…!」

そう言ってユージオが放つのは、アインクラッド流縦切り4連撃「バーチカル・スク

エア」。

「ダメだユージオ!優月は…うお!」

「よそ見ですか!愚か者!」

キリトの静止の声は届かず。

優月はその初撃をいなしてから、自身もソードスキルで対抗した。

(…え?)

「連続技…?」

そのまま残り3連撃を全て、同じ3連撃で相殺されたユージオは、呆然と呟いた。

「刀3連撃ソードスキル【緋扇】。…悪いなユージオ。俺はお前の剣を知っている」

「どう…して…?」

「なぜなら…俺もお前と同じ剣技を使うからだ。お前に合わせて言うなら、俺もインクラッド流の使い手のさ。…まあ、使うのは刀だけど」

sideユージオ

全ていなされた…?

バカな…整合騎士は連続剣に慣れていないはず。

なのにどうして…?

「なぜなら…俺もお前と同じ剣技を使うからだ。お前に合わせて言うなら、俺もインクラッド流の使い手のさ。…まあ、使うのは刀だけど」

「なん…だ…?」

「そもそも、お前の使うインクラッド流とは、ここではない別の場所で開発された、対複数、対獣戦に特化した剣技だ」

目の前の整合騎士ユヅキが言うには、インクラッド流とは、正式な名前ではなく、そ

もそも流派としての名前すらない。

キリトに剣技の名前を聞いた時、困っていたのはそういうことだったのか。

「そしてアインクラッド流には、様々な武器種の技がある。お前やキリトの片手剣然り、俺の刀然り」

「つまり…君は…」

「俺とキリトは、同じ流派を学んだ…と言っていいのか？さて、続きを始めよう」

そう言つて身構えるユツキ。

だが僕は今、今までの自信が一気に喪失していた。

勝てるのか…彼に？

今までとは違う…僕の剣の全てが、見切られている。

その上、剣技だけなら、間違えなく僕より上だ。

「…キリトの教えはその程度だったか？」

「え？」

「【ステイ・クール】…いつ如何なる時も冷静に、だぞ」

ステイ…クール…。

それはある時、キリトが教えてくれた言葉。

何故それを、今、敵である僕に言うのか…それはよく分からない。

だが、一つだけ分かったことがある。  
その目に、敵意がない事だ。

「ふう…ハアアアアアアア!!」

大きく深呼吸をして、一気に切りかかる。

そうだ、見切られてるからどうした。

知ったものか…!

僕は…アリスを助けるんだ!

「ハアアアアアアアア!」

「無駄な力が多い!せつかくの筋力が無駄だ!もつと上手く剣に力を乗せろ!」

上手く…力を乗せる。

僕はもつと強く握り、力強く踏み込む。

だがそれは、いなされてしまい体勢を崩す。

咄嗟にガードしたけど、上手く防げず、胴体を軽く斬られる。

「つッ!」

「違う!力むな!込めるんじゃないで、乗せるんだ!」

いつの間にか僕たちの戦いは、実戦稽古に変わっていた。

それは恐らく、彼自身も気付いていない。

その目は、楽しさでいっぱいだったから。

それにしても…なんて軽やかで美しい剣技だ。

僕は防ぎながら、その剣技に見蕩れていた。

軽やかで…されど重く鋭い。

舞うようなその剣技に、僕は魅了される。

「もつと軽く…力むな…込めるな…」

ゴルゴロツソ先輩に教わった剛の剣と、上手く合わせられないか…？

そう例えば…触れた瞬間に力を乗せる。

ガキイイイイイン!!!

「なっ!?!」

激しい金属音と共に、ユヅキが弾き飛ばさせる。

(こいつ…今…!)

「…この感覚…忘れたくない…。ユヅキ、行くよ」

「へっ…この天才め…!」

その剣を、優月は知っている。

「というか、彼自身が行き着いたひとつの極地。」

この領域に入ったのは、優月、ザザの2人。

そして3人目が今、その領域に踏み込んだ。

「…愉しくなってきた」

1人の剣士と1人の剣鬼が、ぶつかりあった。

sideキリト

「…すごい…」

「これは…」

いつの間にか、俺たちは戦いをやめて、優月とユージオの戦いに夢中になっていた。

俺は今、武者震いが止まらない。

俺の全てを叩き込んだ一番弟子、ユージオ。

そのユージオが今、剣技において俺を上回った。

「あれは…一体…?」

「剣技の極地…その一つだ」

アリスのつぶやきに、俺は無意識に答えていた。

「どういう意味ですか?」

「あんたらの剣は一撃必殺。つまり全てを乗せる剣技だ。だが俺らや優月の剣は、連続技。斬った後のことも考えている」

どこかの漫画でも、書いてあった。

躲すのなら斬らせない、守るのなら死なせない、攻撃するのなら斬る。

「2人の破壊力は？」

「優月曰く、インパクトした瞬間に、力を込めてるらしい。俺にも出来ないから、よく分からなけれど」

いつまでも見ていたい…そう思った時だった。

「エンハンス・アーマメント」

「つ!?しまった…ぐわあ!」

「ユージオ！」

忘れていた…まだ優月には、「武装完全支配術」があつた！

side 優月

「楽しかったぜ、ユージオ。だが…負ける訳にも行かねえのさ」

俺は自分ののめり込むより早く、「武装完全支配術」で終わらせた。

俺の「武装完全支配術」は、刃を自在に変化させるもの。

今回は、アリスの「武装完全支配術」を参考にした。

今はぶつめたただだから、死ぬことないし、直ぐに起き上がれるだろう。

「さてと…アリス、まだ終わらねえのか？」

「つ!?セエエエエエイ！」



「うおわあ!」

アリスが再び、キリトに切り掛る。

視界の端で、ユージオが2人を追いかけるのを見ながら、俺は止めずに2人を追いかける。

「私の打ち込みをここまで凌いだのは、お前が3人目です。ですが…覚悟!」

アリスが必勝を確信した一撃は…キリトのいなされて、逆に拘束されることに。

「ユージオ!!」

「エンハンス・アーマメント!」

ユージオの【武装完全支配術】が、2人をまとめて凍りつかせる。

その間にユージオは何やら短剣を取り出したが、その前にアリスの【武装完全支配術】が発動する。

「っ!?!」

慌てて駆け寄るユージオだが、既に遅い。

氷では、アリスの【金木犀の剣】は止められない。

「なかなか面白い座興ではありません。貴方にはユツキがいますが、私とやりたいならそこで待ってなさい」

「エンハンス・アーマメント!」

その隙に、キリトが【武装完全支配術】を発動。  
アリスの花を根こそぎ弾いた。

「ユージオ!!」

再び短剣を突き刺そうと走るユージオだが、俺はあることに気が付いた。

…おい、壁から風が漏れてないか？

…マズイ!

「ダメだ!行くな、ユージオ!」

俺は咄嗟にユージオの襟首を掴んで、入れ違うように後ろに引つ張る。

その瞬間、壁が崩壊した。

嘘だろ…この壁、ぶっ壊れないんじやねえのかよ!?

そのまま俺とキリトとアリスは、気圧の変化に押し流され、外に放り出されてしまっ  
たのだった。

「キリト!アリス!…キリトオオオオオ!!アリスううううう!!」

## 61話

side 優月

あつぶねえ……何とか間に合った。

俺とキリトは咄嗟に剣を突き刺して、キリトはギリギリで、アリスの手を掴むのに間に合った。

「アリス！手を伸ばせ！」

「いえ……！罪人に助けられるなんて、生き恥を晒すつもりはありません！離さない！」

あ、バカ！

なに自分から落ちようとしてるんだ！

「動くなバカ！」

「こんな時まで石頭はやめろ、バカ！俺たちは整合騎士だぞ！」

「ここでヤケになっても、何も解決しないことくらい悟れよ、バカ！」

「なっ!? 2人揃って、またしても私を愚弄しましたね！撤回しなさい！」

「うるせえ！バカにバカって言って何が悪い！」

「このバカ野郎！いいか！ここで死ねば、ユージオは直ぐに最高司祭の元に行くぞ！」

「俺たちの仕事は、それを止めることだろうが！ だったら今は、生き残ることが最優先だろうが、バカ！」

「そんな理屈も分からないバカだから、バカって言ってるんだ！」

「このバカ！」

俺たち：バカしか言ってなくね？

場違いにも、そう思った俺。

「じ、10回もその屈辱的な言葉を言いましたね!？」

「バカの回数を数えてたのか!?! バカなのか!?!」

場違いがもう1人いたわ：しかも本人だし。

「1回追加です！」

「だからカウントしなくていい！」

だがやっと、アリスは冷静になったのか、今度は違う言葉を口にした。

「ではなぜ、お前はその手を離さないのです? その理由が、私にとって死ぬより、耐え難い憐憫ではないと、お前は証明できるのですか!?!」

その言葉に、キリトは言葉を詰まらせながらも、その胸中を口にする。

「俺とユージオは：公理教会を壊滅させたくて、ここまで登ってきた訳じゃない。俺達だって、人界を暗黒界から守りたい気持ちは同じなんだ」

だからこそ、こいつらは今まで、1人も整合騎士を殺していない。それは神聖術を使い、見てきたから知っている。

「ならばお前は、何故その刃を人に向け、血を流すという最大の禁忌を犯したのですか!?!」

「俺たちが斬つたのは…公理教会と禁忌目録が間違つていと思つたからだ!」

なんでも女の子が、貴族に辱めを受けるのを止めるために、やむを得ず斬つたらしい。なるほど、それは仕方ない。

よくやったな、キリト、ユージオ!

「禁忌目録に違反してないからって、ロニエやティーゼのような女の子が、上級貴族から辱められてもいいって言うのか…! 答える!! 整合騎士!!!」

「…法は法…罪は罪です…それを私意によつて判断するのなら、どのように秩序は守られるのですか…!」

アリスとて、決してそれを良しとする訳では無い。

だが、だからと言って逆らう訳にもいかない。

「ならその最高司祭が正しいか、誰が決める! 天界の神か!? ならどうして、俺に裁きの雷が落ちない!?!」

「…神の! ステイシア様のご意思は下僕たる我らの行いによつて、明らかになるもので

すー」

「それを明らかにしたくて、俺たちはここまで来たんだ！」

今、ミシツて…!?

マズイ…壁の方が限界に…!?

「キリト！」

「今あんたを…死なせる訳には…いかないんだ！」

強引に持ち上げたキリト。

今のアリスは鎧も着てるため、かなり重いはず。

「アリス！早く壁の継ぎ目に、剣を刺せ！」

そしてアリスが刺したの同時に、キリトの方が限界を迎えた。

「キリトおおお!!」

ダメだ…届かない…!?

「え？」

あ、アリス…

「…」

アリスは何も言わず、キリトを掴み楽々持ち上げる。

「良かった…」

「助けた訳ではありません。借りを返しただけですし、お前とは剣の決着がついていない」

「…そういうことにしておくよ。優月、どうにかならないか？」

俺に言われてもな…。

壁の破壊はほぼムリ、飛竜は来れない、ここから下に降りるのもムリ。

…こうなると手はひとつ…上に登るしかない。

「さつきみたい壁の継ぎ目に棒をさして、フリークライミングしかねえな」

「上に行つて入れる場所はあるのか？」

「ある。俺の本来の持ち場、95層の「暁星の望楼」は吹き抜けだから、そこしかない」

「少し待ちなさい」

俺たちが方針をまとめていると、アリスが口を挟む。

「ユヅキ…貴方は、この男の味方なのですか？」

「…ああ、そうだ。とは言つても、こいつがここに来たのは、予想外だったが」

「俺のセリフだ、それは。なんで優月がアンダーワールドに？」

「え？ここがそうなの？」

「…そうか。優月はその辺は何も知らないか…」

「だから待ちなさい！2人で話を進めない！」

おおっとそうだ。

アリスに説明しないとだな…何をどう説明しよう？

「…悪い、よく考えたら、俺も何を説明したらいいか分からない。というか、説明出来るだけの材料がないんだ」

「…まあ、ステイシアの窓すら知らない貴方でしたから、期待はしてませんでした。さて、貴方たちはどうやって登る気ですか？」

そうだな…まずは…

「アリス、その手甲さ、鎖に変えてよ」

「は？なぜです？」

「命綱代わり」

「…仕方ありません。システムコール・フォームオブジェクト・チェーンシエイプ」

アリスが神聖術で手甲を、鎖に変換する。

「な?!物質変換術?!」

「お前の耳は節穴か…」

「今のは形状変化です!」

俺とアリスから呆れられ、小さくなるキリト。

クク…笑える。



「優月！笑ってるの気付いてるからな！」

「しっつれ〜」

「お前なあ……！」

「お前たち！状況をわかっているのですか!？」

「は〜い……」

怒られる俺たちだが、そろそろ移動を始めよう。

「システムコール・ジェネレーター・メタリックエレメント・フォームエレメント・ウエッジシエイプ」

俺は鉄素で杭を作り、それを刺して剣をしまう。

そのまま鉄棒の要領で半回転して、杭の上に乗る。

もう一回同じことをして、登れることを確認する。

「よし！これで行けるぞー！」

「なら俺も……！」

「……り……す」

キリトが登ってくる中、アリスだけはそこから動けないでいた。

「はあ？何だつて？」

「無理です、と言ったのです」

はあ、何言ってるんだこいつ？

「お前、神聖術なら騎士団でもトップクラスの…」

「その意味では無いのです！このような状況初めてで…恥を晒すようですが、こうしてぶら下がってるだけで、精一杯なんです」

ああ…要するに、腰を抜かしのか。

全く…世話の焼ける…。

「なら俺たちが鎖を引つ張って、あんたを杭の上に乗せる！」

「仕方ねえな…貸ーだぞ！」

キリトと息を合わせて持ち上げる。

クソ…マジで重いな…！

「両手で壁に掴まれ…！」

「アリス…鎧…何とかならねえのか…!？」

「変えても結果の重さは同じです…すみません…」

まあ、形状変化はその名の通り、形を変えてるだけだしな。

無理もないか…。

というか、そんなにしおらしくされたら、調子が狂う。

俺たちはこれを数時間続けて、既に夕方。

「はあ…はあ…はあ…」

2人で分担してきたが、ソルスが落ちてきたせいで、空間神聖力が落ちてきた。鉄素の生成には、神聖力を大量に使うから、夜までには何とか、あのでっぱりに行きたい。

「おい、みんな。あそこなにか見えないか？」

「ん？…石像でしょうか？」

石像って…なんであんな場所に？

「まあこの際、なんでもいいか。休めるならどこでもいい」

「違いねえ。だが…あと2本はいるな…」

「…仕方ありません。いざという時のために、取っておきましたが、今がその時ですね」  
アリスが手甲を、杭に変えた。

おおー、ナイス！

その手があつたか！

「しかしこう見ると、気味悪い像だな…」

たしかによく見ると…よく…見ると…!?

「嘘だろ…!?」

「これは…まさか…!?」

その時突然、石像が動き出した。

だがそれ以上に問題なのは、動き出した事実より、動き出したヤツの方だ。

「な、なんだよこいつら!？」

「【ミニオン】……! 暗黒界の連中の使い魔だ!」

outside

突然動き出した石像に、アリスは呆然として、キリトと優月は戦闘態勢に入る。

「アリス! 剣を抜け! ポサってするな!」

「アリス!」

だがアリスは何も出来ず、ただ鎖にしがみつくだけだった。

「クソ……エンハンス・アーマメント!」

優月は【桜刀・舞姫】の【武装完全支配術】で、迎撃する。

「魅せろ……舞姫!」

変幻自在の刃が、ミニオンの一体を切り刻んだ。

(クソ……イチがバチか……!)

「優月! 俺を守ってくれ! アリスはしっかり鎖に掴まれ!」

「お前……まさか!?!」

「おりやあああああああああああ!!!!」

キリトは全力でアリスの鎖を、上にぶん投げた。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアア!!」

(アリスもこんな悲鳴あげるんだな…)

そんな場違いな感想を抱く優月だったが、

「うお!!」

「キリト! つぶえ…!!」

滑り落ちるキリトと、それをギリギリで掴む優月。

その時、キリトの体が少し浮く。

その事に、顔を青くする2人。

「…まさか…!!」

「こんのおおおおおおおお!!」

「うおわああああああ!!」

アリスの渾身のバカ力で、2人まとめて投げられる。

優月は完全に投げられ損である。

「何を考えてるのです、この大馬鹿者!!」

「…お前が腰抜かさなきや、良かっただけの話だろうが! このバカ力女!」

「なんですってえ!!」

「優月！アリス！今は後！残り2体、片付けるぞ！」

キリトの声に、2人は直ぐに剣を構え直す。

「…アリス、あれは…」

「自分で言っていたでしょう。あれはミニオンです」

「だよな…クソツタレ…！」

優月とアリスの言葉に、キリトが尋ねる。

「2人はあれを知ってるのか…？」

「暗黒界の暗黒術師…こつちでいうところの神聖術師が使う使い魔です」

「名をミニオン。間違っても…整合騎士すら近付けない場所においていいやつでは無い」

2人が何よりも気にしていたのは、そこだった。

ここは飛竜すら近付けない程に、高い場所。

決してあつてはならない事態。

「ましてや…高い権力を持つ教会内部の人間により、匿われていたなんて、あつては  
ない  
ません」

「つ!?来たぞ！優月！アリス！そつちにもだ！」

「…ここは任せたぞ、アリス」

「ええ、私が斬ります」

横に一閃。

それだけで、真つ二つになるミニオン。

そして、縦切り4連撃「バーチカル・スクエア」によって、ミニオンを切り裂くキリト。

「…なんだよ」

「言え、奇妙な技を使う思っただけです。夏至のお祭りの芝居小屋で披露すれば、それなりに客を呼べるのではないですか？」

「そりやどうも…あれ？あんた、セントリアの夏至祭に行ったことあるのか？あれは庶民のお祭りで、修劍学院でも、見ない生徒がほとんどだったぞ」

こつそり抜け出して、行ったことがあるな、それ。

たしかにあれは、庶民向けて感じだったな。

まあまあ楽しかったけど。

「私を気取った連中と一緒にしな…」

突然アリスの言葉が止まる。

2人は不思議そうに、首を傾げていると

「…なんでもありません。それより、ミニオンの血を落としておきなさい。病を呼ぶと言われていますから」

そう言われたキリトは、戸惑いながら袖で拭おうとすると

「こらー！…ああもう！男というのはどうして…」

「おい、一括りにするなよ。…俺もないけど」

「無いですか!? 全く…！手巾の1枚くらい持つておきなさい！」

俺たちはそのまま、でっぱりで一休みすることにした。

「ユージオのやつ…大丈夫かな…」

キリトの眩きに、優月はハツキリと答えた。

「大丈夫、あいつは強い。そうそう負けねえよ。…あの人が相手じゃなかったらな」

「あの人？」

「そのまま登ったとして、90層にて待ち受けるのは整合騎士最強のお方…整合騎士長ベルクーリⅡシンセシスⅡワン」

セントラル・カセドラル内部にて、北の英雄に、北の若き剣士が戦いを挑んでいたのだった。



## 62話

outside

「…ユージオ?」

「キリト?」

突然キリトが、ユージオの名前を呼ぶ。

「どうしましたか?」

「…いや、なんでも。それより壁登りだけど、月が登れば、再開出来そうだな」

「ああ、ある程度作つてから、ゆっくり登つていこうと思うが…」

優月は上を見上げて、げんなりとした顔をする。

数十メートル先に見える、明かりを見ている。

「あと何メルも登るのかと思うと…」

「目が回りそうなくらい腹が減る…」

「言うなよ…俺も減ってきた…」

「はあ…男というのは…」

キリトと優月の間抜けな会話聞いたアリスは、深いため息をつきながら、額に手を当

てる。

「二度や二度、食事が取れないだけで、なんだというのです。子供じゃあるまいし」

「いや、お前俺が飯作ると、滅茶苦茶食うじゃん。おっさんなんて、若えな…なんて言いながら、遠い目をしてるぞ?」

「今その情報を言う必要ありましたか!? 斬りますよ!」

アリスがそう叫んだ時、アリスの腹が鳴る。

「…ククク…」

「キリト! 離しなさい! 今すぐこの男を斬ります!」

「落ち着け! 落ち着けてアリス!」

そうこう騒いでいると、キリトが突然ポケットを漁る。

「あつた! 天の助けだ!」

「…なぜポケットから饅頭が?」

「ポケットを叩けば、饅頭3つだ!…とここでさ、このまま食べても、美味しくないよな?」

「?」

優月とアリスが、不思議そうに首を傾げていると、キリトは饅頭に神聖術を行使しようとした。

「システムコール・ジエネレート・サーマルエレメント・バース…」

「バカか（ですか）！お前は！」

2人に止められて、呆気にとられるキリトから、アリスが饅頭を強奪した。

「はあ…あんなことしたら、丸焦げだろうが…最悪お前の腕ごと」

「マジか!？」

「ジエネレート・サーマルエレメント・アクワイアスエレメント・エアリアルエレメント…ヴオーテックスシエイプ・バースト」

こうすることで、神聖術でレンチンが可能なのだ。

「まさか道具無しで、神聖術だけで饅頭を蒸せるとは。流石は料理上手のセルカのお姉さんだな」

「セルカ？誰そ…」

「お前今、なんと言いました!？」

アリスがもの凄い剣幕で、キリトに詰め寄った。

その様子を見たキリトは、気まずそうに一言。

「君には…妹がいる。そう言ったんだ」

side 優月

アリスには、妹がいるらしい。

それからキリトが語った話は、俺の違和感を解消してくれるには、十分すぎる話だった。

「君の本当の名前は、アリスⅡツールベルク。北部辺境の村、ルーリッド村の村長の娘として産まれた。そして、11歳の頃、ある禁忌を犯して、このセントラル・カセドラルに連行されたんだ」

「ある…禁忌…」

「それは…暗黒界への侵入。ほんの少し、指先が出てしまったんだ」

アリスは考え込み、頭痛がするの、辛そうな顔をする。

「おいアリス…無理はするな」

「私は…知りたい…全てを」

それからキリトは、アリスの身の上を語った。

「…私たち整合騎士は、人界を守るのが第一の務めです。仮にお前たちが、全てを倒したとして、一体誰が、この人界を守るのですか？」

「では逆に聞くが、君は整合騎士だけで、本当に暗黒界の軍を退けられると、そう思うか？ 優月、お前はどこう思う？」

「それは…」

「無理だな、100%」

この人界を守るには、明らかに数が足りない。ただでさえ、整合騎士すら欠番があるくらいだ。

各帝国の近衛兵なんて、数に入れるのすら烏滸がましい程の雑魚の寄せ集め。

「だからこそ、おっさん…整合騎士長も同様の懸念を抱いていた」

だがそれこそが、アドミニストレータの作りだした状況だ。

それでも武器庫の武器を解放し、剣術や神聖術を教え込めば、形にはなる。

だが今の状況では、決してそれは叶わない。

「最高司祭アドミニストレータを倒して、残された時間を最大限有効活用して、軍隊を整える…これしかない」

「…会えますか？」

長い沈黙の中、ポツリとアリスが呟いた。

だがそれは、叶わぬ夢だった。

整合騎士たちに施された【シンセサイズ】の秘儀。

これを解けば、アリスⅡシンセシスⅡサーティが消える。

「それは…」

それは…なんなんだ、俺。

認められない…違う、それはダメだ…。

でも、俺は…俺のアリスは…このアリスだ。

このアリスが消える…俺の友達が死ぬ？

「優月？」

「…なんでもねえ」

「…セルカ…毎日、毎晩…呼んできた…そんな気がする。セルカ…セルカ…」  
そう言つてアリスは、静かに涙を流す。

「…私にもいるのね、家族が。この夜空の下のどこかに…うう…ヒック…」

そう言つて蹲りながら泣くアリスに、俺は黙つて上着をかけてやる。

やがて泣き止んだアリスは

「…ひとつだけ、お願いがあります。この体に、アリス…ツールベルクの魂を戻す前に、一度でいい…遠くからでもいい。セルカを…家族の姿を見せてください」

「…約束する」

その言葉を聞いて、アリスは立ち上がり、覚悟を決めた。

「人界と、そこに暮らす人々を守るため、私アリス…シンセス…サーテイは、たつた今から整合騎士のしめ…!？」

「アリス？」

突然言葉を止めたと思えば

「うわああああああああ!!!」

「アリス!」

sideアリス

「グウウウウウウウウ!!!」

突然右目が焼けるように熱い。

右側の視界が赤く染る。

これは…!?

「アリス!どうした!?…これは…バーコード!?おい、キリト!何がどうなってる!」

「ユージオの時と一緒だ!ユージオが学院で人を斬った時は、右目が吹っ飛んでた!」

二人の会話が聞こえるが、痛みでほとんど理解出来ない。

ただ分かるのは…この痛みは、乗り越えなくてはいけない、ということだけだ。

「これ…は…!!」

「アリス!?!無理するな!」

神聖語と、数字が見える。

「システムアラート…コード871?キリト!なんなんだよこれ!」

「俺にも分からない!多分教会に逆らおうとすると発動する、心理防壁だ!」

「こんな…もの…まで…!」

最高司祭猊下は…何を…考えている…の！

「これ…も…最高…司祭…様が？」

「いや、多分違う。…この外から、この状況を見る連中だと思う」

「ああ…創世記には登場しない、神の一人の仕業だと思う」

そんな…存在が…いるの!?

私たち整合騎士は…神の作った世界を…守っているのに…信じてくれないの…!?

…ここまで服従を強要されるなんて…!

「私は人形では無い！たしかに私は作られた存在かもしれない！けど私にも、意思はあるのです！私はこの世界…この世界に住む人々を守りたい！それが私の…ただ一つの使命なのです!!」

私はそう言いきって、目の前のユヅキにしがみつく。

「ユヅキ…私を離さないで…」

「分かった」

最高司祭アドミニストレータ…そして、名も知らない神よ。

私は、私の成すべき事を成すために…!

「貴方と、戦います!!!」

side 優月



己の務めを果たすべく、右目を潰したアリスは、そのまま気を失った。俺とキリトは何とか協力してよじ登り、こうして95層【暁星の望楼】にたどり着いた。

「ふう…何とかなつたな…」

「ああ…疲れた…」

2人でぐたつとしてしていると

「そう、なら説明してくれる？」

鎧が擦れる音と、剣を突き刺す音が聞こえる。

キリトは弾かれたような動くが、俺は逆にゆっくりとしか動けなかった。

その声は、今東にいるはずの人物の声。

視線を上げたその先には、灰色の鎧と髪に黒いリボン。

赤い目は全体的にうさぎを想起させたが、今はそう思えない。

「イー…デイス…」

「説明しなさい、ユヅキ。事と次第では、あんたも斬るわ」

整合騎士イーデイスⅡシンセスⅡテン。

俺の恩人が、俺たちの敵として立ち塞がった。

## 63話

side 優月

「さて、どこから説明したものか…」

とりあえず、イーデイスに伝えることがあるのは、2つ。

「とりあえず、アリスは目玉吹っ飛んだけど、生きてるから！」

「詳しく説明しなさい!!」

「うお…」

キリトと2人して、すごい剣幕でビビってしまふ。

本当に…アリスのこととなると、目の色変えるんだから…この人は。

「右目の封印…イーデイスには心当たりはないか？」

「っ!?…まさかアリスは…あの激痛を乗り越えたの!?!」

どうやら心当たりはあるらしい。

俺は静かに頷く。

「理解したところで2つ目。…俺とアリスは、裏切るから。他でもない、人界の為に」

「…そう。その反逆者に唆された…って訳じゃなさそうね」

そう言うといーデイスは、【闇斬剣】を構えた。

「抜きなさい、ユヅキ」

「…こうなるわな」

そう言つて俺も刀を抜き、構える。

「…整合騎士、優月ⅡシンセシスⅡゼロ。推して参る！」

「整合騎士、いーデイスⅡシンセシスⅡテン！受けて立つ！」

いーデイスの神器の【武装完全支配術】は、あらゆるものを通り過ぎて、対象を斬る。

そしてそれと同時に、周囲が闇に包まれて、視認できなくなる。

つまり守つては押し切られる。

だから俺の打つ手は

「おおおおおおお!!」

「クウ！」

とにかく攻めるしかない。

だが相手は、一番手合わせをしてきたいーデイスだ。

つまり…

「そー！」

「チッ！」

俺の動きは、だいぶ読まれている。

俺たちは互いに通り過ぎてから

「ハアアアアア！」

秘奥義【輪渦】をぶつけ合う。

鏢迫り合いあつてしまうと、俺が弱い。

力ではイーデイスの方が上だから。

「…エンハンス・アーマメント」

「っ!?しまった!」

このタイミングで【武装完全支配術】はマズイ!

俺は咄嗟に距離をとるが、それが失敗だった。

「グッ!」

方向感覚を失った俺は、どこからイーデイスが来るのか、想像がつかなくなったのだ。

そうこうしているうちに、どんどんと切り刻まれていく。

「…そうか」

俺はあることに気付いて、わざと動くのをやめた。

そして…

「ぐはあ!?!」

「嘘…あんた…わざと!？」

イーデイスの刀が迫る瞬間、その刃を掴んだのだ。

「こうでもしねえと…捕まえらんねえだろ…はああああ!!」

「キヤアアア!」

俺はイーデイスの神器をはじき飛ばして、突きつける。

「…どうする?続けるか?」

「はあ…私の負け。神器とつて。解除するから」

警戒しながら渡したら、本当に解除するだけで、直ぐに鞘に収めた。

「優月!システムコール・ジェネレート・ルミナスエレメント・デイスチャージ!」

「悪いな…キリト…」

「…さてと、どういう状況か、説明してもらおうわよ」

俺の代わりにキリトが、説明をしてくれた。

「…たしかに、騎士長がそんな話をしてた気がするわね。まあ本人もかもしれないだつたし、私もその時はよく考えてなかったから」

おっさん…あんたつて人は…。

人柄も察しも剣術もいい。

おっさんは上司として、最高と言える人物かもしれない。

「とはいえ、全てを信じるのは出来ないわ」

「だよな…」

「…でも、あんたもそう思ってるなら、賭ける価値ならあるわ」

そう言つて踵を返すイーデイス。

「イーデイス？どこに行くんだよ」

「一度任地に戻つて、迎撃の用意と警戒を強化するわ。だから…こっちは頼んだわよ」

そう言つて消えてしまふイーデイス。

「…アリスに気を使ったのか…？」

とりあえず、アリスが起きるまで、少し休む俺たちだった。

outside

アリスが起きてから、ユージオの行方を探す為、キリトがとつた手は「青薔薇の剣」のオブジェクトIDを探すことだった。

そうしてたどり着いた90層の大浴場は

「これは…」

「ユージオの【武装完全支配術】か…？」

一帯が凍りついた世界だった。

所々に氷のバラが咲いている。

ふと優月はあるものを見つけた。

「石像？あんな場所に……？」

「いえ……あれは……!？」

アリスが駆け寄り、それを優月が追いかけると

「小父様（おっさん）!？」

石像はベルクーリⅡシンセシスⅡワンだった。

そしてその現象に、優月は心当たりがあった。

（まさかこれは……「ディーブ・フリーズ」!？）

文字通り、永久的に眠らせるこの神聖術を使えるのは極わずか。

最高司祭……そして元老長。

「小父様……!こんな……あんまりです……!」

「元老長【チュデルキン】……あの肉だるまがア……!!」

悲しみに涙を流すアリスと、怒りに血を滴らせる優月。

「……泣くなよ……嬢ちゃん……」

「小父様!?!ダメ!体が……!」

「坊主も……剣……握れねえぞ……」

「うるせえ!それより自分の心配しろ!」

目を覚ましたとはいえ、未だ石の状態にも関わらず、何かを伝えようとするベルクーりに、アリスと優月はそれを必死に止める。

「嬢ちゃん…俺が…越えられなかった壁を…ついに…超えやがった…。坊主…己の道を…迷わず行け…」

その時、今度はキリトに視線を向けた。

「小僧…お前さんの…相棒は…チュデルキンに…連れ去られた…逃げ。記憶の…迷宮に…迷う…前…に…」

そこでベルクーリは、再び眠りについた。

「小父様アアアアアアアアア!!」

泣き叫びながら、ベルクーリを抱きしめるアリスと。

「…これは…キリト」

荒れ狂う怒りを、押さえつけながらキリトに何かを渡す優月。

「これは…【青薔薇の剣】…」

そう言つて鞘にしまい、大切に持つキリトを見て、優月はアリスを立たせる。

「行くぞお前たち。まずは…あの肉だるまをスライスしてやる」

「…そうですね…ついでに穴も開けて風通しを良くしましょう。少しはマシになるかもしれせん」



(ヤバい…人生で1番ヤバい2人を見てる気がする)

ヒースクリフも裸足で逃げだす。

そう錯覚するキリトなのだった。

「と、ところで…元老つてなんだ？」

「96層より上にいるしか知らねえな。俺は」

「私もそれほど多くは知りませんが、元老院の仕事は…禁忌目録の管理です」

こうして3人は、元老院にたどり着いた。

そこで見た光景は

「これは…」

「ひどい…」

「悪趣味な…」

変なポットのようなものに入れられた、青白い人型の何かだ。

いや、人間ではあるのだが、あまりの光景に、人かどうかも分からなくなる。

ジリリリリリリリリリ！

「！！！！」

鳴り響くサイレンの音に、それぞれ身構えるとポットの中に管が出てきて、そこから色んなものをすり潰したような食べ物が出てくる。

それを口にして、再びブツブツと呟き出す何かを見て、3人はゾツとした。

「これも…最高司祭様が？」

「それ以外ねえだろうな…」

(自由意志がない。だから慎重なアドミニストレータが、こんな仕事を任せられるのか)  
恐らくは世界中から、神聖術に長けた者を拉致し、意志を奪い、元老院という機械に仕立て上げた…そういうことだろう。

「オッホオオオオオオオオ！」

「この声は…！」

奥から聞こえる不快な声に、優月とアリスは揃って敵意どこか、殺意剥き出しにしてズカズカと奥に進む。

「いけません！ いけませんヨォー…お？」

「…」

トランスするチュデルキンと、ゴミを見る目で見るアリスという組み合わせに

(シユールだな…)

怒りも吹っ飛ばす優月とキリト。

その時、チュデルキンの手から水晶が落ちて、何かが写っていた。

(ん？あれは…？)

それに気付いたのはキリトだけで、直ぐに怒りを取り戻した優月は、アリスに負けず劣らずの殺気を放っていた。

「術式を唱えようとしたら、その舌を切り落とします」

「それより速くてめえの頭貫くか、首を落とすぜ」

「き、騎士30号に、0号！なぜここ」

「あ？」

「私たちを番号で呼ぶな！」

2人の怒気に当てられ、黙り込むチュデルキン。

その時やっと、キリトの存在に気が付いたのか

「き、騎士アリス！騎士ユツキ！なぜ反逆者と一緒にいるのです!？」

「私たちはもう、彼と一緒にです」

「っ!?この…裏切る気か！デク人形がああああ!!」

そのまま喚きまくるチュデルキン。

「その人形にしたのは、公理教会でしょう。もつとも、ユツキは違うようですが」

「…ええそうですヨ。私今でも覚えてますよオ」

それからウツトリでした顔で、いかにアリスが整合騎士になったかを、ペラペラと語るチュデルキン。

そんな中でも、アリスは冷静にある言葉を見つけた。

「お前今、妙なこと言いましたね?」「強制シンセサイズ」、と。まるで強制じゃない【シンセサイズ】の儀式があるような言い方ですな」

「おや、存外耳聰いじやないですかア。ええそうですヨ」

強制じゃない【シンセサイズ】の式句を唱えなかつた昔のアリスは、そのプロテクトを強引に強引にこじ開けられたのだ。

「その時のあなたと言ったら…もう石にして私の部屋に永遠に飾りたいと思いましたよー!」

「…元老長チュデルキン。もう十分楽しんだようだ。ならもう、思い残すことは無いでしょう」

そう言つてアリスは、チュデルキンの心臓を一突きにした。

「私もお前の話は…もう聞き飽きました」

sideキリト

アリスが貫いた瞬間、突然チュデルキンの体が膨れ上がり、爆発する。

煙…!?

「術式ばかりが脳じゃねえんですよオ!バーカバーカ!」

「逃がすか!」

優月とアリスが、同時に走り出す。

最奥まで来たが、100階に続く階段がない。

その時、上から何かが降りてきた。

それは青と銀の鎧に身を包んだ、整合騎士。

俺はその姿を見た時、俺の目を信じられなかった。

「嘘だろ…?」

「早すぎる…!」

「あいつ…シンセサイズされてる!」

その整合騎士の正体は…

「ユージオ!!!」

俺はユージオを取り戻すべく、戦った。

その結果は…

「エンハンス・アーマメント…きょうなら」

俺たちは、ユージオに敗北した。

## 64話

sideユージオ

あの人からの、足止めせよという命令をこなした僕は、鎧を脱ぎ、あの人の方に近づく。

「よくやったわ、ユージオ。ご褒美をあげなくちゃ。いらつしやい」

そう言われた僕は、あの人の方のベッドに入り、ご褒美を貰おうとする。

でもその時、何か昔の記憶が過ぎる。

「…」

「…?」

「う…う…けええええええ!!!」

「お前は!?!」

正気を取り戻した僕は、直ぐにカーディナルさんから貰った短剣を、あの人…アドミニストレータに突き刺そうとした。

だがその直前で阻まれ、吹き飛ばされてしまった。

「騙されたわ…まさか正気を取り戻してたなんて。それにそのおもちゃ、図書室のち

びっ子の仕業ね。でも残念、私の肌は、金属武器を受け付けけないの」  
クソ……！

どうする……！

「残念だわ、ユージオ。私に全てを捧げれば、その分私も愛してあげたのに……」

「永遠の……愛……永遠の……支配」

「そうよユージオ。貴方が求めてきた愛を、あなたにあげるわ。最後のチャンスよユージオ。その剣で、そこのおもちやを壊しなさい」

愛は支配し、支配されるすること……。

「可哀想なのは、そんなふうにしかな言えない貴女の方だ」

きつとアドミニストレータも同じだったんだ。

愛に飢え、愛を求めて、得られなかった。

愛とは支配することでも、見返りを求めることでも、取引で手に入れるものでもない。  
花に水を注ぐように、与え続けること。

「それこそが、きつと愛なんだ」

「そう……残念ね。仕方ないわね。あの子みたいに強制〔シンセサイズ〕しようかしら」

まさか……あの子って!?

「貴方がご執心なサーティちゃん。せめて、同じ体験してみる？」

よくも…アリスを…!!

「ぜああああああああ!!」

僕は【青薔薇の剣】を抜き、全速力で斬り掛かる。

力むな、込めるな…今は全てを乗せろ!

僕のソードスキルと、アドミニストレータの神聖術がぶつかると

「く…だ…け…ろおおおおおおお!!」

僕は何とか砕いたが、その後すぐに風素によるカウンターを受けて、吹き飛ばされる。

クソオ…!

僕は痛む背中に鞭を打ち、カーディナルさんがくれた短剣を手にして立ち上がる。

この【青薔薇の剣】は金属じゃない。

だからアドミニストレータの防御だって、打ち破れる。

「…そういうこと」

その時下からチュデルキンが、下からはい出てくる。

「猊下！お助けを！オヒョオオ！」

チュデルキンの下から手が出てきて、足を掴む。

そのままチュデルキンは靴を脱ぎ、どういう仕組みか転がって逃げていく。

「よっつ」



現れた黒ずくめの男を、僕は知っている。

「キリト…」

「よ、ユージオ」

そして続いて出てきたのは、ピンク色の上着を着ている、紫の髪の子。

「ユツキ…」

「おう、一人でよく頑張ったな」

最後に出てきたのは、黄金の整合騎士。

彼女こそ、僕が探してやまなかった

「アリス…」

「…私達も戦います」

みんな…！

来てくれたんだね…！

でも…

「ごめんみんな。僕はアドミニストレータの誘惑に負けて…」

「水臭いぜ、ユージオ。お前の考えなんて、直ぐにわかったぜ」

あっさりと言いつつキリトに、僕は思わず笑ってしまう。

「…君はいつもそうだ…！」

side 優月

さてと……ずっとあのままだな、あの女。

何をブツブツ言ってるんだ？

「…ねえ、アリスちゃん。ユツキくん。言いたいことがあるのでしよう？ 言つてご覧なさい」

「…ツ！」

そのオーラに圧倒されかけたアリスだったが、後ろに踏み込んだ足を止めて、逆に前に出た。

俺も不敵に笑いながら、堂々と言いたい放題させてもらうことにした。

「最高司祭様。栄えある我らが整合騎士団は、本日をもって壊滅しました。我らの隣に並ぶ、2名の反逆者の手によって。そして、あなたが積み上げてきた、膨大な欲望と欺瞞ゆえ」

「我らの究極的な役目は、人界の民の平穩を守ること。それを脅かす存在となりかねない貴女を……ここで斬る」

その時チュデルキンが喚き散らす、俺はそれよりアドミニストレータの言葉が気になった。

「あの者が施したコード871を、自発的に破ったのかしら」

あの者…コード871…やはり何か知ってるな？

「ま、解析しないと分からないわね。チュデルキン、お前の評価を上げる機会をあげるわ」

それならチュデルキンがとつた行動は、説明するのも憚るほどに、醜いものだった。

まあ、男の欲望を満たしたい…そういうものだ。

それを了承するアドミニストレータ。

「システムコール！ジェネレーター！サーマルエレメント！」

嘘だろ…あの野郎…自分の目玉まで焼きやがった。

都合22の熱素によって作られたのは、炎の魔人。

「さてと…ユージオ…無理？」

「無理だね、残念だけど」

ダメか…俺やアリスの花でも厳しいぞ…あれは。

「10秒。何とか持ち堪えます。その間にチュデルキン本人を」

「よし。俺とキリトが仕留める。ユージオは気を逸らしてくれ」

「分かった」

「…行きますよ！」

アリスが少し俺たちから離れて



「ま。それなりにいいデータが取れたわ。ユヅキくんを拾ったのは、非正規婚による未登録ユニットのがどんな風になるのか…それを知れたかったからだけど…まさか2人とも、未登録ユニットじゃなくて、あっち側から来たのね」

流石に知ってるか…。

「そうだ。と言つても。俺たちに与えられた権限レベルは、この世界の一般人と何ら変わらなないがな」

「それで？ 貴方たちは何をしに、私の世界に転げ落ちてきたのかしら？」

ダークテリトリ

「暗黒界の侵攻に、俺たちだけでなんとかなると、本気で考えているのか？ これは同じ懸念を、ベルクーリさんもフアナテイオさんも抱いていたぞ」

「なぜ私たちの魂に、貴女へと忠誠を強制させるような術式を組み込んだのですか!?! 貴女は、閣下の葛藤をご存知ではなかったのですか!?!」

アリスの悲しみに満ちた叫びを、アドミニストレータは蔑むように言い放った。

「知ってたわよ、そんなこと。実はね、100年前にも、同じことを言ってたのよ。ベルクーリだけじゃないわ。100年以上たった整合騎士は、一度でリセットしてあるのよ」

「…いつ…マジでイカれてる…!」

「私は未だかつて無い、胸の痛みを感じています。ですが、この痛みを消したくありません」

ん。なぜなら……これこそが、私が人間であるということの照査に他なりません！私は、貴女の支配を望まない！」

俺たちの言葉は、もはや平行線だ。

どれだけ言っても絶対に、交わらないだろう。

「……このまま進んでも、お前の望み通りにはならねえぞ。この向こうには、真に絶対の権限を持つ連中がいる」

「それいつらはこう思うぞ。『今回は失敗だった。やり直そう』……そしてボタンひとつで、この世の何もかもが消滅するぞ」

俺たちの言葉に、ユージオとアリスが息を呑む。

2人には到底、理解出来ない話だろう。

無理もない、こんな話普通は信じられないからな。

「じゃあ貴方たちはどうなのかしら？ 貴方たちの世界より、より上位の世界に創造された可能性を、常に考えているのかしら？……そうではないわよねえ。だった戯れに世界を作って、壊そうなんて連中だものね」

それは……!?!

そう言われては、俺達も反論出来ない。

「私は支配することこそが、存在証明。この足は踏みしだく為であり、断じて膝を屈する

為のものでない!!」

「だったら貴女は、皆殺しされた民の中、一人玉座に座ってる気が!」

「…正直言つてね、整合騎士は繋ぎだったの」

何…?

整合騎士団が…繋ぎ?

「私が真に求める武力には、記憶も感情も考える力すら要らないの。つまり…人間である必要もないのよ。リリース・リコレクション!」

「これは…」

「まさか!」

壁にあった武具が、一つの形になる。

まさかあれ…全部神器だったのか!?

「剣の…自動人形…!」

都合30本分の神器…どう戦う!?

「さあ、行きなさい! ソード・ゴレム!」

最初に狙われたのは…ユージオ!?

間に合え…!

「ユージオ! エンハンス・アーマメント!」

俺は咄嗟にユージオに体当たりして、【武装完全支配術】で刀を大きくして、攻撃に対抗した。

だが

「ゴフツ!？」

ヤバイ…シヤレにならねえ…!?

俺は1太刀受けただけで、壁まで吹っ飛ばされて、血を吐き出した。

「ああ…アアアアアアアア!!」

「はああああああ!!」

さらに立て続けにキリト、アリスがやられる。

クソ…ユージオ…逃げろ…!

「あら?…あらあら…随分と残酷な神器だったのね、それ」

「うる…せえよ…ガフツ!」

クソ…立とうにも…力が入らねえ…!

「空間神聖力を吸い、自動回復なんて…死ぬに死ねないのね!」

「死ぬに…死ねない…?その…デク人形が…弱っちい…だけ…だろ…?」

俺が死にかける負け惜しみを言っていると、突然でかいクモがソードゴレムを襲い、さらにユージオが昇降盤に、ナイフを突き立てていた。



現れたのは…小柄の女の子。

だがその雰囲気は…長い時を生きた賢者のようだ。

その女の子は、一撃でソードゴーレムを吹き飛ばした。

「…お前は…」

「黙っておれ」

そう言っつて、俺たちの傷を癒してくれた。

「…キリト…そいつは…」

「カーディナルだ。200年前、アドミニストレータと戦った、もう一人の最高司祭」

…カーディナル…だと？

それ…信じていいのか…？

「優月、俺たちの知るカーディナルは、彼女のオリジナルらしい。だがあのカーディナル

とは、最早別物と見ていい」

「…お前がそう言うなら…」

「私も信じましょう。この身を癒してください、この暖かい神聖術を信じます」

そして俺たちは、再びアドミニストレータと向き合う。

「随分と人の真似が上手くなったようじゃな」

「ふふふ…久しぶりね、おチビさん。200年前、心細そうに震えていた女の子とは思え

ないわ、リセリスちゃん」

「ワシをその名で呼ぶな！クイネラ！わしの名はカーディナル！貴様を消し去るシステムの名じゃ！」

「そうだったわね。そして私の名前はアドミニストレータ。全てのシステムの支配者」  
ついに最終決戦の幕が開く予兆を、俺は感じたのだった。

## 65話

outside

200年振りに対峙する、アドミニストレータとカーディナル。

不敵な笑いながら、アドミニストレータは何かを唱えた。

「挨拶が遅れてごめんなさい。貴女を捕まえる為の神聖術の用意をしたから…ね！」

そういった途端、突然周囲の窓が割れ、周囲が異界化する。

「貴様…アドレスを切り離したのか!？」

「これで逃げられないわ。貴女は猫のいる檻に入ったネズミよ」

今度はカーディナルが笑った。

「この状況じゃ、どちらがネズミか分からんがな? な。こちらは5人、貴様は1人なの

じゃからな!」

「あら、それは計算が違うわ。正しくは、5対300よ? 私を抜いてもね」

(300?…どうということだ?)

「貴様…なんとという非道な真似を!？」

優月の疑問に答えを言ったのは、カーディナルだった。

「そのもの達は、本来貴様を守るべき民では無いのか!？」

「民…? 民って…人間?」

「人…なのですか? あの怪物が?」

「それが何なのかしら? たかが、300程度の人間ユニットを物質変換しただけよ?」

あまりの物言いに、流石の優月も言葉を失う。

アドミニストレータはその世界の人間を、本当の意味で道具にしか見ていないのだ。

「とはいえ、これはプロトタイプなのよねえ。完成形にはそうねえ…半分あればいいんじゃないかしら?」

「…まさか…その半分っていうのは…」

「もちろん、人界に住む8万人の半分。それだけあれば、人界を守り、暗黒界に攻め入るのも可能だと思っわ」

全員言葉を失った。

（イカれてる…!? 怪物だ…コイツは!）

アリスもそう思ったのか、1人の神聖術師として問いかけた。

「最高司祭様、その神器の所有者は、どこにいるのです。武器との間に強固な絆が必要な

【記憶解放術】は、貴女では行使できないはず!」

「…その答えは、ユージオが気付いたわよ。ねえ?」

「…そうか…そういうことだったのか…!?」

ユージオの視線を追うと、そこにあるのは天井。

所々キラキラと光る装飾が施されているが、ここで優月もあることに気がついた。

「まさか…あの光は、整合騎士から抜き取った記憶の欠片なのか!?」

「貴様…たしかに精神原型に差し込めば、擬似的な人間ユニットとして扱える。さらに、武器の素材に記憶に適合する人物を使えば…【記憶解放術】は使用可能になる!」

「正解よ。よくわかったわね、2人とも。触りたい、触れたい、自分のものになりたい…そういう醜い欲望が、これを動かしてるのよ。でも触れない…触れたら斬ってしまう剣だから。すごいでしょう?この欲望の力は」

「違う!それは愛じゃ!欲望などという言葉で表すな!」

カーディナルの言葉も、アドミニストレータには届かない。

「まあ別にいいわ。問題は…それを知った今、お前にこれを破壊できない、ということだ!なぜなら…これは、姿を変えただけの、人間なんだから!」

その事実は、カーディナルの心を折るのには、十分すぎだ。

諦めて杖を手放した時

「なら俺がやる」

そう言って一歩踏み出したのは、優月だった。

「優月！待て！俺も…」

「下がってろ！」

優月の鋭い声に、キリトの足が止まる。

「あら？貴方1人で何ができるの？1対300よ？」

「できるさ、何でもな。それに俺は…1人じゃない。数も違う。1000対300…だ」

この刀に眠る剣士の力は、百人力だ。

そうして優月は、ゆっくりと息を吐いて

「リリース・リコレクション」

「桜刀：舞姫」の全てを解放したのだった。

side 優月

俺の神器「桜刀：舞姫」には、3つの力がある。

刃をあらゆる形に変える「千変万化」。

天命を回復させる「無限再生」。

そして3つ目が「継承」。

かつてのこの神器の使い手だった、女剣士の戦闘経験を読み込み、自分の技へと継承させる。

「くっ…！」

膨大な戦闘経験と知識が、俺の脳：正確にはフラクトライトに流れ込んでくる。

その情報の濁流を整えて、自分の経験と知識と混ぜ合わせる。

「…行くぞ」

記憶の中にも、これくらいの怪物がいた。

俺も「スカル・リーパー」と被る。

あの時はアスナ先輩がいた。

でも今は…そして女剣士も1人。

「はあああああ!!」

だから…「心意」を込めて弾く。

カウンターの一撃を、俺は全身を脱力させて、その一撃を受け流しながら、その勢いを殺さないように回転し

「秘奥義【輪渦】」

轟音と一緒に、ソードゴーレムを吹き飛ばす。

マズイな…頭痛が酷い。

残り2, 3分か…!?

その時、後ろの方に動きがあった。

「ユージオ…?」

一振の白い剣が、そこにあつた。  
何が起きたかは、見れば分かる。

ユージオは、「青薔薇の剣」とひとつになった。

「…ユージオ。少し頼めるか？」

俺の言葉に答えるように、ユージオがソードゴーレムに切り込む。

…ありがとう、ユージオ。

「はああああああ!!」

鞘の中で花びら状にした刃を、無数に乱回転させた。

そうすることで、刃同士がぶつかり、無数の火花と超高温を生み出す。

「つうう…!!」

頭痛が酷くなる。

鞘を持つ手が焼ける。

本来の使い手たる女剣士ならば、心意で調整して上手く使うのだが、俺にはそんな器用な真似は出来ない。

それでも俺は、刃の回転を止めずひたすら回し続ける。

「これは…なんの音ですか…？」

「しかもこの匂いは…何かが焼けてる…？」



キリト達も気付いたみたいだが、絶対に止めない。  
そして決定的な隙を、ユージオが作ってくれた。

「これで……どけ！ユージオ！」

俺はついに、鞘から刀身を解放した。

密閉空間で燃え盛っていた炎に、急激に空気が入りその結果、ある現象を引き起こす。

「くううううう!!?なんですか、この炎は!?!」

「まさか……バツクドラフト現象!!」

そう、バツクドラフト現象だ。

それによって生じた爆発的な炎が、刀身に引火、さらに刀身によって誘導され、ソードゴレムを燃やし尽くした。

「…絶技【百火桜乱】」

完膚なきまでに、コアまで消し炭にされたソードゴレムは、やっとその動きを止めたのだった。

「はあ……はあ……つううう……!」

激しい頭痛と左手の火傷に苛まれる中、ユージオは何故かアドミニストレータへと切っ先を向けた。

「あら、やる気なの?ユージオ?」

「ま……て……」

震える声で俺は制止させるも、止まらず襲いかかる。

「待て……言つてん……だろうがアアアアアア!!」

強引に【武装完全支配術】で、アドミニストレータとユージオに間に、刃を通して止めさせる。

そのせいで、刀の天命がほぼゼロになったが、これには【無限再生】の特性がある。

そのうち回復するので、問題ない。

その際に、キリトの手がユージオに追いつく。

「一人で……行かせるものか……」

「キリト……」

「優月、あとは任せろ。アリス、カーディナル。優月を頼む」

「頼むぜ……ヒー……ロー……」

「……ヒーローはお前だ、バカ」

sideキリト

あと一步……俺にはあと一步が足りなかった。

いつもそそうだ。

俺の足りないあと一步は、優月が……ツキノワが……背中を押ししてくれる。

だから……!

「今度こそ、この一步に報いる」

そして俺は、久しぶりに二刀流を解放した。

「…不愉快だわ。招かれざる客が…私の世界で好き勝手するな! 私この国を統べる者! 最高司祭、アドミニストレータ! 膝をつけ! 首を差し出せ!! 恭順せよ!!!」

「違う! お前はただの篡奪者だ! この世界を愛さないお前に、この世界を統べる資格は無い!」

「はああああああああああ!!!」

俺の剣と【青薔薇の剣】となったユージオが、アドミニストレータの剣とぶつかる。

一撃ずつ重いアドミニストレータに対して、俺は速さと手数で対抗する。

俺は絶え間なく、ひたすら攻撃を重ねてアドミニストレータを圧倒して、吹き飛ばす。

「グウ……こ、こしやくなアアアアアア!!!」

「ハアアアアアアアアア!!!」

俺とアドミニストレータの、【ヴォーパル・ストライク】がぶつかり合い、アドミニストレータの剣を砕いた。

そして…

「終わりだアアアアアア!!!」

そしてついに、俺は愛剣でアドミニストレータを買いた。

「ふふふ…まさか…2本とも、金属では無い…なんてね…」

そう言い残して、アドミニストレータは死んだ。

「倒した…んだよな…俺たち…」

「おう、ナイス」

優月…つてそうだ！

こいつ、左手が!?

「優月！手は大丈夫なのか!？」

「カーディナル様々だぜ」

そう言って、左手をヒラヒラさせる優月を見てホッとすると、【青薔薇の剣】が光り出して…

「ん…戻れた…」

ユージオ…。

良かった…本当に…！

ボヤける視界で、色んなことを思っ、口から出た言葉は

「このバカ野郎!!」

「うわあ!？」

「どいつもこいつも…なんで俺の周りの連中は…！」

「キリト…泣いてるのかい？」

「な、泣いてない…！」

「誰のせいだと…！」

「やれやれ、お前は本当に…泣き虫だなあ」

「うる…さい…！」

「他人事みたいに言うけど、お前は筆頭なんだぞ…！」

「俺は必死に目を擦って、涙を隠す。」

「大丈夫だよキリト…僕はここにいる…！」

「こら、目を擦るな。つたく、世話の焼ける…！」

「お前ら…1人で…行こう…なんて…二度と…するなよ！」

「もし2人に何かあったら…俺は…俺は…。」

「ふと気付くと、ユージオが窓から外を眺めていた。」

「ユージオ。どうかしましたか？」

「…キリト、君の剣の銘【夜空の剣】なんて、どうかかな？」

【夜空の剣】…多分ユージオは、あの夜空を見てそう思ったんだろう。」

「なんだろう…色んな名前を考えてピンと来なかったけど、この名前はすぐくしくり

くる。

「…ああ、ありがとう、ユージオ。そうさせてもらうよ」

不思議と黒いやつ…改め、【夜空の剣】も嬉しそうに光った気がする。

「キリト…お前…」

「銘なんて、普通最初に付けるものでしょう…」

2人の顔は、そんなんでよく戦えたなど、ありありと書いてあった。

さて…そろそろ…。

「優月、あれを」

「ああ…ノートPC…システムコンソールか」

俺と優月は、それに向き合って、まず2人に俺達の説明をした。

俺たちはこことは違う世界、リアルワールドから来たこと。

【ベクタの迷子】というの、嘘であること。

当然、記憶が無いのも嘘であること。

ただし、俺も優月もなぜここに来たのか、それは分からないのは本当であること。

「アリス、騙してすまなかつた」

「…構いませんよ。元々怪しいとは思ってましたし、それに【ベクタの迷子】と言い出し

たのは、イーデイス殿ですから」

「…さて、話は済んだかのう？色々問題は山積みだがまずは…キリト、ユヅキ。お主らの生還が先じゃ」

そう言つてカーディナルが締めくくつた。

俺はコンソールを操作して、リアルとの通信チャンネルを開く。

「菊岡さん…聞こえるか？」

『キリト君…？キリト君なのかい!?!』

「俺もいるぜ、菊岡さんよ」

『その声…ツキノワ君かい!?!2人とも…記憶のロックがされてないのか!?!』

やはり菊岡は俺だけではなく、優月がいることも知っていた。

つまり現実世界の俺たちは…同じ場所にいる可能性が高い。

「さて、菊岡さんよお。俺たちはあんたに、山ほど話さないといけないことがあるんだが

？」

「あんたのしてきたこと…は…？」

ん？

なんだあれは…？

『キリト君？ツキノワ君？どうしたんだい?』

「あの光は…」

優月もそれに気が付いた途端、突然光が俺たちに降り注いで  
「がああ!!」

そのまま気を失った。



## アリシゼーションリコリス編

## 66話

outside

「キリト！ユツキ！」

「カーディナル様！一体何が!？」

突然倒れた優月とキリトに駆け寄り、何事かと慌てる2人。

そしてカーディナルは端末に向けて、声をかける。

『キリト君!?! ツキノワ君!?! 返事をしてくれ!』

「おぬし! 2人に何をした!？」

『き、君は?』

「2人の友じゃ! そちらからなにかしたのでは無いのか?」

『な、何もしていない! それより何が起きている!?!』

カーディナルは端末越しの声に、嘘はないと判断して、状況を説明した。

『と、とにかく! こちらでも調べてみる! 彼らを安全な場所へ!』

ここで通信が途切れて、カーディナルは、ユージオとアリスに、今後の方針を伝える。

「カーディナル様……」

「倒れる直前、何らかの神聖術が行使されたのを確認した。恐らくアドミニストレータのやつめが、何らかの仕掛けを施したのじゃ。ユージオ！お主はキリトとユヅキを安全な場所に！アリス！お主は現状を整合騎士たちと共有せよ！『ディープ・フリーズ』の解除術式は、わしが教える！」

そうしてバタバタと対応におわれる中、アリスたち整合騎士たちの会議中にて。

「空から女性が3人、降りてきた？」

修道士が突然入ってきて、そんなことを口にした。

そしてこう言っていたとも伝えた。

「キリトとツキノワ……もしかしたら優月って名乗ってるかもしれないけど、とにかく2人に会わせて欲しい。」

「キリト……ユヅキ……小父様！」

「気をつけろよ」

アリスが走ってその現れた場所に向かうと、3人の女がいた。

1人は栗毛色の髪を、クラウン-halfアップにした、品のある女性。

1人は紫の髪をポニーテールにした、どこか澆刺とした女性。

1人は黒髪をボブカットにした、どこか儂げで優しそうな女性。

特に紫の髪の女性を見た時、アリスは一度声を出しそうになった。

(似ている…ユヅキに)

「貴女達が、空から降りてきたという者達ですね」

「そうね。私はミト。こっちはアスナ、こっちはサチよ。サチはキリトの恋人で、アスナはツキノワ…多分優月って言った方がいいかしら、その恋人。私は優月の姉よ」

「…それをおいそれと、信じる訳にはいきませぬね」

「だったら…こうするしかないわ」

そう言つてアスナは、剣を抜いて構える。

「ちよつとアスナ！待ちなさい！」

「落ち着いて！アスナ！私たちは戦うために、この世界に来た訳じゃないでしょう!？」

慌ててミトとサチが止めるのを見ながら、アリスはあるワードを拾っていた。

(この世界…?…まさか)

「貴女達、リアルワールドから来たのですね」

「「っ!?!」」

どうして知っているのか、そう言わんばかりの反応に、アリスも隠し事は必要ないと判断した。

「2人が倒れる前、教えてくれました。…案内します。こちらへ」

3人を2人の元へと連れてったアリスは、そのまま3人から事情を聞いた。

2人はフラクトライトの中にある、セルフイメージという部分に、ダメージを負ってしまったのだ。

セルフイメージとは、ざっくり言うなら自我を指す言葉だ。

(自己認識…。自我…。作られた私は一体、何なのでしようか…?)

アリスはその話を聞いて葛藤を抱くも、今はそれは置いておくべきと判断した。

「しかしどうやって、2人を治すのじゃ?」

「自分で反応できない以上、外部からそれを補うしかありません。彼らと近い人たちの接触がある時、フラクトライトの活性が確認されています。主に…アリスさんとユー・ジオ君。そして、私たちとそれが出来るそうです」

「ですが、私たちだけでは…」

「ええ、足りないわ。だから…呼んだのよ」

「呼んだ…?」

その後、リズにシリカ、シノンにリーファなど、2人の近い人物が続々と来て、治療を施したのだが、事は上手く進まない。

「どうして…?アスナ!比嘉さんは?」

「…イメージが足りないって…ねえ、彼らの他の関係者…待って…キリト君に接続を求

めてる?」

「どうやら何者かが、キリトへの接続を求めてるらしく、リアルワールドで反応に困っているらしい。」

「場所は?」

「最上階…さらにもっと上…」

「…まさか…!?!」

「…アスナさん、キリトに繋いでもらって」

アリスとユージオには、その人物に心当たりがあった。

そして…

「…ん…」

「キリト!」

まず、キリトが目を覚ました。

だが、優月は一向に目を覚まさない。

「ねえ?! 優月の関係者は他にはいないの!?!」

その様子にミトが焦るように、アリスに詰め寄るが、アリスも苦い顔で

「…優月は1年間、世界中を旅していました。なので、その間のことを知るものがないのです」

そう、優月が足りないのは、その部分の記憶であり、誰もその間を知らないから、セルフィメージを補えないのだ。

「…嬢ちゃん、状況は？」

「小父様！」

そこにふらりと、ベルクーリが現れた。

状況を聞いたベルクーリは、リアルワールドから来た面々に、

「お嬢さん方、そのセルフィメージつつーのは、人じゃなきやだめか？」

「え？」

「坊主はこの2年間、欠かさず日記をつけてたらしい。そこになら、そのセルフィメージつつーやつの手がかりがあると思うんだが？」

その言葉は、リアルワールドの面々を驚かせた。

たしかにそうなのだ。

日記とは、人に見せるものではない。

だからこそ、そこには自身が思う自分…本音が記されている。

それも立派な自我…セルフィメージである。

「あ、あの！彼の部屋は!？」

「おう、坊主は…」

ベルクローリが答えようとした時、突然カセドラルが大きく揺れ出す。

「なに!？」

「キャー!」

シリカの足元に、巨大な木の根が生え出す。

それは次々生えてきて、セントラル・カセドラルそのものを飲み込もうとする。

「これは…嬢ちゃん!俺は連中をまとめる!坊主は頼んだぞ!」

「わ、分かりました!」

「アリスよ!ユツキの部屋を想像せよ!ワシがそこまでの扉を作る!」

「私たちも行くわ!」

優月の部屋に行こうとするアリスとカーディナルに続き、ミトとアスナと立候補する。

それを認めたカーディナルは、大図書室への扉を作り、残りのメンバーを避難させた。

「よし、ゆくぞ!」

sideアスナ

カーディナルという、私たちにとつて因縁のある名前の子が作ってくれた扉の先に拡がっていたのは、1人で寝泊まりするには困らない程度のワンルーム。

ただ本棚には、ピツシリと本が並んでいた。

「これは…全部神聖術の本ですね。道理で覚えがいいわけですよ」

優月君は頭もいい。

その実態はしつかりとした復習だ。

「さて、時間はないぞ。早くユツキの日記を…」

「あつたわよ」

「「え!?!」」

いつの間にかミトが、衣装ダンスをひっくり返して、奥にあつたのだろう彼の日記帳を引っ張り出していた。

「あの子は隠したいものを、衣装ダンスに隠すのよ。覚えておくといいわよ」

…ここまで来ると、嫉妬より優月君への哀れみが勝る。

とにかく、目的のものを手に入れた私達は、直ぐにカーディナルさんが作ってくれた扉で、みんなと合流する。

「でも日記って、どう使うの?」

「私たちが読んで、優月の気持ちを理解するしかないのかしら…」

プライベートな為、読むのは私とミトと、ここでの2年を、この場で一番知っているであろうアリスが、代表で読むことに。

「優月…」



最初に書かれていたのは、この世界の生活のことや、毎日への不安。

「馬鹿者……」

次にでてきたのは、アリスを始めとする、整合騎士の方々への罪悪感。

「君は……どこでも君なんだね」

最後の方には、2年間の経験で分かったことと、この世界の歪みのことと、世界と戦う覚悟。

「貴方がいつもお調子者を装っていたのは、自分の不安も飛ばそうとしていたのですね……まだ私は、貴方のことを知っていませんでしたのですね」

「あんたがなにを不安がろうと、私が絶対に追いつくわ。弟を守るのが、姉の仕事なんだから」

「優月君は全部一人で抱えすぎだよ。私も……私も、君の力になりたいんだよ？だから……お願い、戻ってきて。私のそばにいて……！」

「「優月（君）（ユツキ）……！」」

sideツキノワ

(……ここはどこなんだろう……?)

気付けば俺は、大きな桜の木がある湖のほとりで1人、ぼんやりと立っていた。

(俺は、なんでここに……? いや、そもそも……俺は……何者だ……?)

訳も分からず、ただぼんやりと、立ち尽くしていた。

なんだか、身体中がダルい…疲れてるのかな。

(それもそうか…。アインクラッドから、ずっと走ってきた訳だし…)

俺は、死にたくなかった。

無意味に消えたくなかった。

だからずっと、何かを求めて走り続けた。

S A O で必死に戦って…A L O で何故かサンドバッグにされて…G G O で過去の因

縁にケリをつけて、そして…ここで、一つの国を滅ぼした。

(俺は…なんで…?)

なんで、こんなことをしてるんだ？

誰かのため？

…違う、そうじゃない。

力の誇示？

…それも違う。

本当に俺は…何のために？

(…自分のためだ)

死にたくないから戦った。

死に方なんて選べない？

(違う、死ぬことなんて想像したくない)

どんなことでもやる覚悟がいる？

(違う、そうやって言い訳しないと、剣を握れない)

守りたい、終わらせたい、救いたい。

(失いたくない、逃げ出したい、1人になりたくない)

どれもこれも、自分の弱さと醜さを隠すための、都合のいい言い訳だ。

拳句には、この世界で俺は何をした？

(別に…ただ、間違ってると思ったから、戦うと決めた。その先にあるものを考えもせず)

曲がりなりに、アドミニストレータは国のトップだ。

そんな人物を倒せば、国が混乱する。

そんな責任、取れるはずがないのに、何も考えずに、ただ自分勝手に戦った。

人界を守る気もないのに、あたかもそういう風ですと装った。

(この先に待つ暗黒界との戦い…つまり、戦争だ)

そんなものと向き合う覚悟は、俺には無い。

関係ない…。

逃げたい…逃げたい…逃げたい…！

ーいいのよ、逃げてても。

(え?)

気付けば、すぐ後ろに、女の人がいた。

俺はその人を、知っている。

(…女剣士?)

ーそうね。あの刀の前の持ち主。貴方のことは、色々知ってる。貴方は、この世界の人間じゃない。だったら、貴方がこの世界の問題を、わざわざ背負う必要は無いの。(でも…何もせず無責任に放り投げるなんて…そんなの…筋が…)

ーだったらそもそも、この世界のために戦うことこそ、筋が通ってないわ。だって、無関係じゃない、貴方は。

(…)

ーねえ、優月。貴方がしたいことは？私はある時、貴方の生きたいという意思に応えて、刀になったの。だから、貴方のやりたい事をやりなさい。人が自分のために生きちゃいけない…そんなルールは、ありはしないわ。

俺の…やりたいこと…。

(会いたい…みんなに…会いたいよ…)

ーそれでいいの。さあ、行きなさい。みんなが待つてるわ。行ってらっしゃい、坊や。

「…行ってくるー！」

俺は少しずつ歩き出して、気付けば走り出していた。

目指すは遠くに見えるあの光。

ただまっすぐ…ひたすら真っ直ぐに、走り抜けて…そして…。

「…あ…」

「まったく…」

「遅すぎです…」

「…よつとー！」

俺はアスナ先輩、ミト、アリスの顔を見ながら飛び起きて、ユージオが持ってくれていた神器を、【心意の腕】で手繰り寄せる。

「…ありがとう、舞姫。ありがとう、みんな」

俺は神器を腰に差して、上着を羽織り直した。

「…ただいま。みんな」

「…おかえり！優月君!!!」

俺は泣きながら飛びついてくるアスナ先輩を、優しく抱きとめるのだった。

## 67話

side 優月

目を覚ましてから俺は、現実世界で起きたことを、アスナ先輩に教えてもらった。

「あゝ…そうだ、思い出した…。俺、子供助けようとして、トラックに撥ねられたんだ」  
「そうだよ…死ぬかと思ったんだからね…！」

「心配かけさせるんじゃないわよ、バカ！」

うう…申し訳なさ過ぎて、小さくなりそうだ…。

とはいえ、そろそろ会議の時間だ。

「ええつと…そろそろ会議の時間だから、行かないと…」

「…はあ。話はまた後でね」

「あ、まだ続くんだ」

「当然でしょ！バカ優月！」

会議後、日暮れまで怒られるとはこの時思ってた。なかつた。

それはともかく、会議用の大天幕にて。

カセドラルがダメになった今、北セントリア修剣学院に設置された、対策本部が俺達

の…そして人界の中心地だった。

「ベルクーリ閣下！優月ⅡシンセシスⅡゼロ！無事帰還しました！」

「…坊主…まだダメなのか…？」

「おいおっさん、久しぶりに真面目にやった俺の時間を返せ」

「なら心配してやった俺の時間を返すこつた」

そう言われると、ぐうの音も出ない。

俺はムスツとしていると、突然頭をぐしゃぐしゃに、撫で回してくる。

「…よく戻ってきたな、坊主」

「ちよ!?!やめろよ…!」

俺は強引に離させながらも、頭に残る温かさに、リアルワールドの親父を思い出す。

親父はこういう人ではなかったが、それでもやはり、俺たち子供のことを考えてくれ

てはいた。

…戻ったら、謝らないのな…。

「さて…それじゃあ、会議を始めるか。それぞれ、色々あると思うが、今は悪いが、腹の

中に収めてくれ。まずはこつちの新顔…てえか、凍結から目覚めさせれた整合騎士を紹

介しておこう」

そう言っておっさんが呼んだのは、無表情な女性と、優しげな男性。

というか男の方…誰かに似てる？

「こっちはシェータ||シンセシス||トウエルブだ」

「…」

無言…？

何も話さないのか？

「ええつと…武器は何を？」

同伴していたキリトが、果敢に質問したが

「この【黒百合の剣】よ。…斬られたい？」

「すみませんでした」

まさかの試し斬りされたい発言とは…随分とバイオレンスだな…。

何でも凍結処分といっても、特殊は方法だったらしく、この人しか解除出来なかったらしい。

…あれ、ということはこの人は？

「で、こっちが…」

「レンリ||シンセシス||トウエニセブンです…」

「…ユージオに似てる…」

キリトの眩きに、俺はやつと感じていた違和感にたどり着いた。



「ああ！どこかで見たと思ってたら……たしかに、ユージオに似てるかも！」

「2人とも……いきなりそんなこと失礼だろ？それにレンリさんの方が、洗練されてると思うけど……」

「貴方たち！話の腰を折るのをやめなさい！レンリ殿が困ってしまうでしょう！」

レンリの方は、チュデルキンが先に解除していたらしい。

数を増やそうとしたのだろうが、結局意味は無く、完全覚醒する頃には、全てが終わっていたというこころらしい。

「イーディスは？東に？」

「ああ、あいつはお前さんと戦ってすぐに、東に飛んだ。あいつとは密に情報のやり取りをしてるから、問題ねえ。そこで、次はそっちだぜ？随分と大所帯になってるが……？」

多すぎるため、一人一人の紹介はせず、俺とキリトの仲間であると説明。

そして、その流れでカーディナルを紹介した。

「わしのごとは、最高司祭代理とでも呼ぶがいい」

諸々の基礎情報が整った上で、俺たちは会議を始めた。

まずはいきなり現れた樹について。

「あれから、アドミニストレータの心意を感じた」

これは近くまで見に行ったら、俺とキリトの見解だ。

さらに付け加えるなら、あの樹はユージオ達が住んでいたルーリッド村に生えていた、ギガスシダーという樹にそっくりだとか。

「だからあれを『カセドラル・シダー』と仮の名前をつけた。…キリトが」

「おい、お前も『それでいいんじゃないかね?』とか言つてたじゃないか」

知らん知らん、無視無視。

問題は山積みだ。

混乱する央都の民に、飛竜の件…飛竜の件?

「何それ?」

「ああ、坊主と嬢ちゃんには、まだ知らせてなかったな。実はな、あの樹が出てくる直後、何者かが飛竜に乗って飛び去ったんだよ」

それは…穏やかじゃないな。

凍結中の整合騎士は、何故か浮いてる層の中だし、動ける整合騎士はイーデイス以外全員いる。

つまり…整合騎士以外は乗れない飛竜に、おっさんすら知らない誰かが乗った…ということになる。

「…とにかく、それは後回しだな。まずは混乱する民への対応だな」

それから落ち着きを見せたのは、実に十数日後だった。

## Outside

「志願者？」

「おう、各騎士団や修剣学院の生徒に、募集をかけたのさ。ここ最近、魔獣の発生が急増してるだろ？本来俺たちが対応すべきなんだが……」

「まあ、果ての山脈の警護に、四帝国近衛軍の再編及び、再教練……やるのが山積してるしね」

ベルクーリの召集を受けた優月は、説明を聞いて納得する。

だが、あまりいい顔はしない。

「修剣学院の生徒には、荷が重いんじゃない？」

「だからこそさ。坊主には、学院生の振り分けをして欲しい」

急に荷が重い内容に、優月は少し顔が強ばる。

それと同時に、ある懸念を自身に抱いていた。

「俺、結構シビアだよ？最悪全部ダメにするかも」

「それくらいで丁度いいのさ。まあ、ダメにしたら、他の奴らに再テストさせるさ」

（仕方ないな……引き受けるか……）

優月は状況的に、引き受けるしかないと判断して、始めた方がいいが

「使えねえ……」

あまりの不出来さに、尽く不合格を突きつけた。

(なんだよこれ…学生ってこの程度か？それとも…俺の求めるハードルが高すぎるのか？)

その答えは両方だ。

上級貴族の腐敗さと、優月の求める水準の高さが相まって、なかなかお眼鏡にかなわないのだ。

「…次」

「ろ、ロニエⅡアラベル初等錬士です！よろしくお願いします！」

「て、ティーゼⅡシユトリーネン初等錬士です！よろしくお願いします！」

「はい。優月ⅡシンセシスⅡゼロです。よろしくお願いします」

制限時間は10分。

それまでに優月から合格を貰うこと。

それが条件だ。

「ああ、先に言っとく。剣を抜かせたかったら、抜かせるように頑張って」

優月は木刀だが、それを腰に差したまま、一度も抜いていない。

一方の志願者は、実剣を使用させられている。

これも優月の要求だ。

理由は2つ。

劍そのものに慣れることと、生き物に…人に劍を向ける…その意味を知ってもらおうこと。

この2つを学ばせるために、わざと実劍を使わせているのだ。

「わ、分かりました…！」

「行きます！」

「やあああああああ!!」

2人同時に斬りかかるが、優月は難なく避ける。

避けるが、ある疑問が過った。

(今の劍筋…キリトに似てる?)

そして自身のよく知る劍筋に似ている。

そしてそれは、ロニエが秘奥義…ソードスキルを発動した時に気付く。

「やああああああ！」

(ソードスキル【バーチカル】！)

避けた隙に、横から駆け寄ってくるティーゼは

(こっちは【ホリゾンタル】か！)

こっつちもあっさりと躲しながら、優月は内心驚いていた。

そして、その正体に気付く。

(…なるほど、そういうことか。それに、見込みはあり、だな)

この時から優月の方向性は、審査から稽古に変わっていた。

「はい隙だらけ。獣は敏感だよ？魔獣なら尚更だ」

「は、はい！」

「踏み込みが浅い！素早いんだからもっと速く深く！」

「わ、分かりました！」

「次の判断が遅い！一手出遅れたら命取りだぞ！」

「はい！」

そして残り3分。

「やああああああ！」

ロニエが優月に突っ込む。

その動きを見つつ、何らかの狙いがあることを、優月が悟った時、突然ロニエが左に飛ぶ。

「はあああああ!!」

(【ソニック・リープ】！)

ティーゼの【ソニック・リープ】に、無意識に避けようとして、左からの剣閃に、身

をよじる。

(動きを止めさせるための「ホリゾンタル」…いや！違う！)

未だライトエフェクトが点る、ロニエの剣を見て、これが連続技だと悟る。

(2連撃ソードスキル【ホリゾンタル・アーク】！)

この時既に、2人のソードスキルは、回避不能の距離まで迫っていた。

ゆえに優月は…木刀を抜いて迎撃を選んだ。

「ソードスキル【絶空】」

ロニエの剣をかちあげて、ティーゼの剣と衝突させる。

その衝撃で、ロニエの剣が飛んでいく。

「きゃー！」

「ロニエ!?!…あ」

「隙ありだぜ、ティーゼ」

目前で寸止めされる、優月の木刀。

そのまま座り込むティーゼから、ロニエに視線を向ける優月。

「で？あと一分あるけど？」

「…っ！やあ！」

弾かれたように動くロニエは、砂をつかみ優月に投げる。

「っー！」

「ティーゼー！」

咄嗟に顔を隠しながら距離をとる優月と、その隙にティーゼの前に立ち、ティーゼの剣を構えるロニエ。

その様子を確認した優月は

「…はい、2人とも合格」

そう言つて木刀をしまった。

「え？」

「君たちに紹介したいやつらがいるから、その天幕で待つてて」

そうして優月は、ロニエ達を天幕へと押し込んだのだ。

「さて…次」

その次に現れた女子を見て、優月は直ぐに木刀を片付けた。

「…え、ええつと…」

「うん？ ああ、ちよつと待つてて…こつちに変えるから」

そう言つて優月は、木刀から神器へと持ち替えた。

「さて…優月ⅡシンセシスⅡゼロだ」

「め、メディアⅡオルティナノスです」



「よし、始めるか！」

といいつつも、優月は既に、彼女の合格を思っていた。

見ればわかる、その剣気に、既に凶るべくもなし、そう思っていた。

そして結果は…

「まあ合格だけど、課題もあるな。引き際を心得な。血の気が多すぎる。突っ込みすぎだ」

そう言つて、天幕にて待機するように、言い渡した。

彼女で最後であり、報告に向かった時

「失礼します！こちらで審査を受けるようにと、騎士様に言われたのですが！」

1人の大人の女性が現れる。

紫の服装に身を包んだその女性は、優月を本気にするには、充分な雰囲気があつた。

「聞いてないですけど…名前は何？」

「【ソルティリーナⅡセルルト】でございます！」

(セルルト…【セルルト流】か)

「…わかりました、構えてください」

「よろしく願います！」

優月は前々から、セルルト流に興味があつた。

この世界の格式ばった剣術が多い中、実戦に重きを置く、この流派はいかなるものか。今回、それを改めて実感した。

「いや〜！強いですね！びっくりしました！」

「いえ…その…完膚なきまでに負けると、その言葉も耳が痛いといえますか…」  
肩で息をするソルティリーナと、まだ余裕のある優月。

どっちが勝ったかは明白だが、優月も見た目以上に、余裕などなかった。

（焦った…エルドリエの鞭を見てなかつたら、ワンチャンやられてたかも…。それに見た目に反した重さ…この人、かなり強い）

日頃の整合騎士との稽古が、優月を強くしていた。

改めてそれを実感した優月だったのだ。

side 優月

「騎士長、審査終わりました」

「おう、ご苦労…案の定、かなりふるい落としたな」

まあ、厳しくやると言った手前、妥協は許されないだろう。

丁度そこへキリトたち、幼馴染組が通りがかった。

「小父様、これは一体…？」

ベルクーリは同じ説明を3人にした。

「なるほど…それはご苦労様です、ユヅキ」

「しかし相当削ったみたいだな…いや〜！手厳しいですな〜！優月先生は！」

「やかましいわ、バカキリト。…あ、そうだ。お前とユージオに会わせたい連中がいるんだった。あそこの天幕にいるから、会ってこいよ」

そう言つて2人を送り出し、俺は残りの仕事を片付けようと、自分の天幕に向かおうとする

「おい、ちよつと待て坊主」

「ん？なに？おっさん」

「お前さんの今の仕事は、嬢ちゃんに引き継げ。坊主には別の仕事がある」

別の仕事…？

不思議に思っていると、何故か俺の天幕を指さす。

「お前の天幕に用意してあるから、頼むぞ」

「はあ…じゃあアリス、頼むわ」

「…ええ、任せなさい」

何故か少しだけムスツとしたアリスに背中を押され、俺は自分の天幕に入ると、あの2人…いや、おそらくもつと多くの人間の策にハマったと思った。

つたく…どいつもこいつも…。

「やってくれる…」

「優月君、こつち来て」

「分かりましたよ…アスナ先輩」

部屋にいたのは、アスナ先輩だった。

俺はアスナ先輩に呼ばれるままに、ベッドに腰をかける先輩の隣に座る。

しばらく黙っていると、

「抱っこ」

「ハイハイ」

「…ギョツとして」

「ハイハイ」

甘えん坊になっちゃったのかな？

甘えてくるアスナ先輩の言われるがままに、膝の上に乗せ、抱きしめる。

やがて…アスナ先輩の体が震えだし…泣き出してしまふ。

「私…私…怖かったよ…。目の前で…トラツクに轢かれて…血まみれで倒れて…。何と  
か一命は取り留めたって…。でも、予断の許さない状況って言われて…」

「先輩…」

「なの…こつちでも倒れて…！なかなか起きなくて…！やっと目を覚ましたって思っ

たら……バタバタ忙しそうで……寂しいよ……側にいてよ……！」

「……ごめんね、心配かけて……。大丈夫。俺はここにいるよ」

「優月君……優月君……！」

本当には……先輩には心配をかけたな……。

いや、ミトやみんなにもか。

後で謝らないと……。

しばらく背中を擦りながら落ち着くの待っていると、俺の膝の上から立ち上がって、腰に手を当てながら

「みんなにも謝ってやること……いい？」

そう優しい顔で、外を指さしながら言った。

「……行つてきます！」

「うん！行つてらっしゃい！」

行つてきますと言つたからには、ただいまって言いたい。

行つてらっしゃいと言われたからには、おかえりなさいと言つてもらいたい。

こんなちつぽけで当たり前な、その程度でいいのだ。

その程度のために戦つてもいいんだ。

そのことを教えてくれる、この笑顔が好きなんだ。

「…さてと、まずは姉貴だな」

俺は対策本部の中を、ミトを探して走り出したのだった。

## 閑話休題⑪

outside

対策本部が発足してしばらく、修剣学院近くにある【跳ね鹿亭】にて、2人の男が対峙していた。

「…」

（なんでこうなった…？）

対峙する2人：優月とユージオは2人揃って、困惑していた。

時は少し遡る。

「あ、キリト。少し…」

キリトを見かけたユージオが声をかけようとした時、その隣にいるサチを見て動きを止めた。

リアルワールドから来たサチは、キリトの恋人だと聞いていたユージオは、恋人水入らずを邪魔すまいと、【跳ね鹿亭】の蜂蜜パイを誘うのをやめ、1人で行くことに。

（1人だし、お店で食べようかな）

ユージオは、そのままお店に行き、店内で食べると告げてから注文した。

そしてその後、事件は起きた。

「あの、お客様」

「はい？」

「大変申し訳ないのですが、相席は可能でしょうか？」

（相席？）

ユージオが店内を見渡すと、賑わっており、満席となっていた。

あまり知らない人と話すのは得意ではないが、そこは人のいいユージオ。

断れる訳もなく、相席を同意。

そこへ現れたのが……

「すみません。とつぜ……ん？ユージオ？」

「いえ、おきに……え？ユヅキかい？」

同じ対策本部の仲間である、優月だった。

そのまま優月を案内した店員は、メニューを尋ね、優月は困ったまま、蜂蜜パイとコ

ヒル茶を注文し、店員が消え、冒頭に繋がる。

「ええつと……悪いな、ユージオ。相席しちゃって」

「い、いや大丈夫だよ。知らない人じゃなくて、ちよつとホツとしたよ」

2人はぎこちなく会話を始めたが、すぐに止まってしまう。



(き、気まずい……！)  
というのも無理は無い。

2人の初対面は、殺しあつた敵同士。

アドミニストレータの前では、共に轡を並べる味方として、何より戦闘中だったので、そこに気をつけてる余裕が無かつた。

(サシで話したことないぞ……どうしよう……!?)

(2人だけっていうのは初めてだよ……どうしよう……!?)

2人とも、ぎこちなさを隠すことが出来ないほど、緊張していた。

お互い何を話すことが出来ず、長い沈黙の中、2人の商品が運ばれて、店員が引いていく。

そんな時、ついに優月が覚悟を決めて、口を開いた。

「……正直に言うよ。ユージオ、俺はお前が羨ましい」

「え？羨ましい？」

「ユージオは、俺の知らないキリトの2年を知っている。しかもあのボツチ……人付き合  
いの苦手なキリトが、あれほど信頼して、相棒なんて言いながら話すのなんて、初めて  
見たしな」

優月がキリトといると、いつも決まってユージオの話になる。

ユージオがああだとか、こうだとか…いつもユージオの話が続けるのだ。

「なんというか…あいつの一番の友達枠は俺だと思ってたから、ちよつと寂しいかもな」  
そう言つて浮かべる苦笑いに、ユージオは思わず

「…それは僕もだよ」

「え？」

そう呟いていた。

「僕も、君に知っているリアルワールドのキリトを知らない。いつも無茶はするし、予想のつかないことをするし、いくら止めても言う事聞かないし…」

「…ゆ、ユージオ？」

「でも、あいつはいつもみんなの話をするんだ。特に多いのが、サチとユヅキ…君たちなんだよ。俺の兄弟分だ、なんて言いながら、いつも君の自慢話をするんだ」

ユージオがキリトといると、いつも決まって優月たちの話になる。

サチとがどうだとか、優月はああだとか…。

「だから僕こそ、友達としての一番は僕だと思つてたから、君が羨ましいんだ」  
そう言われた優月は、驚いた後に、小さく笑つた。

「…なんだよ、俺たち似たもの同士か？」

「みたいだね。ふふ」

2人は笑いあつてから、優月はコヒル茶を一口飲んで、真面目な顔で口を開いた。

「…ユージオ、お前に言わないといけないことがある」

「なんだい？」

「アリスのことだ」

その瞬間、ユージオも真顔になり、2人は真剣な目をお互いぶつけ合う。

「お前が、かつてのアリスを取り戻したがつてるのは知つてる。そのために、あの塔を登ってきたのも知つてる。だけど…」

「君のアリスは今のアリスだ…と言いたいのかい？」

先んじてセリフを取ったユージオに、優月は頷く。

「…なら何が言いたいかわかるな？」

「うん。…僕たちはいずれ、互いのアリスのために戦わないといけない。…そういうことだね」

ユージオにとってのアリスは、ルーリッド村で共に過したアリス。

ユヅキにとってのアリスは、カセドラルで出会ったアリス。

お互いにとって、かけがえのない存在なのだ。

故に2人の男は、互いに剣を向けないといけない。

そう直感しているのだ。

「ま、それはまだ当分先だ。いただきます…ん！美味しいな、これ！」  
「分かるかい？キリトも好きなんだ、これ」

そのまま2人は、主にキリトやアリスの話をしながら、蜂蜜パイを食べつつ、話し込んでいく。

最初の重苦しさは嘘のように、まるで長い付き合いの友のような気軽さで話している  
と

「あー！いた！優月！ユージオ！」

「こんにちは、サチ。どうしたの？」

「サチ？そんな血相変えてどうした？」

キリトの手を引いたサチが、2人の前に現れた。

当の手を引かれている本人のキリトは、困惑した様子で、目を泳がせていた。

「お前…まあ、その辺の女引っ掛けたのか？」

「ほんと…キリトは相変わらずだね…」

「ひ、人聞きの悪いこと言うな！そうじゃない！」

「大変なの！キリト、まだ記憶が治ってないかもしれない！」

「…え？」

sideキリト

「それでは【キリトの記憶の回復が完全じゃないかもしれない会議】、始めるわよー」  
なんでこうなった…？

俺は俺の天幕の中で議論される、【キリトの記憶の回復が完全じゃないかもしれない会議】を、頭を抱えながら眺めていた。

事の発端は数時間前、サチとのデートの時に起きた。

露天で売られていた服に懐かしさを覚えるサチに、俺はまるで思い出せず困っていた。

やっとの思いでペアルックで買ったのだと思い出した俺だったが、肝心のその理由が思い出せなかったのだ。

「…優月君、ちよつと」

「え、先輩？」

アスナにズルズルと引き摺られる優月を見送り、会議はそのまま続いていく。

「お兄ちゃん!?! 本当なの!?! まだ完全に思い出してないの!?!」

「それが…まだそうと決まったわけじゃないの。たまたま忘れてただけかもしれないし

…」

「そ、そうぞぞ！ たまたますつぽ抜けてただけだつて！」

リーファ…：スグの言葉に曖昧に返すサチに便乗するように、俺も問題ないと畳み掛け

る。

「でもそのたまたまが、恋人との思い出を忘れるかしら？」

「確かにそうですね。それでは軽薄と言わざるを得ない」

「そ、そうだよね……」

しかし俺の反論は、ミトとアリスに否定される。

しかもサチまで、その意見に飲まれてしまう。

そこへ優月とアスナが戻ってきた。

「アスナ。優月はどうだった？」

「うん、問題ないよ。ほぼ覚えてたから」

「買った店の店員まで覚えてませんよ……」

それは……無理だろう……。

アスナのムチャクチャな質問に、思わず優月に同情してしまう。

「まあそれはともかく……今回優月君やキリト君の意識の取り戻し方がかなり特殊だし

……。サチが心配になる気持ちは私も分かるよ」

くっ……そう言われると、反論出来ない。

恐らく優月もそうだが、俺自身問題ないと断言は出来ないのだ。

「特殊って……セルフイメージの回復ってこと？」

「そう。2人は私たちのイメージや記憶を元に、意識を取り戻したでしょ？優月君の場合、姉のミトや長い付き合いの私、こっちで一緒だったアリスがいたから良かったけど……」

「あくまで私たちが知っているキリトは、SAOから……それ以前が怪しいってこと？」  
サチの言葉にアスナは頷く。

「というかアスナ……なぜ長い付き合いの部分強調した？」

「アリスがすごい目で睨んでたぞ？」

「でもリーファがいるじゃない」

「確かにそうですけど、私もしばらく疎遠だった時がありましたし……」

ミトの言葉を、他ならないスグ自身が否定した。

「まずいな……大事になってきた……」

「とても物忘れだなんて言えないぞ……!？」

「でも忘れてたのは、サチとのペアルックだけでしょ？だったら単なる物忘れじゃない？キリトだし」

「まあ……確かにそうだよな……キリトだし」

「俺だしってなんだよ!？」

とはいえ、シノンの助け船に優月が同意してくれたことで、流れが少しずつ傾いてく

る。

このまま終わってくれれば…

「でも私も、気になることがあるんです」

「リーファさん!？」

「ここでまさかの義妹からの裏切り!？」

「一体何を…!？」

「何よ気になることって?！」

「なんだかお兄ちゃん、すごくしつかりしてる気がするんです!！」

「…え?！」

「どういうこと?！」

「それって怪しむところなのか?！」

「うん。それは私も思ってた。キリト、1人でなんでも出来るようになってたし、私の知ってるキリトとは少し変わってるもの」

「いや…サチ? その怪しむ目はなんだ? それに、それはこの2年で俺が成長した証なのでは?！」

「喜ばしいことであって、心配されることでは無いと思うが…?！」

「いえ、かなり心配だわ」



「リズ!？」

「まあ、ユツキやシノンの言う通り、大切な思い出を忘れたというのは、キリトラしいと言えますが…。確かに元々のキリトの部分が無いというのは、心配にはなりますね」

「アリスまで!？」

2人のあまりの言いようにガツクリしていると、今まで黙っていたユージオが口を開いた。

「確かにキリトはここにいるし、まさか本物のキリトじゃないってことはないと思うよ」  
「ユージオ…!」

ほら、ユージオもこう言ってるし、みんなが心配することはなにも…

「でも、君が大切な思い出を忘れてるかもしれないのは、ちょっと寂しいな」

「ユージオ…!？」

「やっぱりそう思うわよね、ユージオ」

…どうやらここに、俺の味方はいないらしい。

俺はついに諦めた。

そう思っていると、またもやリズが変な提案をしだした。

「こうなったら確かめるしかないわね!」

「確かめるって…どうやって確かめるの?」

アスナの問いに案を出したのは、シリカだった。

「あ、あの！ だったらゆっくりお話するのはどうでしょうか？」

「あ、それ名案だね、シリカちゃん！」

「いや、案はいいが、俺たちにそんなゆっくりしてる時間ないぞ」

「ええ。常に人手不足な対策本部ですし、カラントを斬れるキリトは当然、最前線に立つてもらわなければなりません」

「キリトだけじゃなくて、私たち自身も最前線に出ないといけないしね」

シリカの提案を、優月とアリスとミトが否定する。

確かに少しでも人手が欲しい今の俺たちにとって、時間は少しでも有効活用したい。

そうゆっくりしてられないというのは、事実だ。

「だからこそ、時間の有効活用よ！」

「…どういうこと？」

「夜！ 寝る前にちよつと話す程度でいいのよ！」

…はあ？

寝る前？

「いや、それ寝落ちしたらどうすんだよ」

「寝ちゃえばいいじゃない」



「優月!? 言い方を考えてくれ!」

優月の怪しい言い方に、鳥肌が立つ。

そして、ユージオの純粹さを忘れていたよ…。

「仕方ありません。私も協力しましょう。ありがたく思いなさい」

などというアリスの一言で、全てが決まってしまった。

そして記念すべき(?) 第一弾は…

「おっす」

「邪魔するよ、キリト」

「早速始めましょう」

優月、ユージオ、アリスの3人だった。

## 閑話休題⑫

side 優月

「キリトの記憶の回復が完全じゃないかもしれない会議」という茶番の日の夜、第一弾として俺たち3人が務めることに。

「一気にやるのか?」

「初めての試みだし、色んなパターンをやっつけていこうという訳さ」

とはいえ、俺たち全員に共通してる話題なんて、全くないから、適当に振り返りをすること。

「どこから振り返る?」

「ユツキとキリトの出会いは、どうだったのですか?」

「俺たちの出会い…か」

あの時は初めてのフルダイブに、感動していたのを覚えている。

そこで、路地裏へ走っていく人影を追いかけて、そこでキリトと会ったんだ。

「キリト、あの時もう一人いたけど、誰だか覚えてるか?」

「忘れるかよ。クライんだ」

よし、そこは覚えてるな。

その後3人で狩りをして…そして、あのデスゲームに囚われたんだ。

「へえ。じゃあユヅキも、キリトの弟子なんだ」

「まあ、ある意味そうなのか？」

「今ではキリトとは、随分と剣筋が違っていますよね」

「そこは優月なりの事情があつたからな。詳しいことを話そうとすると、夜が明けるから省略するけど」

「それにそもそも武器が違うしな」

そのまま話を続け、ちようにいい問題があつたことを思い出す。

「第2問、2層であげたチェーンリング、俺とお前のそれぞれの効果は？」

「ああ…何だったかな…？あの時は…優月は確かSTR…筋力値だよな」

「正解。お前のは？」

「ええつと…VIT…天命値だな」

「正解。なんだ、ちゃんと覚えてるじゃないか」

そのままどんどん掘り下げていき、あらかた出尽くした所で、次はユージオのターンに。

「じゃあ僕だね。第1問、僕とキリトがあつた場所は？」

「ギガスシダーだろ。それはいくら言っても忘れないさ」

「むしろそれを忘れたら、ユージオにとっちめられるな」

「ですね。今後キリトとの付き合い方を、考えなくてはなりません」

「なんか俺の扱い酷くないか!？」

などと脱線させながら、どんどん掘り下げていき、ユージオとの話も全部終わる。

「うん、問題なさそうだね」

「やっぱただの物忘れか？」

「だとしたら薄情者ですね」

「アリス…？俺に恨みでもあるのか…？」

すっかりグダグダになった話し合いは、コヒル茶を片手にゆったりとした時間を過ごしていた。

「ところで気になってたんだが…その枕とクッションはなんだ？」

キリトは俺たちが持ち込んだものが、気になったらしい。

確かに俺たちはそれぞれの天幕から、枕とクッションをありったけ持ってきた。

「んなもん、決まってるだろ？」

俺は空になったコヒル茶の入ってたポットをどかして、ゆっくり振りかぶった。

「おま…まさか…!？」

「枕投げじゃー!」

「もがっ!」

そのままキリトに全力投球。

その光景に呆然としているユージオとアリスは放っておいて、俺はクッションをもつて身構える。

むくつと起き上がったキリトは、そのままその枕を掴んで振りかぶる。

「やったな……この!」

そうして投げた先は…

「ぼぐっ!」

ユージオだった。

恐らく僕と言いたかったのだろうが、枕が当たり、変な声を出した。

「ゆ、ユージオ!?! あなたたち、何をして…!?!」

「隙あり!」

「ひゃあ!?!」

隙だらけだぜ、アリス。

俺はアリスの横顔に、思いつきクッションを投げつけた。

「…いいでしょう。それがお望みな!?!」



「アリス、隙ありだぜ」

俺の方を振り返ったアリスの頭に、キリトが枕を投げつけた。

「…キリト！」

「俺だけガチギレ!?!」

「よし! 一気にキリトをぶっ!?!」

「僕もやるよ! ユツキ！」

「やったな、ユージオ！」

そのまま俺たちは枕投げ大会を始めた。

もうとにかく滅茶苦茶で、大騒ぎで、すごく楽しかった。

「キリトー!」

「ユージオ! 行くぞ!」

「うん! やっちゃおう!」

「俺だけ狙いすぎだろ!?!」

キリトへの集中砲火でボコボコにしたり、その隙にアリスを狙ったり、その隙をユージオやキリトに狙われたり、アリスに枕を叩きつけられたり…。

「いや、枕は投げろ! 叩きつけるな! ふーふう!?!」

「ゆ、優月 (ユツキ) ー!?!」

「さあ…次はどちらですかー」

今…枕から出る音じゃなかったぞ…!?

あまりの勢いと力に、俺はぶっ倒れる。

それ以降はどんどんと投げ合いから、叩きつけ合いに変わっていき…最終的に勝ったのは…

「ふっ、当然です」

アリスだった。

あのクソゴリラめ…うごっ!?

「今不遜なこと考えましたね」

サイコメトラーか…!?

そんな時、不意にキリトの天幕が開いた。

「あなたたち、いつまで騒いで…ぶっ!？」

「「…あ」」

ユージオが投げた枕が、入ってきたミトの顔にぶつかったのだ。

全員の動きが止まり、徐々に天幕内に冷たい空気が流れ出す。

当然発生源は、ユージオの青薔薇の剣ではなく、ミトだ。

「…ふう」

一息ついて落ちてゐる枕をはし掴むと、まず一番近かった、アリスに叩きつけた。  
「もぐっ!!」

「あ、アリスー!!」

「やかましい」

叫ぶキリトに、流れるような一撃。

「ぶはあ!!」

「ぎ、キリト!!」

「あんたもよ、ユージオ」

さららにぶつけたユージオにも、しっかりと枕を叩きつけて、3人をダウンさせる。

「み、みんな……!」

「さて、最後よ、優月」

そう言つて構えるミトの手には…何も持っていない。なかつた。

その代わりに、その手はしっかりと握りこまれていて…

「え? ええつと…姉貴? 嘘だろ…?」

「さあ? どうかしら?」

「いやいやいや、待つて待つて待つて! お願い待つて、姉貴、姉上、姉様、姉さん、お姉ちゃん!」

「問答無用」

それ以降の記憶が無い。

ただ次の日の朝、4人揃ってミトに怒られたのは、ご愛嬌ということだ。

## 南帝国 第1話

side 優月

数日が経ち、会議中のことだ。

【サザークロイツ南帝国】のウォーミア緑地にて、新種の魔獣が確認された。

南帝国は温暖な気候で、央都の近くなら、熱帯林位で済むが、南下していくにつれ、砂漠地帯になっていく。

「今回は央都の近くだから、急な雨に気をつければ大丈夫なはずだ。それと、俺が旅した時に書いてた地図だ」

「ユツキが書いてくれた地図は、鮮明で分かりやすいのよ。ありがとう、ユツキ。助かるわ」

「え…あ、はい！」

フアナテイオさん…急な女口調はやめてほしい…。

ついていけない…。

「優月君？」

「勘違いです。決してやましいことはありません」

「あら、夜中に夜食作ってくれたり、色々してくれたたじやない。お世話になってたわ、本当に」

「そう思うなら、火に油注がないでくれます?」

「あく…その…アスナ…?我々も戸惑っていますから、その辺にしておいては…」

アリスの援護射撃のおかげで、やっと治まった先輩の嫉妬。

ふう…困ったもんだぜ、副騎士長様には。

「とにかくだ。央都以外にも被害が出だしたが、学生などは当然出せん。そして俺たちもここを早々離れる訳にはいかねえ。イーデイスを中心に、暗黒界への警戒もあるしな。…すまねえが、お前さん方で頼めねえか?」

というわけで、俺たちリアルワールド組+アリスとユージオで、この事態に対応すること。

各自で用意をしていると

「いた!おーい!ユヅキ!」

「うん?ユージオ?どう…うお!」

「少し来てくれ!」

何故かズルズルと、ユージオに引っ張られていくことに。

そこにいたのは、キリトとアリス。

「なるほど…あの入って、ユヅキのことですか」

「…そうだ。優月だつて、なくてはいけない人だな」

一体何の話だよ…？

「僕達は昔、ある約束をしたんだ。その約束を今再び…今度は君も一緒に」

それは…お前たち幼馴染たちの…。

「いいんだよ。俺とお前は兄弟分だぜ？ だったら、一緒にやないと、おかしいだろ？」

「…バカな連中」

そう言つて合わせている3つの拳に、俺も4つ目の拳を合わせた。

「よし！ 約束だ！ 俺達4人は、産まれた時も、死ぬ時も一緒だ！」

「うん！ 約束！」

「ええ、約束しましょう」

「ああ！ 約束だ！」

「「「おー！」」」

outside

「へえ…随分と変わるんだな」

「これを4つ見ると、気候がどうなつてるのか、謎すぎて頭痛くなるぞ。…さて、まずは

ロナールの養蜂場に行くか」

優月たちは道なりに進み、目的地に着いたのだが、そこには魔獣の影も形もなく

「そもそも、人里に出る方が、珍しいんじゃないかしら？」

「たしかにそうよね。リアルワールドでも、出没したら大騒ぎになるし…」

シノンとミトの話聞きながら、優月は獣の痕跡を探す。

「…優月さん、これって…」

先に気が付いたのは、シリカだった。

よく見ると四足歩行的な生き物の足跡が草花を押し倒して、ある方向に進んでいた。

「…こつちか。進もう」

その先には、デカい実のようなものをつけた、植物が生えていた。

「花…?」

「なにこれ?」

近付くと、不穏な気配を感じた。

（この感じは…まさか…!?)

「優月！来るわよ！」

リズの声に優月はハツとして、剣を抜くとそこにはパンサーのような獣が。

飛びかかってきたのを軽くいなして、逆に斬りつけるが

「ダメージ薄いな…」



存外タフらしい。

彼らはそれぞれ囲い込みながら、削っていく。

「ハッ！アスナ！」

「はあああ！」

ミトの一撃に怯んだ魔獣を、アスナの一突きが仕留める。

「…みなさん、強いんですね」

「ま、伊達や酔狂でここまで来てないからね」

ミトとアリスの話を聞きながら、優月はキリトに尋ねた。

「キリト…これって…」

「ああ…アドミニストレータの心意を感じる…しかもこれ…」

「うん。神聖力を吸収してる…ギガスシダーと同じ能力だ」

つまりこの花は…アドミニストレータと関連がある、ということだ。

とにかく下手に触る訳にもいかない。

とにかく他にも探すことに。

その結果

「あそこにも…」

同じものをもう一つ見つけた優月たちは、その花を精査して絶句した。

「そんな…これって…」

「ま、魔獣！」

「この花、魔獣を育ててるってことですか!？」

この事態を一番重く受け止めたのは、優月とアリスの整合騎士たちだ。

（本来、魔獣は私たちの仕事です。ですがそれが追いつかないから、志願者を募った。ですが…魔獣を相手するには、まだ力が足りない）

（そしてなにより、この花からはアドミニストレータの心意が籠ってる。この世界の奴らは、あいつに逆らえない。剣を向けるなんて論外だ。そしてそれは…整合騎士も例外じゃない）

つまりこの花を切除出来るのは、優月たちリアルワールドの人間と、自分の意思で禁忌目録に背けるユージオとアリスだけだ。

（圧倒的に人手が足りない…どうする…）

「優月君!!」

そんな優月に、大型の魔獣が牙を向ける。

アスナたちが悲鳴をあげ、ミトとキリトとユージオが駆け出し、アリスが剣を抜き、シンロンが弓を引く。

そして誰よりも速く、桜の花びらがその魔獣を、真つ二つに斬り裂いた。

その花びらは、魔獣が撒き散らす血からすら、主を守るように舞い散る。

「エンハンス・アーマメント」

優月の【武装完全支配術】だ。

そして術を解き、そのまま鞘にしまいながら、振り返る優月。

「みんな、一度カーディナル……と……？何その顔？」

「もう！もう！もう!!」

「あんたねえ……」

「勘弁しなさいよ……」

半泣きのアスナと、呆れるミトとシノン。

「よ、良かった……」

「し、心配しました……」

「私も……腰が抜けちゃいました……」

「ふっぎけんじやないわよ！」

腰が抜けてへたり込むサチとシリカとリーファと、怒るリス。

「……本当に……お前つてやつは……」

「あ、あはは……今のは僕も焦った……」

「……ユツキ……貴方は……」

苦笑いのキリトとユージオとアリス。

全員の反応に

「いや、なんでさ」

不思議そうに首を傾げる優月だった。

side 優月

カーディナルを呼び、改めて調べてもらった結果、やはりアドミニストレータの心意を感じられた。

それはいいのだが…

「ええつと…花とか植物とか実とか…何か名前を統一しないか？」

キリトの言う通り、流石に呼び方を統一しないと、まともに調査も出来ない。

「たしかに…何か案はあるかい？」

「ミニシダーでいいんじゃないか？小さいし」

「はい、他にある人ー？」

「無視かよー！」

俺とユージオはなかつとことにして、さっさと次の意見を求めた。

だつて…いくら何でも酷すぎる…。

「じゃあ、【カラミティ・プラント】はどう？」

「なるほどね…カラミティは厄災、プラントは植物ね。流石はアスナ！いいセンスだね！」

たしかに、これなら意味も通じやすい。

「でも、少し長くない？」

「だったら、略して『カラント』にするか」

リズの言葉に、俺は略称をつけた。

もちろん略したのには意味がある。

「いや…それだと…何か…」

「せっかくのセンスのいい名前が台無しじゃない」

「俺はいいと思うぜ。軍として動く以上、簡潔で分かりやすい名前ってーのは、定着させやすいんだ」

というしつかりとした理由がある。

おっさんのおかげで、呼び方が固まったところで、次の問題。

「これを切れば、魔獣の発生を抑えられるでしょうか？」

「恐らくの。じゃが、これを切るには、相当な心意がいるじやろう。キリト、ユヅキ。試しに切ってみよ」

「わかった」

俺たちは心意を込めて、カラントを両断した。

「ふう…少し疲れるな、これ」

「だな…これがまだあるのか…」

「上出来じゃ。じゃが、これを全員が出来ると思うかと言われれば、難しいじやろうな」  
「だな…俺たちにや無理だ。最高司祭の悪行を知ったとしても、俺達には敬神モジューバイエティルがある。心の底から敵視できない以上、心意を練ることは不可能だ」

カーディナルと一緒に来ていたおっさんが、俺の予想通りの答えを口にする。

やはりか…。

「俺たちだけでやるしかない…そういうことか」

「だろうな。その間俺たちは魔獣の被害を抑える。だから、飛竜は俺たちで使わせてもらうぜ」

とはいえ、闇雲に探す訳にも行かないため、今は一度戻り、しっかりと報告と用意を整えたから進むことになった。

だが用意を整え直して、いざ出発となった直前

「はあ？【ベクタの迷子】が多発してる？」

などという、よく分からない噂を耳にするのだった。

## 南帝国 第2話

outside

「ええ、最近あちらこちらで、多発してるらしいのです」

優月の素っ頓狂な声に、アリスと不思議そうに呟く。

【ベクタの迷子】が多発なんて事態、初めて聞いた話なのだ。

「…とにかく、南帝国に向かおう。もしかしたら、その【ベクタの迷子】にも、会えるかもしれない」

こうして一行は、再び南帝国に向かったのだが

「まさかマジで会うとは…【ベクタの迷子】」

まさか本当に遭遇するとは、優月は思ってもいなかった。

何でも村で狩人を天職とするものが、2人現れたらしく、1人は昔からこの村で狩人をしてきたのだが、最近になってもう1人現れたのだ。

「こんなこと、初めて聞いたよ…」

優月は【ベクタの迷子】を、リアルワールドからのプレイヤーだと思っていたが、どこか様子がおかしいように感じた。

(俺やキリトのように、リアルワールドのことを知らない?…いや、俺たちがおかしいのか)

しかしさらに不可解な事が、目の前で起きた。

メデイナの高圧的な態度に、「ベクタの迷子」が怒り、メデイナを突き飛ばした後のことだった。

「…悪かったよ。俺が間違っていた。大切なことに気付かせてありがとう。あんたは…救世主だよ」

「…え?」

突然人が変わったように、メデイナを救世主と崇めだしたのだ。

その様子に、優月は胸騒ぎがした。

「…優月君、大丈夫?」

「優月、何かあった?」

「…いや、なんでもない。ありがとう、2人とも」

アスナとミトは、優月の不安を感じとったのか、少し心配そうに覗き込むが、それを優月は心配ないとはぐらかす。

というより、優月自身も漠然としていて上手く伝えられないのだ。

「…とりあえず、イザコザは丸く治まったのか?」



「多分……」

みんながメデイナを褒める中、どうしても違和感を拭いきれない優月。

その後、村長に話を聞くと、水路が魔獣によつて塞がれてしまい、「ウイゼアの谷」に行けなくなつてしまったと話を聞いた優月たちは、その魔獣を討伐することに。

「そして花の蔦が水車に絡まつてる……か」

「カラント、だね」

優月たちが水車の方に向かうと、たしかにカラントがそこにはあつた。

「よし、斬るか」

そういったキリトが、カラントに近付いたその時、突如地響きが響き渡る。

「キリト!?!」

「サチ!下がれ!」

キリトが直ぐに飛び退いて、サチの前に立った時地面から突如、巨大な花の魔獣が飛び出して来た。

「これは……!?!」

「総員、警戒態勢!・戦闘開始!」

アリスの一声と共に、斬りかかる優月たちなのだつた。

sideキリト

「フッ…」

まず先手を取ったのは、唯一遠距離武器である、弓を持つシノン。

シノンはハイレベルアカウントの、「弓ハンター使い」である。

特性としては、矢の無限生成や動物力テゴリーに対する、バフがある。

シノンの一射は花の真ん中を撃ち抜くが、怯んだ様子も見せない。

「タフね…」

「システムコール・ジェネレート・サーマルエレメント・フォームエレメント・アロー  
シエイプ・デイスチャージ！」

次はサチの神聖術だ。

サチは「神官プリースト」というハイレベルアカウントで、直接戦闘が不得手な分、神聖術への高い適正がある。

「行くわよリーファ！」

「ミトさん！合わせて！」

「ハアアアアアアアア！」

ミトの鎌とリーファの剣の一撃が、魔獣の蔦を切り刻む。

ミトは「戦士」のアカウントであり、リーファは「剣士」だ。

2人の特性はよく似ており、高い攻撃力とタフさが売りだ。

「…皆さん！この魔獣は球根が弱点です！」

シリカは【賢者】。

その知識を武器に、俺たちをサポートしてくれる。

「クッ！」

「ミト!?!大丈夫!?!」

「ええ…リズが作ってくれたプレートのおかげよ！ありがとう！」

リズは【鍛冶屋】というアカウントであり、シリカ同様戦闘に直接作用するものではないものの、俺たちを守ってくれる武器を作れる。

「スイッチ！アスナさん！」

「セヤアアアアア!!」

閃光一閃。

アスナの一閃が、魔獣の球根を貫く。

アスナは【聖騎士】のアカウント。

こつちの上位騎士と似たようなものらしい。

「…凄い…」

「これが…アインクラッド流の戦い方…」

今回、アリスとユージオには、手を出させずに見てもらおうことにした。

2人にアインクラッド流の戦い方を、知ってもらいたかったのだ。

そのまま彼女たちだけで、魔獣を討伐した俺たちは、カラントを斬って、村長に報告。そのまま村を出て、次の「ウイゼアの谷」に向かおうとした時

「…ん？アリス、この音は…」

「ええ、飛竜ですね。何があつたのでしょうか？」

優月とアリスが、飛竜の羽ばたく音に気がつく。

2人はそのまま伝令に來た騎士から、要件を聞いている。

その様子を、アスナとミトがぼんやりと見ていた。

「どうした？2人とも」

「いや…なんというか…」

「優月君、この世界で立派な騎士になつてゐるんだなあつて…」

なるほど、身近にいた彼氏・弟が、随分と遠くに行つたと思つてるのか。

「あいつは…優月は、何も変わつてないぞ」

「「え？」」

どこにいても、優月は優月だ。

誰かのために剣を握り、齒を食いしばって立ち上がる。

それをワガママだと言いながら、それでもそれを貫く男。

それがあいつだ。

「…指令、たしかに受け取りました」

「ご苦惱さん。気をつけろよ」

伝令に來た騎士を見送り、俺たちの元に戻ってくる2人。

「ベルクーリ閣下より、魔獸の討伐命令が下りました」

「被害が出る前に、早めに向かおう」

そういう優月の目は、どこまでもまっすぐだった。

俺たちは指令のあったポイントまで來たが、先にいた「ベクタの迷子」の集団が、討伐してしまつたらしい。

「私の武功が…」

家の名誉挽回のため、武功を立てたがっているメディナは、不服そうに呟く。

「悪いな、お前らの獲物をとつちまつて」

「いえ、構えませんよ」

「構うに決まつてるだろう！」

「おい、メディナ。前にも言ったが、血の気が多すぎる。落ち着け」

怒るメディナを、優月が冷たく抑え込む。

それを見た「ベクタの迷子」たちが、代わりに更に奥にいる、彼らすら倒せなかった

魔獣の情報を提供してくれた。

その時、条件として彼らも同行させて欲しいと言ってきた。

カラントが生み出す魔獣は、かなり強力だ。

そんな魔獣を倒す人達すら、諦めた魔獣なら、協力した方がいいかもしれない。

「協力か…」

メデイナはあまりいい顔しないが、優月がそれを理屈で宥める。

「…どうか優月…不機嫌？」

「…多分、コーバッツと重ねてるのよ」

ミトが俺に耳打ちしてくれる。

…そういうことか。

となると気をつけた方がいいかも…優月はいざとなったら、恐らくメデイナを見捨てる。

もちろん、最大限守ることを諦めず、足掻くだろうが、その果てに不可能だと思つて切り捨てるだろう。

「…仕方ない、一時共闘だ」

メデイナが折れた事で、俺たちは彼らと共にその魔獣の元に向かうと、そこには複数の蜘蛛型の魔獣がいた。

「ハハ！直ぐに功績に変えてやる……！」

「行くぞー！」

そのまま俺たちは戦闘に入る。

数と力の差で一気に押し切った俺たちは、特に苦戦することなく、魔獣を討伐した。

そしてメディナ、ハイタッチをしている彼らを不思議に思いながらも、同じハイタッチをした時、

「……また、あんたと戦えることを祈ってるよ、救世主様」

「き、救世主？何を言ってる？」

……まただ。

またメディナと接触した人物が、メディナを救世主と言って崇める。

その事に疑問を思いつつ、先に進もうとすると

「待って2人も。先に近くの村で物資の補給と、休憩をしようよ」

ユージオの提案に従い、1度村に戻ると

「悪いけど、『サステイラの村』に伝言を頼めねえかな？」

村長から他の村への伝言を頼まれてしまった。

「優月、サステイラの村って？」

「砂漠地帯にある村だ。しっかりとした用意を整えないと、村に着く前に死ぬぞ」

砂漠超えは、相当危険だ。

できる限りの用意を整えないと、かなり危険である。

実際に旅をした優月が言うのだから、間違えないだろう。

「分かりました。任せてください」

こうして俺たちは、旧山道を使ってサステイラの村に向かうことになったのだった。



## 南帝国 第3話

side 優月

すっかりと休息を取った俺たちは、旧山道を進みながら、サステイナの村を目指した。

旧山道と言うだけあって、整備がされておらずかなり進みにくい道だが、何とか砂漠地帯に差し掛かった。

「さて…各自砂よけはつけたな？それと、砂漠地帯にあるサボテンは、貴重な水分になるが、それに擬態した魔獣もいるから、気をつけろよ」

旅の記憶を掘り起こして、注意点をまとめながら、俺たちは砂漠を進む。

最悪神聖術で水は出せるが、あまり美味しくない。

「くっ…足元が…!？」

「砂に持ってかれるわね…弓を引くのは難しそう…」

「神聖術で何とかならないのかな…？」

「うわあ!?!うう…砂まみれ…」

「仕方ないわね…後で洗ってあげるわよ」

「ひゃ!?!うう…ペッ!ペッ!…私もです…」

「シリカちゃんは私が洗ってあげるね」

後ろの方で女性陣が苦戦してる中、旅慣れしている俺たちは、俺を先頭にキリトとユージオの男組と、その間にアリスとメイナの2人という形で、道を作る。

「あつつい…」

「キリトは真っ黒だしね」

「アリス、その甲冑脱いでくれよ。見てるだけで暑い…」

「なぜそのような理由で、私が脱がないといけないのです」

「アリス様。ですがこの暑さでは、脱いだ方がいいのでは…?」

そんなふうにおしやべりしてる理由があるのは、今ちようど砂嵐が起きてないからだ。

この暑さの中、砂嵐まで起きたら、1人くらいは見失ってるだろう。

そう思いながら、俺は砂丘の上に立ち、目的地を視認する。

「みんな！見えたぞ！」

みんなが砂丘に立ったことを確認して、指を指す。

「あれが、オアシスの近くに作られた村、サスティナの村だ」

こうして更に1時間程かけて、やっと着いた村。

しかしそこで言われたのは…

「え？女の子？」

「はい…数日前に保護した女の子なのですが、記憶がないらしく…」

【ベクタの迷子】が行方不明だという話だった。

マジかよ…仕方ねえな…。

「探してみます」

キリトが安請け負いするし、搜索することに。

背格好はメデイナに近いとのこと。

この女の子、案外早く見つかった。

「まずい…ゴoremだ！」

岩のゴoremに、襲われそうになっていたから。

しかも運の悪いことに

「後ろ！魔獣が…!?!」

この辺をうろついている、獣型の魔獣とのバッティング。

明らかに臨戦態勢になっていた。

「クソ…アスナ先輩、シノン、ミト、シリカはこっち！残りは女の子を！」

素早いこの獣には、速さが売りのアスナ先輩とシリカ、獣に対してバフのかかるシノ

ン、あとはタンクとしてミトを配置。

そのまま両方を相手取ることになった。

outside

「ヤアアアア！」

「ハアアアア！」

アスナとシリカが斬りかかるも、直ぐに躲されてしまう。

「速い！」

「うう…!? 当たりません！」

「足を止めてくれるだけでもいいわ！」

その隙にシノンが狙い撃ちも、それも跳んで躲されてしまい

「ハアアアア！」

その隙をついた優月とミトの一撃も、空中で身を捻るといふ身軽さで、躲されてしま  
う。

「今のタイミングで避けるの…!?!」

まず狙われたのは…シリカ。

「シリカ！ そっち行っただわ！」

「は、はい…：キヤア！」

砂に足を取られたシリカは、そのままコケてしまう。

「シリカちゃん!？」

アスナがギリギリで滑り込み、細剣を盾に防ぐも、力負けしそうになっている。

「シッ!」

「フッ!」

優月は直ぐに刀身を伸ばして、貫こうとするも、咄嗟に気付かれてしまい、跳び避けられる。

更にシノンの追撃も、避けて躲す。

「あ、アスナさん!?!私!?!」

「大丈夫よ、怪我してないから。気にしないで、シリカちゃん」

「みんな、こいつ…」

「相当頭いいわね…」

「こんな魔獣、初めてだ…」

優月はゴーレムの方を相手しているメンバーを見るが、あつちはあつちで硬さに苦戦しているらしい。

「来るわよ!」

「散開! シノンは俺と! シリカはアスナ先輩と組め! 1人で動くな!」

優月が咄嗟にコンピを振り分け、3方向に散らばる。

魔獣が狙うのは…やはりシリカだ。

しかもアスナを無視して、執拗にシリカを狙う。

「な、なんで私ばかり!?!」

「この!…クツ!無視なの!?!」

「アスナ!スイッチ!」

ミトがアスナと入れ替わり、鎌を使い上手くシリカを守る。

「これはどういうこと!?!」

「獣の本能か…あるいは、シリカがあいつを引き寄せる、何らかのものを持つてるか…?」

謎の二択を考えながら、優月達も攻撃を仕掛けるが、中々当たらない。

（一か八か…）

優月は状況を打破すべく、ある作戦を思いつく。

ただし…またみんなに怒られるであろう作戦を。

「ミト!スイッチ!」

ミトと入れ替わった優月は、シリカに襲いかかろうとする魔獣の目の前に立ち、自分に噛みつかせた。

「ぐうううう!?!」

「二「優月（さん）（君）!？」」  
「…ザア!」

そのまま刀身を短くした神器を、喉元に突き刺して、思いつきり横にかつ捌いた。

それにより、やっと大人しくなった魔獣をどかして、肩に仕込んでいた鉄板を取り出す。

「いって…やっぱ神聖術の急拵えじゃ、ダメだったか…」

その鉄板には穴が空いており、優月の肩には血が滲んでいた。

「ゆ、優月君!大丈夫!？」

「うん。見た目より浅いから、それに…ほら」

優月の傷口は、みるみるうちに塞がっていく。

それを見たアスナは、唾然とした顔で、その様子を見ていた。

「【桜刀：舞姫】の特性の一つ、【無限再生】。天命の自動回復が、持ち主にも適応されるんですよ」

「二「…そういうことは、先に言っただけ!」」

「すみません…」

案の定、しつかり怒られた優月は、かなり暑い砂漠の上で、正座させられるのだった。

「キリト、なんだいあれは？」

「…拷問…かな？」

「自業自得だと思ふよ、私は」

その後、助けた少女を連れて、村に戻った彼らは、そのまま村で一泊することに。  
(随分とカラントを斬ってきたが、一向に魔獣の数が減らない…)

優月は1人、ベッドに寝つ転がって月を見ながら、ぼんやりと考え事をしていた。  
このまま進んでも、効率が悪い。

何か手は無いのだろうかと考えながら、優月は少しずつ眠りに落ちるのだった。

side 優月

翌日、村を出た俺たちに

「私に提案がある。気になる場所があるんだ、いいか？」

メデイナの意見に従い、かなり奥の方まで進む。

そこには

「あつたぞ」

「嘘だろ…」

カラントがあつた。

こんな奥地にあるの見つけたなんて…どういうことだ？

しかも、ここまで迷った素振りは見せなかつたぞ？



「メデイナ、どうしてここが？」

「…勘だ」

キリトの問いに、ただ一言答えるメデイナ。

…怪しい。

キリトたちには申し訳ないが、メデイナという人間を知れば知るほど、信用が出来ない。  
い。

どうもこいつを見てみると、コーバッツがよぎるのだ。

「…優月君、大丈夫だよ」

「アスナ先輩…ありがとう」

その後も次々とカラントを見つめるメデイナに、俺はどうにも不信感が募って仕方ない。  
い。

こいつを信じていいのだろうか…？

そう思いながらカラントを見ていると、ふとある事に気が付いた。

「…この根っこ、どこまで伸びてるんだ？」

「たしかにそうですね…少し追いかけてみますか？」

「だな…キリト！少し離れるわ！」

俺は近くにいたりファと一緒に、根っここの伸びてる先を探しに移動する。

しばらく進みそして…

「な、なんですかこれ!？」

「デカイ…カラント…!？」

俺たちが見つけたのは、バカデカイカラントだ。

なんだこれ…まさか…カラントの大元か!？」

「…リーファ、みんなを呼んできてくれ」

「わ、分かりました!」

走り出すリーファを見送り、俺はそのカラントを見つめる。

アドミニストレータ…何を企んでる!？」

その後全員で確認したこれを、「カラミティ・プラント・クラスタ」…通称「カラント・クラスタ」と名付けた俺たちは、一度央都に戻り、このことをおっさんに報告した。

「そうか…。お前さんたち、ご苦労だった。ユツキ、よく見つけてくれた」

「いえ、これを発見に至ったのは、メディナ・オルティナノス殿が、カラントを複数見つけてくださったおかげです。賞賛されるべきは、メディナ殿でしょう」

一応俺として、時と場合を弁えている。

真面目で公的な場では、敬語とか普通に使う。

「そうか…メディナ、よくやった」

「あ、ありがとうございます！このメデイナールオルティナノス！人外の平穩のため、奮戦する所存です！」

俺たちは報告後、一度解散したのだが

「【南の回廊】？」

南帝国最南端、ダーク・テクトリー暗黒界との境目になる【南の回廊】に、異常事態が発生したと報告が上がったのは、すぐの話。

「坊主と嬢ちゃんは、戻ったばかりだしな…エルドリエ、お前さんに任せただぞ」  
「はー！」

こうしてエルドリエが出立してから数日後、俺達も南帝国に戻った。

そこで聞いたのは…

「巨人が出た!?!」

「ああ！身長は俺達の比じゃねえし、持つてる武器が俺たちぐらいあった！全身硬そうな筋肉に覆われていて、あちらこちらに刺青があつたんだよ！」

…マジか…信じらんねえ…!?!

「お、おい！行商人！」

「その巨人は、どこで見たのですか!?!」

俺とアリスで、そう叫ぶ行商人から情報を聞き出して、直ぐに出立の用意を整える。

「ちよ、ちよつと待ちなさい！優月！」

「アリス！なぜそんなに急いでいるんだい!？」

ミトとユージオが、俺たちを止める。

たしかに…冷静じゃなかったな…。

「…私たちは、その特徴を知っているのです。私は見習い時代に、そしてユツキには、私が教えました」

「その巨人は…ジャイアント巨人族ジャイアントといつて、ダーク・テリトリー暗黒界の住人なんだよ」

暗黒界からの侵攻…そう思わざるを得ない状況に、俺たちの緊張感が高まるのだつた。

## 南帝国 第4話

sideアリス

人界で…巨<sup>ジャイアント</sup>人<sup>族</sup>!?

ですが、話を聞く限り、それ以外有り得ない。

【南の回廊】はエルドリエが…!?

「まさか!？」

「落ち着け、アリス。エルドリエがそう簡単に負けるはずがない」

ユヅキの強い言葉が、私を冷静にさせてくれた。

そうだ…彼は、エルドリエは、強い。

巨人族に遅れをとるなど有り得ない。

となると…一体どういう…!?

「とにかく…まずは目撃があつた巨人を探そう」

私たちは他の情報がないか探してみたが、それ以上の情報はなく、仕方なく野営することになった。

翌日、メデイナ殿が手に入れた情報を元に、調査を進めると、

「…いきました。巨人族です」  
ジャイアント

巨人族が、岩のゴレムと戦っていた。

…妙ですね。

「今まで、あんな風に傷つけあうなんて、無かったよね？」

「そうですね…」

「みつけた…オレの新たな獲物…」

思ったより、流暢に話すんですね…。

私はそんな見当違いなことを考えながらも、ゆつくりと近づく。巨人族に、私達も近づ

く。  
 「おい！お前は何をしにここに来た！」

「オレは…ザクザ。力を示すために、兄弟と共にここに来た！魔獣も…イウムも！例外ではない！」

イウムとは、ダーク・テリトリ 暗黒界の人間が我々人界の人々を呼ぶ時に、よく使う言葉だ。

それにしても…兄弟…まだいるというのですか…巨人族が！  
ジャイアント

「さて…やるか」

ユヅキが一步前に踏み出した時、ユージオがその肩に手を置いて引き止める。

「フウ…」

「ユージオ…?」

まさか…一人でやると言うのですか!?

「ユージオ! いけません!」

「アリス! …ここは任せよう。優月も、そのつもりらしいし」

そう言われて、ユツキを見ると、刀を離して、ただ傍観に徹していた。

「ユージオ…」

一体…どうしたのですか…?

sideユージオ

背筋に走るこの悪寒…間違えない。

北の洞窟で、ゴブリンから感じたものと同じ…ダーク・テリトリー暗黒界の人間。

あの時は何も出来ず、キリト一人で戦っていたけど…

「フウ…」

今の僕は…違う。

「貴様からか。捻り潰してくれよう」

そうして放たれる一撃を、僕は何とかいなす。

その一撃は重く、受け流しても骨が軋む。

「くっ…!」

全身に満ちる力から放たれる拳は、とてつもない破壊力だ。

ただ破壊するだけの力…生まれついで凶暴性…これが、暗黒界の住人…巨人族！

「やはり脆い…シネイ！」

「ーいいか、ユージオ。渾身の一撃を放つ時、必ずその部位の筋肉が張り、力が漲る。それこそが攻撃の合図だ！見逃すな！見切れ！」

「…ハハハ！」

僕は巨人の連撃をしつかり見切つて躲した。

ありがとうございます、ゴルゴロツソ先輩！

そして、体格差がいくらあろうと、剣に込めた思いがそれを凌駕すると、ソルティリー先輩から知った。

「はアアアアアアア！」

「ぐおおお！」

これが修剣学院で教わった、基本にして極意！

「お、おのれええええええ！」

「たああああ！」

しなやかで強靱な攻撃…！



でも、エルドリエの鞭の方が、よっぽど強く靱やかだった！

「グオオオオオオ！」

大木を貫くほどの突き……！

でもデュソルバートの矢の方が、強くて速い！

そして……

「スー……」

無駄な力を向いて、一気に接近する。

【青薔薇の剣】が、巨人に当たった瞬間……

「フン!!」

一気に筋肉を締め上げて、力の全てを乗せる！

「ウオオオオオオ！」

ーいいいか、ユージオ。緊張と脱力。これが鍵だ。ただ力を抜く、ただ力を乗せる、そういう訳じゃない。必要な時に、必要な分の力を乗せるんだ。

最初は難しかったけど、最近のコツを掴めた。

ありがとう、ユツキ。

そして……もう終わりだ。

「この……イウムガアアアアア!!……な、なんだ……体が……血が……凍っていく!?!」

「…最強の整合騎士を凍らせた技だ。お前を凍らせるなんてわけない！」  
戦える…！」

僕だってもう、戦えるんだ！

色んな強者…その全てが僕の血であり、肉であり、師なんだ。

そしてそのきつかけをくれたのは、キリトだ。

…ありがとう、みんな。

ありがとう、キリト。

…僕の英雄。

「これで…終わりだアアアアア!!!」

僕の一撃は、巨人の首を跳ね飛ばした。

side 優月

「…おい、キリト。お前抜かれたんじゃね？」

「そ、そんな訳ないだろ!？」

そんな話をしていると、突然ザクザクが何やら喚き出して、壊れたように叫ぶ。

そして…死んだ。

あまりにも不気味な光景に、俺は絶句していると

「アスナ、今のって…」

「うん…フラクトライトの崩壊…だね…」

「…知ってるんですか？」

俺は先輩にそう尋ねる。

簡単にまとめると、自分の確固たる思考に矛盾が生じると、フラクトライトが処理しきれなくなつて、崩壊してしまうらしい。

「そんなもの…どこで知つて…？」

「ここに来る前にね…比嘉さんに見せてもらったの…」

その比嘉とやらが誰かわからないが、サチの顔色を見るに、あまりにいい光景では無いらしい。

まあ、これもそうだったんだ…無理もない。

「…さて、先を急ごう。こいつはずっと、兄弟と言っていた。最低限もう1人いると見るべきだ」

俺たちはエルドリエの安否もあつて、出来るだけ早く移動したが、やはり一泊は野営が必要だった。

「優月君！起きて！ミトも早く！」

「んあ…あすなあ〜？」

「ど、どうしたの!?!アスナ先輩！」

「…メディナ殿がいなくなりました」

…あの…バカ女!!

オルティナノス家の汚名返上を目的としているのは、知っているが、勝手なマネは認めたくないぞ!

「クソ!あのバカ女!たぶん【南の回廊】だ!」

「ああ!急ぐぞ!」

俺たちは急いで移動しながら、メディナの行動が読めずにいた。

「どうして一人で…!?!」

「…一人じゃないかもしれない」

「は?!?!どういうことだ?!」

キリト曰く、何者かと夜更けに接触しているのを、見かけたことがあるらしい。

まさかそいつらと一緒に…?!

「とにかく、メディナに追いつくのが先だ!急ごう!」

ユージオの言葉に、俺たちは可能な限り早く移動して、【南の回廊】にたどり着いた。

その中では、キリトの推測通り、謎の協力者たちとともに、巨人と戦っていた。

「あのバカ…!」

「手を貸すぜ!」

「キリトっ!!…これは私の獲物だ!」

俺たちはそれを無視して、目の前の巨人を倒すことに成功した。

「…さて、どういうつもりか説明してもらおうぞ、メディナ」

「…話すと長くなります。ですが、あのまま私たちだけでも、討伐可能でした。現にユー  
ジオは一人であの巨人を…」

「…あくまで自分に、非は無いと…」

俺とアリス、そしてメディナの視線が、ぶつかり合う。

空気がどんどんと悪くなっていく中、キリトが仲裁に入る。

「優月、ちよつと落ち着けて…。メディナ、俺たちは本当に心配したんだぞ?それにそ  
の人たちは一体…?」

「…これも話すと長くなる」

「そうか…。メディナ達も奥に進むんだよな。だつたら俺たちと来ないか?生存率をあ  
げるためだ」

「…わかった」

キリトのおかげで、特に荒事になる訳でも無く、そのまま巨人を倒しながら奥に進む。  
そして最奥にたどり着いた時

「これは…!?!」

「巨人族同士で、殺しあってるんですか!？」

大広間では、何故か巨人族同士ジャイアントが殺しあっており、そのまわりには大量のカラント。その時シノンが、あることに気が付いた。

「…っ!? 優月! あそこ!」

奥にあるカラント・クラスタよりさらにデカいやつには、ある者が縛り付けられていた。

「…エルドリエ!？」

そう、ここを守っていた、エルドリエⅡシンセシスⅡサーテイワンだ。

「…行くぞ、下も終わったらしい」

俺たちは階段を下り、大広間にて、一体の巨人と相対した。

「我は…ジクジ…我こそが…最強だアアアアア!!!」

「うるせえよ、雑魚が。引っ込んでろ」

俺は【桜刀・舞姫】を抜いて、構える。

「俺はその先に用があんだよ…邪魔すんじゃないやねえ! エンハンス・アーマメント!!!」

【武装完全支配術】を発動した俺は、刀身を花びら状にして、ジクジに向かつて放つ。

「ムダだアアアアア!」

力任せに薙ぎ払われた花びらを、俺はそのまま上から叩きつける。

「グオオオオオオ！」

「魅せろ、舞姫」

俺はそのまま一度刀身を戻して、鞭みたいにする。

そのまま立とうとする腕に巻き付けて

「ふん！」

思いつき引つ張って、引き千切る。

「グオオオオオオ！」

痛みに叫びながら、ジグジは立ち上がり、俺に突撃してくる。

俺は刀身を伸ばして頭を潰そうとしたが、

「ガアアアアア！」

こいつ…俺の刀を口で…!?

だが、これで決まったな。

「乱れ咲け、花たち」

俺はすぐに刀身を花びら状に変えて…ジクジを内側からズタボロにした。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

大絶叫を上げながら、体中から俺の刀身を吹き出すジクジ。

俺はそれを見ながら、刀身を戻して鞘に閉まったのだった。

Outside

「…容赦ないな…優月」

「仕方ねえだろ。仮にも整合騎士だ。ダーク・テリトリ暗黒界の連中に情け容赦をかけるなんて、出来はしねえよ」

キリトのドン引きした声は、この場にいる全員の代弁だ。

その言葉に優月は苦い顔をしながら、己の責務だと言って、腰に差し直した。

「さてと…エルドリエを助けてやろう」

エルドリエの側まで来て、キリトはあることに気がついた。

「優月、これって…」

「ああ…『デイク・フリーズ』だ。だか妙だな…使えるのは、あの最高司祭と肉だるまだけのはず…」

「ええ…。一応、小父様に解除法を教わってますから、少し待つてください」

「まずは、このカラントから切り離さないとね」

そう言つて全員で、カラントを切り払う。

その時、キリトがあるものを見つけた。

「これは…実か？」

「それ、どうするの？」



「…カーディナルに調べてもらおうよ」

キリトとサチが話していると、術が解けたエルドリエが目を覚ます。

「…アリス…様…ユツキ…殿…」

「目は覚めたか？」

「大丈夫ですか？エルドリエ」

目を覚ましたエルドリエは、優月とアリスを見てかは、奥にいるキリトたちにも気がついた。

「なぜ彼らが…」

「貴方を助けに来たのです」

「…助け…？私が…あの者達に…？」

何やらブツブツと呟くエルドリエに、不思議そうにするアリスと優月。

そして、エルドリエが思わぬ行動にでる。

「…師よ。私の無礼な振る舞いを許して頂きたい」

そう言つて、【霜鱗鞭】を構えるエルドリエ。

突然の行動に、全員が驚く。

「エルドリエ!?!何を!?!」

「私はかつて、アリス様の命を達成出来ず、あまつさえ、最高司祭様が倒されるその時ま

で、気を失っていました」

「ですが、彼らは騎士を倒したくて来た訳では…」

「無論、分かっております！ですが！彼らに救われたのは事実です！」

その時キリトが口を挟む。

「つまり…戦いで見極める…そういうことか」

「ほう…貴様にしては、察しがいいじゃないか」

「それじゃあ…その戦い、受けようじゃないか。お相手頼むぜ、エルドリエ」

そう言つてキリトも、臨戦態勢に入る。

「キリト！」

「ユージオ、エルドリエに認めてもらうには、一番これが早い。それに、あの戦いも決着はついてないしな」

「だったら僕も…！」

「ダメだ。俺自身、本気の整合騎士と何処までやれるか、知りたいんだ。だから…俺一人でやらせてくれ」

そう言つて、ユージオがキリトの鎮火に失敗した時、今まで黙っていた優月が口を開いた。

「エルドリエ」

「ユヅキ殿。たとえ止められても、私は…」

「止めねえよ。好きなだけやってこい」

「っ!?!…ありがとうございます」

そう言つてキリトと共に、大広間に向かうエルドリエを見送る優月に、ミトが話しかける。

「止めなくて良かったの?」

「エルドリエが売つて、キリトが買った。だったらもう、この決闘は誰にも止められねえよ。誰にもその権利がない」

「…男の子つてこれだから…」

「ミト…僕にも理解出来ないよ…」

何故かそつちサイドに行くユージオを流し見ながら、優月は戦いを観戦することに。

「…整合騎士、エルドリエⅡシンセシスⅡサーティワン!今度こそ、貴様の意識を刈り取つてやる!!」

「剣士キリト!参る!!」

これからの戦いに、特に大きく語ることは無い。

結論を言えば、キリトはエルドリエを下した。

そして、エルドリエが改めてキリトとユージオを認めたことで、彼らに絆が生まれた

…という話である。

## 北帝国編 第1話

side 優月

俺たちは央都に戻り、おっさんに報告をした。

「なるほどな…まずカラントは、お前さんたちがまとめた話だと…まずは末端のカラント、次にそれらをまとめるカラント・クラスタ、そして帝国の全てのカラントをまとめるカラント・コア…この3つに分かれてるっつーことだな」

おっさんの言葉に、俺たちは頷く。

「そうか…よくやった。カラントの仕組みを解いただけではなく、エルドリエの救出もよくやった。ただ、不可解な点もあった…メディナ、お前さんの力のことだ」

その後メディナの口から語られたのは、ある意味見たまんまの内容だった。

触れた「ベクタの迷子」を、自分の支配下における、そういうものだ。

本人は命令するのではなく、お願いをすと言っているが、そんなものは詭弁だ。

俺はその力に、不信感と忌避感を感じていた。

「…」

それはアリスはもちろん、おっさんも同じだったらしく、顔は少し厳しい。

「…ベルクローリ様？ユヅキ様？」

俺たちの顔を見て、嫌な予感がしたのか、メディナは少し緊張気味に口を開く。

「メディナ殿。2人の懸念は、彼らの意思です」

代表して、アリスが口を開く。

「どういう意味ですか？」

「貴女の力は見方を変えれば、本人の意思に無視にて、相手に服従を強制させるものです。私たちはそれと同じことをした人物を知っています。その者が行った所業を…そして、どのようにして破滅したのかも、知っています。貴女には同じ轍を踏んで欲しくないのです」

「…忠告、痛み入ります」

俺は少し不貞腐れたような様子を見て、まだ不信感を抱いていた。

いつか、取り返しをつかないことをしそうな予感…そんな気がするのだ。

「まあ、俺としちゃ、数が増えるってーのは、喜ばしいことではあるがな。さて、次にお前さんの力そのものへの疑問なんだが…？」

「それは俺から説明するよ。優月、カーディナルから話があるって」

突然現れたキリトとバトンタッチして、俺は天幕の裏に向かう。

「カーディナル、話って？」

「メデイナの件じゃ。あの者には、モジュールが埋め込まれている」  
「…モジュール？」

「なんで、そんなものが？」

そのモジュールは、特定の者に作用するらしく、その特定の者というのが、【ベクタの迷子】らしい。

その実態は、現実世界の情報をもとにしたNPCらしい。

「つまり…その他のVRMMOのアバターデータってことか？」

「そういうことじゃ」

「これまた厄介な…？」

なぜそんなことになったかは、カーディナルにも分からないらしい。

通常の【ベクタの迷子】ではないため、【冒険者】と呼ぶことになった。

とにかく今は、この現状を維持するしかない、そういうことだ。

「おう、坊主。頼みてえ事があるんだが」

「おっさん？」

という訳で

「全員、今日までご苦労だった！目先の問題に目処がついた！今日は好きだけ飲み、好きだけ食え！そして…この料理を用意した、坊主にしっかり感謝しろ！」

「させたのはあんただろうが…」

何故かパーティの用意をさせられる羽目になった、俺なのだった。

outside

「北帝国で、民が行方不明…か」

「ええ、それで招集がかかったみたい」

ミトから話を聞いた優月は、直ぐに用意を整えて、北帝国に向かう。

しばらく歩いたところで、ある事件に遭遇した。

「川に魔獣が？」

地元の青年が水汲みに向かったところ、川に魔獣が発生したらしく、近付くなという

話を聞いたのだ。

「ですがこの一帯は、近衛兵が巡回してるはずです」

（近衛兵な…。あてにはならんと思ってたが、ここまでとはな…）

「近衛兵？」

近衛兵とは、各帝国が保有する戦力のことである。

通常は北帝国の皇帝の居城、「ノーランガルス帝城」を守っているが、今は魔獣討伐と、北帝国各地の監視をしている。

「近衛兵の人たちもやられちゃったのかな…？」



「違うな。おおよそ、お得意の法の目くぐりだろ」

「近衛兵？偉そうなおっさん達なら、数日前から見えてねえよ！」

「…見てない？」

（ほらやつぱり、そういうことだろ。マジ使えねえ…）

「アイツらがちゃんとしてれば、俺の妹は歩けなくなるなんて、ならなかつたはずなんだ…！あんたからも剣士なんだろ！どうせアイツらみたいに、助けてくれないんだろ！」

その言葉を受けた優月とアリスは、立場上堪えるものがあり、何も言えなくなる。

助けたいと思う、だがそれを言っても信じないだろう。

そういう気持ちだが、2人の口を止めてしまったのだ。

その時

「そんなことない。その魔獣は私たちが討伐する。私はともかく、こちらのお2人は人界最強の剣士たちだ。頼りない近衛兵が1000人束になっても敵わない」

メイナの言葉を受けた青年は、渋々誰も村から出ないようにするよう、伝言を伝えるに走つたのだった。

「…アリス様、ユツキ様。勝手な真似をして申し訳ありません。ですがお2人ならきつと、こうすると思いましたが…」

「いや、みなまで言うな。…恥ずかしい…」

「貴女の判断は的確ですよ、メディナ殿」

こうして彼らは魔獣の元へと急いだ。

その時、悲鳴が聞こえてきた一行は、慌てて加勢して、速攻で片付けたのだった。

「…ふう、助かったぜ。あんたらも、新しい警備地に移動する最中だったのか？ あんたらも迷惑だよな？ 平民ごとき、魔獣とやらに1人や2人食べられても、大したことでは無い」

「…貴方に聞きたいことがあります。この辺の警護を任せている貴方を、数日見ていないという話を聞きました。それと同時に、それを教えてくれた者の妹が、足を負傷し、二度と歩けなくなつたとも。…お前は、その間何をしていたのです？」

アリスの酷く固くて冷たい声に

（（うわぁ…怒ってる…））

特に付き合いの長い男組3人は、少しでもアリスと距離をとる。

だが優月は、それと同時にどこか残酷なことを考えていた。

「なぜそんなことを聞く？ 貴様に答える義理はないぞ！ 女！」

「…質問の仕方を変えましょう。私は整合騎士、アリスⅡシンセシスⅡサーティ。そしてその男は、同じく整合騎士、ユツキⅡシンセシスⅡゼロ。お前はよもや、我ら整合騎士の前で質問に答えぬ不敬、もしくは虚偽を申告するつもりですか？ ならば処罰も検

討しなくてははいけませんね。ああ、ちなみにユヅキは、優しくはありません。彼が大人しくしてらうちに、選ぶのがいいでしょう」

アリスが一息に言い切ったところで、慌てて口を開く近衛兵。

なんでも決められた時間以外は、近衛兵長の私有地周辺を警護することを命じられているらしい。

「ではなぜ、大量の魔獣が放置されたのですか？ 対処出来なくても、対策本部に連絡することくらいは出来たはずですよ。：お前にとつて平民は、取るに足らない存在だから：ですか？」

ついに惨めったらしく、命乞いをする近衛兵。

それを見たアリスは、呆れ果てながら、村への報告と早馬を使って対策本部への連絡を行うことに。

「メデイナ殿。今回は助けられました。礼を」

この一言が、近衛兵にあること気付かせた。

「…メデイナ？ メデイナⅡオルティナノスか？ …くくく…くくく…久しぶりだな…メデイナ嬢」

「…?! 貴様は…！ 父上の葬式にいた?!」

なんとメデイナと知り合いだったのだ。

しかしいい意味はなく、悪い意味でだ。

次から次へと出てくる、オルティナノス家への侮辱に、優月はついに我慢の限界が来た。

「…おい」

「ヒイヒイヒイ!!」

「優月? 何する気だ?」

キリトの制止を無視して、優月は近衛兵の襟首を掴み、たまたま近くに現れた魔獣の前に放り捨てる。

「…お前の仕事だ。片付けろ」

「え? で、ですが…私の手には…」

「お前の仕事だ」

遠回しに手を貸す気は無い、そう告げる優月に、周りが何をさせる気か、やっと悟った。

「まさか!?!」

「優月君! やめて!」

「やれ」

優月は周りの声を無視して、魔獣との戦闘を強要する。

案の定勝てるわけなく、死にかけて時

「…メデイナ、助けてやれ」

「え？は、はい！」

突然そう言われたメデイナは、慌てて冒険者を連れて、近衛兵を助けた。

「け、欠陥品のオルティナノス家に…助けられる…とは…!?」

「お前らが欠陥品と蔑む、オルティナノス家に助けられた気分はどうだ？…メデイナ〓  
オルティナノスへの侮辱は、その剣の腕を認めている、俺たち整合騎士への侮辱になる。  
その事を、お友達にもちゃんと伝えておけ」

異論を認めさせない優月の言葉に、近衛兵は慌てて逃げ出すのだった。

「…ふう。整合騎士モードは疲れる…」

「突然過ぎて、ビックリしたよ…もう…」

「まあ、こういう時はこうでもしないと、舐められるからね」

そう言いながら、大きく息を吐き出して、ぐったりとする優月。

基本フレンドリーな彼だが、時折騎士らしきを見せて、威厳を示しているのだ。

…もつとも、背伸び感が否めないのは、本人以外の秘密である。

「さて、アリスに合流しよう」

そう言つてアリスとの、合流地点に向かい、無事落ち合った一行。

そこでは聞かせられたのは

「伝承？」

「ええ、150年ほど前、この北帝国に現れた魔女によって、【善き子供】達が攫われた、そういう伝承です。そしてその魔女は、皇帝の聖なる剣で倒され、子供たちは親元に帰ったと言う話です」

だが、明確な文献などはなく、あくまで御伽噺程度のものでしかない、そういう話だ。そして大事なのは、現在、それに近い状況が生まれている、ということだ。

「突如現れた、知らない子供たち……」

もし本当ならば、放置などできるはずがない、そう判断した一行は、ルーリッド村までの道中、その子供たちも探すことに。

side 優月

一晩休んだ俺たちは、そのままルーリッド村へ急いだのだが……

「……」

ことある事に、アリスとメディナがぶつかり、困っているのだ。

そんなギスギスした空気を抱えながら、子供を助けつつ、ついにルーリッド村へ着いた。

着いたのだが……

「……」

「アリス？」

「私は待っています。…私は、罪人ですから」

アリスめ、直前でひよったな。

さてどうやって、発破をかけようか…？

そう思っていた時だ。

「キリト！ユージオ！」

茶髪のシスターが、走り寄っていた。

その子の顔立ち…特に目元が、アリスに似ていた。

この子が…セルカだったのか。

「ええつと…貴方たちは…ってあれ？貴方、半年くらい前に…？」

「おう、その節は世話になった。またよろしくな」

「あれ？ユヅキはここに来たことあるのかい？」

「ああ、旅をしてた時にな。二泊させて貰ったんだよ」

とはいえ、セルカ自身に会った訳ではなく、チラツと見かけた程度だ。

恐らくあちらも、その程度の認識だろう。

そんな話をしていると、セルカがある事に気が付いた。

「…姉さま？姉さまよね!!」

「っー」

「アリス…俺の背中に隠れるな」

俺の後ろに隠れるアリスを、俺は強引に引っ張り出す。

「どうして…?」

「…説明するのは…とても難しくくて…今は…」

「いいの」

そう言つてセルカは、アリスを真正面から抱きしめる。

「姉さまにまた会えただけで、十分嬉しいから」

「…ありがとう…セルカ…」

そう言つて涙混じりに抱きしめるアリスを見ながら、俺とミトは静かに笑う。

「姉弟姉妹は、一緒じゃないとね」

「そうだな…姉貴」

特に意味はなく、拳をぶつけ合う。

ただ俺たちの絆を、再確認出来た気がした。

しばらくこの村を拠点に、調査を進めることになった俺たち。

数日がたった頃。

「西はミトをリーダーにサチ、リズ、シリカ。東はアスナ先輩をリーダーにシノン、リー



フア。俺は北を見るから……」

「優月！」

「キリト？」

今日はキリトたち幼馴染組は、一日非番にしたはず。

なんかトラブったか……？

「これから3人で村を見て回るんだが、優月も一緒に来いよ！」

「……あのなあ。俺ら仕事なの。お前らは非番にしたけど、俺まで休む訳には……」

「いいじゃない！行ってきなさいよ！」

俺の言葉に、リズが被せてくる。

「おい、そういう訳には……」

「優月さん、働きすぎですよ。こつちに来てから、一日も休んでないですよね？」

「そうですよ！しっかり休まないで、いぎって時に、動けないですよ？」

「こつちどころか、央都にいたときから、貴方ほとんど休んでないじゃない」

「私たちにも出来ることなら、少しでも手伝うよ？」

「あんたの事だから、どうせ責任を感じてるのかもしれないけど、だからって働きすぎよ。また私たちを心配させる気？」

「優月君。私たちは君たちを助けるために、ここ行きに来たんだよ？だから……私たちを

もつと頼って欲しいな？」

みんなに次々と言われてしまい、俺も何も言い返せなくなる。

…はあ、休むか。

「…分かった。みんな、頼んでいい？」

みんなの温かい返事を貰い、俺はキリトたちと一緒にルーリッド村を回ることになったのだった。

## 北帝国編 第2話

side 優月

4人で村やその周囲を回っていると、ユージオが小川の小さい橋の上で立ち止まる。

「……来た気がする」

ユージオ曰く、アリスと二人で来たのだが、何故か曖昧らしい。

「帰る時には、アリスは無事で、僕だけびしょ濡れだったんだよね……」

ああ、わかって気がした。

「多分それ、キリトがいたぞ」

「え!? そうなのか!?!」

「じゃあ聞くが、お前がここにいたら何をする?」

「水のかけあい」

「なんでユージオとアリスが即答するんだよ!」

本当によく分かってらっしゃる、この2人。

つまり、3人いないと成立しない記憶は、曖昧なのだろう。

ユージオはキリトの提案に、多分乗る。

だがアリスは育ちが良さそうなため、恐らくその辺りの一線は守るだろう。

「なるほどな…今のアリスなら、徹底抗戦しそうだけだな」

「ついでに勝つまで続けるぞ」

「お前たち…?」

それにしても…ちよつと寂しいな…。

「おい、優月?何してるんだ?」

「いや、なんか寂しくて?」

「だからってなんで、僕たちの腰に手を回してるんだい?」

「正解は…おりやアアア!!」

「わああああああ!!」

俺は2人まとめて、川にバックドロップをしかけて、3人まとめて川に飛び込む。

「ぶはあ!アハハハ!」

「ブハア!優月!?何するんだよ!」

「ゲホゲホ…ビツクリするだろう!?!」

「…は!?!あ、貴方たち!何してるのです!?!」

呆然としていたアリスが、やっと再起動して、俺たちに近付く。

「あ〜!楽し!…おらあ!」

「ぶあ!?この…それ!」

「ユージオバリア!」

「え!?ぶはあ!?…やったなあ!キリト!」

「貴方たち!…もう!風邪を引きますよ!」

こうしてしばらく、俺たちは水のかけあいをして楽しんだのだった。

「「ビツシヨビシヨ…」」

「全く…じつとしてなさい。ユツキ、貴方は手伝いなさい」

神聖術を使い、全員の服と髪を乾かして、次に進む。

しばらく山間を進むと

「…あ」

突然ユージオが立ち止まる。

「( )は?」

「ええつと…秘密基地だったんだ、僕たちの」

こつちでも秘密基地とかあったんだな…。

とはいえ、何やら恥ずかしい秘密があるらしく、特に掘り下げられることはなく。

そのまま進んでいき、着いたのはバカデカイ切り株だった。

「…( )に、ギガスシダー…キリトの剣の元があったのか」

刻み手が天職だったユージオにとって、半生が詰まった場所だ。

ここには、あのアリスが飯を作って来てたらしい。

「…あのアリスが？」

「ユヅキ？言いたいことがあるようですね？」

「あれだけのものを作って、よく強気になれるな」

まだカセドラルがある時、アリスが忙しい俺の代わりに作った飯は、整合騎士を全員ダウンさせるほどの物体だった。

「あ、あれは!?!:…そういえば、あれはどうしたのですか？」

「チュデルキンに流し込んだ」

あの時のチュデルキンの顔は、今でも忘れられない…面白すぎて。

「…まあ、いいでしょう。ですが!あれから練習したのです!」

「試食は誰に？」

「イーデイス殿に」

「一番あてにならねえ!」

よりもよって、イーデイスかよ!

アリスに激甘なイーデイスじゃ、全く参考にならないだろ!

「イーデイス殿も、どんな人でもイチコロよ!…って、褒めてくれましたし、大丈夫です!」

「今の発言に安心出来る要素が一つもないわ!おバカ!」

「ムウ!でしたら、今晩は私が料理を振るいましょう!」

「村を滅ぼす気かアアアアアアア!!!」

絶対に立たせるものか!

結局ギガスシダーの切り株の前では、思い出話は出来なかつたのだつた。

途中カラントを見つけ、切り倒した後、帰ろうした時、ある事件が起きた。

「あ、あれ!?財布がない!」

ユージオが財布をなくしたのだ。

ただ落としただけならいいのだが、その直前誰かとぶつかっているのだ。

「…まさかスられた?」

「だがそれは禁忌目録で禁止されている。ということとは…」

冒険者の可能性が高い。

そう思った俺たちは、すぐに追いかけることに。

思ったより近くに、彼らはいた。

当然財布を返すように言うが、シラを切られる。

「1日以内に返せば、禁忌目録にはなりません」

「禁忌目録…?」

禁忌目録を知らない……となると……やはり、冒険者か。

そう思っていると、奥から子供も女性が出てくる。

「……なるほど、食い扶持もなく、困窮に飢えた末のスリ、ということか。とはいえ、罪は罪だ」

「落ち着いて。僕達に危害を加える気は無い。それに、このままだと、君は本当に犯罪者になってしまう。だから、返してくれないかな？」

ユージオの優しい声と雰囲気当てられたか、やっとユージオの財布を返してくれた彼らから、細かく話を聞くことに。

その結果やはり「ベクタの迷子」……冒険者と確定。

それぞれのやりたい事や得意なことを聞き、村で引き取ってもらうことに。

「す、好きなことをやらせてもらえるのか!？」

「可能な限り善処するよ。どうにか村長に頼んでみる」

だが、どうやら他にもいるらしく、村が受け入れてくれるか心配だ。

「多分大丈夫だよ。見た感じ開拓が進んで、少し豊かになったみたいだし。それに仕事もしてもらおうわけだし、多分受け入れてもらえるよ」

outside

村へ着いた優月たちを出迎えたのは、メディナだった。



「おかえり。…彼らは？」

「冒険者です。私たちが保護しました」

「そうなのですか？彼らほどの数がいれば、戦力として申し分ないですね」

メデイナのその一言が、優月とアリスの目を鋭くさせる。

「戦力？彼らに接触するつもりですか？」

「…本気か、お前」

「ま、まあまあ2人とも。メデイナの考えが…」

キリトが慌てて間を取り持つが、2人の目は変わらない。

「…どうやら私は、すっかりお2人からの信頼を失ってしまったようです」

「いえ、そういう訳ではありませんが…」

「…」

否定するアリスと、何も語らない優月。

彼の中でメデイナへの評価は、ギリギリまで落ちている。

剣の腕をかつているのは本当だが、それ以外では、あまりいい感情は抱いていない。

「…たしかに、前回は先走り過ぎましたし、やりすぎました。ですが今回は、きちんと話し合っ行っていきます。それに、この村で情報を集めて分かった…」

「彼らには、彼らのやりたいことがあります。それぞれが、それぞれの目標や理想がある

のです」

「アリス様……?」

「貴女のやり方が間違つてるとは、思いません。ですが彼らは、誰一人として戦士になりたかつたとは言いませんでした」

「ですがこの村を守るためには、必要なことがあるのではないですか!」

「お前に接触すれば、みんな従順な戦士、もしくは情報を集めるやつになるだろう。だがこいつらは、誰一人として戦いたいとは、言わなかつた。それを無視して押し付けるのは、間違っている。冒険者は、お前の望みを叶える道具じゃない」

「…誰も、好き好んで誰かの人形には…なろうとは思わないのです」

3人の話し合いは、どこまで行つても平行線だ。

そんな様子を、キリトとユージオは不安げに見つめる。

「…お2人はやはり、現状を分かつておりません。対策本部は人手不足。近衛兵はこのザマ。四皇帝を始めとする貴族たちも非協力的。道具、人形…確かに、そのように表現されてしまえば、否定のしようがありません。ですが、事実私が接触した冒険者たちは、命令に従い、魔獣を倒し、情報を集めている」

「命令? お願ひ、じゃなかつたのか?」

メデイナの言葉を、優月は耳聴く聞き、反論する。

その言葉に、メディナは押し黙った。

「…お前の功績自体は認めている。たしかに冒険者達のおかげで、人員という点については、大きな助けとなっている。だがな、それとこれは別だ」

さらに泥沼化していく状況だったが、冒険者が情報を持つてくることで、とりあえずそこはお開きとなった。

だが2人と1人の溝は、もはや修繕不可能なところまで、来てしまったのだった。

「…」

冒険者の持つてきた情報をまとめ、翌日を出発とした一行は、村近隣で野営をすることに。

夜、フラフラと散歩していた優月は

「ん？デユソルバートさん？」

「奇遇だな、ユヅキ殿」

「やつほー、私たちもいるよ！」

「お疲れ様です」

「フィゼルにリネル!？」

デユソルバートとフィゼルとリネルに出会う。

ふと、優月はあることを思い出した。

「そういえば魔獣討伐の命令が出てたっけ…デュソルバートさんには。…デュソルバートさんには」

「なんで2回も言ったの？」

そう、命令自体はデュソルバートに出ていたのだが、何故か2人も着いてきていた事に、疑問を抱く優月。

「勝手についてきたのだ…」

「…お疲れ様…」

「ユツキさん。子供の失踪事件ってどうなってますか？」

（こいつら…さてはこれが目的か…）

案の定連れてけど、ごねだす2人。

優月はデュソルバートの判断に委ねることに。

「ダメだ」

「えー！ケチんぼ！」

「…まあ、ついて行く手段は、いくらでもありますしね」

不穏な空気を醸し出す2人に、優月とデュソルバートは、深くため息をつく。

「…済まないが、ユツキ殿。同行しても構わないだろうか？…というより、ついて行かねば何をしでかすか、まるでわからん」

「こいつら、シャレにならんしな…。仕方ねえ。道中、デュソルバートさんの言うことを絶対に聞くこと！分かった！」

「はーい！」

(絶対に分かってない…)

動機が不純すぎて、逆に感心する2人。

旅が賑やかになる…そう思う優月なのだった。

outside

優月たちは、道中魔物を倒しながら進んできたが、何やら魔獣の被害範囲が広い気がするのと、睨んでいた。

「…」

アリスも黙っているが、ルーリッド村が心配なのか、時々後ろを気にしている。

優月はひとつため息をつくと、

「幾つかの班に別れるか」

「え？」

目的の村まではさほど遠くはない。

そんな近くまで魔獣がいる事実を鑑みて、優月は班分けして、魔獣の対応を進めながら、村を目指すことに。

「アリス・デユソルバートさん・リネル・フィゼル・キリト・サチ・ユージオはこっち。残りはこっち」

「…分かりました。そうしましょう」

そうして彼らは二手に分かれて、目的の村を目指すことに。

「アリスさんのことが気になるの？」

アスナにそう言われた優月は、前髪をかきあげながら心配そうに呟く。

「…今のアリスは、かなり迷ってるから」

「迷ってる？何を？」

「俺以外の整合騎士はみんな、最高司祭によって作られた存在。それ故、『人界を守る』。この願いは自分の願いか、それとも作られた存在としての、存在意義としての願いなのか。本人がそれを、把握しきれてないんですよ。…まあ、俺もなんですけど」

「え？」

アスナの意外そうな顔で、優月を見る。

その目は迷いに満ちた色をしてきた。

「俺は最高司祭に作られた存在ですらない。おっさんみたいにそれを良しとするのでもなく、アリスみたいに真剣に迷う訳でもない。俺には、その余地すらない」

使命も義理もない。

この世界で何を成すべきなのか、それすらも分からず、ただ整合騎士という立場が持つ責任を果たすだけ。

「みんなを巻き込んでまで、俺は一体、なんの為に戦ってるのかな…なくんてね！早く行くー！」

無理やり笑って先を急かそうとする優月に対して、一番先に声を出したのは

『仮想も現実も、俺には大差無い。どこだろうと、なんだろうと、俺の耳で聞いて、目で見て、鼻で嗅いで、口で味わって、肌で感じて。俺の五感全てで感じたものが、俺の現実だ。その経験が、こっちかあっちかの差、それだけだ』…そう言ったのは、貴方でしょ、優月」

「シノン…?」

「アンダーワールドだとか、人界だとか、整合騎士だとか…そんな話、どうでもいいのよ。貴方は…兎沢優月は、何をしたいのよ？何を感じたのよ？その思ったのよ？それに従うことが大事だって…そう言いたかったんでしょう？」

（自分の気持ちに従う…）

シノンに言われた優月は、ハッとさせられた。

アンダーワールドに来て、カセドラルで過ごし、整合騎士見習いとして過ごしてきた日々。

色んな戦いを経験し、色んなことを見てきて、優月の中で現実とVRの世界がゴチャゴチャになってきていた。

1年が経ち整合騎士となり、世界を旅してこの人界の歪みに気がつき、世界と戦うことを決めた。

その戦いに勝った後にあつたのは、更なる問題と混乱。

そのせいで色々と見失っていたものが…やつと見えだした。

「…俺は…人界がどうか、アンダーワールドがどうか…はつきり言って、どうでもいい」

「…それで？」

「でも、この世界には俺が守りたいものが沢山ある。…だから戦う。それが俺の…兎沢優月の…ツキノワの…優月ⅡシンセシスⅡゼロの、戦う理由だ。…これでいいってことだよな？」

その言葉に全員が頷く。

やつと、本調子を取り戻した優月は、顔を叩いて頭を切り替える。

「よし…だつたら急ごう！」

「」「」「ええ！」「」「」

そんな様子を



(これが…ユヅキ様の強さ…)  
メデイナは静かに見つめるのだった。

## 北帝国編 第3話

side 優月

俺たちは道中魔獣を狩りながら、山道を進んでいき、目的の村に着く。

中にはキリト達がいる、先に待たせていたらしい。

「キリト、悪い。遅くなった」

「何かあったのか？」

「いや…特には…」

その時ニヤけた顔のシリカとリーファが飛び出してきて、キリトにいらんことを言うてきた。

「優月さんが弱気になってたんですよ！」

「そうそう！すごく珍しい光景だったよ！」

「お、おい！お前ら！やめろ！／＼／＼」

慌てて口を閉じさせるが手遅れで、同じくらいニヤけた顔をするキリトに、頭突きを入れた。

「いってえ!?!何するんだよ!?!」

「うるせえ！そのニヤけ顔やめやがれ！」

「2人とも！何してるの!？」

ユージオが慌てて駆け付けくる。

全く…このバカキリトめ…！

「…それで？状況は？」

なんでもこの村でも子供が失踪しており、近衛兵に調査を依頼したのだが、取り合つて貰えず、俺たちで調べることになったらしい。

「カラントが絡むかもしれないし、やるしかないわね」

ミトの一言で俺たちも全会一致し、調査を進めた。

その結果…

「オーレシアン家？」

「ええ、なんでもその貴族の馬車が、この村に来ていたらしく…」

「失踪したのも、その後だったって事ね…」

俺たちはキリトたちが仕入れた、オーレシアン家の邸宅に向かったのだが、文字通りの門前払い。

「2人の権限で入れないの？」

「入れないことは無いが…まだ確定した訳でもねえしな…」

「それにそのやり方は、衛兵や貴族が、絶対に拒否できない命令を下すのと一緒ですので……私自身、あまり使いたくありません」

リズの提案に、俺たちはいい顔はせず断ると、リズもその気持ちを汲んでくれた。

「キリト……何かいい方法ない？」

「まあ……忍び込むしかないだろうな……」

サチの言葉に、キリトは真剣な顔でそう呟く。

「あんたねえ……そんなの論外よ」

「やっぱりここで待つしか……？」

キリトの言葉に反対するシノンだが、予想外の言葉を、ミトが口にした。

「……私はキリトに賛成。ただし、ここで馬車を待つしかないわね。その後、馬車を追いかけるのと、忍び込む組に分かれましょう。忍び込むのは……私・シリカ・フィネル・リネルでどうかしら？」

「ミト……本気か？」

「人命優先。ましてや相手は子供よ？何かヒントがあるかもしれないわ」

俺はミトの目を見て尋ねるが、本気なのが伺えた。

「これは……止めても無駄だな。」

「……なら俺も行く。言い出しつべだからな」

「なら私も。神聖術で上手く誤魔化せるかもしれないし」

「我もこつちにしよう。だが2人のこともあるが、大人数だとかえって目立つだろう。サチ殿は神聖術をかけたあと、ここで待機していてくれ。その間は我がその身を守ろう」

ミトに続いてキリト・サチ・デュソルバートが名乗りを上げ、サチの護衛はデュソルバートに頼むことに。

「…よし、なら決まりだな」

こうして俺たちは近くに隠れながら、野宿をすることに。

夜まで待っていると、門が開き馬車が出てきた。

「見てください！馬車が出てきました！」

「ちょ!?!アリス!?!」

「バカ!声がかい!?!」

俺と先輩が慌てて口を閉じさせる。

「し、失礼しました…。こうも上手くいくとは思わずつい…」

「よし。手筈通り行くわよ」

「ミト。無茶するなよ」

「そつちこそ。サチ、お願い」

「うん。システムコール……」

サチの詠唱を聞きながら、俺たちは馬車を追いかけることに。

あまり近すぎててもいけないし、遠すぎると馬の速さには敵うわけなく見失ってしまう。

「流石にしんどいわね……」

「無理はするなよ」

そう話しながら追いかけていると、突如獣の鳴き声が響く。

「今のは!？」

「魔獣の鳴き声……みたいだね」

「結構近かったですね! 急ぎましょう!」

俺たちは駆けつけるとそこには

「馬車が……!」

「チツ! みんな! 馬車を守るぞ!」

俺たちは馬車を襲う魔獣と、そのまま戦闘を開始した。

「はあ!」

「ユージオどいて……フツ!」

ユージオが足止めして、シノンが撃ち抜く。

「おりやあ！」

「リスさん！ ナイスです！ やあ！」

リスが足場を崩させ、その隙にリーファが斬る。

「遅い！ はああ！」

「そこ！ やらせない！」

アリスが薙ぎ払い、その隙をメデイナが守る。

「シッ！」

「ハア！」

俺と先輩が、互いの背中を守るように剣を振る。

こうしてそれなりの数がいた獣たちを、何とか殲滅した俺たち。

「優月くん。御者の人は…もう…」

「そうですか…」

御者はダメだったか…。

俺たちが俯いていると

「…ん？ なにか聞こえませんか？」

「本当ね。…馬車の中？」

リーファとシノンが声が聞こえると言い出した。

たしかに……聞こえるかも。

「安否確認だもの。確認してもいいわよね？」

リズの言葉に俺とアリスが頷く。

確認をとつたリズが荷台を開けると……

「嘘……君たち!?!」

「お姉ちゃんたち、だれ？」

子供が数人、乗っていた。

これで確定だ。

オーレシアン家は、子供の失踪に関与している。

「……もう大丈夫よ。私たちがお家へ返してあげるからね」

「……アスナ先輩、子供たちをお願いします」

「うん。僕達が警護するから」

「私も警護に回ろう」

子供たちはアスナ先輩たちに任せ、俺とユージオとメデイナで、道中の警護をすることに。

無事に村について、子供たちを返したはいいが、そこで想定外の事を言われてしまった。



「失踪した子供の数が足りない!？」

「なんてこと…!? まだいたのですか!？」

俺たちは直ぐにオーレシアン邸宅に向かい、キリトたちと合流した。

幸い既に戻ってきており、直ぐに情報交換が出来た。

「俺たちの方でも、証拠を掴んだぞ。この貴族は子供たちを、ここに連れて行っていたらしい」

キリトが地図で示した場所は、俺たちが追いかけた街道の終着点にある、名前のない城だ。

だが俺は、その城を知っていた。

「城…? こんな場所に城が?」

「ああ…ここは『ノーランガルス旧帝城』。昔の皇帝が住んでいた城だ」

outside

「【ノーランガルス旧帝城】…。そんな場所にどうして…?」

「昔の皇帝…。そういえば、北帝国に来る前、カーディナルが教えてくれたよな」

キリトの言っていることは、南帝国に現れた巨人族のことだ。

かつて、南の回廊を破って侵入した巨人族の集団がいたらしい。

それらを率いていたのが、ザクザとジクジだ。

結局彼らは、整合騎士の手によって倒されたのだ。

「つまり…キリトはこう言いたいのか？かつての皇帝が、カラントによって甦ったと」  
優月の言葉に、キリトは神妙に頷く。

もし本当にそうだった場合、厄介なことになる。

「ねえキリト。あの老人に聞いてみないかい？」

「おお！それだ！」

「ん？何の話だ？」

優月たちは知らない話だが、キリトたちがオーレシアン家の事を知ったのは、聞き込みの際、昔の皇帝に仕えていたという老人から聞いたのだ。

彼ならば知っているだろうと、聞き込みに行った一行だったが…。

「すまん…。たとえばお主らの言葉が真実だとしても、皇帝陛下を裏切るような真似、出来んのだ」

協力は望めず、断られしもう。

だがキリトが、何故か1人で何かをしに、一旦離れた。

「…まさか…」

「そのまさか、だと思おうよ…」

優月はサチと2人で、キリトに対して深くため息をつく。

(無茶苦茶するなあ…相変わらず…)

呆れる優月と、仕方なさげに笑うサチ。

その様子にみんながハテナを浮かべていると、キリトが情報を持って戻ってきた。

「おまたせ！湖に面した場所に、城内に入れる隠し通路があるらしい！行こう！」

「あのお爺さんがよく教えてくれたね。どんな手を使ったんだい？」

「え!?ええつと…日頃の行いさ！ユージオ君！」

「お前が日頃の行いがいいとでも…？」

アリスがものすごい怪しい視線をキリトに送り、その視線を受けたキリトは焦ったように視線を逸らす。

「と、とにかく急ごう！」

キリトがそう言った時、デュソルバートが焦ったように走ってくる。

「はあ…はあ…」

「どうしたんですか!?!デュソルバートさん!?!」

「リネルとフィゼルが…どこにもいないのだ…。稽古の時間になっても現れず…」

突然のリネルとフィゼルの失踪に、一行が動揺する中、キリトはあることに気がついた。

「…まさか」

「キリト、何を知ってる？」

「ああ、情報を聞いてた時、人影が見えた気がしたんだ。気のせいだと思ってたんだが……」

リネルとフィゼルが、盗み聞きをしていた。

その事に気付いた一行は慌てて追いかけてしようとしたが、そこに魔獣の大群が迫っているという連絡が。

「……我が単身で追いかける。こちらを任せてもよいだろうか？」

「デュソルバートさん、頼んだ！俺達も一気に叩くぞ！」

優月の声に従い、全員で現場に駆けつけたのだが、そこは既に

「魔獣が倒されている……？」

白い衣服に身を包んだ、銀髪の男が既に魔獣を倒していた。

「……先輩、ミト。下がってて」

「サチもだ。下がってろ」

優月とキリトは、アスナたちを少しを下げさせて、嫌な悪寒を感じながら身構える。

「これはこれは……残念でしたね。せっかくあなた方に素晴らしい血飛沫舞う饗宴を、お見せしようと思ったのですが……まあ、余興は残ってますし、構いませんが」

「……この魔獣はあなたが倒したのですか？見た感じ、近衛兵では無いようですが？」

「…フハハハハハ！分かりきったことを聞くとは、整合騎士とは随分と頭が悪いようですね！まあいい、私の要件はあなたたちではありません。…ようやくお会い出来ましたね、私の救世主様」

アリスを嘲笑ったその男が、頭を下げた相手は…

「お前…一体何者だ!?!」

メデイナだった。

「私の名前は、『ハアシリアン』。【元老院統括代理】でございます」

「【元老院統括代理】…?」

side 優月

【元老院統括代理】…そんな役職、聞いたことがない。

多分アリスも同様だ。

とはいえ俺たちは、まだ若い騎士。

イーデイスやデュソルバートさん、ファナテイオさんやおっさんたちなら、何か知ってるかもしれない。

「私はオルティナノス家についてなら、なんでも存じ上げております。天命を凍結された我が身、長きに渡りオルティナノス家に仕えて参りました。さあ、参りましょう、救世主様。私と共に、最高司祭様を復活させましょう！」

まずい……!

メデイナは学生だから、本当のことを伝えてない!

当然復活という言葉に疑問を抱くメデイナに、ハアシリアンは真実を口にした。

「あなた様は騙されているのです。最高司祭様を殺した大罪人を抱え込んだ、偽りの公理教会に!」

「ちよ、ちよつと!大罪人つて誰のことよ!」

「リズ!」

「な、何よ……!?アスナにミト……」

バカ野郎……余計なことを口走りやがって……!

俺は思わずリズを睨みかけるが、もはや意味はなく。

「特別にお答えしましょう。最高司祭様を殺した大罪人は……この者です」

そう言つてハアシリアンは、キリトを指さした。

こいつ……どうして知っている?

「……う、嘘だ!?キリトが最高司祭様を殺したなんて、あるはずがない!」

狼狽えるメデイナを無視して、ハアシリアンはメデイナと一緒に来るように勧誘する。

だがメデイナは、それを拒絶した。

「…はははは！その高貴な弁舌、まるで5代目当主、『ミリアム・オルティナノス』そっくりですね！」

「っ!?!お前…どうしてその名を!?!私たちでもほとんど記録に残っていない、5代目の名前をどうして!?!」

「言ったでしょう？私は長きに渡り、オルティナノス家に仕えて参りました、と。…まあいいでしょう。今回は引き下がります。それでは、またお会いしましょう」

そう言つてハアシリアンに、神聖術で霧を生成されてしまい、逃げられてしまった。

「無事か!?!」

「ええ、みんな無事よ」

俺がみんなの安否を確認していると、キリトとメデイナが向き合っていた。

「…キリト。あいつの言っていたことは、本当なのか…?答えてくれ!キリト!」

「…本当だ。俺がアドミニストレータを殺した」

キリトを事実を伝えていると、頭を抱え込んでしまう。

やはりこの事実は、人界の人には重すぎる。

そしてそれは…フラクトライトの崩壊を招くだろう。

「メデイナ！いつか絶対に説明する！だから、今は力を貸してくれ！頼む！」

「…分かった」

考えることをやめたメデイナは、少し落ち着いたらしい。

それを見た俺たちは、城に向けて歩き出す。

だから気づかなかった。

メデイナは表面的に落ち着いただけで、未だ混乱の最中にいたことに。



## 北帝国編 第4話

side 優月

道中想定外なトラブルがあつたが、何とか城の隠れ通路に潜入。

したのはいいが…

「今のは…魔獣の声!？」

「近衛兵もいるのに!？」

「中にカラントがあるのかなあ…?？」

通路の中から、魔獣の声が聞こえたのだ。

恐らくリーファの言う通りだろう。

まったく…面倒な…。

「サチ。神聖術で明かりを。ミトとシノンには武器の使い方につけて」

「あら? 誰に言ってるのよ?」

「優月こそ、刀振り回すんじゃないわよ?」

「俺は間合いは自在だから」

そうやって俺は、刃を短くして短刀にする。

少し弄んで調子を確かめてから、気合を入れる。

「…よし！行こう！」

俺たちは魔獣を狩りながら、洞窟を駆け抜ける。

取り回しのいい俺とシリカを先頭に、速さ重視で駆け抜けて、やがて開けた空間に出る。

「貴様ら！何者だ!？」

「あんたは?」

「私はこの管理を任されている、オーレシアン家の者だ！」

オーレシアン…やはり関係者だったか。

俺たちが問い詰めようとしていると、謎の青白い女が現れた。

こいつは…?？」

「あらあら、ダメじゃないですか。勝手に抜け出しては…さあ、急ぎ戻りましょう、お坊ちやま、お嬢様」

…ダメだこりや。

まったく話を聞いてないな…。

「私たちは連れ去られた子供たちを探しに来たの！知ってるなら教えてちょうだい！」

ミトの言葉を聞いた途端、なぜかさつきまでの笑顔を引っ込めて、無表情に変わる。

「…所詮、出来損ないですか…」

「…随分と失礼な物言いですね…」

静かに怒るアリスを他所に、ペラペラと話し出す女。

その中で地下牢、というワードを聞き、嫌な予感がした。

「さあ、この侍女長の【ザッパス】が、特別に手ほどきして差し上げましょう」

そう言つて、武器を構えるザッパスを見て、俺たちはこれ以上の話し合いは無意味と判断。

そのまま人数で袋叩きにして、ザッパスを斃した。

「ひ…人殺し！禁忌目録に違反した大罪人め！直ぐに央都から騎士様が…」

「俺たちがその騎士だよ」

「え…？」

仕方ない、ここは立場を明かすか。

「俺は整合騎士、優月ⅡシンセシスⅡゼロ。オーレシアン家の者よ。この城にて何が起きているか、お前の知る限りを教えよ」

俺がそう言うと、顔を青くして慌てて頭を垂れた男が、震える声で話し出した。

なんでもオーレシアン家は、皇帝からこの旧帝城の管理を本当に任されているらしくて、その皇帝陛下から子供を連れてくるように、言われていたらしい。

そしてここで会った皇帝は、現皇帝では無いとのこと。

「やはり…カラントで蘇ったのか…」

「そう考えるのが妥当だな…」

そう話していると、オーレシアン家の者が、頭を抱えて蹲り、ブツブツと呟きだす。

これ以上はフラクトライトが危ないか…。

「オーレシアンの者よ。最後の問いだ。…その皇帝は女か？」

「は…はい…」

「そうか…もう行け」

そう言つて俺は解放してから、先に進む。

「ねえ、優月君。さっきの質問は？」

「ああ、あれですか。実は歴代の北帝国皇帝の中で、1人だけ女がいたんです。その人は亡くなった息子を求めて、気が狂ったとか。それがちょうど、アリスが聞いた御伽噺の頃に皇帝を務めていた人物なんです」

「そ、そうなのですか!？」

「この世界のことを知るために、歴史書とかも読み漁ったからな」

そして、その人物の名は…

「4代目北帝国皇帝、『カヨーデーノランガルス』」

## Outside

アリスは周りに倒れる子供を見て、怒りのままに叫ぶ。

「これは……!?子供たちに一体何をしたのです!」

そんなアリスに待ったをかけたのは、シノンだった。

「待ちなさい、アリス!これは人間じゃない!人形だわ!でも……」

「攫われた子供たちと、年頃は一緒か……?」

「ああ……アロード……なぜそなたのような、優秀な子供はおらぬのか……?」

歴史書を読み漁った優月でも、知らない名前の登場に、困惑する。

「優月……知ってる?」

「いや、初めて聞いた。文脈を聞く限りでは息子っぽいけど……?」

「コヨーデは死んだ存在だ。」

そうなると当然、アロードも既に死んでいる。

だが話し合いができる感じでもなく、そのことを受け止められるとも限らない。

そこでキリトはアロードのことを調べると行って、とりあえずその場を切り抜けた。

「さてと、まずは墓探しだ」

キリトの言葉に従い、一行は墓場を探したが、割と直ぐに見つかった。

というのも、カラントが生えていたからだ。

「気味が悪いね…」

「さっさと切り落としましょう」

ミトに急かされたキリトは、カラントを切り落とした時、実が落ちたのを確認した。

「またこの実か…カーディナルに見てもらおうか」

そう言つてキリトが、その実を拾った時

「キリト！あつたぞー！」

別行動で墓を探していた優月が、キリトに声をかける。

そこにはカヨーデの名前が刻まれていた。

だが…

「アロードの墓が、どこにもないよ」

「どこにもない…？皇帝の息子なのにな？」

不思議そうに呟く優月を見ながら、ユージオがある提案をする。

「書庫とかないのかな？そこになら、何か手がかりがあるかもしれないよ」

「…一理あるな。探してみよう」

そう言つて場内を彷徨っていると、無事に書庫に着いた。

「さすが書庫…めちやくちやいっばい、本があるな」

「ここから探すの…!？」

「やるしかないよね……！」

「私、寝ちやいそう……」

「大丈夫、ミトが寝たら私たちが叩き起すからね」

「鋭く抉るぜ！」

「どんなバイオレンスな起こし方よ!？」

などと騒いでいると、誰かの残した日記を見つける。

そこには、アロードの似顔絵があった。

「あれ?この首飾り……」

「はい……どこかで見たような……」

その似顔絵を見たりリーファとシリカが、何やら心当たりがありそうなことを言う。

やがて同じく見ていたキリトが、思い出したように呟いた。

「……あ。そうだ、あの爺さんだ。あの爺さんがつけてたネックレスだ」

(ネックレス……そんなのしてたっけか?)

優月は思い出せない為、黙って成り行きを見守ることに。

そのまま一度村に戻り、お爺さんに説明をすることに。

「しかし驚いたな……」

「そうね。まさかアロードの孫だったなんて……」

そう、実は尋ねていたお爺さんは、アロードの孫にあたる人物だったのだ。

彼からネットワークスを貰った彼らは、城に戻りそれを見せ、アロードもカヨーデ自身すらも死人だと告げる。

そのことで死んでいる事実は思い出したようだが、錯乱状態に。

「俺達が殺したことにされてるけど、どうするよ?」

「やるしかないだろ…!行くぞ!みんな!」

こうして4代目北帝国皇帝、カヨーデ、ノーランガルスとの戦闘が始まった。

sideキリト

カヨーデは鞭を使うらしく、その破壊力は恐らくエルドリエ並。

「軌道に気をつけろ!先端は見えないぞ!」

「鞭じゃなくて、振る腕を見ろ!タイミングを見計らえば、躲せなくはない!」

俺と優月のアドバイスを元に、俺たちはカヨーデへの接近をはかる。

しかしかなりの猛攻に俺たちは近付けず、膠着状態にもつれ込む。

「ユヅキ、エルドリエの時には、出来ないのですか?」

「あれは、エルドリエが優秀だから出来た荒技だ。こいつは武人ではないし、多分引つか

からないぞ」

何やらエルドリエの時に使った戦法があるらしいが、それは出来ないらしい。



さてどうするか…。

「しののん！狙撃出来ない!？」

「出来なくはないけど、鞭の密度が濃すぎるわ！撃つても弾かれるだけよ！」

そう言いながらも矢を射るシノンだが、シノンの宣言通り弾かれるだけだった。

「…よし。サチ！頼みがある！」

「なんでも言つて、キリト」

「光素を使つて、目くらましをしてくれ。後は俺たちで何とかするから」

「分かった。システムコール！ジェネレート・ルミナス・エレメント…バーストエレメント！」

サチの光素の光に、咄嗟に目を隠すカヨーデ。

だがそれだけでは恐らく反応される。

「シノン！」

「…はっ！」

シノンもわかっていたのか、俺が声をかけた時には、既に狙いを定めていた。

正確無比な一撃は、そのままカヨーデの心臓付近に飛んでいき、突き刺さるが致命傷にはならなかったらしい。

「やあああああ！」

「はあああああー！」

アスナとミトの攻撃が足を縫いつける。

「はあああああー！」

優月とリーファの攻撃が、カヨーデの腕を切り落とす。

「ユージオー！」

「お兄ちゃんー！」

「はああああああー！」

2人の声と同時にユージオと共に駆け出して、一気にその心臓を貫いたのだった。

「グフツ……まだじゃ……！」

すぎましい執念に、俺は爺さんから預かったネックレスを取りだした。

「これを受け取ってくれ」

その時、そのネックレスにアロードの魂が残っていたのか、アロードの真実が語られた。

「なんとというか……」

「この親にしてこの子あり……って感じね」

やがて静かに座り込んだカヨーデは、俺に地下牢の鍵を投げ渡してきた。

そうしてどこか満足そうに座り込み、最後の時を待つつもりらしい。

俺たちはそれをそつとしておき、地下牢を探し出した。

「ここが地下牢……」

「嘘……これって……!?!」

見つけた地下牢には、子供たちがカラントに縛られていた。

まさか天命を吸っているのか……!?!

「早く切り払うわよ!」

ミトの一言で俺たちは、慌ててカラントを斬り、子供の治療をサチとメデイナに頼んだ。

「キリト!こつち!」

「リネルちゃん!?!ファイゼルちゃん!?!」

ユージオとリーファの声の方に行くと、エルドリエ同様、カラントに縛られたリネルたちが。

そしてその周りには

「炎の矢……?これは……」

「答えはあそこだぜ、キリト」

優月の視線の先には、カラント・コアに縛られたデュソルバートがいた。

side 優月

俺たちはデュソルバートさんを解放して、「ディープ・フリーズ」を解除した。

「デュソルバート殿!? 目は覚めましたか!？」

「…はああああ!？」

「アリス!？」

突然デュソルバートさんが、炎を放って、俺たちを蹴散らしてきた。

「おい! デュソルバートさん! 何のつもりだ!？」

「我は…我は、デュソルバート君シンセシス君セブン! 我が使命を遂行してみせる!」

俺はデュソルバートさんの額に、違和感を感じた。

あの光は…まさか、敬神モジュール!？」

寝てる間に、一体何があった!？」

俺が考えていると、ユージオが一步前に出た。

「…どうやら、戦うしかないようだね」

「ユージオ…」

「正直、貴方を2回も相手取りたくなかった。でもこれしかないのなら、再び相手するまで!」

ユージオ…お前ってやつは…。

本当に強いやつだ、こいつは。

「そう。だったら私もやるわ」

「シノン!？」

「あら、じゃあ私も行こうかしら」

「私も戦う」

「ミト!?!サチまで!?!」

何故かシノンとミトとサチが、参戦を表明しだした。

「待て！お前たちじゃデュソルバートは……」

「技量はともかく、武器の性能が違いすぎる！俺たちに……」

「ふざけないで」

俺とキリトの言葉を、シノンがピシヤリと切り捨てる。

その目は冷たく、鋭い。

「私たちは貴方たちの足手まといになるために、ここに来た訳じゃない」

「武器の性能が何よ？リズが作ってくれた武器が、信じられないの？」

「私たちだって、戦える。だから2人とも。私たちを信じて？」

3人の言葉を聞いて、俺はいつの間にかみんなを守らないと、という考えに凝り固まっていたことに、気が付いた。

騎士という役目、責務、そういったものに囚われていて、自分が前に出て戦わないと

いう思いがあった。

「…ふく…。分かった。みんな、ユージオを頼む」

「無理するなよ…絶対」

それはキリトが言うかな…？

そう内心で苦笑いしながら、俺は刀の柄を手放して、一歩引く。

「話し合いは終わりか!?! 咎人共！我が炎の鉄槌、受けるがいい！」

「ミト！あの炎で武器が熱くなるから気をつけて！みんな！行くよ！」

ユージオの掛け声と共に、4人によるデュソルバート戦が始まった。

## 北帝国編 第5話

sideミト

整合騎士…その強さは今まで見てきて、知っていたつもりだ。

だが…現実とは想像を超えてくるとつくづく思った。

「つううう!!」

「ミト!? デイスチャージ!」

私の声に、サチがすぐに回復してくれる。

とはいえ、この世界はペインアブソーバーがない。

火傷は治っても、痛みは残る。

「ミトは下がって! はあああ!」

「シッ!」

「ぬるい!」

私の代わりにユージオが出て、私の下がる隙をシノンが作ってくれる。

「ミト! 無理は禁物よ!」

「ええ、ありがとう。それにしても…強いわね」

「……これが整合騎士。人界最強の名前は、伊達じゃないってことね」

上がる息を強引に整えながら、思考に耽ける。

この男を、キリトとユージオは倒した。

優月はこの男と、肩を並べる強さがある。

同じ景色を、見たかっただけなのかもしれない。

その代償が、この火傷の痛みだ。

「……ふー……」

「キリト？」

体が震える……なのに笑みが止まらない。

恐怖でイカれたかな……？

嘘だ、違う。

楽しいのだ、人界最強の騎士に戦いを挑める、この現実が、楽しくてたまらない。

自分の全てをぶつけても勝てない相手……それに挑むのが、愉しくてたまらない。

「……姉弟って、そんなところも似るのね」

「それでもお嬢様なんだけど？」

「あれがお坊ちゃんに見える？」

「2人とも！いつまで喋ってるの!?!」



シノンと軽口叩いていると、ユージオとサチに怒られた。さて、私もそろそろでますか。

「ユージオ！スイッチ！」

「うん！やあああ！」

私はユージオと入れ変わって、鎌を振り下ろす。

その度に弓でいなされ、拳句には至近距離から矢が放たれる。

「っ!？」

「我を侮るな！小娘が！」

「侮ってなんか…ないわよ！はああああ！」

私は避けた体勢から、勢い任せに鎌を振り、その遠心力を利用して、体勢を直す。

当然私目掛けて矢が飛んでくるが、それを打ち払いながら、間合いを詰める。

「ジェネレート・クライオゼリックエレメント！シノン！」

「ありがとう、サチ！フツ！」

時々放たれるシノンの矢が、デユソルバートの動きを牽制してくれる。

「チツ！…なめるなあ!!」

突然炎が吹き荒れて、私はたまらず後退する。

「…エンハンス・アーマメント」

嘘…まだ本気じゃなかったの!?

私の心の叫びを現実にするかのように、デュソルバートの持つ弓【熾炎弓】の炎が、みるみると熱くなっていく。

そして私の後ろから、凍えるような冷気が私たちを包む。

「…ユージオ…」

神器同士のぶつかり合い。

炎と氷という、真反対の性質を持つものの衝突。

「デュソルバートさん…貴方はたしかに強靱な騎士だ。そして誰よりも自分の信じるもののために、誠実な人だ。今だつてそうだ! 貴方はファイゼルとリネルを取り戻すために戦っているのでしょうか! そんな貴方だからこそ、僕は貴方に正気を取り戻してほしい! 真に信じるべきものを、思い出して欲しい!」

「無駄口を叩くな…小僧!」

「そう呼ばれるのは久しぶりだね。…でも、僕はあの時より強い!」

2人の神器の力が、どんどん上がっていく。

何か…何か私たちに打てる手は…!

「ミト。私に賭けてくれないかな?」

「サチ?」

「私の神聖術と、ミトの防御技であの矢を抑えるの。その後シノンが、デュソルバートさんを狙撃して」

「…分かった」

シノンが後ろに下がり、私とサチが構える。

やがて私たちのボルテージが、限界を迎えた。

「エンハンス・アーマメント！」

「炎よ！焼き尽くせえええええ!!」

「システムコール！ジェネレート・クライオゼリック・エレメント！アクイアス・エレメント！エアリアル・エレメント！ブリザード・シエイプ！バースト!!」

「アインクラッド流鎌防御技…【パニッシュメント・ストーム】!!」

デュソルバートの炎鳥の矢と、ユージオの青薔薇と、サチの神聖術を巻き込んだ私の防御技がぶつかる。

「つううう…アアアアアアア!!」

ギリギリの攻防の末…何とか矢を弾くことに成功した。

「アアア！」

「ユージオ！シノン！」

「咲け!!青薔薇!!」

そのままユージオの【武装完全支配術】が、デュソルバートを拘束する。

「シノン！今だ！」

「外しはしないわ。…ジ・エンドよ」

本当に終わらせてはダメよ…シノン…。

シノンの渾身の一射が、デュソルバートを打ち据えた。

「グハアアアアアア！」

氷が砕け、壁に激突するデュソルバートは、弓をと手放して、気を失ったのだった。

「…何とかなったわね…」

「ミト…」

「アスナ…何とか…あわわっ!?アスナ!?」

アスナ!?

なんで飛びついてくるの!?

びっくりしてると、アスナが泣きそうな顔で見上げてくる。

「もう!どうしてミトまで無茶するの!?!本当に姉弟揃って、むちやくちやなんだから!」

「いや、私は優月ほどむちやくちやじゃ…」

「言い訳しない!本当に心配したんだからね!分かってるの!?!」

「はい…すみません…」

結局私は、見かねたサチが止めるまで、ずっとアスナに説教させることになったのだった。

outside

「サチ！ユージオ！良かった……！」

「キリト、心配しすぎだよ」

「そうだよ！私だって戦えるんだし！」

「シン！ナイスショット！」

「ありがとう」

それぞれ労ってから、意識を取り戻したデュソルバートに事情を聞こうとしたが「その前に……この、大バカどもが！勝手な行動するなど、何度言えば分かる!!」

デュソルバートはリネルとフィゼルに、雷を落とした。

その様子を、一行は苦笑いで見つめる。

一通り説教を終えたデュソルバートは、説明を始める。

城の裏口から侵入したデュソルバートだったが、頭巾の男に敗れ、拘束。

一方のリネルとフィゼルは、城に向かう途中に捕まってしまっていた。

そして、カラントの種子はなく、既に持ち去られたのでは、というのが彼らの予想だった。

「ああああああ!!!」

しかしカヨーデの悲鳴が聞こえてきたことで、話し合いを一時中断。

慌てて駆けつけた時には、既に死にかけており、子供達の安全を聞き遂げ、消えていった。

「…後味悪いですね…」

「子供たちが無事だっただけでも、良しってことにしましょう…」

親元には、デュソルバート達が心配することに。

ようやく全てケリがついた…そう安堵した優月の耳に、予想だにできなかった出来事が聞こえた。

「ユヅキー・キリト！ルーリツドの村に、魔獣が現れました！すぐに急行しましょう！」

side 優月

どういふことだ…!?

カラント・コアは、たしかに斬ったはず！

「まさか…供給源を絶つても、全てのカラントが消えるわけでは無いってことか!？」

クソ…そんなのありかよ！

とにかく急がないと…!

「つてあれ？メデイナは？」

「多分先行した！俺たちも行くぞ！」

俺たちはルーリッドまで、最短距離を走り抜け、何とか村の前まで来る。

だがかなりの数があり、中々村まで行けない。

「優月君！ここは私達が引き受けるわ！」

「ありがとう！先輩！みんな！一気に突破するぞ！」

俺たちは何とか魔獣を蹴散らして、道を作る。

「セルカ……！」

「あ！待てアリス！」

「優月！また出たぞ！」

こんな時に邪魔くせえな……！

俺たちは速攻で片付けて、すぐにアリスを追いかけた。

どうやら間一髪だったらしい。

セルカを辛うじて助け出したアリスと合流して、目の前の魔獣の群れを討伐しようと思構える。

「お力添えます！」

そこへメデイナが、冒険者を連れて現れる。

だがこいつらは、戦えないはずだ。

「総員、構え！魔獣を蹴散らすぞ！」

「かしこまりました！救世主様！」

「…お前…やりやがったな…！」

「まさか、接触したのですか!? 私たちとの約束を破ったのですね！」

「話は後です！今は敵を倒すことが優先です！」

チツ…この女…！」

俺はこの腹立たしさを、魔獣とカラントにぶつけることに。

「畜生共が…邪魔なんだよ！」

怒りに任せるまま、とにかく俺は刀を振るい続けた。

数分後、魔獣を全て斬り伏せ、カラントを刈り取った俺たちは、アリスとキリトはセ  
ルカを送りに、ユージオは村の中を見回る。

そして俺とメディナは…

「さて…俺が納得いく、さぞかし素晴らしい言い訳があるんだろうな、メディナ||オル  
ティナノス」

「私は、私の行いが間違ってるとは思いません」

お互いに一触即発な雰囲気で、話し合いをすることに。

「彼らは戦うことを望まず、それゆえにこの村で天職を与えられた。なのにお前は彼ら



になんの断りもなく、自分の手駒にした。：相違ないな」

「はい。この北帝国を守るために、必要だと判断しました」

その心はつまり…

「近衛兵が信用出来ないから…だな」

「事実、近衛兵は立場にあぐらをかき、民を救おうとはせず！対策本部は慢性的な人手不足で、対応出来ない事案ばかりではないですか！私は冒険者たちに、北帝国の警護と巡回をお願いした！それが、北帝国の民の為になると、判断したからです！」

「だからといって、人の意志を捻じ曲げていいとでも？大した誇りだな、オルティナノスの当主殿」

「…何が言いたいのですか」

「てめえの言う、オルティナノスの誇りつてやつは、たかが知れてるなって言ってるんだよ」

民を守る…耳障りのいい言葉だ。

だがやっているのは、他人の意思を捻じ曲げ、自分の考えを強制する。

結局のところ、他の貴族と一緒だ。

「散々」高説たれてきたがよ、結局やってるのは、他の貴族どもと一緒に。はっ！この世界の貴族どもなんて、腐りきった連中ばかりだが、お前も同類か。俺の目は随分と節穴

だったらしい」

「いくら整合騎士殿とはいえ、オルティナノスへの侮辱は訂正して頂きたい！」

「上級法で自領の民や、下級貴族を踏みこむ連中と何が違う！お前のやっける事は、結局それも一緒なんだよ！そんなゲスなことで取り戻せる誇りなんてな、クソの役にも立たねえんだよ！」

「貴様アアアアアア!!」

俺に向かつて刀を振りかざすメディナだが、俺にそんな単調な攻撃なんて当たるわけなく、逆に拘束して動きを封じる。

「お前は他の貴族とは違う思ってたんだがな…。結局力に溺れただけか。…下らね、相手にする価値もない」

俺はそう吐き捨てて、メディナの拘束を解く。

「…やっぱり、対策本部は間違ってるのかもしれないな…」

「あの胡散臭い男の方が正しいと？そっちの方が自分を評価してくれるからってか？」

「じゃあどうして、最高司祭様を殺したという事実を隠していたんだ？」

「お前、それを聞いた後どうなった？あんな恐慌状態を、人界中に広めると？」

「このままでは、この人界の苦しむ人達を誰も救えない！私は、私のやり方で戦います！」

「お前みたいな勘違い野郎で救えるなら、こんな苦勞はしてねえだろうよ」

「優月!!何してるの!!!」

「メデイナも落ち着いて!!ね!？」

先輩たちが追いついてきて、俺たちを慌てて仲裁しようとする。

だが生憎と、吐いた唾は飲み込めないし、メデイナを認めることもない。

「メデイナ?…おい、優月、何があつた?」

「別に。ただの喧嘩。…まあ、引く気もないけど」

こうして俺とメデイナの間に、決定的な溝が出来たまま、一晚迎えることとなった。

## 閑話休題⑬

side 優月

翌日。

「…なあ、優月」

「気持ちにはわかるが、飯なら我慢しろ」

「何故俺のセリフがわかった…?」

何年つるんできると思ってる…。

お前の考えなんです、手に取るようにわかる。

とはいえ、残念ながら意地悪で言ってる訳では無い。

「まあキリトと言ったら、食い意地だもんね」

「央都まで、あとどれ位でしょうか?」

「半日くらいかな」

「半日!?!」

「それは…持たないかも…」

みんなそれぞれ、腹ごしらえを進言するが、残念ながら不可能だ。

「ねえ、どこかで買物しない?」

「残念ですが、不可能です」

「どうやらアリスは気づいていたらしい。」

「先程も言ったが、何も意地悪ではないのだ。」

「なんなら俺も腹減ったし。」

「…まさか…優月…アリス…」

「そう、軍資金が底をついた。思ったより長丁場になったからな」

「対策本部から調査資金という名目で、それなりの額の金を預かっており、それを俺とアリスの2人体制で管理していたのだが、予想外の長旅に資金が尽きてしまったのだ。」

「も、持ち寄ったりとかは!」

「金銭のやり取りは進めません。早めに戻った方が賢明でしょう」

「そうね。後々揉める元だわ。何より…うちは家訓的に酷い目にあう」

「顔を青くしながら呟くミトを見ながら、俺も青くなるのを実感する。」

「ええつと…お2人の家って、そんなに厳しいんですか?」

「不思議そうに尋ねるリーファに、アスナ先輩が代わりに答える。」

「2人の家は束縛が少ない分、ルールにすごく厳しいの。外泊とは自由だけど、金銭のやり取りは特に厳しいらしくて、2人は絶対に親以外にお金を借りたりはしないのよ」

「なぜアスナはそんなに詳しいの……？」

そんなやり取りを無視して、俺は2つの提案を提示する。

「さて、それはともかく。今の俺たちの選択肢は2つ。野営して狩りとかして休んだ後、出発するか。それともこのまま我慢して進むか」

「お、俺はなにかないか探してくるよ！メディナ！行くぞ！」

「え!?お、おい！キリト！」

キリトがメディナを連れて、どこかへ行くのを見送り、役割分担を決める。

「ミト、シノン。一狩りいこうぜ」

「いいわよ」

「【弓ハンター使い】の本領発揮ね」

俺はミトたちと共に、獣を狩りに向かうことに。

「僕は川に水汲みと釣りに行くよ」

「あ、じゃあ私も行くね、ユージオ君」

「あたしも行くわ！」

ユージオがアスナ先輩とリズを連れて、川へ向かうことに。

「私は何か山菜を取りに行きます！」

「あ！私も行く！」

「じゃあ2人は、俺達に付いてくること。いいね？」

「はーい！」

シリカとリーファは山菜を取りに行くらしいので、俺たち狩りチームの同伴させることに。

「それでは私はここを守りましょう」

「私も残るね。みんな行つてらっしゃい、気をつけてね」

アリスとサチは、野営地の守りを固めてくれることに。

それぞれの役割が無事決まったところで、行動を開始する。

リミットは日没前。

それまでに戻らないと、夜の山道は危険だからだ。

「行動開始！」

その結果…

「いや〜！大漁大漁！…魔獣とカラントが」

「なんで健全な狩りの予定が、モン○ンの狩りになる訳…？」

「…魔獣の肉、食べられないかしら？」

「そんなゲテモノ、死んでもお断り！」

獣狩りをしようとして俺たちは、魔獣の群れと大量のカラントの伐採をする羽目にな

り。

「こつちも釣れたよ！」

「ユージオ君が、虫が得意で助かった…」

「ユージオ、力仕事ありがとう！」

ユージオたち釣り組は、健全に楽しんだらしく。

「私たちもそこそこ集まりました！」

「薬草とかも集まりましたし、神聖術と調合出来るかもしれないね！」

リーファたち野草組も、十分な成果を上げたらしい。

「…優月！もう一狩りよ！」

「よっしゃ！大物獲るぞ！姉貴！シノン！」

「まあ、負けっぱなしは癪ね」

俺たちは再び、森に突入する。

1時間後…

「「とつたどー!!」」

「いやデカいわね!?!」

「うお!?!なんだそれ!?!イノシシか!?!」

「まるで山の主だな…」



おや、キリトたちも戻ってきたのか。

バカでかいイノシシを、3人がかりで仕留めた俺たちは、引きずって持って来たはいが

「それで? どうやって解体するのですか?」

「「…あ」」

結局俺たちは夜どうしで、巨大イノシシを解体したのだった。

そして翌日

「ねえ! 見えあれ!」

「あれは…なんだ?」

カセドラル・シダーに、赤い笠が覆っていたのだった。

Outside

「カーディナル! 何が起きてる!?!」

「おお、キリト、戻ったか!…む? ユヅキとミトとシノンはどうした?」

「あくと…風呂に直行した」

「ちよつと事情がありました…」

カーディナルのもつともな質問に、キリトとユーゾは苦笑いして答える。

「まあよい。あとで説明してやるがよい」

そうやって、カーディナルは残りのメンバーに説明を始める。

とはいえ、カーディナルも分からないことが多く、なにか特別に説明出来るものはないらしい。

「カーディナル、これ。今度のは中身が入ってるやつだ」

そうやって渡したのは、カヨーデを生み出したカラントについていた種子だ。

「うむ、先の種子は空じゃったが、これなら比較できよう」

「それと、『元老院統括代理』のハアシリアンって名前に、聞き覚えはあるか？」

「…いや、聞き覚えはないのう。そんな役職も知らん」

やはりカーディナルも聞き覚えはなく、遠征から戻ってきたベルクーリもまた、聞き覚えがないという。

「そういや、風呂場で坊主に会ったがよ。必死な顔で体中洗ってたぞ。妙に獣臭かったが、一体何してたんだ？」

「…しばらく出て来なさそうだね、3人とも」

アスナの疲れたような一言に、全員が深く頷いた。

優月が出てきたのは、それから1時間後の話。

「さて、西帝国はキリトに任せるとして、坊主、お前は北帝国の魔獣を頼む」

「はいよ。一人で行くの？」

「いや、人選はこつちで決めさせてもらった。確認しておけ」

そう言われた優月は、ベルクローリから受け取ったリストを見て、優月は思わずため息をつく。

「おっさん…これならキリトの方が…」

「ならメデイナと組むか？今のお前さんたちじゃ、油と水の方がマシじゃねえか？」

そう言われては、優月はグウの音も出ない。

やがて小さく息を吐いて、頭を掻きながら諦めたように呟く。

「分かったよ。キリトほど上手くはやれないけど、まあやるさ」

「おう、頼むぞ」

そう言われた優月は、近くのテーブルにリストを置いて、立ち去る。

そのリストには、ソルティリーナセルルト、ロニエアラベル、ティーゼシユトリーネンの名前があった。

side 優月

「えくと…北帝国にある【コールディア平原】に出た、魔獣の群れを狩りに行きます。群れということなので、常に周りを気にして、互いの間合いから離れすぎないように、死なない範囲で頑張りましょう！」

「「はー」」

…やっぱやりにくい…。

一応整合騎士として、それなりの態度を示そうと努力はしたが、こういうのは向かないんだよな…。

「あの…ユヅキ様…」

様…!?

ああ、ダメ…違和感がすごい…。

「な、何かな？」

「その…失礼だとは思いますが、私たち以上に緊張なさってませんか？」

ロニエにそう言われて、後ろで頷くティーズとソルティリーナさん。

ダメだ…我慢出来ん。

まさかの数分で限界が来るとは…。

「…悪い、その様とか、丁寧な口調とか…そういうの慣れないんだ。出来るだけフレンドリーに接してくれると助かる」

「ふれんどリー…?」

「どういう意味でしょうか？」

ああ、そうか。

伝わらないか…そうだな…。

「キリトやユージオと接するような軽さで。ソルティリーナさんも、公的な場ではともかく、今みたいな時なら、全然呼び捨てでもいいですから」

「そうですか？でしたら…もう少し落ち着いたらどうだ、ユツキ」  
そうそう、こんな感じ。

俺としてはキリトとタメなわけだし、こういうノリの方が、やりやすい。

「それでは私たちも…ユツキ先輩！頑張りましょう！」

「私たちも精一杯お役に立つように、頑張りますね！ユツキ先輩！」

「先輩…なんかいいな！それ！よく考えたら、先輩なんて呼ばれるの、初めてかも！」  
部活の時は、あまり呼ばれないしな俺。

というか、みんな何故かあまり話しかけてこないし…。

「「…ふふ」」

「うん？どうしたんだよ、笑って」

「いや何。実はな…」

なんでもここに集まる前、たまたまユージオに会ったらしく、多分堅苦しいのは嫌がられると、助言があったらしい。

「まさか、あいつにまで読まれるのか…俺…」

キリトからならともかく、まさかユージオから読まれるとは…なんというか…意外

だ。

「なんとというか、整合騎士様と一緒にの任務って初めてだったので、ホツとしちゃいました！ね、ティーゼ！」

「うん！不安もあつたけど、ユヅキ先輩なら、少し落ち着いてこなせそう！」

「実を言うと、私も少し緊張していたのだが…ユヅキならば、キリトと同じように扱えばよいのだろうか？ならば問題無さそうだ」

おっさん…まさかそこまで読んで？

まったく、大した人だよ。

「ハイハイそこまで。それじゃあ行くよ？言っておくけど、俺だからこんなに緩いんだよ？特にエルドリエとかだと、面倒くさいからね？」

俺はサラツとエルドリエを、ディスプレイつつ、みんなを上手くまとめ討伐に出る。

道中、剣の調子確かめるロニエたちを尻目に、俺は討伐対象を確認する。

「ソルティリーナさん、相談なんです…」

「君も私の事は、キリトの言うように言ってくれていいのだぞ？それで、相談とは？」

「じゃあ、リーナさんで。ここなんです…岩とか落として分断した方が楽ですかね？」

2班に分けて、残党狩りと頭を叩く班に分けてやりますか」

という訳で、頭を潰すのがロニエとティーゼ。

残党狩りが、俺とリーナさんになった。

「…見つけました。この速度なら、残り数分です！」

「偵察ご苦労、ロニエ」

現場について、すぐにポイントに移動した俺は、ロニエに偵察に行かせ、その間に分断するための仕切りを、鉄素で3人がかりで作り上げた。

「さて、リーナさんとはもかく、2人は緊張するだろ？正直に言ってごらん？」

「はい…正直緊張します…」

「私も…」

うんうん、いい反応だ。

「その緊張を大切にな。恐怖は足枷じゃない。身を守る為の指標だ。だから、恐怖は捨てるな。その緊張を忘れるな。いつだって、本能を理性で制御するんだ」

「本能を…理性で…制御する…」

「ステイ・クール…アインクラッド流の極意その一」

キリトの言葉をそのまま使って、俺は締めくくった。

後ろで深呼吸する2人を見て、俺はすぐに偵察に戻る。

「それがお前の教え方か。実感が籠ってるじゃないか」

「そりゃ込めてますからね…来た」

数は20弱…頭はあの一際デカいやつか。

「よし、リーナさん行きますよ」

「ああ！せーの…！」

リーナさんと同時に押して、仕掛けを発動する。

よし…上手く分断出来た…！

「ロニエ！ティーゼ！頼むぞ！」

「はいー！」

ロニエ達が一気に降りだしたのを見て、俺とリーナさんも、飛び降りる。

「さて…可愛い後輩達の舞台だ。邪魔はさせんよ」

「さてと…狩りの時間だ。楽しませてくれよ？」

outside

「…うん？おう！優月！ロニエにティーゼ！リーナ先輩も！おかえり」

「4人ともお疲れ様…本当に疲れてるね」

「た、ただいま戻りました…」

「キリトとユージオか…」

「俺って引き悪いのか…？」



それぞれの役目を果たすたキリトとユージオは、対策本部で優月達と会うも、あまりにも疲れきったその姿に、不思議に思う。

「な、何があつたんだ…？」

「それが…魔獣の群れが3つ現れて…」

「順次倒したと思つたら、その次。さらにその次って感じてして…」

「私達は終始迎撃だったのだが…」

「俺が原因探つたら、カラントが密集しててな…俺しか斬れないし、斬ってる端から魔獣は出てくるし…もう入れ食い状態…」

（そんな入れ食いは嫌だ…）

思わず同じことを思うキリトとユージオ。

優月はぐったりしたまま、部隊の解散を宣言。

「おっさんには明日報告するって、伝えといてくれ。…俺はもう限界だ」

そのままフラフラと、いなくなる優月。

そんな優月が、メイナの失踪を聞くのは、翌日の昼だった。

## 西帝国編第一話

side 優月

メデイナが冒険者を連れて失踪してから数日。

未だ手がかりは掴めずにいた。

俺はアスナ先輩と一緒に、西帝国にいた。

「この辺りね、魔獣の情報があったのは」

「はい。早めに片付けて、情報収集の時間を長めにとりしよう」

「…心配してるんだね、メデイナさんのこと」

心配…というより、後悔かもしれない。

確かにメデイナのやり方はやりすぎだと思っし、俺自身間違っただけとは言っていないと思っっている。

だが、やはり言い過ぎたのは事実だ。

メデイナのことを理解しようとせず、ただ頭ごなしに否定しただけ。

「…大丈夫。大丈夫だよ、優月君」

「アスナ先輩…」

「大丈夫、会えるよ。会ってちゃんとお話しよう？私もそばにいてあげる。何かあっても、私は優月君の味方だから」

「…ありがとう、先輩」

先輩の優しさと温かさに、ホツとしていると、魔獣の声が聞こえてきた。

「…先輩、行きましょう」

「うん。こつちだね」

俺達は急いで声の方へ移動して、魔獣を討伐した。

割と早く終わった討伐任務の後、俺達は周辺で聞き込みを行った。

だが大した収穫はなく

「知れたのは、『ベクタの迷子』の西帝国バージョンか」

特に気になる情報も無かった俺は、少し肩を落としていると

「ヒヤア！ゆ、優月君！」

突然先輩が飛びついてきた。

びつくりした…何事!?

「せ、先輩!?!どうたんですか!?!」

「お願い…手を繋いで帰ってくれ…?せ、戦闘中は離すから!」

「それはいいですけど、どうしたんですか?」

「だって！お化けがいるかもしれないんだよ!？」

「…もう、相変わらずお化けは苦手なんだな、アスナ先輩。

仕方ない…さっきのお返しだ。

「大丈夫…俺がいますから。俺が守りますよ」

そう言つて、俺は強く先輩の手を握つた。

「…うん。ありがとう、優月君」

そのままアスナ先輩は、まだ西帝国での搜索を続けるらしく、シノンとリーファと交代する形で、俺は対策本部に戻つたのだった。

outside

少し日にちが経つたが、未だにメデイナの手がかりは無く。

「アリス、どうだった？」

「…いえ。なんの手がかりもありませんでした」

優月は執務をしながら、続報を待ち続けた。

「ユヅキ、ちよつといい？」

「シエータ？どうした？」

話しかけてきたのは、シエータⅡシンセシスⅡトウエルブ。最優先度を誇る神器【黒百合の剣】を使う、生粋の人斬り。

その無口さから、【無音】とすら呼ばれている女性騎士だ。

「巡回中の近衛兵が、カラントを見つけたって。ついてきて欲しい」

「了解。行こうか」

「…私も同伴していいでしょうか？」

恐らく、じつとしてられなかったのだろう。

アリスがついて行きたいと言い出したことを、優月は少しだけ悩んだが、これを同意。3人でカラントを斬りに行くことに。

「魔獣を討伐した後は、また周辺住民から話を聞きましょう」

「彼女のこと、心配？」

アリスの言葉に、シエータが小さく呟く。

アリスは頷くが、同時にただ心配しているだけでは無い。

アリスの一番の懸念は…

「ハアシリアンか」

「はい。もしあの男の誘いに乗っていたら…」

「最高司祭を甦らせるのに、協力するかもってことか」

優月は苦い顔で、一番嫌な可能性を口にする。

もし蘇られたら…全てが水の泡と化す。

「…その何がいけないの?」

「…え?」

シエータの何気ない一言に、アリスが呆然と呟いた時、魔獣の鳴き声が響き渡る。声の方を確認すると、ハリネズミ型の魔獣が数体、出現していた。

「…お話は一旦やめようか。行くぞ! 飛んでくる針に注意しろ!」

優月は直ぐに飛び出して、近くの魔獣を斬りつける。

だが踏み込みが浅く、深手とはならなかった。

(クソ…。この針、邪魔くさいな…。)

優月は直ぐに針を切り落とすが、直ぐに生えてきてしまい、意味は無いと判断。

その時、魔獣の体に力が入るのを見て取った優月は、次の行動を予測した。

「針飛ばすぞ! 防衛!」

「クッ!…シエータ殿!」

優月とアリスがガードする中、シエータだけが切り払いながら進み、無防備となった魔獣を一突きで倒した。

「マジかよ!?! シエータ! しゃがめ!」

シエータの背後から攻撃しようとした魔獣を、優月は刀を伸ばして貫く。

そのまま刀を手戻すのではなく、自分の体を近づけるように元の刀身に戻して、力

ずくで薙ぎ払う。

「スウ…ハア！」

そのままソードスキル【緋扇】で、魔獣を倒すと、今度はアリスが前に出る。

「ハア！」

【金木犀の剣】の耐久値を利用して、強引に距離を詰めると、【ホリゾンタル・スクエア】で魔獣を倒した。

「よし！シエータ、最後の一体任せていいか？俺とアリスはカラントを斬る」

「ん。お願い」

優月たちは役割を分担して、無事にカラントを斬ることに成功したのだった。

sideアリス

「…お疲れ様です」

「おう。シエータも、お疲れ様」

「それじゃ私は、【西の峡谷】の警護に向かうから」

【西の峡谷】とは、西帝国最西端だ。

…正直、ここに警護はいらない気がします…ハアシリアンの件もある。

1人は置いておく必要があるかもしれない。

そう考えながら私は、シエータ殿を引き止め、さっきの言葉の意味を尋ねていた。

「最高司祭様が何をしようとしていたのか、騎士長から聞いて知った。実際にこの目で見たわけじゃないからなんとも言えないけど、騎士長の言葉なら信じられる。でも私は……最高司祭様が、完全な悪だとは思えない」

「それは……何故ですか？」

私の問いに、シエータは神器「黒百合の剣」を抜くと相変わらずの眠そうな顔で、小さく呟く。

「この剣は、暗黒界に咲く黒百合を剣に変えたもの。その時こう言ったの」

『この剣は、あなたの魂に刻まれた呪いを、形にしたものよ。性質遺伝変動数値が生み出した、殺人衝動という名の呪いをね。斬って斬って、斬り続けなさい。その血塗られた道の果てにのみ、あなたの呪いを解く鍵がある……かもしれないわ』

なんともあの方らしい、残酷で冷たく、そして僅かながらに優しく暖かい言葉だ。

「私はその意味を考え続けながら、生きていくことになった。それがいいことなのか、悪いことなのかは分からない。でも最高司祭様に与えられた物も、たしかに存在する」  
そしてシエータ殿はこう締めくくった。

もし蘇るなら、なぜあんな言葉を残したのか。

なぜ望み通りに、罪を犯した自分を眠らせてくれたのか……と。

シエータ殿の話の聞きながら、私はこの「金木犀の剣」を貰った時のことを思い出し



た。

『この剣は不朽の存在とされる、世界最古の金木犀をリソースにしたもの。あなたが信じ続ける限り、この剣は何者にも斬られない。あなたなら、この剣を信じ続けられるでしょう?』

だがあれは、私たちが騎士人形として使うために、優先度の高い武器を与えたに過ぎない。

あの人に情など、僕にも存在するはずが無い。

「:シエータ殿は、最高司祭様が蘇ったら、再び彼女に与すると?」

「分からない。その時私の魂が何を求めるかは、私自身知る由もないこと。そしてそれは、どの整合騎士も抱える問題。:あなた達以外」

そう、私たちはそれを知った上で、最高司祭様に逆らうと決めた。

いや、ユヅキはそもそもあちらの人間だ。

そして私たちには未だに、敬神モジュールが埋め込まれている状態。

今私たちを繋ぎ止めているのは、整合騎士団という集団への忠誠心だけ。

私たちは、薄氷の上を歩いているのだと、再確認させられた気がしたのだった。

side 優月

西の峡谷に向かうシエータを見送りながら、俺はこう思っていた。

…シエータって、こんなに喋るんだ。

いや、だって…【無音】とすら呼ばれるほどの無口な人だぞ。

そんな人がこんなにペラペラと喋るとは…実は結構お喋り？

「…なんというか…意外に色々考えてたんだな、あの人」

「若干失礼な言い方ですが…そうですね。彼女の言葉は正しいです。私たちは迷っている。何が正しく…一体何のために、私たちの力は存在するのか」

「…俺は、その迷いを抱く余地すらないよ」

その言葉にアリスは、ハツとしたような顔をする。

だがその問題は、既に取り越えた。

「なあ、アリス。アリスはどうしたい？ 整合騎士とか、作られた存在だとか…そういうのは一旦置いてよ。アリスって女は、どうしたいんだ？」

「私が…アリスがしたいこと…」

アリスが難しい顔をして、考え込み出す。

それを黙って待っていると、恐る恐る口を開いた。

「私は…人界の民を兵器にしてしまう、そんな計画は許せない。それゆえ、最高司祭様復活など、決して認められない。ですがそれは…」

「作られた騎士の意志か、アリスの意志か分からない…と言いたいのか？」

「はい…」

「ばーか。どんなアリスでも、アリスには変わりねえよ」

俺はアリスを軽くデコピンしながら、カラリと笑う。

「どんな私も私…?」

「騎士のお前も、ユージオが取り戻したいお前も、同じアリスって女の子だってこと。わざわざ区別するから、ごつちやになるのさ。お前が見て、聞いて、感じたことが大事なんだぜ?」

そう言って、俺はアリスの肩を叩く。

「さ、聞き込みと行こうぜ」

結局聞き込みは、大した成果は上げられず、俺たちはセントリアに戻るのだった。

## 西帝国編第二話

outside

魔獣を倒したり、カラントを斬りつつ、メデイナの搜索を続ける一行だったが、有益な情報は掴めずにいた。

そんなある日の会議にて、優月が厳しい顔で遅れて会議にやってきた。

「失礼します、騎士長」

「おうユツキ。遅かったな、なんかあったか？」

「はい。近衛兵から少々妙な報告が…」

「妙な報告？話してみろ」

少し迷った顔をしてから、優月はゆっくりと口を開いた。

「西帝国で、落雷が鳴り止まないという報告が。それは西に進めば進むほど激しくなり、西の峡谷に近寄れないほどとも、報告が上がっています」

「西の峡谷ですって!?!西の峡谷には…!」

「ああ、シエータがいる」

つまり、シエータが孤立しているということ。

そしてこの異常事態には、カラントが絡んでいると予想する優月。

「その根拠は？」

「西帝国には、雷を操る竜の伝承があります。恐らく、西の守護竜のことだと」

「守護竜……」

「ユージオ？ どうした？」

「実は、北帝国の守護竜は殺されていて……」

（アドミニストレータか……。そんなことできるのは、1人しかない）

恐らく、ベルクーリに命令して殺させたのだと、優月は思ったが、それは当たりだ。

他にもないベルクーリ自身が、北の守護竜を殺したと公言していたのだ。

そしてその事実を、優月は知らない。

「メディナも気になるけど、流石に無視できないわね」

「そうだね。その守護竜のことも調べつつ、メディナさんの情報も集まればいいけれど

……」

ミトとアスナの発言に全員が賛成し、調査に乗り出すことに。

「待つて！ 私たちも行きたい！」

「ついでに行きます」

そんな中、リネルとフィゼルがついて行くと名乗りを上げた。

「お前たち、まだ懲りてないのか」

デュソルバートがそれを止めるも、逆に丸め込まれてしまい、最終的に認めざるを得なくなる。

「口では勝てないのね…」

「いかにも口喧嘩は弱そうだもんな…」

優月とシノンは、そんな取り留めのないことをヒソヒソ話していたのだった。

side 優月

早速西帝国に乗り込んだ俺たちを待っていたのは、激しく轟く雷鳴だった。

「す、すごい音…」

「西の峡谷からは、まだかなり距離があるんだがな…」

「な、なんだか怖いです…」

俺達は警戒しながらも、出来るだけ急いで移動していると、カラントの前に祈りを捧げる人々がいた。

…なんだあれ？

「あんなに寄ってたかって、何してるんだ？」

「話を聞いてみる？なにか情報が掴めるかもしれないよ？」

「そうね。メイナさんのことも、何かわかるかもしれないものね」

サチの言葉に、先輩が賛成してみんなで移動することに。代表して、キリトが尋ねる。

「すみません。ここで一体何を？」

「落雷が収まるように、最高司祭様に祈りを捧げているのです」

「救いを待っているのです」

救い…？

アドミニストレータに祈りを捧げる、というのはまだ分かるが、救いを待っているのはどういうことだ？

なんでもここにいる人達は、みんな落雷の影響で、天職や大切なものを失ってしまっただけらしい。

「そんな時、『真聖公理教会』の方々が、私たちに使命を与えてくださったのです」

…今、すげえ不穏な言葉が出てきたんだが？

「真聖公理教会？」

なんでもそいつらの教えは、今のこの状況は全て、偽りの公理教会が引き起こしたものだ、と言う触れているらしい。

そして救いを求めるのなら、救世主と彼女が選んだ民の元へ集え、そう言っているとのこと。

「選ばれし民に救世主…それはまるで…」

「あなたはその救世主に、あつたことはありませんか？」

「いいえ、私たちは謁見を許可されていません。選ばれし民の方々に、ここで祈りを捧げるように、指示されたのです」

その祈らせる意味は、一体なんなんだ…？

シノンは何か気づいたのか、難しい顔で悩んでいた。

その時、カラントから魔獣が現れた。

「下がってろ！」

「その真聖公理教会とやらは、ロクでもない教義を広めてるらしいな」

俺たちが魔獣を狩るために、身構えた瞬間、カラントの更に奥から矢が飛んできて、魔獣を倒した。

「おー！かかったかかった！生け贄作戦成功！」

「こういうのは、囷作戦に限るよなく！」

生け贄…囷…こいつら、そういうことか。

…ゲスが。

「あんた達、どういうつもり？」

「非道だわ！」



ミトや先輩が糾弾するが、どこ吹く風。

「おいおい、いきなり何キレてんだよ？別に俺たちは救世主様の命令に従ってるだけだぜ？」

「出来るだけ多く身を集めろって言うから、効率的な方法を試してるだけだし？」

「実を集める…？なんのために？」

ユージオの問いかけにも、答えずそいつらは俺達の装備と…女性陣をゲスな目で見ていた。

「なあ、それにしてもよ。こいつらしい装備してね？しかも、超可愛いし綺麗じゃん？」

「いっそ奪うか！」

そう言つて武器を構えるそいつらに、俺は深いため息をついて、抜刀一閃。

【真意の斬撃】で、思いつき吹き飛ばす。

「ガハア!?!」

「逃がさねえよ」

俺は直ぐに刃の形を変えて、縛り付けてから俺の前に転がす。

「…で？誰から何を奪うって？ん？」

「て…てめえ…ゴホオ!?!」

「あ？誰が口答えしろって？」

俺が見下ろしていると、キリトが隣に立つ。

その顔は……酷く怒っていた。

「おい優月……俺の分も忘れるなよ？」

「ふ、2人とも落ち着いて！」

「そうだよ！私達は大丈夫だから！」

「俺達が大丈夫じゃない！」

結局暴走する俺達は、先輩とサチに止められている間に、他のみんなが話を聞くことに。

俺達が落ち着きを取り戻した頃には、ほとんどが終わっていて、何故か一般人が眠っていた。

「これ、どうなってんの？」

「私達が眠られたのよん」

「痛くないですよ」

リネルとフィゼルが、自慢げに話す。

どうやら2人が安全に無力化したらしい。

「そうか。よくやった、偉いぞ」

俺は2人の頭を撫でながら、内心首を傾げた。

カラントを守りつつ、魔獣を狩る。

この矛盾した行動に、一体なんの意味が…？

「ねえ、キリト…さっきのこの人達の言葉…」

「ああ、装備に自作戦…まるであそこで使う言葉だな。なあ、アリス。一度こいつらを連れて帰っていいか？調べたいことがある」

そのままカラントを斬り、カーディナルに調べさせたが、結局何も分からずじまいだった。

sideキリト

俺達は一度、冒険者を連れて引き返したが、何も分からずじまいだった。

「接触を受けた冒険者は、メディナ殿に逆らわなくなる」

「恐らく、命令で口止めしてあるんだろ。大した忠誠心だぜ」

アリスと優月が、どこか呆れたように呟く。

あの忠誠の強さは、大したものだった。

「わざわざ曲解して人を囮に使う連中だけど、あの忠誠心だけは本物ってわけね」

「全く、御大層な遵守精神ね」

「2人とも、その辺にして」

皮肉たっぷりと言うシノンとミトに、サチがまあまあと宥める。

「でも、なんだかおかしいよ」

「そうね。これまでの冒険者はそんな行動とらなかつたものね」

リーファとファナティオが、俺と同じ疑問を口にした。

そうだ、確かに彼らは今まで、進んでこんなことをすることは無かつた。

一体何が…？

「メデイナの背後に、誰かの意思がある…？」

「…ハアシリアン」

ユージオの問いに、アスナが小さくハアシリアンの名前を上げた。

やはりそうなるのか…。

「だが、シエータ様も放つては置けまい。西の峡谷から動けないのだから。我らが今優先すべきは、そちらではないのか」

そう、メデイナだけではなく、エルドリエの言う通り、シエータの方も問題だ。

とはいえ、メデイナたちも放つては置けない。

どうするべきだ…！

「優月…」

「…エルドリエの言い分も間違えではないが、あいつらはなんの罪もない一般人を犠牲することも、厭わない連中だ」

「そうなれば、結局は最終的にイタチ（つ）こ（つ）こ（つ）になつちまう…つとことか？」

思わず優月を頼つてしまうと、優月はエルドリエの意見を肯定しつつ、メデイナたちも放つては置けないと言い、それにベルクーリさんも同意してくれた。

「結局のところ、俺達が取れる手は、西の峽谷に向かいつつ、道中カラントを斬りながら、メデイナの情報を集め、可能ならその問題を取り除く…それしかない」

優月がそうまとめた時、対策本部に大型の魔獣が現れたという報告が来た。

座標はちようど、西の峽谷に向かうルートだった。

「…騎士長、このまま俺達が行くよ」

「わかった、気をつけろよ、坊主」

「分かつてるよ、おっさん」

こうして俺たちは、再び西帝国に向かうのだった。

## 西帝国編第三話

side 優月

俺たちはミルディア平原の湖畔まで来ていた。

そこで再び、カラントを守る冒険者に出会った。

「なんだお前ら」

「悪いがその花を斬らせてもらおう」

キリト：…そんなバカ正直に言わなくても…。

案の定抵抗されるが、その後ろでこっそりとサチが神聖術の詠唱を唱えていた。

「…デイスチャージ！」

サチの発動した神聖術が、カラントを焼き尽くした。

おお…ナイスコントロール。

「サ、サチ!? 当たったかどうかするのですか!？」

「大丈夫。絶対に当たらない…そのつもりでやったから」

「つもりって…」

アリスにはまだ分からないだろうが、この世界ではイメージ力がものを言う。

つまり、当たらないというイメージが強いほど、神聖術の精度もあがるということだ。やはりここでも、カラントに実る実を集めていたらしいが、その目的は知らされていないらしい。

「お兄さん？」

そこへいつもメデイナと一緒にいた、冒険者の女の子が近づいてくる。

「メデイナ殿の居場所を知りませんか？」

「知らない人に教えるなど、命令されています」

「メデイナさん……この子にまでそんな命令を……」

アリスの質問にそう返事をする女の子に、アスナ先輩が痛ましそうに呟く。

「俺たちは、友達メデイナに会いたいんだ。教えてもらえないか？」

「友達……お兄さんは、メデイナ様のお友達ですよね」

「おや……風向きが変わってきたぞ……？」

「……私たちは皆にいます」

「お、おい!？」

「知らない人ではないので、命令には背いていません」

仲間の静止を無視して、俺たちに情報を教えてくれた。

彼女はメデイナ笑顔が見たくて、わざわざ教えてくれたのだとか。

本当にいい友達だな。

彼女と別れてから、俺たちはやることを確認する。

「砦か…。ミネルダの岩場に使つてない砦があるな」

「恐らくそこでしょう」

「彼女のためにも、メデイナとちゃんと話そう」

俺たちはすぐに砦に向かったが、案の定門前払い。

どうするかと思つていたところに、村からの納品があるらしく、俺たちはそれを利用することに。

しかしそこまですても、かなり怪しまれた結果、キリトがかなり強引に入り込むことに。

「まさかここまでとは…」

「彼らは…全員冒険者なのですか？」

「多分…」

冒険者がこんなに居たとはな…。

「お前たちに問います。ここにメデイナ殿がいるはずですか？」

「貴様らに答える義務は無い。立ち去られよ」

「メデイナ！ いるんだろう！」



「友達が来た。そう伝えてくれませんか？」

「救世主様に馴れ馴れしいぞ！」

アリスやキリトやユーゾがそう言うのと、冒険者たちが苛立った様子で詰め寄ってくる。

だがそれを、メデイナ自身が止めた。

「待て！謁見を許可しよう。その者たちをこちらへ」

そう言うのと、すぐに道を開けてくれた。

…お山の大将だな、ありや。

「…悪い、3人も。任せていいか？また余計なこと言いそう」

「…分かりました」

「キリト、私たちも村にいるね」

「分かった」

そう言うって俺たちは、その場を離れてキリトたちの帰りを待つことに。

「…謝らなくてよかったの？」

「今じゃない。今は届かない。…そんな気がしたんです」

アスナ先輩の心配そうな声に、俺はそう返すことしか出来ず…そして、戻ってきたキリトたちの様子を見て、失敗に終わったのだと理解した。

## Outside

「…そう、メデイナがそんなことを」

「やつぱりメデイナが指示を出して、それを遂行するために、あんなマネをしてたのね」  
サチとリズベツトが、冷静に話をまとめる。

「なんだか…信じられないよ…」

「根はいい人だと思ってたのに…」

その一方でリーファとシリカは、悲しそうに呟く。

「メデイナはやつぱり、あのハアシリアンとかいえやつについたのね…」

「メデイナ…バカなことを…」

「あいつは、力の使い方を間違えた。…第2のアドミニストレータの誕生ってわけだ」  
シノンとミトと優月が、どこか冷たい声でそう呟く。

「…でも、今は止められない…私たちは、他にもやるべきことがある。だから引いたんでしょ…」

「ああ、雷を止めないとな。ところでそっちは何か分かったのか？」

キリトたちがメデイナと話してる間に、優月たちは雷や竜の伝承を調べていた。

「やはり西の守護竜とみて間違えなさそうだが、それ以上はなにも」

「ただ、ラウバル緑地にあるグリフォアの町に、落雷があったらしいの」

「よし、ならそこに向かおう」

その町に身向かって、情報収集を続け一行だが、大きな成果は無く、分かったのは優月の言っていた竜の伝承はかなり廃れていることと、西の峡谷の近くにいる老人が、細かい事情を知っている可能性がある、ということだけだった。

「二度、竜の伝承を再確認しましょう」

「ええつと確か…『西の峡谷に住みし竜は、雷を自在に操るといふ。竜はこの土地を愛し、ひとたびこの地を穢すものが現れれば、怒りとともに雷を落とし続けた。やがて人々は竜を敬い、竜もそれに応えた。守護者となった竜は、峡谷で人々を見守り続ける』…だっけ？」

「そうですね。…やはり、雷を落としているのは、竜とみるべきですね」

「そうですね。早く老人の元に向かいますよ」

西の峡谷に向けて進み始めた一行だが、橋が壊れていて、それを直すよう依頼された職人も、依頼した貴族が金をケチついたらしく、材料が手に入らないと相談を受ける。

「仕方ない、俺たちが集めるよ」

そう言つて材料をかき集め、どうにか橋を再建してもらい、やっと西の峡谷の手前に位置する、ヴァリンド台地群に辿り着いた。

side 優月

「ここまで来ると、雷そのものが見えるな…」

「はい。すごい落雷…」

「明らかに異常ですね…。昔、おへそを取られるよって、おじいちゃんから言われました…」

シリカの言葉に、懐かしさを覚え、思わず小さく笑う。

しかしそんな空気を、

「みんな！あれ！」

リズベットの緊迫した声が、切り裂いた。

酷く傷ついた鎧を着た男が、ふらつきながらこちらの方へ歩いてくる。

「どうした？大丈夫か？」

「さ、触るな…！反逆者が！早く仲間を…呼びにいかなくては…！」

反逆者…？

こいつもしかして…

「あなた…冒険者ですか？」

「さ、され！さもなくば斬る！」

そう言つて剣を構える男を見て、思わずため息が出る。

「すっかり敵判定か…」

「メデイナ殿の指示があった以上、仕方の無いことでしょう…」

「助けを呼びに行くと言っていたが、一体何があった？」

「そんな身体じゃ、助けなんて呼べないよ！」

キリトとサチの言葉に全く答えず、頑なに俺たちを突き放そうとしてくる。

「…あなたは、魔獣の討伐を命じられ、しかしそれがこなせなかった…そういうことですね」

「アスナ先輩…？」

突然先輩が一歩前に出て、冒険者と話を始めた。

一体何をやる気で…？

「取引しましょう。あなたたちの代わりに、私たちがその魔獣を倒すわ。居場所を教えてください。そうすれば怪我の治療もする」

「…教える！だから仲間を助けてくれ！」

…流石女子校育ちの、心理戦のプロだ。

こういう相手を妥協させるのは、本当に上手い。

俺がやっても、ただの圧力で押し切るだけだから、こんなスマートには出来ないや。

サチの神聖術で治療された冒険者に従い、たどり着いた先には、体中にビツシリと苔を覆った、デカイカエルが。

「…キモ」

「ボヤかないで。行くわよ!」

俺たちは一気に、そのカエルに突撃する。

相手はデカくてもカエル、跳躍力は高く、それなりに離れていたはずの距離も、直ぐに詰めて来た。

「っ?!回避!」

俺たちは散開して、何とかその突進をやり過ごす。

その横から、俺とキリトが挟み込むように斬りつけるも、ぶよぶよした肉に阻まれて、上手く剣が通らない。

「こいつ…!」

「ある意味頑丈だな…!」

「スイッチ!」

俺とキリトの後から、ミトとリーファが突撃するが、それも同じ結果に。

「たあああああ!」

その隙に、リズが正面からハンマーで殴るが、それも通らない。

「何よこいつ…!感触が気持ち悪い…!?!」

「リズさん!?!避けてください!」

カエルが体を起こして何かを…まさか!?  
顎を叩きつける気か!?

「リズ! 動け!」

「嘘…間に合わ…!?!」

「リズウウウ!!」

咄嗟にキリトが割り込んで、全身でそれを受け止め支える。

「グ…グガアアア!」

「き、キリト!?!」

俺は直ぐにキリトの元へ走って、支えようとする。

その反対側では、ユージオが駆け出して来ていた。

「ユヅキ! 合わせて!」

「…っ! おう! 行くぞ!」

「ハアアアアア!!」

俺とユージオが同時に、カエルの顎をかち上げて、少し浮かせる。

その僅かの隙間を、シノンの矢と、サチの神聖術が狙撃する。

「シッ!」

「デイスチャージ!」

さらに浮かされたカエルの体に、今度はアスナ先輩とミトの追撃が入る。

「ミト！お願い！」

「行くわよ…そりやあああああ！」

「フウツ!!」

顎を強く撃ち抜かれたカエルは、大きくのけぞり、ひっくり返りそうになる。

しかしあと少し留まられてしまい、ダメかと思つた瞬間、2つの影が駆け抜けた。

「シリカちゃん！合わせて！」

「はい！行きましょう！リーファさん！」

体を支えていた2本の後ろ足を、リーファとシリカが斬り、ついにひっくり返るカエル。

よし、ここだ！

「全員、総攻撃！一気に畳みかけろ！」

こうして俺たちは、カエルの魔獣を袋叩きにして、何とか倒したのだった。

outside

カラントから出た魔獣を倒した彼らだが、その前には助けた冒険者たちが立ち塞がっていた。

「つたく、何してんだか…」



「今斬らないと、また同じことの繰り返しだからな」

優月とキリトが一步前を出て、カラントを斬りにいこうとした時

「帰りが遅いと思えば…一体なぜその者たちといる」

後ろからメデイナが現れた。

突然のメデイナの登場に、全員が驚いていると、冒険者たちが説明を始める。

「わ、我々の相手をしていた魔獣が、想定外に強く…!」

「怪我をしたものに退却させ、助けを呼ばせたのですが、代わりに反逆者たちが…」

「助けてあげたのに、随分な言い草ね!」

「仕方ないよ。メデイナ、怪我をした人なら治療したから、大丈夫だよ」

あまりの言い方にリズが起こるが、サチがそれを宥めつつ怪我人の治療は済んでいることを教えるが、メデイナはそれを無視する。

「…」

「ちよつと、無視はないんじゃない?」

「…もう、あなたたちとは関係がない」

シノンの言葉にやつと、反応を示すメデイナにキリトが近づいて話し出す。

「メデイナ、このカラントを斬らないと、また魔獣が発生する」

「ああ、分かっている」

「メデイナはオルティナノス家当主として、人々を導き、民を救うんじゃないのか？」

「今もそのつもりだ。カラントが魔獣を発生させる度に、冒険者に対応させている。カラントとは、最高司祭様を復活させるための触媒、そしてカラントがつける生命の実は、最高司祭様の命の源」

そしてそのためなら、どんな犠牲が出てもやむなしと、メデイナが言う。

「…もういいだろう。そこをどいてくれ」

「メデイナ…」

キリトが近づこうとした瞬間、メデイナが剣を抜き、キリトを斬りつけた。

「ガハッ!? どう…して…!?!」

「人ではなく、最高司祭様を殺した大罪人なら、禁忌目録に違反しない」

その言葉を受け、キリトは完全に認識を違えてしまったのだと悟った。

サチが慌てて手当する中、今度はアリスとメデイナが言い争う。

「メデイナ殿! 一体どういうつもり…」

「私の盾となれ!」

あろう事か、メデイナは冒険者たちを盾にした。

「アリス様。…そして、ユツキ様。あなた方も早く目を覚ましてください。最高司祭様

は、公理教会の頂点、この人界を救う、ただ一人のお方」

「それは違う！あの方はこの世界の人々を苦しめようとしている」

優月はメデイナの言葉を無視して、成り行きを見守ることに。

「一体なんの証拠があるのです？私は閉ざされた最上階で、確かに真実を見たのです」

「…真実？本当に？」

「ここで初めて、優月が口を開いた。

「お前が見た真実とやらは、一体なんだった？」

「なんだっただと…？キリトが最高司祭様を貫いたところだ！」

「…ああ、確かにそこは真実だな。…そこだけを見ていればの話だが」

どこか呆れたような口調で、たんたんと言語する優月に、メデイナは少し圧され出す。

「そこだけ…？」

「その前までを見てないだろ？例えば…300人の人間を武器に変えて作った、剣の自動人形とか」

「…え？」

「…お前が見た真実…一体誰がそれが全てだと言った？ハアシリアンか。一部始終全てを見た訳でもないのに、真実を見たなんて口にするな。お前が見たのは…ただの一部分に過ぎない」

それだけ言うと、また優月は黙り込む。

次に話し出したのは、アリスだ。

「…あなたが何を見たにせよ、人界に魔獣が解き放たれ、それを野放しにする行為は間違っています！あなたはそれほどにまで、武功を立てたいのですか！」

「アリス様。あなたは今、何を信じ、なんのために戦っているのですか？」

「それは…!？」

その言葉はアリスの…いや、ほとんどの整合騎士にとって突き刺さる言葉だった。

今まで最高司祭を信じて戦ってきた彼らにとって、今の状況は心の支えを奪われた状態だ。

「あなたに分かるはずがない…。完璧で強く美しいアリス様に、地を這いつくばってきた私のことなんて、分かるはずがない！何より…最高司祭様に愛されてきたあなたたちに、愛されなかったものの痛みなんて、分かるはずがない」

「それは違います。あの方は私たちを、ただの道具として利用してきました。今、あなたが冒険者たちを利用しているように」

その言葉が意外だったのか、メディナは驚いたような顔で、反芻した。

「私が…利用している…?」

「あなたは目的を果たすために、仲間の怪我すら気にとめず、盾にするのも厭わない。最

高司祭様も、私たちを手駒として利用してきました。今のあなたは…まるで、最高司祭様みたいです」

「…なんと言われようと、私はオルティナノス家の名誉を取り戻す。それだけです」  
その時、2人のほんのわずかの隙について

「システムコール…」

サチが詠唱を終わらせようとしていた。

だがそれより早く、メデイナが一手早く動いた。

「皆の者！武器を捨て、花を守れ！死んでも離れるな！」

メデイナは冒険者に花のすぐ側に行かせて、花を守るように命令した。

「こうすれば、あなたたちは攻撃出来ないでしょう」

「うっ…!？」

「サチ、やめて。…大丈夫よ」

サチは詠唱を止めて、一歩下がった。

その時、一際激しい落雷が落ちた。

「…どンドン落雷が酷くなってきたわね」

「シエータさん…」

「…キリト、これ以上は…」

「…今は見逃してやる。立ち去れ。さもなくば…今から冒険者たちに、自分を傷つけるように命令する」

「その必要はねえよ」

その時、優月が再び口を開いた。

その事に、背を向けていたメデイナは、不思議そうに振り返る。

「どういう事ですか？」

「もう終わった」

「はあ？何を言ってる…」

メデイナが言い終わるより早く、突如カラントの下から太い何か飛び出して、カラントを貫いた。

「なっ!?これは…!?!」

「魅せろ、【舞姫】」

その太い何かは形を変え、花びら状になったかと思えば、カラントの内側から一気に飛び出して、カラントを破壊した。

その様子を見て、メデイナはやつとその正体に気がついた。

「まさかこれは…あなたの神器！」

その正体は優月の神器【桜刀：舞姫】だった。

メデイナと話している間に、地面を貫き下からカラントを破壊したのだ。

「さてと……ここは斬ったが、メデイナ。お前に頼みがある」

「……なんですか？」

「カラントを斬らないが故に発生した魔獣、全部お前たちが責任もって片づけろ。いいな？」

「……承知した」

「メデイナさん。……無茶しないでね」

「……余計な世話だ」

こうして彼らはこの場を離れて、西の峡谷を直指すことになったのだった。

## 西帝国編第四話

side 優月

カラントのあつた洞窟を出て、俺たちは今後の方向性を話し合っていた。

「はあ…。話には聞いてたけど、まさかメデイナがあんなことになつちやうなんて…」

「なんか…シヨックです。せつかく仲良くなれたつて思つたんですけど…」

「いくら事情があつても、それでもね」

「ねえ、お兄ちゃん。オルティナノス家の汚名つて、そんなに酷いものなの？」

「そういえば俺も、そこは詳しく知らないな。」

キリト曰く、最高司祭に大昔から重大任務を与えられていたオルティナノス家だが、それにずっと成功出来ず、とうとう欠陥品だと言われて以来、ずっと不遇の扱いを受けてきたらしい。

「まあそれはそれとして…あんなね、あんなマネしてどうすんのよ」

「そうだよ。謝るんじゃないの？」

グツ…そこを突かれると痛い…。

でも、あそこで謝つても意味なさそうだし。



「ま、まあ！それはちゃんと話し合える時に話すよ！今はそれは置いて、雷を何とかしよう！」

「そらしたね（わね）」

呆れたように言う2人は無視して、俺はみんなを先に急がせる。

街で聞いた老人に会いにいくと、なんとすぐくあつさりと、解決方法を教えてくれた。かつて、竜は人間に自身の雷を避けさせるために、一本の槍を授けたという。

その銘は「銀紫蘭の槍」という。

その槍は雷を纏っており、対消滅させられるとか。

その槍は今、峡谷近くにある古い遺跡にあるらしく、そこに入るには西帝国に散らばる3つの鍵がいるらしい。

「分かりました。よしみんな、早速手分けして……」

「待て待て、落ち着きのない若者じやのう。これを持ってきて」

直ぐに出ようとしたキリトを呼び止めて、老人は炭を渡してきた。

それは落雷で焼けた木の欠片らしく、お守りとして使われるらしい。

こうして俺たちは、鍵を探すことになったのだった。

outside

まずその遺跡……ドルゴ聖跡に行くことにした一行は、カラント・クラスタに阻まれて

しまい、まずはカラントを一掃することに。

無事カラントを斬り終えた後、そこでその周辺を管理している人物に出会う。

「ここは銀紫蘭の槍という槍を封印した、最後の約束の場所らしいんだ」

「最後の約束？」

昔、暗黒界のオークの侵攻から人々を守るべく、力を振るった竜だったが、その雷が人々をも殺してしまつたらしい。

その時その中を生き残つた女剣士に授けたのが、銀紫蘭の槍だったのだ。

『いつか再び、人々を傷つけるようなことがあれば、この槍で止めて欲しい』

…そういう約束と共に。

そして女剣士の子孫は、この聖跡に3つの鍵を施し、その鍵を女剣士の像に隠した。

「なるほど…そんな哀しい話があつたのですね」

「でも…どこかロマンチックかも」

「あんたらがもし、ここの鍵が欲しいって言うなら、場所は教えられるぞ」

そう言われて、鍵の在処を教えてもらった一行は、三組に分かれて行動することに。

無事全部の鍵を集めて、銀紫蘭の槍を手にしたところで、予想外の人物がやってきた。

「よお、嬢ちゃんに坊主」

「小父様?!」

「おっさん!?!どうしたんだよ!?!」

現れたのは、ベルクーリだった。

「近衛兵から連絡が来てな。近くの貴族の領地に、尋常じゃねえ数の魔獣が発生したらしくてな、それを伝えるには飛竜がいちばん早いんで、来たっつーわけよ」

「そんなに…?」

「ああ、一刻も早く峡谷に向かつて欲しいが、人命がかかっているんでな。俺も手伝うぜ」  
「小父様が共に来てくれるなら心強いです。急いで現場に向かいますよう」

「おっさんが来るなら、俺たちいらなくね?」

などと軽口を叩く優月だったが…

「…いや多いな」

あまりの数に、その軽口を訂正しなくてはいけなかった。

「なんともまあ…よりどりみどりだな」

「そんなの嫌よ」

小型の虫の魔獣から大型の獣の魔獣まで、種類と数には尽きないほどの群れだったのだ。

「それにしても、なぜこれほどの魔獣が!?!」

「よほど密集して、カラントが生えているってことか…?」

「この異常事態には、対策本部総出であたるべきだと思つてな。お前さんたちにも声をかけたつっわけだ」

「よし、ツーマンセルでいこう」

「ツーマンセル？」

優月の英語に、ユージオが不思議そうに首を傾げて尋ねる。

その様子を見た優月は、咳払いを一つして、言い直した。

「2人1組つてこと。お互いの背中を守るように動こう。おっさん、シノンとサチの盾お願い。2人は後方から援護射撃」

「おう。ちゃんと守つてやるぞ」

「射線に入らないでよ」

「みんな、無茶しないでね」

「よし…行くぞ！」

優月の号令で、突撃する一行。

「シッ！」

まず優月は、目の前にいた虫型の魔獣を一刀で斬り捨てる。

そのまま前に出て、すくい上げるように斬りあげる。

「フッ！」

そのすくい上げられた魔獣は、シノンの矢が射抜く。

「ユヅキ！前に出過ぎです！」

優月の背後を、アリスが守る。

その様子に小さく笑いながら、優月は目の前の魔獣を斬り裂く。

「俺の背中はアリスたちが守ってくれるだろ？」

「っ!?まったく…仕方ありませんね！」

そう言つて、アリスと優月は背中合わせで剣を構える。

力強く敵を薙ぎ払うアリスと、繊細に弱点を突く優月。

揺るがない信頼からか、2人はどこか楽しげに笑う。

そんな様子を…

「…」

「アスナ：目が笑つてないわよ。その苛立ちは魔獣に向けてね」

「そうだね。とりあえず根絶やしにしようか♪」

「根絶やし!?!」

などと、とてつもなく物騒なことを言いながら細剣を振るうアスナと、その圧力に震えながら鎌を振るミトなのだった。

side 優月

俺たちは順調に魔獣の数を削っていった。

俺とアリスが組むほかに、キリトとユージオが息ぴったりの連携で倒していき、アスナ先輩とミトもどんとどんと倒していく。

リズとシリカとリーファは3人で組み、こちらも危なげなく倒していた。

「はあ…はあ…流石に…疲れたな…」

「ええ…ですが、後はあの2体です」

「ふう…よし、頑張ろう！」

「さっさと終わらせるわよ」

残ったのは大型の魔獣2体。

ただ、まだカラントが健在なため、俺とアリス、アスナ先輩とミトの4人で、大型魔獣2体を倒すことに。

構えると獣の魔獣が飛びかかってきた。

俺たちすぐに散開して、やり過ごしてから足を攻撃する。

「シッ！」

「ハア！」

「フッ！」

「ヤア！」

体勢を崩したところを、俺はソードスキル【絶空】で切り裂こうとして、構えた瞬間。  
「ユツキー！」

「っ?!アリス!?!」

アリスが俺を突き飛ばして、咄嗟に剣を構えた。

そこへカエルの魔獣が飛んできて、アリスが何とか踏ん張って守ってくれた。

「うう…!?重い…!」

「ミト!」

「アスナー!行つて!」

反対側から先輩がミトの鎌に乗って、いつぞやの俺みたいに投げ飛ばされてきた。

「ヤア!」

そのまま空中で【スター・スプラッシュ】を発動して、カエル型魔獣を吹き飛ばす。

俺はその隙にアリスを回収して、一度みんなで距離をとった。

「すまない、アリス。助かった」

「これで1つ、借りは返したということだ」

「…言ってくれる」

さてと、2体同時に相手取るのは、流石にキツいか…?

「私とアリスで、カエルを叩くわ。アスナと優月は獣の方をお願い」

たしかに頑丈なカエルにはミトとアリスが、すばしっこい獣には俺と先輩の方がいいか。

よし、それで行こう。

「先輩、行きますよ！」

「うん！」

「アリス！やるわよ！」

「ええ！」

俺と先輩が同時に飛び出して、魔獣に斬りかかる。

しかしそれより早く、魔獣がその足を振り下ろしてきた。

「回避！」

咄嗟に同じ方向へ飛んで避けてから、先輩が顎を、俺が片目を斬ってダメージを与える。

叫びながら回転して、俺たちを薙ぎ払おうとすると魔獣から一度離れて、再度突撃。

「ハア！」

「ヤア！」

俺の【緋扇】と、先輩の【カドラプル・ペイン】が炸裂。

魔獣が大きくよろけた隙に、先輩がしかけた。



「優月君！離れて！」

その声に従って距離を取った途端、エンジンのような音を響かせて、先輩が魔獣に突撃。

細剣最上位スキル【フラッシング・ペネトレーター】が、魔獣を貫いた。

雄叫びを上げながらも、獣の本能か、動けない先輩に反撃しようとする魔獣の前に立ち塞がり、俺もまた奥の手を切る。

「フツ……ハアアア！」

刀最上位スキル【散華】。

カウンター技のこれは、使い所をミスると、一気に隙だらけになるそんな諸刃の剣。ただ今は、魔獣の攻撃が分かりやすかったため、上手くハマった。

「……ふう」

無数の斬撃で切り刻んだ俺は、そのまま納刀して魔獣を斬ったのだった。

## 西帝国編第五話

outside

魔獣を倒した4人は、すぐに先行組を追いかけた。追いついた先では、既にカラントが斬られていた。

「遅くなりました」

「おう、嬢ちゃんたち、坊主」

「おっさん、状況は？」

「キリトの坊主が神聖術で目眩しをして、リネルとフィゼルから預かったつー眠り薬で市民を無力化して斬ったところだ」

「…無茶苦茶するな、キリト…」

優月は呆れながらため息をつき、アリスたちは啞然とした様子でそれを聞く。

「んで、やはり頭巾の男が種を植えてるみたいだぜ」

「頭巾の男…ハアシリアンか」

「ああ。奴のしつぽ掴むのに、お前さん方にも協力してもらいたい」

ベルクーリはそういった後、隊を二つに分けて、搜索に動いた。

メンバーはベルクーリ、優月、アリス、キリト、ユージオ。残りアスナをリーダーに探している。

そして廃城前で、ついに頭巾の男を捉えた。

side 優月

「よお、やつと見つけたぜ」

「…デイスチャージ!」

頭巾の男は俺の声に振り向いて、神聖術を放ってきた。

そんなもの、効くかよ!

「そつちがその気なら、俺達も容赦しない!」

俺達はその攻撃を防ぎ、俺とキリトで斬り掛かる。

だがハアシリアンを斬る直前、何やら硬い感触があつたが、とりあえずそれは強引に斬り裂いた。

今のは…!?

「っ!?!」

慌てて避けた拍子に、頭巾が取れ、その下の顔が顔になった。

「もはや頭巾で、顔を隠す気すらないとは…。やはりお前だったのですね、ハアシリアン」

そんなアリスの確信めいていた言葉には全く反応せず、ハアシリアンは俺達を怒鳴りつけた。

「貴様らアアアアアアア!!この大罪人どもめがアアアアアアアアアアア!!」

「っ!?」

「その醜く浅ましい剣で、最高司祭様より賜った衣服に傷をつけるとは、許されざる所業!!…いや、しかし…そう悪くはないか。刀の方はともかく、その黒い剣は最高司祭様を貫いたもの。それが私の衣服に触れた…ああ…この汚れた私に、あの麗しき肢体と魂を貫いたものが触れたのだ…」

「…キモツ」

「何を言ってるんだ…?」

キリトは困惑気味に眩き、俺は本音が漏れ出た。

ハアシリアンが何故かトランスしており、あまりにも気持ち悪い。

生理的に無理。

「ハハハハハ!褒めて差し上げましょう!服だけとはいえ、私の心意技を斬るとは!流石は薄汚い大罪人ども!何と浅ましく、愚かで身の程知らずか。その蛮勇に答え、是非とも生まれたことを後悔するほどの痛みを味あわせてやりたいところですが…」

ペラペラと話し続けていたハアシリアンが突然、口を止めてバカにするように笑う。

「生憎、忙しいので相手は出来ません」

逃げる気か……!

「逃がすわけねえだろ、変態野郎」

「お前、メデイナに何を吹き込んだ! 冒険者たちに何させる気だ!」

俺とキリトがそれぞれ剣を構えるが、それを下らなさそうに見るハアシリアン。

「質問に全て答えが返ってくると期待するなんて、やはり大罪人どもは傲慢だな。忙しいと言っただけです。それでは、失礼を」

だから逃がさねえっつーの!

俺がすぐに踏み込もうとした瞬間

「まあまあそう言わず。お坊ちゃん、ゆっくりしてけよ……!」

おっさんが先に動いた。

あと距離を一步で……!?

「シッ! フウ! ハア!」

だがおっさんの連撃は、ハアシリアンの心意技で防がれる。

だが、それでも無駄だぜ……!

「……もしや聞いていなかったのですか? 無駄ですよ」

そう不敵に笑うハアシリアン。

何を根拠に…？

俺はそう思ったが、おっさんの【時穿剣】の武装完全支配術、【空斬】を防いだことで、その疑問を吹っ飛んだ。

「は、はあ!？」

「そんな…!？」

あ、有り得ねえ…おっさんの攻撃を弾くだと!？」

しかもあれは未来を斬る空斬だぞ!

正確には斬撃が残るのだが、それはなんでもいい。

あの心意技、どれだけ硬いんだ!

「私の未来を斬るなど、バカげたことを考えますねえ。ハハハ! 実に傑作だ! いいことを教えて差し上げましょう。私の心意の盾は、全ての未来に対しても有効なのです」

「心意の…盾だと!」

チィ!

どんな原理だ!？」

「ああ…親切に話しすぎましたね。まったく、古びた騎士人形との会話は疲れる。グエイスチャージ!」

しまった!

また……!

「では、近いうちに再会を楽しみにしていますよ。騎士人形に薄汚れた大罪人ども  
こうして俺たちは、ハアシリアンに逃げられてしまった。」

「…クソ!」

「まさか俺の攻撃すら弾くとはな。未来が斬れねえとなると、面白えじゃねえか」

…おい、おっさん。

何楽しそうに話してんだよ。

「…小父様、まさか少し楽しんでいらっしやいます?」

「やっぱりそう思うか?」

「そうじゃねえよ。対策を練らねえとな、って思ったただけだ」

俺とアリスの視線に、おっさんはそれでも楽しそうに笑う。

やれやれ…。

「あいつの目的は一体…?」

「種を集める事じゃないの?」

「だとしたら、わざわざ自分が現れる必要は無いはずだ」

キリトとユー・ジオの考察を聞いていると、魔獣の鳴き声が聞こえる。

「またか…!」

「急ごう！」

outside

「よし。これで片付いたな」

一息ついた優月達だが、近衛兵からの通達で、まだ被害が出ていることを知る。

「な、なに!?そこは私の領地だぞ!き、貴様!必ずや守り抜くのだぞ!」

だがあまりにも傲慢な貴族の物言いに、優月とアリスが怒り出す。

「テメエ!誰に向かつて言つてやがる!」

「騎士長閣下へのその言葉!今すぐ訂正しなさい!」

「やめろお前ら!…へーへー、言われなくてもちちゃんと守つたやるよ。それが俺の仕

事つてやつだ」

そんな2人を静止させつつ、ベルクーリは貴族の言葉に、軽いノリで答える。

それが余計に2人を苛立たせた。

「小父様!どうしてあの様な者達に、そのような言葉を!」

「嬢ちゃん。坊主。それじゃいっちょよ行つてくる。また後で合流しよう」

ベルクーリはアリス達を、無視するように立ち去る。

そんな姿を困惑気味に見つめるアリスだが、そのアリスにキリトが声をかける。

「アリス。俺達も魔獣を倒そう」



「…分かりました」

「ユヅキ。いけるかい？」

「ああ。…さっさと片付けるぞ」

優月もユージオに説得され、今は魔獣討伐を優先することに。

それから少しして、やっと片付けた一行は、もう一度合流した。

「よし。これでやっと終わったな」

「…小父様、先程はなぜ、あの貴族たちにあんな態度とつたのです？」

合流してすぐ、早速アリスが切り出した。

「ああ。ちくいちち反応するのも面倒だろ。言わせときやいいのよ」

「だからって言って、あんな態度を許す必要も無い！あんたはそんな軽んじられていい

男じゃない」

ベルクーリの軽い言葉に、優月はすぐに反論する。

「んな事言われてもよお。俺はそんなご大層な身分じゃねえからな」

「あんな連中、助けてやる義務がどこにある！」

「最高司祭様は、人命を犠牲にする残酷な支配者であり、この世界に神はいないことはわかりました。小父様は一体、この世界で何を信じ、なんの為に戦っているのですか？」

優月の叫びと、アリスの迷いに満ちた疑問を受け、ベルクーリは優しく笑う。

「まずは…嬢ちゃん。俺はな、この世界を救うことに、なんの疑問も抱いちやいねえんだ」

「ですがそれは、最高司祭様がお命じになったこと。それではまるで…」

「大事な記憶をぶっこ抜かれて、人形であることを強制されていた時と、なんも変わらな…ってか？そう思つて、嬢ちゃんは戸惑つて分からなくなっている…そうだよな？」

アリスの言葉を予測するように話すベルクリーの言葉に、アリスは黙つて頷く。

次に優月を見て、ベルクリーは続きを話す。

「確かに坊主の意見は正論だ。平民を苦しめて、なんの罰も受けずに生きている貴族たちがいる。そんなことより、真に救うべき人がいるんじゃないやねえのか…。俺も、坊主達とほとんど同じ意見だ」

「…ほとんど？」

ベルクリーのほとんど、という言葉に、優月は首を傾げる。

「おっさん…いや、ベルクリー。あなたの正義はどこにある？」

優月のその目は、肩書きを抜きにした、一人の男としての問いかけだった。

故にベルクリーも、その視線をしっかりと受け止める。

「俺の正義ねえ…そう言われると難しんだけどよ。『人界を守れ』。そう最高司祭殿に命じられて、俺はずつとその責務を果たそうとしてきた。だが、最高司祭殿のやり方には、

何度も疑問を抱いた。我慢出来ねえほど苛立ったこともあった」

「だったら……!」

「だが俺は、あのワガママなお姫さんの願いを叶えてやろうとするのは、嫌いじゃなかった」

遮るような優月の言葉を、さらに上から被せて遮るように、ベルクーリが優しくそう呟いた。

「今でも憎んじやいねえよ。あの人を完全悪とは、捉えきれねえ。そこは坊主もそんなんじやねえか?」

「それは……」

（確かにそうだ。確かに俺も、最高司祭を巨悪とは認めていても、あの理念、思想だけは否定出来ない）

アドミニストレータが大切なのは、己の欲を叶えるためのこの世界。

優月が大切なのは、この世界に生きる人々の自由と尊厳。

己の掲げるもののために戦った：極端な話、そういうことなのだ。

肯定しないけど、完全に否定も出来ない。

それが優月の率直な意見だ。

「俺もそうさ。掲げるものが変わった以上、戦わないといけない。それだけさ。それは

敬神：…何とかが決めたことじゃねえ。俺自身が決めたことだ」

「小父様までシエータ殿と同じことを…何故です？あの人は残酷なシンセサイズの秘儀を、あなたに何度も行った。小父様にとって最高司祭様とは一体何なのですか？私たちが整合騎士とは、一体何なのですか？」

アリスの苦しみにもがく様な叫びに、ベルクーリは優しく声をかける。

「俺は作られた意識か、元々あつた意識かなんて、大した問題じゃねえと思ってる」

アリスはベルクーリの言葉に、シエータと話した後、優月と話した時の言葉を思い出した。

（小父様も優月と同じことを…。どんな私も私…か）

「今あるものが全てだ。俺は何度記憶を消されても、今までベルクーリ・シンセシス・ワンとして生きてきた。たとえこれまで信じてきたものが嘘だったとしても、なんも変わらねえよ」

「それが…あなたの正義…」

「だから俺はこれからも守るのさ。か弱い人々や、つくづく愚かな奴らが、それぞれ生きる、この人界をな。そして…今度こそ、あのお姫さまを眠らせてやるのさ」

優月はベルクーリの言葉を、しっかりと噛み締めて、大きく息を吐く。

（俺はまだ、整合騎士という立場に縛られてるのか…）

根付いた意識が中々抜けない：そう改めて認識する優月だった。

sideアリス

…小父様は全てを受け入れるのですね。

これまでのなにかも受め止め、それを是としてこれからも戦い続けるのですね。

「坊主は踏ん切りがついたみてえだな。嬢ちゃんはどうかんだい？嬢ちゃんの意味はど

こにある？」

「私の意思…」

私の意思はどこにあるのでしょうか？

いくら私が思っても、それは私じゃない。

私はただの作られた人形。

「私は…アリス・ツベルクじゃない。作られた人格です。その事実を変えようがな

い」

「そうかよ。でもよ？嬢ちゃんはこの6年を何も無かったと否定できるのかい？」

それは…出来ない。

整合騎士見習いとなり、多くの稽古を重ね、この金木犀の剣と出会い、イーデイス殿や小父様達と出会い、エルドリエという弟子に出会い…そして、この無鉄砲で自由気ままな男と出会えた。

この6年は、決して無意味では無い。

「ただのお人形が、そんなに悩んだり苦しんだりするのか？」

その言葉が、私に突き刺さり、つい涙がこぼれる。

そんな私の頬に、優月が手巾をあてた。

「…手巾、持つてるのですね」

「お前にこっぴどく怒られたからな」

そうですね…それもまた、私の6年の一コマですね。

ニヤリと笑うユヅキから、手巾を受け取り、そのまま涙を拭う。

「…洗って返します」

「はいよ。…なあ、アリス。俺はお前しか知らない。だから、俺にとつてのアリスはお前しかいないんだ。そんなお前を、お前自身が否定するのは、ちよつと悲しいぜ」

そう言って笑いかけるユヅキを見て、私はつい嬉しく思う。

私という存在だけを見てくれる、ユヅキの視線が。

「…つたく。坊主も大概罪作りだな」

「はあ？何の話さ？」

小父様の言葉に、不思議そうにするユヅキを見て小さく笑う。

確かにこの男は、そういう節がある。

なのに公然とアスナ一筋なのは、何故か腹が立つ。

「…私はシンセサイズの秘儀により、幼少期の記憶と、大切な友人どの記憶を奪われた。そして騎士となり、そのうえで色んなものを見てきた」

醜いものも見てきたし、残酷なことも知ってきた。

自分が作られた存在だと知ったあとも、私は様々な人と出会い、自分の生き方を考えさせられた。

「私は確かに、アリス・シンセシス・サーティとして存在する。人々と関わり、戸惑いながら生きている」

私は…とても小さいことに囚われていたのかもしれないね。

確かに小父様の言う通り、私には私の意思がある。

「私はセルカや、この世界の道理によって苦しめられてる人々を救いたい。そして、この世界そのものが最高司祭様や外の者達に揺るがされるのなら、私はその残酷な行為に叛逆したい」

それこそが、本当の私が望むことです。

その正義は作られたものでも、命じられたものでも無い。

「…嬢ちゃんらしい言葉だな。誰よりも優しく強い」

そんな小父様の顔は、とても穏やかなものだった。

## 西帝国編第六話

sideキリト

優月とアリスの悩みが解決したところで、俺達も遂に本命に移った。

俺達の前では、落雷が降り続けている。

「…よし、行ってくる」

俺は銀紫蘭の槍を手に、雷の中に入っていく。

この槍…本当に大丈夫だよな？

「キリト！ビビるなよ！心意で負けるな！」

「んなニヤニヤ顔で言っても説得力ねえよ！」

優月の無責任なからかいに、ついツツコミを入れるが、ここで俺の緊張が少し和らいだ。

「…よしー！」

必ず成功させる…だから力を貸してくれ、銀紫蘭の槍！

「ハアアアアアア！」

俺が銀紫蘭の槍を掲げた直後、雷が槍に落ちてくる。



くう…重い！

だが止まらないんだ！

「…ゼアアアアアアアアア!!」

耐えきつた俺は、そのまま雷を逆流させ、雷雲を消し飛ばしす事に成功させた。

「よ、よし…！」

死ぬかと思った…。

「キリト大丈夫かい!？」

「生きてるな、キリト」

「あ、ああ…。正直死ぬかと思った…」

「待ってて。天命を回復させるね。システムコール…」

サチの神聖術で天命値を回復させた俺は、そのまま西の峡谷へと入る。

「あ、鉱石!?すごく大きいわね…！」

リズが地面から飛び出している岩に駆け寄る。

だが俺はその直前、モゾリと動いたのを見た。

「リズ! 離れろ!」

「え? キヤ!？」

俺は咄嗟にリズに飛び掛り、何とかその場を離れる。

その直後、鉾石の下からかきの爪が飛び出し、地面を抉った。

「大丈夫か、リズ！」

「え、ええ……／＼／＼ありがとう……／＼／＼」

リズの無事を確認して、辺りを見渡すと、鉾石を背負ったヤドカニと、虫型の魔獣が俺達を囲んでいた。

「ミト、リズ、アリスはカニを！私とシリカちゃんとしのノンは虫！残りは状況に応じて臨機応変に対応して！」

アスナの速い決断で、俺達はすぐに戦闘を開始した。

「リズ！カニを叩くぞ！」

「ええ！行くわよ！」

俺は接近してカニのタゲをとる。

攻撃を躲しつつ俺に意識がいった所で、リズとスイッチする。

「スイッチ！」

「ヤアアアアア！」

リズのハンマーが、鉾石を叩き割る。

ここで俺達は再びスイッチする。

「スイッチ！」

「ゼアアアアアア！」

むき出しになったカニを、俺は「ホリゾンタル・スクエア」で切り裂いた。

やはりコイツら、鉋石の下は脆いな。

「みんな！カニは鉋石を砕いた下は脆い！そこを狙ってくれ！」

「いいでしょう！ユージオ！トドメは任せましたよ！」

「うん！任せてアリス！」

「OK！優月！追いつきなさいよ！」

「そっちこそ！チンタラするなよ！」

どうやらアリスはユージオと。

ミトは優月と組んでるらしい。

他のみんなは、4人のフォローか…よし！

「リズ！俺達も行くぞ！」

「いっくわよー！」

俺達も直ぐに参戦して、何とかこの場を切り抜けたのだった。

side 優月

何とか切り抜けた俺達はそのまま進み、ついに最奥の祭壇まで来た。

そしてそこで、ドラゴンの雄叫びを聞いた。

「今のって……」

「魔獣の比じゃない……!」

「全員警戒! 気をつけろ!」

俺は声を張り上げ、警戒を促す。

空の向こうを睨んでいると、高速で迫る何かを見つけた。

「優月くん! 来たよ!」

先輩の声が聞こえた直後、俺たちの頭上を飛んでいくドラゴンを見て、無意識に体が震えた。

圧倒的存在感……恐怖を通り越して畏怖すら抱かせる、自然の化身。

「西の守護竜……ヴァレントール」

『汝ら、如何なる理由があつて、この地に足を踏み入れた』

喋れるのか……!?

俺は驚きつつも、ヴァレントールと向き合う。

「雷を止めるためにここまで来たんだ。あんたの原因なんだろう! 雷を止めてくれ!」

『雷を止める? 何故?』

何故って……決まってるだろう。

「多くの人々が被害にあつてる!」

「人々だけではありません。獣や植物も……このままでは、この地は焼け野原になってしまします！」

『だから何なのだと、我は問うている』

キリトやアリスの言葉も、無情に切り捨てるヴァレントール。

『この大地とそこ住まう生命は我、ヴァレントールの所有物に過ぎぬ。故に我が下す選択は、この土地における摂理に等しい。落雷もその一つ……。何者も異を唱えてはならぬ』

「そんな……そ、それじゃあ僕たちはどうすれば……!?!」

ユージオの戸惑う声に、ヴァレントールは残酷に告げた。

『決まっておろう……焼かれよ。それが我の選択に対する、汝らのすべきことだ』

シヨックを受けたような顔をするユージオだが、直ぐにユージオも反論した。

「あなたは人々から崇められ、そして守る存在なのでしょう？だからあなたは銀紫蘭の槍を、人々に与えたんじゃないのですか！」

そうだ。

ヴァレントールは己の落雷から守るために、銀紫蘭の槍を用意させたはず。

『銀紫蘭の槍……そうか。それを使い峡谷へと入ったのだな。……あの選択が、我の最大の過ちだったか』

「過ちなんかじゃない！あんたは間違いない、人々の守護者だったはずだ！」

『我を守護者などという、下らぬ役割で呼ぶな。守護ではない。所有物を維持していたにすぎぬ。だが…それも過去のこと。我は過ちを正す』

過ちを正す…か。

「ヴァレントール。あんたの目的はなんだ？」

『この地を…生命を再び、我の支配下に置き、正しい状態へと戻す。そのための雷だ。破壊により、畏怖と信奉を生み出す。…それこそ、我の選択なのだ』

…ここまでだな。

これ以上の言葉のやり取りは無意味か。

「そんなこと…させねえよ。あんたがどんな存在であつても、支配欲だけで命を好き勝手しようとしてる奴を、許す訳にはいかない」

俺が刀を抜くと、皆も続いて武器を構える。

『その自意識こそが、汝らの種族の欠点なのだ。大いなる力による絶対的な支配…それこそが秩序を形成するのだ』

違う。

その先にあるのは秩序じゃない。

デイストピアだ。

『さあ、小さき者共よ。覚悟はよいな?…その下等な命を消し炭へと変えてやろう』  
「来るぞ! 戦闘開始!」

outside

「ハアアアアアアア!」

「ゼアアアアアアア!」

「セリヤアアアアア!」

アリスとユージオ、優月とキリト、アスナとミトが一斉に斬り掛かる。

だがその手応えに、全員が顔を顰めた。

「かったあ…!?!」

「タフすぎる…!」

「ミトさん! アスナさん! スイッチ!」

「行くわよリーファ!」

ミトたちとリーファ、リズがスイッチし、さらにそこへ、シノンの矢とサチの神聖術が衝突する。

だがそれも、その硬い鱗に弾かれた。

「どのゲームでも龍鱗は固いって言われるけど、本当だったな」

「んな事言ってる場合か、キリト」

そんな2人の目の前で、ヴァレントールの前足に雷が溜められる。

「ヤバい……！」

「全員散開！電撃来るぞ！」

2人の指示で一気に散らばった直後、雷が周囲に落ちる。

辛うじて全員逃れたが、その衝撃で辺り一定が土煙に覆われた。

「キリト！合わせろ！」

「ああ！せーの！」

心意によって強化された、刀系ソードスキルの【旋風車】とセルルト流の【輪渦】によつて、土煙が一気に払われる。

その先では、2人に向かって右前足を振り上げるヴァレントールの姿が。

「……うっそお……！」

「2人とも！危ない！」

シノンが弓系ソードスキルの【シングル・ショット】で目を射抜く。

『ぬぐう！』

目までは硬くなく、痛みにもがいて体勢を崩したヴァレントール。

そして残された足を目掛けて、アリス達は一気に畳み掛けた。

「皆さん！合わせてください！」



「「「「はあああああ！」「」」」」

全員のソードスキルが、左前足に叩き込まれ、転倒するヴァレントール。

「チャンス！ 畳み掛けて！」

「「「エンハンス・アーマメント！！」「」」

「咲け！ 青薔薇！！！」

ユージオの青薔薇の剣が、ヴァレントールの体を氷で拘束する。

「乱れ咲け！ 花たち！！！」

「吹き荒れろ！ 花たち！！！」

さらに優月とアリスの桜と金木犀が、ヴァレントールに襲いかかる。

そして

「ゼリヤアアアアアア！！！」

キリトの武装完全支配術が、ヴァレントールを飲み込む。

(すごい……これが神器の力。これなら流石に……！)

神器四振り分の武装完全支配術を受け、流石のヴァレントールも倒れたと思っていた

アスナだが、煙の向こうで動く影に、警戒を強める。

「まだ終わってないわ！ 警戒して！」

『小さき者共よ……覚悟せよ！』

ヴァレントールは電撃を溜め、ブレスの用意をしていた。

「マズイよ！逃げないと……！」

「いや、ここは逃げ場はないわ！」

リーファの声をリズが否定するが、その声は焦っている。

迎撃以外の選択肢は無いが、ドラゴンのブレスに対して、守りきる自信が無い。

(…やるしかない)

「リリース・リコレクション！」

優月は大きく息を吐き、鞘の中で花びら状にした刃を乱回転させる。

「うっ……ぐう……！」

肉が焼ける匂いと音に、アスナとミトが驚いたように反応する。

「優月くん!?何してるの!?!」

「優月!?あなた手が!?!」

「キリト……！」

「っ?!…手段は何でもいい!全員、優月を守れ!!」

キリトの鋭い声に、それぞれの手段で防衛手段に入る。

「優月。私の剣に乗りなさい。ヴァレントールの元まで道を作ります」

「頼むぞ……！」

『滅びよー!』

そうしてついに、ヴァレントールのブレスが放たれる。

極太の雷光に、全員が力を振り絞る。

「「「「「デイスチャージ!!」「」」」」

「「エンハンス・アーマメント!!」「」

真正面からぶつかり合う衝撃で、峡谷の祭壇が崩壊しそうになる。

そしてその衝撃の中、優月が金木犀の剣の上を駆け抜け、ヴァレントールの眼前に現れる。

『何っ!?!』

「終わりだ…!絶技!「百火桜乱」!!!」

バックドラフト現象により爆発的に燃え上がる炎が、ヴァレントールに襲いかかる。

『グオオオオオオ!?!』

そしてヴァレントールは悲鳴を上げ、その炎に焼かれるのだった。

side 優月

「はあ…はあ…」

俺は倒れ伏すヴァレントールを見ながら、自分の腕の火傷の痛みに、もがき苦しむ。

クツソ…マジでキツイな…この技…!

「優月くん！大丈夫!？」

「あんた何よあの技…!? 酷い…! アスナ!」

俺はアスナ先輩から治療をしてもらいつつ、刀を拾い腰に差し直す。

…よし、もう大丈夫だな。

刀の天命は、自然回復させるしかないから、しばらく使えない。

「ありがとう、先輩。もう大丈夫です」

「…もう! もう! あんな危険な技、使うなら先に言つて!」

「本当に、無茶苦茶なんだから…!」

泣きそうなアスナ先輩と怒るミトにタジタジになっていると、キリトたちの方は、

ヴァレントールと話をしているらしい。

俺もそこに行き、ヴァレントールにあることを尋ねた。

「…なあ、ヴァレントール。あんたが本当に恐怖による支配を望むなら、どうして街や村を襲わなかった?」

確かにヴァレントールの落とす雷には、誰もが恐怖していた。

だから実際に街に落とし、人々を殺したろうが、ヴァレントールとしても示しがついただろう。

『…無論、それも考えた。だが試みる段階になる度に、我の中にかつてはあつた何かが、

それを拒否した』

かつてはあつた何か…？

一体なんのことを…？

『我に後悔はない。あるのは、不思議なほどの安堵のみ…』

ヴァレントールがそれでいいやら、それでもいいが…。

そんな油断がいけなかった。

突然ヴァレントールに向けて、強力な神聖術が放たれ、トドメを刺した。

「っ!?なんだ!?!」

「キリト!上!」

サチの指さした先にいたのは、ハアシリアンだった。

あの野郎…どうして!

「ハアシリアン!」

「あなた、なぜ!」

「竜とはこうも脆弱な存在だったのでしょうか? 舞台装置としては派手なのに、随分と失望させてくれます。期待外れだがまあいい。僅かながら時間を稼いでくれましたし」

時間稼ぎ…だと?

こいつ、何をしていた?

「ヴァレントールは敗北を認めていた！なぜトドメを刺した！」

「では逆に聞きますが、なぜ生かす必要があるのです？全ての生き物には等しく、幕引きの瞬間が存在する。それに：浅ましい動物風情が人語を話すなど、最高司祭様への冒涇だとは思いませんか？」

「冒涇？一体何を言ってるんだ？」

「聞くとところによると、この守護竜とやらは妙な知識を持ったが故に、最高司祭様を罵ったそうです。この卑しく無価値な肉の塊が、これ以上人界の留まり続けていても意味がない」

ダメだ。

こいつの理屈は聞いても意味が無い。

理解できる要素が一つもない。

だから俺は、そうそうに話を切り上げ、本題に踏み込むことにした。

「お前、何が目的でここに来た？」

「…はて？なんのことでしょう？」

「これまでお前は、整合騎士をカラントで縛り拘束してきた。何が目的だ？」

「お前たち如き大罪人に、答える必要はありませんね」

そうかよ。

だつたら…

「無理やり聞き出すか」

そう言つて俺は、刀を抜き構える。

「おや？やめた方がいいですよ。今のあなたでは、消耗しきつてますから、どう足掻いても私には勝てませんよ」

言つてくれるじゃねえか…！

俺はハアシリアンの挑発に、わざと乗る形で斬りかかるが、それをキリトに止められた。

「優月。…ここは俺に任せろ」

そう言つてキリトは、真つ直ぐハアシリアンに斬りかかった。

「おや？選手交代ですか？まあどちらでも構いませんよ。どうせ私の心意の盾は破れない」

ハアシリアンの言葉通り、キリトは心意の盾を破れなかった。

「ほら、言つたでしょう？…とはいえ、邪魔されても困ります。真なる盾に、あなたのお手を務めてもらいましょう」

そう言つてハアシリアンの背後に現れたのは、メデイナと冒険者達だ。

「それでは、旧友との再会を楽しまれるといい。救世主様。そして…許されざる大罪人

「よ」

本気の殺意と侮蔑を込めた視線で、キリトを睨み立ち去るハアシリアン。

それを追いかけようとするキリトを阻むメデイナ。

「我が最初で最後の友よ。ここで決着としよう」

そう言つてメデイナは、冒険者たちに手出し無用と、俺達の侵攻を命懸けで阻むよう指示を出す。

「…分かつた。メデイナがその気なら、俺も本気でやる」

そう宣言したキリトは、すっかり夜空の剣を構え、メデイナと睨み合う。

全ては、この決闘に委ねられたって訳だ。

そしてついに、2人が戦い出したのだった。



## 西帝国編第七話

sideキリト

「メディナ！」

「キリト！」

俺はメディナと剣を混じえながら、彼女との出会いを振り返っていた。

俺たちの出会いは、ルーリッド村を出た直後だ。

魔獣に囲まれていたメディナを、俺とユージオは助けようとしたんだ。

「私の名はメディナ！意志を継ぎ、戦う者だ！」

俺達はそのままザッカリアまで進み、そこで別れた。

それからしばらく経ち、俺達は修剣学院で再開したんだ。

あれは…そう、リーナ先輩から、課外授業のお誘いを受けた時に、回復薬を買うことになって、店を指していた時だ。

「久しぶりだな、メディナ」

「え？…ほんとだ！メディナだ！」

だが再会したメディナは、どこか暗く、旅の時に感じた鋭さは悪い意味で無くなって

いた。

そしてそこで、初めてオルティナノスの不評の話を聞いたんだ。

それから：いや、もつと前から、メデイナは一人で戦ってきたんだ。

でも、もう違う。

俺が：俺たちがいる。

「メデイナアアアアアア!!!」

「キリトオオオオオオ!!!」

俺は過去を思いながら、【夜空の剣】を振るう。

俺の縦切りを躲して、放たれる横切りに、俺は剣をあわせて力づくで弾く。

「ハアアアアアアアア!!!」

俺のソードスキルとメデイナのソードスキルが、真正面からぶつかる。

そのまま鏝迫り合いながら、俺たちは言葉をもぶつけ合う。

「クツ！負けてたまるか！」

「メデイナ！お前はなんのために戦ってるんだ！」

「最高司祭様を復活させ、オルティナノス家を再興させる。ただそれだけだ！それだけ

が、私の存在意義だ！」

「本当にそれだけなのか！冒険者も何もかもを犠牲にするのか！」

「そうだ！お前ですらどうなってもいいんだ！」

俺はメデイナの攻撃を躲し、返す剣でメデイナに斬り掛かる。

メデイナは罅迫り合うのを嫌ったのか、俺の腹を蹴って距離をとる。

「クソ！なんで届かない!?やはり私が欠陥品だからか……！」

「違う！それはメデイナが、本当の目的を見失ってるからだ！」

「私は何も変わっていない！学院に入った時から……！父を失ったあの時から！」

そう言つてメデイナが刀を構える。

この感じ……決めに来る気か！

俺も負けじと心意を込めてながら、こっそりと神聖術唱えて、全力の一撃で迎え撃つ。

だがその直前、メデイナの友達が割つて入った。

「なぜ……!?邪魔をするなど言つたはずだ！」

「その人は神聖術を唱えていました。攻撃ならば、メデイナ様に当たっていたかもしれ

ません」

この子……俺の詠唱に気付いてたのか!?

「そんなことは理由にならない！お前は私に刃向かうのか！なぜお前は、私の命令に逆

らうー！」

「私は……あなたの友達だからです！」

outside

「ツ!?友…達…」

彼女の言葉に、メディナが呆然と剣を下ろした。

(…そうだ。あの時は命令ではなくお願いだつて。でも、いつしかそれが命令になり…  
そして…)

そんなメディナへ、キリトが声をかける。

「まだ間に合うぜ、メディナ。メディナが本当になりたいことはなんなんだ?こんな風に、人を利用して何かを掴み取る事なのか?」

「私が本当に望むこと…」

——望むように生きなさい、メディナ。私は家の事なんて、どうでもいいんだ。お前が望むように生きてくれたら、それでいい。

メディナの脳裏に、父の言葉が過ぎる。

メディナとて、自分の望みは分かっている。

だがその資格が、もう自分にはない。

「あ…メディナ」

そんなメディナに、優月が近付く。

髪をガシガシとかきながら、ゴモゴモする優月に、アスナがそつと背中を押す。

「…先輩…。すう…はあ…。メディナ、ごめん！」

「ユ、ユツキ様…!？」

優月の勢いよく降ろされた頭に、困惑気味な声を出すメディナ。

「メディナのことを全部否定して、俺の一方的な考えを押し付けてた。お前にも譲れないものがあつたのに、それを侮辱した。本当にごめん！」

「ユツキ様…」

そこへさらに、アリスも近付き、深く頭を下げた。

「私からも謝罪を。あなたの苦しみに寄り添えず、あなたを一方的に悪と断じてしまいました。申し訳ありません」

「アリス様…。いえ、あなた方から見たら、確かにその通りです。…私は自分が完全に正しいとは、今では思えない」

そんな2人の謝罪に、メディナは己を罰するように返す。

「人間は皆、己の正義に従っているだけで、完全には正しくない」  
「…アリス様？」

アリスは他の整合騎士には内緒にするよう念を押してから、メディナに自分の過去を打ち明けた。

「…ルーリッド村に、あるお転婆な少女がいました。彼女は神聖術師見習いとして、勉強

に励む日々を送っていた。毎日、親友の少年たちにお弁当をたっぷり作って持っている、2人と食べる安息日を、何よりも楽しみにしていました。ですがある日、少女はあつる罪を犯し、セントラル・カセドラルへ連行された」

その言葉を聞いたメイナが、有り得ないものを見たかのように呆然と呟く。

「そんな…!?禁忌目録を破ったというのですか!?!」

「ええ。…そして少女は大切な記憶を最高司祭様に奪われ、新たな人間に生まれ変わることを余儀なくされました。それが…アリス・シンセシス・サーティ。最高司祭様に作られた、甚大な力を持った、整合騎士という名の兵器」

「…」

あまりにも衝撃的な事実にも、メイナは何も言えず、ただ息だけが漏れた。

「だからこそ私はあなたの接触を見た時、彼らと自分がどうしても重ねてしまった。故に、あなたの行動を咎めてしまったのかもしれない」

「…私こそ。そんなことも知らず、あなたに酷い言葉をかけてしまった」

申し訳なさそうなメイナの言葉に、アリスは小さく首を振り、穏やかに声をかける。「いいえ。それにあなたと関わったことで、私はより自分のことを見つめることが出来た」

偽りの人格と行動理念を植え付けられ、大切な記憶を抹消する…そんなアドミニスト

レータの所業の残酷さは、計り知れない。

「整合騎士の身分にならなければ、出会えなかった人達や、得られた絆、失った代わりに手に入れたものもある」

そう言いながら、アリスは優月の肩を叩く。

驚いた顔をした優月だが、直ぐに小さく笑い、アリスの肩を叩く。

「私はたとえ、この人格が偽りであったとしても、今の人格を否定したくない。そんなことは小さいことなのです」

「あなたは…最高司祭様を許すのこのうのですか？大切な思い出も、自分という存在も奪われたのに」

「ええ。私が過ごした時間、記憶、築いた絆は、作られた偽りなどではない」

それを否定することは、整合騎士そのもの否定だと、アリスは告げる。

そして、メデイナの望む道を進めばいい…そう告げる。

それは突き放すのではなく、優しく背中を押し出すような言葉だ。

「私の…望む道…」

「メデイナ。俺はまた、メデイナと一緒に歩きたいよ」

迷うメデイナに、キリトが声をかける。

「キリト…」

「メデイナがそれを望まないなら強要はできない。でも諦めたくないんだ。メデイナは大切な仲間だ！今でも信じてる！」

「…本当に…バカな奴」

（…なぜお前は、私の望みを理解しているんだ？）

メデイナの望みは家名を取り戻すことでも、偽りの軍勢を率いて賞賛されることでもなかった。

（お前からの信頼を受けて、共に戦うことだったつんだ）

side 優月

その時、突然地震が起きる。

「キャ!？」

「先輩!」

俺は慌てて先輩を支えて、周りを見渡す。

かなり激しい戦いだったから、祭壇自体が脆くなっている。

一体何が起きて!?

「最高司祭様の生命の源に揃ったのだろう」

メデイナたちはカラントの実を、カセドラルの秘匿領域へと隠し、その神聖力を元に、最高司祭を甦らせようとしていたらしい。



「…キリト。まずはシエータが先だ」

何がともあれ、まずはシエータが優先だ。

今更ジタバタしてもどうしようもない。

「だな…。メディナ、通してくれないか？」

「負けた以上、従わざるを得ない。みんな、通してやってくれ」

冒険者たちに道を開けさせたメディナに礼を言い、俺達は奥の洞窟に急いだ。

そこではやはり、カラントに縛られたシエータがいた。

「さて…戦闘が予想されます。シエータ殿は【無音】と呼ばれるほどの使い手。それに黒百合の剣は、整合騎士の持つ神器の中で、最高優先度を誇ります。激戦は必至でしょう」

「俺がいく」

俺が剣を抜き一歩前に出ると、その肩をキリトに掴まれる。

「俺がいく。優月はまだ休んでろ」

は？

こいつ何言って…!?

「おい！お前は連戦だろ！」

「優月の手はまだ治ってないだろ。それに刀の天命もかなり消耗してる。そんな状況でシエータと打ち合えば、神器が壊れちまう」

それは…そうだが…。

だがそれでも、キリトだけに任せる訳には…！

「私もいくわ、キリトくん」

「私もだからね！お兄ちゃん！」

「私もいきましよう」

さらにアスナ先輩、リーファ、アリスが名乗りを上げる。

「当然！」

「私達もです！」

リズにシリカまで！

困惑する俺の肩を、ミトが叩いて勝手に決める。

「これで確定ね。整合騎士は本当に強いわ。気をつけて」

その言葉は主に、リズたちに向けられた言葉。

その言葉に頷いたのを確認して、アリスはデイープフリースを解く。

「…私は…斬って斬って斬り続ける、殺人人形…それが私の存在意義。どんな硬いものでも、必ず斬ってみせる」

「そうか…。上等だ。来いよ、シエータ。必ず正気に戻してみせる！」

そしてシエータとキリト達の、戦闘が始まった。

## 西帝国編第八話

sideアスナ

「ハアアアア!!」

私の一撃は、何も言わずにあっさりと弾かれ、反撃される始末。

「くうっ!？」

頬を掠める痛みに、呻きながらも、私も反撃にでる。

「ヤアア！」

「スイツチ！」

キリトくんの声に従い、避けながら飛び退いた私は、一度息を整えることに。

私は神聖術で傷を癒しながら、キリトくんの戦いを見る。

優しい漆黒と冷たい漆黒がぶつかり合う。

そこへリーファちゃんとしり力ちゃんも参戦し、3人でシエータさんと打ち合う。

私はそれを見ながら、整合騎士の強さを嘖み締める。

「アスナ！大丈夫!？」

「うん。ありがとう、リズ」

とはいえ、シエータさんに隙がない。

桁違いの武器の性能と、それを十全に扱い技術。

間違いなく、私が戦ってきた敵の中で、五本の指に入る強さだ。

「ふう…キリトくん！スイッチ！」

「リーファ！代わってください！」

「シリカ！スイッチ！」

私は鋭い突きを放つ。

それは受け流され反撃が来る前に、アリスの力強い一撃がシエータさんに襲いかかる。

「っ!？」

慌てたように攻撃から防御に切り替えたシエータさんの神器と、アリスの神器が火花を散らす。

あの糸みたいに細い武器のどこに、そんな硬さがあるの…!？」

「ヤアアアア！」

その隙にリズがシエータさんの足元を壊す。

ナイス、リズ！

「アリス！スイッチ！セアアアアアア!!」

体勢を崩したシエータさんに、「リニア」を放つ。

流石に避けきれなかったのか、私の攻撃はシエータさんに命中した。

だが、その直前合わせるような一撃に、私も慌てて体を捻っていたので、クリーンヒットはしなかった。

「くううう…!?!」

地面を削りながら吹き飛ぶシエータさんと、たたらを踏む私。

何とか踏みとどまったけど、リズが作ってくれたプレートが、見事に粉々に砕け散ってしまった。

「嘘…!?!一撃しか受けてないのに!?!」

「しかもあの崩れた体勢の一撃よ!?!いくら言っても、私の作ったプレートが…!?!」

「それがシエータ殿の神器、【黒百合の剣】。むしろ一撃とはいえあの剣の一撃を完全に防いだその鎧の方が、賞賛に値します」

愕然とする私たちに、アリスが冷静に答える。

その言葉を聞いたリズの顔は、なんとも表現のしようのない顔だった。

「なあ、前にも一度やった時も、楽しかったよな? あんたやっぱ強いぜ! シエータ!」  
「私はただ、自分を満たすものを探したいだけ。だから戦っている」

「そんなことあるものか。思い出せシエータ。シエータが本当に求めているものを!」

キリトくんの言葉を受けてもなお、シエータさんの殺気は消えない。

それどころか、体全体を一振りの剣に見立てるように構える。

それを見て、寒気が走った。

あれは…マズイ！

「全員警戒！あれを受けてはいけません！」

アリスも感じたのか、焦ったような声で警戒を促した。

私もすぐに逃げる体勢を整えようとして、動きを止める。

ここで逃げて…優月くと並べるの？

優月くんなら、こういう時どうするの？

「…真正面からぶつかるとよね」

私はバク転を何回かして、十分距離をとる。

「アスナ…!?まさか、真正面からぶつかるとか気か!?!」

「なっ!?待ちなさい!ダメです!」

「邪魔しないで!」

慌てて止めようとする2人に、私は一喝する。

「シエータさん!あなたがすべてを斬るといふなら、私はそのあなたを穿く!」

シエータさんの剣には、何故か躊躇いのようなものがあつた。

それはきつと、シエータさんの望みが、斬りたくないものを見つけたい…そうなんだと思う。

だから私は迎え撃つ。

彼女のために…そして、優月くんを追いつくために。

「大丈夫。私は斬れないから」

柄でもないと思うけど、私は決して斬られない。

だから…全力で来て！

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そして私の全力の「フラツシング・ペネトレイター」と、シエータさんの全力の一撃が、真正面からぶつかつた。

激しい衝突音を響かせて、火花と衝撃波を撒き散らす。

「ぐうう…!」

だがしばらくして、武器からひび割れる音が聞こえてきた。

く…武器の性能の差が、ここでも出るなんて…!

ーこの世界では、イメージ力がものをいうんです。出来ないと思えば出来ませんし、出来ると思えばどんなことでも出来ます。それこそ心意…心からいずる意志。

「私は…負けない!負けられない!」

優月くんの言葉を思い出し、私は自分の心を奮い立たせる。

そうだ…武器の差なんて関係ない！

私は…整合騎士に勝つ！

勝つて、優月くんとちゃんと肩を並べられるようになるの！

「アアアアアアアアアアアア!!」

そして私の一撃はシエータさんの攻撃を弾き、そのままシエータさんを洞窟の壁にまで吹き飛ばしたのだった。

side 優月

「アスナ先輩！」

戦闘が終わり、俺は真つ先にアスナ先輩に駆け寄った。

「大丈夫!? 怪我は!?」

「うん。ちゃんと治ってるよ。ほら」

その場でぐるりと回る先輩を見て、俺は心からホツとする。

良かった…!

「良かった…!」

俺は思わず、先輩を抱きしめる。

そんな俺に驚いたような反応をする先輩だが、先輩も俺を抱きしめ返してくれる。



「先輩！シエータと真正面からぶつかると、無茶しすぎです！」  
「アハハ…ごめんね？」

先輩も大概他人のこと言えないじゃん。

「キリト！」

「うお!?!サチ！」

「アリス！無事かい!?!」

「ええ。ありがとうございます、ユージオ」

「リーファ。大丈夫？」

「うん！大丈夫だよ、ミトさん！」

「リズ、シリカ。無事ね？」

「ええ。何とかね」

「死ぬかと思いました…」

それぞれの安否を確認していると、もぞりとシエータが動き出す。

「んん…私は…?」

「シエータ！」

キリトがシエータに駆け寄る。

それを見ていると、アスナ先輩がリズに近づいた。

「リズ…ごめんなさい。武器と鎧が…」

「ああ、いいのよ！もつと強い武具を鍛えてみせるわ！」

「え、ええ…。お願いね？」

どこか使命感に燃えるリズに、アスナ先輩が引き気味になる。

暑い…暑すぎるぞ…リズ。

俺はそんなリズを苦笑い気味に見ていると

「アアアアアアアア！」

メデイナの絶叫が響く。

一体何が…!?

俺たちが慌てて駆けつけると、何故かハアシリアンが戻ってきており、冒険者たちが軒並み死んでいた。

「な、何が…!?!」

「ハアシリアン！てめえ、なんのために戻ってきた！」

俺はハアシリアンに怒鳴りつけるが、そんなハアシリアンは、俺の声を鬱陶しそうな顔をするだけ。

「吠えないでください。うるさいですね…。ですがお答えしましょう。私はこの救世主様に、引導を渡すために戻ってきたのですよ」

「…引導を渡す？」

「もう用無しなのですよ、メデイナ様は」

用無し…：必要分は揃ったってことか。

キリトが前に出て、ハアシリアンを睨みつける。

「お前の目的は冒険者たちを利用し、各地の魔獣を倒させ、カラントの実を集める…：そうだな？」

「小賢しいまでの知恵ですね。ご名答です。最高司祭様を甦らせるには、より多くの神聖力が必要。あの笠はその命を吸い上げるためにあるのだ」

笠…：カセドラル・シダーの上に現れた、赤いあれの事か！

「その神聖力がほぼ集まったってことか」

「ええ。残りとはある一欠片のみ」

とある一欠片…？

一体なんの事だ？

「なぜ…？最高司祭様を甦らせれば、人界を救えると言ったのに…」

呆然と呟くメデイナを見て、本当に楽しそうに笑うハアシリアン。

「自分に都合のいい理由をつけて、誤魔化すのはやめたらどうです？救世主様。あなたは一度たりとも、世界のことなど考えたことは無いでしょう。あなたの目的はただ一つ

…オルティナノス家の再興だけだ。あなたが行動を起こしたのは、私とその報酬を提示したからですよ」

「だとしても、こんなことをしていい理由にはならないわ!」

アスナ先輩の声を、ハアシリアンはまるで無視して、メディナを見下ろす。

「さて、死ぬ前に真実を教えて差し上げましょう。その方が楽しめそうですし。…あなたのやつてきたことは、無駄なのですよ。メディナ・オルティナノス」

「私を…騙していたのか…!?!」

「ええ。最高司祭様復活のために、あなたの力を存分に利用させて頂きました。お前の手で仲間だと思いついでいる、お人形さんたちの安い絆を破壊する。人界人を囮に使う作戦を吹き込んだのも私。全てはお前に、罪の意識を植え付け、苦しませるために」

囮作戦を教えた…!?!

外の知識ではなく、ハアシリアンが吹き込んだ!?!

バカな…この世界の人間が禁忌目録に違反することは、右目の封印を破壊したユーージオやアリスにしか出来ないはず!

「そしてお友達ごっこを続けたその大罪人と争わせ、万が一この男をその手で殺したら、その時全ての真実を教える…その時あなたがどんな顔をするのか、興味があつたのですよ!」

イカレてる……!

一体何が、こいつをここまでイカレさせた?

「ああ、それとメデイナ様。最高司祭様は復活しても人界をお救いになることはありませんよ? いえ、正確にはソード・ゴーレムという何百もの人間を素材にした武器を作り、人界をお救いになるつもりです」

「ソード・ゴーレム……!?まさかそれは……ユヅキ様が言っていた……!?」

俺とメデイナの視線がぶつかる。

俺は何も言わず、黙って頷く。

「どうして……!?あの時最高司祭様は!?」

「約束されし救世主よ。私を助けてください。人界の人々を救うために」

今の声……アドミニストレータの!?

上手いな、こいつ!

「もしお友達を殺した時は、さんざんその功績を褒めたたえた上で、全ての真実を告げるつもりでしたが……あなたはもう用無しです。さあ、息絶えるといい!メデイナ・オルティナノス!」

そして振り下ろされる杖を、俺とキリトは防ぐ。

「はアアア!」

「つう!?!…ふっ、小賢しい。お前たちの攻撃は届かないと言っているのに、何故足掻くのです?…」

「知るか。んな事、てめえが決めんな」

「決まってるだろう。…俺たちは、メデイナの友達だからだ!」

「虫唾が走る…デイスチャージ!」

「させるか!」

俺はハアシリアンが放つ神聖術を、切り裂いて無力化する。

「ハアシリアン!」

「はあああああ!」

俺の突きとキリトの斬撃が、ハアシリアンの心意の盾とぶつかる。

その拮抗は一瞬で、俺たちの攻撃は、ハアシリアンの盾を破壊した。

「メデイナを利用し、傷つけたお前を、許すわけにはいかない!」

俺とキリトは剣を構えて、ハアシリアンと睨み合う。

「…クハハ。面白い。だがここは引くとしよう」

そう言い残して消えるハアシリアンだが、俺たちには追いかける余力はなく、そのまま見逃すしかなかった。

「…ぐうっ!」

「おつと…おつかれさん、キリト」

流石の連戦で疲れたのだろう。

膝をつくキリトを支えて、サチとユージオに預ける。

そのままみんなにキリトを任せて、俺とアリスは簡易的ではあるが、冒険者たちの墓を立て、追悼するメデイナをただ、黙って見つめた。

そして、人界を今度こそ正しく救うと誓いを立てるメデイナの肩を、俺は叩いた。

「さあ、行くぞ。これからキリキリ働いてもらおうぜ？メデイナ」